

絶望鬼ごっこパロディ (アーカイブ)

絶望鬼ごっこパロディアーカイブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「鬼は子を追い、子は鬼から逃げ、親は子を守る。」

そんなシンプルなコンセプトで行われるリレー小説企画のアーカイブです。

※本スレへの投下並びにウイキへのログインが現在不可能なため企画の再編成を検討いたします。現在このサイトのみが私が当企画に関われる環境のため、今後の連絡は当分の間このサイトにて行いたいと思います。

目次

第〇章 オープニング&資料

01時00分——合わせ鏡の中の地獄島	1
ルールと参加者名簿	5

第一章 極道驚愕！水泳部員の激臭（プルツ、光彦、田所、オルガ、大翔）

（大場大翔登場話）無明の地獄島	12
（オルガ・イツカ登場話）鬼ごっこオルガ	16
（水泳部の田所登場話）【鬼と化した先輩】	20
（田谷光彦登場話）120ヶ月の後方追撃（ハンディキャップ）	24

24

（プルツ）登場話）裸で何が悪い！グレミー！グレミー！！	28
-----------------------------	----

極道驚愕！水泳部員の激臭	30
--------------	----

第二章 エンジン全開！（翠、中沢、キング）

（キング登場話）【英雄、降臨】	40
（名波翠登場話）サイキック少女翠	43

※二話投稿 『（中沢登場話）どっちつかずのラプソディー』 & 『エンジン全開！』

第三章 男子高校生の奇妙な非日常（ヒデノリ、間田）

（ヒデノリ登場話）できんの？お前に	54
（間田敏和登場話）うわっ面は情けない	56

男子高校生の奇妙な非日常	59
--------------	----

第四章 河島龍之介死す（リュウ、ターニャ、堕姫）

（堕姫（妓夫太郎）登場話）鬼隠し	64
（ターニャ・デグレチャフ登場話）【少女ごっこ】	67

※二話投稿 『(河島龍之介登場話)ランナウェイ―たとえ地獄に落ちたつて』& 『河島龍之介死す』 70

第五章 わたしたちはここにいます (リーさん、黒のアサシン)

※二話投稿 『(若狭悠里登場話)』& 『大人になれなかった子供たちへ』 82

わたしたちはここにいます 86

第六章 カチイキレ (吉良、葵)

※二話投稿 『(吉良吉影登場話) 吉良吉影は現世で暮らしたい』& 『(宮原葵登場話) 難易度：ルナティック』 95

カチイキレ 99

第七章 唯才是拳 (翼、マニツシュボーイ、賈ク)

(賈ク登場話) 未踏の地、未知の群狼 105

(椎名翼登場話) 志なき知性は翼のない鳥である 107

(マニツシュボーイ登場話) 赤ん坊地獄 109

唯才是拳 111

第八章 このクソつたれなパーティに祝福を (阿部さん、月、桜井悠、チャツキー)

(夜神月登場話) あの素晴らしき救世をもう一度 117

(チャツキー登場話) 『チャイルドプレイ外伝 チャツキーの鬼ごっこ』 120

(桜井悠登場話) どうあがいても絶壁／開き直れば希望 122

※二話投稿 『(阿部高和登場話) 阿部鬼』& 『このクソつたれなパーティに祝福を』 124

第九章 人情紙殺しゲット・ユア・ガン (ヤン、まな、雲雀)

(ヤン・バレンタイン登場話) 人情紙頼みザ・ドープ・シヨ

(雲雀恭弥まな登場話) 咬み殺す

135

※二話投稿『(犬山まな登場話) 鏡の中からオエオエ』&『人情紙
殺しゲット・ユア・ガン』

137

第十章 「仲間が増えるよ!!」「やったねたえちゃん!」(きり丸、
おっこ、たえちゃん、流美、金谷)

(摂津のきり丸登場話) 絶望鬼ごっこの段

144

※二話投稿『(関織子登場話) サイレントヒル・トウ・フレグラン
スリバー』&『(たえちゃん登場話) やったねたえちゃん!』

146

(佐山流美登場話) 普通の人間

150

(金谷章吾登場話) 鬼人

153

「仲間が増えるよ!!」「やったねたえちゃん!」

155

第十一章 鬼隠しルング・ワンダリング (稗田、レナ、夜叉猿Jr.)

※二話投稿『(夜叉猿Jr. 登場話) 魔猿』&『(稗田礼二郎登場話)

鬼踊り』

166

※二話投稿『(竜宮レナ登場話) 鬼ごっこ編』&『鬼隠しルング・ワ
ンダリング』

169

第十二章 真っ赤ネ Magenta (マジエント・マジエント、げ
んげん、ギーグ)

(ギーグ登場話) 悪の化身なんて物じゃない、悪そのもの

175

※二話投稿『(源元気(げんげん)登場話) 鬼ごっこに参加するげん
げん』&『プレOP — 企画段階編—』

178

※二話投稿『(マジエント・マジエント登場話) 思考停止ラプソ
デー』&『プレOP — ゲーム開始編—』

183

真っ赤ネ Magenta

188

第十三章 『秘密と選択』&『着信拒否』（阿部さん、葵、桜井悠、月、吉良）

秘密と選択

194

着信拒否

204

第十四章 白銀（月夜、ヘンゼル）

（因幡月夜登場話）迷い兔

215

※二話投稿『ヘンゼル登場話』Over Heil』&『白銀』

218

第十五章 『空をこがして、世界をこの手に』&『隠し砦の三悪人』

（Dr. ヘル登場話）帝王の戦い

223

（ウエカピポの妹の夫登場話）K!B!S!#

226

空をこがして、世界をこの手に

229

隠し砦の三悪人

235

第十六章 第三の男（たえちゃん、おっこ、草加）

（草加雅人登場話）草加雅人なら大丈夫

241

第三の男

244

第十七章 シザースのデッキでミラーワールドに入ったげんげん

（マジエント・マジエント、げんげん）

シザースのデッキでミラーワールドに入ったげんげん

250

第十八章 とにかく殺せとりあえず殺せ（流美、金谷章吾）

とにかく殺せとりあえず殺せ

253

第十九章 黒い探求者（稗田、翠、中沢）

※二話投稿『稗田礼二郎登場話』鬼踊り』&『黒い探求者』

259

第二十章 美女と野獣先輩（オルガ、田所、プルツ、光彦、大翔、

墮姫)	
美女と野獣先輩	266
第二章 華麗なる戦い (4th、織田)	
(織田敏憲登場話) 人という字は	273
(豊穰礼佑登場話) Re:ダイヤル	276
華麗なる戦い	278
第二章 Ladies and gentlemen! (かば	
ん、ミカ)	
(三日月・オーガス登場話) バルバトス	286
※二話投稿『(かばん登場話) ゴールは別々スタートライン』&『Ladies and gentlemen!』	289
第二三章 『銭\$ソング』& 『夢の島思念公園』 (賈ク、翼、マニツ	
シュ・ボーイ、きり丸)	
銭\$ソング	296
夢の島思念公園	302
第二五章 “Trick or Treat” (早人、しのぶ、	
ニーワイズ)	
(ペニーワイズ登場話) IT	308
(川尻早人登場話) 無題 (川尻早人登場話)	311
(川尻しのぶ登場話) 川尻家の奇妙な冒険	315
“Trick or Treat”	317
第二六章 人情紙塚山バブーン・レイプ・パーティー (ヤン、レナ、	
まな、夜叉猿 Jr.、雲雀)	
人情紙塚山バブーン・レイプ・パーティー	328
第二七章 死霊の殺し踊り (桐山、アルシア、アリス)	

※二話投稿『(アルシア登場話) 踊る殺戮人形』&『(桐山和雄登場話) コインが煌めくことはなく』 337

※二話投稿『(アリス・カータレット登場話) はいいろデスゲーム』&『死霊の殺し踊り』 340

第二十八章 残酷な天使のテーゼ (狛枝、綾波)

※二話投稿『(綾波レイ登場話) Dance Like You Want to Win!』&『(狛枝凪斗登場話) Bad Luck』 350

残酷な天使のテーゼ 354

第二十九章 『惹かれ合うMystery』&『Know Your Enemy』 357

惹かれ合うMystery 357

Know Your Enemy 363

第三十章 Last Man Standing (マジエント・マジエント、ギーグ) 370

Last Man Standing 370

第三十一章 見た目はオルフェンズ(除一名) (グレーテル、しんのすけ、エスター、リク、今泉) 375

(野原しんのすけ登場話) 嵐を呼ぶ鬼ごっこ 375

※二話投稿『(グレーテル登場話) 血塗れ鬼ごっこ御伽噺』&『(今泉慎太郎登場話) 今泉慎太郎巡査の冒険』 377

※二話投稿『(エスター登場話) この「子」、どこかが変だ。』&『(桜井リク登場話) ラストサバイバル 三つ巴のバトロワ鬼ごっこ』 380

見た目はオルフェンズ(除一名) 384

第三章 【最初からハードモード】（蕨、檸檬、ジェイソン）

※二話投稿『（ジェイソン・ボーヒーズ登場話）【13日の金曜日】
&『（花酒蕨登場話）見た目は子供』

※二話投稿『（擬宝珠檸檬登場話）鬼ごっこラプソディー』&『最
初からハードモード』

第三章 Beyond The Century（レナ、まな、夜
叉猿 Jr.、雲雀、堕姫、大翔）

Beyond The Century
第四章 【アイド・エクスペクト・ア・ロット・モア】（亜季、クロ
ンヤクザ）

（クローンヤクザY-12型登場話）【ア・ゲーム・オブ・デイス
ペア、オニ・アンド・ヤクザ】

※二話投稿『（大和亜季登場話）何が始まるんです？』&『アイド・
エクスペクト・ア・ロット・モア』

第五章 人情紙狂人アム・アイ・ヴォアウルフ（翠、稗田、中沢、
ヤン）

人情紙狂人アム・アイ・ヴォアウルフ
第六章 一発の銃声・二発の弾丸・第三十六章 三人会って・目撃者
は四人（川田、ヘンゼル、月夜、亜季）

（川田章吾登場話）二度あることは

一発の銃声・二発の弾丸・三人会って・目撃者は四人
第七章 DIOの世界（5th、織田様、DIO）

（DIO登場話）侵略者DIO！
DIOの世界

第八章 学校へGO！（グレーテル、しんのすけ、エスター）

449

445

438

435

423

415

412

404

398

393

	学校へGO!	456
	第三十九章 【ビー・ステイル・マイ・ビーティング・ハート】	
	【ビー・ステイル・マイ・ビーティング・ハート】	459
	第四十章 銀河レベル級に超LUCKYSTAR (檸檬、蕨、ジェイソン、DIO、5th、織田様)	
	銀河レベル級に超LUCKYSTAR	465
	第四一章 少女と王蛇 (アリス、浅倉)	
	少女と王蛇	471
	第四二章 Peace of Mind (蕨、ジェイソ、DIO)	
	Peace of Mind	478
	第四三章 ランナウエイ (早人、しのぶ、アルシア)	
	ランナウエイ	483
	第四四章 地図にない学校 (今泉、リク、狛枝、しんのすけ、エスター、グレーテル、金谷、綾波)	
	地図にない学校	490
	第四五章 擬宝珠檸檬は動かない (檸檬、蕨、5th、ジェイソン)	
	擬宝珠檸檬は動かない	505
	第四六章 Braver×Murder×KaleidLine	
	r (イリヤ、ニケ、桐山)	511
	Braver×Murder×KaleidLine	511
	第四七章 戦わなければ生き残れない (アリス、浅倉、セリユ、颯ちゃん)	
	戦わなければ生き残れない	520
	本章	
	11人いる!	532

灰は灰に、塵は塵に	540
Z・刻をこえて	545
人情紙袋メカニカル・アニマルズ	551
学校を出よう！	557
プリーシア・デイキアン・おっこfeat. たえちゃん	564
心に剣	570
とどまりたければ走り続ける	578
勝敗を分けるのは執念さ	585
容疑者：桜井リク	591
衆人環視の中で	605
倒れたのは2人。立ち去ったのも2人	617
【ユア・ラブ・イズ・キング】	624
介入——神崎士郎の場合	629

第〇章 オープニング&資料

01時00分——合わせ鏡の中の地獄島

合わせ鏡というものがある。

二つの鏡を並行に置くと、鏡の中に鏡が無限に現れるというものだ。

私は、前から疑問だった。

鏡の中の鏡に、自分が合わせ鏡の一つだと知る術があるのかということだ。

「よし、1時一分前ダ、繋ゲ。」

「ああ。」

俺はズボンのポケットの中でカードデッキ、『オーデインのデッキ』をいつでも出せるように掴みながら片手でパソコンのエンターキーを押した。鬼ごっこが始まって約一時間、今からは時間が来しだい『鬼』と一部の『子』に支給されたスマートフォンが使えるようになる。これでこの沖木島にいる主催側の鬼がすべき業務の大部分が終わり、あとは随時の監視と『上役』への報告だけだ。

「始まったか。」

「……」

その『上役』から声をかけられたというのに、ツノウサギは口を開こうとしない。その目が俺を見る。代わりに話せてことか。

「ああ。アンタの言ったとおりカードデッキは配った。浅倉威も『親』として参加している。」

事前の打ち合わせで聞かされていたことを言うと、その『上役』——神崎士郎は温度のない目で俺を見て一度頷いた。

俺の名前は荒井。鬼だ。それ以外は何も知らない。記憶がないらしい。頭に霧がかかったような感覚で、ハッキリとしたことは何一つ思い出すことはできない。それで不自由を感じたことがないことが記憶が無いことの証明かもしれないが、失くしたものの大切さは失くしてから気づくというし、本当に記憶があったのかそれが大事なものは俺に確かめる方法は無い。確かめたいという意志も希薄なのだろう。

俺は気がついたときにはこの『合わせ鏡の沖木島』で仕事をするように言われていた。断る理由もなかった。腹も減っていたし、飯が出るというからだ。周りの連中に人間らしい奴が少なくて、自分が鬼だということに自覚が出たのもこの時だ。なぜか俺は幹部待遇らしかったが、貰えるものは貰っておけと思った。気にかかったことはそのぐらいだ。後は……強いて言うなら、ここが地獄で、その中のミラーワールドとかいうもの更に中のミラーワールドらしいということが、話がややこしくて印象に残っている。地獄↓ミラーワールド↓ミラーワールドの中のミラーワールドという入れ子構造らしい。けつたいな話だ。そしてそのミラーワールドの管理を担当しているのが神崎士郎という男だった。

神崎は不思議な男だ。こいつは鬼ではないらしい。だが人間でもないらしい。地獄での序列にも加わっていないらしく、だが俺や同僚のツノウサギより格上らしい。御雇外国人というやつか。なんでもミラーワールドを作るのはこの男だけで、ツノウサギ曰く、『神崎よりもつと上』が神崎にミラーワールドの中のミラーワールドでの『鬼ごっこ』を提案したらしい。全部ツノウサギからの受け売りなので信頼できる情報かはわかったものじゃないがな。

受け売りと言えば、もう二つ。奴に珍しく真剣な口調で言われたことがある。「神崎士郎には気をつける」と、「何かあったらコアミラーを壊せ」だ。冗談を言っているようには見えなかったが、前者はともかく後者は正気とは思えない話だ。この沖木島は、地獄のミラーワールドのコアミラーによってのみ出入りができる。これが壊れればこの『内側のミラーワールド』と地獄とを繋ぐ『外側のミラーワールド』

が崩壊し、この世界に閉じ込められるハメになる。俺達がここに缶詰になっっているのもそれを防ぐため、シヨッピングモールとの出入り口の向かいにあるあの扉の先に安置されたコアミラーを保全するためだ。厳密にはライダーに変身することも『外側のミラーワールド』には出られるが、そこから更に外側の地獄に出ることはできない。出ようとしても合わせ鏡の中の鏡に飛び込むように、またこちら側の、『内側のミラーワールド』の世界に戻ってしまう。つまりここから元の世界に帰るには、内と外の二つのミラーワールドと地獄の合わせて三つから抜け出る必要がある。ミラーワールドどうしは合わせ鏡としてループし続けるため、不正な手段での脱出は極めて困難だろう。しかしいつたいたいなんてこんなに嚴重なんだ？前回の鬼ごっこで脱出されたらしいがそれがそんなに気に食わなかったのか？それにあの霧、いつたいたいあれはなんだ？どこから出てくる？それとリザーバー、特に『鬼』役の人選。明らかに何人か鬼ごっこを破綻させかねない人間の名前が上がっていた。なぜわざわざそんな奴らに声をかけた？

「以後も何かあれば報告する。それと改めて言っておくが、アンタはなるべく『内側のミラーワールド』に顔を出さないようにしてくれ。」
「……」

神崎は俺を一瞥すると開け放していた奥の扉の先にあるコアミラーに滑るように入り、消えた。

俺とツノウサギは目配せすると、扉を閉めるために動く。この扉、銀行の金庫室にあるようなもので、鍵を開けるにも閉めるにも同時に二人で動かす必要がある。四人の主催側の鬼が持つ鍵はいずれも同じだが、このことで万が一鍵が盗まれても参加者が脱出できないようにしているらしい。命がけの場で信頼の置けるタッグを組める奴はそうはいないから、というのが理由らしいが、果たして本当にそうだろうか？

「フウ〜、行ったカ……」

傍らで露骨にホツとしているツノウサギからして、鬼達は神崎を相当警戒しているようだ。だったら鬼ごっこなんて開くな。

「……腹が減ったな。」

まあ、いい。俺にとっては、食い扶持があればそれでいい。俺にデツキが渡されているということは、ここも荒事に巻き込まれる可能性があるということだろうが、ようは殺せば良いのだろう。『鬼』だろうが『親』だろうが『子』だろうが――



(なんだ、この感覚は?)

手を開く。いつからか、デツキを握り締めていたらしい。手汗が気持ち悪い。そしてその不快感より強く感じる、何かを忘れているという感覚。こんなに強く何かの感情を抱いたのは初めてだ。

「――この鬼ごっこ、どうなると思う。」

俺はツノウサギに聞いてみた。答えは返ってこなかった。

ルールと参加者名簿

【概要】

鬼っぽいキャラと親っぽいキャラと子っぽいキャラで命懸けの鬼ごっこをする。

数は少ないが戦力と情報に優れる鬼、戦力は少ないが数と情報に優れる親、情報は少ないが戦力と数に優れる子の三陣営で争う。

【基本ルール】

1. 参加者は『子』（36名）・『親』（24名）・『鬼』（12名）の三つの役に別れた72名で鬼ごっこをする。

2.

『子』は『鬼』から逃げ、『鬼』は『子』を追い、『親』は『子』を守る。

3.

参加者の間でのやりとりに反則はないが、決められた範囲を越えて逃げてはならない。

4.

勝利条件を満たした参加者が現れたとき、その参加者と同じ役の間は全員勝利し、元の世界に生き返る。同時に複数の役が勝利した場合、鬼＞親＞子の順にいずれか一つの役のみが勝利する。

【役毎のルール】

『子』（36名）

「参加条件」

見た目と実年齢が約16歳未満で、作中で子供として扱われており、超能力などの特殊な力が無いかあってもインフレしていない版権作品のキャラ。

「勝利条件」

制限時間まで一人でも逃げ切る、もしくは、『鬼』が全員死ぬ。

「参加形式」

気がついたら会場内にいる。

「特典」

特別支給品が一つ配られる（ポケット等に潜り込ませられる、『子』への通達は行わない）。

『親』（24名）

「参加条件」

見た目か実年齢が約16歳以上で、超能力などの特殊な力が無いもしくは非常に使いにくいあるいはあってもなくても影響が薄い著作権作品のキャラ。

「勝利条件」

『子』が勝利条件を満たしなおかつ『子』の生きている人数が『親』の生きている人数より多い。

「参加形式」

進行役から自分の役・各役の勝利条件・制限時間を目隠しをされて説明された後、会場内にパラシュートで落下させられる。

「特典」

支給品が二つダイパックに入れられて配られる。

『鬼』（12名）

「参加条件」

作中で鬼や悪魔と言われたことのある『鬼』という役に合う何らかの強さを持つ、死亡した著作権作品のキャラ。

「勝利条件」

制限時間までに生きている『子』の過半数を主催者本部（F-5神塚山山頂地下）に捕まえる、もしくは、生きている参加者の内過半数が『鬼』になる。

「参加形式」

主催者によって地獄から甦らせられ、自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を説明された後、会場中央にある『鬼』の牢獄から自由行動となる。

「特典」

支給品が三つ「四次元つばい紙袋@絶望鬼ごっこ」に入れられて配

られる（物を中に入れることはできない）。そのうち一つは特別支給品のスマートフォンである。

【細則】

●会場は地獄@絶望鬼ごっこに再現された沖木島@バトルロワイアル。

●制限時間は24時間。

●5時間経過時点でA段一列が禁止エリアになり濃い霧@絶望鬼ごっこに飲み込まれる。その後1時間毎に10行・J段・01行……と時計回りに一列毎に禁止エリアとなる。

●地獄と繋がった禁止エリアでは全参加者の出典作の地獄にいる鬼等が無限湧きし参加者を無差別に襲う。

●支給品は全参加者の出典作の食料・雑貨・武器などがランダムに配られる。

●特別支給品は以下の四種類。いずれも『子』には九個ずつ配られる。

「水晶」……生きている参加者一人を対象に選んで発動する。水晶越しに対象を見ると参加者の役がわかる。この時対象の役が『親』だった場合、対象は死亡する。使用後自壊する。

「式札」……参加者の死体を一つ対象に選んで発動する。死体に乗せると参加者の役がわかる。この時対象の役が『鬼』だった場合、濃い霧が発生しその死体のあるエリアを即座に禁止エリアとする。使用後自壊する。

「お守り」……生きている参加者一人を対象に選んで発動する。対象が『鬼』だった場合、お守りを対象にぶつけると対象は死亡する。使用後自壊する。

「スマートフォン」……『子』のものと『鬼』のもの二種類があり、それぞれ同じ種類のものとは会話・チャット等ができる。ようするにLINE。ただし一対一の通話等ではない。その他の機能は一般的なスマートフォンに準ずる。

【参加者名簿】

○子

●親

◎鬼

【IT/イット “それ”が 見えたら、終わり。】

◎ペニーワイズ

【絶望鬼(ごっこ)】

○大場大翔／○桜井悠／○宮原葵／○金谷章吾

【ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

○川尻早人／◎吉良吉影／●川尻しのぶ／○間田敏和

【機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ】

◎三日月・オーガス／●オルガ・イツカ

【昏睡レイプ！ 野獣と化した先輩】

●水泳部の田所

【HELLSING】

◎ヤン・バレンタイン

【真マジンガーZERO】

◎Dr. ヘル

【13日の金曜日シリーズ】

◎ジェイソン・ボーヒーズ

【武装少女マキャヴェリズム】

○因幡月夜／●花酒蔵

【刃牙シリーズ】

●夜叉猿 Jr.

【蒼天航路】

●賈ク

【DEATH NOTE】

◎夜神月

【チャイルドプレイシリーズ】

◎チャッキー

【クレヨンしんちゃん】

- 野原しんのすけ
- 【MOTHER II】
- ◎ギーグ
- 【ホイッスル！】
- 椎名翼
- 【名探偵コナン】
- 円谷光彦
- 【ワンパンマン】
- キング
- 【男子高校生の日常】
- ヒデノリ
- 【鬼滅の刃】
- ◎墮鬼（妓夫太郎）
- 【幼女戦記】
- ターニャ・デグレチャフ
- 【家庭教師ヒットマンREBORN！】
- 雲雀恭弥
- 【新世紀エヴァンゲリオン】
- 綾波レイ
- 【白貌の伝道師】
- ◎アルシア
- 【落第忍者乱太郎／忍たま乱太郎】
- 摂津のきり丸
- 【若おかみは小学生！】
- 関織子
- 【妖怪ハンター】
- 稗田礼二郎
- 【くそみそテクニク】
- 阿部高和
- 【バトル・ロワイアル（漫画）】
- 織田敏憲／○桐山和雄／●川田章吾

- 【未来日記】
○豊穰礼佑
- 【ひぐらしのなく頃に】
○竜宮レナ
- 【ジョジョの奇妙な冒険 SBR】
●ウエカピポの妹の夫／●マジエント・マジエント
【BLACK LAGOON】
○グレーテル／○ヘンゼル
- 【古畑任三郎】
●今泉慎太郎
- 【ニンジャスレイヤー】
●クローンヤクザY-12型
- 【ジョジョの奇妙な冒険 スターダスト・クルセイダース】
○マニツシュボーイ／◎DIO
- 【エスター】
●エスター
- 【アイドルマスター シンデレラガールズ】
●大和亜季
- 【魔法少女まどか☆マギカ】
○中沢
- 【けものフレンズ】
○かばん
- 【きんいろモザイク】
●アリス・カータレット
- 【ランナウェイ く愛する君の為に】
●河島龍之介
- 【コロちゃん】
○たえちゃん
- 【機動戦士ガンダムZZ】
○プルツ
- 【ゲゲゲの鬼太郎（6期）】

- 犬山まな
- 【スーパーダンガンロンパ2】
 - 狛枝凪斗
- 【ミスミソウ】
 - 佐山流美
- 【こちら葛飾区亀有公園前派出所】
 - 擬宝珠檸檬
- 【テレパシー少女蘭】
 - 名波翠
- 【ラストサバイバル】
 - 桜井リク
- 【魔法陣グルグル】
 - ニケ
- 【Fate/karaid liner プリズム☆イリヤ】
 - イリヤスフィール・フォン・アインツベルン
- 【Gengen Channel】
 - 源元気 (げんげん)
- 【仮面ライダー555】
 - 草加雅人
- 【仮面ライダー龍騎】
 - 浅倉威
- 【がっこうぐらし!】
 - 若狭悠里
- 【Fateシリーズ】
 - ジャック・ザ・リツパー
- 【アカメが斬る!】
 - セリユー・ユビキタス
- 【魔法少女育成計画】
 - 岸边颯太

第一章 極道驚愕！水泳部員の激臭（プルツ、光彦、田所、オルガ、大翔）

（大場大翔登場話）無明の地獄島

『ルール1：子供は、鬼から逃げなければならない。』

道の脇に立っている掲示板に貼られているチラシに書いてあるのは、その一文から始まる文章だった。

何十何百というチラシが、そこかしこに貼られた町で。

今も空からひらひらと落ちてくるチラシにも、全て同じ文字がある。

『ルール2：鬼は、子供を捕まえなければならない。』

……まさか、また、なのか……？

大場大翔は呆然とした顔であたりを見まわした。

見なれない町並みだった。

近くのシヨッピングモールに映画を見に、幼なじみ達との待ち合わせ場所に急ぐ途中で通った、普段は使わない近道。

そこから大通りに抜けたと思ったら、この光景だった。

後ろを振り返る。

当然あるはずの今来た道は、どこにも無かった。

『ルール3：きめられた範囲をこえて、逃げてはならない。』

代わりに見えたのは、霧だ。

見渡す限り一面に、うつすらと霧がかかっている。

遠くに見える海も、ある地点からは同じ、いやもつと濃い霧だ。

そしてもう一つ、おかしいところがある。

空が朱かった。

一機の飛行機がチラシをバラ撒く以外は雲もなく、昼か夜かもわからない空模様。

火花がぱらぱらと散っているそれは、絶対に現実にはないものだ。

……一度だけ見たことがあるけれど。

『ルール4：時間いっぱい鬼から逃げきれれば、子供の勝ちとなる。』
文の違いに気づくことなく、大翔は息をひそめて隠れた。
以前の、あの事件のときと同じだ。

小学校に閉じ込められて、命懸けの鬼ごっこをさせられた、あの時
と。

『ルール5：親は、子供を守らなければならない。』

なんの説明もなく。

なんの為かもわからず。

ただただ、追い立てられる。

あの時の鬼ごっこ。

大翔が前回の鬼ごっこ——ことりことりに巻き込まれたのは、一月
以上は前のことだ。

あまり思い出さたくない出来事だが、それでもあれについて考える
と、出てくる感想は一つ。

理不尽、だ。

今回の鬼ごっこ——とまだ決まったわけではないけれど、だからこ
そこれが鬼ごっこだと大翔は思う。

ろくに説明もしないし、説明したとしても不安を煽るようなことば
かり言う、あの鬼達なら今の状況にも説明がつくからだ。

ふと、大翔はポケットの中に異物感を感じた。

財布を入れているのは逆の、何も入れていないはずのそこから感
じる感覚に、恐る恐る手を差し入れる。

指先に布と紙の感触がした。

……お守り？

なんの変哲もない、ごくごく普通のお守りと、折りたたまれた紙。

それが掴んだものの正体だった。

『お守り』……生きている参加者一人を対象に選んで発動する。対象
が『鬼』だった場合、お守りを対象にぶつけると対象は死亡する。使
用後自壊する。』

大翔が紙を開くと、そっけなくそれだけ書いてあった。
数秒考えて、大翔の顔は曇った。

鬼達が、わざわざ自分達への武器を用意する、ありえないことだ。

わざわざ捕まえる相手に武器をもたせるなんて、馬鹿げてる。

だからこのことの意味は一つ。

ナメられている。

こんなものでも用意しないと、鬼があつという間に子供を捕まえて
しまうと、そう考えているのだろうか。

「悠と葵ももしかしたら……」

たぶん、今回は前回より危険だ。

前は大人もいたし子供ももつと多かった。

それが今は大翔一人。

他に同じように巻き込まれた人がいても、例えばそれが幼なじみ達
でも、バラバラにされていては一人で戦うのと変わらない。

まずは誰かと合流しないと。

そう方針を決めると、一つ気合を入れて大翔は歩き出す。

視線は飛行機、がチラシと当時に落とし始めたパラシユートがつい
た何か。

遠目には人のようにも見えるそれは、このわけのわからない状況を
なんとかするものであってほしいと、大翔は思った。

【I-7 / 00時01分】

【大場大翔@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：とにかく人と会う

1：鬼に警戒。

2：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……当企画のパロディ元である『絶望鬼ごっこ』シリーズの主人公で小学六年生。二巻の『くらやみの地獄ショツピングゲーム』からの参戦。正義感が強く友達思い。運動会ではリレーの選手に選ばれるなど運動神経は全体的に良い方だが、ペース配分が下手なため長距離は苦手。投下時現在、唯一のリピーターである。なお、彼が本文中で言及したように、絶望鬼ごっこの鬼は理不尽で基本的には公正なデスゲームをする気はない。彼は出典時期的に知らないが、時として鬼はルールを容易にねじまげ、同族でも殺しにかかる。もちろん労働待遇もブラックだ。

(オルガ・イツカ登場話) 鬼ごっこオルガ

遠くで何かが聞こえているような気がする。

聞いたことのない声だ。

性別も年齢も判然としない謎の声、それが何事かを喋っている。

そして次に感じたのは、浮遊感だ。

シャトルに乗っているときのそれとは違う、重力のかかり方を体に感じる。

その感覚をきっかけに、自分の四肢が拘束されている違和感と、自分が何かに腰掛けていている事実、鉄華団団長オルガ・イツカは気がついた。

(なんだってんだ……う！)

顔に浴びる風は、強く、早い。だがその速度は一定だ。制御されている。下からの一方向。

自由落下ではなく、降下——生身であることを考えると、おそらくはパラシュート、だろう。とにかく自身はふわふわとしたものを覚えながら落っこちている、それは確実であった。

(走馬灯、ってやつか……)

体表を流れる気流を感じながら、オルガはそんなぼうとしたことを考えていた。

覚えている最後の記憶は、背中に突き刺さった銃弾の痛みと身体から流れる血の熱と地面の凍れる冷たさだ。

致命傷だということとはわかりきっている。

ヒットマンに銃撃され、ついにくたばろうとしている、はずだった。ならこれは、走馬灯だろう。そうでないのなら——

「地獄、か？」

どん、という感触に尻の痛みを覚えながら、そうつぶやく。

状況は全くわからないが、死にゆく自分が行くべき場所など限られている。

天国にパラシュートなんてものがあるとは思えない以上、ここは地獄だろう——地獄に落ちるのにパラシュートが用意されるなんて話

も聞いたことはないが。

ともかくにも、ピンとこない。死後の世界なんてろくに考えたこともないが、こんなことを予測できるやつはいないだろうな、などと考えていると、顔に軽い衝撃がすると共に視界と聴覚と四肢が解放された。

「どういうことだ？こりゃ……」

数分後、そこには解放された手首をさすりながら座席を改めているオルガの姿があった。

目の前には、パラシュートのついた椅子としか形容できないものか一脚。自分が鉄華団の団長として座っていた椅子とどっこいどっこいの高級感とチープさを合わせ持った、成金趣味を伺わせるものだ。座席の下には物を入れるためのスペースがあり、その中にはティパツクが入っていた。

「……どうなってんだ……」

オルガ、更に混乱。

自身の置かれている状況と、その直前までの状況に全く脈絡が無い。なぜ火星の都市にいた自分が、赤い空をした地球と思わしき島にいるのか。なぜこんなわけのわからないもので空から、考えるに今も自分の頭上から遠ざかっていくオンボロの飛行機から落とされたのか。意味も趣旨も理解できない……が、嗅ぎなれた匂いを感じてティパツクに目を向けた。

中身は銃器だ。そうあたりをつけて思い切ってファスナーを開けると、予想通りマシンガンと思わしきものが出てきた。整備に使う油の匂いが微かにしたことからもしやと思っただが、旧式であるものの確かに殺傷能力を持つ凶悪な武器をその手に取った。

意味はわからない。だが趣旨は理解できた。つまり、最初と一緒にだ。

「ヒューマンデブリにでもされたか？扱い雑過ぎんだろ……ん？」

ようするに、切った貼っただ。そう状況を理解する。なんだかよくわからないが、護身用というレベルでない武器と共に見知らぬ場所に

拉致られる。尋常な自体のはずがない。それが手の中の重さによって理解させられながら、オルガはデイパックの中の文字に気づいた。

内ポケットのところ、そこに何やら文字が印刷されている。鉄華団団長たるもの文字は当然読める。苦もなくそれは読めるがオルガの眉間には皺が寄った。

『貴方の役は『親』です。』

子の勝利条件：制限時間まで一人でも逃げ切る、もしくは、『鬼』が全員死ぬ。

親の勝利条件：『子』が勝利条件を満たしなおかつ『子』の生きている人数が『親』の生きている人数より多い（このとき『親』のみ勝利する）。

鬼の勝利条件：制限時間までに生きている『子』の過半数を主催者本部（F-5神塚山山頂地下）に捕まえる、もしくは、生きている参加者の内過半数が『鬼』になる。

制限時間は24時間です。』

「まるでわからねえ……勘弁してくれよ……」

ようするに鬼ごっこ、なのだろうか。だがそれにしては出てくる言葉が物騒すぎる。いくらなんでもこれだけということはないだろうとデイパックをあさるが銃の説明書とよくわからないもの、それのみ。これでどうしろというのだ。

思わず空を見上げる。そこで初めて、飛行機がビラらしきものをバラまいていることに気づいた。どうやら、見えているのに見えていなかったようだ。

「クールになれ、オルガ・イツカ。まずは、一つずつ、やっていく。」

言葉に出して言い聞かせると、オルガはデイパックをひつつかみ歩き出す。まずは、あのビラを見てみるか。落つこととした側が撒いているのだ、何か有益な情報があるだろう、そう考えて。

【A-08 / 00時06分】

〔オルガ・イツカ@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ〕

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：UZI@現実

〔道具〕：デイパック（不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：とにかく生き残る。

1：ピラを取りに行く。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズのW主人公の一人。クールでカッコよくて最高に粋がっている、民間警備会社『鉄華団』の団長。暗殺後からの参戦。

〔水泳部の田所登場話〕 〔鬼と化した先輩〕

続々と投下されつつあるパラシュートがまたひとつ、地獄に舞い降りる。

突然のスカイダイブから見覚えのない町並み、それらを一巡して一言。

「これももうわかんねえな」

褐色の青年『田所』は、呆然と呟くのだった。

彼は自身の置かれている状況が全く理解できていなかった。

つい先刻まで、自身の自宅で密かに思いを寄せる後輩と共に、屋上で楽しい一時を過ごしつつ、アイステイーを振る舞うために席を外した所までは覚えている。

ぼんやりとした記憶の片隅で、親やら子やら鬼やら説明のような事は聞いた気がする。しかし脈絡が無さすぎて全く内容が理解できない。

「頭にきますよー」

田所は愛する後輩との蜜月の時を邪魔されたことに激しい怒りを抱いた。

折角自分が苦勞して山門芝居のアドリブのような違和感ありまくりの台詞を連発してまで遠野を屋上に誘い出すことに成功したというのに、これではまた振り出しである。

（折角遠野に俺の熱い思いを伝えられると思ったのになあ……これも無駄になっちゃった）

汚らしい目線の先には、遠野に一服盛るつもりだった睡眠薬が握られていた。

田所は同性愛者、つまりホモである。当然、後輩の遠野も男性ではあるが、相手が同じホモだとは限らない。

自身の恋愛感情が社会全体からみれば少数派であることは田所も理解しているが、それでも遠野への思いは押しえられなかった。

だからこそ、昏睡させ犯し、力づくで自分のものにする計画までたてたのだ。

「アイステイーをいれに行つてからどれだけ時間がたったかわかんねえけど、流石に遠野も怒つて帰つちやつたよなあ……」

落胆しつつも、そのままここに突っ立っていても意味はない。

それにブリーフ一丁だと肌寒いので、手掛かり探しのついでに何か着るものがないか、座席を漁り始める。

「ファッ!？」

驚愕する田所。座席の下のスペースからデイバックが出てきたまでは良かったが、中に入っていたのは一振りの日本刀であった。

時代劇でしか見たことのない物珍しいアイテムに若干の感嘆を覚えるが、鞘から刀身を抜き取ると直ぐ様顔色が変わる。

模擬刀かと予想していたが、怪しく輝く刀身は素人目でも本物であると分かる。

(マジ真剣じゃねえか……これで俺に何をしてほしいってんだよ)

この場所全体の何処と無く不気味な気配もあり、自分がとんでもないことに巻き込まれていることを実感したのか、「クウーン……」と子犬のような嗚咽を漏らしつつ田所は刀を鞘に納める。

「そういうええあの声……子を守れ、とか言っていたな。俺以外にもここに連れてこられてる奴等が居るのか？」

他に同じく拉致された人間が居るのなら、自分よりも詳細な情報をもつ者も居るかもしれない。少し物騒だが、自衛のための武器も手元にはある。

「こんな不気味な場所からはとつととおさらばしたいんだよなあ
頼むよ〜」

手元に武器があることと、同じ境遇の第三者の存在に思い至つて余裕ができたのか、先程から飛行機があちこちにビラやらをばらまいていることに気がついた。

タイミングよく足元に落ちてきたものを拾い上げて目を通すと
……

『ルール1：子供は、鬼から逃げなければならない。』

『ルール2：鬼は、子供を捕まえなければならない。』

『ルール3：きめられた範囲をこえて、逃げてはならない。』

『ルール4：時間いっぱい鬼から逃げきれれば、子供の勝ちとなる。』
『ルール5：親は、子供を守らなければならぬ。』

「うーん、つまり鬼ごっこをしろって事か？ ……あ ほ く さ
」

なぜ自分がこんな馬鹿げた事に付き合わなければならぬのか。
忘れかけていた怒りが沸々と胸にたぎってくる。

(これってあれか、テレビのドッキリか何かじゃないんですかね?)

しかしただのドッキリにしてはタチが悪すぎるし、素人に真剣渡したりとか完全に訴訟問題である。

ふと見ると、自分と同じようなパラシュートがちらほら飛行機から
放り出されているのが目に留まった。

そのうちのひとつが、運が良いのか悪いのか田所の近くに不時着し
そうであった。

「あの辺にイ、パラシュート、落ちそうっすよ。じゃけん見に行きま
しょうね〜」

得体のしれない恐怖感をまぎらわせるためにわざと明るく宣言す
ると、田所は警戒しつつ歩きだした。

【A-09 / 00時010分】

【水泳部の田所@昏睡レイプ！ 野獣と化した先輩】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：睡眠薬（持参）、日本刀

【道具】：デイパック（不明支給品1）

【思考・行動】

基本方針：家に帰る

1：付近に落下したパラシュートを確認しに行き、人がいたら話を
聞きたい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

人物解説……

ゲイビデオ「真夏の夜の淫夢」第四章「昏睡レイプ！野獣と化した先輩」の登場人物。

体調の悪そうな後輩を労ったり、サンオイルを塗ってあげたりする人間の鏡であるが、その裏では睡眠薬による昏睡レイプを計画するような人間の屑でもある。

あくまで『野獣先輩』ではなく四章の水泳部の田所としての参加のため、某動画サイトで確認される特殊能力は一切備えていない。迫真空手は修得しておらず、支給された日本刀もあくまで現実水準のもので邪剣夜ではありません

アイステイーに睡眠薬を盛る直前からの参戦なのでブリーフ一丁。

『睡眠薬』

先輩の所持する睡眠薬。医薬品とは思えない程効き目が早く、耐性のない存在は良くて数分、最悪一分弱で相手は昏睡す

(円谷光彦登場話) 120ヶ月の後方追撃 (ハンディキヤップ)

「ダメです……やっぱり応答がありません」

円谷光彦は、がつくりと項垂れていた。

彼の手にあったのは、彼の属する少年探偵団のみが持ち、相互通信機能を持つDBバッジだ。

数々の殺人事件や爆破事件を解決に導いた仲間たちに通信を試みたが、どうやら電波の具合が悪く通信はノイズがかかる。

そもそもここは孤島だ。

このDBバッジの電波圏は半径約20kmで、それを思えば本土との通信は難しいだろう。

強いて言えば、同じ島にDBバッジを持っている江戸川コナン、灰原哀、小嶋元太、吉田歩美のいずれかがいれば通信は可能かもしれないが……。

……いや、思い返せば、みんなと一緒にいる時に拉致されたのならともかく、光彦ひとりである時に気づけばこんなところにいた。

少年探偵団の仲間と一緒に拉致されたと考えるのは少々厳しい考えかもしれない。

光彦は、DBバッジをポケットにしまった。

(今回はぼくひとりだけみたいです……)

光彦は、その心細さに自信が失われるのを感じた。

誘拐や殺人やテロに相当な数だけ巻き込まれた事は光彦だったが、大概は仲間と一緒にいた。

だから、数えきれないほどの事件に遭遇しながら生きてこられたともいえる。

「こんな時、コナンくんや灰原さんがいてくれたら……」

……ずっと以前、蛍を取りに行った森でひとり、殺人鬼に追われた事を光彦は嫌でも思い出した。

あの時は、確かにコナンたちの助けがあった。今度は助けてはくれ

ない。

他にも様々な事件があった。あの冒険、あのゲーム、あの殺人事件、あの爆破テロ……と、考えるとキリがない。

コナンも哀も、そのたびに毎回光彦よりずっと賢く、頭が切れて、大人のような行動ができる。

時に憧れ、時に信じたくなる。

頼られる事はなかったが、特にコナンに何か考えがありそうな時は、協力する事で助けになれるのが嬉しかった。

だが、ふと光彦は我に返った。

「いいえ、そうです。ぼくにだって、きっと出来る事が——」

彼らに頼ってばかりではられない。

それに、光彦だって、名探偵にあこがれる一人の男だ。プライドがある。

何度も助けられてきたのは確かだし、コナンを信じて自分の命を託した事だってある。

だが、あれだけ度々事件が起こる以上、もしかしたら、これからも今回のように光彦だけでどうにかしなければならぬ状況が、いくらでも来るかもしれない。

自分だって少年探偵団なのだ。

自分に自信を持つていこう。

光彦は、すぐに誰かに頼る思考をやめて、自分で考えてみた。

(まずは何か、ぼくだけの力で考えないと……)

そうだ、今回はどうにも様子がおかしかった。

貼りだされていたルールを見ると、何かの組織が企画して作ったのは明白だった。

過去に飛行船でテロ組織のバイオテロに巻き込まれた時や、水族館でオスプレイに迎撃されそうになった時のように、複数犯や組織犯がいる。

フーダニット、誰が。

ハウダニット、どのように。

ホワイダニット、何故。

そういった推理小説の基礎を応用し、考えながら、このゲームの謎を解いて脱出するのだ。

……でも今は情報不足だ。これからの行動の為に、まずは誰かを探さなければならぬ。

光彦以外にも、この島には「子」「親」「鬼」が要る筈。

彼らもまた、光彦のように突然巻き込まれた可能性が高いだろう。……とにかく、誰か、信頼できそうな人を探して、他の人がどういう境遇なのかも把握しないと。

もし本当に「鬼」がいて、それがこれまで出会ってきたような殺人犯や爆破犯や犯罪者たちのような相手なら、極力警戒が必要。

ここでも推理が必要になる。

それを推理する方法について、今回はコナンたちの事を頼れない。

それならば、光彦自身の知能を持ってどうにかするしかない……。いざという時は、自分の考えを信じて勇気をもって行動しないとダメだ。

光彦は、そう思いながら踏み出していった。

【A—8／00時10分】

【円谷光彦@名探偵コナン】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：DBバッジ（現在通信不能）

【思考・行動】

基本方針：出来れば子と合流。

- 1：生還の為に行動する。子や親らしい相手と合流したい。
- 2：このゲームは誰が、どのように、何故行ったのかを考える。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

『お守り』については把握しているは不明。

D B バッジは20km圏内に仲間がいなければ効果を示さないが、現在はここに来るまでにどこかに打ってしまったのか更に調子が悪く、余計に通信ができない状態。

「人物解説」

米花小学校一年生。少年探偵団所属。

常に丁寧な言葉を使い、小学一年生と思えないほどの知能を持っている（ただし人並）。

運動神経もそこまで悪くはなく、持久力も実はコナンより上。

知識量、頭の回転の早さ、運動神経、正義感などあらゆる面で小学生として高水準にも関わらず、周囲が凄すぎて凡人止まりにされる少年。

原作の出来事もアニメの出来事も回想していいような、ざっくりとした感じで参戦（コナンの本筋にあんまり関係ないので、ざっくりとした描き方でも大した矛盾は出ないと思われる）。

(プルツ―登場話) 裸で何が悪い! グレミー! グレミー!!

「鬼ごっこだと? 馬鹿馬鹿しい、そんなのやっていられるか。それになんだこれは、スマートフォン?」

プルツ―は困惑していた。自分は先程グレミーに起こされてアーガマの討伐の任務を受けたばかりだと言うのに気付いたら、戦艦サンドラとは違う場所にいた。

そこは何故か空が赤く、あたりにビラが舞っていた。ビラには何やらルールが書いてあり、それによるとどうやら鬼ごっこらしきことが書かれていた。(ちなみにスマートフォンは近くに落ちていた)

(グレミーは…いない、私だけなのか?…いや違う! 感じる…何者かの気配を…ダメだよくわからない、何かとても嫌なものが邪魔をしてる…!? 人の憎悪とかそんなものじゃない…もつとそれ以上の気持ち悪くて怖い何か…本当にここはどこだ!?)

プルツ―は感じていた、戦場に渦巻いてたものとは違う、この地獄の負のエネルギーを。プルツ―はここはどこかわからない、だが彼女のニュータイプ力がここはとても良くない所だと教えてくれる。(どうやらこの鬼ごっこもただの遊びとは思わない方がいいな、とりあえず人を探そう。少なくとも近くに人がいる気配をするのは確かだ、危ない奴かどうかはまだわからないけど。)

この地に渦巻く負の力に挫けずにプルツ―は歩き出す、敵か味方か判断のつかない、まだ見ぬ参加者を求めて。

「くっしゅん!!…あと服も欲しい。」

【??/深夜】

【プルツ―@機動戦士ガンダムZZ】

【役】: 子

【状態】: 健康、全裸

【装備】: スマートフォン

【道具】:

「思考・行動」

基本方針：生き残る

1：人を探す。

2：後服も探す

※自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※地獄の雰囲気にもまれて、ニュータイプのが若干鈍っている。

※36話のコールドスリプから目覚めた後の参戦です。

人物紹介

プルツ

CV本多知恵子、2代目本多陽子

ネオ・ジオンにおいて養成されたクローンの一員で、グレミー率いるNT部隊の中核をなす存在。エルピー・プルの同器質体であり、他のプル・クローン体共々サンドラのコールドスリプルームにて眠りに就いていた。

サイコミュへの親和性はプルよりも高く、サイコガンダムMk-IIやキュベレイMk-II、クイン・マンサといった数々のNT専用機に搭乗、その性能を奮う。設定画では、プルよりも髪が若干長く目つきが鋭く描かれ、アニメーターがそのように作画するよう指示がされている。また、プルに比べて攻撃的で好戦的な性格となっている。しかし年相応の精神年齢だったプルと比べると、冷静沈着で非常に大人びた立ち居振る舞いをしており、軍人としての行動規範を逸脱する所は少なかった。ちなみにバストサイズはプルよりも上。

極道驚愕！水泳部員の激臭

突き刺さる小石や小枝をおっなびつくり避けながら歩く足の裏は土で黒く汚れ、地雷原を歩くように進むスピードは遅い。

「っ！服よりまず靴だな……」

B-02。この島で五本の指に入る険しい断崖があるそのエリアは、大半を雑草混じりの荒れ地が占める。全裸ということは当然素足であるプルツーは、辟易しながら行軍を続けていた。一步一步慎重に歩かなくてはならず、鬼ごっこがどうこの前に疲労を覚えてきている。正直なところ休みたい。しかし、彼女が足を止めることはない。別にどっかの鉄華団の団長命令が下ったわけではなく、彼女には明確な目的地があるからだ。

この鬼ごっこでは、『子』の役参加者は会場にランダムに配置されるのに対し、『親』の役参加者は飛行機から落下傘で降下されることとなっている。つまり、『親』の初期位置は特定しやすい。特に空を見上げ自分からほど近い場所に落ちてくる『親』を『子』が見た場合、その位置は容易にあたりをつけられる。明かりが乏しく土地勘も無い『子』にとっては、近くに運良く建物を見つけない限りそれぐらいしか目印になるものがないのだ。そしてプルツーは空から落ちてくる落下傘を見つけ近くに建物を見つけれなかった幸運にして不運な『子』の一人であった。

(また『臭った』。なんだ、この『臭い』は。)

そしてもう一つ、彼女には目印となるものがあつた。彼女のニュータイプの鋭い感受性が、確かに『なんだなよくわからないけど臭いもの』を捉えていたのだ。

地獄に満ちる負のエネルギーには多少慣れてきたとはいえ、全裸の行進と同等のストレスを彼女に与えている。しかしその中でもプルツーは確かに感じ取っていた。戦場の憎悪とも今自分が感じているのとも違う、野獣のような『臭み』を。騒音に満ちた場所でも聞こえる誰かの喘ぎのような、なにかを。

足下の感触が次第に下草を踏むものから荒れ地を踏む頻度が高く

なっていていつていることに恨めしそうな目で地面を見ながら、プルツ―は考える。自分は着実に落下傘にも『臭い』の元にも近づいている。飛行機と落下傘という組み合わせを考えるに、落下物は人間か物資か、あるいは両方であろう。人間も落とされている場合リスクもあるのだが、プルツ―としては接触するに他ない。とにかく、服と靴だ。裸はキツイ。足が痛い。ハンパなく。状況の解明より何よりもまず衣食住の衣を満たす必要があるのだ。故にプルツ―は荒れ地を進んでいき。

「そこのお前、所属は。」

「わあっ！」

小岩の平らな部分に気を使って跳躍すると、岩影に隠れていた男児の上をとり誰何する。倒れ込みながら小さく悲鳴を上げたところに再び跳躍しマウントポジションをとると腕を捻り上げた。

「うう……身ぐるみを剥がされるってこういうことなんですね……」

「殴るぞ。あとこつち見るな。」

「見ませんし服も貸しますよ……女の子を裸で放つとけませんし。」

「嘘つけ絶対見てたぞ。」

「なんで見る必要があるんですか。」

数分後、靴とズボンと上着を取られ、靴下ともつさりとしたブリ―フのみとなった男児、円谷光彦の姿がそこにあった。

初期位置のすぐ近くで落下傘を見つけた彼は、そこに日本刀を持った臭そうな男がいることに気づき、男が海岸線の物陰を伝いながら立ち去るのを距離をとって追っていたのだ。しかしそこでプルツ―の接近に気づき、息を潜めるも、彼女はニュータイプ特有の勘の鋭さで自分をねつとりと見ていた光彦の視線に気づき、あつさり居場所を探り当てて今の状況である。

「で、光彦だったか。お前も気づいたらここにいたんだな。」

「はい、えっと……」

「……プルツ―だ。」

不機嫌そうに名乗るプルツーに、光彦は改めて自分がここに来るまでのことを話した。といってもこの数分服を筆られていた時に尋問によって話させられたこととほとんど一緒のことだ。つまり、「気づいたらこの見知らぬ場所にいた」ということだけである。その境遇はプルツーも同様であり、わかったことは自分と同じように拉致られたらしい子供が他にもいたということぐらいだ。

「あ、そういえばいつの間にかズボンのポケットにお守りが入ってたんです。一緒に付いてた紙に書いてある文章からするとこの状況に関係あるかもしれません。」

「お守り……う？これか……『生きている参加者一人を対象に選んで発動する。対象が『鬼』だった場合、お守りを対象にぶつけると対象は死亡する。使用後自壊する。』……武器か？」

「中身を見た限りただのお守りだと思うんですが……その、チラシの内容も考えると、イタズラというよりかは何かのゲームのアイテムのような気が……」

「ICチップか何か入ってるんだろう。人間の皮膚にも同じものを埋め込んで鬼かそうじゃないかを区別している……とか？」

「うーん、手術された記憶は無いですが。でもここに来た記憶もないですし……」

「小さなものなら大きめの注射器で埋め込むことは可能だ。第一、こんなことをできる相手だからな。」

「確かに。となると、それで監視されている可能性もありますね……」

一つ理解が進展である（些か勘違いはあるが）。

その後も二人は赤い空や海上の霧について一通りわけがわからないうという認識を共有すると、話はここに来てからのことに移る。その中で光彦が臭い男を追跡していたという話になると、プルツーはその男について聞き出した。

光彦が言うところによると、男は色黒で中肉中背。そしてブリーフ一丁とのことだ（自分の格好を考えてなんとなくプルツーは嫌な顔をした）。またその顔はインテル長友やコカコーラ北島、正岡子規に似ているとのことだが、どれもプルツーにはピンとこない。より聞き出

すと出てきたのは、加のからすれば旧世紀の時代の話。そこで初めてプルツューは、目の前の男児が宇宙世紀の人間ではないことに気がついた。

「二年戦争もグリプス戦役も知らないとは……」

「宇宙コロニーと地球の戦争ですか……SFですね。どうやらこれは本当に記憶を操作されているみたいですね。」

「ああ。恐らく、私達のどちらか、あるいは両方が記憶を操作されている。私の知識では、人間を薬物やマインドコントロールで人格を変え、技術があることを知っている。」

「そうなる、何が正しいのか自信がなくなってきました。もしかしてこの鬼ごっこは、記憶を操作した子供を集めた実験だったりするのかもしれないですね。」

「……そうだとはいい切れないが、ありえるかも。」

話ながら、プルツューは光彦の聡明さに驚いていた。自分のほうが何歳も年上のはずなのに、ともすれば自分以上に現在自身が置かれている状況について考察をしている。もしや彼はその頭脳を見込まれて実験の対象となったのではなからうか。

そして自分自身についても考える。思うに、これは演習ではないのか。サンドラにいた自分を拘束することができる人間は限られている。ではその人間達にプルツューを拘束する動機があるかといえ、ある。ニュータイプとして戦場で受けるストレスに対する適応能力を高めるテスト、というのはなかなかに妥当な現状への理由付けた。

「二人だけで話していてもこれ以上はムダだ。お前の追っていた男を追うぞ。」

「他に手がかりもありませんし、追いまししょう。ただ、男の人は――」

「武器を持っているのはわかっている。それでも追うしかないだろう。」

「わ、わかりました。こっちはです。まだそんなに遠くには行ってないと思います。」

(それは『臭い』でわかる。)

「それに、男の人が通った跡なら安全なはずです。なにか危ないことがあったりしたら男の人が被害にあってるはずですから。」

(……コイツは敵に回さないようにしよう。)

こうして、二人で男を追う運びとなった。なにせ地図も何もないのだ、男以外に目印どころか人の気配すらない。光彦の持つDBバッジはその周波数の合うものはなく、プルツールのスマートフォンが使えるようになるにはもう少しかかる。ならば道は一つだ。

一人の少年と一人の少女は、男を追いかけた。

「何やってんだアイツら……」

「これももうわかんねえな。」

一方そんなプルツールと光彦の一部始終を——つまりプルツールが服を剥ぎ取り光彦と共に歩き始めるまでを——見ていた男達がいた。

一人は他でもない光彦が追っていた男、水泳部の田所。そしてもう一人は、鉄華団団長のオルガ・イツカである。

ではなぜ彼らが行動を共にしているかという点、そもそもの話はプルツールが光彦と出会った数分後に遡った。

「痛いですね、これは痛い……」

プルツールと同じようにほぼ全裸の状態で鬼ごっこに参加させられた田所。彼の歩きは足を踏み出して数歩で止まっていた。原因はプルツールと全く同じ。つまり素足ということである。

田所は水泳部員だ。それは水泳部の田所という名前からして明らかであろう。ゆえに彼は、素足の危険性をよく知っていた。プールサイドで誰かが落としたりした物を踏むだけでなかなか痛いのだ、森や荒地を靴も履かずに歩く勇気は無かった。

「そーいやかばんの中に日本刀以外になんか入ってたな。なんでも良いから靴とか出てきてくれよ。」

ん？今なんでも良いって言ったよな？

「ファツ!?臭スギイ!!」

出てきたのは、非常に臭い革靴であった。これだけ臭ければ履いてる本人は気づかないのだろうか、そう真剣に田所は思う。しかし念願の靴であることには変わりない。幸いサイズも合っている。履くしかないだろう。

「しようがねえなあ……」

アンニュイな表情になりながらもいそいそと履く。このようにして臭そうで実際臭い男が鬼ごっこに誕生した。

ようやく歩き出した田所が目指したのは、自分と同じように落とされたらしいパラシュートだ。遠目からはよくわからなかったが、赤い服を着ていたと思う。その男こそ鉄華団団長オルガ・イツカであり。

「動くな。」

「クウーン……」

銃を突きつけられた。あっさり見つかったのだ。風上から追いかけたのが失敗だった。

こうして二人が出会ったところで、周囲を改めて索敵したオルガが光彦とプルツーに気がつき今に至る。自分が跡を着けられていた感覚は無かったので、目の前の臭い男を追っていたらしい。オルガは改めて子供たちを見た。女の方は男物のきれいな服装で、男の方はアジア系らしい身奇麗な子供だが靴にブリーフである。もしかしたらブリーフというよりかはスパッツに近いボクサー型のブリーフかもしれないが些細なことなので割愛する。とにかく、彼らの服装を考える、あの二人がストリートチルドレンという可能性は低い。もちろん距離があるので詳細はわからないが、このことから考えられることは……

「自分の服を貸してやったってどこか。」

極めて簡単なことだ、男が女に服を貸した。オルガは傍らのほぼ全裸の男を見ながら察した。ついでに田所のねつとりとした視線も感じたが、無視した。自分の一張羅を着せてやる義理は無い。こいつらは揃いも揃ってシャワーでも浴びてる時に拉致られたのか？と思っ

さてこうなるとオルガとしては行動を変更する必要がある。なんにせよ自分を着けていた臭い男は不審だ。そしてあの二人。原住民かどうかは不明だが、尋問すれば一応なにかを聞き出せるかもしれない。女連れならそちらを人質にすることも、まあ、考えうる手だ。であれば取る手は一つ。待ち伏せである。

(二人ともこっちに向かつて来るな。)

オルガは岩の隙間から確認するとUZIを持ちながら接近を待つ。こちらには機関銃、あちらは文字通り丸腰、遅れを取るとは思わないが、生前の記憶から狙撃されることを警戒し限界まで姿勢を低くする。この訳の分からない状況を打開すべくタイミングをはかる。

(……コイツの臭いでバレたりしないよな？一応風下だが……)

鬼ごっこ開始から三十分、剣呑なる出会いが起ころうとしていた。

「なんだこの臭いっ!？」

そして田所を挟んで光彦達とは真反対の位置にいた少年、大場大翔は、自分の鼻をついた異臭を毒ガスかと思いついて息を止めて飛び退いていた。

現在の風向きは光彦↓田所↓大翔という順であり、光彦に対して風上ということは、大翔に対して風下という状況である。

(よくわからないけど、ここにいちやマズイ!)

生理的危機感から臭いから距離を取るため動き出す。直感的に、近づいてはろくなことにならない気がしたのだ。

一人の少年はこうして鬼ごっこでの逃走を開始した。

【A-02 / 00時31分】

【プルツ@機動戦士ガンダムZZ】

【役】：子

【状態】：健康、光彦の服と靴を身につけている

【装備】：『スマートフォン(子)』、『お守り』

【道具】：

【思考・行動】

基本方針：生き残る

1：まずは光彦が見つけた臭い男（水泳部の田所）の跡をつける。

2：この鬼ごつこの目的と自分の記憶について考える。

※自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※地獄の雰囲気にもまれてニュータイプの方が若干鈍っていましたが、慣れつつあります。

※この鬼ごつこを記憶を操作された人間に関する実験だと考察しました。

※36話のコールドスリープから目覚めた後の参戦です。

【円谷光彦@名探偵コナン】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、パンツと靴下のみ

〔装備〕：なし

〔道具〕：DBバッジ（現在通信不能）

〔思考・行動〕

基本方針：出来れば子と合流。

1：生還の為に行動する。子や親らしい相手と合流したい。

2：このゲームは誰が、どのように、何故行ったのかを考える。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※この鬼ごつこを記憶を操作された人間に関する実験だと考察しました。

【水泳部の田所@昏睡レイプ！ 野獣と化した先輩】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：睡眠薬（持参）、日本刀、野原ひろしの革靴@クレヨンしんちゃん

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰る

1：とりあえず赤い服の男（オルガ）から話を聞きたい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【野原ひろしの革靴@クレヨンしんちゃん】

主人公しんのすけの父、ひろしが常用している革靴。臭い。非常に臭い。激臭である。だがそれを除けば単なる革靴である。しかし、臭い。

【オルガ・イツカ@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：UZI@現実

【道具】：デイパック（不明支給品1）

【思考・行動】

基本方針：とにかく生き残る。

1：子供（プルツと光彦）を待ち伏せて尋問する。

2：臭い男（水泳部の田所）を警戒。

※その他

自分の役・各役の人数・会場の地図・制限時間は全て未把握。
各役の勝利条件は一応把握。

【大場大翔@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：とにかく人と会う

1：鬼と異臭を警戒。

2：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

第二章 エンジン全開！ (翠、中沢、キング)

(キング登場話) 【英雄、降臨】

ドツドツドツドツドツドツドツド
ドツドツドツドツドツドツドツド
ドツドツドツドツドツドツドツド

まるでエンジンの爆音のような奇怪な音が鳴り響いていた。
音の出所は、ひとりの男。

ドツドツドツドツドツドツドツド
ドツドツドツドツドツドツドツド
覇気、というべきか。

この場に他者がいれば難なく飲まれてしまいそうなオーラを放っている。

ドツドツドツドツドツドツドツド
顔の傷は、男が様々な修羅場を潜り抜けてきた証のようであった。
ドツドツドツドツドツドツドツド

彼の名は『キング』

S級ヒーローの一角にして、世界最強の男と称される男である。

先程から鳴り響いている音はキングエンジン。

キングエンジンとは、キングが戦闘体勢に入ったことを示すものである。
ある。

キングはしばしの熟考の後、先程から上空を頻繁に飛び交う飛行機を鋭い眼光で一別する。

脆弱な怪人なら失禁のあとに土下座して許しをこうような眼光を受けても、どこ吹く風とばかりに飛行機は消えていく。

キングの記憶では、友人のサイタマと鍋パーティーの真つ最中から、何の脈絡もなく突然に謎の声に導かれるまま、この島に親として放り出されるに至っている。

さしもの世界最強の男とて、この混沌とした状況は手に余るのかも
しれない。

どうやら自分以外にもこのゲームの参加者はきちんと存在するらしく、

飛行機は無数のビラと同時に、自分と同じようなパラシュートを投下していた。

(……帰りたい)

世界最強の称号を持つ一般人は、このゲームでそのメツキを維持できるとはだろうか？

【???／深夜】

【キング@ワンパンマン（リメイク）】

【役】：親

【状態】：健康、キングエンジン

【装備】：ー

【道具】：デイパック（不明支給品3）

【思考・行動】

基本方針：帰りたい……

1：一応、自分のできる範囲で子と親を保護する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

参戦時期はリメイク版の最新話から。

WEB漫画【ワンパンマン】に登場する”史上最強のヒーロー”。

オールバックにした金髪と左目についた3本の傷跡、そして歴戦の古強者たる佇まいと雰囲気醸し出した男性。

”王者(キング)”というヒーローネームの他にも”人類最強”、”地上最強”といった様々な「最強」を冠する二つ名があり、その異名はヒーロー、民衆はおろか敵である怪人側にも広く轟いている

……という噂や英名が一人歩きした結果、S級ヒーローの地位に就いた只の一般人（本人曰く無職で引きこもりでオタクな駄目な29

歳)。勿論強さも一般ピープル相応。

災害レベル狼々竜に至るまで様々な怪人と出くわし、気付いたら誰かが倒してくれた。そんな場面に5回出くわしたことでヒーロー協会や民衆から勘違いされ、S級ヒーローに認定されたのが始まり。

積極的に否定しなかったために結局今の座に就いたことで、他では得られない程の人気と名声を手にした代わり、当然ながら不必要な干渉やしがらみにも纏わりつかれるハメになりそのまま現在へ至

(名波翠登場話) サイキツク少女翠

(なんや、これ……！頭の中で……蛇が、のたうつような……！)

名波翠はこの地獄に下り立った瞬間にそう困惑するとたまらず膝をついた。空気のように満ち満ちている負のエネルギーは、ただそこにあるだけで超能力者である彼女の超感覚に刺激を与える。まるで騒音や悪臭等の公害に直面した人間の如く険しくなった顔は、赤い空を見上げて驚きの混ざったものとなった。

(なんや、あの空。ウチの目が『視えとる』んか?)

自身のテレパス能力がなんらかの異常を感じ取って赤く空を見させているのかと疑う翠だが、確かめようもないので少しして空を見るのをやめる。代わりに視線は空から舞い落ちてくるビラへと移った。「なにかしら?」などと猫を被った標準語を使いながら手に取ったそれに書かれていたのは、この鬼ごっここのたいていの参加者が嫌でも一度は見る文章だ。

(鬼ごっこ?こんなどこかもわからん場所? 中学にもなつて? あほくさ。何が鬼ごっこやこんなことのために人ようわからん場所に呼び出したんかほんまアホらしい——)

眉根を寄せつつ心中で散々悪態をつきながらも目は文章を何度も行き来する。江戸時代にタイムスリップしたこともある彼女は早くも自分が置かれている異常事態を異常事態と認識して行動していた。こんなことをしでかした犯人の目星をつけるためにも家に帰るためにも、手がかりになりそうなものはなんでも調べるに限る。面倒だが。

(ま、ウチが鬼かどうかは知らんけど、単純な鬼ごっこなら負けることはないな。もうちよい人選考えるんやったな。)

根拠があるか怪しい自信を持ちながら、翠はサイコメトリーでチラシから残留思念を読み取る。残念ながら希薄であるのと環境のせいでは飛行機から撒かれたことしかわからなかったが、それだけでも一つの推理は立てられた。この鬼ごっこを強いている人間は、テレポーション能力と飛行機を飛ばすだけの財力がある！

(……これ別に超能力使わんでもふつうに推理できたな……)

口には出さないでツツコむと、チラシを捨てて歩き出す。思念の読み取りは人がいる場所のほうがりやすい。ここがどこだか知らないがまずは建物にでも向かうのが吉だろう。

(蘭とも繋がらんしテレパシーしようとしたらノイズうつさいし、今回はちよつと大変そうやな。ほなまずは……)

「とりあえず、人を探さないと。」

優等生の美少女という外面をつくると翠は飛行機から落ちてくる人影に狙いをつけた。

【J—03／00時04分】

【名波翠@テレパシー少女蘭】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：

〔道具〕：不明支給品

〔思考・行動〕

基本方針：こんなアホなことをしでかした奴に一発焼き入れて帰る

1：人のいる、またはいた場所に行く。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……『テレパシー少女蘭』のヒロインで中学生。一通りの超能力がだいたい使える能力者で、個人的な心情から洗脳だけは控えているものの自分の体よりある程度軽い範囲であればオールレンジ攻撃のごとく物を念力で動かしたりトランシーバーが届く程度の距離ならテレパシーが使えたりと、能力の規模はそこまで大きくないものの多芸。関西出身で普段は猫を被り優等生キャラを演じている。なおこの十年テレパシー少女蘭シリーズは新刊が出ていない。あさのあつこ先生もうそろそろ書いても良いんじゃないですかね？

※二話投稿 『(中沢登場話)どっちつかずのラプソデー』 & 『エンジン全開!』

「自分は『子』か『親』なのか……えつと……どっちでもいい、いいですか……普通に考えたら、『子』なのかと……思いますが……」

独白の考察の通り、彼はこの場に子として参加させられた不運な少年である。

帰宅途中に何時の間にか異様な場所にいた中沢は、理解不能な状態を少しでも飲み込むため、現状でも解ることを口に出して見たが――
「えつと……いや、ちよつと何のことだか……わかんないです」

やはり理解不能である。

一応其処らに腐るほどあるビラの他に、手掛かりとして使えるのは、ポケットに入っていた「水晶」である。

占い師が使うような風情ある一品だが、説明書らしき紙切れを見るとどうも癖のあるアイテムらしい。

これがこの鬼ごっこでアタリの支給品なのかは――

「えつと……どっちでもいい、といますか……」

使いどころが分からないから……寧ろいららないかな、と……」

中沢少年の前途は暗い。

【???／00時03分】

【中沢@魔法少女まどか☆マジカ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：学生鞆（中身は教科書とかノートとか筆記用具とか）

【思考・行動】

基本方針：とりあえず人を探す

1：知り合いがいたら合流したい

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は

全て未把握。

人物解説

アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』に登場するキャラ。声優は松岡禎丞。

書く人によって『中沢』だったり『中澤』だったりするが、……ど、どっちでもいいんじゃないかと。(『中沢』が正解です)

アニメ第1話で初登場。鹿目まどかたちと同じクラスの男子生徒。

第8話に登場したホスト二人組と並び、カルト的でコアな人気を誇る。

その人気は、2ちゃんねるのアニメキャラ個別板に「中澤くん総合スレ」というタイトルのスレが立ち、他の脇役キャラのスレが次々と落ちる中1000レスまで埋まってしまうほど。

「なんやねんこの山道……ハア……曲がりくねりおつてからに……ハア……腹立つ……ハア……アカン、キッツ……」

代わり映えのしない赤い空。時間の感覚はもとより空間の感覚すら持つて行かれる、そんな気がしながら、悪態をつきながらも山道を降り続ける少女が一人。名波翠は飛行機からパラシュートで降りてくる人と接触すべく歩き続けていた。彼女の感覚では既に小一時間は歩いてる。ちなみに実際には10分程だ。残念ながら彼女、念力は使えても体力は無い。

「何が悲しくてこんな山道歩かなあかんねん……足に変な筋肉ついたらどないしてくれ……ハア……あーしんど……」

え？アルシンド？

「じゃああしいわボケ……ダメや、地の文にツッコむ体力無い……慣れないことするもんちやうな……」

慣れないのは山道かメタネタか両方か。膝に手をつきゼエゼエと

息する彼女からは普段の優雅さは欠片も見られないが、それは超能力で周囲に人がいないことを確認したからというあたり、彼女の人間性が現れている。本質的に警戒心が強いのだ。

(↑)

ピン、と彼女の顔が変わった。張り巡らせた警戒心に感あり。誰かに『見られている』。そのことを感じ取ると直ぐ様に表情を『具合の悪い深淵の令嬢』とでも言うべきものに変える。猫を被りつつも油断無く相手の思考を探る。距離は数十メートル、遠いためテレパシーは困難だが、視線から感じるのは……不安と困惑と安堵、だろうか？それ以上はわからないが、お煮とは雰囲気が違う気がする。勘と言えばそれまでだが、その勘が当たるから超能力者なのだ、翠は己の勘を信ずることとした。

(こつちに來てるな。)

どうやらこの曲がりくねった道の先は三又になっていたらしく、ここをYの字の左側とすれば右側の道から歩いてきたらしい。こちらに気づくと少し迷ったあと坂を登り始めた。一分もする頃には革靴がアスファルトを叩く足音が聞こえてきた。

「あの……大丈夫ですか？」

(男、同じ年ぐらいかな?)

顔を上げる。目の前には、特徴が無いのが特徴とも言える少年が心配そうに見下ろしていた。

「——それで気がついたらここにいて、私、一人じゃ心細くて……」

「僕も同じだよ。ようやく人と会えて、それで……もし良かったら一緒にあそこの町までいかない？他にも巻き込まれた人と会えたら、なにかわかるかもしれないし。」

「ありがとう、でも……いいの？私、体調が悪いから足手まといになっちゃうかも……」

「なら、余計ほっとけないと言いますか……負ぶおうか？がさつかぶを通るかもしれないし。」

「ほんと？嬉しいー！」

(こいつ……なんか捉えどころが無いな……)

翠が出会った少年は中沢と名乗った。少し話してみてもわかったことは、彼も翠と同じような境遇なこと、見知らぬお守りがポケットに入っていたことだ。翠もスカートのポケットを見てみたら同じお守りが出てきたことを考えるに、この鬼ごっこ『子』の役全員に配られているのだろう。何かわからないがとてつもない力を秘めている気もするし、このお守りを調べれば鬼ごっこについて何かわかるかもしれない。

(群馬の見滝原?どこやねんそれ。群馬がこんな大都会なわけないやろ。)

だがそれより翠には気になることがあった。自分を負わせて中沢と接触しテレパシーを使ったところ、中沢は群馬からこの島に来たらしい。だが彼女の知る群馬と大きく違っていた。そしてもう一つは彼の人間性。勉強はまじめでそつなくこなすが今ひとつ情熱のない男……悪いやつじゃあなさそうだが、これといって特徴のない……影のうすい男……そんな上つ面の下に隠れる、『人に求められている対応をする』という彼の人生哲学を翠は感じ取っていた。

(普段より疲れやすいけど、心の中覗くのは普通にできるみたいやな。にしてもこいつの考え方、どおりで都合良い展開になるはずや。便利な男と言えば便利な男やけど……洞察力の鋭さは要注意やな。)

「ん?名波さん、あれ……」

「……あ、うん、そうね。人みたい……人?」

呼びかけられて翠はハッと意識を戻す。中沢が指差す方を見た。道から少し離れたところに、人影——のような凄まじいオーラを放つなにかが見えた。

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

辺りに響くのはキングエンジンが轟かせる重低音。その音の発信源は、一人の男。『地上最強』、『世界最強』などの名声をほしいままに

する男、キングだ。

ドツドツドツドツドツドツドツド

(まず中身を確認しよう。)

その男の最初の行動は、支給されたデイパックの中身の確認という極めてオーソドックスなものだった。

そもそもこの男、なんか凄いオーラが迸っていて悪運の強い強面の一般人である。一応ヒーローらしい倫理観などは持ち合わせているが、あいにく戦闘力は真正正銘人間並みの人並みである。なのでその強さは純粹には武器依存だ。

しかしさすがキングというべきか、彼のデイパック、なんと支給品が三つ入っている。この鬼ごっこ『親』には支給品が二つと決まっているのに、何故か彼だけ『鬼』同様に三つなのだ。彼の役を間違えたのか単なる事務的ミスなのかは不明だが、このあたりの悪運の強さが彼がキングたる所以であろう。

ドツドツドツドツドツドツドツド

緊張しながら手を突っ込む。触れたのは、人生で触ったことのある感触。引き抜いてみるとそれはタブレットであった。

彼が引き抜いたのはなんと鬼の位置が分かるタブレット。鬼全員に支給されているスマートフォンの位置情報を確認できるという、超アタリアイテムである。本来は主催者側の鬼が参加者の『鬼』を監視するためのもののだが、どうしたものか紛れ込んだらしい。だが無論そのことを知らないキングは、自分と思われる光点とその周りに偏っていたりバラバラだったりして散らばっている十個ぐらいの光点の意味もわからずやけに電池の減りが早くてよくわからないレーダーみたいなものしか使えないタブレットという認識であった。

ドツドツドツドツドツドツドツド

二つ目に手に触れ引き抜いて出てきたのは、醤油だ。

ドツドツドツドツドツドツドツド

キングエンジンが音を増す。醤油だ。どっからどー見ても醤油だ。醤油以外の何者でもない。実はほんとはコーラを入れる予定でも下働きさせてる鬼達がつまみ食いしそうだったので鬼が苦手とする

大豆製品を代わりに入れといたらそのまま配っちゃった、というエピソードがあったりなかったりするがそんなことはキングにとつて知ったこっちゃない。重要なのは、これで自分にはなんの武器もないということだ。

ドツドツドツドツドツドツドツド

気落ちしながらも一応なにかまだ入ってないかとデイパックをひっくり返してみる。あった。小瓶だ。ラベルも何もないのでなにかはわからないが小瓶が出てきた。これは喜ぶべきことなのか。もしやヒ素等の毒物かもしれない。もし毒物なら武器として……いや、それは駄目だ。手に負えない。だいたい中身もわからない以上、使い道はないだろう。一応臭いでも嗅いで確かめておくべきか？そう思い慎重に蓋を開ける。

ドツドツドツドツドツドツドツド

昔理科の実験で危険な薬品の嗅ぎ方とか習ったな、などと考えながら蓋の開いた小瓶を恐る恐る顔に近づける。そして手で仰ぐようにして嗅いでみた。これは……なんだろう、全くわからない。わからないが、なにか嫌な予感がする。そう思い嗅ぐのを止めようとして、殺気。

ドツドツドツドツドツドツドツドツドツド!!

痛い。鼻を打った。小瓶の中身の液体が顔にかかる。幸い目には入らなかったが鼻から入り込んだようだ。喉から口に周り鋭い苦味が口の中を襲う。死ぬほど苦い。殺人的な苦さだ。この苦さは確実に危険なものだ！だが！それ以上に背後に危険が迫っている!!

ドツドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツドツド

振り返るとそこに、少年と少女がいた。キングは即座に察した。危険なのは少女の方だ。あの少女からはヒーローに近い雰囲気を感じる。Aまではいかないだろうが、一般人では相手取るのが困難なレベル。それが10m程の距離を取ってそこにいる。

(!?)

互いにどうしたものかと固まるなか、キングは感じた。なにか、来る。自分の中から、なにか熱いもの。おそらくはさっきの液体のせいだろうか腹がしくしく痛むと共に体温が上がる。そして——目の前の少女から、目が離せない。

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

「逃げましょー！」

「あ、ま、うんー！」

一際響く今日一のキングエンジンに驚いてか少女は少年の手を引つ張り踵を返して逃げ出した。まずい、これはなにか勘違いされたパターンだ。経験則でわかる。急いで誤解を解かねば。

キングはそう思うと傍から見れば鬼の形相で立ち上がった。

(アレはアカン！アレ絶対鬼や!!)

翠はどこにそんな力があるのかわからない勢いで中沢の手を引き元来た道に戻る。アレはヤバい。気配に押されて念力を使おうとした瞬間こちらに目を向けてきた。誘い込まれた？毘だった？何かの条件を満たした？わからないが、相手が戦闘に慣れているのは確かだ。翠もそこそこ修羅場は潜ってきていると思っっているが、人を傷つけることを主に行っている超能力者がどれだけ危険かはよく理解している。そしてアレは、考えうる中で最悪の相手だ。まるで対処の仕方が思いつかない。『戦う』という選択肢をとる意味がない手合いだ。恐らくはあの姿は仮のもので人間では無いのだろう。でなければ、あの人型の何かから神にも匹敵するオーラが感じられた理由がわからない。翠はそう思うと走り続ける。いつしか先の三叉路に来ていた。

「右！左！どっちー！」

一方翠に手を引かれる中沢は「どっちでも良いとか言ったらぶっ飛ばされるんだろなあ」などと考えながらチラチラと後ろを見ている。中沢的にもアレはヤバい相手だと思いが、翠のテンパリ具合を見て若干冷静である。そして同時に彼は、キングの手に小瓶がありその

顔が濡れていることに気づいていた。思いつき顔に小瓶をぶつけて痛がつていたあたり、少なくとも人間離れた人間なのだろうと判断する。だがそれはともかく今は翠をなんとかしなくてはならない。半ばパニックになっているようだ。こういう時は相手の言うことをストレートに聞いたほうが良い。それが中沢の処世術である。さて、右か左かあるいは。翠と中沢は選択を迫られる。追うかそれとも。キングも選択を迫られる。そしてキングが手にした小瓶。薬物の名はゴメオ。幻覚剤であり強力な——惚れ薬。それはこの先何を引き起こすのか。今の段階では誰も何もわからない。

【E—03／00時15分】

【名波翠@テレパシー少女蘭】

〔役〕：子

〔状態〕：疲労（小）、キングへの恐怖

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：こんなアホなことをしてかした奴に一発焼き入れて帰る

1：逃げる！

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【中沢@魔法少女まどか☆マギカ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：学生鞆（中身は教科書とかノートとか筆記用具とか）

〔思考・行動〕

基本方針：とりあえず人を探す

- 1：名波さんに着いていく。
- 2：知り合いがいたら合流したい

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【キング@ワンパンマン（リメイク）】

【役】：親

【状態】：ゴメオによる催淫、キングエンジン

【装備】：

【道具】：デイパック（タブレット@絶望鬼ごっこ、醤油、ゴメオ@現実）

【思考・行動】

基本方針：帰りたい……

- 1：子どもたち（翠と中沢）の誤解をときたい。
- 2：一応、自分のできる範囲で子と親を保護する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【タブレット@絶望鬼ごっこ】

鬼の位置がわかるタブレットで充電器とセットで一枰。原作ではどういう理屈で判断しているのか不明のため、ここでは鬼のスマートフォンの位置をバトロワで杉村が持っていた機械のように表示するものとする。凄まじく強力なアイテムのだが、電池の減りが激しい（1分で1%消費とする）ので多様は厳禁。

【ゴメオ@現実】

ドラッグ。使用者曰く、「ケツの穴がひくひくしてくるし、腹の中がぐるぐるしている」「気が狂うほど気持ちええ」「ああ、たまらねえぜ」という感じだとか。もちろん違法薬物である。

第三章 男子高校生の奇妙な非日常（ヒデノリ、間田）

（ヒデノリ登場話）できんの？お前に

「え……なにこれ。ギャグ？」

目を覚ました少年は、赤い空をパラシュートで降下しながら呟いた。風で吹っ飛ばされそうなメガネを、指で抑える。

白いワイシャツ、茶髪にメガネ。彼は、何の特別な設定もない、普通の男子高校生である。

「……………おわあああああああああああああああああ!!」

のだが、多少は運動神経が良い。幸いに木の上に落下し、怪我もなく降下出来た。

「殺す気かあ?」

天に向かって、正確には上空の飛行機に向かって叫ぶ少年。

背負わされたデイパックの中にあつた文書や支給品を確認すると、完全に殺す気だ、と如実に理解出来た。

鬼ごっこ。鬼が子を追い、親は子を守る。そして、鬼はガチで子や親を殺しに来る。そういうデスゲームだ。

「あー、今日の乙女座は死ぬ、って書いてあつたんだろーな。まあ占いとかが信じないけどねー俺」

少年は膝を突き、頭を抱え、現実逃避するように呟いた。ダメだこりや。

……………いや、俺は子供じゃない。親の役だ。弱者を助ける役目だ。そう書いてある。

かつていじめられっ子だった俺を救った、あのヒーローのように。なってやろうじゃねーか。何の特殊能力もないけどな。

彼はそう思い、顔をあげた。……………直後に猛烈な腹痛に襲われ、近くの公衆トイレにダッシュした。

【???／00時12分】

【ヒデノリ@男子高校生の日常】

〔役〕：親

〔状態〕：腹具合が悪い

〔装備〕：真田北高制服（ブレザーの冬服、上着なし）

〔道具〕：デイパック（不明支給品2、確認済み）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：今日は、腹が騒がしいな……。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。親が帰還するために「子を減らす」必要がある可能性には気づいていない。

『人物解説』

漫画『男子高校生の日常』の主要登場人物。CV：杉田智和。某県立真田北高校（男子校）二年A組。乙女座。名字は不明（田畑？）。大学生の兄がいる。

茶髪でメガネをかけており、ルックスは悪くないがハイレベルなバカ。笑いに対してはノリがよく、ボケもツツコミもこなすエンターテインナー。

場の空気を読みすぎてドツボにはまることがままあり、他人を謎のロールプレイに巻き込んだりもする。身体能力は意外に高いが、一応常識の範囲内。

コミユ力が高いため友人は多く、よく女性とも恋愛フラグを立てるが、その都度へし折っていく。小学生の頃はいじめられっ子だった。

4巻61話でうんこを漏らしそうになっていたところを拉致され降下。諸事情により冬場に上着を失っていたので腹具合が悪い模様。

(間田敏和登場話) うわっ面は情けない

「は……う・なんだよココ」

キョロキョロと周囲を見渡す小柄な少年。何時の間にか辿り着いた見慣れぬ町並みは、彼の混乱に拍車をかけた。

混乱の中、何気なく其処らにバラまかれているビラを手に取ると、

そこにはアレンジされた『鬼ごっこ』のルールが記載されていた。

(おいおいおい、新手のスタンド使いからの攻撃か！ 勘弁してくれよお〜！ おれはもうそんな荒事に関わりたくないんだよオ〜！)

期せずして修得したスタンドに有頂天になった間田は、そのしつぺ返しとも言うべきか、他のスタンド使いの手により手酷い目に遭った。

つい最近、漸く退院できたばかりである。もう危険な目に遭うのはこりごりだ。

(俺の役は……子？多分子だよな？じゃあ鬼から逃げれば良いのか？)

糞、説明がザルすぎるだろコレ！)

(ヤバくなったらおれのスタンドで……あー！駄目だ！人形がない！)

自身のスタンド『サーフィス』は確かに扱いやすいとは言えない。戦闘に限定すれば悔しいが『弱い』と言えるだろう。

しかしスタンドは適材適所、どのような能力も使いようである。

間田のサーフィスも使い方によっては恐ろしい能力と言えるが、発動には等身大の人形が必要であり、所持していたそれは既に破壊され、燃えるゴミとなってしまった。

(チキショウ〜!!あるかどうか解らないが探すしかないのか!!)

「勘弁してくれよ……」

とりあえず人形の代用になりそうな物を探るか、そうビクビクしながら歩きだした。

【???／00時03分】

【間田敏和@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：不明

【道具】：『サーフィス』

【思考・行動】

基本方針：家に帰りたい

1：『サーフィス』に使えそうな人形を探す

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……杜王町に住むスタンド使い。ぶどうヶ丘高校3年C組の生徒。

広瀬康一にシメられたあとの小林玉美によって、存在が明らかになったスタンド使い。

長いボブカットに猫のような目をした、如何にも根暗そうな学生。

マンガが大好きで学校のロッカーにマンガを置いている。本人のスタンド曰く「パーマンを知らないやつとは会話したくねー」とのこと。虹村形兆のスタンドの矢で射抜かれスタンド使いとなった。

性格は執念深く陰湿そのもの。かなり暴力的だが小心者でもあるため、身動きが取れない相手にしか手を上げる事ができない。後に間田の半生を岸辺露伴がヘブンズ・ドアで読んだ時には、「弱い者をイジめると胸がスツとして気分がいい」などと書いてある始末で、露伴には「最低な奴」「読者に好かれるはずがない」とボロクソに言われた。『サーフィス』

【破壊力】 — B / 【スピード】 — B / 【射程距離】 — C / 【持続力】 — B / 【精密動作性】 — C / 【成長性】 — C】

別名「うわっ面」。「うわ」はひらがな表記である。

等身大のポーズ人形に憑りつき、人形に触れた者の姿、仕草、声紋を全てコピーするスタンドである。性格までコピーされるため、大雑

把な命令には従うが、本体の間田敏和に忠実という訳ではない。

近距離パワータイプで、パワー・スピードはそこそこ高い。

コピーした本体との見分け方は、サーフィスの方の額についている「+ねじ」である。

コピーされた相手は、数メートル以内でサーフィスと向き合うと同じ動作しか取れなくなる。その際の動作は鏡写しとなり、サーフィスの右腕が動けば、コピー元の左腕が動く。また向き合うと言ってもお互いを認識する必要はなく、サーフィスがコピー元の姿を視認していればいい。また動作させる部位はある程度サーフィスが指定可能であり、サーフィスの支配下にあっても一寸も違わぬような動作をするわけではない。

外見が変わっても中身は木製なのは変わらない為、衝撃で破損することもある。また破損部位は元の木製人形に戻る。

ポーズ人形自体は実物なため、スタンド使い以外でも見ることができ、人形が破損しても本体の間田にダメージがフィードバックすることはない。逆に言えばスタンドを発動するには等身大ポーズ人形が必ず必要となる。

男子高校生の奇妙な非日常

タブレット端末をいじっていた鬼が、新たな連絡に眉をしかめる。

「……おい、まだなんかレギュレーション違反者がいるらしい」

「またかよ、めんどくせーな。どんな奴だ」

「名は……『間田敏和』。外見のせいかな手違いで子として喚ばれたが、高校3年生……つまり明らかに16歳以上だ。

スタンドって超能力を持つてるが、大したことはない。親つてことにするか、現世に還すか……ってことだが、まあ」

「想定外の事態は現場判断で処理、隠蔽だな。こうあんまりミスが多いと、担当者がケジメしねえとなあーっ」

名前と外見、簡単なプロフィールを確認する。黒髪で長髪の、いかにも根暗そうな少年だ。

「まあ大した奴じゃあねーし、後回しにしても問題ない。ヤバそうな奴からだ」



「ちつくしよお——ッ……だが『学校』へ行けば……あるかもなあ……『クロッキー人形』がよおー……！」

死にかけてココロギのようにフラフラと、少年は道を進む。脂汗を流し、周囲をキョロキョロ見回しながら。

地図看板は乱暴に破壊されている。が、標識はある。近くに『学校』があることを知った少年は、彼方に見えて来た『鎌石小中学校』を指す。

村の民家や書店、雑貨屋を漁ったが、『クロッキー人形』や『この場所の地図』は見当たらない。地図が簡単に手に入っては困るのだろう。田舎過ぎるのかマネキン人形もない。

ここが香川県の沖木島という、聞いたことのない島だとはわかった。しかし周囲の雰囲気は明らかにおかしい。現実なのに現実的でない。

東北地方のM県から瀬戸内海まで瞬時に飛ばされるといいうのも奇

妙だ。新手のスタンド使いの攻撃か。もしくは、ここは『あの世』なのか。

鬼には出遭わないが、親や子との合流もできていない。何か霊的なパワーによって出会わないようにしているのでは、という妄想すら浮かんだ。

いや、冷静に考えれば、疑心暗鬼になった連中が『鬼』に掴まらないうよう隠れ潜んで、準備を整えているってだけだろう。鬼の方もだ。とにかく『クロッキー人形』さえあれば、自分のスタンド能力『サーフィス』が使える。単純に手駒が増やせる。

もしなくても、学校にはいろんな道具や書籍が揃っているはず。素材をかき集めて時間をかければ、人形が作れるはず。

襲撃されても隠れられるし、他の子や親も集まってくる可能性もある。ということとは、鬼も来るかも知れないが。

それと、気になることがひとつ。いや幾つもあるが、とりあえずひとつ。

「今年は一九九九年だよな……なんで、ここの日付はどれも『21世紀』のなんだ？」



どうにか下痢が止まった。というか、腹の中のものを出し尽くして無理やり止まった。

あの妖怪め、今度見つけたら『上着返して下さい』と伝えよう。口頭は怖いから、置き手紙でもしよう。

公衆トイレを出て、こつそり民家に忍び込む。誰もいない。この非常時だ、やむを得ない。戸棚を探って薬を探す。

……よし、あった。下痢止め、胃腸薬、風邪薬。電気はつかないが、水道の蛇口を捻れば水は……出る。よし。

「ん？」

薬を飲み終えたところで、窓の外で何か動いたのに気づく。前の道路だ。誰か通ったのか。

静かに民家を出て、門柱からそつと覗く。……学ランを来た、小柄な長髪の男だ。何か、ブツブツ呟きながら歩いている。

危ない奴かも知れないが……味方は多いほうがいい。親か子か。鬼なら急いで逃げる。女性ならスカしたセリフでもかけるところだが。

とりあえず支給品の『鉈』を右手で持って、左手には厨房から拝借したフライパン。背後からそつと近づいて、と。

「おい！ 親か子か、鬼か！」

◆ 「おい！ 親か子か、鬼か！」

いきなり背後から押し殺した男の声。思わず両手を上げて振り向く。

茶髪でメガネの、高校生ぐらいの少年だ。手には鉈とフライパン。……鉈!?

「ひイツ！ こ、殺さないでくれツ！ お、おれは……多分、子だと思う。鬼じゃあないはずだ！」

「名前は？」

「は、『間田敏和』だ。——あ、黙って襲って来ないってことは、鬼じゃあないよな？ あんたは……？」

「親の役だ。安心してくれ。名前は……」

◆ 「なんだあ、2年生かあー。じゃあおれの方が先輩だなアーツ、『ヒデノリ』くん」

「はあ……そつすね、先輩」

ひとまずヒデノリのいた民家に隠れ、情報を交換する二人。相手に敵意がなく、自分の方が年上だと知った途端、間田は横柄になった。

彼は結構なゲス野郎なのだ。口論した友人の目玉を潰す程度には。ヒデノリは面倒なので相手に合わせることにした。

まあ実際、1999年に高3だった間田と、2009年だか2012年だかに高2のヒデノリでは、随分な年の差があるのだが。

「しかし、君が『親』だつてことはわかったが、おれの方が年上だろ？ じゃあ、おれも親なのかなあー」

「わかんないっすね。年齢とは無関係に役割り振ってるのかも知れないし……」

「まあいいや、おれが親でも子でもいいから、一緒に行動しようぜ。仲間がいた方がいいって」

それは否定できない。ただ間田もヒデノリも、戦闘能力は期待できない。

ヒデノリの支給品のひとつは剣呑な『鉈』だったが、もう一つは駄菓子『うまい棒』。間田の支給品はないという。

親と子の違い、ということか。現地調達でしのぎ、鬼と出会ったら必死こいて逃げるしかならう。

「でき、ヒデノリくん。おれ『学校』に行きたいんだよ。親や子が逃げ込んでたり、いろいろ便利な道具もあるかもだしさ」

「学校、ですか。いいアイデアですが、どこにあるんですかね。このへんの地図看板は破壊されましたし」

「フツフツ、鋭く見なよ！ 地図はなくても『標識』を辿りやあいんだよ。この近くに『鎌石小中学校』つてのがあるらしい」

「なるほど、さすがツスね間田先輩！」

「な、おれは冴えてるだろ。ラツキーもある。それに……」

それに『スタンド能力』もある、と言おうとして、間田は言い止めた。

味方とはいえ奥の手を晒してしまうのは、マズイかも知れない。第一、クロツキー人形がなければ発動できない。

「それに？」

「……ルックスもイケメンだろ？ アハ、ハハハ」

【チーム・根暗&メガネ】

【D-06（鎌石小中学校付近の民家）／00時22分】

【ヒデノリ@男子高校生の日常】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：真田北高制服（ブレザーの冬服、上着なし）、鉈@ひぐらしのなく頃に、うまい棒@支給品、フライパン（民家から拝借）

〔道具〕：デイパック、医薬品少々

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：腹具合は治った気がする。

2：学校へ向かい、仲間や使いそうな道具を探す。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。各役の人数と会場の地図は未把握。

親が帰還するためには「子を減らす」必要がある可能性には気づいていない。

親はある程度の情報を与えられてパラシュートで投下され、子は説明なしに迷い込むらしいことを把握。

〔間田敏和@ジヨジヨの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない〕

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：不明支給品（上着のポケットの中にあるが、まだ気づいていない）

〔道具〕：『サーフィス』（スタンド能力、発動には『等身大クロツキ人形』が必要）

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りたい。

1：『サーフィス』に使いそうな人形を探すため、学校へ向かう。

2：スタンド能力のことはとりあえず秘密。

※その他

ヒデノリと情報を共有し、各役の勝利条件・制限時間を把握。各役の人数と会場の地図は未把握。自分の役を子だと推測。

実は16歳以上なので、レギュレーション違反に気づいた管理者から追手がかかっている。そのうち殺しに来るかも知れない。

身長が異常に小さく見えるのは漫画上の誇張であり、実際は165cm。なんかオーラの的に小さく見えるのかも。

第四章 河島龍之介死す (リュウ、ターニヤ、墮姫)
(墮姫 (妓夫太郎) 登場話) 鬼隠し

「何だあ……こは」

出来の悪い、しかし可愛い妹を背負って地獄へ向かって歩いていたと思っただら、突然明るい場所へと出た。

鬼となつてからは縁がなかった、朱い空だった。

人だった頃に見た夕暮れに似た空だった。

しかしたとえ夕暮れの陽光でも俺の様な鬼には致命的、そのはずだった。

だが、俺はこうして立っている。

「お兄ちゃん……」

背後を振り返れば、妹の顔があった。

その顔はもう、人間、梅の顔じゃあなかった。

十二鬼月の上弦。その陸の鬼、墮姫がそこにいた。

だが、まだその表情だけは頭が悪くて素直でかわいい妹のままだった。

その妹が「どうする？」という顔で俺を見つめてくる。

俺はそれが何だかおかしくて、嗤った。

仰ぎ見れば、奇妙な鉄の鳥が妙な紙をバラ撒いている。

妹を下ろして一枚空に舞っているのをもぎ取ると、その紙には鬼ごっこをしろと書かれていた、更に優勝すれば現世に復活できるらしい。

またそれを読んで俺はおかしくなった。

本物の鬼に鬼ごっこをしろとはこの紙を書いた奴は相当なバカなんだらうなあ。

「だが、俺達のやることは変わらねえ」

「…取り立てて行くのね？醜い人間共を捕まえて、一人残らず何もかも奪うの」

そう、俺も梅も、きつと何度生まれ変わっても必ず鬼になる。

幸せそうな他人を許さない。何も与えなかった神も仏も許さない。殺してやる。

必ず妓夫太郎として奪い、取り立て続ける。

「それじゃあ今度こそ私に任せてお兄ちゃん」

妹がそう言つて悪辣な笑みを向けてく。ああ、そうだった。そうやって100年間も柱の連中を食らつてきたんだった。

最後は下手を撃つたとはいえ、今回もそのやり方を変えるつもりは、不思議となかった。

梅野の背中に還るさなか、もう一度妹の顔を見る。

その表情ももう、梅ではなかった。

堕姫という上弦の鬼がそこにいた。

【???／深夜】

【堕鬼（妓夫太郎）@鬼滅の刃】

【役】：鬼

【状態】：健康

【装備】：無し

【道具】：四次元つぼい紙袋、不明支給品2つ

【思考・行動】

基本方針：殺し、食らい、現世へと復活する。

1：幸せそうな子や親を食い殺し取り立てる。

主要人間キャラ達の宿敵、鬼舞辻無惨配下の精鋭の鬼、十二月月の一人。鎌鬼。

妹の堕姫と二人で一人として、「上弦の陸」の数字を与えられている。

ボサボサの髪、猫背でガリガリに痩せ細った体、陰気な顔には血の染みのような痣がある醜い容貌。

奪われる前に奪え、取り立てることを信条としており、人にされて嫌だったこと、苦しかったことを人にやって返して取り立てるという歪んだ考えを持つ。

猛毒を含んだ血液を鎌として振るう血鬼術を主戦法とし、その他乱

戦のさなか妹の墮姫に的確な援護を送ったり、自身の片目を妹へ送ることでもその体を操作することも可能。

また二人で一人の鬼の性質上、二人同時に首を刎ねなければ倒すことはできない。

(ターニヤ・デグレチャフ登場話) 【幼女ごっこ】

「なんだこっちは……」

右、左、住宅街。

上、無数のビルと朱い空。

どこか懐かしくも未知の立地に困惑を隠しきれない幼女がひとり。

ターニヤ・デグレチャフは何時の間にか、前世の故郷に酷似した場所に転移していた。

「これも貴様の仕業かッ！ ……存在Xッ！」

幼女と言えど現役の軍人。直ぐ様冷静さを取り戻すと、目下この状況の最大の現況と思わしき存在を心中で罵倒する。

存在X。過去現在に至るまでターニヤを苦しめている連中は、事あるごとに信仰心を求めてくる。

単純に考えるなら、これも何時まで経つても信仰を持たない自分に業を煮やした存在Xが用意した試練だろう。

そこらにばらまかれているビルに目を通してみると、信じがたいことにアレンジされた鬼ごっこのルールらしきものが記されていた。

この法則に習うなら、自分は「子」……なのだろうか？

確かに肉体は幼女だが、中身アラサーの自分が該当するものかと判断に困る。

少なくとも「鬼」ではないだろうが、そうなると自分は狩られる側である。

危機的な状況に押し込め、無理矢理に信仰を持たせる算段か。

なぜ選出が鬼ごっこのかはわからないが、現代社会に信仰を求めてくるような、需要と供給を理解できない存在Xの事だ。

ルールがわかりやすいとか、そんな適当な理由で決めたのだろう。

「ふざけるなよ……ッ」

……だとしたら考えが甘い。

当然、欲しくもない加護を押し付けられて、あまつさえ幼女にさせられた身の自分が奴等を信仰するなどあり得ない。

ラインの悪魔は存在Xに憎悪しつつ、このゲームからの脱出を決意した。

(それに休暇とはいえあまり長く行方をくらますと今後の昇進に響く……早く帰らなければ)

その思考は意外にも小市民的であった。

【??? / 00時10分】

【ターニャ・デグレチャフ@幼女戦記】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：モンドドラゴンM1908

【思考・行動】

基本方針：出来れば子と合流。

1：このゲームから早期の脱出を目指す

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

『お守り』については把握しているは不明。

【人物解説】

アニメ11話で帝国に帰還した後からの参戦

『幼女戦記』の主人公。前世は日本のエリートサラリーマンで、徹底した合理主義的思考で人事課で素晴らしい活躍をしていたが、彼にリストラされたことを逆恨みした元同僚の手によって殺された際、転生前に神を名乗る存在Xと謁見する。

しかし無神論者である彼は、目の前の存在が本物の神である可能性を全否定してまともに取り合わず、その「不信心」に怒った存在Xによって「神への信仰を取り戻すように」と魔法の存在する、ヨーロッパに似た戦争前夜の異世界に女兒として転生させられる。

転生先の祖国が戦争不可避な国際情勢であり、魔導師適性があるせいで将来的に確実に徴兵がくる身の上だったので、士官学校への入学して優秀な成績をおさめ、安全な後方勤務ができる軍官僚になろうと画策。

しかし士官学校の実地訓練にて北方の国境部隊に派遣されている時期に国境紛争が勃発。初陣で、敵一個魔導中隊に単騎で600秒の遅滞戦闘を貫徹。スコアも撃墜4・不明2と初戦でエース級の活躍を見せ、英雄しか生きて貰えないという銀翼突撃章を授与されてしまう。

軍内での二つ名は「白銀」か「鍍銀」と、敵からはネームド扱いされておられ、特にライン戦線での暴れっぷりから「ラインの悪魔」と呼ばれる。

※二話投稿 『(河島龍之介登場話) ランナウェイ―たとえ地獄に落ちたって』 & 『河島龍之介死す』

手にしつくり馴染むのは、ドスだ。

デイパックという容量の関係上ドスにされたたのであろう、何か長いものを強引に詰め込もうとしたような変な癖のついたデイパックから取り出したそれは、自分がどこまでいってもアウトローであることを無言で告げているかのようだ。

「結局俺はヤクザだって言いたいのか……?」

数秒じつとドスを見てから河島龍之介ことリュウは目を閉じる。思い出すのは、脱獄、逃避行、そして愛した女の元に向かう中で訪れた、死。福岡から東京まで走り抜けた最期の旅路を走馬灯のように頭に巡らせ――

「ラアッ!」

気迫とともにドスを抜き虚空に一閃した。

「舐めんなよ。」

そう言ったのを最後にドスを服の中に隠しデイパックを引っ掴んで歩き出す。

自分は親で、鬼ごっこで子供を守り、24時間でケリがつく。それはわかった、わかったが、そんなものを信じる気は無い。これがかつての組長からやれと言われたのであれば、恋人である美咲との将来を考えて迷いもした。殺人の罪を被って自首する程度、やってみせた。

だが今のリュウは違う。組からは厄介者として消されかけ、恋人は脱獄犯である彼の為に盲目でありながら京都から東京まで追いかけてきた。もう切った貼ったはウンザリだ。自首して足を洗い真つ当に生きようと考えていたところで死んだ彼にとって、彼の人生史上最もこの鬼ごっこは許容できないものであった。

「俺は犬じゃねえ……犬にはならねえ!」

目に怒りの炎を燃やし、リュウは大股で地面を踏み締めた。

【F101／00時08分】

【河島龍之介@ランナウェイ／愛する君の為に】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：ドス@現実

〔道具〕：デイパック（不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：ゲームには乗らない。

1：生き残る。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

人物解説……ランナウェイにて脱獄した四人のうちの一人。元暴力団員で、盲目の恋人美咲との将来の為に組を抜けようとし、その結果組が起こした殺人事件の罪を被り出頭し逮捕収監されていた。二年半収監された後に脱獄、紆余曲折を経て五千万を手にするも、最期は凶弾に斃れた。享年29歳。筋者らしく性格は荒いが、一本筋の通った男。

パリンという音と共に窓ガラスが割られると、鏝の浮いたクレセント錠が外側から開けられる。ターニャ・デグレチャフは当然の権利のように見知らぬ住居に不法侵入すると再度クリアリングし気配が無いことを確認した後家捜しを始めた。一階に人影なし、続く二階も同様。『子』が天井裏や引き出しに潜んでいる可能性……は排除できないが、薄いと判断するのが定石。彼女自身も気配を消しているため、自分と同等かそれ以上の気配はわからず以下のものは感じられない。ゼロ人と見做して良いと判断した。次にキッチン。水は、出ない。が、電気は来ているのか冷蔵庫は動いていてミネラルウォーターのペットボトルが見つかった。一応飲めるか確認すべくヤカンを洗い

水を入れ火をかけようとして、ガスが来ていないことに気づき、手早くガスコンロを準備すると今度こそ火をかける。

「……日本、だな……戻ったわけではないか……」

一通りの作業を終えヤカンが微かな音を立てるようになって、ターニヤはこの家に入って初めての言葉を発した。悪い目つきを更に悪くしながらキッチンから持ってきたインスタントコーヒーの瓶を見る。聞いたことの無い商品名だ。パッケージの雰囲気も彼が見知ったものとは違う。センスがどこもなく昭和的だ。そして成分表示。ターニヤが聞いたことのない珍妙な行政機関の名が書かれている。このコーヒー一つとっても、彼が知る日本との差異があった。

次に彼女はいつの間にか服に入っていたお守りと説明文を見る。書かれている内容からして自分の役は『子』で間違いなからうと推測を立てるが、しかしこのお守りから得られた情報はそれだけ。その効果が科学によるものか非科学によるものかを明らかにする手立ては無い。武器として用いるのは困難であると結論づけると、一応直ぐに取り出せる場所に仕舞う。

そうこうしているうちに煮沸したお湯をまずは冷そう、そう思いコンロに目を向けたところで、その奥の窓ガラスから一人の男の姿を見つけた。

「——で、気がついた時にはこの赤い空の町にいました。」

「なるほどな……」

（言動からしてヤクザ者か。）

（サクラより年上つってもめちやくちやしつかりしてんなこいつ。最近のガキはこんなんばつかなのか？それとも外人だからか？）

森を抜けたところで民家を見つけ近寄っていた男、河島龍之介ことリュウが、外人の幼女、ターニヤに声をかけられて数分。ターニヤが淹れたインスタントにしては旨いコーヒーを飲みながら二人は情報交換をしていた。

「つまり、お前はあの糞パラシュートで落とされたわけじゃねえってことだな。」

「はい。役やその勝利条件、制限時間といったものを説明された記憶はありません。」

(ホントかよこのガキ。)

(やはり怪しまれているか。)

質問に対して淀み無く、極めて流暢な日本語で返答するターニヤを怪しみながら、リュウはデイパックを開いて内ポケットを見せつける。「俺が落とされる前に飛行機で聞いたのと同じだ」と告げると、コーヒーの水面——に写るターニヤ——に目を凝らした。

リュウがこの鬼ごっこが始まってから十五分程で出会ったこの少女。その強烈なインパクトは彼に警戒心を抱かせるには充分過ぎるほどであった。まず日本語を話せることがおかしい。ターニヤはこの鬼ごっこが行われている日本の歴史が不明なため自分をポーランド系の移民と紹介していたが、そんな難しい設定なんか知ったこっちゃなくリュウにとってはどう見ても日本人に見えない子供が日本語がペラペラであるというだけで大きな驚きである。そしてその外見——というか顔だ。服はともかく顔が、ヤクザで時々見られる顔をしている。表情筋を固めて取り繕うその筋の者特有の顔なのだ。仮面を被ったような真顔、というのがリュウがターニヤの顔に対して抱いた印象だ。そして喋り方・喋る内容。どう考えても賢すぎる。ここまで理知的という言葉が当てはまりそうな人間は、彼の人生では存在しなかった。もっともこれは彼が死ぬ前に行動を共にしていた連中がお世辞にも賢いとは言えない連中だったこともあるのだが……そして最後に、この部屋に僅かに漂う機械油の臭い。この臭いはリュウの人生の中でも強く印象づけられている。自分が刑務所に入るきっかけとかなった、拳銃と同じ質の臭い。その微かな臭いは銃で人生を狂わせ銃で幕を閉じたリュウにとって、本能的に警戒心を呼び覚まされるものであった。

(こいつ全く隙を見せねえ。アイツらよりよっぽど気張ってるぞ。)

不可視のプレッシャーを感じながら、リュウは五感全てでターニヤを伺う。脱獄仲間の誰と比較しても強いであろう、張り詰めた集中力とかそう言うものが感じられる。改めて服の下に隠したドスを意識

した。リュウは子供の可能性というものを理解している。自分達の脱獄劇において、小学校にすらろくに行っていない一人の幼女にどれだけ助けられたかわかったものではない。もし彼らだけであつたのなら、本州に行く前の福岡の段階で捕まっていただろう。だから目の前のそれが自分より格上だという想定で、殺すことも考え始める。相手が『子』かもしれないというのは関係ない。一瞬でも隙を与えれば自分が殺さねかねないプレッシャーを、リュウは感じていた。
(もう一人サンプルがいるな。)

一方のターニャは自分が殺さねばならない存在だと思われているとはさすがに考えていないものの、リュウの警戒には気づいていた——このようなデスゲームで無警戒な人間はありえないからだ。その頭の中では、リュウをどう利用するかプランニングの真つ最中である。隠しているつもりらしいが服の下に何かを忍ばせているあたり用心深さは及第点、即席の肉壁としては悪くない、というのが彼女のリュウへの評価だ。それと同時に情報ソースとしては落第だとも判断する。この男が示したルールにはいくつかの重大であるのに欠けている要素があるのだが、そのことに気がついていない様子はない。もしそう演技しているのなら万が一にも背中を預けられる存在ではなくなるためなお質が悪い。それと付け加えるならばカバンに謎のアタッシュケースを入れたまま渡——

「ッ!!」「伏せろっ!!」

反応は同時。

低いソファから即座に身を床へと投げ出す。

身体が接地するより早く寸前まで胸や首があつた当たりに衝撃。

住宅の一部分が消し飛び一瞬中空が生まれ、だるま落としのように壁が壁へと落下する。

その間にターニャは銃を、リュウはドスを手に取る、そして互いを見た。

アイコンタクト。

結論は、逃走。

「走るぞー！」

謎の攻撃から三秒後、二人は別々の方向に走り出し窓ガラスを割って家から脱出していった。

「外れた!?」「勘が鋭いなあ。」

奇襲の下手人、堕姫と妓夫太郎は相次いで声を上げる。確実に殺せた筈の一撃が回避されたことに驚く堕姫の背中から妓夫太郎は出ると、こちらに近づく幼女へと目を向けた。

鬼である彼ら兄妹は二人で一人の『鬼』。そのアドバンテージは正面切つての戦いで発揮されるが、今回彼らを選んだのは、安全策を取って遠距離からの血鬼術。死を経験したこととかつて知つたる吉原でないことから慎重な手を選択した。その結果は、暗殺の失敗である。

だが妓夫太郎は既に二人を殺す算段をつけていた。戸惑う妹をよそに、相手の力量を見極める。堕姫の帯をかわしたことから二人の反応はなかなかだが、所詮は少し動ける常人の域。柱とは比べるべくもない。ガキの方は鬼に近い雰囲気からして一応の注意は必要だが、男の方は精々が侍程度、加えて銃器を持つのはガキの方、それだけ考えると「ここで受け止めろ」とだけ言い置いて迫るガキ——ターニャへと肉薄する。

「そおらよっー！」

（——投げられた!?!）

恐るべきは妓夫太郎のそのスピード、そしてそれが起こした投げを瞬時に把握したターニャの頭の回転だ。妓夫太郎の瞬発力は同じ『鬼』達の中でもトップクラス、その一撃に耐えられるどころか何をされたのかすらわかる参加者は数えるほどしかない。まさしく人外、鬼畜なる身体能力、それが妓夫太郎。しかしその高速戦闘に対応できてこそ悪魔と呼ばれたターニャ。ぶん投げられむち打ちになりそうな首を強引に抑え込むと受け身を取れるよう背中に注意を回しながら

らも、その目は自分を投げた妓夫太郎を捉えていた。猛烈なスピードであるが、この程度ならば経験の範囲内、崩れた姿勢でありながらライフルを構えようとし――

「まず一人！」

（二人だと――）

だがそこにいるのはもう一人。十三人目の『鬼』とでも言うべき上弦の陸、堕姫。身体を帯に変えた彼女にターニャが『包み込まれる』と、その身は忽然と姿を消した。これぞ堕姫の持つ血鬼術の中でも特異な能力、亜空間への引きずり込み。堕姫が望むか帯を斬られるしない限り内部からの脱出は不可能という、この鬼ごっこで随一のルールに合致した恐るべき能力。生け捕りのためのそれがターニャを瞬時に無力化する。だが本当に恐るべきは、ターニャの不運さ。何度も危ないところで逃げてきたリュウの逃走に関する幸運さの割りを食ったかのごとく、彼女が逃走ルートに選んだのは不運にも堕姫達の方であったのだ。

「お兄ちゃん！」

「いいなああ、さすが俺の妹――ああ？」

しかし、禍福は糾える縄の如し。

二人の鬼に光弾が迫る。それぞれに冷静に回避し飛来した方向を見る。

その先にいたのは、黄の線が身体をめぐる黒い服――カイザであった。

（何が起こった？）

エリアが変わるほど全力疾走し荒くなった息を調えるべく、リュウは木陰の地面に伏せる。抜け目なくターニャが覗いていたデイパツクから掴み取り持ってきた彼のもう一つの支給品である謎のアタッシューケースを抱えながら、先の一撃について考えるが、彼では答えが出ない。当たり前だろう、超高速で帯が振るわれ家屋を両断したなどと。

（アイツ逆方向に行ったよな？）

ハア、ハア、と息を吐きながらも今度はターニヤのことを考える。答えが出ないことは即座に放り他の人間の心配をするのは、これまでの逃避行からかそれとも彼の人間性か。一方その目はなにか役に立つものはないかと周囲を行き来しているが、これは前者だろう。しかし結局どちらにもなんの成果もなく、リュウは一際大きい息と共に俯いた。

「こんなん持ってきててもしょうがねえだろ……」

視線がぶつかったアタツシケースに恨めしげに呟く。S M A R T B R A I N というロゴが入ったその内容物は、ゴテゴテとした謎の金属製のベルトとガラケーなどのアイテムで、今の自分には何の役に立ちそうにもない。電話も圏外でこんなものを持っていても重いだけだと思い、リュウは捨てることを即決した。金ならともかく持ち歩く必要性が無い。息と足が戻るまでの間に説明書だけ目を通して藪の中にでも隠しておこう、そう思い開ける。

「変身ベルトかよ、ハッ。」

ケースの上面のガイドに従い着けてみる。どうせS F チツクな見た目なら読まなくても自動で使い方がわかるぐらいしろ、と自分でもめちやくちやだとわかる主張を脳内でしながら。そして自動で使い方がわかった。

「……ハッ？」

自動で使い方がわかった。何がなんだかわからないが、ベルトを着けて携帯電話を持ったら、これが変身ベルトであると直感で理解できた。

直感どうりに携帯電話を開く。謎の電子音。導かれるまま、9・1・3、『EXCEED CHARGE』という電子音声。そのまま恐る恐るベルトのバックル部分にあるケースに嵌める。

『COMPLIETE』

「マジかよ……」

電子音声と怪音、そして閃光。

それが終わった時、リュウの身体は見たこともないスーツに包まれていた。

「らあっ！」

「うぜえ……」

カイザに変身したりリュウはカイザフォンとカイザブレイガンの二丁拳銃からフォトンブラッドを乱射し、妓夫太郎はそれを躲し、弾き、血を飛ばす。妓夫太郎は襲ってきた仮面の男の正体は知らないもののその力量は正確に計っていた。身のこなしは柱に比べ単純な筋力などでは勝っているようだが、動き自体は洗練されていない。そしてこちらの攻撃は当たりあちらの攻撃は外れる。強靱なだけで、敵ではない。一方リュウは相対した妓夫太郎の異形と異常な身体能力に舌を巻いていた。あの身体は生まれつき梅毒にでもかかったのだと思えばわかるが、フィジカルは変身した自分より上かもしれない、そう思う。だがここで引くわけには行かない。一連の特徴を考えれば、相手はまず『鬼』。しかも警察のように殺さず捕まえようという気はサラサラない、ならばここでぶちのめしておく必要がある、と。だからわざわざ元来た道に戻ってこうしているのだ。

「いいなああ、その洋服。ハイカラじゃねえかよ、ええ？」

「日本語喋れたの——うお!？」

光弾を躲し関節を極めに行った妓夫太郎に対し、リュウは相手に知性があることに驚きながらも銃口を向けようとし、その右手に持ったカイザブレイガン毎何かに拘束される。驚愕と共に見れば、そこには帯。

(こつちが囀に——)

「熱っ!!」

ターニヤを沈めたのと同じく兄妹の連携攻撃、それがリュウの動きを止めたのだ。しかしそれは堕姫の悲鳴とともに直ぐに終わる。拘束されたカイザブレイガンから伸ばされたカイザエツジが熱で堕姫の帯を焼き切り、解放されたターニヤを抱えてバックステップする。本人は認めぬものも戻った主たる理由である彼女の奪還に成功した時点で、彼の目標は再び逃走となっていた。もちろん妓夫太郎はそれをむぎむぎ見過ごすはずがない。舌打ちしながら追撃を仕掛けよう

とする妓夫太郎は再び遠距離攻撃を始めながら機動、曲線と直線を合わせた動きで肉薄しようとし、目を横に一瞬向けて止まった。妹の身体が燃えていたのだ。

（あの刀、あのガキみたいに燃えんのか。）

「ああもうっ！再生が遅い！」

（斬られた近くが毒の炎症みたいになってやがる。厄介だなあおい。）
飛び血鎌が当たらぬと見て妓夫太郎は追撃を諦め一飛びで墮姫の元へと戻る。妹の傷口を治癒するその顔は忌々しげに歪んでいるが、それは可愛い妹に傷をつけられたからであって取り逃がしたためではない。そのあたりこの鬼、妹思いであり文字通り一心同体である。それに。

「悪いなあ、お前に殺させてやれなくて。」

あの男はもうすぐ死ぬと妓夫太郎は見切っていた。

「クソっ……たれ……何だこのベルト……」

悪態をつきながら腹部の携帯電話——カイザフォンを操作し変身を解除したりリュウは、苦痛で顔を青く、いや灰色にしながら倒れ込む。その身体が末端からさらさらと灰になっていくのを呆然と見つめながら手をかざすと、向こうに見えるは自分が助けてしまった怪しい幼女が見えた。

（何やってんだよ……俺は……）

もはや言葉すら発せず自嘲の声は喉を震わせ灰になるのを早めるだけだ。カイザへの変身は適性の無い者が使えば灰となり死ぬ。使いはカイザギアの機能で頭に流れ込んできても、その仕様までは知らされなかった彼に、それを避ける術は無い。

「ぐっ……」

（タフなガキだ……失神してたんじゃねえのかよ。）

傍らに投げ出されたターニャを見て、リュウは笑い、頬は灰になる。なんとなくだが、自分がこれから死ぬんだということは灰になりつつある頭ではなく心で理解できた。それはここに来る寸前、体感時間でつい10分20分前に死んだからか。だからやるべきことも理解で

きた。このクソベルトは危険だ。なまじ使い方が自然とわかる分質が悪い。だったらこのアタツシユケースごと手の届かないところに、少しでも人目につかないところに捨てなければ。

立ち上がる。灰になる。ケースを掴む。灰になる。体をひねる。灰になる。手からのリリース。名前を叫ぶ。

「美咲いー！」

愛した女の名前とアタツシユケースと一緒に飛んでいく。それが自分の手から離れる前に、リュウの身体は一陣の風により空へと還った。

【河島龍之介@ランナウェイ く愛する君の為に 『?』】

【C—05／00時24分】

【ターニャ・デグレチャフ@幼女戦記】

【役】：子

【状態】：気絶

【装備】：『お守り』

【道具】：モンドラゴンM1908

【思考・行動】

基本方針：このゲームから早期の脱出を目指す。出来れば子と合流。

1……………。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・制限時間を把握、会場の地図は未把握。『お守り』について把握したが気絶で記憶が飛んでいる可能性あり。

※C—05のどこかにカイザギア@仮面ライダー555、ドス@現実が遺棄されています。

【C—04／00時24分】

【墮鬼（妓夫太郎）@鬼滅の刃】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、食らい、現世へと復活する。

1：幸せそうな子や親を食い殺し取り立てる。

※スマートフォン（鬼）の所在は不明です。落とされたのかもしれない
せんし元から入ってなかったのかもしれない。

※C-04の民家のどこかにデイパックが放置されています。

第五章 わたしたちはここにいます（リーさん、黒のアサシン）

※二話投稿『（若狭悠里登場話）』&『大人になれなかつた子供たちへ』

「此処はどこなの……？」

何もかもがおかしかった。

私、若狭悠里は『かれら』という非日常の来訪に奪われた『あの子』を救うために小学校にいたはずで。

でも見つからなくて。一緒にいた皆も申し訳なさそうに首を振るだけで。

そんなはずはない。そんなはずはないと自分に言い聞かせながら車に戻って……

私の意識はそこで途切れ、気が付いたら飛行機に乗せられていて。

そして鬼ごっこをしろと言われて……ここにいます。

なんでいつもこうなってしまうのだろう。

いつも希望の針は垂らされて、でも握ろうとしたら直ぐに空へと昇って行ってしまい、此方の手が傷つくだけ。

「探さなきゃ……」

それでも口から出たのは希望を探す言葉。

擦り切れ切った心を必死に奮い立たせて、やるべき事だけを考える。

「るーちゃん」

今はただ、あの子を。

何もかも、もうそれだけでいいから。

守るために。離さないために。失わないために。

るーちゃんも此処にいるかもしれないから。

いるはずだ。いなければおかしい。

だって自分は『親』で、ここには守るべき『子』がいるはずなのだから。

探さなきや。探さなきや。探さなきや。

探さなきや。探さなきや。探さなきや。

探さなきや。探さなきや。探さなきや。

探さなきや。探さなきや。探さなきや。

探さなきや。探さなきや。探さなきや。

探さなきや。探さなきや。探さなきや。

「絶対、お姉ちゃんが見つけて、守るから」

【???／深夜】

【若狭悠里@がつこうぐらしー！】

〔役〕：親

〔状態〕：錯乱気味

〔装備〕：

〔道具〕：デイパック不明支給品2つ

〔思考・行動〕

1：るーちゃんを探す。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握してはいますが頭に入っているかは微妙です。

【人物背景】

『かれら』に支配された世界で懸命に生きる『学園生活部』の部長。通称りーさん。

家庭的で穏和な性格だが、同時に慎重で思い詰めやすい一面も持

っ。

小学生の妹がいたらしく、同じ『学園生活部』で子供っぽいところがある丈槍由紀を妹の様に重ね合わせていた。

参戦時期は原作六巻、ぬいぐるみを見つける前。

ここは何処だろう？

銀髪にコートを纏ったアサシン、ジャック・ザ・リッパーは可愛らしく小首をかしげた。

聖杯戦争…ではなさそうだ、他のサーヴァントの気配がない。

では何故私たちがこんな場所にいるのか、とまた疑問がわいてくる。

うんうん子供らしい所作で考えていると、頭の上に一枚の紙が落ちてきた。

禍々しいイラストで、鬼役が子供を追いかけている。

ぽん、と手を打った。そうか、私たちは他の『子』を解体するために召喚されたのだ。

ならば、頑張らなければいけない。

「まずは、美味しい魂がないか探さなきゃ」

……殺人鬼である彼女は思いにもよらない。自分が『子』で呼ばれているなど。

【不明／不明】

【ジャック・ザ・リッパー@Fateシリーズ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『スマートフォン（子）』

【道具】：

【思考・行動】

基本方針：全員ぶつ殺す。

1：美味しい魂の持ち主がいたら食べる。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握

※霊体化及び神秘の纏っていない攻撃の無効化は制限されていません

【人物背景】

19世紀のイギリスで発生した連続猟奇殺人事件の犯人。一人称も「わたしたち」。

性格は純粹にして残酷。あどけない口調ながら頭の回転は速いが、精神的に破綻している。

他者の悪意に対しては残酷に応じるが、好意には脆く、また母親に対する強烈な憧れを持っている。

その正体は、墮胎され生まれることすら拒まれた数万もの胎児達の怨念が集合して生まれた怨霊。

怨霊は魔術師により呆気なく消滅されたが、その後も残り続けた噂や伝承により反英雄と化した。

わたしたちはここにいます

木の幹をに狙いを定めて、試しに一発撃ってみる。

映画で聞いた銃声とはまた違った音を立てて弾丸は発射され、狙いの丁度中央を貫いた。

反動は、まるで感じなかった。

「凄い…最初はおもちゃかと思ってたのに」

緑色のスーツに、戦車をイメージさせる装甲の下で『リーさん』こと、若狭悠里は感嘆の声を上げた。

『るーちゃん』を探して二十分ほど歩き回ったが、当然の如く姿は見えず。

精神が限界を迎えようとしたところで、デイパックに何か人を探すのに役立つものはないかと思い立ったのだ。

入っていたものがチョコレートと役に立つとは思えないカードケースだったときは落胆し、ヤケになって投げ捨てようとしたが、

その瞬間カードケースから情報が流れ込んできたのだ、これは玩具ではないと。

流れ込んできた情報の通り水たまりにケースを掲げ、『変身』と叫ぶと一瞬にしてこのスーツを身にまとっていた。

「この力さえあれば……」

この力さえあれば、例え『かれら』が何人束になってかかって来ても負ける気がしない。

この力さえあれば、彼らに怯える必要はなくなる。

るーちゃんと一緒に、平和に過ごす事ができる。

理想ともいえるその時を想像して、悠里は顔をほころばせた。

その直後の事だった。

「あ、あら……う？」

気が付けば、周囲の霧が濃くなっている気がする。

先程まで霧が出ていたとは言え周りの状況は分かる程だった。

今は、数メートル先の景色すら見えない。

何かがおかしい。そう思い、取り敢えず霧から出ようとした時だった。

「えっ——！」

霧の中から、一条の閃光が走った。

それは悠里の喉に向かって真つすぐに突き進む軌道で飛んできており、彼女は咄嗟に身を伏せる。

「がっ……！」

しかし完璧に避けきることは叶わず、飛来物——ナイフが緑のスーツと悠里の薄皮一枚を切り裂き、背後の木に突き刺さった。

鋭い痛みが走るが、気にしている余裕はない。狙いは正確かつ、無慈悲。

もし、変身していなければ、今頃後ろの木に縫い付けられていただろう。

自分は、狙撃されたのだ。

何故、とかどうして、の感情には一旦蓋をして事に当たらなければならぬ。

でなければ、待っているのは死のみ。

「くっ……何処に……やめて！」

ここで殺される訳にはいかない。

悠里は牽制のためその手のマグナバイザーを乱射する。

しかし、手ごたえはない。

銃撃は全て霧の向こう側へ吸い込まれ、動く気配にはかすりもしていないのだ。

「ぎーんねん。外れちゃった。」

ねえねえ、鎧で見えないけど貴方は女の子？男の子？」

蕩けるように愛らしい子供の声が響く。

しかし、その声は悠里にとつてはこれ以上なく不気味に思えた。

状況的に狙撃した下手人は間違はなく声の主だろう。

声の無邪気さそのままに自分を殺そうとしたのだ。

また飛んでくるナイフを必死に躲す。

(私は……るーちゃんを見つけるまでは、死ねない！)

執念とも呼べる感情を抵抗の糧として、悠里はマグナバイザーを撃ち続ける。

マシンガンを超える乱射だが、霧に吸収されているのかあまり音は響かない。

その猛攻が功を奏したのか、ナイフの投擲が一旦止む。

相手も機関銃のフルオートに匹敵するスピードで弾丸を撃っているはずなのに、ちっとも弾切れしない銃の存在を警戒し始めたのかもしれない。

(……あの霧の薄いところに)

何とか態勢を立て直し、逃げる準備はできた。

そのまま半身になってマグナバイザーを撃ちつつ悠里は後退する。

霧の外にさえ出せばより精度の高い飛び道具を有しているこちらの方が有利だ。

その計算を胸に、霧が薄くなっているポイントを駆け抜けようとした時だった。

「うん——そっちに行くと思ってたよ」

上手くいったと言わんばかりに喜色を含んだ声が霧の中から発され、その直後悠里の視界が回転する。

マグナバイザーを持っていたため受け身を取ることもできず、したたかに地面とキスをすることとなった。

足元を見れば、ナイフが落ちている。霧の中から此方が転ぶように狙ったのだろう。

呆然と飛んできた方向を見ると、子供ほどの背丈の人影があった。

「凄いね、その鎧！もしかして貴方サーヴァント？」

：私たちとつてもお腹が空いてるの。だから、食べさせてね」

そう言つて人影は此方へ向かって突っ込んでくる。

「あ、あああああ!!」

悠里は悲鳴を上げて、ほとんど恐慌状態でマグナバイザーを撃つ。しかしまるで当たらない。

銃の扱いが素人ということ差し引いても、余りにも相手が早すぎるのだ。

撃てども撃てども弾丸は影法師を撃つばかり、彼我の距離が三メートルを切った所で悠里は死を覚悟した。

(ああ……ごめんね、るーちゃん。ごめんね……みんな)

今まで忘れていた妹と支え合ってきた学園生活部のメンバーの顔がよぎり、涙で視界がぼやける。

そして、遂に最後の弾丸を突破して処刑人が悠里の眼前へと降り立った。

「じゃあ——さよならね？」

情け容赦ない鋼の光芒が振り下ろされ——灼熱！

「がああああっ！」

仰向けで倒れていた悠里と、立っていた影の間を縫うように砲撃が着弾した。

直撃を受けた小さな影はバスケットボールの様に二度、三度バウンドして吹っ飛んでいく。

悠里が驚愕を張りつかせて砲撃の方角を見ると、そこには巨大なウシ型のロボットが咆哮を上げていた。

緑の巨人の正体は悠里が支給品として引き当てた『仮面ライダーゾルダ』のカードデッキ。

その契約モンスターであるマグナギガだった。

餌の供給源である契約主の危機を察知し、悠里がゾルダに変身するために使った水たまりから出てきたのだ。

そして、主を手にかかけようとした暗殺者に不意の一撃を食らわせたのである。

そのままゆっくりと体を動かし、マグナギガは追撃を放つ。

人影は砲撃の猛攻を受け、さっきまでの人外の素早さは既になく、初めて悠里はその顔を見た。

そして、固まる。

だって、恐ろしかったはずの処刑人の顔に、髪の色に、小さな体に、
■の面影が——

「駄目えっ！」

気が付けば、砲撃からその子を庇う様に体が前へと出ていた。

「…………どうして?」

十九世紀のロンドンを恐怖のどん底に突き落とした殺人鬼、ジャック・ザ・リッパーは驚きに満ちた顔で自分を抱きしめている者に問いを投げた。

だって、自分と緑の騎士は、さっきまで襲い襲われた関係で、そこに友好を築く時間などなく、

どちらかが死なない限り終わらない殺し合いを踊っていたのに。

それが何故、相手は自分を抱きしめている。

「…………私が、お姉ちゃんだから」

「おねえ…ちゃん?」

緑の騎士は腰のベルトからケースを引き抜き、それと共に騎士の中心が露わとなる。

同時に、抱きしめていた体に装甲のゴツゴツとした硬さが消え、柔らかな感触がジャックを包んだ。

「ごめんね、今までずっと忘れてて。ごめんね、守ってあげられなくて。」

これからはずっと一緒だから、私がこの力で貴方を守るから……」

「守…………る?」

ジャックは呆然と、抱きしめる女性の顔を見た。

その顔は涙に塗れていたが、惜しめない慈愛の感情に溢れていた。

そして、その体からはおびただしい数の死の匂いがした。

——ジャック・ザ・リツパーと言う英霊は孤児の怨念が群れを成し、切り裂き魔の逸話と融合することで生まれた英霊だ。

生の祝福を与えられなかった子供たち。時代に見捨てられし者達。

そんな彼ら／彼女らだからこそ、パンデミックの日から若狭悠里に染み付いた濃密な死の香りは子守歌の様に心地よかった。

そして、彼ら／彼女らは子供故に敵意や害意には敏感だが、見返りの求めない好意には脆い。

「おねえちゃん、ふしぎ」

お母さんじゃないのに、温かい。

気づけば、ジャックは目を細めて悠里の背に小さな腕を回し、抱きしめていた。



「美味しい、るーちゃん？」

「うん！とつても！」

チョコで口の周りをべたべたにしながら、ニコニコ笑顔でジャックは悠里に笑いかけた。

その雰囲気は先程命の奪り合いをしていたとは思えないほど、穏やかなものだった。

チョコレートが支給されていてよかったと、心の底から今は思う。

柔らかな手で、幻想の妹を撫でる。

心の底では彼女自身不思議だった。

目の前女の子の外見はるーちゃんにまるで似ていないのに、ゆきちゃん以上になるーちゃんと重なるからだ。

でも、そんなことはどうでもいい。

隣にるーちゃんが居てくれて、甘えてくれる。これだけで報われた気がした。

後はこのゾルダのデツキを持って、学園生活部のみんなの元へるーちゃんと一緒に帰ることができれば言うことはない。

「るーちゃん、おねえちゃんじゃなくて、りーねえって呼んでくれる」

「わかった。いいよ、りーねえ」

るーちゃんと呼ばれてもジャックは別段気にすることはなかった。

元々、ジャック・ザ・リップパーという名前すら、英霊になる際に獲得したもので、

水子である彼ら彼女らに与えられたものではないのだ。

だから、今更るーちゃんと呼ばれてもさほど気にならなかった。

「じゃあ、行きましようか。頑張つて二人一緒に帰りましよう?」

「うん、一緒にね」

この子を守るためならば、何でもできる気がした。

その為に、きつと神様はこのゾルダのデツキを与えてくれたのだ。

悠里はその手の中のゾルダのカードデツキをもう一度見て、薄く微笑んだ。

……彼女は知らない。いや気づいているかもしれないが目を背けている。

この鬼ごつこのルール上、『親』と『子』は揃って生還できないことに。

そして、襲ってきた時のジャックは生粋の殺人鬼であった事に。
その歪みの結果が、彼女に与えられた力が何を生むのかは、まだわ
からない。

【D―05／00：20】

【若狭悠里@がつこうぐらし！】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、精神錯乱気味、

〔装備〕：ゾルダのカードデッキ@仮面ライダー龍騎

〔道具〕：チョコレート×10

〔思考・行動〕

1：るーちゃん（ジャック）を守り抜く。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握しました。

精神が錯乱してジャックをるーちゃんだと思っています。

【ジャック・ザ・リッパー@Fateシリーズ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：全員解体する。

1：美味しい魂の持ち主がいたら食べる。

2：りーねえについていく。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は

全て未把握

※霊体化及び神秘の纏っていない攻撃の無効化は制限されていま
す

第六章 カチイキレ (吉良、葵)

※二話投稿『(吉良吉影登場話) 吉良吉影は現世で暮らしたい』& 『(宮原葵登場話) 難易度：ルナティック』

地獄に再現された沖木島の一角に、1人の男が立っている。

ここで行われる絶望鬼ごっこのルールに当てはめるなら、親にしか見えない男だ。

しかし実際は違う。

彼は鬼だ、人を殺さずには居られない殺人鬼だ。

そしてこの絶望鬼ごっこでも鬼の役でここにいる。

そんな彼の名は、吉良吉影。

「ふむ、闘争は嫌いだがさすがに今回ばかりは積極的にいかせてもらおう」

吉良は思った。

この絶望鬼ごっこ、何の目的で行われているのかは知らないが生き返ることが出来るのなら付き合うのもやぶさかではない。

美しい手に出会えないかもしれないが、それはここでは我慢しよう。

だが積極的に殺して回るつもりはない。そんなものは他の鬼に任せとけばいい。

他は知らないが、私は肉体的には普通の人間だ。銃の一発で死んでしまう。

ならばどうするか。親の振りをすればいい。

私の外見は知っている人間以外が見ればどう見ても普通の人間だ。

まさか私を鬼だと思ふ奴など知り合いでもない限り居はしない。

親の振りをして子を主催者本部に連れていくもよし。

キラークイーンで跡形もなく消しとばすもよし、だ。

「さて、まずは子が親を探すとするか」

そして吉良は一步步き出す。
己の望む平穩の為、己の身勝手な欲望の為。

【???／深夜】

【吉良吉影@ジョジョの奇妙な冒険】

【役】：鬼

【状態】：健康、姿は川尻浩作

【装備】：ー

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：親の振りをしながら鬼以外を始末する

1：まずは子か親を探す

『人物解説』

漫画『ジョジョの奇妙な冒険』第4部ラスボスのスタンド使い。

一見すると普通のサラリーマンにしか見えないが、実際は人を殺さずにはいられない殺人鬼。

手の美しい女性ばかりを狙い15年間で多くの人間を手にかけて、必要とあらば男性も殺してきた。

性格は、激しい喜びも深い絶望もない、平穩で波のない「植物の心のような生活」を幸福とする。

そのため戦いを嫌い、なるべく避けるように立ち回る傾向にある。日常生活でも目立たないように過ごしてきた。

ただし能力は高く、大抵の事はそつなくこなせる。

「窓の向こうが土みたいになってる……ここは五階なのに……」

宮原葵は呆然と呟くと女子トイレの窓ガラスをノックしてみた。
普通のガラス窓を叩いたときより、心なしか音がくぐもっている気がした。

よもや自分が今までいたショッピングモール毎地獄に再現された

ものに置き換えられたなどつゆ知らず、明らかな異常事態に戸惑う。優に十メートル以上は地上からあるはずのそこが少し目を離した間に土で埋められているなどというのは、彼女に危機感を抱かせるには充分であった。

とりあえず洗面台から水が出ることを確認したりして派手なドッキリなのではないかと考えたりもするが、そんなものに自分が巻き込まれる理由もわからない。トイレの内にも外にもいつの間にか人がおらず、そんな大規模なドッキリを営業中のショッピングモールで、ただの小学生である自分にするとは到底思えない。

ただ一つの例外を除いて。

「また鬼ごっこだったたり……？」

こんなことをできたりしたりする存在に一つだけ心当たりがある。このあいだ、突如学校を地獄と化して鬼ごっこを強いてきた鬼達。奴らならば可能ではないのかと推測を立てる。そしてその推測は当たっている。今の事態は葵達三人を主に殺し切るために用意し、それを大規模にしたものである。しかも鬼達へのチュートリアル用のエネミーとして鬼の牢獄の出口から遠い場所がスタート地点だ。鬼達からすればボーナスステージだが彼女にとってはモンスターハウスであった。

（私だけ巻き込まれたのか、悠も一緒に巻き込まれてるのか……）

トイレからおずおずと出て物陰に隠れながら考える。先程まで一緒にいた桜井悠はシアター近くにいます。なんとか合流したい。飲み込んだ生唾が喉にベツタリと貼りついている気がした。

【F105 / 00時10分】

【宮原葵@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『水晶』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：死にたくない。

1：鬼に警戒。

2：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……当企画のパロディ元である『絶望鬼ごっこ』シリーズのキャラで小学六年生。二巻の『くらやみの地獄ショツピングモール』からの参戦。ガリ勉強原と揶揄されるほど勉強熱心で学年でトップ。また妖怪ウォッチの元ファンで、妖怪等の民俗学について教えたがる。この企画では今現在三人目のリピーターである。なお女だ。

カチイキレ

何度か来たことがあるはずなのにまるで初めての場所に来たような感覚がするのはここが鬼ごっこの舞台だからか地獄であるからかはたまた両方か。

宮原葵はおっかなびっくり女子トイレから出たあとシアターへ移動しようとしていた。同じアミューズメントフロアにあるゲームの筐体から流れる音が酷くうるさく聞こえる。自分の足音や呼吸音、衣擦れの音がかき消されていることから、自然近くに鬼が潜んでいることにも気づかないのではないか気づいていないだけです。潜んでいるのではないか、そう不安は増す。なによりショツピングモールに誰もいないという状況は、まるで世界そのものから迷子になったかのような感覚を覚えるのだ……日常からの迷子という意味では間違いないのであろうが。

「!？」

ふと自分の肩口が触られた気がして弾かれたように振り返る。誰もいない。このショツピングモールと同じように無人だ。いや無人だから誰もいないのは当然でだがそもそも無人というのは異常で――

（落ち着こう私、前の時みたいな鬼だったら足音も大きいし変な歌歌ってたりするし、大丈夫、気づける。）

背後を柱に預け数秒息を止め、ゆっくりと吐く。そしてゆっくりと大きく吸い、また吐く。それを何度か繰り返すうちに頭に酸素が回ってきた。

冷静になれば、まだ鬼ごっこだと確定したわけではない。もしかして夢かもしれない、というのはちよつと現実味がないけれど、またあんな鬼ごっこをするなんてことよりはリアリティがある。それか自分が思いの外長くトイレに入っていてその間に店内の人が何らかの事情で避難した、というのもありえる。

（だったら悠は待っていてくれるはず。まずはこの階を探してみよう。）

自分の中で方針が決まると踏み出す足にも力がこもる。何が起るかわからない未知のエリアからちよつと不気味な場所ぐらいに思えてきた。そうしてトイレから出て数分して一人の男——川尻浩作と出会った。

私の名前は吉良吉影……訳あって今は川尻浩作と名乗っている、平穏を愛する男だ。この鬼ごっこでは鬼の役をやっている。地獄というものが本当に存在することには驚いたが、この沖木島という場所は一般的な日本の離島のイメージとそう遠くないものだ。といってもスマートフォンというパソコンのような携帯電話に入っていた地図で把握した限りだが……話が逸れたな、私はこの鬼ごっこが始まると気がつけばショッピングモールにいた。どうやらここが鬼の牢獄らしい。地図には無いがルールに書かれていることからそう察する。なぜショッピングモールなのかはわからないが、物資が充実していることはプラスだ。そういえばゾンビもののB級映画では良くショッピングモールに籠城していたりするが、そのオマージュだろうか——ん？

「子供か……子の役か？」

一つにまとめた髪が見えて私はより慎重に気配を消して移動する。中学に上がる前ぐらいの女兒を私は発見した。手はまあまあ奇麗だがまだまだ女性らしさに欠けるな。

「——キラークイーン。」

距離を詰めて私はスタンド——ある種の超能力を使う。私の傍らに現れた人形のビジョンは同じスタンド使いにしか見えぬ、そしてスタンドにはそれぞれ異なった能力がある……らしい。専門家でもないで詳しくは知らないが、私はこれが極めて有用な存在であると知っている。例えばこうやって10m程離れた人間の肩に触れることができる。

「!?」

(キラークイーンは見えていない……つまり彼女はスタンド使いでは無いということだ。)

これだけならただのちよつとした念力だが……キラークイーンは触れたものを爆弾に変えることができる。つまり、あの女兒は既に私がスイッチ一つで跡形もなく消し飛ばせる生きた爆弾になったのだ。さて、これで私の安全は確保された、そろそろ姿を見せるとしよう――

「じゃあ川尻さんも気がついたらここに？」

「ああ、偵察として会社の人間と来たはずが気がつけばこんなことになって……どうやらこのショッピングモールでなにかあったようだね。」

私が見つけた男の人、川尻浩作さんはそう言うため息をついた。

川尻さんはカメユーというデパートチェーンに勤めるサラリーマンで、ここには会社の出張（別の会社つてことはM&Aの下見？）で来たら私と同じように巻き込まれたらしい。前回の鬼ごっこでも荒木先生が巻き込まれてたし、もしかしたら鬼ごっこには子供と大人と一緒に参加するなんらかの必要性がある、なんて考えてみたけど今それを考えても仕方ないので口には出さずに保留しておく。それよりも私は言うか言わないか迷っていることがあったから。

（小学校でのことと悠のことは言わない方が良いかな……）

こんな場所で大人に会えたことは心強いけど、同時に別の意味で怖くも思う。ゲームセンターで知らないおじさんと会っても普通は話さない。だからか川尻さんにどこまで話していいかわからなくて、困る。悠のことを話せばもし川尻さんが危ない人だった時が怖いしそれに本人の許可無く勝手に知らない人に紹介するのはマナー違反だ。小学校のことについてはそもそも信じてもらえないかも怪しい。私が大人だったら子供の下手な冗談だつて扱っちゃうかもしれないから。となるとここは――

「川尻さん、一緒に他の人がいないか探してもらえませんか？」

（やはりバイツァ・ダストは使えないか……）

衝動的に爪を噛もうとするのを気合いで耐えながら川尻こと吉良は葵と共にアミューズメントフロアで他の参加者を搜索していた。彼女の提案になにか嫌なものを直感で感じてはいたが断る理由が無い。シヨツピングモールという地形を活かして親として違和感の無い嘘をついたつもりだったが『出張に来たってことはこのこと詳しくいんですよね？遠足だつて行く前に下調べするんですし。』とやたらキラキラした目で言われれば違うとは言いがらい。であるからして彼は葵と行動を共にしていたが、しかしそれは彼の心の平穏を乱す原因ではない。

バイツア・ダストが使えないというのもなんとなくわかっていたことだ。あれは杜王町での平穏な暮らしを実現する為のものであって単に時間をふっ飛ばすようなものではない。同時に吉良自身バイツア・ダストの能力を完全には把握していない。自分の死から新たな能力に目覚めるまでを冷静に思い返すと、把握していない条件があるようだ。

(年齢を考えれば子供、だから役は『子』というのは安直！そんな保証はどこにもない。)

(では『鬼』か？鬼役は鬼の牢獄からスタートする……？支給品は持っていないようだが個人差があるのか隠しているのか……？)

(そして『親』ツ！鬼ごっこにはない役だ。これはどういう意味なんだ？その名の通り『子』の親のことを指すのか？)

一筋汗が流れた。

吉良の苛立ちの原因は、参加者の役の判断方法が無いことに気づいたことだ。各役の人数や勝利条件はわかってはいるが、肝心の見分け方がわからない。自分以外の71人についてはほぼ情報がゼロであるため自分を基準に考えるしかないのだが、それでは精々鬼がどのようなタイプか推測ができるだけである。そしてその推測がより吉良を苛立たせる。鬼が自分のように姿を変えていた場合外見では判断がつかないのだ。

(わからないといえはこのスマートフォンとかいう機械だ。一時から使えると書いてあるが地図と時計以外に機能があるのか？こんな小

さな機械で電話の機能までできると?)

(それにこの紙袋、明らかに容量がおかしい。ちよつとした小部屋ぐらいありそうだ。)

(………さて、鬼の勝利条件は過半数が鬼になるというものだった。だが鬼かどうかを判断する方法は無い。つまり……)

(同士討ちが容易に有り得る!)

「川尻さん!」

「——なにかな?」

「凄い汗かいてますけど大丈夫ですか?先から遠い目をしてるし。」

「……徹夜明けでね、少し疲れが溜まっているようだ。すまない。大丈夫さ。」

葵に顔を覗き込まれ、汗をハンカチで拭う。どうやらこの鬼ごっこ、想像以上にめんどくさい。12人しかいない鬼が潰し合うことがあれば鬼全体が不利益を被るのだが、このルールではそのような事態は頻発するだろう。吉良はこの機械にそれを防止する何かでもあつてくれとスマートフォンを見た。

幸運なことに彼の祈りは通じた。

この会場で支給されているスマートフォンは、鬼は鬼、子は子で、それぞれ全員と同時にチャットが行える。支給された人間の顔と名前が端末毎に紐づけされて。

その機能が使用可能になるのは午前1時。

あと35分。

【F—05／00時25分】

【宮原葵@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：爆弾化

【装備】：『水晶』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：死にたくない。

- 1：川尻さん（吉良吉影）とアミューズメントエリアを搜索。
- 2：鬼に警戒。

3：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

吉良吉影のキラークイーンによって爆弾化しました。

【吉良吉影@ジヨジヨの奇妙な冒険】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康、姿は川尻浩作

〔装備〕：ー

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

〔思考・行動〕

基本方針：親の振りをしながら鬼以外を始末する

1：まずは宮原葵と同行する。

2：参加者の役を見分ける方法を考える。

※その他

バイツァ・ダストは杜王町でないことと本人が能力を把握しきっていないことで使用不可。

宮原葵をキラークイーンで爆弾化しました。

第七章 唯才是举 (翼、マニツシユボーイ、賈ク)
(賈ク登場話) 未踏の地、未知の群狼

「ふむ。わけが分からんが、おおよその規則は理解した」

建物の中、灯火の下。男は、紙に書かれた文字の内容を確認し、そう呟いた。

幸いに漢字が多いが、妙な文章で、異国の文字や言語が混じっている。支給品も、彼のいた時代にはまず存在しなかったものばかりだ。

だが、なぜか読めるし、内容も使用法もおおむね理解出来る。そういうものだろう、と彼は疑問を飲み込んだ。

なにしろ、自分をここに呼び寄せ、『鬼』と戦わせようというのだ。主催者には、そのようなことも出来るのだろう。

とすれば、ここは幽冥界か。寝ておる間の夢か。いや、考えるまい。今は何より、この現状に基づいて策を考えよう。

「鬼、のう。俺の主君は鬼よりこわい。早う戻らねばな」

皺を寄せ、苦笑いする男。その頭は巾で覆われ、髪や髭には白いものが交じる。

身に纏うのは質の良い絹の衣服。腰には剣を帯びる。見るからに現代の人間ではない。

——ここは異国だ。目立つであろうから、どこかで現地の衣服を調達したがよいか。鬼と間違えられても困る。

さてさて。人がおり、この頭脳と肉体さえあれば、俺はどこでも生きていける。

主催者が何を企んでおろうと、俺は生き延びてみせよう。まずは手勢と情報を集めるか。地図があると良いのだがな。

悪相の男は伸びをし、肩をほぐした。この戦は、よい気晴らしになるか。

【???／深夜】

【賈ク@蒼天航路】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：漢服、直剣

〔道具〕：デイパック（不明支給品2、確認済み）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：鬼を減らし、親を勝利させる。

2：そのために多くの親や子と早めに提携し、場合によっては鬼や主催者とも交渉する。

3：他人が死のうと、最終的に自分が生き残ればそれでよい。戦力や数の配分を気にはする。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

漫画『蒼天航路』10巻以後に登場する後漢末の人物。名の本字は「言羽」（く）。字（あぎな）は文和。涼州武威郡の人。

董卓やその残党を経て、仇敵であった曹操に仕え、軍師として活躍した。張良・陳平の如き智謀の持ち主。

処世術にも定評があり、舌先三寸と先見の明で幾度も虎口を逃れ、乱世にも関わらず天寿を全うした。

『蒼天航路』では悪人面の禿頭で、軍略にも策略にも秀でたドライな悪党だが、破天荒な曹操に魅了されつつ振り回される苦労人でもある。

時系列上は単行本27巻で無頼の中軍を編んでいる最中（西暦211年）、一寝入りした隙に喚び出され、パラシュートで投下された。年齢は60台半ば。

それなりに鍛えているが、戦闘力は期待できない。なお彼は知らないが、ここで彼が死のうが本人は無事なので歴史は変わらない。

(椎名翼登場話) 志なき知性は翼のない鳥である

「……ぎッけんなよ」

下校途中、彼は突然、見知らぬ場所に迷い込んでいた。火花が散る、暗くも明るくもない赤い空。壁に貼られ、空からバラまかれる、無数の同じ文面のチラシ。それを読んでの第一声。

少女のような可愛らしい顔をした、小柄な少年。ジャージを着込み、手元にはサッカーバッグとサッカーボール。

見た目ほどに無力ではないが、超常の力など持たぬ中学三年生の男子。鬼、親、子。三つの役に当てはめれば、確実に「子」だろう。

彼は周囲を確認すると、無人の家の中に入り、ポケットの中の支給品と説明書を確認する。そして、青褪める。

「死体、つて……ほんと、ぎッけんなよ」

鬼ごっこ。誰もが知る遊び。しかし、これは——殺し合い。否、多分……鬼による、一方的な殺戮ゲームだ。

支給品「式札」とその説明書を読み、チラシの文面と、自分が異様な見知らぬ場所にいる事実から、彼はそう推測した。

しかも、この支給品は使い所が難しい。鬼の死体を発見して、これに乗せると周囲が禁止エリア化。鬼でなければ、役が分かるだけ。どう使ったものか。

敵は鬼。それと主催者。味方は親と子。ならばまずは、味方と合流するのが一番だ。情報を集め、鬼に対抗する策を編む。

「絶対、負けねえ。こんなところで死ねねえ。生きて還るぞ」

【??/00時05分】

【椎名翼@ホイッスル!】

【役】:子

【状態】:健康

【装備】:サッカーバッグ(水筒や包帯入り)、サッカーボール

【道具】:式札、財布(小遣い若干)

【思考・行動】

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：鬼を減らし、子を勝利させる。主催者を殴れたら殴る。

2：そのために多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。

3：子や親の犠牲はなるべく出したくない。出てしまったら悲しむが、ある程度割り切る。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

『人物解説』

漫画『ホイッスル!』に登場する少年。CV：樋口智恵子／高城元気。1983年4月19日生まれの15歳（1998―99年当時）。

東京都飛葉中学校三年生でサッカー部のキャプテン。ポジションはセンターバック。身長151cm、体重43kg。

小柄で可愛い顔立ちだが、性格は好戦的で気が強く男らしく、皮肉屋の毒舌家。頭脳明晰で運動能力も高く、武道の心得もある。特技はマシンガントーク。

文武ともに大人顔負けの才能を持ち、大人受けの良い立ち居振る舞いも出来るが、負けず嫌いで身長にコンプレックスを持つなど年相応の面もある。

フィールドでは中学生離れした統率力による組織守備戦術を的確に駆使し、華麗なテクニックで大型選手とも互角以上に渡り合う。プレーはクレバーで底意地が悪い。

(マニッシュユボーイ登場話) 赤ん坊地獄

(あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！)

「花京院にやられた思ったたら、いつのまにか別の場所にいた！」

な……何を言っているのかわからねーと思うが、おれも何をされたのかわからなかった……頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとかテレポートだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえもつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……!!)

赤く染まった空の下、一人の赤ん坊・マニッシュユボーイは驚いていた、自身に襲いかかったこの謎の現象に。

(夢の世界……じゃあ無いよな、明らかに風景がちげーし、かと言って現実世界でもねーな、一体ここはどこなんだ？……そういや、さつきから鬱陶しいほどビラが巻かれているな?)

ここはどこなのか考えていると、空から無数に散らばるビラに目をつく。

ビラを読み上げると……

ルール1：子供は、鬼から逃げなければならない。

ルール2：鬼は、子供を捕まえないといけない。

ルール3：きめられた範囲をこえて、逃げてはならない。

ルール4：時間いっぱい鬼から逃げきれれば、子供の勝ちとなる。

ルール5：親は、子供を守らなければならない。

(はあ!?なんだこりや!?まさか俺に鬼ごっこをしろって事か!?!これによると子供、親、鬼の三役があるが俺は鬼か?いや殺すことは出来ても捕まえるのはまず無理だしやっぱ無難に子供か?)

生後11ヶ月の赤ん坊だが、頭は良く大人の思考を持つ赤ん坊は、ビラを読み終えどうやら自分は鬼ごっこに参加させられたと推理する。

(ん?……オムツに何か入ってるな、これは札と紙か?)

その時、自分のオムツに何やら札と紙が入っていることに気付く。

紙には説明が書いてあり、説明によると札は式札と呼ばれ、効果は

死体の上に乗せるとその死体の役がわかり、役が鬼だとその死体がある場所は禁止エリアになるということだ

(いやいや待って待って!?禁止エリアって何だ!?というか死体って何だよ!?まさかこれってそういう系のヤツなのか!?)

そこで気付く、自分が参加してるのはお遊びではなく、命懸けの鬼ごっこだということに。

(…まあ何となく気付いちやいたけどさー、どう見てもまともな世界じゃなかったし、…とりあえず誰か探るか、なんかちらほらとパラシユートがあちこつちに落ちてるし、多分俺と同じ参加者だろう。

泣け叫んであつちから来てもらうのもいいが、それで鬼か赤ん坊を殺すのも躊躇わねーサイコヤローが来たらヤバイな、ただでさえ俺は赤ん坊で俺のスタンドも今は何の役に立たねーのに、捕まるならまだしも殺しに来たらお手上げだ。

まずは遠目から安全かどうか確認してから、普通の赤ん坊のフリしてお世話になるとするか、自分が鬼か子供かはそつから考えればいいしな。)

今後の方針が決まり彼は動き出す、他の参加者と合流する為に。

昔の彼ならすぐに大声で泣き叫んで他の人を呼んでいただろうし、自分の役は鬼だと思いこんだだろう。

彼がここまで慎重になったのはここが殺し合いの場かもしれないことだとわかったのもあるが、一番の理由はその前にあった空条承太郎一行との殺し合いだろう。

あの時は自身のスタンド・死神13で一方的に承太郎達を痛めつけ、後一步のところで殺せたところを、自分のミスにより先に自分の正体を知った承太郎の仲間・花京院典明の機転により逆転されてしまい敗北、彼により自分の大便入りのご飯を食べさせられるという屈辱的罰を受けた。

その時の苦い経験から、彼は慎重に行動する。
もう二度と失敗はしない。

彼はまだ赤ん坊だが、それ故に無限の可能性を秘めているのだ。

唯才是挙

「……ッ！」

おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ。森の中に響き渡る声。

「赤ん坊……だと……!?!」

少年、『椎名翼』はそれを聞き、発見し、立ち竦んで青褪める。

この鬼ごっこを開催した連中は、マジで外道の人でなしだ。本物の鬼だ。

子が小中学生ならわかる。まさか、這い這いでしか動けないであろう赤ん坊まで『子』にするとは。

肌の色は褐色で、目鼻立ちからは日本人ではない。アラブとかインドとか、そのへんの顔立ちだ。

どうする。さすがに人間として、見捨てるわけにはいかない。ほおっておけば確実に死ぬ。

『式札』とやらの説明書を見る限り、この鬼ごっこはただごとではない。殺し合いか、それに類するものだ。

赤い空、謎の霧、漂う妖気、パラシュート投下される人間、破壊された地図看板。この赤ん坊を放置など出来ない。

だが、どうする。赤ん坊は何も出来ないどころか、泣き喚くだけだ。連れ歩けば鬼に自分の位置を知らせるにも等しい。

食事や排泄の世話だって必要だろう。年齢によってはまだ母乳が必要だ。何の役にも……。

「ほっとけるかよー！」



ようやく人が通りかかった。耳を澄まし、精神を研ぎ澄ます。

おれのスタンド『死神(デス) 13』は、夢の中では無敵なぶん、現実世界では役には立たないが……、

人間の精神に多少働きかけることはできる。催眠術ってやつだ。乳母にできそうな女を泣き声で誘って世話させたり。

他人がどーなるーと知ったこつちやあねーが、おれはまだ赤ん坊。移動やメシやクソの世話してくれるやつがいねーと困るんだ。

鬼なら殺気を放ってるだろう。親か子にもヤバい奴がいる可能性はあるが――

この気配と足音の軽さは、そうじゃあない。普通のガキだ。スタンド使いでもなさそうだ。

できれば女がいいが、こんな状況下で贅沢は言えない。拾ってくれば恩返しをしてやらなくもないぜ。それ、今だ。

「おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ……」



「それで、赤ん坊を拾って来たと申すか」

「文句あるかよ、爺さん。ほっとけねえだろ」

俺が潜んでいた民家へ飛び込んで来たのは、冠礼（元服）を迎えたかどうかという少年（わっぱ）と、赤ん坊。

どちらも『子』の役に違いない。しかし少年はともかく、赤ん坊は足手まといどころか……。

「だいたい、『賈ク』だ？ 三国志の武将じゃねえか！ コスプレまでして気合入ってんな！」

「三国志？ こすぶれ？ いや、俺は武将というか、今は漢の太中大夫という官にな……」

「知るか！ とにかく、あんたはここじや親の役なんだろう？ 子を大事に護りやがれ！」

「むう……」

子は枝葉。子は親を生むことはできぬ。危急迫れば、子は親のために死ぬべし。

儒者はそう説く。儒者嫌いの漢の高祖も我が子を馬車から投げ捨てて逃げたという。あの劉備めもそうしおった。

さりとて、俺も人。現世における子や孫と我が身と、どちらが可愛いかと申せば……我が身を捨て、子を活かすやも知れぬ。

親は新たに子を儲けることもできようが、死んだ子は帰らぬ。子孫が絶えれば、親や先祖を祀る者がおらぬではないか。

それに父母と子に先立たれた孔子が、子は親のために死ぬなどと申

したであろうか。

まあ、この場に俺の子や孫はおらぬだろう。この翼とかいう少年や赤子も、別に俺の血を引くわけではない。

仁愛、惻隱の情というものはあるにせよ、いざとなれば見捨てて逃げても、俺の心はさして傷まぬ。

今のところはこの少年と手を組むとして、赤子は誰ぞに担わせてしまおう。



親役にはそれなりに情報が与えられている。

翼は（マニツシュ・ボーイも）賈クと情報を共有し、各役の勝利条件と制限時間を把握した。

どの役が何人いるのかと、この場所の地理は不明なままだ。

親と子の勝利条件が違うのは気にかかるが、誰だろうと死なせるのはいやだ。

いざとなれば鬼の本拠地へ攻め込んで、この『鬼ごっこ』をぶっ潰す。翼はそう語り、賈クもとりあえず頷いた。

賈クは民家の箆笥を漁り、目立ちにくく動きやすそうな作務衣に着替えながら思う。

翼には、なかなかの才覚がある。身のこなしもよく、弁も立つ。特に、人を率いる才だ。

ちと苛烈で毒舌ゆえ、人によっては嫌われもしようが。いや、我が主君ほどではなからうが。

ともかく、人数と情報が足りぬ。まずは有能な親や子を集め、鬼に對抗するべし。

加えて鬼の方の情報も集めねばならぬ。ならば、鬼を捕まえる策が必要か。

ふと、赤子の方に目線をやる。幸いに今のところ泣き喚いたりはせぬが……。

気のせいか、口の中に牙が見えた気もする。よもや？

「……翼よ。もしその赤子が『鬼』だとすれば、どうする」

「さあ。鬼だとしても、なんにも出来ねえだろ」

「さてのう。赤子の姿に変化し、我らを襲って食い殺す算段やも知れぬぞ」

「疑心暗鬼を生ず、つて言うぜ、爺さん。それならとつくに襲って来てるさ」

「ふん。どうにせよ、我らで赤子の世話は難しいな。誰ぞ女がおればよいが……」



や……ヤバイッ！ あのじじい、オレを『鬼』じゃあねーかと疑いはじめやがったッ！

チクショーツ、この『牙』は生まれつきだが、別に鬼のしるしじゃあねーッ！

だいたい、ろくに動けねー赤ん坊のオレに、鬼ごつこの鬼役なんかできるかボケッ！

(説明がねーからオレでも役がワカンネーけどよ——ッ)

……いや、待てよ。オレがこいつらに危害を加える存在じゃあないんなら、別に正体を隠す必要はねえんじやあねーか？

知能の高い、寝てる奴らには無敵で(鬼が寝るかどーかはともかく)催眠術も使える、強力な味方だとアピールすりやあ……！

だ、だが、どうやって!? オレはまだ生後イレブンマンズだ、喋れねーぞッ！ それとも文字を書くか？

誰か寝てる奴がいれば、オレの正体や能力をしつかりと明かせるんだが……！

【チーム・疑心暗鬼】

【I—06 (民家) / 00時25分】

【椎名翼@ホイッスル!】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：サッカーバッグ (水筒や包帯入り)、サッカーボール

【道具】：式札、財布 (小遣い若干)

【思考・行動】

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。主催者を殴れたら殴る。子

や親の犠牲はなるべく出したくない。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。民家から使えそうなものを持ち出す。

2：この赤ん坊は流石にほっておけない。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

賈クのこと（日本語も通じるし）ただの変なじじいと思っている。

【マニッシュボーイ@ジヨジヨの奇妙な冒険】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：死神13

〔道具〕：式札（オムツの中）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残る。普通の赤ん坊のように振る舞い、自分を保護させる。

1：じじいに怪しまれている、ヤバイ！

2：……いや、むしろオレの正体を伝えりゃあいんじやあねーか

? でも、どうやって？

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を鬼か子（たぶん子）であると推測。

【賈ク@蒼天航路】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：作務衣（民家から拝借）、直剣（私物）

〔道具〕：デイパック（確認済みの不明支給品2、漢服）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。他人が死のうと、最終的に自分が生き残ればそれでよい。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。場合によっては鬼や主催者とも交渉する。

2：民家から使えそうなものを持ち出す。

3：この赤子、もしや？

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

第八章 このクソつたれなパーティに祝福を（阿部さん、月、桜井悠、チャツキー）

（夜神月登場話）あの素晴らしき救世をもう一度

アミューズメントフロアと書かれたその一面にはゲーム機が並び賑やかな音を立てている。地図上ではF-05とされた神塚山山頂、その地図上には記されていない地下部分に主催者本部・鬼の牢獄がある。参加者に解放されているだけで六階もの階層を持つシヨツピングモールだ。北東側に一つだけある入口を一階とすると地下一層地上五層の建物として見ることもできる。このシヨツピングモール全体が、鬼の勝利条件である『子』を捕らえるための牢獄であるのだが、それがなぜシヨツピングモールかを知るものは少ない。といっても、単に主催者側が別の鬼ごっこで使う予定だったものを流用したというだけなのだが、とにもかくにもそこにはその名の通りの機能がある。武器として有用なものは乏しいが雑貨の類は多いという、鬼役への一つの便宜だ。

そのシヨツピングモールの最上階がアミューズメントフロアであり、そこにある映画館の座席に座った夜神月は売店から拝借した紙にこれまた拝借したペンを走らせていた。

「子が36人、親が24人、鬼が12人。この三つの役毎にそれぞれの勝利条件を満たすために戦う——同着なら鬼・親・子の順……」

書いてまとめていつている内容は、この鬼ごっこのルールだ。

月がルールをわざわざ書き起こしているのには理由がある。

それは主催者への不信だ。

デスノートを使用したものは天国にも地獄にも行くことはない——その自らが知る知識との乖離した状況、それが月の足を止めた。自身は恐らく、キラであることが露呈し射殺されたはずである。そのことは鮮明な記憶として実感できる。であるのに、今こうして地獄とされる場所で鬼ごっこをしようとしているのはどういうことなのか。そして自身の記憶を辿り鬼ごっこの説明の際の状況を強く思い出す

うとしたことで、更に疑念は深まった。

単純に言う、月は鬼ごつこの説明を受けた記憶があやふやである。まるで夢の内容を思い出そうとするような困難さがそこにつきまとうのだ。そもそも時系列に脈絡なく記憶が差し込まれているような感じすらあるが、なにぶん死んでいるときのものの感じ方の知識などあるわけではないのでなんとも言えない。現状では、自分が状況をよくわかっていないということしかわからないのである。

「単純に考えるなら、島一つを丸一日使ってやる鬼ごつこ……じゃないな。リユーク。」

月は、自分の支給品である四次元っぽい紙袋とその上に乗っている黒いノートを見ながら言った。応える声はなかった。

月の支給品、デスノート。それはこの地獄でも彼の手に渡っていた。しかし、月はそれすらも懐疑的な目の対象とする。このノートの近くにいるはずの死神が姿を見せない今、これを本物とみなす理由は何一つとってないのだ。

今のところ安全に試す方法もなく、そもそも自分と同じような存在を人として殺せるのかも不明だ。加えてこの会場にいる自分以外の71人の顔と名前を把握するメドもない。そしてもし本物のデスノートが会場に配られていた場合、人との接触自体が危険である。またデスノートが人の行動をある程度操れる以上、時間が経って所有者に情報が渡ることは大きな影響を持つのだ。

(まずはノートが本物か偽物かを確かめる。できれば鬼で試したいが……)

月は二冊のノートとペンを紙袋に入れて立ち上がる。この紙袋、一度出したものや元から外にあったものは中に入れても小さくはならないが、それはそれとして通常の紙袋のように使用できるようだ。このショッピングモールのロゴが入っているため一見して通常の紙袋と区別がつかないことを何かに使えないかと考えながら慎重にドアを開ける。ノートが本物だとしても銃には勝てない、一応ここは鬼のテリトリーだが、そもそも鬼自体信頼できる相手ではないのだ。

(神を鬼と同等に扱うとは……まあ、神話じゃよくあることか。)

微妙に持ちづらくかさばる紙袋片手に月は賑やかな音を立てるゲーム機の林を歩く。神は、死んでも復活するのだ。それは月が創る新世界の神話でも同様なのである。

【F—05地下『主催者本部・鬼の牢獄』／00時10分】

【夜神月@DEATH NOTE】

【役】：鬼

【状態】：健康

【装備】：なし

【道具】：デスノート@DEATH NOTE・スマートフォン（鬼）

@オリジナル・不明支給品1・ノートとペン@現地調達の入った四次元っぽい紙袋

【思考・行動】

基本方針：まずデスノートの真贋を確かめる。

1：鬼を含んだ他の参加者でノートを試す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

人物解説……DEATH NOTEの主人公。原作終了後からの参加。名前を書いた者を殺すデスノートを手に入れ、新世界を夢見て大量殺戮を起こし、最期にはデスノートを落としてきつかけをつくった死神に殺された哀れな男。頭脳明晰容姿端麗文武両道を地で行く好青年だが、いかんせん煽りや挑発の類にのせられるきらいがある。

(チャツキー登場話) 「チャイルドプレイ外伝　チャツキーの鬼ごっこ」

「ひやはははは！　いいぜえ！　最高だ！　絶望鬼ごっこたあ、正に俺様向けの舞台じゃねえか！　望み通りやってやるよ！」

比較的このゲームに情熱を燃やす彼の名前はチャツキー。本名はチャールズ・リー・レイ。世にも珍しい悪意ある殺人人形である。

鬼役として主催に蘇えさせられたチャツキーは歓喜した。聞けばこのゲームで優勝すれば現世への復活も可能らしい。

人形に憑依することで幾度も復活を試みたが、ついに成功しなかった人間の体を得られる絶好のチャンス。乗らない理由はない。

「だけども、ここでも俺はグッドガイなのか？　糞っ！　どうせなら人間の体を超越しやがれってんだっ！」

不満があるとすれば、生前の体ではなくグッドガイ人形の姿で参加させられたことか。

しかし、この体でもこれはこれで利点がある。人形の姿は不意打ちするには絶好の擬態にもなるし、子を狩る長所になる。

支給品は確認した。手に取ったのはナイフだ。これならこの体でも扱いやすい。

聞けば子と親は大半が普通の人間との事だ。厄介なのは支給品だが、殺しの玄人である自分なら対処する方法は幾らでもある。

気になるのは他の鬼の存在だが、このゲームのルールでは潰し合う必要は無い。

戦っても負けるとは言わないが、損得勘定ができる奴なら組むことも考えるべきか。

「現世に甦ったら、真っ先にあのアンディーの糞ガキをぶっ殺してやるぜ！　ひやはははは！」

本来なら愛らしい顔を狂気に歪めながら、殺人鬼は獲物を求めてどこかに消えていった。

【???／深夜】

〔チャッキー@チャイルドプレイシリーズ〕

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康、グッドガイ人形の体（新品）

〔装備〕：ナイフ

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品2つ（確認済み）

〔思考・行動〕

基本方針：子か親の前では人形のふりをして様子見、可能なら不意打ちで殺害する。別に殺さなくても良いらしいが殺した方が手取り早い

1：支給品の反撃を食らわないように警戒。話が通じるなら他の鬼と組むことも考慮する

『人物紹介』

映画チャイルドプレイシリーズに登場する殺人人形。

参戦時期はチャイルドプレイ3で死亡した直後。外見は新品のグッドガイ人形。

元は「湖畔の紋殺魔」と呼ばれたチャールズ・リー・レイという殺人鬼。

逃亡中に警察に銃撃され殺害されるも、魂を移動させるブウードウの秘術を修得していたため、偶々手元にあつたグッドガイ人形に憑依することで生き延び、以後最初に正体を明かしたアンディー少年の体に乗っ取ろうと殺人を繰り返すも失敗、破壊される。

以降、別のグッドガイ人形に憑依する形で幾度か復活するも生身の体を得られることなく敗北している。

人形の体でありながら力量は常人並だが、体格の差で成人に勝てず力負けする描写が多い。赤色のナイフを用いる。

殺人術に長けており、常備しているナイフや得意とした絞殺などで直接殺害する以外にも、周辺にあつた道具や設備を用いての無計画でありながら機転を利かせた殺人も多い。

(桜井悠登場話) どうあがいても絶壁／開き直れば希望

「これ絶対ヤバイパターンだよ……あのときみたいにまた鬼ごっこだよ……」

非常灯の明かりの下で水晶と一緒にしていた紙を読んだ少年、桜井悠は、無人のシアターで膝を抱えていた。

そう、鬼達が子を捕まえておくためのショッピングモール、その出口から一番遠いアミューズメントフロアにあるシアターにである。

そもそも元来の予定されていた鬼ごっこは悠達三人を確実に絶望させ確実に殺し切るために用意されたものだ。それを大規模・大人数・複雑化させコンセプトの段階から大幅に変更したたものがこの鬼ごっこである。

というわけで、主催者の鬼によって嫌がらせのような——というか100%の嫌がらせで初期地点を最も不利な場所にさせられていた。はつきり言って鬼役へのチュートリアル用のである。そのことに本人が気づくはずもないがそれはそれとしてマッハで絶望していた。前回は十六人の子供達がいたのに今回はまさかの一人だからだ。

「何なんだよこのクソゲー……だいたい親つてなんだよなんで死ぬんだよどんな原理だよ……ていうかなんで僕なんだよ……お腹痛い……」

しかも、悠は足が遅い。というか運動が苦手だ。ゲームマーで機械には強いが、そういつた人間が鬼ごっこで主人公になれないことは悠自身一番わかっている。水晶という鬼に対抗できるアイテムは嬉しいが、本音としては鬼の位置がわかるタブレットでもあった方が百倍嬉しかった。

そして何より、悠の勘が状況が最悪であると言っていた。小動物が姿の見えない捕食者を鋭敏に察知するように、悠も迫る『死』を敏感に感じ取る事ができる。それが悠が異変に気づいたにも関わらずひたすらに息を潜めていた理由であった。もし仮にすぐ出ていれば殺

人鬼に刃物やら鈍器やら銃器やらなんだかよくわからない禍々しいアイテムで命を落としていたであろう。それを避け得ることができるとは悠は間違いないこの鬼ごっこに耐え得る能力を持っているのだが、そんなことは本人にとつてなんの慰めにもならなかった。

「……もしかして僕以外も。葵はトイレだったよね。」

幸か不幸か、一緒に映画を見る予定だった宮原葵はここにはいない。自分だけ巻き込まれたのか二人がバラバラに巻き込まれたのか、判断のしようがない——否。

（！イケる！今なら、多分！）

悠の勘が感じ取る脅威が、下がった。

行くか行くまいか、ここが正念場。

【F—05／00時10分】

【桜井悠@絶望鬼ごっこ】

「役」：子

「状態」：健康

「装備」：『水晶』

「道具」：若干のお小遣いなど

「思考・行動」

基本方針：死にたくない。

1：鬼に警戒。

2：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……当企画のパロディ元である『絶望鬼ごっこ』シリーズのキャラで小学六年生。二巻の『くらやみの地獄ショツピングモール』からの参戦。ゲーマーで機械に強いが運動はダメダメ。ただし自分や周囲に迫る命の危機に関しては鋭い勘を發揮し回避する。この企画では今現在二人目のリーダーである。なお男だ。

※二話投稿『(阿部高和登場話)阿部鬼』&『このクソつたれなパーティーに祝福を』

「参ったな、まさかまたクソツタレな催しに付き合うハメになるとはな。」

阿部高和は憤慨した、この理不尽な鬼ごっこに。

公園で出会った青年・道下正樹と公衆便所で気持ち良くやりあった(その際に文字通りクソツタレな催しが行われた大いに楽しんだ)、その帰り道にいきなり拉致られ、いつの間にか目隠しプレイ…かと思いきやパラシュートで落とされ、今に至る。

「確か…俺は親で親は子を鬼から守るんだろ？勝手に攫った上に生き死に掛けた鬼ごっこをやれとか、ふざけやがって…。」

阿部は目隠しされてた時のことを思い返す。

あの時、なにやら鬼ごっここの説明を受けたが、まとめると、鬼ごっこには子、親、鬼の三つの役があり生き残るのは一つの役のみ、その内自分は親で、親は子を守りきりその際子が多ければ親の勝ち、ということだ。

つまり、生き残りを掛けた鬼ごっこという名のデスゲームに自分は巻き込まてしまった、これには阿部高和も憤慨せずにはいられない。

「…愚痴を言っても仕方がねえな、とりあえずまずは他の参加者…親と子を探すか、考えるのはそれからだ。」

そう言って阿部は歩き出す。自分と同じく巻き込まれた親と子を探すために。

「…出来れば男がいいな、気分を切り替えるためにも一発…いや、今はそんな場合じゃないな。」

【??/深夜】

【阿部高和@くそみそテクニク】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：青いツナギ

「道具」：支給品2つ

「思考・行動」

基本方針：親と子を探す

- 1：まずは親と子を探そう、出来れば男がいい
- 2：ノンケだつて食つちまう：場合じゃないな

※原作終了後からの参戦です

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握してます

※支給品2つはまだ未把握です

人物紹介

阿部高和

自動車修理工の男性で、ツナギを袖まくりで着ている。

主人公の「ウホッ！ いい男……」と言う台詞が挙げられるように、容姿はなかなか男前。

ホモセックスの熟練者であり、「俺はノンケでも構わず食つちまう」という台詞の通り、非同性愛者相手でも構わず肉体関係を持つというところ。

道下によればキンタマ（陰茎）がすごく大きい

大胆な性格で、今まで経験の無い特殊なセックスでも物怖じせずに行う。実行する。

ちなみにこの阿部高和は状態表でも書いているように原作からの阿部高和なので、某フリーゲームのようにレポートしたり、掘られると死ぬような人外じみた阿部高和ではなく、至って普通のホモの阿部高和なのであしからず。

乏しい光源も遮られ真っ暗という言葉が相応しい森の中、青いつなぎに身を包んだいい男が一人歩く。足下はなだらかであるものの傾斜斜斜といて、しかし息の一つも切らさずに歩き続ける。彼が目指すのは、間近に見えてきた山頂。幸運にも木にパラシュートが引っ掛かるようなことはなかったものの見知らぬ森の中に落とされ、頭に鬼ごつ

こと共に遭難の危険性が過ぎつていたところに見つけたその唯一の目印目指して、男は歩みを止めることなかったが——一瞬、足を踏み出すことを躊躇った。

「洞窟……違うな、トンネルか。」

彼が見つけたのは、山腹（といつても小島の盆地にある小山のため大した標高ではないが）にぽっかり開いたトンネルであった。森の中には道路などないが、そこだけは明らかに人の手が入っていることがわかる。だから、男は僅かに戸惑った。その不釣り合いな存在は警戒心を男に持たせるには充分なものであった。

「文字通り、鬼が出るか蛇が出るかつてな。」

しかし、男は止まらなかつた。直ぐに歩くスピードを戻し、それどころか真つ直ぐにトンネルへと向かう。この男、元来命知らずなのである。蛮勇とも呼べるそのクソ度胸でずんずんずかずかと奥へ踏み入り、そして目にしたのは。

「桜ヶ島ショッピングモール？」

入り口と思しき自動ドアに書かれた文字を見て、男——阿部高和は素っ頓狂な声を上げた。

「ずいぶん手のこんだことしやがるぜ。無人島つてわけでも無さそうな場所でこんなもん持たせて鬼ごっこさせるとはな。」

自販機で買ったスポーツドリンクを長椅子に座りながら飲みつつ、阿部はデイバックを検めていた。ここは桜ヶ島ショッピングモールの一階入り口付近、目の前にはいかにもな商業施設が広がっている。久々の明かりに目を瞬かせながら、そこへと足を踏み入れる前に支給品を調べることとしたのだ。

出てきたのは、二丁の拳銃であった。説明書も何もないのでそれ以上のことはせいぜいハンドガンということぐらいしかわからないが、改めて自分が危険な領域へと踏み込んでしまったことを実感させるには申し分の無いものであり、護身ということを考えれば過ぎたものである。

ペットボトルを呷る。再び水を飲むと、阿部は目の前にある店内地

図を見た。どうやら地下一階地上五階の六階建ての建物らしい。地上に建物なんか無かつただろ、と不審に思うが、自分が置かれてる状況に比べれば些細なことなので流す。その目はそんな些事より別のところに向いていた。

五階にあるとされるアミューズメントエリア。そこにはゲームセンターらしきものがあるらしい。まるで鬼ごっこには似つかないものであるが……

「子どもが行きそうな場所だな。」

知らず力がこもりペットボトルを押し潰す。吹き出た液体がベタベタと口中を洗う感触も忘れて、阿部はペットボトルをゴミ箱へ投げ捨てると立ち上がった。

山頂の地下というありえない場所に作られたシヨツピングモールに子どもが行きそうな場所。どうにも、悪意が感じられて仕方がない。

だが阿部はそこに行くことの危険性も理解していた。直感的に、そこには罠があると感じている。第一、子が行きそうということは鬼も行きそうということだろう。もしかしたら自分と同じように銃を持つているかもしれない。そうなれば銃など使ったことのない自分には勝ち目は薄い。それに阿部自身人を殺す気などない。救急車も病院も期待できないであろうこの場所で、銃という武器はほいほい使えるものではないのだ。故にまずは武器として使えそうなものを探すことも考えた。しかし。

「このままじゃさ、収まりがつかないんだよ。」

男は度胸。阿部の決断は早かった。

銃をつなぎの中へと隠すとエレベーターに行き、上へのボタンを押す。扉が開くと乗り込み、押したのは五階のボタン。速攻で保護へと向かう。子どもを保護すべきという道徳心と、それを遥かに上回る主催者への憤りが、阿部に危険な道を歩ませている。

万が一にも子どもがいなかったことを祈りながら、阿部は暫し無言で待つ。十数秒ほどして扉は開かれた。

(あつ……これは……死んだな。)

桜井悠が扉を開けた先にいたのは、顔に紙袋を被った怪人だった。ちやうど目の位置には2つの穴が空き、そこからは目と思われる光がこちらを覗いている。首から下はスーツ姿で、性別は不明だが、悠には映画に出てくるスパイのように思えた。

「あの……鬼、ですか……」

「……そうだ、と言ったら。」

「……あの、引き分けにしません？」

「……」

「ほら！出会って数秒で捕まえるとかどうかと思いません僕は思いますやめましょうよ鬼ごっこなんて鬼ごっこなんて馬鹿らしいですよなんで鬼ごっこなんてする必要があるんですか、ね!!」

悠は今までの人生で過去なかったほどに捲し立てながら命乞いをしていた。前は親友達と行動を共にして鬼と一対一など無かったが、今回は開始早々でこれだ。逃げようにも逃げ場は映画館しがなく、逃げ込む前に捕まってしまうだろう。だからできることはこれしかない。

二人の間に沈黙が流れる。たつぷり一分はかかった後、怪人は両手を挙げた。降参のポーズだ。

「僕はL、探偵だ。この鬼ごっこには乗ってないよ。」

Lと名乗った怪人、夜神月は、出会った少年に映画館のシートに座り自己紹介をした。

自分はある事件を追う探偵であり、その最中仲間に裏切られ、銃で撃たれ、気がついたらここにいたと。その説明には嘘も含まれているが大筋は本当であり、一部に本物のLのことをモデルにして話しているため嘘と見抜くことは難しい。顔と名前を明かさないので捜査に支障を出さないためと言ううとで誤魔化した。実際この事はキラを追う刑事達が行っていたことであるためもし突っ込まれたとしても言いくるめる自信はあったのだが、それは杞憂であった。それよりも月と少年が互いに不審に思ったのは、それぞれの常識の齟齬である。

「桜ヶ島……聞いたことがないな。それに君の話だと、僕が撃たれてから数年経っていることになる。」

「桜テレビなんてテレビ局聞いたこと無いです。あと、アマネミサ？って言う人も。」

月がデスノートを手に入れた頃に産まれたという少年は、月の知らない時代の日本について語った。だがそれはある程度時代にズレがあったとしても大きすぎる解離があった。

（どういうことだ、キラの裁きについて何も知らないのか？）

その最大の点が、少年がキラについて何も知らないということだ、言っているんだが、キラは21世紀で最も有名な存在である。そのキラについて全く知らないなど、いくら小学生でもありえるのだろうか。

そして少年もLこと月について困惑していた。風貌からして怪しいが、この男は少なくとも数年間分の記憶喪失のようだ。でないと時間のズレが説明がつかない。鬼も大概訳がわからないが、目の前の人間らしき人も良くわからなかった。

「お互いわからないことが多いな。もし君が良ければ、僕の捜査に協力してくれないか？」

「僕が……ですか？」

「ああ。君の話した鬼ごっこだったっけ？それとこの拉致にはなにか関連があるかもしれない。それに僕にはこれがある。」

月はそう言いながら懐を見せた。そこには刑事が使うような銃が一つあるのが見えた。

「保護する、と言いたいところだが、その鬼とやらの銃がきくかはわからないんで協力という形になるけど……どうする？」

「……えっと、分かりました。お願いします。」

「良く言ってくれた、感謝するよ。あ……なんと呼べば良いかな？偽名で構わないんで教えてほしい。」

「じゃあUって呼んでください。アルファベットのUです。」

「よし、U。早速行こうか。」

月はそう言って立ち上がる。このゲームの鍵となる人材か計算す

る目を、Uこと桜井悠に向けながら。

エレベーターのドアが開く。いい男が出てくる。そして少し距離のあるドアから、紙袋を被った男と子供がシアターから出てくる。

(どつちも大人か……)

それらを見ながら目をギラつかせる人形——『ひとがた』ではなく『にんぎょう』——が一体。映画館のカウンターに装飾のように鎮座することでその身をカモフラージュしているのは、この鬼ごっこで最も小さな『鬼』、チャッキーだ。

じい、と男達を見ながらチャッキーは考える。彼としては、他の鬼と進んで戦う気は全く無い。そんなことをしても自分の生き返りには全く関係が無いからだ。だが困ったことに誰が鬼なのかわからない。支給品のスマートフォンが使えるのはあと30分以上あり、それがどれだけ役に立つかも不透明だ。そして24時間中の1時間を無駄にするというのも地味に痛い。

(青いつなぎのアジア系に紙袋被った変態か……紙袋?)

品定めしていた人形の目が紙袋の怪人——月にとまる。その紙袋は、自分の支給品が入れられていたものと同じであることにチャッキーは気づいた。この紙袋はこのショッピングモールのものであらしいが、あれが鬼に共通して配られているものであれば——

(はははははは！いいぜいいぜ、運が向いてきた！)

チャッキーは声を出さないよう努めて啜う。その顔の口角が上がっていることに気付く者はいない。途中で舌なめずりしながら、殺人鬼は一人の少年をニマニマと見ていた。

【F—05／00時26分】

【阿部高和@くそみそテクニック】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：青いつなぎ、ベレッタM92F@魔法少女まどか☆マギカ、ベレッタM92F@バトル・ロワイアル

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：親と子を探す

- 1：まずは親と子を探そう、出来れば男がいい
- 2：ノンケだつて食つちまう：場合じゃないな

※原作終了後からの参戦です

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握してます

【桜井悠@絶望鬼ごっこ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『水晶』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：死にたくない。

- 1：L（夜神月）と一緒に行動する。
- 2：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

【夜神月@DEATH NOTE】

〔役〕：鬼

〔状態〕：紙袋を頭に被っている

〔装備〕：ソード・カトラス@BLACK LAGOON

〔道具〕：デスノート@DEATH NOTE・スマートフォン（鬼）

@オリジナル・ノートとペン@現地調達の入った四次元つぽい紙袋

〔思考・行動〕

基本方針：まずデスノートの真贋を確かめる。

- 1：Lとして振る舞い、U（桜井悠）と鬼ごっこについて調べる。
- 2：鬼を含んだ他の参加者でノートを試す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を

把握。

※四次元つぽい紙袋は効果を失いました。

※桜井悠の顔を把握しました。

※【ソード・カトラス@BLACK LAGOON】

ヒロイン・レヴィの使う二丁拳銃。これ一つで一枠。銃身の延長等の改造が施されており、取り回しは悪いが集弾性等が向上している。

【チャッキー@チャイルドプレイシリーズ】

【役】：鬼

【状態】：健康、グッドガイ人形の体（新品）

【装備】：ナイフ

【道具】：四次元つぽい紙袋、スマートフォン（鬼）@オリジナル、不明支給品一つ（確認済み）

【思考・行動】

基本方針：子か親の前では人形のふりをして様子見、可能なら不意打ちで殺害する。別に殺さなくても良いらしいが殺した方が手取り早い

1：支給品の反撃を食らわないように警戒。話を通じるなら他の鬼と組むことも考慮する。

第九章 人情紙殺しゲット・ユア・ガン（ヤン、まな、雲雀）

（ヤン・バレンタイン登場話）人情紙頼みザ・ドープ・シヨール

「フン……鬼ごっこねエ!」

深夜。黒づくめのチンピラが、真っ暗な夜道をすいすい歩いて行く。顔には多数のピアス。

反射神経、集中力、第六感、身体能力、特殊能力、耐久力、吸血能力、etc etc。

そして、人間の肉体を軽々と引きちぎる『力』。純粹な暴力。

変身能力はなく、知性も高いわけではないが——下っ端の『吸血鬼』としてはそれなりだ。

彼は、己の理知をもって超常の力を自覚し、好き好んで行使する者。血を吸う『鬼』だ。ゲスで残忍な。

「なんでもいいや。くだらねえ、くだらねえ。俺にとつちやあ、人殺しができて生き血がすすれば、なんでもかまわねーや」

彼は、とつくの昔に地獄に落ちた。だが主催者によって蘇生させられ、この殺人ゲームの舞台に引き出された。

ゲームに勝利すれば、彼は現世に復活することが出来るのだという。慈悲深くも有り難い話だ。彼は喜んでこの話に乗ることにした。

「鬼ごっこだかなんだか知らねーが、子だか親だか知らねーが」

ルールや支給品は確認した。両手には、いい感じの機関銃。特殊能力もない人間を狩るには充分。

子を過半数捕まえるか、皆殺しにすればゲームは勝ちだ。鬼同士で殺し合う必要は皆無。むしろ協力すべきだろう。

「ブツ 殺してやらあ」

【???／深夜】

【ヤン・バレンタイン@HELLSING】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：FN P90 短機関銃 2挺 サプレッサー&スコープ
つき

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、犯し、食らう

1：子を見つけたら狩る。捕まえてもいいらしいが、めんどいし殺す方が楽しいので殺す。親よりは子を優先。

2：支給品などで反撃を受けないよう気はつける。トドメを刺したら血肉を啜る。

3：最高に勃起モンだぜ!!

『人物解説』

漫画『HELLSING』2巻に登場する人造吸血鬼。CV：高木渉（OVA版）。顔中にピアスをつけ、黒づくめのパンクな服装をしたゲスなチンピラ。

身体能力はそれなりに高いが、特殊能力はない。日中に普通に屋外で行動しているので、特に日光に弱いわけでもない。

ナチスの残党組織「ミレニアム」に所属しており、兄ルークとともに銃火器で武装したグルール（ゾンビ）の軍団を率いてヘルシング邸を襲撃。

邸内の私兵部隊を壊滅させるが、執事ウォルターと吸血鬼セラスによってグルールが殲滅され、自身も取り押さえられる。

一瞬の隙を突いて拘束を抜け出し、重要人物が集う円卓会議室に突入するも、一斉射撃を浴びて倒れる。さらに体内に仕掛けられた発火装置により炎上、死亡した。

(雲雀恭弥まな登場話) 咬み殺す

「ワオ。鬼ごっこかい?」

空から舞い落ちてくるビラを見る。そこに書いてある内容は鬼ごっこ——草食動物達を一齐に咬み殺す遊びだ。

親という普通の鬼ごっこにはない役割が追加されているが、咬み殺す対象が増えるだけなのでそれについて雲雀恭弥は特に気にする様子もない。

何故なら彼は並盛中学で最強の男だ。ゴーラ・モス力を瞬殺したことから、裏社会でも通じる強さを誇ることも証明されている。親が何者であろうと、咬み殺す自信はある。

……しかし雲雀は子だ。本人は自分のことを鬼だと考えているが、本来は咬み殺す側ではなくむしろ逃げる側である。

だが普段とは立場が正反対であるがゆえにその誤解に気付けるはずもなく、いつも通りに草食動物を咬み殺す道を選んだ。

ただし鬼と群れるつもりはないし、遭遇することがあれば咬み殺すつもりだ。子や親を狩る役割なのだから、多少の歯応えは期待出来るだろう。雲雀が特別視している赤ん坊……リボーン程の強さがあれば理想的だ。

そして方針も決まった所で早速咬み殺しに行こうとした時、ポケットの中の異物感に気が付いた。

すぐに取り出して説明書を読むと、それは式札というらしい。子が鬼に対抗する上で重要な支給品であるソレを雲雀は——。

「これ、いらない」

何の躊躇もなくポイ捨てした。彼は自分のことを鬼だと思っているし、参加者の死体が何役だろうが興味はない。どんな役割の相手だろうが咬み殺すだけだ。

孤高の浮雲はこの鬼ごっこでも、我が道をいく。

【??/00時06分】

【雲雀恭弥@家庭教師ヒットマンREBORN!】

【役】：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：雲雀のトンファー@家庭教師ヒットマンREBORN!、雲のボンゴレリング@家庭教師ヒットマンREBORN!

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：咬み殺す

1：親、子、鬼を咬み殺す

2：他の鬼と群れるつもりはない

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと誤解している

『人物紹介』

並盛中学校の風紀委員長。並盛中学校だけではなく、並盛町一帯の頂点に立ち、裏社会も牛耳る最強最恐の不良。愛校心が人一倍強く、風紀委員の部下に手配させた校歌を着うたにしたり、常に制服を着ているなどの諸行動が見受けられる。

フウ太の「並盛中ケンカの強さランキング」では1位。好戦的な戦闘マニアで、より強い相手と戦いたいという願望がある。トンファーを使った近距離攻撃を得意としており、トンファーには鉤や棘、玉鎖など様々な仕込みが施されている。また、群れることと束縛を嫌う一匹狼で、他人が群れているところを見ると「弱くて群れる草食動物は嫌い」という理由で襲い掛かる。

まだ匣兵器が登場していないVSヴァリアー編終了後、未来編前からの参戦。

※二話投稿 『犬山まな登場話』 鏡の中から才工才』 & 『人情紙殺しゲット・ユア・ガン』

「……えっ？ な、なにここ？」

道を歩いていると、急に見知らぬところに迷い込んでいた。あたりは薄暗いような、薄明るいような。

空は赤い。夕暮れの色ではなく、雲もなく、火花が時々散る。漂う霧には、不気味な妖気を感じる。

スマホを起動するが、通じない。少女には、こうした雰囲気に見えるがある。

「まさか……妖怪、の、仕業？」

そこら中の壁には、「鬼ごっこ」のルールを知らせる謎の貼り紙。

飛行機が空からばらまいているのは、何かの紙と……あれは、パラシュートだろうか。

「鬼ごっこ。じゃ、じゃあ、私は子、ってこと？ 鬼って、まさか、本物の……？」

背筋が凍る。まさか、ここは地獄なのだろうか。あの『見上げ入道』みたいな術を使う奴の仕業だろうか。

唇を噛む。冗談じゃない。私はまだ中学生だ。地獄へ落ちるような真似をした覚えはない。生きて帰らねば。

歯を噛みしめる。あの心強い妖怪たちは、今はいない。ひよつとしたら駆けつけてくれるかも知れないが……。

「……まず、仲間を探そう！ 子や親の人を！ 私の他にも、巻き込まれた人たちがいるはず！」

??? / 00時04分

【犬山まな@ゲゲゲの鬼太郎（6期）】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：

〔道具〕：スマホ（自分の）、支給品（未確認）

〔思考・行動〕

基本方針：生還する。

1：子や親と合流し、協力する。

2：鬼からは逃げる。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

『人物解説』

アニメ『ゲゲゲの鬼太郎』第6期オリジナルキャラクター。中学1年生の少女。CV：藤井ゆきよ。

中1の女子としては背が高いためか「デカまな」と呼ばれている。胸も割とある方。

人一倍好奇心が強く、行動力があり、頭の回転が速く、心優しく勇気と正義感に溢れている。

気が強くて時々暴力を振るうが、健気で素直で人懐っこく、気に入った相手には犬のように懐く。

家はそれなりに裕福。スマホケースは大仏の顔。謎めいた「偶然力」を持ち、危機に臨んでは運が良い。

第4話終了後あたりから転移。

「……………どうしよう……………」

沖木島北西部、鎌石村。少女は不安げな表情でさまよっていた。

もう20分ほど経つ。パラシュートの落ちたあたりへ幾度か向かったが、誰とも出会えない。すれ違いか。

家々は無人だ。先程まで人が住んでいたような雰囲気すらあるが、電気は切れている。ペットもいない。

食物を漁るのはやめておいた。何が入っているかわからない。スマホのGPS機能も故障中だ。

「スマホが通じれば……。鬼太郎、ねこ姉さん……」

少女、『犬山まな』は、心強い味方たちに祈った。もう何週間も会っていない気がする。



「……お、いたいた。おいしそーな女の子がいるじゃねーかよ」

鬱蒼と木が生い茂り、昼なお暗い森の中。黒づくめのチンピラは、数百メートル先を歩いている少女を発見する。

「んー、どーしよっかなアー。犯してから殺すか、殺してから犯すか。

……半殺しにしてから犯して殺して、死体を犯すってのが一番だなア。オススメ。

あーっと、たぶん処女だろーから、血い吸ってから犯したがいいよね。非処女でもそれはそれで」

ゲスなチンピラは、最高の笑顔を浮かべ、最低極まることを呟く。

彼は吸血鬼『ヤン・バレンタイン』。両手には機関銃、身体能力は超人。怖いものなしのクソ野郎。

貧弱な連中を殺しまくれば現世へ帰還出来るというボーナス付きのデスゲームに、彼は超喜んで乗っている。

風下にまわり、クンクンとにおいを嗅ぐ。芳しい処女のおいだ。よだれが出る。

「……そーいや俺ら、処女や童貞の血い吸っても食屍鬼（グール）にしちやうんだっけか。

ドラキュリーナ増やせりやいいのになア。鬼が増えちやうからダメか。

グールになる前にファック終わらせねえと……。いや、傷口からこーう、血を滴らせて飲めば……」

とにかく、他の鬼に喰われないうちに、彼女をモノにしてしまおう。

なるべく怯えさせて、怖がらせて、失禁させて、命乞いさせて。ヤンはゲスな想像に股ぐらを膨らませた。

◆
BRATATATA!!

「ひッ!？」

目の前の道路に火の線が走り、まなは怯えて後じさる。銃だ。殺意だ。

「あーあー、アローアロー、ジャパニーズ・プリティーガール。ハワユー?　そこ動くなよ」

ガサガサと近くの茂みから音がして、黒づくめの男が姿を現す。両手に機関銃。顔中にピアス。兇悪な面構え。完全に危険人物だ。

「あ……あ……」

まなはガクガクと膝を震わせ、涙目になる。足が動かない。殺される。ひよつとしたら、酷いことをされる。

「たすけ、て」

「英語わっかんねーか。あれ、日本語通じてる?　まいつか、便利だなこりゃ」

男はブツブツと呟き、フラフラとまなの前に歩み出る。げしつとヤクザキックで仰向けに蹴り倒す。

「つうかまあえた」

ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべ、靴の裏で胸の柔らかさを堪能する。

「ウヒヒ、結構発育いいじゃねえか。お嬢ちゃん、おいくつ?　お名前はア?」

「い、いやっ」

男はよだれを垂らし、ぐつ、と顔を近づけ、まなの額に銃口を向ける。開いた口の中には牙。

「今からお嬢ちゃんの血イ吸って、ファック&サヨナラ&ファックするぜ。小便済ませたか?　神様にお祈りは?」

ガタガタ震えて命乞いをする心の準備はOK?　してみせろよ、なあ。小便とお祈りと命乞い。見たいの俺」

「たすつ、いやっ、はひっ」

声が出ない。歯の根が合わない。鬼。鬼ごっこ。本物の鬼、鬼畜、

吸血鬼。

「やあ」

唐突に、横から声がかけられる。ヤンは訝しみ、声の方を見る。まなもそちらを見る。

黒髪の少年。切れ長の目、割と整った顔。白いシャツに黒い制服、学ランを肩にかけている。

学生か。中学生か、高校生か。まなよりは年上に見える。子か、親か。

しかし……目の前で少女がヤバいことになっているのに、彼は平然としていて、笑みさえ浮かべている。

と、いうことは。ヤンはピンと来て呼びかける。

「おう、ガキイ。なんだ？ おめー、鬼か？」

「うん、そうだよ」

少年の答えを聞いて、まなはますます絶望する。救世主ではなかった。ヤンは鼻を鳴らす。

「あー、そりや残念。このメスガキは俺が先に見つけたんだ。先にファックするからよ、後でやらしてヤンよ。殺すのは後でな」

ヤンは銃口を少女の顔からそらし、肩をすくめて笑う。こいつがヤツてる間にグールになっちゃうかもな、と思いつながら。

「た、助けてッ！ 助けて！ 私をこいつから助けて！」

まなは気力を振り絞り、少年に向かって必死で叫ぶ。失禁はしない。命乞いはしない。するものか。

するなら、お祈りだ。鬼でも、妖怪でも、人を助ける連中はいる。彼はどっちだ。

彼女の祈り、願いは……幸運にも、聞き届けられた。

「わかった」

制服の少年が、瞬時に動いた。ヤンの目の前に。ぱん、と音がして機関銃が二つとも宙を舞い、ヤンの胸に衝撃が入る。

「二えっ」

少年の両手には、短い金属の棒。トンファーだ。これで機関銃を弾き飛ばし、同時に前蹴りをヤンの胸に叩き込んだのだ。

意表を突かれたヤンは、まなの上から蹴り飛ばされ……くりりと宙返りして着地した。機関銃は近くの草むらに落下した。

「ツ……ンだア、おめえ!? 鬼だろ? 仲間じゃねえか? 女の子は殺したくぬあーい、とか甘ったりいこと抜かす系か?」

ヤンのこめかみに青筋が走る。どうせ子を皆殺しにすれば済むが、鬼同士で殺し合つて数を減らしても、何の得にもならない。

まなを飛び越えた少年はトンファーを構え、ヤンに向き合う。面白いおもちゃを見つけたような笑顔で。

「僕は鬼だ。だから、君たち全員を咬み殺す。そういうゲームだ」

「イカれてんのか、ガキヤア!? んじゃ俺がおめーブッコロすぞコラ!?!」

激昂したヤンが叫ぶ。下っ端とはいえ吸血鬼の身体能力を持つてすれば、少年はイチコロだろう。ただの人間ならば。

まなは立ち上がり、急いで少年の背後に隠れる。そして、袖を引いて呼びかける。

「あ、ありがとうございます! 逃げましょう!」

少年は袖を引つ張る手を振り払い、肉食獣めいた笑顔を浮かべる。

「僕は逃げない。こいつを咬み殺す。勝手に逃げなよ、草食動物らしく」

【C-03 / 0時30分】

【ヤン・バレンタイン@HELLSING】

【役】：鬼

【状態】：健康、激昂

【装備】：

【道具】：四次元っぽい紙袋（不明支給品3つ、確認済み）

【思考・行動】

基本方針：殺し、犯し、食らう

1：なにこのガキ。ナメてんの？ 殺すよ？

※その他

装備品「FN P90 短機関銃 2挺 サプレッサー&スコープつき」が弾き飛ばされ、近くの草むらに落下。弾丸を多少消費。

生きている人間の血を吸って殺すと、知能のないゾンビのような食屍鬼（グール）に変えてしまう。

【犬山まな@ゲゲゲの鬼太郎（6期）】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、恐怖、困惑

〔装備〕：

〔道具〕：スマホ（自分の）、支給品（未確認）

〔思考・行動〕

基本方針：生還する。子や親と合流し、協力する。鬼からは逃げる。

1：逃げる。できれば、この少年と一緒に。彼が鬼でも構わない。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

【雲雀恭弥@家庭教師ヒットマンREBORN!】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、高揚

〔装備〕：雲雀のトンファー@家庭教師ヒットマンREBORN!、

雲のボンゴレリング@家庭教師ヒットマンREBORN!

〔道具〕：無し（式札を支給されたがポイ捨てした）

〔思考・行動〕

基本方針：親、子、鬼を咬み殺す。他者とは群れない。

1：目の前の男を咬み殺す。少女は勝手に逃げればいい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと誤解している。

第十章 「仲間が増えるよ!!」「やったねたえちゃん
!」（きり丸、おっこ、たえちゃん、流美、金谷）
（摂津のきり丸登場話）絶望鬼ごっこの段

「……ん？　なんだ、どこだこっ」

少年はキョロキョロと、大きな目で見回す。周囲の様子がおかしい。石造りの立派な建物ばかりだ。

空は朝や夕暮れでもなさそうなのに、妙に赤い。あやかしの仕業だろうか。

「ん、懐になんか……入ってる」

違和感を覚え、取り出してみると、大きな水晶だ。うっとりして涎を垂らしかけたが——それを包んでいた紙に、なにか書かれているのを発見した。

「……は？」

参加者？　役？　親？　死亡？　どうも様子がおかしい。いや、周囲がとつくにおかしい。

慌てて見回すと、壁に所狭しと紙が貼られ、文字が書かれている。顔を近づけ、その文面を確認する。

「……地獄か、こっ」

鬼ごっこ、にしては物騒すぎる。この水晶を使うと自壊する上、親の役の人なら殺してしまうらしい。使わずに持った方が良さそうだ。持ち帰れたら持ち帰りたい。

自分はきつと、子の役だろう。こういう時は、情報と味方を集めるに限る。鬼に捕まらずに、この奇妙な街を探索してみよう。

【??／00時04分】

【摂津のきり丸@落第忍者乱太郎／忍たま乱太郎】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：忍者装束、忍具一式

〔道具〕：水晶

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

『人物解説』

漫画『落第忍者乱太郎』／アニメ『忍たま乱太郎』の登場人物。忍術学園一年は組の生徒で図書委員。年齢は10歳。CV：田中真弓。身長140cm、体重34kg。黒髪を後ろで結った前髪の少年。

戦国時代の摂津国出身だが、戦で村を焼かれて天涯孤独となり、日夜アルバイトに勤しみ遅しく生きている。忍術学園の入学金や学費も自前のバイト代で支払っている。

気性は錐のように尖っており、異常なドケチ。銭のことを考えると目が永楽銭の形になり、一度掴んだものは放さず（じゃんけんでもグーしか出さない）、捨てられても取りに行く。

銭の落ちる音を聞けば猛スピードで拾いに行き、数km先の銭を発見し、音や臭いで銭の真贋を判別し、銭の単位がつけば8桁の掛け算も暗算でこなすなどの特技を持つ。

「タダ」「安い」「お金」等の言葉に弱く、「損」「くれ」「払う」等の言葉には拒絶反応を示す。自分がドケチであることを誇っており、命よりも銭が大事。

忍術や体術はなかなかのもの。女装が異様に似合っており、売り子や接客のバイトではよく女装している。商売上手で、彼にかかると一瞬で商品が完売する。

根がシビアで処世術にも長けているが、常に一言多いのが欠点で、たびたび余計な事を口走っては鉄拳制裁を喰らう。教師の土井半助を保護者として同居している。

※二話投稿 『関織子登場話』サイレントヒル・トウ・フレグランズリバー』& 『たえちゃん登場話』やったねたえちゃん!』

スマートフォンである。

「むう……」

本体に特段の変哲は無い。

しかしディスプレイには、「01:00から使用できます」の文字。

「うーん……」

そしてそれを手に難しい顔をしている少女が一人。

紺の着物に見を包み、上を後ろで一つにまとめた、くりくりとした目。

彼女は手の上の機会をじいと見たあと、呟いた。

「落とし物かな……?」

関織子ことおっこは春の屋という温泉旅館に住んでいる。小学生だてらに若おかみをやっているが、これは昨今叫ばれる中小企業や自営業での後継者不足ということもさることながら勢いと勘違いと巡り合わせによるところも大きい。しかし一つ言えることは、今や彼女は知る人ぞ知る業界の新星だということだ。

「……その前に、ここどこだろ……」

そんな彼女だが、残念ながら機械には弱かった。パソコンなどもほとんど触ったことは無い。というか、スマートフォンというものを見たのも今が初めてだ。なにせ彼女の生きていた時代はガラケー全盛期である。干支にして一回りという文化の差がそこにあった。

「空は赤いし変な飛行機がチラシまいてるし……あ、JAだ。えっと、

香川県沖木島——香川県!」

そして彼女が暮らす春の屋は静岡県の熱海。太平洋側である。まかり間違っても四国の瀬戸内海ではない。

情報が理解できず手掛かりを求めて農協の建物に入っていく。今

日もご宿泊があるのだ、迷子になどなっていられない。そしてもし仮にここが香川だったら、いち早く連絡しなくてはおばあちゃん達が心配するだろう。

若おかみの鬼ごっこは、こうして静かに始まった。

【H—06／00時06分】

【関織子@若おかみは小学生！】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：紅水晶

〔思考・行動〕

基本方針：農協（H—06）に行く。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……温泉旅館春の屋の若おかみで小学六年生。生命力に溢れた少女で明るく元気、それでいて年齢以上にしっかり者だが、熱くなると年相応以上に突っ走る上に運と要領が悪い。なのでこんな地獄にうっかり巻き込まれたのだろう。また、霊媒体質である。

なお、4／8よりテレビ東京系で毎週日曜日朝7時15分よりテレビアニメが放送中である。4／15からは各種動画サイトでも配信されるようだ。

「うう……うう……」

少女は泣いていた。

見知らぬ町、赤い空、空を舞うビラ、その全てが怖い。

彼女はずっと一人だった。

言い付け通りに良い子にしていたのに、母は孤児院に置き去りにし

たまま帰ってこない。

それでも寂しくは無かった。

肌身離さず彼女を見守っていた親友は、今も変わらずたえを励ます。

”大丈夫だよたえちゃん！僕が居るじゃないか！”

怖い鬼がやって来ても、僕はずっと一緒に居るよ！”

「うん、そうだね……コロちゃんだけはわたしを見捨てないよね」

”当然じゃないか！ぼくはたえの家族なんだからね”

「うん、うん、そうだね」

不安が薄れたのか、涙を拭うと励ましてくれた親友に笑顔で頷く。

”それに、もうすぐ家族が増えるじゃないか！早くお家に帰ろう”

「そう、そうだね。家に帰ろう」

【??/00時03分】

【たえちゃん@コロちゃん】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：不明

〔道具〕：『コロちゃん』

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りたい

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

参戦時期は引き取られる直前

人物解説……

カワディMAX作の”涙あふれる現代のファンタジー”エロ漫画「コロちゃん」に登場する少女。

「コロちゃん」はコミックス「少女奴隷スクール」に収録されている。タイトル通り18禁に属するので、未成年の人は気になっても大人になるまで我慢しよう。

『コロちゃん』

たえちゃんの友達。精神医学で言うところの「イマジナリーフレンド (Imaginary friend)」という症状がその正体。

実際は何の変鉄もない熊のぬいぐるみ。勿論喋らないし動かない

(佐山流美登場話) 普通の人間

「鬼ごっこ!?! ふざけんなー!」

空から落ちてきたピラを見て、佐山流美は叫ぶ。

野崎春花を殺そうと病院で待ち構えていたはずが、気付けばこんな所に居た

何が何だか分からないが、とりあえずここはどこだと辺りを見回したら空からピラが降ってきた。

それを読んで佐山は怒っていた。

「私は、野崎を殺さなきゃいけないのに!!」

そうじゃなきゃ私が殺される、怯えか狂気か彼女は叫ぶ。

もしこんな叫びを他の誰かが聞いていれば、きっと彼女を危険人物だと思っだろうに。

彼女はそれに気付かない。もし自分の行いが周りに与える影響という物をちゃんと理解できれば、彼女はいじめられることも殺される恐怖におびえることも無かつただろう。

「それになんだよ、この水晶」

佐山はいつの間にかポケットに入っていた水晶と、その説明書きを見る。

そこにはこう書いてある。

『生きている参加者一人を対象に選んで発動する。水晶越しに対象を見ると参加者の役がわかる。この時対象の役が『親』だった場合、対象は死亡する。使用後自壊する』

「何だよこれ……!」

鬼ごっこ、という言葉から想像も出来ないほど物騒な文字と、マンガかアニメみたいな絵空事が詰まった一文に佐山は困惑を隠せない。

だがこの現状は少なくともただ事ではないというのは理解できる。

それに

「私は、小黒妙子だって殺せたんだ! 野崎だろうと他の誰であろう

と——」

佐山は己に自信を持つとうとしている。

殺されるかもしれないという恐怖が彼女を狂気に追い込み、己の人生を狂わせたと称して彼女は自分が慕っていた相手を殺した。

そんな己なら、どんな相手であろうときつとこうできると思っている。

「殺される前に殺してやる」

人間は他人を犠牲にする。そうしないと自分が他人に犠牲にされるから。

だから私は他人を犠牲に生きてやる、クラスメイトであろうとも。見も知らぬ他人であろうとも。

だが彼女は知らない。

ここに居るのは、己の想像を遥かに超える程の狂気を持つ鬼が蔓延っている事を。

そして己の役が、ただ逃げ惑うだけの弱者である子という事を。

【???／00時05分】

【佐山流美@ミスミソウ】

〔役〕：子

〔状態〕：顔に傷、血は止まっている

〔装備〕：包丁

〔道具〕：『水晶』

〔思考・行動〕

基本方針：殺される前に殺してやる

1：自分がどの役か知りたい

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

参戦時期は第18話開始直後。

『人物紹介』

漫画『ミスミソウ』に登場するキャラで中学3年生。

普段は陰気でおとなしいが、逆上すると見境がなくなる性格。

自分勝手な面が強く、自分がいじめから逃れる為なら自分がいじめていた相手の家に放火する程。（ただし火や灯油を持って行ったものの、本当に火をつけるつもりはなく脅すだけの予定だった）

補足

野崎

漫画『ミスミソウ』の主人公、野崎春花の事。

佐山は野崎をいじめており、その延長線上で彼女の家を放火し、彼女の両親は死亡、妹は重傷を負った。

その事実を野崎が知り、復讐として放火に関わった人物を次々殺していく。

佐山はその対象がいつ自分になるのかと怯え、ついに野崎に殺される前に自分が殺すと決意するのだった。

(金谷章吾登場話) 鬼人

「またこの空か。」

ウンザリしたという感情がこもった声で空を見上げるのは黒髪の少年だった。ともすれば険の強いとも思われるであろう切れ長の目で、火花散る赤い空を見る。つい先程までの青い空とは対抗色のそれは誰がどう見ても異常事態であり。それ故少年は何が起こったかこの鬼ごっこの他の子達の中でもいち早く理解した。

(このチラシ、学校の時とほとんど一緒か。また鬼ごっこだろうな。) 雲と呼ぶにはあまりに禍々しい赤い何かが、水面に垂らしたインクのように野放図な陰影をつけている空。

初見ではなんのことかわからない、説明する気があるのかないのかわからないルール説明。

そしていきなり子供を拉致ってくる頭のおかしい発想とそれを可能にする力。

三つ揃えばこれが以前に自分が巻き込まれた、地獄の鬼達の鬼ごっこだろうと想像はついた。

(で、あれなんだ?)

一度経験があるため内心の驚きはともかく物陰にすぐ隠れながら考える。また鬼ごっこに巻き込まれたのはいい、いや良くないが、まあそれは置いておく。なんかポケットに違和感を感じて見てみたら珍妙な紙が入っていたのも、まあ鬼の仕業だろう。だが納得のいかないうものがあつた。

「なんで椅子ごとパラシュートで落としてるんだ……?」

自らの頭上を飛ぶ飛行機が親の仇の如く撒くチラシと一緒に落つことされてくる、椅子にくくりつけられた人影。そのシユールな光景に数秒真顔になる。あの鬼達が考えることはまるでわからないしわかりたいとも別に思わないが、物事には理由があるはずであるという考えからすると、頭の中にハテナマークが浮かばざるを得なかった。

(いや、常識的に考えればあれ親か鬼だろ。だったらとりあえず隠れられる場所を探すか。)

呆けていたのから立ち直ると素早く周囲を見渡す。幸い、少し坂を下ったところに建物があるようだ。鬼ごっこでは身体を休められる場所は重要である。秘密基地にできれば鬼に捕まる危険性は減らせるだろう……あの建物が罠という可能性もあるが。

(行こう。)

聞き耳を立て、足音を忍ばせながら歩き始める。また訳のわからないうことに巻き込まれてしまったがこんなところで止まってはいただけない。

自分には、帰る義務があるのだから。

【H—06／00時02分】

【金谷章吾@絶望鬼ごっこ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『式札』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：絶対に生きて帰る

1：鬼に警戒。

2：自分以外の存在を搜索。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……当企画のパロディ元である『絶望鬼ごっこ』シリーズのキャラで小学六年生。二巻の『くらやみの地獄ショッピングモール』からの参戦。運動会ではリレーの選手に選ばれるなど運動神経は全体的に良い方で、勉強の方もトップクラス。クールな性格で一匹狼気質だが、なぜか子供には懐かれるタイプ。投下時現在、四人目のリピーターである。

「仲間が増えるよ!!」「やったねたえちゃん!」

「木じゃないな、石でもない。何できてんだこの家? あっちはガラスに鉄でできてるし。」

地獄と思しき場所にある街並みを調べていたきり丸は驚き通していた。

なにやら鬼ごっこらしきものをする事になったそうだったので一応警戒しつつ辺りを探っていたのだが、忍者が現役の時代と現代では隔絶の世である。何がってテクノロジーがだ。至る所でふんだんに使われた鉄、素材も使い道もわからない謎の物体、でっかい一枚ガラス、溶岩でできてるのかと疑う道、なにもかもがわけがわからない。思ったら畑やら草やらは自分の知るものと特段変わりがあるように思えなかったりする。地獄とはなんか凄いところなんだなと感心していた。

「くっそお、持って帰れたら一儲け二儲けできそうなんだけどなあ。」
鬼ごっこなぞ秒で頭から消えて考えることの内容はとづくにどうそれらのなんか凄そうなものを持って帰れるかに移っていた。場所が変わろうが何だろうがドケチの血は変わらない、ビジネスチャンスを見過ごすなどという手は無いだ。

しかし悲しいことに、考えれば考えるほどこの鬼ごっこという壁にぶち当たってしまう。彼の中では鬼ごっこはビジネスを行う上での壁として再定義されその解法を考えられていた。

「俺がなんの役なのかわかんないんだよなあ。親もいるってことろことろかよ。」

ことろことろ、ことりことりとも呼ばれるそれは鬼ごっこの一種だ。親の役の後ろで子が列になり、親の妨害をかいくぐって子を捕まえる、というのがそのあらましである。現代ではノーマルな鬼ごっこに加えてケイドロなどにも負けるほどマイナーになってしまったが、その歴史はきり丸が生きた時代からしても下手したら千年近くある由緒ある遊びだ。きり丸はその遊びとの類似性には気づいたものの、しかしそこから先が続かない。

「逃げてるだけじゃダメっていう鬼ごっこか。とりあえず誰か探さないとダメだな……お？」

一先ずの方針を確認したところで、きり丸の目が一つの人影を捉えた。少し距離があった上に暗いため判然としないが、自分より少し上ぐらいの子供が見えた、気がする。

「あれが鬼だったらヤバイよな……」

声を掛けてみるべきだろうか？

(農協？香川？なんだこれ。)

H-06と地図上ではされているエリアにある一際大きな建物の近くで、金谷章吾は周囲を伺う。手はポケットの中の式札に添えられいつでも引き抜けるようにしながらその建物に張られているポスターなどを見ていく。いかにもな畑を背景にしたそれはどう見ても農業関連のものだ。他のポスターや近くの掲示物を見ても、ここが農協であることはどうやら間違いないさそうであった。

(人の気配は……わからないな。出入りも簡単そうだし、中に人がいても……)

気配無く移動しながら正面入り口を捉えられる位置に隠れると、章吾は逡巡した。この鬼ごっこ、どれだけの鬼や子がいるかわかったものではない。中にいるのが子ならばいいが、鬼に待ち伏せされていれば厳しい。夕焼け時のような真っ暗ではないが明るいとは決して言えない環境も相まって足を踏み入れるにはなかなか度胸がいる。

(前は鬼の位置も逃げる場所もわかってたからな。迷子みたいな状況で鬼ごっこってこんなにキツイのか——！)

ためらいながら心の中でグチっていたのが功を奏した。周囲に張り巡らせていた警戒心の網が、建物内部からの物音を捉えた。それはほんの微かな、風や動物が何かを動かしたということも考えられなくもない小さな小さなものではあるが、章吾はそれで中の人物が人間、つまりは子供であると判断をつけた。鬼であれば立てる音がやけに小さい、気がする。自分と同じように巻き込まれた子供が警戒しながら建物を調べているのではないかと想像した。

新たに迷ったのは数瞬、接触することを決断すると音も立てずに入口から中に滑り込み視線を動かし索敵、パツと見て誰もいないのを確認すると人が隠れ潜めそうな死角目がけて移動する。建物の外は鬼の進行ルートが絞り込めないが、中であればそうではない。最低限の安全を確保すると壁に耳をつけて気配を探る。足音はしない。失敗だったか？と思うがこうなれば建物全てを調べるのみだ、ここが安心できる場所かどうかはどのみち調べることは考えていたのだ、などと考えているときであった。

「すみませーん。どなたか居ませんか？」

自分ときほど変わらない年齢と思しき少女の声が上方からした。

「鬼ごっこ……うゝええつと……」

「からかつてるわけでも冗談を言ってるわけでもない。関も見ただろ、あのビラを。この状況は普通じゃない。」

農協で出会った金谷章吾と名乗る少年に真面目な顔をして言われて、関織子ごとおっこは困った。

彼と出会ったのはほんの少し前のことだ。ようやく見つけた人が同じ学年の男子だったことに若干驚いたものの持ち前の明るさで自己紹介をし、お互いに気づけばこの農協の近くにいたという話をしているときに、彼に言われたのだ。「俺たちは鬼ごっこに巻き込まれたかもしれない」と。

「おかしいと思わないのか。俺たちはどっちも香川どころか四国にも住んでない。たった数分でそんなところまで迷子になるわけないだろ。」

「それは……瞬間移動したとか？」

「あんたは今までにワープしたことあんのか？」

「ないけど……でも鬼ごっこなんて、なんで？」

「わからない。鬼がなにを考えてるかなんてな。」

真剣な表情は嘘を言っているようには思えない。それでもおっこは今自分が強制的に鬼ごっこをさせられているなどは思えなかった。どこの世界に若おかみな小学生を香川のよくわかんない島の農

協にワープさせて鬼ごっこをさせようとする人がいるのだろうか。おっこの知る鬼にはよくイタズラをする鬼もいるが、こんな大規模でムチャクチャなことは絶対にしない。そのため少年の言っていることを受け入れられないのだが、さりとて嘘をついているようには見えないので困惑する。

「あの、じゃあ誰がそんなことをしてるの?」

「……鬼、だな……信じられないだろうから信じなくていいけど、俺たちは悪意をもって鬼ごっこをさせられている。」

「その鬼ってどんな鬼なの?大きさとか名前とか。」

「大きさ?まちまちだったな。小さいのはウサギぐらいで大きいのは牛ぐらいで、名前は、確かツノウサギとか牛鬼とか……」

「ツノウサギ……牛鬼……」

「……警告はした。俺は少し外に出てくる。」

「あつ、ちよつと待って!」

教えられた情報と自分が知る鬼とを比べている間の沈黙をどう取られたのかはわからないが、少年は呼び止めるのも聞かずに出て行くとする。慌てて追いかけてながら、おっこは考えた。彼の言うことは信じられるものではないけれど、今ここで行かせてはダメな気がする。なんとなくだが、何か嫌な予感がする。そう思い後ろを着いていきながら引き留めようとするが、しかし少年は止まらない。そして入口まで来てようやく「あの時計が1時になる頃には戻る」とだけ言ったかと思うと本当に出て行ってしまった。

数分ぶりに一人になっておっこは改めて考える。赤い空とかヘンだとは思うけど、それで鬼ごっこって、やろうとすることが下らなすぎないだろうか。あの男の子もたかが鬼ごっこで随分と深刻な顔をしていた。状況が良く飲み込めない。

おっこは遠ざかっていく背中を見た。今からでも追いつこうと思えば追いつける。もつと話を詳しく聞いてみるべきだろうか?だが1時には戻ると言った。なんとなく嫌な予感もするし外にはあまり出たくないし下手に動けば行き違いになることも万に一つはあるかもしれないし、ここで待つべきだろうか?

自分の選択で何かが大きく変わりそうな気がしておっことは赤い空と少年を見比べた。

「まだ近くにいろよ……」

農協で出会った和服の少女、関織子から別れ東へと向かう章吾はそう呟くと周りに目を凝らした。

彼がおっこから別れたのは別に彼女の反応は全く関係ない。単に彼は農協の窓から人影を、ぬいぐるみを片手に彷徨う少女を見つけたからだ。

たいていのゲームは数が多いほうが有利だが鬼ごっこも違う。一人より二人、二人より三人の方ができることは多い。ある程度の人数で武器と作戦があれば、鬼に一矢報いることも不可能とはいき切れない、それが前回の鬼ごっこを経験した章吾の判断であった。

(よし、見つけた。)

幸い少女は割と早く見つかった。農協から集落までは見通しが程々に良かったため、彼女の白い制服と合わせて人を探す気であればそこそこ簡単に見つけられる。それはつまり、鬼からも発見されやすいということだ。章吾はもしもの時のために足を残せるぐらいの早足で歩み寄る。

「だ、誰？」

(年上か?)

少女の方も気づいたのか章吾を足を止めて待つ。そしてある程度近づき誰何してきたところで、章吾はその少女の違和感に気づいた。

遠目からは気づかなかったが少女の体つきは章吾ときほど変わらないものだ。中学生と言っても通る体つきの自分と同じことは年上かと推測する。制服を着ていることから私立の子だと思っただが違つたようだ。それにあの汚いぬいぐるみ。家でぬいぐるみを持っていく時に巻き込まれたのか？

「金谷章吾。桜が島小、って知ってるか？」

「ううん……」

「そうか……そつちは？」

小学校の名前を知らないということは地元の子ではないな、関とい
い今回は日本の色んなところから集めてるのか、などと考えながら少
女が名乗るのを待つ。しかしいつまでたっても応えはない。顔は良
いが険の強いせいで怯えられていることやある事情からどちらの名
前を名乗ればいいのか迷っていることなどつゆ知らない彼は、「あだ
名で良いから教えてくれ」と急かす。

少女は数秒固まって、「たえちゃん」と小さい声で話した。

「たえ……さん。」

「……」

「たえ……」

「……」

「たえ……ちゃん。」

「……うん？」

(本人に向かってちゃんづけで名前呼ぶのつてすつげえ恥ずかしいな
……)

農協に向かってもと来た道に戻りながら章吾はたえちゃんとのコ
ミュニケーションを試みる。縫るような目と怯えのこもった目の両
方で見えてくる彼女は章吾からするとやりにくい相手だ。だが彼はそ
ういう相手に好かれるというイケメンオーラが出ているためたちが
悪い。鬼ごっこが始まって一時間足らずで二人の女子と早くも出
会った彼は、自分が生き残るためにそのオーラと戦っていた。

「……気づいたらここに？」

「うん……親戚の……おじさんの家に入ろうとして、ドアを開けたら、
外に出ちゃって……」

「そうか。俺は、ショッピングモールに向かって歩いてたら空が赤い
ことに気づいて、それで人間を探してた。」

「……」

「あそこに建物があるだろう？そこで女子と会った。そいつも俺たちと
おんなじようにここで迷子になってたらしい。三人で話せば、何か分

かるかもしれない。」

「……うん。」

「……」

「……」

(会話が続かねえ……)

(なにを話せばいいんだろう……)

戦いは困難を極めていた。章吾は元から口がうまい方ではない。むしろ口下手で、心を閉じた女子をリラックスさせるような芸当などできるはずもない。結果、章吾がぼつりぼつりと話し、少女ことたえちゃんがそれに時々相槌を打つに留まっていた。

気まずい時間は本人達の体感時間より短く、数分後には農協の前に到着する。だが章吾は農協を通り過ぎた。たえちゃんは困った顔でチラチラと見るが、章吾は無視する。そして100m程通り過ぎたところで、章吾はたえちゃんに耳打ちした。

「全力で農協まで走れ。俺の名前を出せば中のやつはたぶんお前を信用する。」

突然の言葉に頭にハテナを浮かべるたえちゃんの背中を章吾は叩いた。ビシリ、と掌の形に背中に痛みが走る。それにより鞭の入った馬の如くたえちゃんは走り出した。章吾の行動に混乱し、とにかく動き出せと脳が身体に命令を下したのだ。

章吾はそれを見送った。これでいい。足手まといは消えた。これで鬼ごっこに専念できる。靴紐を結び直した。

「さあ、出てこいよ。」

章吾は建物の影に向かってそう大声で呼び掛けた。

(バレてたっ!?なんで!?)

佐山流美は奥歯を鳴るほど噛み締めながら手にした物干し竿を握る。ステンレス製のそれはすっかり人肌に暖まり、持ち主の殺意に合わせて身を震わせる。それはゆっくりと地面から持ち上げられた。

彼女がこの場所でも人を殺すことを言葉ではなく心で決意したの

は、実は数分前のことだ。殺られる前に殺るとはいつたものの、何も目につくもの近づくもの皆殺しにしようなどとまで考えるほど理性を失ってはいない。まずは自分の役の把握を優先しようと思ひ、民家で物資を調達したあとはヒントを求めて大きな建物を目指そうとしていた。そうして集落と農協どちらに行くかを考え、先にポツンと一つだけある方を調べようと農協に近づいたところで彼女は聞いたのだ。

たえちゃん、と呼びかける声を。

その名前を聞いて、彼女はここに来る前のことが問答無用で思ひ出させられた。彼女が愛し、憎み、殺した女、小黒妙子の愛称を、あの男は確かに言った。暗い上に距離も若干あるのでわからないが、男の方は中学生ぐらいである。そして女の方は、これまた中学生ぐらいで白い制服らしき服装の明るい髪色の女であった。

それで佐山流美は一匹の獣と化した。

本人の精神と赤い空という環境は黒い髪を明るく染まった髪へと変換させ、彼女の前に小黒妙子という人物を浮かび上がらせる。女からの声が聞こえないことと合わせて『たえちゃん』は『小黒妙子』へと完全に置き換えられたのだ。地獄から蘇ったどころか地獄に自分を引きずり込んだたえちゃんは紛れもなく鬼だ。ならばすべきは流美が出て行き鬼を殺す！非常にわかりやすい！たえちゃん死すべし小黒妙子死すべし！！

そして彼女は農協を通り過ぎた二人を先回りして建物の影に潜んだ。武器は現地調達した包丁などの刃物と、物干し竿。取り回しは悪いが物干し竿をメインウェポンとしてチョイスする。鬼には少しでも近づかないに限る。そうして彼女は待っていたのだが、男の方が余計なことをしてたえちゃんを農協の方へ逃してしまった。これではたえちゃんを殺せない。ならどうする？

(だったら男から殺せばいいだろ！)

即断即決。流美は民家から調達したタオルを顔に巻くと突貫した。

摂津のきり丸は少女を見つけ追うか追わぬかで悩み、関織子は金谷

章吾を追うか追わぬか悩む。

金谷章吾と佐山流美は自分が戦う相手が鬼であると互いに判断し戦闘を開始しようとしている。

そしてたえちゃんは一人農協に向かって走る。

五人それぞれの選択が迫られていた。

【H―07／00時15分】

【摂津のきり丸@落第忍者乱太郎／忍たま乱太郎】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：忍者装束、忍具一式

【道具】：水晶

【思考・行動】

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：少女（たえちゃん or 佐山流美 or 別の参加者）に声をかける or かけない

2 多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

【H―06／00時15分】

【関織子@若おかみは小学生！】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『スマートフォン（子）』

【道具】：紅水晶

【思考・行動】

基本方針：家に帰る。

1：章吾くんを追う or 章吾くんの帰りを待つ。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

【G—06／00時30分】

【金谷章吾@絶望鬼ごっこ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『式札』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：絶対に生きて帰る

1：少なくともたえちやんが逃げられるまでは襲ってきた鬼（佐山
流美）に対処。

2：自分以外の存在を搜索。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

【佐山流美@ミスミソウ】

〔役〕：子

〔状態〕：顔に傷、血は止まっている

〔装備〕：物干し竿@現地調達

〔道具〕：包丁、『水晶』

〔思考・行動〕

基本方針：殺される前に殺してやる

1：たえちやんを殺す。

2：そのために目の前の鬼（金谷章吾）を殺す。

3：自分がどの役か知りたい

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

現地調達した物資を近くの物陰に隠しました。内容は後続の書き

手さんにおまかせします。

参戦時期は第18話開始直後。

【たえちゃん@コロちゃん】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：不明

〔道具〕：『コロちゃん』

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りたい

1：逃げる。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

参戦時期は引き取られる直前

第十一章 鬼隠しルング・ワンダリング（稗田、レナ、夜叉猿J r.）

※二話投稿『夜叉猿J r. 登場話』魔猿』 & 『稗田礼二郎登場話』鬼踊り』

「鬼」

この単語を聞いて浮かべるイメージは人によって千差万別。姿形も性格も人の抱いたイメージの分だけ有るだろう。

「鬼」

そしてこの雄が抱いたイメージは父を屠った赤毛の鬼。暴力という概念が形となったかの様な鬼。

——ここにも鬼がいるのか。

機内で何者かが行なって居た説明を思い出す。

——父を殺した鬼の様な連中が、また無意味な殺しを行うのか。

血液ぐ全身わ勢い良く巡り、全身が熱を帯びる。

——許せない。許すわけにはいかない。

鬼は殺すツツ！奴等に一切の自由を許さないツツ！

「ホギョアアアアアアツツ！」

沖木島に野生の咆哮が轟いた。

【??/00時01分】

【夜叉猿J r. @刃牙シリーズ】

【役】：親【状態】

【装備】：無し

【道具】：不明

【思考・行動】

基本方針：鬼は殺す。子を守る。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は

全て未把握。

人物紹介

飛騨国——要するに岐阜の山奥に住む巨大猿。

古来より伝説ちして語られており、戦国時代には挑んできた剣豪を多数返り討ちにした。刃牙シリーズの剣豪の設定からすると凄まじい強さである。

宮本武蔵には負けたけど。

熊を撲殺して食うは鋼鉄製の檻破壊するわと猿の域を超えた強さを持つが、勇次郎すら捕獲する徳川光成傘下の猟友会には勝てなかったよ……。

「ここは……この世か……?」

見上げれば明るくも暗くもない、火花を散らす異様な赤い空。見回せば無人の街。

男は、こうした雰囲気場所に幾度か出くわしたことがある。常世、異界……人ならざるものが棲む領域。

飛行機やパラシュートといった現代的なものが使われているからといって、人間の、少なくとももな人間の仕業とも思えない。

壁に貼られたビラや、上空から飛行機が撒いているビラには、同じ文面。

「鬼ごっこに、子を守る親の役を加えたゲーム、ということか……。しかし、これは……」

聡明な彼は、3つの勝利条件を見て困惑する。鬼と子は分かる。だが、親は。親だけが勝利する時、子はどうなる。

しかも、「死ぬ」「生きている」といった文言。殺し合いか。常識的に考えれば、親と子が揃って生き残り、脱出する方法を考えるとということになる。

とはいえ異常な状況だ。鬼はともあれ、親や子も、果たして自分のような常人だけだろうか。そして制限時間は24時間。グズグズし

てられない。

「ともかく、このデイパックの中身を確認してみるか……」

【??／00時02分】

【稗田礼二郎@妖怪ハンター】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：

【道具】：デイパック（不明支給品2）

【思考・行動】

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：デイパックの中身を確認する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

漫画『妖怪ハンター』シリーズの主人公。元K大考古学教授。いくつかの大学の客員教授をつとめ、著述活動も行っている。

日本中の奇怪な事件の研究を生業としており、若い学生やマスコミからは「妖怪ハンター」というあだ名がつけられている。

瘦躯長身で黒い長髪、黒いスーツに黒ネクタイという出で立ち。ジュリー（沢田研二）に似ていると言われたこともある。

年齢は不詳。1974年から現代まで容姿上は加齢の描写もないが、一応ただの人間。特に妖怪を捕獲・退治しているわけでもない。

奇怪な事件や災害、怪物に遭遇しても冷静に解釈・解説し、不思議と逃げおおせて生き残る。

※二話投稿『(竜宮レナ登場話) 鬼ごっこ編』 & 『鬼隠しルング・ワンダリング』

「はうう……なんだか知らない場所だよ……」

少女は、周囲を見回して困惑する。明らかに自分が元いた場所ではない。赤い空には飛行機が飛び、先ほど拾ったビラをばらまいている。

そればかりか、飛行機からは時々パラシュートで何かが投下されてもいる。目を凝らしたところ、投下されているのは人間のようだ。

おそらくは、「鬼ごっこ」とやらの参加者だろう。自分は拉致された覚えもなければ、パラシュートで投下された覚えもないのだが。

——少なくとも、そんな所業をする連中が開催している「鬼ごっこ」など、ろくなものではないことだけは分かる。異常だ。

「私は、子かな？ それとも親や、鬼なのかな？ かな？」

たぶん、子だろう。いや、鬼かも。親だとしたら、子を守らねばならない。

と、ポケットの中に違和感。説明書と一緒に入っていたのは「お守り」だ。これを鬼にぶつければ「死ぬ」のだという。

死ぬというのが、ルール上死んだことになるだけなのか。それとも実際に死ぬのか。少なくとも自分が鬼ではなさそうさだ。

「……ここは危険だね。どうにかして、帰らなきゃ……」

【??/00時03分】

【竜宮レナ@ひぐらしのなく頃に】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：

【道具】：お守り

【思考・行動】

基本方針：帰還する。

- 1：子や親と合流し、共に脱出を目指す。
- 2：敵対する者には容赦しない。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

『人物解説』

『ひぐらしのなく頃に』シリーズの登場人物。CV：中原麻衣。中学二年生。某県鹿骨市雛見沢村在住。

茶色いボブカットで青い目の少女。本名は「礼奈(れいな)」だが「レナ」と自称している。両親は離婚していて、そのことにトラウマを持つ。

性格は心優しく献身的で善良。ぽわぽわしているが頭の回転は早く、判断力・観察力・直感・洞察力は名探偵レベル。怒ると非常に怖い。

趣味は「かあいいもの」を持ち帰ること。「かあいいもの」を見つけると暴走状態となり、誰にも止められない。「鬼隠し編」から参戦。

今は……何時だ。午前なのか、午後なのか。何月何日の何曜日か。

空は赤いが、暗くも明るくもない。通常の天候でもなく、時々火花が散る。

ただ困惑する他ない。ここはどこだ。親の役を増やした『鬼ごっこ』とは。他の参加者はどこだ。自分の役は。

『お守り』の説明書と周辺のピラ以外に、あまりにも説明が不足している。苛立ちが募る。

いや、周囲を見ればわかる。まともなものではない。ろくなものではない。

付近の民家を覗く。鍵は……かかっている。住人はいない。

一斉に旅行に出たわけでもなからう。殺されたか。いや、死体や血

痕は見当たらない。

強制的に退去させられた、というのが近いか。……鬼ごつこのために？ どういうことだろう。

時計は……止まっている。カレンダーもない。

とにかく、他の参加者を探すしかない。ただの鬼ごっこなら、殺し合いとか暴力沙汰にはならないはずだ。ただの、ならば。

……空から、飛行機から、パラシュートで人間が投下されている。

ひとまず、あれを追って行ってみよう。何かの手がかりになるかも知れない。

◆

「ふーむ……？」

男……『稗田礼二郎』は、自分のデイパックに入っていた二つの物品を前に、首をひねっていた。

ひとつはよく分かる。日本古来の投擲武器『手裏剣』。

鉄製で十字型、鋭利な四つの刃を持ち、うまく命中すればかなりのダメージが与えられるだろう。ナイフ代わりにも使える。

それになんというか、言い知れないパワーを感じる。見ているだけで畏怖と高揚をもたらすような、禍々しい呪術的な力を。

もうひとつは……『鉄球』としか言いようがないものだ。

大きさは掌に乗るほどで、六角形の意匠が表面の二箇所彫り込まれ、その間に六本の溝がある。

何に使うのか。投げて当たれば、それはそれで痛烈だろうが。あるいはなにか魔術的なアイテムかも知れない。

◆

木々を飛び渡り、彼は鬼や人間の臭いを探す。

微かに臭うが、森の中の奇妙な霧が視覚や嗅覚、聴覚を遮り、惑わす。これも鬼の仕業か。

彼は激怒していた。文字こそ読めないが高い知性を持つ彼は、機内で聞かされたこの状況を把握していた。

鬼ごっこ。『鬼』が他者を追い襲う、狩猟の真似事。強者が弱者の、生者が死者の肉を食べて生存する、厳しい自然の理ではなく。

無意味な殺し。遊びでの殺し。親を殺した鬼のような、力試しできない、一方的な蹂躪。生かして捕獲されても、敗北の結果は死。

赦さない。許さない。鬼を、鬼を殺す。そして、この島にバラまかれた弱い者たちを……守護らねばならぬ。

たとえ他者から『鬼』と見られ、夜叉と見られようと。行動で示す！ 自らが『鬼』ではないことをツ！



稗田は、遠くにチラリと見えた少女を追って、森に分け入った。

声をかけようとしたが、すぐに見失ってしまった。何がいるのか分からない現状、あまり大声を出すと危険かもしれない。

途中の標識には『この先、菅原神社』とあった。しばらく山道を進んでいくが、一向に神社も少女も見当たらない。

追い抜いてしまったのだろうか。あるいは、どこかで違う道に踏み込んだのか。

というか、まず民家で何か漁っておけば良かった……人里の方が、情報や他の参加者も多く集まるだろうに。

なぜ自分はフラフラと、彼女を追ってしまったのか。あれはなにか、人を惑わす存在だったのではないか？

稗田はとりとめもない考えに耽りながら、山道をどんどん進んでいく。

次第に霧が深くなって行き……ふと気がつく、彼は大きな建物を発見した。

「ホテル……の廃墟か」

ここは島らしい。高いところから見回せば、全体像が掴めるか。他の人や有用な道具も見つかるとはかもしれない。

そう思い、稗田は廃ホテルの中へ足を踏み入れる……。

【E-04 (ホテル跡) / 00時30分】

【稗田礼二郎@妖怪ハンター】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、やや疲労

〔装備〕：スリケン@ニンジャスレイヤー、ジャイロの鉄球@SBR

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：廃ホテルで他の人や道具、情報を探す。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

◆

同時刻。島の西部、『菅原神社』の境内。木に引つかかっているパラシュートには、人間も荷物もない……。

急いでこの場を離れたのだろうか。まだ近くにいるかも知れない。そう思った時。

霧の漂う森の木々の間から、獣臭が漂ってきた。熊か。イノシシか。いや——なんだ、あれは。

静かに姿を現したそれに、少女『竜宮レナ』は驚愕し、恐怖する。どうする。何が起きている。

身長は、少なくとも2m以上。筋骨隆々で毛むくじやら。人間ではない。大きな猿だ。類人猿？ ゴリラ？ 直立二足歩行する？

大きな牙が生え、見るからに凶暴そうだ。まさか、これが『鬼』だというのか。

落ち着け。とりあえず、熊のようなものだろう。山の中で大型の熊と出会う。極めて危険だ。意思が通じるはずもない。

目が合った。じり、じり、と後じさりする。手元に武器はない。一応『お守り』はあるが、投げて当たるとは思えない。

いきなり走って逃げては危ない。大声も出すべきではない。ゆっくりと、距離を取る……。

やがて、それは——その大猿は、近くに咲いていた花を摘んだ。そして……おずおずと少女に向けて差し出したのだ。

【E-02 (菅原神社) / 00時30分】

【竜宮レナ@ひぐらしのなく頃に】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、困惑

〔装備〕：

〔道具〕：お守り

〔思考・行動〕

基本方針：帰還する。子や親と合流し、共に脱出を目指す。敵対する者には容赦しない。

1：付近にパラシュートで降下したであろう人間を探す。

2：目の前の大猿に困惑。とりあえず敵意はないようだが……？

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

【夜叉猿Jr. @刃牙シリーズ】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：不明（支給品の入ったデイパックはどこかにある）

〔思考・行動〕

基本方針：鬼は殺す。子を守る。

1：目の前の人間は、鬼ではなさそうだ。友好的に接する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。鬼ではないと自認。

人語は多少解するが話せないし、文字の読み書きも出来ない。ノンバーバル・コミュニケーションは可能。

第十二章 真っ赤ネ Magenta (マジエント・マジエント、げんげん、ギーグ)

(ギーグ登場話) 悪の化身なんて物じゃない、悪そのものの

それは、初めはただの霧の様だった。

いや、もしかすれば本当に霧だったのかもしれない。

しかし、その一帯の霧はこの島を覆う霧とは少し違っていった。

まず霧全体に朱の色が広がっていった、ゆっくりと。

次に、その朱がかつた霧はどんどんその濃さを増していった。

朱から赤に、赤から紅に。

そして全体が紅色に変わったとき、霧は形のないもやから、とあるカタチを得ていた。

それは人間の女性の姿の様であり、

あるいは、胎児の様なカタチをしていた。

「アー……キ、モ、チ、イ、イ……」

霧が口を利いた。否、霧は最早霧ではなかった。

既にその辺りの霧という概念は破壊しつくされ、『ギーグ』という名の存在に変わってしまった。

自分が持っていた予言マシンに悪魔と称され、その強大な力によって自我すら破壊してしまい、本当の怪物になり果てた存在。

悪の化身と呼称するのすら憚られる、悪そのもの。

「……ウ、レシイ……キ、モ、チ、イ、イ……」

かつて、とある子供たちの手によって葬られたその正体不明(アンノウン)は、この鬼ごっここの開催によって復活した。

ギーグには鬼ごっここのルールを理解する知能などない。その知能はギーグ自身が破壊してしまって久しい。

故に、ただ破壊するのみ。

ギーグには悪意などない。その悪意を持つための心はギーグ自らが破壊してしまつて久しい。

だが、ギーグの力はギーグだけでなくほかの全てのものを破壊する、最早それだけの存在。

故にギーグは悪そのものなのだ。

「ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン」

ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン

ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン

ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン

狂気の声が辺りに木霊する。

ギーグは他の参加者を追いかけるだろう。

それは鬼ごつこのルールに従つてではない。だが、捕まつた者の最期は決まつている。

斯くして、ここに悪夢は再びの時を迎えたのだ。

【??／深夜】

【ギーグ@MOTHERⅡ】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：無し（支給品は全て破壊済み）

〔思考・行動〕

基本方針：

1：皆殺し（ギーグがそう思っているわけではなく結果的にそうなるのである）

『人物紹介』

マザー2にて地球を侵略するために来訪した宇宙人。

しかし彼の持つ予言マシン「ちえのリング」が彼の敗北を予言。

その内容は「三人の少年と一人の少女によって悪魔は敗れる」というものだった。

そのためギーグはあの手この手で主人公の子供たち一行の冒険の行く手を阻む。

物語終盤で少年一行の前に姿を現した時にはギーグは既に己の存在を、『ギーグ』という宇宙人を破壊してしまっていた。

故に彼の、あるいは彼女の正体を誰もつかむことはできず、ギーグの攻撃も状態異常、雷属性、全体ダメージを内包した、「ことうげきのしようたいがつかめない」攻撃となっている。

悪の化身などではなく、悪そのものと呼ぶのが相応しい怪物。

※二話投稿『(源元気(げんげん)登場話) 鬼ごっこに参加するげんげん』&『プレOP —企画段階編—』

美少女の多いバーチャルYouTuberの中でも際立つ、ガタイのいい青年。

好きなことは筋トレで、体格がいいだけでなく、かなり見事な筋肉の持ち主。

坊主頭で木訥な印象を受ける。上記の通り「源元気」が本名だが後述の動画の都合や、

愛称として呼びやすいためか「げんげん」というハンドルネームの方が広まっている

どうも、げんげんです。

今、何か訳のわからん状況に巻き込まれています。

部屋でYouTubeにあげるための動画撮影しとったんやけど、何時の間にか妙な場所に居たんや。

ずっと部屋に居たのに、一瞬の内にここに居ったんや。本当やで。ほんま、恐ろしいものの片鱗を味わった気分やわ。

空は赤くて火花散つとるし、さつきから飛行機がビラやらパラシユートやらばらまいててもうヤバイやんなあ！

しかも裸のままやし、めっちゃ寒いわ。このままじゃ露出狂として逮捕されてまうちゅー結果になりそうやわ。

つつても警察どころか街中なのに人っ子一人おらんのやけど、もうその時点で異常すぎるって話ですわ。

うーん、このビラの内容だと鬼ごっこをせーちゅー趣旨みたいやわ。何か鬼の他に子とか親とか書いてるけど、俺はどっち何かなあ？

そーいや何時の間にかスマホとか持ってたんやけど、通話はできないみたいやし、どうしたら良いんやろうなコレ。

何のための携帯電話なのかわからんわ！

……まあ、ずっとここに居っても仕方ないし、他に誰か居ないか探してみる事にするわ。

とりあえずカメラは持ち込めたから、この映像は家に帰ったら証拠品として警察とかYouTubeにあげようかと思っています。

充電とかも気になるし、今回はここまでにしたいと思います。
ほな、またな

【???／00時05分】

【源元気（げんげん）@Gengen Channel】

【役】：子

【状態】：健康、全裸

【装備】：『スマートフォン（子）』、ビデオカメラ（充電80%）

【道具】：

【思考・行動】

基本方針：とりあえず人を探す

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

『人物解説』

美少女の多いバーチャルYouTubeの中でも際立つ、ガタイのいい青年。

好きなことは筋トレで、体格がいいだけでなく、かなり見事な筋肉の持ち主。

坊主頭で木訥な印象を受ける。上記の通り「源元気」が本名だが後述の動画の都合や、

愛称として呼びやすいためか「げんげん」というハンドルネームの方が広まっている。

『げんげん初めての動画投稿』からの参戦。なので魔王でもカウボーイでも脳生生命体でも原始人でもない、普通の野球部の高校生。

「おい、荒井。」

「……………」

「おい！聞こえてんだろ！」

「…………俺が、荒井か？」

「新しい名前慣れるよ。前世の記憶ないんだから新しいこと覚えられるだろ。」

そう言いながらカセットコンロの上で器用にフライパンを降るのは、角の生えたウサギだ。「火力が足んねえなあ…………」などとボヤキながらホルモンを炒めていく彼の姿はともすればファンシーだが、しかしここは主催者本拠地・鬼の牢獄の地図に記されていない地下二階にある守衛室だということを考えれば、彼の正体は自ずと明らかであろう。

そう、彼は鬼であった。それも主催者側の鬼だ。

「…………お前よお、デパ地下の食品は役得で食っていいつつたつて食いすぎだろ。もうすぐ鬼ごっこ始まるんだぞ。」

「腹が減ってな…………凄く減ってるんだ、凄く。」

「…………わかったよ。まだ米あったよ…………」

角の生えたウサギことツノウサギは、荒井と呼んだ男——もちろん彼も主催者側の鬼だ——からの殺気とは別の気配にたじろぐと、調理の手を急ぐ。一般に鬼は大食だ。時に共食いしようとするほどに。ましてや徹夜明けともなれば何をしでかすかわかったものではない。ツノウサギは眠気を堪えながら皿に盛り付けを始めた。

元々この建物だけで鬼ごっこをする予定が島一つ使つての鬼ごっこに急遽変更され、ツノウサギと荒井、そして牛頭鬼と馬頭鬼という四体の鬼で準備に当たっていた。島一つを四体である。馬鹿じゃないのか、と荒井は思っている。これは人間の手のように精密な動作が可能でかつ人間並みの知能を持っていてかつ協調性やスケジュールなども考慮した結果でこれなのだが、その結果負担が一極集中していた。なにせ集めた鬼は満足にビラすら貼れずバラまいてしまうよ

うな奴らも混じっている。余りに酷いので親役を落つことすはずの飛行機からついでにビラをバラまいて誤魔化すことにしたほどだ（それが終わったのが小一時間前だ）。設営の現場監督として指示を出して書類をまとめるのが仕事だと思っていたら、デイパックから食糧を抜き取って食っていた鬼の粛清に駆り出されたときなどやるせなさ半端ない。おかげで参加者に均等に配れるものがうまい棒ぐらいしか無くなってしまいなく制限時間を短くしたとかしないとか荒井は聞いていた。

「ほれ、できたぞ。」

「……いただきます。」

特製スタミナ丼をガツつく荒井を見てツノウサギは人心地つく。これで自分が食われることとりあえずないだろう。曲がりなりにもエリート獄卒たる牛頭鬼達と同じ幹部待遇なのだ、ここまでヘルマーチして同僚に喰われるという展開は鬼も爆笑であろう。そう思いながら時計を見れば、11時53分。あと少しで鬼にも角にも鬼ごっこはスタートだ。そして時計の横に貼ってある参加者名簿を何気なく見ていて一人の名前で目が止まった。

——夜叉猿 Jr.

（え？こいつアリなの？夜叉って鬼じゃん、Jrって子じゃん、てか猿じゃん。）

慌ててタブレット（地獄も情報化社会である）でレギュレーションを確認するツノウサギ。少しして小さい手をペタペタさせながら該当する文を認めた。

結論からして、白だ。名前が他の役っぽろうが猿だろうがレギュレーションを満たしているのならセーフだ。責任があるとすればまさかUMAが来るとは思わなかった鬼さんサイドにあらう。それに名前で判断されるなら全国の吉良さんは軒並み鬼だ。だがここで別の人物の問題が発見された。

——源元気

（あーこれあれだ。源義経と小嶋元太の書類の取り違えだ。）

彼は本来なら参戦レギュレーションを満たしていない。要するに

この鬼ごっこをやる必要性は皆無だ。しかし彼のことは既に飛行機に乗せてしまっている。少し考えてツノウサギは決断した。
(殺すか。)

【F-05地下『主催者本部・鬼の牢獄』／前日の23時55分】

【ツノウサギ@絶望鬼ごっこ】

主催者側の鬼。弱い。

【荒井先生@絶望鬼ごっこ】

主催者側の鬼。夜叉猿Jr.よりは弱い。子供を食べるのが好き。

※主催者側の鬼は過労気味なので原則として鬼ごっこに非干渉的です。メタ的に動かなくてはならない状況以外ではあまり動きません。

※げんげんは著作権作品のキャラでは無いのでレギュレーション違反となります。

※よって主催者側の鬼はとりあえずげんげんを殺すことにしました。

※二話投稿『(マジエント・マジエント登場話) 思考停止ラプソディー』&『プレOP ―ゲーム開始編―』

「おっほーやったッ!! 自由だ、オレは自由なんだあ!!」

デラウエア河の底で長い長い時を、”考えることをやめて”過ごしていたマジエントは、鬼ごっこへの参戦という形でとうとう解放された。

パラシュートから飛び出し、二の足でしっかりと地面にたつ。

そうした自由の感触に、忘れていた歓喜が波のように押し寄せてくる。

動ける、走れる、歩ける、踊れる、嗅げる、転がれる!

ひとしきり自由を堪能し、満足したのか脱げてしまったシルクハットを拾いつつ、漫然と周辺を見渡す。

マジエントが投下されたのは見慣れない街並みの区画であった。

町にしては人気のなさがどこか陰気臭いが、それでも嫌になるほど見続けてきた川底よりは断然マシである。

ふと空を見上げると、先程マジエントを投下した飛行機がピラとパラシュートを次々とばらまいていた。

その光景に目を輝かせるマジエント。

「おっおっおっ!アレって噂の『飛行機』ってヤツじゃあねーのか!

俺が川底にいる間にもう完成してたのかよ!

つーかさつきまでオレ、アレに乗ってたのか!文明の利器ってスツゲくなあ!

アレがもうちっと早く出来てればあの日の移動も楽だったのによオ〜」

そう、あの日。遺体の回収のためにウエカピポとジョニイたちを追跡したとき。

マキナツク海溝への移動のときは随分と手間がかかった。寒かったし、死にかけもした。

そこで久しく忘れていた憎しみの感情がマジエントの心を支配した！

「ウエカピポの野郎オ……覚えてやがれ！謙虚にふるまえだとか偉そうな口ききやがって！ 帰ったら速攻でぶっ殺してやる！ あとD i oもだ！ 俺たちは運命の糸で結ばれてんだからよお、とつとと助けにこいよ！」

自分を見捨てた男たちの恨み言を吐きつつ、任務達成のため支給品を漁るのだった。

【???／00時05分】

【マジエント・マジエント@ジヨジヨの奇妙な冒険 SBR】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：???

【道具】：デイパック（不明支給品3）

【思考・行動】

基本方針：鬼ごっこで優勝する。

1：とりあえず『子』を守れば良いのかあ？任せろ！

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

『人物解説』

ヴァレンタイン大統領の配下のスタンド使い。

無敵の能力を持つが、その軽率さと物事を深刻に捉えない性格から、かつてコンビを組んでいたウエカピポに「下っ端のクズ」とまで言わしめた男。

ウエカピポと共に「6th, STAGE」終盤、マキアナック海峡でウエカピポと共にジャイロ達を襲撃する。

スタンド「20th Century BOY」で攻撃を防御し、ウエカピポの「レッキング・ボール」による「左半身失調」で動きを封じたジャイロ達を銃撃する。

自分の撃った弾丸を撃ち返すという策もスタンドで防御し、勝利し

たかに思えたが、油断してスタンドを解除して会話をしているところに、防御して空へ打ち上がった弾丸が落下して頭を貫通し、敗北した。

倒れはしたが死亡しておらず、極寒の地に置き去りにされながらも通りかかったディオに助けられ、生還。

左目を失い、偏頭痛などの障害が残ったが今度はディオの手先としてステイルを襲撃。

ルーシーを警護するためにやって来たウエカピポと対峙する。

置き去りにされた恨みを晴らすため、スタンドで防御した上でダイナマイトを爆発させる自爆作戦を繰り出して追い込んだが、

またもさっさと止どめを刺せばいいのに無駄な会話をした隙に馬車の車軸をワイヤーで結びつけられてデラウエア河に沈められてしまった。

スタンドで防御して溺れはしなかったが、ワイヤーを外すにはスタンドを解除しなければならず、

かといって解除すれば溺れてしまうということになり、最初はディオの助けを待っていたが当然現れるはずもなく、そのうち待つ事と考える事をやめた。参戦時期は考えるのをやめたあとから。

【スタンド能力】

『20th Century BOY』

破壊力 — なし / スピード — C / 射程距離 —
なし / 持続力 — A / 精密動作性 — D / 成長性
— C

昆虫のような頭部と、肩当てのようなパーツとそこからベルトのようなものが伸びる、鎧のようなスタンド。

「身に纏う」タイプのスタンドで、身に纏っている間はあらゆる攻撃を受け流し、完全に防御する。

攻撃エネルギーだけではなく、水中など無酸素状態も防ぐことができる。

つまり、スタンドを身に纏っている間は決して死ぬことはない。

ただし、スタンドを身に纏っている時はマジエント本体は指一本動

かすことはできない。

攻撃は本体が行わなければならない、攻撃するにはその度にスタンドを解除する必要が生じる。

そのため、防御は完璧だが攻撃に転じる隙を狙われると弱い。

100%防御特化の能力という、珍しいスタンド

地獄に再現された沖木島の赤い空を飛ぶ飛行機では現在、親の役である24名への役と勝利条件と制限時間が説明されている。予めツノウサギが収録していたそれが予定通り流れるのを聞いていた牛頭鬼は、コックピットに後付されたタブレットにそのツノウサギからの連絡があることに気づいた。

前回の鬼ごっこでの子供達の脱出を許すという失態により、彼の待遇は馬頭鬼より一段低いものとされている。序列は馬頭鬼>牛頭鬼>ツノウサギ>荒井というあんばいだ。であるからしてこうしてコパイに甘んじている彼は機長権操縦士である馬頭鬼がやらぬ全ての用務を担当していた。主催者本部との通信も彼の担当であり、それへの対処全般も彼の担当である。

牛頭鬼はデカイ身体を慎重に動かしてタブレットを操作し連絡に目を通す。内容は、不正な参加者についてであった。どうやら数名が事務的ミスや調査不足で正しくない役に割り当てられてしまっているらしい。こうした想定外の事態は現場判断で処理——という名の隠蔽——するしかない。

ピ。ピ。ピ。ピ。……

アラームが鳴った。0時丁度だった。

牛頭鬼はコックピットにいくつもあるスイッチのうちの一つを入れた。これで機体のハッチが開き、親達は一定の間隔でパラシュートで降下される。その第一陣として赤いスーツに銀髪の男が落下して

いくのを認めて、牛頭鬼は馬頭鬼に一つ合図を送りコックピットから出た。向かうは先程親達が拘束されていた格納庫だ。

狭い機内を壊さぬよう慎重に歩き、目当ての場所へと着く。この飛行機は島の上空を旋回しているため、一周すれば親一人一人が落とされた場所の上空を通ることとなる。つまり、ある親の落としたタイミングが分かればその時飛び降りればその親の近くに落下できるということである。そして排除すべき親の名前はわかっている。マジエント・マジエントなる超能力者と努突（本名津久井道雄）なる毒殺師だ。他にも子に排除すべき参加者がいたりするが、まずは超能力を自在に操るような存在から殺そうと牛頭鬼はしていた。殺す為の武器もある。王道を征く近接武器たる金棒と、鬼役として用意した男のいた現世から取り寄せた重火器——ハルコンネンⅡ。300kgを超すそれを担ぎ上げると、金棒を片手に椅子に拘束されている彼らを見た。今ここで殺せば隠蔽は困難だ、とにかく一回落とさなくてはならない。だがこの飛行機が一周した後には確実に殺してやる。牛頭鬼はそう決心すると彼らが夜の闇に消えるのを待った。

【島上空／00時00分】

【牛頭鬼@絶望鬼ごっこ】

主催者側の鬼。強いが足の速さは牛並。

【馬頭鬼@絶望鬼ごっこ】

主催者側の鬼。強いが足の速さは馬並み。

※マジエント・マジエント並びに努突は『超能力などの特殊な力が無いもしくは非常に使いにくいあるいはあってもなくても影響が薄い』という参加条件を満たすキャラでは無いのでレギュレーション違反となります。

※よって主催者側の鬼は両名を殺すことにしました。

真つ赤ネ Magenta

「時間だな。で、どれから殺すよ。結構いるぜ」

「処理とか隠蔽とか、調整するとか言い換える。それぐらい状況判断しろ」

「オーライ。じゃ、ここがいい。そろそろ行って来るわ」

「ああ」

島の上空を飛行機が一周し、20数名の親を投下し終わった。馬頭鬼が操縦するこの飛行機は、ひとまず上空から島を監視し、主催者本部と通信する。

一方、彼より一段低い待遇の牛頭鬼は——不正な参加者を密かに排除するため、この飛行機から島へ降下する。武器は金棒と重火器。

確か、『彼』を投下したのはこのあたりからだ。投下からしばらく経ってはいるが、そう遠くへは動いていないはず。

「5、4、3、2、1、ゼロ。牛頭鬼、行きますー!」

◆ 「よしよし……『拳銃』があるぜ……ちよいと小さめだがなあ……グスツ」

島の東側、『無学寺』の寺務所。そこにいるのは、左目を失ったシルクハットの男『マジエント・マジエント』。

彼はデイパックから支給品を取り出し、確認しているところだ。

支給された武器は『レミントン・ダブルデリンジャー』。1866年から1935年まで製造された、彼にも馴染みの深い小型拳銃。

威力は高くなく、射程距離も短く、装弾数は2発しかないが、隠し持つには最適。暗殺向きだ。

とはいえ、今回の任務は暗殺ではない。『鬼ごっこ(tag)』だ。そして自分は『鬼(it)』ではなく、『親』ってやつだ。

鬼に追われる『子』を護り、逃げ延びさせれば勝ち……だっけ？

そんなルールあったか？

生憎、この『マジエント・マジエント』は——脳ミソが少なめだ。

目隠しをされて自分の役、各役の勝利条件、制限時間を説明されたはずだが、

川底からいきなり連れて来られて混乱していた彼は、ちゃんとルールを把握していなかった。

具体的には、このうち『勝利条件と制限時間』を把握していない。

実は親用のルール説明はデイパックスの内ポケットに書かれているが、まだ気づいていない。

代わりと言ってはなんだが、彼には支給品が『3つ』ある。ひとつはデリンジャー、あと2つは……？

「……ツキシッ」

一方その頃。筋肉ムキムキで体格のいい坊主頭の男が、道をさまよって歩いてきた。全裸で。

自分の部屋でYouTubeにあげるための動画撮影をしていたら、いつの間にかここにいた。全裸で。

なんか飛行機に乗っていた気もするが気のせいだろう。

「……どこかで、服、調達せんと……風邪引くわ」

鼻水を啜り上げ、男は震えながら呟く。どうも無人のようだし、どこかの民家に忍び込んで、拝借するしかないか。

後からなんか言われたら、洗って返せばいいだろう。だいたいこの異常事態で、細かいことは言ってもらえない。しかし、うーん。

渡されたスマホは通じない（「01:00から使える」と表示されたまままだ）。飛行機からバラまかれるビラやパラシュート。

空は赤くて火花が散ってて、やれというのは『鬼ごっこ』。しかも自分の役が知らされていない。なんだこれは。

「テレビの企画、なわけないか。犯罪やん。ヤクザのホモビデオの撮影、でもなさそうやし。YouTubeにアップして大丈夫なやつ？」

まさか自分が拉致被害者になるとは思わなかった。個人情報の漏

洩には気をつけていたはずだが。

ビデオカメラの充電は80%ぐらいあるが、鬼ごっこやらがいつまで続くか分からない。充電器があれば、民家で充電出来るだろうか。

それは盗電になる気もするが、この異常事態で細かいことは言ってもらえない。しかし、うーん。

気がつくと、彼は寺の前にいた。立て札には『無学寺』とある。仏なら、僧侶なら、困った人には施しをしてくれよう。

門をくぐり、境内へ。脇の寺務所へ向かう。ドアに鍵はかかっていない。

「お邪魔しま——す……」

そつとドアを開け、小声で挨拶。誰もいないとは思うが、一応。

◆

オイオイ、誰か来やがったぞ。ドアを開けて、挨拶しやがった。不用心なヤローだ。

ま、オレは暗殺者や『鬼』じゃあねーし、このマヌケも『鬼』じゃあねーだろーし。

挨拶してみっか。気の合う奴ならコンビを組んでもいい。裏切るとかナメたマネしやがったら始末してやる。

油断なくデリンジャーを懐に忍ばせ、デイパックを背負い、身を隠す。相手が武装してる恐れもある。

よく確認して、危険じゃあないと判断すれば——
マジエントは目を見張る。こいつは、危険だ。違う意味で。

大柄な東洋人だが、武装はない。丸腰だ。全裸だ。裸の銃を持つどころか、裸でナニを晒していやがる。

妙に顔が濃ゆい。筋肉モリモリマッチョマンの変態だ。撃ち殺した方がいいんじゃないかな。いや、タマが勿体ねえ。

クソ、どうする。たぶん服とか調達に来たんだろうが……こいつが親でも子でも服着ても、あんまり友達になりたかねーぞ。放置しとか。

◆ マジエントも、全裸の男『源元氣(げんげん)』も知らないことだが、何かの手違いで連れて来られた彼らは、主催者から排除対象になってしまっている。特にマジエントだ。

彼の持つスタンド能力『20th Century BOY』は、自分の身に纏って動かなければ、あらゆる攻撃や被害をそらしてしまう。

彼が川底で生き延びたのは、この能力のせいだ。そこそこ強力な超能力。ゆえに、彼は理不尽にも、殺されねばならない。

源元氣の方は、もっと理不尽だ。彼は殺し屋でもなんでもないが、『版權キャラではない』というメタ的な理由で殺される。

さらにメタ的に言うると、彼の場合、殺されるまでが——否、殺されて異世界で雑に復活(?)するまでが持ちネタだ。

異世界転生ならぬ世界観リセマラ。歩く死亡フラグ(自分が)。殺されるためにこの鬼ごっこに参加させられたまである。

もし主催者から逃げ切った上で親や子が勝利しても、彼らは復活出来ないだろう。ここは『地獄』なのだから。

そして、主催者だけではなく、このゲームには『鬼』がいる。殺す気満々の鬼たちが。

◆ 赤い霧のようなものが、移動し、広がっていく。霧、空気、樹木、地面といった概念を破壊しながら。

それは人間の女性の姿の様であり、あるいは、胎児の様なカタチをしていた。

「アー……ヤ、キ、ウ……バ、ツ、ト……」

それは、自我も、知能も、悪意も、心も、全て自ら破壊した、全てを破壊する悪そのもの。

この島の『鬼』の中でも最悪の存在である『ギーグ』は、じわじわと寺へ接近しつつある……。

「ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン」

ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン

ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン

ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン

【F-08 (無学寺) / 00時30分】

【マジエント・マジエント@ジョジョの奇妙な冒険 SBR】

〔役〕：親

〔状態〕：健康 (戦闘で左目を失っており、偏頭痛やよだれ・鼻水を垂れ流す後遺症がある)

〔装備〕：スタンド『20th Century BOY』(動かなければ絶対防御)、レミントン・ダブルデリンジャー@現実

〔道具〕：デイパック (不明支給品2、確認済み)

〔思考・行動〕

基本方針：鬼ごっこで優勝する。

1：とりあえず『子』を守れば良いのかあ？任せろ！

2：なんだこの変態ヤローは。ひとまず放置したがいいな。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

レギュレーション違反に気づいた主催者から追手がかかっている。
優先順位は比較的高い。

【源元気 (げんげん) @Gengen Channel】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、全裸

〔装備〕：『スマートフォン (子)』、ビデオカメラ (充電80%)

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：とりあえず人を探す

1：とりあえず服を探す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

レギュレーション違反に気づいた主催者から追手がかかっている。

【ギীগ@MOTHERⅡ】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：無し（支給品は全て破壊済み）

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し（ギীগがそう思っているわけではなく結果的に
そうなるのである）

第十三章 『秘密と選択』 & 『着信拒否』（阿部さん、葵、桜井悠、月、吉良）
秘密と選択

ショッピングモールに響いたエレベーターの扉が開いたことを知らせるチャイム。

その音に反応したのは四人——二人の『鬼』と、二人の『子』だった。

青いつなぎに身を包んだイイ男——阿部高和が、この鬼ごっこに巻き込まれてから30分程経っていた。

いつの間にか身動きできないように拘束され、目や耳も妙な機械で塞がれ、鬼ごっこをしろと妙なルールを説明され、あとはパラシュートでポイ。渡されたのは自分の名前とさつきされた鬼ごっこのルールがご丁寧に内ポケットに刻まれたデイパック一つ。そしてそのデイパックの中には、二丁の拳銃。それだけが阿部がこの鬼ごっこで得た全てである。

阿部はしががない自動車整備士であり、こんなとんでもないことに巻き込まれる覚えはとんとない。日本かどうかもわからない場所に放り出され、はい鬼ごっこをしてください、なんて言われてもはいそうですかとはならないのだが、先方はそんな阿部の事情は頓着しないようだ。とりあえず森の中に立ち竦んでいても仕方がないので小山に登っていき、途中で見つけたトンネルから謎のショッピングモールに足を踏み入れ、そして——今の状況である。

「悠！」

「良かった、無事みたいで！」

エレベーターを降りたところ誰かの視線を感じたので身構えたところに出てきたのは、小学校の高学年ぐらいの男児と女児。二人は互いの無事を喜んでいてそれは阿部としても喜ばしいものではあるが、目の前で見知らぬ人間が喜んでいるのを黙ってみていられる場合で

はない。なので声をかけようとして、まだ誰かの視線が自分に向けられていることに気づいた。話は、彼にはお構いなしに動いていくのだ。

「で、つまりアンタらも気づいたらここにいたと。」

「はい。私たち、このショッピングモールで映画を見に来たんですけど、気がついたら誰もいなくて。」

「僕もそうです。」

「私も似たようなものです。出張でここに来たらいつの間にか誰もいませんでした。それで人を探していたら、その女の子に会いまして、それから二人で知り合いを探していたんですよ。」

「僕も、目が覚めたらくここにいました。」

「なるほど、全員このショッピングモールに気がついたらいたってわけか。」

阿部はそう言うと、集まった人間を見渡した。ここにいるのは全員で五人。先程の女兒と男児、サラリーマン風の男に、紙袋を被った不審な男、そしてつなぎのいい男である阿部本人。一見するとなんの関連性も見えないこれらの人物でなぜ鬼ごっこをするのか、阿部はふつと息を吐いた。

男児と女兒はここに来る前からの元々の知り合いらしいが、あとの人間は全員初対面である。彼らは阿部がエレベーターを使ったことでそれぞれの存在に気がつき——このとき明らかに不審な男が一人いたが、男児の説得によりとりあえず不審ではあっても危険ではないと判断された——今こうして膝を突き合わせている。その目的は二つ。一つは今自分たちに何が起きているかであり、一つはそれぞれの自己紹介だ。

(さて、まずは——)

1. 鬼ごっこについて話し合う

2. 自己紹介する

——まずは、改めて自己紹介だな。ざっと話を聞いただけで名前も

わからないからな。」

「じゃあ、とりあえず名前ぐらい教え合わないか。お互いなんて呼べばいいのかもわかんないんじゃないからな。俺は阿——」

「待つてくれませんか。」

ひとまず自己紹介を済ませてしまおうとした阿部を遮る声が上がった。紙袋の男からだ。

「ナニ？」

「僕はある事情で名前と顔を明かすことができない。それなのに皆さんの名前だけ聞くのは不誠実かと思ひまして。」

「その紙袋を脱ぐ気はないってことか？」

「そういうことです。だから、まずはそのことについて説明させてほしい。」

「……わかった。アンタらはどうだ？」

「私も構いません。」

「私も。」

「僕も。」

「……だとさ。」

「ありがとう。」

反対意見は無いことを確認して礼を述べると、紙袋の男は話を続けた。

「非常事態なので明かしますが、僕は警察官です。ある事件を調べるために潜入捜査をしているので、皆さんに顔と名前を明かすことができない。最初にそのことを理解してほしいと思います。」

「刑事だあ？ てつきり捕まる側かと思っただぜ。」

「僕だつて好き好んでこんな馬鹿みたいな格好をしているわけじゃないですよ。」

「私も、正直なところ貴方の言葉を信じることは難しいですね。警察官というのなら、警察手帳を持っているはずだ。」

「見せろと言いたいんですか？ 僕もそうしたいですが、潜入捜査中に

警官だとわかるようなものは普通は持ちません。なので皆さんが僕に持つ不信感は、今後の僕の行動で晴らしていこうと思います。それとこれは皆さんへの警告ですが、なるべく顔や名前を明かさないうようにしてください。ああ、あと僕のこととはL……または竜崎と呼んでください。コードネームじゃありませんが、もしこの場所に僕の同僚がいれば、皆さんを保護してくれるはずです。」

(おいおい、またとんでもない奴がいたもんだ。)

Lの発言に困惑する阿部は他の三人の顔を見た。女兒とサラリーマンは今の阿部がしているのと同じようななんとも言えない顔だが、男児は事前にLから話を聞いていたためか緊張はしていても理解を示しているようだ。もう少しLから話を聞き出してみるか、そう考えていると「少しいいかな？」とサラリーマンから声が上がった。

「潜入捜査で素性が明かせないというのはわかるが、それなら最初からただの警察官として我々に接触すれば良かったのではないかな？」

「ん、確かにな。」

阿部が聞こうとしたことをサラリーマンが聞いた。どうやら他の人間も同じようなことが気になったらしい。

「そういうわけにはいかない理由があったので。」

「理由、ですか。」

「ええ。皆さんにも素性を隠すようにしてもらいたいということや、僕の警察手帳が盗まれているということ、他にもありますが……皆さんにはたぶん信じてもらえないことだと思いますし、僕自身整理がしていないので、少ししてから説明したいんです。」

Lはそれきり黙った。これ以上話す気は無いということか。

他の人間もそれを察してかける言葉が無くなる。そして場に沈黙が広がるかといったところで、「じゃあ、次は」と男児が声を上げた。「僕は、えーっと、Uです。こっちの、えーっと……」

「それじゃあ、私はOで。私たちは、友達三人でこのショッピングモールにある映画館に来たんです。約束の時間より早く着いたんで、チラシとか見ながらUと二人でもう一人が来るのを待ってたら、いつの間

にか誰もいなくなってたんです。それで私はその……サラリーマンの人とあつちのゲームのあるあたりで十分ぐらい前に会って。」

「僕もそんな感じでLさんと映画館で会いました。」

Uと名乗った男児とOと名乗った女兒はそう話した。どうやらこの二人は自分からこのショッピングモールに来たらしい。ということはこの島の住人ということだろうか？桜が島という名前がついているあたり、ここは島なのだろうか？

(ゆさぶってみるか。)

「なるほど。そうだ、二人は何か気づいたこととかはあるか？人がいなくなっていたこと以外でだ。」

「……映画館の受付のところに、CMが流れてるテレビがありますよね？あそこに鬼ごっこのルールみたいなのが書いてあるのを見ました。」

「……女子トイレの窓から外を見たら土で埋まっていました。ここは5階だから少なくとも10mはあるはずで、土砂崩れが起こるような場所でもないのにです。」

「外はそんなことに？」

「さつきは言いそびれてすいません。私も自分で自分が信じられなくて……狐に化かされたかもって。」

「いや、別に君を責める気はないさ。手早く自己紹介を済ましてみんなを確認しに行こう。さて、では次は私が。私は、そうですね、Kとでも読んでください。ここには出張で来まして、突然強い目眩を感じたと思ったら、同僚も利用者もスタッフも誰もいなくなっていました。それでそのOさんと出会って、そこからはずっと一緒です。それでは——貴方が最後ですね。」

言葉通り手早く自己紹介をしたサラリーマンことKが阿部に水を向けた。この男もまた、U達と一緒にここに自分から来たということか。

(……コイツら、みんな元からこのショッピングモールにいたのか？そういうあの紙袋はそこら辺のこと話してないな。これが鬼ごっこの役になんか関係あるってことなのか？)

阿部は考える。何かがおかしい。コイツらと出会ってからどこか違和感を感じる。何か話すべきことが話されていない。それは——
(——そもそも、なんでこいつら鬼ごつこのことに触れないんだ?)
——それは誰一人鬼ごつこについて話していないことだ。Uが鬼ごつこのルールを見たといっただけで、自分達が巻き込まれているなどまるで知らぬ素振りなのだ。
(ああ、クソツ！頭がこんがらがって来たぜ……俺も元からここにいたことにするか?それとも……)
皆の視線が阿部に集まる。ここで選択を間違えると命取りになる。そんな予感がしながら、口を開いた。

「俺は——」

【F—05／00時32分】

【阿部高和@くそみそテクニック】

「役」：親

「状態」：健康

「装備」：青いツナギ、ベレッタM92F@魔法少女まどか☆マギカ、ベレッタM92F@バトル・ロワイアル

「道具」：デイパック

「思考・行動」

基本方針：親と子を探す

1：鬼ごつこの参加者だと伝えるor自分もショッピングモールにいたことにするor……?

2：Lの警告は……ま、話半分で聞いておくか。

※原作終了後からの参戦です

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握しています

「……映画館の受付のところに、CMが流れてるテレビがありますよね?あそこに鬼ごつこのルールみたいなのが書いてあるのを見ました。」

(私たちが前に鬼ごっこをしたことは今は言わないつもり?悠。)

○こと宮原葵は、Uこと桜井悠を凝視する。視線を返しながら軽く頷いたのを見て、葵もアイコンタクトを送った。

「……女子トイレの窓から外を見たら土で埋まってました。ここは5階だから少なくとも10mはあるはずで、土砂崩れが起こるような場所でもないのにです。」

(話すならタイムミングを考えるべきね。)

悠の意を酌むと、葵は鬼ごっこについては触れずに済ませた。

今の状況はほぼ確実にあの時と同じ鬼ごっこだ。だがしかし、迂闊に鬼ごっこだと言えば第一印象から嘘つきだと思われかねない。親や警官でもそうなのだ、見知らぬ人に簡単に話せるようなことではない。

それに、今まで鬼らしきものを見てもいない。もしかしたら杞憂かもしれないのだ。話すにしてももう少し後が良いだろう。

「外はそんなことにな?」

「さつきは言いそびれてすみません。私も自分で自分が信じられなくて……狐に化かされたかもって。」

(今はこれで良い……よね?)

【F—05／00時32分】

【宮原葵@絶望鬼ごっこ】

「役」：子

「状態」：爆弾化

「装備」：『水晶』

「道具」：若干のお小遣いなど

「思考・行動」

基本方針：死にたくない。

1：鬼ごっこについて黙っておくor鬼ごっこについて話す。

2：大翔が巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は

全て未把握。

吉良吉影のキラークイーンによって爆弾化しました。

【桜井悠@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『水晶』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：死にたくない。

1：鬼ごっこについて黙っておくor鬼ごっこについて話す。

2：大翔が巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

「ええ。皆さんにも素性を隠すようにしてもらいたいということや、僕の警察手帳が盗まれているということ、他にもありますが……皆さんにはたぶん信じてもらえないことだと思いますし、僕自身整理がついていないので、少ししてから説明したいんです。」

（我ながら無茶な説明だな。この鬼ごっこにキラについてのどの程度知られているかわからなかったとはいえ、臆病が過ぎたか。）

自分への不信感を感じながらもLこと夜神月は話が自分から離れたことで緊張を緩めた。

デスノート対策で顔と名前を隠すためとはいえかなり無茶のある説明になってしまった。今の状況を考えればこの段階で殺しにかかれてもおかしくはなかったことを考えると、なんとか切り抜けることに成功したのは僥倖である。しかし本番はここからだ。皆鬼ごっこについて話していないが、これは役によって今の状況についての理解に差があるからなのか、それともこちらに合わせたのか、それをこれから判断をつけなければならぬ。UとOが鬼ごっこが始まる前からの知り合いだとするとこの二人は同じ役の可能性が高いが、それ

も確定ではない。まずは誰が『鬼』かの判断をつけることが肝要である。

【F—05／00時32分】

【夜神月@DEATH NOTE】

【役】：鬼

【状態】：紙袋を頭に被っている

【装備】：ソード・カトラス@BLACK LAGOON

【道具】：デスノート@DEATH NOTE・スマートフォン（鬼）

@オリジナル・ノートとペン@現地調達の入った四次元つぼい紙袋

【思考・行動】

基本方針：まずデスノートの真贋を確かめる。

1：Lとして振る舞い、皆と鬼ごっこについて調べる。

2：鬼を含んだ他の参加者でノートを試す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

※四次元つぼい紙袋は効果を失いました。

※桜井悠・宮原葵・阿部高和の顔を把握しました。

【吉良吉影@ジヨジヨの奇妙な冒険】

【役】：鬼

【状態】：健康、姿は川尻浩作

【装備】：

【道具】：四次元つぼい紙袋、不明支給品3つ（うち一つはスマートフォン（鬼）@オリジナル）

【思考・行動】

基本方針：親の振りをしながら鬼以外を始末する

1：まずはこのメンバーと同行する。

2：参加者の役を見分ける方法を考える。

※その他

バイツァ・ダストは杜王町でないことと本人が能力を把握しきって

いないことで使用不可。
宮原葵をキラークイーンで爆弾化しました。

着信拒否

(一時か。こちらの時計、もとい携帯ではそうなっているが、実際の時刻だとは鵜呑みにできないな。デスノートはこの時計の時間を基準にするのかどうか確かめておく必要がある。だが今はその前に。)

「Kさん、どうされました？ 顔色が悪いようですが。」

「いや……少し頭痛がしまして……」

「気絶から目覚めたばかりで少し動き回りすぎたのかもしれないですね。たしかドラッグストアがあったはずですが、合流したら探してみましよう。」

「お気遣いありがとうございます……」

Lこと夜神月はそう言つてKこと吉良吉影を心配してみせる。その顔に浮かぶのは、吉良とは対象的な安堵の表情だがもちろんそれを吉良に見せることはない。

(まさか『鬼』全員の顔と名前が公開されるチャットアプリがあるとは……これで誰が『鬼』かはわかったが、このスマホが『鬼』以外の手に渡った時のことを考えるのが怖いぞ。馬鹿な真似をしてでも顔を隠しておいたのは不幸中の幸いとも言うべきかな。彼みたいに無様な顔をしたくはない。)

(クソっクソっクソっ！ なんでこんなものを配った！ これじゃあ私が『鬼』だと隠しようがない！)

二人の『鬼』は程度に差があれど苦い顔をする。月は微かに、吉良は目に見えて。その原因は二人がそれぞれに隠し持つスマホ。『鬼』全員の顔と名前を共有するそれは、同士討ちを避け連携をとれるようにするための重要なアイテムではあるが、人の波に隠れる二人にとっては情報漏洩という観点からして天敵である。一応『鬼』と明言されているというわけではないものの、どう見ても殺人鬼や人外だと思われる者も含めて12人、人数のことも考えるとこれだけで判断材料には充分であろう。

そしてこのスマホに関してはまだ一つ問題がある。それは。

(しかし、まだ誰も書き込まないな。)

「俺は——気づいたときには椅子に縛り付けられて変な鬼ごっこルールを聞かされたあと、飛行機から落つことされてたな……そんな顔するなよ、信じられないだろうがこいつはマジだ。」

阿部高和はそうハツキリと言った。彼が選んだのは、駆け引き無しの情報開示だった。

悩んでいたのは僅かな間だった。もともとごちゃごちゃした駆け引きは好きではない、それが面倒事となれば尚更だ。

「アンタらの言いたいこともわかるが、とりあえずこのルールを見てくれ。こいつを見てどう思う?」

「すぐ……(わかりみが) 大きいです。」

言葉に続けて彼が見せたのはデイパックの内側に記されたルール。それを見てその場の人間に困惑とそれ以上の感情が広まる。その感情の種類は役によって違ったが全員が同じ結論に達した。「前提が変わった」と。

そして結論への対応はワテンポ『子』の方が早かった。

「実は私たちも話したいことがあるんです。鬼ごっこについて。」

(一歩遅れたか……)

(何を話す気だ?)

アイコンタクトで桜井悠と示し合わせた宮原葵は、先ほどまでの考えを捨てて積極的に情報を公開することにして口を開く。それは阿部さんによりルールを知らされたからではなくルールの存在が知られていることを知ったからだ。これがあの鬼ごっこであることを理解してもらうには相手にも鬼ごっこについて知ってもらう必要がある、今までは自分たち以外に知っている人間がいなさそうだったので黙っていたが、こうなったら一気に喋ってしまったほうが良い。隠していても自分たちの利益になる段階は過ぎたと踏んだ。

一拍置いて再び葵は悠と視線を交わす。こういう大人相手に話す時は葵の方が的を得る受け答えができるため葵が話すのが良い、そう言葉にはせず二人は判断すると、葵は数秒目をつむり、そして言うべきことを纏めると話を再開した。

「実は私とUの二人は、前にも似たような経験があるんです。前回は運動会の日に児童十六人と教師一人が鬼ごっこをさせられて、それで……」

「体育の先生が鬼に殺されたんです。」

「……そう、体育教師が牛の頭をした鬼に殺されました。それと、鬼ごっこが終わったあと、私たちは失踪したことになって、先生のこととはみんな「最初からそんな人いなかった」って言って……信じてもらえないかもしれないけれど、あの時と同じかもしれないかなって思うんです。」

「なるほど、よく話してくれたな……しっかし、どうしたもんか……」
リピーターと言わんばかりのカミングアウトに青年たちは顔を見合わせた。『鬼』にせよ『親』にせよ、この鬼ごっこに前があると聞いている者はいない。

（問題は、他の『子』もそうであるかだな。二人だけが特別なのか、全員に共通するのか、あるいは一部の人間だけなのか。そもそも彼らが嘘を言っている可能性もある。デスノートで喋らせるか？）

（おそらくこの二人が体験したのはスタンドによる攻撃だろう。『バイツァ・ダスト』のような認識に作用するタイプか。今の私の状況もあるいは……）

（拉致られたと思ったらオカルトか？やれやれ、コイツは想像できないぐらい大事ならしいな。）

「二人とも、辛いとは思いますがもう少し詳しく聞かせてくれないか。」
「わかりました。」

それぞれに考えるところは別々にあれど話を聞くことに異論はない。自分たちの話に聞く耳を持たれたことに葵と悠も緊張を弛めると、先ほどより少し大きな声で葵が話を続けた。

「私たちはその日運動会の準備の為に学校に早く来ていました。六年生の各クラスから選ばれた、大道具係十六人です。」

「気がついたら私たちは教室の机で眠っていました。黒板にはあそこのルールと似たようなことが書かれて、窓から見える空が赤かったのと、学校の敷地の外が霧で見えなくなってたのを覚えています。」

「教室の時計を見ると九時を過ぎていたので、たぶん二時間近くは意識が無かったと思います。それで、とりあえず先生に指示をもらおうって感じになって、伊藤——児童が一人職員室に走っていったんです。そうしたら……」

「そうしたら、悲鳴が聞こえてきました。教室にあつたタブレットを見ると、学校の地図があつて、そこには児童らしいアイコンと鬼という字のアイコンがありました。それで職員室の鬼のアイコンが変形して、児童のアイコンに噛みついてたんです。」

「何が起こったのかわからなくて、しばらく私たちは教室でじっとしていました。何か良くないことが起こってるのはわかったんだけど、確かめに行く勇気もなくて。」

「そうして教室にいたら、少ししてウサギみたいな生き物が入ってきました。それが、それが鬼だったんです。」

ほぼ淀み無く話し終わると葵は半秒ほど視線を悠と交わして「続きを話してもいいですか？」と問いかける。それを止めたのは月だった。

「その前に、いくつか質問をさせてもらうよ。君は最初に十六人の児童が鬼ごっこにさせられたと言った。その十六人について話してもらえないか。」

「……名前は、すみません。勝手に言うのは良くないと思うんで、それ以外なら。私たち六年二組からは男子二人と女子二人、一組からは……男子が三人で……三組は……たしか、女子が一人……二人……？」

「あ、〇、もしかしてだけど……」

「?どうしたんだい。」

「その……思い出せないんです。誰がいたのか。何人かの印象に残ってる子以外が全然……」

「僕もそうです。あんなことがあつたのに、半分以上思い出せなくて、まるで、夢の中であつたことみたいにあやふやなんです。」

「正直信じられないな。ま、俺も妙なことに巻き込まれたばつかなんで嘘を言つてるとは思わないけれどな。」

阿部さんの言葉を最後に一度その場に沈黙が訪れる。その言葉通り大人たちにとっては子供たちの話には信じがたい。それは鵜呑みにできないという意味で嘘を言っているとは思っていないが信用できないことになり変わりない。各々が得た情報は予想だにしないもの。微かな疑心が膨れようとしたところで口を開いたのは、再び月であった。

「子供に隠し事を明かされて大人が黙っているのもどうかと思うんですが聞いてもらいたいんですが……おそらくこれから僕が言うことは彼らが言ったことと同じか、あるいはそれ以上に荒唐無稽かもしれないんです。だが今言っておかないと後々問題になるかもしれないので、信じられないかもしれないが本気で聞いてほしいと思います。」

「そんなに固くならなくてもいいさ、刑事さん。俺もこいつらも冗談みたいなことを話したんだ。で、その荒唐無稽な話ってのは？」

「なら言わせてもらいますが……僕はここに来る直前に臨死体験をしている。あるいはこう言うべきですかね、『死んだかもしれない』と。僕がここに来る前までの記憶で最後に憶えているのは、銃撃戦で撃たれて意識が朦朧としていた、というものです……あまりに突拍子もないし、幽霊か何かだと思われて『鬼』だと誤解されなくなかったんで黙っていました。話しておくべきだと思います。」

（他の人間が秘密を明かしたのに黙っているとただでさえ低い信用が損なわれるからな。他の参加者にも同様の経緯の人間がいるか確かめておくためにも、万が一デスノートが通じない可能性を考えても、ここはある程度正直に話しておくか。）

（……ここは私も便乗しておくべきか？）

「実は……私もなんです。さっきはここに出張に来たと言っていますが、本当はここに来る前に怪奇現象というか、心霊現象にあって。自分の身に何が起こったかわからず、憶測で話してしまいました。Aさんも、ここに来る前は、なにか変わったことはありませんでしたか？」

「あん？……ここに来る前か。俺は——」

——やらないか

——俺はノンケだつてかまわないで食っちゃまう人間なんだぜ

——俺のケツの中でシヨンベンしろ

——ところで俺のキンタマを見てくれ　こいつをどう思う？

——今度はウンコオ？　お前俺をバキュームカーとまちがえてん

じゃねえのか!?

(言えねえ。)

男たるものまさか小学生を前にして公園の公衆便所でスカトロホモセックスをしていたとは言い出すわけにもいかず、阿部さんはこの鬼ごっこに参加して以来の深刻な表情を浮かべた。こんなところでカミングアウトを強いられるとは。

「どうしました?」

「いや、ああ、少し考えててな。記憶は多少曖昧だが、死にかけた覚えはないはずだ。」

「そうですねか……では二人にはあらためてその鬼ごっこについて話してもらいたいんですが、その前に我々はこの建物の出入り口を抑えるべきだと思うんです。移動しましょう。」

「そりやどういう意味だ?」

「この建物がルールに記された鬼の牢獄である可能性があるからです。もちろんあれを完全に信じたわけではないですが、しかし無視はできない。ここが牢獄だと気づかず、『子』が集まってそれが原因で何か怒らないとも限らないですし、避けられるリスクを避けておくべきでしょう。それに避難経路を把握することも大事ですから。」

(しばらくは信用を得るために得点稼ぎだな。)

(この男、あまり『鬼』らしくない動きだ……『親』か? 反対しておこう。)

「このショッピングモールは一階にしか出入り口はないですよ。僕達ならだいたいのもつくりもわかります。」

「しかし、もし鬼ごっこなら迂闊に移動するのは危険ではないですか? この人数では隠密行動というのも難しいと思います。」

「では、チームを二つに分けましょう。本来なら戦力を分散しますが、今の我々に武器はありませんし、戦わずに逃げるなら数の少ないほうがいい。一網打尽にされて共有した情報が失われるのは各個撃破されるより避けなければならぬことです。」

「あの、確かに一度で全滅するのはマズイとは思いますが、それでもバラバラになるのは『鬼』に見つかりやすくなるんじゃないかなーって。」

「私もそう思います。リスクを分散しようとしてかえってリスクを大きくすることになると思います。」

(さすがにそこまで馬鹿じゃないか。)

「確かにね。だから言ってしまうえば、片方のグループを囮にすることが前提になっている。そして囮役は僕達大人が行く。大人と子供でグループを分けて、まず僕達がエスカレーターで先行して各階を偵察する。出入り口まで行って安全だとわかったら三人のうちの誰かがエレベーターで上がり君達を迎えに行く。この建物に『鬼』がいないか簡単にでも確認できれば、ここをセーフハウス……拠点にできるだろう。というわけで、Aさん、Kさん、二人には僕についてきてほしい。」

「断りにくいこと言ってくれるじゃないの。俺はいいぜ。」

「フウ………わかった。腹を括ろう。私も同行しよう。」

(起爆できる射程距離から外れてしまう、宮原の爆弾は解除しておくか。そして……『キラークイーン』……Lを爆弾に……)

それぞれに腹の中を明かさなまま話は進む。彼らが会議を終えて動き出したのはそれから数分後のことだった。

(これが使えるようになって数分、まだ誰も書き込まないな。様子を見ていいのか？あるいはK……吉良吉影のように他の人間と同行していてこれを使えないでいるか。いや、そもそもこのアカウントが信用できるのか？明らかに人間でないのが何人かいるぞ。)

(高性能な携帯らしいが、動きがないな。しばらくすれば誰か書き込むだろう。まあ、私はやらないが。)

(あの二人とも『鬼』っぽいのになんで使わねえんだよ、早く書き込めよ。てか人形の手じやこれ反応しねえのかよ！)

それぞれが互いにそれとなく死角に回り、互いの視線を避ける月と吉良、そして彼らの会話を全て聞き追いかけて先回りしてきたチャツキーの『鬼』三人は、それぞれスマホを手にして画面を注視していた。そもそも月が別行動を提案したのはスマホを確認する隙を作るためでもありそのかいあってこうして彼らは文明の利器を使える機会を得たのだが一つ問題があった。誰も書き込まないのだ。

この時、『鬼』十二人のうち鬼の牢獄の三人を除くと、ヤンとミカは他の役と行動中、ペニーワイズとジェイソンと墮姫とアルシアとD I Oは戦闘やその前後、ギーグはそもそもスマホを消し飛ばしていて、残るは主権への反逆を企てるD r. ヘルだけ。つまり十二人中四人しか使えないという状況である。そして誰も予想していなかった事態だが、チャツキーは人形であるためスマホが反応せず、この時スマホが使えるのは実質三人だけである。そして吉良にこのスマホで誰かと会話をする気は薄く、月も危険性を警戒して自分から話す気はない。つまり何が起こるかというところ。

((なかなか誰も書き込まないな。))

まさかの不使用。せっかくの情報交換の機会が使われない。

(もうすぐAも戻ってくる頃だ。また後で見るか?)

(もうすぐあのつなぎの男が子供達を連れてくる頃だな。これ以上これを見るのもあの紙袋男に怪しまれそうだな。)

(音量はボタンで動かせるのか。消しとくか。)

『子』がスマホを活用したのとは対象的に、『鬼』陣営、初動が遅れることになろうとする。果たしてこのままスマホが活用されないのかそれとも誰かしらが口火を切って使われようとするのか。それは十二人の掌の上である。

【F—05／01時04分】

【夜神月@DEATH NOTE】

「役」：鬼

〔状態〕：紙袋を頭に被っている

〔装備〕：ソード・カトラス@BLACK LAGOON、スマートフォン（鬼）@オリジナル

〔道具〕：デスノート@DEATH NOTE・ノートとペン@現地調達の入った四次元っぽい紙袋

〔思考・行動〕

基本方針：まずデスノートの真贋を確かめる。

1：Lとして振る舞い、皆と鬼ごっこについて調べる。特に葵と悠に注視。

2：鬼を含んだ他の参加者でノートを試す。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

※四次元っぽい紙袋は効果を失いました。

※桜井悠・宮原葵・阿部高和の顔を把握しました。

※スマホによって全ての『鬼』の顔と名前を把握しました。

【吉良吉影@ジョジョの奇妙な冒険】

〔役〕：鬼

〔状態〕：ストレス、姿は川尻浩作

〔装備〕：スマートフォン（鬼）@オリジナル

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：親の振りをしながら鬼以外を始末する

1：まずはこのメンバーと同行する。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

バイツァ・ダストは杜王町でないことと本人が能力を把握しきっていないことで使用不可。

夜神月をキラークイーンで爆弾化しました。

【阿部高和@くそみそテクニック】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：青いツナギ、ベレッタM92F@魔法少女まどか☆マギカ、
ベレッタM92F@バトル・ロワイアル

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：親と子を探す

- 1：さつき入ってきた入り口に全員で集まる。
- 2：思ったより面倒なことになったじゃないの、やれやれだぜ……

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握、各役の人数・会場の
地図を未把握。

※原作終了後からの参戦です。

【宮原葵@絶望鬼ごっこ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『水晶』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：死にたくない。

- 1：一階に降りて合流する。
- 2：大翔が巻き込まれていたら合流したい。

※その他

〔ルールの把握度〕

各役の勝利条件・制限時間を把握、自分の役・各役の人数・会場の
地図は未把握。

※自分の支給品に気づいているかは不明です。

【桜井悠@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『水晶』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：死にたくない。

1：一階に降りて合流する。

2：大翔が巻き込まれていたら合流したい。

※その他

【ルールの把握度】

各役の勝利条件・制限時間を把握、自分の役・各役の人数・会場の地図は未把握。

※自分の支給品に気づいているかは不明です。

【チャッキー@チャイルドプレイシリーズ】

【役】：鬼

【状態】：健康、グッドガイ人形の体（新品）

【装備】：ナイフ、スマートフォン（鬼）@オリジナル

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品一つ（確認済み）

【思考・行動】

基本方針：子か親の前では人形のふりをして様子見、可能なら不意打ちで殺害する。別に殺さなくても良いらしいが殺した方が手っ取り早い

1：支給品の反撃を食らわないように警戒。話が通じるなら他の鬼と組むことも考慮する……だから誰か話せよ！

※その他

【ルールの把握度】

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

※人形なのでスマホを操作できません。

第十四章 白銀（月夜、ヘンゼル）

（因幡月夜登場話） 迷い兔

「ほよ」

気がつけば、少女は見知らぬ場所に居た、

色素の無い白い髪をツインテールにした、白皙の————全体的に色の白過ぎる少女だった。

「確か中庭の噴水に腰掛けてうたた寝していた筈……」

首を傾げると、左のテールの付け根に結ばれた二つの鈴が、カラんと音を立てた。

「私が眠っている間に連れて来られたのでしようか？」

浮かんだ疑問を直ぐに有り得ないと打ち消す。熟睡しているならまだしも、うたた寝している程度で、接近に気づかないわけが無い。「何だか知りませんがセツカクの楽しみが、訳のわからない事で潰されるなんてガツカリです」

短く溜息をついて周囲の様子を探る。

「……周囲には誰も……というより何も居ませんね」

人の気配どころか生物が居る様子すら無い。

代わりに宙を紙が舞う音がする。それもとても多くの音が。

尤も生来盲目の為にその紙が何なのか少女には確かめる術は無いが。

盲目である事を抜きにしても、一体此処は何処で、自分はどの様な状況に置かれているのかサツパリ判らない。

「ハア……面倒です」

取り敢えず人を探さなければならぬ。此処が何処なのか？という事を知るのも大切なのだが、何分にも病弱な身。下手をすれば風邪をひく。身体を休められる場所も探さなければならなかった。

少女は右手に提げた黒鞘の日本刀を杖代わりに、適当な方角へと歩き出した。

【???／〇〇時〇一分】

【因幡月夜@武装少女マキャヴェリズム】「役」：子

「状態」 健康

「装備」：摸造刀：亜鉛合金製で重量は日本刀と変わらないが強度は脆い。

「道具」：不明

「思考・行動」

基本方針：人を探す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物情報

元々女子高だった学園が共学になった際に男子生徒を恐れた女子生徒のための風紀組織、愛知共生学園 “天下五剣” の中で最強と言われる剣士。

飛び級して中学校に通うが実年齢は小学生。

白髪白貌紅眼——要するにアルビノ——の盲目の美少女で、外見と盲目の由来は、優れた剣の才能を世に誕生させる為に父親に当たる男が二度に渡り行った近親相姦の所為。

生来病弱でしょっちゅう咳き込み、酷い時には発作を起こすが、剣の才能は凄まじく、薬丸自顕流居合を修め、幼少の身で不可視の魔剣 “雲耀” を習得。

踏み込みから抜刀に至るまでの動きが、同じ五剣でも見えない神速の剣技を遣う。

徒手に於いても “雲耀” の応用技である “魔弾” を用いる事で、大人の大人でも殴り飛ばす事が出来る。

年不相応に落ち着いた性格だが、武術について話し出すと長い。趣味について語るオタクの様に長い。言動の端々に年相応の子供っぽさが垣間見える。

少し前まで引き籠もりだった為か、世故に疎いところがある。

長らくぼっちだったが最近友人と弟子が出来た。

身体が弱い為に気温によっては簡単に体調を崩す、アルビノでもあ

る為に、会場の気候が夏ならば最悪暑さで行き倒れる。

【能力】

生来の盲目の故か異常なまでに鋭い聴覚を持ち、数百m範囲の人間の骨や筋肉の稼動音を聞き取り、脈拍や呼吸から心理状態や体調、果ては嘘を吐いている事まで理解できる。

この聴覚で操作はおろか認識すら難しい潜在筋を認識し、動かし方を把握出来る。

この為、剣才と併さつて十にも満たない歳で奥義を修める事が出来た。

薬丸自顕流居合

同じ領域に居ないものには、目では捉えられない速度で、距離を詰めすれ違いざまに三撃斬りつけられる速度。

魔弾・改

示現流の技法を応用して撃つ徒手の技に体重移動を組み合わせて威力を底上げた技。

威力が体内に浸透蓄積する。

※二話投稿『(ヘンゼル登場話) Over Hell』
& 『白銀』

「やっぱりだ……僕は死なない、僕達は死なない！Never Die！」

見通しの悪い林の中で上がるボーイソプラノの哄笑。その笑い声は天使のそれを思わせるが、地獄にそんなシロモノがいるわけがない。目を引く銀髪は、彼の双子と同じ色。服と合わせて墮天使を思わせる。

「こんなにも嬉しいことはない。天国に到達したんだ。永遠の天国に！」

笑い終えた少年は叫び、服に隠した拳銃をくるくると回す。彼の感情と共にその回転数は増していく。

「子を捕まえれば鬼が、守れば親が生きられる。やっぱりシステムは一緒なんだ。どこでだって。」

回転数の上がった銃をピタリと抑え服へとしまう。少年は理解していた。ようはいつもと変わらない。殺せば良いのだ。役がどうかは関係ない、最後の一人になればどのみち同じだ。

「姉様も来てるかな？きつと来てるよね。ふふ、楽しみだなあ。」

かつてロアナプラを震撼させた『厄種』の片割れ、ヘンゼルはチエシヤ猫の様な笑みを浮かべた。

【???／00時01分】

【ヘンゼル@BLACK LAGOON】

【役】：子

【状態】 健康

【装備】：拳銃

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：皆殺し

※その他：自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物情報：ルーマニア革命により行き場を失った孤児達、通称チャウシエスクの落とし子の双子。眉目秀麗であった為に裏ビデオ出演させられ、凄惨な性的虐待を受け、殺人を行わせられる。いつしか双子は己の境遇を受け入れ、人として壊れ果ててしまった。外見不相応な身体能力を持ち、10歳程の外見ながら、10kgを越えるBA

刀を杖代わりに歩きながら、因幡月夜は困惑していた。大分歩いた筈なのに人どころか生物の気配がしないのだ。本来数百mをカバ―する聴覚を持つ彼女には初めての経験だった。

——ここは砂漠でしょうか？

思わずそんな事を考えてしまうが、雪駄越しに感じる感覚はアスファルトのそれだ。

周りはどうやら住宅地の様だ。それでいて何の気配も感じられない。

姉か父の手が動いているのかと思つて一瞬陰鬱になるが、直ぐにそうではないと知れた。

付近に人の気配。30mの距離から、人がこちらに向かってくる音がする。

素人だ。少なくとも武の心得は無い。姉や父の手になる事態なら、武の心得が無い者が居るとは考え辛い。

それはさておき、いきなり30mの距離に音が出現して、月夜は戸惑うが、近付いてくる足音の右側が僅かに遅い事を聴き取った。

何かしら武器でも持っているのだろうか。

「何方かは存じませんが、それ以上近づくと………」

どうするかは言わず、剣気だけを放つ。浴びた者はまるで吹雪に遭ったかの様に錯覚する月夜の剣気。それを受けて、近付いて来た足音は立ち止まった。

相手との距離は5m。不穏な動きをすれば銃を持っていたとしても対処できる。

即座に動ける状態を保ったまま、月夜は足音の主に話し掛けた。

「失礼。少々お尋ねしますが、此処は何処でしょうか？」

「此処？天国じゃないかな？」

「はい？」

妙に浮かれた調子の少年の声に首を傾げる。

確かに病弱ではあるが死ぬ様な事にはなっていない。

少し考えてから少年の言った言葉を流してもう一つの質問をする。

「この紙には、何と書いているのでしょうか？」

突き出した手には一枚の紙。宙を舞うのを掴み取って持ち歩いてきたのだ。

「君、目が見えないんだ」

「ええ、殆ど見えませんが何か？その分耳が良いですのでお気遣いなく」

「へえ、凄いな」

月夜の言葉を聞いて少年——ヘンゼルは右手に持った鉈に僅かに意識を向けた。

近隣の家を物色して、納屋から金鎚や釘と一緒に持ち出して来た凶器である。

抜き身の鉈にも全く意識を向けない月夜を、浴びせられた剣気の所為もあって、ロアナプラに君臨していたロシアンマフィアの女頭目の類かと思っていたが、まさか単に盲目だったとは思わなかった。

視覚情報による恐怖を愉しめないのは残念だが、盲目なら盲目なりの愉しみ方が有る。

この取り澄ました顔の少女が、苦痛と恐怖に顔を歪めて泣き叫ぶ姿を想像して、ヘンゼルはクスリと嗤った。

「何笑ってるんですか」

少しむっとした様子の子の月夜の声に顔を引き締める。最初に浴びせて来た気といい、この勘の鋭さといい、油断していると此方が喰われ

かねない。

「ゴメンね。えーと、この紙に書いている事だね」

糞溜めの中を這いずり回ってきた『厄種』としての勘が告げる。この少女は自分一人では殺せない。

だから今は取り敢えず機嫌を取っておこう。機会が来れば殺そう。何処かにいる姉様と合流したら二人で殺そう。

天使の笑顔の下に狂犬の牙を秘めて、ヘンゼルは紙に書いてある事を月夜に教えるのだった。

——どうも信用できませんね。

因幡月夜は思考する。嘘をついている様子は感じ取れないが、この少年は出逢った時から殺意を此方に向け続けている。

異様なのは強い殺意を放ちながらも、殺意が立ち居振る舞いに全く表れていない事だ。通常ならば力みや強張りとして表れるそれが全く無い。

剣を握る為に産み出され、剣の奥義を習得し、相応の殺気を放つ武人と多く接した月夜でなければ惑わされそうな程にヘンゼルは自然体を保って弛緩している。

この振る舞いに、ヘンゼルの容姿——月夜には見えないが——
——が加われれば、歴戦の軍人でも不意を打たれるだろう。

——まあ、別に構いませんが。

襲われても実力で返り討ちにできる上に、聴覚により不意打ちが通じない月夜は、取り敢えずヘンゼルと共に行く事にした。

【F—2／00時33分】

【因幡月夜@武装少女マキャヴェリズム「役」：子

「状態」健康

「装備」：摸造刀：亜鉛合金製で重量は日本刀と変わらないが強度は

脆い。

〔道具〕：不明

〔思考・行動〕

基本方針：人を探す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

〔備考〕

※ビラに書かれていた事はヘンゼルに尋ねて把握しました。

※立ち込める霧により、音を聴き取れる範囲が30mになっています。

※ヘンゼルと同行する事にしました

【???／00時01分】

〔ヘンゼル@BLACK LAGOON〕

〔役〕：子

〔状態〕 健康

〔装備〕：拳銃、鉈、金槌

〔道具〕：釘

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し

※その他：自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※因幡月夜と同行する事にしました。機会が来れば、或いはグレイテルと合流したら因幡月夜を殺すつもりです。

第十五章 『空をこがして、世界をこの手に』& 『隠し砦の三悪人』

(Dr. ヘル登場話) 帝王の戦い

「グヌヌヌ… 許さん、許さんぞお！」

老人は憤慨していた。

大量に蓄えた白髭と頭部を覆う大量の白髪は見るものに賢者を連想させ、その鍛え上げられた肉体は若者よりも精気を溢れさせている。

そんな老人が何故ここまで怒っているのか。

それは、こんな遊戯に招かれてしまったことである。

説明は受けた。自分の役割も知った。見事勝利すれば現世に生還できることも知った。それらを受け入れた上で、彼はこめかみに血管を浮き立たせる。

「このワシを奴隷のように、しかもこんな箱庭に閉じ込めるだとお!? ふざけおってゴミ共がああ!!」

彼の怒りは正義感によるものなどではなかった。

それもそのはず。

彼の名はDr. ヘル。

世界制服を夢見る邪悪の化身ともいうべき狂科学者なのだから。

彼はその誰よりも優れた天才的な頭脳を有しているが故に、誰よりもプライドが高かった。

そんな彼が、強制的に鬼ごっこに参加させられれば憤慨のひとつや二つもするだろう。

「まあ、ワシが鬼、それがあの三役の中では適役だと判断したことだけは褒めてやろう。今だけは貴様らゴミ共——いや」

言葉を区切り、深く息を吸い込み、ピタリと止める。

そして

「聞こえておるのだろう兜十蔵オオオオ~~~~~!!!今だけは貴

様の悪戯に付き合っつてやろう！だが、それが終われば次は貴様の番じゃああああ!!」

天高く、爆弾のような怒声が響き渡った。
兜十蔵。

それは、Dr. ヘルの最大にして唯一のライバルである。

ヘルはこのおにごっこのルール説明時に兜十蔵の声や痕跡を捉えたわけではない。

だが確信していた。

死んだはずの者を復活させ拉致しあまつさえ半ば強制的に従わせるなどという霸王染みた行い、それをこのDr. ヘルにできるのは自分とほぼ同等の天才的頭脳を持つあの男をおいて他にいないと。

奴は既に死んでいたはずだが、マジンガーZに殺されたはずの自分がこうして復活した以上、奴も復活していてもなんら不思議ではない。

「貴様は唯一ワシに届きうる頭脳の持ち主であることは認めておる。だが、それはあくまでも可能性の話！貴様がワシの上に立つなど断じて認めんぞおお!!」

己が怒りとプライドを振りかざし、屈強な老人は駆ける。

幾つになっても、どんな状況に陥ろうとも、彼の突き進む道はただ一つ。

”世界征服”という漢の覇道、それだけだ。

【C—5／00時11分】

【Dr. ヘル@真マジンガーZERO】

【役】：鬼

【状態】：超健康

【装備】：バードスの杖（ただし現在は機能が停止しているため実質は頑丈な棍棒程度、本人はまだ気がついていない）

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：戦いに勝利しこの企画の主権に在るであろう兜十蔵をぶ

ち殺す。その後、改めて世界征服に乗り出す。

1：鬼として勝利する。

2：従来のルール以外にゲームをクリアする方法があれば、兜十蔵の鼻を明かす為にもそちらを優先したい。

※補足

兜十蔵

天才的科学家にしてD r. ヘルの因縁のライバル。

本当にこの企画に関わっているかは不明。

人物解説

おなじみマジンガーシリーズのボスキャラのマッドサイエンティスト。

野望は世界制服、機械獣を従えているなど基本的には従来のマジンガーシリーズに沿っているが、一番の違いはその肉体での強さ。

老人とは思えぬほど鍛え上げられた肉体で『機械道空手』を駆使し、拳銃を装備したボディーガード程度では何人束になろうが時間稼ぎすらできないほど強い。超強い。

しかも、従来のマジンガーシリーズでも発揮してきた悪魔的な頭脳は衰えることなく健在で、まさに『暴』と『智』を兼ね備えた数多のD r. ヘルの中でも最強のD r. ヘル。

部下のことはそれなりに重宝し、その身と引き換えに手柄をあげた時などには心底褒め称えたりするものの、それはあくまでも『面白いおもちゃは手放したくないなあ』程度の愛情であり、部下が人質などにされれば一瞬躊躇って容赦なく敵ごと捻りつぶす。

(ウエカピポの妹の夫登場話) K!B!S!#

「鬼(ご)っ(ご) ……だとツ!? そんなくだらないもののために、神聖なる決闘を邪魔したというのかツ!!」

怒りの声をあげる男性。困惑でもなく、恐怖でもなく、純然たる怒りである。

彼はつい最近、とある事情により著しくプライドを傷つけられた。

第三者の視点から見れば、間違いなくその問題の非はこの男にあるのだが、本人にその自覚は全くない。

自身の名誉を癒すため、公正な決闘により、その雪辱を晴らすつもりであった。

そう、公正な決闘である。

立会人の元、流儀にのっとり、互いのプライドをかけた神聖な儀式となる筈だった。

それを――邪魔された。

それが義弟の逆鱗に触れたツ!

「待っている」ウエカピポ ……貴様との決着の前にやるべきことができたツ!

目には目を、齒には齒を、そして屈辱には屈辱で返す。それが彼の流儀ツ!!

もしも主催者が女なら、殴りながら犯すのも良いかもしれないな、

等とゲスな考えをちらつかせながら、「ウエカピポの妹の夫」は地獄へと歩みだした。

義弟は知らない。

基本世界の歴史では、彼は決闘に敗北し、そのまま屍を晒すことになる。

こうして絶望鬼(ご)っ(ご)に選出されたことは結果的に延命という幸運を義弟にもたらしたことになるのだが、未来など知るよしもない彼には到達することのない考えだった。

【???／00時02分】

【ウエカピポの妹の夫@ジョジョの奇妙な冒険 第7部 SBR】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：鉄球、剣

【道具】：デイパック（不明支給品3）

【思考・行動】

基本方針：決闘を汚した主催者に責任をとらせる（女なら殴りながら犯す）

1：親か子の参加者を探す。鬼ならば様子見、可能なら仕留める

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

ジョジョの奇妙な冒険 Steel Ball Runの登場人物。

ウエカピポの妹の夫である。

本名は不明で、読者からは「義弟」とも呼ばれている。

シリアスなエピソードに登場するにも関わらず、その妙にインパクトのある表情、

「お前の妹は殴りながらやりまくるのがいい女だった」というあまりにも下衆な台詞、

やたらテンションの高い決闘時の台詞、その直後にあっさり敗北して死ぬ雑魚っぷりなどからネタ扱いされており、コラ画像やパロディイラストが多数制作されている。

彼はネアポリス王国の裕福な財務官僚の息子で、ウエカピポとは仕事を通じての友人であった。

将来の財産と地位が保証されていることから、ウエカピポは自分の妹を彼と結婚させた。

しかし、義弟には暴力癖があり、その激しさは妻の左目を失明させるほどだった。ウエカピポは慌てて法王に請願し、婚姻無効の許可を取り付けた。

だがこの行為が逆鱗に触れた義弟はウエカピポを暴行、さらに「殴りながらやりまくるのがいい女だった」「じやなきやあちつとも気持ちよくねーし……つまんねえ女だった……」と己のゲスさを強調。そしてウエカピポとの正当なる決闘を申し込む。参戦時期はその決闘の直前から。

空をこがして、世界をこの手に

「ふむ……」

沖木島の北部、鎌石村の消防分署。その一室。

筋骨隆々の老人『Dr. ヘル』は、配布された地図や書類、支給品を確認し、大量の白鬚をしごきながら作戦を練っていた。

自分に課せられた『鬼』の役の、やるべきことはこうだ。

24時間のうちに、広くもない島中に散らばる36名の『子』の、生きていくうちの過半数……最大19名を捕まえ、主催者本部に連れて行けば勝利。

あるいは、『鬼』を除いた「生きている参加者」の過半数が『鬼』になれば勝利だという。

『親』が24名いるということは、親・子あわせて60名のうち、鬼が全員生きていても49名を殺さねばならない。

ついでに。

『子』の勝利条件は、鬼が全員死ぬか、制限時間まで逃げ切る（捕まらず、生き残る）こと。

『親』の勝利条件は、子が勝利条件を満たし、なおかつ生き残った子の数が親より多いこと。

どちらも困難だ。それも、子と親の勝利条件はバッティングする。子が勝利するには、親より人数が少ない状態で勝利せねばならないわけだ。

勝利すれば、その役は全員復活出来る。つまり途中で死んでも捕まっても、最後の数人に希望を託せばよい。

敵は鬼だけではなく、親と子でもあり得るというわけか。なかなか悪趣味なイベントではある。

さて、結論。鬼の側が勝利するには、効率上「子を捕まえる」方が明らかに手っ取り早い。

広くもない——せいぜい数km四方とはいえ、山があり森は深く、民家もそれなりにある。

隠れんぼされては面倒だ。それに、親や子にも、然るべき武器は支

給されていよう。自分ならそうする。

第一、子と親の勝利条件に『鬼が全員死ぬ』とある。鬼を殺せるほどの何かが支給されているはずだ。

他の鬼に貧弱な奴らがいれば、殺されるかもしれない。鬼の総数が減れば、親や子をより多く殺さねばならん。手間がかかる。

子を捕まえるならば、鬼が少々死のうとも、捕まえる人数は子の過半数である19名を上回ることではない。親は無視しても殺しても良い。

また「生きている子の過半数」を捕まえばよいのだから、適度に子を殺した方が手間は省ける。

50億人を殺した自分だ。今更殺すのに特に躊躇はないが、目的は殺戮ではなく、自分の復活。そして、主催者であろう兜十蔵との戦いだ。

そう。必ず奴は、自分を見ている。よりによって自分をこんなゲームに喚び出すなど、あいつの仕業でしかあり得ぬ。

ならば。奴が定めたこのルールに律儀に従って勝利するなど、気に食わぬ。奴の鼻をあかすためにも、思いもよらぬ方法でクリアしてくれよう。

全宇宙征服の第一歩、いや何百億分の一歩は、この島から。……地下に機械獣はおるまいが。

なぜか二枚あった地図のうち、一枚はどうも現実と違う。村々の表記もなく、向きが反対だ。手違いか、あるいは差異世界のものか。

何かの役には立とう。折りたたんで仕舞い、カラー地図の方を矯めつ眇めつ眺める。今自分がいるのは「C-05」だ。

「……で、要するに、この地図でいうF-05……神塚山山頂地下に、主催者本部があるというわけじゃが。

兜十蔵はおるまいな。おればワシが全て擲ってぶつ殺しに来るところぐらい承知じやろう。

ここをぶつ壊すか……いや、ワシに何か細工がしてあって、反乱すれば爆死、ぐらいのことはするか……ブツブツ」

ヘルは、ふと窓の外の空を見る。飛行機だ。ビラやパラシュートを撒くのをいつの間にかやめている。

「あの飛行機を乗っ取るか。燃料補給なり連絡なりで、主催者本部の近くに降りてくるかもしれん」

だが、島の外には怪しい霧。いかに自分が鬼とは言え、飛行機で島の外へ出られるはずはない。

とにかく主催者本部へ戻り、偵察して情報を集める。それには「手土産」が必要だろう。

「……おつ、あれは……」



「なんなんだ、ここは……？ どこかの島のようだが……」

故郷・ネアポリス王国から遥か遠く、極東の島国のとある島、を地獄に再現した舞台。

19世紀末の異国から招かれた男にとって、見るもの全てが珍しい。飛行機、パラシュート、瓦屋根の家々、港、看板。

「これは……『漢字（カラツテリ・チネージ）』か？ 東洋のどこかかってことか？」

東洋へ実際に行ったことはないが……シノワズリー（中国趣味）とかジャポネズリー（日本趣味）なら、

裕福な財務官僚の息子である彼にも、嗜み程度にはある。欧州とは異なる、奇妙な文明の地だという。

なんでそんな場所に？ 決闘を妨害しようとする、何者かの仕業か？ ナメヤがって。

それにしたって、なんで自分が『鬼ごっこ（アッキアツピーノ）』なんてやらなきやあならないんだ？

男——『ウエカピポの妹の夫』に、ここが『地獄』だなんて発想はない。

自分は地獄に落ちるようなことなどしていないと、確信しているからだ。

女は男に、妻は夫に、全身全霊で仕えるべきものだ。夫の気に入ら

ない妻は、言葉と暴力によって賤けねばならない。

それが気に食わないからと、裏でコソコソと『婚姻無効』の許可を取り付けやがった――

妻の兄、あのウエカピポこそ地獄へ落ちるべきだ。正当なる決闘によつて死を与えてやる。

それが彼の流儀であり、本当の男のすべき行いだと、彼は教育されてきたし、性に合っていた。

わけがわからんが、ここからネアポリスに戻るには、どうしたって与えられた『役』で勝利しなけりやならんらしい。

面倒だが、暇つぶしと思つてやつてみよう。そして主催者には責任を取らせなければなるまい。

とりあえず他の参加者と合流せねば……と、思っていた時。

「うッ!」

ふ し ゆ う う う ……

目の前に、奇怪な男が立っていた。

紫色の肌、金色の目、長い白髪と大量のヒゲ。筋骨隆々の肉体。小銃を背負っている。左手には槍のような杖のような、異様な武器。

右手には……顔面をその武器でたたかに殴られ、気絶したと思しき一人の少女を、首根っこを掴んで引きずっている。

鬼だ。鬼の所業だ。そして、この威圧感。強い。自分では決して勝てない。太刀打ち出来ない!

ヒゲの男はこちらを睨みつけ、どけ、とばかりに杖を振る。

「おう、そこにも一匹おったか。親じやな」

「は、はい」

思わず即答する。ヒゲの男は少し考え、こう言った。

「ワシは親に用はないが……親側の情報も必要じやな。よし、ワシについて来い」

【チーム・ヘルインザ地獄】

【C—05／00時35分】

【Dr. ヘル@真マジンガーZERO】

〔役〕：鬼

〔状態〕：超健康

〔装備〕：バードスの杖（ただし現在は機能が停止しているため実質は頑丈な棍棒程度、本人はまだ気がついていない）

〔道具〕：四次元つぼい紙袋、『スマートフォン（鬼）』、不明支給品2つ（確認済み）、島の地図2枚、

『お守り』（ターニャから説明書ごと奪取）、モンドラゴンM1908（小銃。ターニャから奪取）

〔思考・行動〕

基本方針：戦いに勝利し、この企画の主催にいるであろう兜十蔵をぶち殺す。その後改めて世界征服に乗り出す。

1：従来のルール以外にゲームをクリアする方法があれば、兜十蔵の鼻を明かす為にもそちらを優先したい。

2：捕獲したターニャを主催者本部に連れて行き、偵察して情報を集める。ターニャにも内部を偵察させ、後で連絡をとらせる。

〔ウエカピポの妹の夫@ジョジョの奇妙な冒険 第7部 SBR〕

〔役〕：親

〔状態〕：健康、恐怖

〔装備〕：鉄球、剣

〔道具〕：デイパック（不明支給品3、未確認 なぜか支給品が3つある）

〔思考・行動〕

基本方針：決闘を汚した主催者に責任をとらせる（女なら殴りながら犯す）。親か子の参加者を探す。鬼ならば様子見、可能なら仕留める。

1：逆らえば殺されそうなので、ヒゲの男について行く。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

〔ターニャ・デグレチャフ@幼女戦記〕

〔役〕：子

〔状態〕：顔面負傷、気絶

〔装備〕：

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：このゲームから早期の脱出を目指す。出来れば子と合流。

1……………。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。『お守り』については把握しているか不明。

いきなりヘルに襲われ、顔面をバードスの杖でぶん殴られ気絶。武器と道具を奪われる。

隠し砦の三悪人

「う……」

顔に水をかけられた感覚。意識を取り戻し、目をしばたたく。ここはどこか、家屋の中のようなようだ。

顔面がヒリヒリと痛い。鼻血が出ている。歯は無事だ。何が……起きた。記憶をたぐる。

そうだ。突然この奇妙な島に転移させられ、「鬼ごっこをしろ」とか命令されたのだ。確実に『存在X』のせいだろう。クソツタレめ。

しばらくして、河島龍之介、リュウと名乗ったヤクザの男と出会い……情報交換を行った直後、『鬼』に襲撃されたのだ。

反撃を行おうとしたが、その鬼の背からもう一体の鬼が出現した。目の前が真っ暗になり……それから、どうなったか。

気絶から回復した時、そうだ、路上に投げ出されていた。鬼が捨てていつてくれたとも思えないが、では、リュウが救出してくれたのか。

あたりを見回しても、リュウも鬼も姿が見えなかった。リュウは、どうなった。捕まったか、死んだか。鬼は。

とにかく、路上に倒れていてもしょうがない。さっきの鬼や新たな鬼に見つかってはおしまいだ。

リュウは……生きていれば、会えるかも知れない。死んでいればそれまでだ。

ふらつく頭を抑え、民家へ近づく。身を隠さねば。視野が狭まり、足元がおぼつかない。あの鬼の攻撃は何だったのか。気分が悪い。

そんな状態でうろついていたから——この有様だ。

目の前でペットボトルの水を呷っているアホそうな男が、こちらの覚醒に気づいた。

黒髪だが、顔つきは西洋人のようだ。腰には長剣。と、妙な鉄球。

「……………」

「……………おはよう、いびくします」

顔を歪めて苦笑し、男に小声で挨拶する。こいつが鬼ということか。

こちらは、椅子にロープで縛られている。殺されずに済んだと考えれば最悪ではないが、何をされるか。

男は眉根を寄せ、鼻を鳴らし、首を巡らして、奥へ呼びかける。

「ガキが目を覚ましました！」

「おう」

のそり、と白髭の男がソファから身をもたげ、近寄ってくる。

そいつの顔は紫色で、ジジイのくせに筋骨隆々。アホそうな黒髪の男よりは明らかに賢く、強い。

明らかに子ではない。親か、鬼か。その手には携帯端末と杖。杖は、こつちの顔面を殴った鈍器か。思い出して来た。

「小娘。ワシは『Dr. ヘル』じゃ。名を名乗れ」

「……『ターニャ・デグレチャフ』……です」

「そうか。ワシは役目上は『鬼』じゃが、お前を殺す気は『いまのところ』ない。ラッキーと思え。ありがたいと思えい」

「あつ、はい。感謝いたします」

作り笑顔を浮かべ、追従を述べる。生殺与奪を握られている以上、仕方あるまい。彼は続けて、こう告げた。

「お前をこれから、このゲームの『本部』へ連れて行ってやる。子は殺さずともよいそうだな。」

そこで内部の情報を集め、ワシに報告せよ。手段は問わん。お前が考えよ」

……なるほど。この私を戦略的・戦術的に活用してくれる、ありがたい上司というわけか。

しかし、おめでたい奴だ。私が彼の、いわば裏切りを『本部』とやらへ告げ口したらどうなる。この会話が盗聴されていればどうする。

もし『本部』へ送られた私が、その場で殺されたら……まあ、それはこいつには関係ないか。別の『子』を送ればいいだけだ。

ともあれ私が帰還出来るか否かは、この作戦にかかっている。いいだろう、乗ってやる。罅り殺されるよりは遥かにマシだ。

ならば、猫を被って幼女のフリをする必要もあまりない。有用な人材であることをアピールせねば。

「その……いくつか、質問と要求、よろしいですか」

「ある程度は許可する。作戦には信頼関係が必要じゃからの」

「感謝します。まず……子である私は、詳しくこのゲームのルールを知りません。」

あなたが知っている限りのことを教えて頂きたい。無論、こちらからも知っている限りの情報を出します」

「もつともじゃな。なかなか聡明じゃぞ。手駒としては良い奴よ。ワシは有能な奴は好きでな」

Dr. ヘルとやらが、ニタリと笑う。そうだ、当たりを引いたと思うがいい。こちらこそつちを値踏みさせてもらおう。

黒髪の男はヘルに無言で促され、慌てて私の束縛を解いた。



黒髪の男——『ウエカピポの妹の夫』は、手持ち無沙汰気味にペットボトルの水を呷る。

デイパックの中身は確認し、ヘルとターニヤにも公開した。

アメリカ製の拳銃、コルトSAA「ピースメーカー」が二挺と、見慣れない擲弾が一つ。内ポケットには親のルールも書いてあった。

護身用に拳銃と擲弾をターニヤが欲しがり、ヘルも許可したのでくれてやった。彼女が庇護者であるオレたちを殺す理由はあるまい。逆らえば殺す。

これでひとまず、愛も信頼もない、恐怖と打算で結びついたチームが出来た。

ただ、このターニヤとかいうガキは……どうも、不気味だ。気味の悪い笑顔といい漂う殺気といい、Dr. ヘルの同類だ。

マジで『子』なのか？ 『鬼』じゃあないのか？ いや、鬼か子かは

『本部』とやらで判別出来るだろう。

オレとしては、こいつらを仲間として生き残ればいい。話を聞く限り、鬼が親を殺すメリットはあまりないらしい。

Dr. ヘルの気まぐれが続く限り、オレの身は安全というわけだ。少々屈辱的だが……。



Dr. ヘルは白鬚をしごき、ターニヤの提言に耳を傾ける。

骨子はこうだ。作戦計画には賛同するが、自分を今、なんの準備もなしに本部へ連れて行くのは得策ではない。

中で何をされるか分からないし、連絡できるとも限らない。リスクが、不確実性が大きすぎる。

それよりも、もつと情報と手駒を集めるべきだ。この計画に賛同する子を、親を、さらには鬼を。

このゲームの盤面をひっくり返すというからには、それぐらいせねばならない。

「……ふむ。まあ、そうじゃな。……おまえを襲ったその鬼は、この近くにおるかな？」

「生きていれば、おそらく。話が通じるとは思えませんが……」

「そのヤクザ者も気になるな。鬼を殺すか、撃退したのであれば……この『お守り』を使ったのかも知れぬが」

Dr. ヘルが、ターニヤから奪った『お守り』を掌で弄ぶ。ターニヤは小銃ともども、支給品を彼に預けることにした。

敵対的な鬼に立ち向かう場合、彼が持っていた方が確実に鬼に命中させられるだろう。『子』が使用せねば駄目とは説明書に書いていない。

要は、この鬼に自分を守らせるのだ。いざとなればこの拳銃と、スタングレネードがある。

また、ヘルの持つ『スマートフォン』を用いれば、1時から他の鬼と連絡が取れるらしい。もうすぐだ。

作戦に賛同する鬼が多いとも思えないが、鬼たちが何という名で、どこにいるかを知るのも重要だろう。

「そのスマートフォンで他の鬼を確認し次第、襲撃された現場へご案内いたします」

「よかろう」

【チーム・ヘルインザ地獄】

【C—05／00時55分】

【ターニャ・デグレチャフ@幼女戦記】

【役】：子

【状態】：健康、顔面負傷

【装備】：コルトSAAピースメーカー@現実、M84スタングレ

ネード@現実

【道具】：

【思考・行動】

基本方針：このゲームから早期の脱出を目指す。

1：ヘルの対主催作戦に乗る。そのために準備を整える。

2：ヘルのスマートフォンで他の鬼を確認する。

2：自分が襲われた場所へ行き、何が起きたか調べる。

※その他

D r. ヘル、ウエカピポの妹の夫と情報を共有し、鬼と親の持つ情報をある程度獲得。

【ウエカピポの妹の夫@ジョジョの奇妙な冒険 第7部 SBR】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：鉄球、剣、コルトSAAピースメーカー@現実

【道具】：デイパック

【思考・行動】

基本方針：決闘を汚した主催者に責任をとらせる（女なら殴りながら犯す）。

1：逆らえば殺されそうなので、D r. ヘルについて行く。

※その他

D r. ヘル及びターニャと情報を共有。

【Dr. ヘル@真マジンガーZERO】

〔役〕：鬼

〔状態〕：超健康

〔装備〕：バードスの杖（ただし現在は機能が停止しているため実質は頑丈な棍棒程度、本人はまだ気がついていない）

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、『スマートフォン（鬼）』、不明支給品2つ（確認済み）、島の地図2枚、

『お守り』（ターニャから説明書ごと奪取）、モンドラゴンM1908（小銃）。ターニャから奪取）

〔思考・行動〕

基本方針：戦いに勝利し、この企画の主催にいるであろう兜十蔵をぶち殺す。その後改めて世界征服に乗り出す。

1：従来のルール以外にゲームをクリアする方法があれば、兜十蔵の鼻を明かす為にもそちらを優先したい。

2：自分の対主催計画に他の参加者を巻き込み、情報と手駒を集める。敵対者は打倒する。

3：スマートフォンで他の鬼を確認する。

4：ターニャが襲われた場所へ行き、何が起きたか調べる。

※その他

ウエカピポの妹の夫及びターニャと情報を共有。

第十六章 第三の男 (たえちゃん、おっこ、草加)
(草加雅人登場話) 草加雅人なら大丈夫

「気に食わないね……こういうのは。」

拘束の解かれた手首を擦りながら、忌々しげな顔をする青年が林の中に一人。意志の強そうな上向きの眉が印象的なその目は、椅子の下部に収納があるのを目ざとく見つけると、警戒しつつも開ける。中に入っていた明らかに変形しているデイパックをこれまた警戒しながら開け、一振りの日本刀が強引に押し込まれているのを認めると、その眉はいよいよ吊り上がった。

青年、草加雅人は人々を守る正義の仮面ライダーだ。仮面ライダーカイザとして、日夜人類を滅亡させようとする薄汚いオルフェノクと戦っている。そこに偽りは無い。であるからして、こんな鬼ごっこに巻き込まれたのは甚だ不本意である。ここに来る前にライダーに変身する副作用で手が灰になってたり知り合いに首の骨を折られたりしたような気がするのも相まって、非常に憤っていた。

だが同時に彼は極めて慎重でもあった。自分はここに来る直前までオルフェノクと戦っていたはずである。だが体には傷はもちろん痛みも無ければ疲労感も無い。それを考えると、この鬼ごっこの黒幕は相当な能力を持つと見て間違いないであろう。彼が着けていたはずのカイザのベルトが奪われたらしいことも考慮すると、敵はオルフェノクの組織であるスマートブレイン社に勝るとも劣らない巨悪と見たほうが良い。いや、そもそもスマートブレインが黒幕という可能性もある。残念ながら半殺しにされたところまでは覚えていた草加は、己が極めて厳しい状況に置かれていることを理解させられた。

「俺だけなのか、真理達もやらされているのか……問題はそこだな。」
自分の置かれた状況を認識して自然思いつくのは、彼が愛し愛された女性、園田真理のことだ。ライダーになることももちろんオルフェノクでもない彼女がこの鬼ごっこに巻き込まれていた場合、その身の危険は自分の比ではない。他にも彼の仲間はいるのだが、それはま

あ、置いておいて、とにかく彼女も巻き込まれていた場合はすぐさま保護する必要がある。彼にとっての最優先事項だ。

草加はデイパックを探る。この場での大きな方針は決まったものの、自分はここがどこかもわからなければ真理を探す脚もない。せめて地図でも配られていないかと思っただが、残念ながら入っていたのは日本刀ともう一つの支給品と思われる物の二つのみであった。内ポケットにルールが書かれていたことにも気づいたが、暗い上にそもそも飛行機の中での説明で把握しているので無視する。とにかく、自分にとって今使えるものは刀のみだ。カイザとして戦い大学ではフェンシング部にも所属している彼からすれば、一応『当たり前』と言えるものだが、頼りないのは確かだ。だがそれでこれからの行動を変える気は毛頭無い。とにかく、真理がいるのかいないのかをまずはなんとかしてでも知らなくてはならない。

「殺しても殺しても邪魔ばかり入るなあ、まったく。」

彼はそう呟くと歩き出す、

頑張れ正義のヒーロー、草加雅人！

【不明／不明】

【草加雅人@仮面ライダー555】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：日本刀@現実

【道具】：デイパック（確認済支給品1）

【思考・行動】

基本方針：真理が巻き込まれているかを確認し、いるならば保護する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

人物解説……仮面ライダー555の2号ライダーで仮面ライダーカイザに変身する大学生の青年。テニス部や乗馬部、フェンシング部を掛け持ちする王子様タイプのイケメンで、幼馴染みの真理を助ける

ため怪人オルフエノクと戦う、正義の味方である。性格は裏表が激しく陰湿。また潔癖症のきらいがある。なおオルフエノクの記号は消滅している。

第三の男

H—06にある源五郎池の南岸、氷川村に近い辺りに農協はある。ちようど金谷章吾が佐山流美と戦闘を始めた場所とは対岸にあるそこに向けて、たえちゃんは全力疾走をしていた。言われるままに駆けることへの疑問は横に置き、とにかく危険から身を遠ざけることを優先する。自分が何から逃げているのかいも何が危険なのかもまだわからないなが、しかしその足が止まることはなく走り切った。

はあはあと荒い息をしながら金谷に言われた建物の外壁に手をつく。たった100m程だが、今までの人生で一番に心臓はドキドキと波打っていた。特段運動が得意な方ではないのもあるが、それ以上に鬼と異様な環境への恐怖が緊張を煽る。幸いなことにここまでの間、特に鬼らしきものを見ることはなかったが、他の人も見ていない。いよいよ寂しい気持ちになって歩くような速さで走りながら壁伝いに窓から中を覗くも、無人。人のいる気配はない。が、他に行動を決めるものもないためとりあえず言われたことに従い中に入ろうとする。そしてちようど反対側に大きな入り口を見つけた。

「やっぱり、誰もいないのかな……？」

少し息が落ち着いてきた口から出てくるのは不安の言葉だ。それでも、「とにかく中に入ってみよう」と緊張した面持ちで言うコロちゃんに勇気づけられ、ゴクリとツバを飲み込むと、えいや！と本人としては力一杯にドアを開ける。実際にはとても恐る恐るしたものであったが、たえちゃんとしてはそれこそ一年分の勇気を振り絞ったの行動だ。それこそおじさんに引き取られることを決めたときと同じぐらいの心の力を使った。

「なんだろうこの階段？」

「とにかく上がってみよう。」

しかし、やはり無人。近場の物になんとか這わせていた指先に時々生暖かい温もりを感じ、誰かがここにいた気がするものの、一目見た範囲に人がいるようには思えない。色々見ている内に見つけた階段をコロちゃんを抱えて登るが、やはり同じ——ではない。ドアが

一つ開いている。赤いドアだ。まるで自分を丸呑みにする怪物か何かの口のようなイメージを発するそれは、たえちゃんが今いる廊下の10m程先に存在していた。それを見てたえちゃんの足が誘われるように前に進む、なんてことはない。既にたえちゃんの勇気は逆さに振つても出てこないぐらいにからっぽだ。もしかしたら鬼が隠れているのかもしれないところに、足を進める勇気はゼロである。現実逃避するようにたえちゃんは深いため息をついて目をつむり、壁に背中を預けた。

目を閉じていると、自分の瞼の熱さに気づいた。じんわりと目に熱をもたせるそれは、顔・頭・首とどんどん拡がっていく。この鬼ごっこに巻き込まれて依頼ずつと続いていた体温の高まりと発汗、そしてその原因である体の震えを自覚すると、たえちゃんは自分の身体を抱き締める。

改めて感じるのは、一人であることへの不安と孤独だ。いったいぜんとたい、なんだって自分はこんなことをしているのかとここまで何度もした問いをまた繰り返す。まるで地獄のようなこの場所なんの脈絡も必然性もなく引き込まれたのだ、その疑問は当然であろう。だがここは鬼ごっこのステージ。そしてゲームは既に始まっている。不満に思うだけでは一步の進歩も無い。つまるところ、現在のたえちゃんへの行動は完全に無意味。完全に無価値。圧倒的無駄。だが彼女にはそれが必要であった。前に進むのではなく立ち止まる為に、へたり込むのではなく立ち続ける為に、心と体が要求した防衛行動。脳内に迸るエンドルフィン等の麻薬物質をコントロールし、挫けぬよう己を見失わぬようするための戦い。それが自分を締めつけるかのようには抱きたえちゃんの戦いであった。

自己をかけた防衛戦。それは、彼女の勝利で幕を閉じる。うつすらと開いた目には涙が波波とたたえられているが、しかしたえちゃん、泣かない。堪える。泣いてもなんにもならないことを、彼女はそれまでの人生で知っているから。

「たえちゃん！あの子じゃない？」

「えっ……っ？」

「ほらーあそこー」

だからたえちゃんの視線の先にある窓の更には先、コロちゃんが指し示した方向に一人の少女を見つけてるのは、必然と言えた。

「それじゃあ、章吾くんはあつちに？」

おっこ——関織子と名乗った和服の少女——は、農協の窓から源五郎池の対岸を指差す。たえちゃんが出会った彼女は、金谷とさつきまで一緒にいたと言った。なんでも突然飛び出した彼を追ってこの建物から出たものの、見つけることができずに戻ってきたらしい。実は彼とおっこは逆方向に進んだりそれぞれ池の対岸を通ったりして行き違いになっていたのだが、そんなことは少女達が知るところではなかった。

「突然走れって言われて……もしかしたら鬼がいたのかも……」

「章吾くんまた鬼ごっここの話してたんだ……」

加えて二人には温度差があった。ほとんどパニック状態なのをなんとか堪えているたえちゃんに対し、おっこは不思議な存在や現象にも度々遭遇している——もとい同居しているため、『空の色を変なふうにして自分を迷子にさせたなにかが鬼ごっこをさせようとしているかもしれない』ぐらいの認識である。そして何より、人形であるコロちゃんと会話しているたえちゃんを見て、『たえちゃんさんは年上みたいだし人形でおままごとするはずもないし、きつとあの人形もなんだか不思議なものなんだろうなあ』という認識であった。なまじ身の回りに不思議なものが普通にあり、出会う人出会う人がみんな不思議な言動の人ばかりなので、ここにはそういう人ばかり集められたパーティーかなにかなんかないかと思いはじめていた。

「実は章吾くん、1時には戻るって言ってたんですよ。また行き違いになつたら困るし、それまで一緒に待ちませんか？」

結果起こるのは、状況の不正確な認知。なまじ先走って金谷を見失ったということもあり、おっこが提案したのは約束の時間までこの農協で待つということであった。

その言葉に、たえちゃんはチラリと時計を見る。今の時間は一時ま

であと二十分以上ある。(もしかしたら章吾くんは助けを待ってるかもしれない)と、脳名によぎるのは不安。だが一度逃げ出した場所に戻るのは怖い。様々な気持ちが入り乱れる。だから、動けない。彼女は立ち続けられる意思を持ってはいるが、前に進むための意思は、まだない。

「あ、そうだ！実はここに来たときに変なものを持ってて。」

「……あ、それ私も持ってる。」

沈黙したたえちゃんを気遣って話題を謎のスマートフォンについて変えたおつこに助けられた気分になりながら、たえちゃんも自分が気づけば持っていたスマートフォンを見せた。こうしている間にも取り返しのつかないことが起きているかもしれない、なんて怖い想像から逃れるために話を変えたかった。

(出て行くタイミングを失ったな。)

そんな少女達の話に聞き耳を立てる男が、農協の中に一人。たえちゃんが見つけた赤い扉の奥、そこに潜んでいた草加雅人はポケットの中でデリンジャーに手を添えながら、階段の上で階下を伺っていた。

草加がこの農協に来たのは、おつこが出て行きたえちゃんが辿りつくまでのちょうど隙間の時間であった。池の辺りにあるという目立つロケーションもあり、草加もここを当座の目的地と定めたのだが。彼が内部を搜索している間にたえちゃんがやってきた上おつこまで戻ってきてしまっていた。こうなる前にたえちゃんに声を掛ければ良かったのだが、それは彼女の異様な雰囲気を見て躊躇われた。なにより、草加からすれば彼女が『鬼』でないなどという保証はどこにもない。オルフェノクが人間に擬態しているときには見分けがつかないように、『鬼』が子供の姿をしていないとは限らないのだ。それになにより、たえちゃんのその所作が、忌まわしき無力な幼少期の自分を無意識のうちに想起させて癪に障るのだ。強さを手に入れ過去のものにした自分の姿を鏡で見ているような気分になるのだ。

(ま、足手まといを抱えなかったと思えばいいか……)

音無く鼻を鳴らすと、草加は窓の外に目をやった。彼女達は支給品について話し始めたようだが、使い方をわからないらしく要領をえない。無論草加に干渉する義理は無く、彼は少女達に変わって周囲を警戒することとした。自分を守るついでぐらいには気に食わないとはいえ見張りを受け持つてやろうと。

0時36分、また一つ小さく状況が動く。

【H—06（農協）／00時36分】

【たえちゃん@コロちゃん】

【役】：子

【状態】：疲労（小）

【装備】：『スマートフォン（子）』

【道具】：『コロちゃん』

【思考・行動】

基本方針：家に帰りたい

1：おつこと一緒に章吾くんの帰りを待つ。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

参戦時期は引き取られる直前

【関織子@若おかみは小学生！】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『スマートフォン（子）』

【道具】：紅水晶

【思考・行動】

基本方針：家に帰る。

1：たえちゃんさんと一緒に章吾くんの帰りを待つ。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【草加雅人@仮面ライダー555】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：日本刀@現実

【道具】：デイパック（確認済支給品1）

【思考・行動】

基本方針：真理が巻き込まれているかを確認し、いるならば保護する。

1：情報が纏まるまで下の子供達の様子を見ながら周囲を警戒する。

2：たえちゃんへの嫌悪感。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

第十七章 シザースのデツキでミラーワールドに入っただげんげん（マジエント・マジエント、げんげん）
シザースのデツキでミラーワールドに入っただげんげん

（チツ！アイツどこに行っただ？）

以前無学寺で息を潜めるマジエント・マジエントは悪態をついていた。侵入してきたげんげんをやり過ぎそうとした彼だがげんげんはなかなか出て行かず、玉砂利のため自分が出て行くわけにもいかず、寺の中で彼と隠れんぼするハメになっていた。その中で邪魔なディパックを隠したのだが、どうやらそれを見つけれたらしい。入っていたのは金塊のためさすがにくれてやる気にもなれず殺すことを視野に入れたマジエント・マジエントだったが、どういいうわけかげんげんを見つけてはできなかつた。

（外に出てっただか？気づくか。じゃあどこに消えた？）

苛立たしげに振った拳が近くの姿見に小さな音と共に罅を入れたのを見て、彼は冷静さを取り戻し搜索を再開する。そんな彼は気づくことはなかつた。彼の真後ろに、彼の割ったの鏡の中にげんげんがいたことを。

どうも、げんげんです。

なんと今僕は、鏡の中にいます。

お寺の中で見つけたカバンの中に、金塊と変な金色のカードケースがあつたんやけど、それ持ってたらいつの間にかベルトみたいなのが腰に巻かれてたんや。そんな、ちょうどカードケースが入りそうなんに入れてみたら、ほら！こんなふうになんか変身して、鏡の中に入

れるようになったんや。

信じられんよなあ？

なんで、信じてもらおうと思って、お寺にあったお経とか持ってきたわ。

これな、文字が全部鏡文字になつとんねん。

お寺そのものも鏡写しみたいになつとつて、ふしぎな気分やわ。

それだけじゃないで！このカードな、イラストに書いてあるもんが出てくるんや。

『ADVENT』

ほらな！蟹人間が出てきたやろ！編集とかマジックなんてもんじゃないで。

たぶんこれは、鬼ごっこで使うアイテム的なものなんやろなあ。こんなものまで用意できるとか、いったいどんな奴が鬼ごっこをさせようとしてるんやろ。

とりあえずもう10分ぐらいこの鏡の世界を調べてみるで。ほな、また！

【源元気（げんげん）@Gengen Channel 脱落】

【F108（無学寺）／00時37分】

【マジェント・マジェント@ジョジョの奇妙な冒険 SBR】

【役】：親

【状態】：健康（戦闘で左目を失っており、偏頭痛やよだれ・鼻水を垂れ流す後遺症がある）

【装備】：スタンド『20th Century BOY』（動かなければ絶対防御）、レミントン・ダブルデリンジャー@現実

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：鬼ごっこで優勝する。

1：とりあえず『子』を守れば良いのかあ？任せろ！

2：あの変態ヤローはどこ行った？

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

レギュレーション違反に気づいた主催者から追手がかかっている。
優先順位は比較的高い。

デイパックと支給品二つ（シザースのデッキ@仮面ライダー龍騎、
金塊@Gengen Channel）はミラーワールド内に放置さ
れています。消滅するか、また既になっているかは不明です。

第十八章 とにかく殺せとりあえず殺せ (流美、金谷章吾)

とにかく殺せとりあえず殺せ

「いちおう言っておくけど、俺は鬼じゃな——」

金谷章吾が言い終わるより早く、佐山流美は物干し竿を振るう。ステンレス製のそれは重量から取り回しが悪く素人が振るったところでそうそう当たるものでもないが、直撃すれば一発で致命傷になりかねないものだ。それを危なげなくかわしながら章吾はどう目の前の相手をやり過ぎすかを考え、流美はいかに目の前の相手を早く殺すかを考えた。

G—06で遭遇した二人が戦闘に突入するのにさしたる時間はいらなかった。スピードに任せた突貫を仕掛けた流美だが警戒されていたために空振りに終わり、しかし相手が無手のこともありラツシュを仕掛けることでリーチ差を活かしイニシアチブを握る。一方の章吾はたえちゃんが逃走しかつ農協のおっこに事情を話して立て籠るなり逃げるなり援護に来るなりの判断と実行ができるまで時間稼ぎをするつもりだった。鬼の単身での撃退も考えないわけでもないが、あまり体力を使えば後に響くためわざわざリスキーな手段はとりたくない。そのため最低限の動作でありながら慎重に攻撃を回避することに努めていた。そしてその結果起こるのは、戦闘の長期化である。

(早く、早く！)

(こいつ、こんだけ振っててまだ振りませんのかよ……)

焦りに駆られて物干し竿を振り回す流美は、息が上がりながらもしかし章吾を攻め立てる。腕が上がらなくなってきたことと振り慣れてきたことで大ぶりの軌道が小さく無駄のないものとなるが、駄目。いまだ当たらない。そのことが更に流美を焦らせる。

一方の章吾もこうして時間を稼いでいることに限界を感じつつあった。流美の気力と執念は想定を上回っており、その執拗な攻撃は

徐々にであるが回避を困難なものしつつある。依然章吾は一発たりともかすりすらしていないが、常に振るわれるため足を止めることができない。これでは足を使わされてしまう。そしてもう一つ。この戦闘の中で二人は元の場所から離れ徐々に農協へと近づいていつている。章吾の誘導で東に回り込むような形にはしているが、しかし直線距離で言えば10や20mは詰められてしまっていた。これは考えものである。いつそ息があるうちにカウンターを仕掛けるか、それとも農協までダッシュで逃げてしまおうか。そう考えたところで流美の物干し竿が顔面に迫った。

「ッ！」

息を呑む。バックステップでは流美の踏み込みと突き出しによるリーチの延長から逃れられず、尻もちをつくように倒れ込むこと刺突を凌ぐ。ぐつ、と声にならぬ息が漏れる。ハッ、と喜色の混じった声なき息が流美から漏れる。そこから振り下ろし。ローリングでの回避。風ぎ。伏せて回避。再びの振り下ろしと、ローリング。

(やばい……立てねえ……！)

(殺った……！)

必死のラッシュが引き寄せたワンチャンスでありワンミス。章吾の体勢とともに崩れた均衡が勝負を動かす。うつ伏せになったその背中を刺し貫かんとでも言うかのように流美は全力で跳躍した。空中で物干し竿を背中に垂直になるように立て、全体重をもって振り下ろす。上半身を狙ったその一撃はどこに当たろうとも骨折か内臓破裂を確実に引き起こすだろう。

もし当たればだが。

「ナメんな。」

「ぎゃっ！」

行われたのは逆立ち放たれたのは後ろ蹴り。上半身の腕力・握力・背筋力を連動させた強引な体勢の変更とその副産物として上方方向に向けられた下半身を蹴りとして使うカウンター。それが流美の顔を急襲する。前歯を叩き折られながらも地面に刺さった物干し竿を引き抜こうとするも、一瞬早く勢いを無くした章吾の脚がそれを絡め

とる。そしてポールダンスの要領で上下の動きを横への動きに変えた章吾は無防備な体を抑え込まれた。

まさしく一瞬の一転攻勢。絶対的な優勢が次の瞬間には絶望的な劣勢へとシフトする。腕を極められ大地に組み伏せられた流美は、その時になつて自分の危機に気づいた。

なんで、どうして、と自問する。わけのわからぬうちに自分は武器を無くし身動きできなくされている。つい数秒前までは明らかに勝っていたはずなのに、なんたる理不尽！

(包丁まで持ってたのか……ヤバかったな。)

一方の章吾に訪れたのは安堵感。不利な均衡をひとまず勝利で終わらせられたことは大きい。後は拘束したまま刃物などの凶器を没収して絞め落として逃げれば当座の安全は作り出せるだろうと考えながら流美から包丁を奪い取る。火事場の馬鹿力とでも形容したくなる強い抵抗はされたが、関節を極めているのだ、その状態で遅れを取るほど章吾はぬるい男ではない。今までの流美の動きからして彼女が武器を無くした段階で勝ちの目は完全に消えていた。

だから、まだ流美は限り無く詰みに近い五分であり。

「……んな。」

「は？ようやく話す気に——」

「ナメんなアツツ!!」

章吾の腕に熱が走る。そこに赤い線が真一文字に刻まれ空中へと歪に拡がっていくと同時に痛みが襲い、体勢が崩れる。

「死——ねえええええええ!!」

「クソっ——」

奪い取った包丁を取り落とす。それを抜け目無く奪い返した流美が振り下ろす包丁を手首を殴りつけて防ぐ。それと同時に別方向から向かってきた光に反射的に腕を上げ顔を守ると、再び熱が走った。

(こいつ、包丁を——)

「死ねっ！死んで!!」

(——包丁を2本持ってやがった!)

反転攻勢、両手に包丁を握った流美のラッシュが章吾を襲う。今度

は物干し竿の時のように走り回って逃げることはできない。下半身は抑え込みをひっくり返されたため流美に乗っかられている。それは刃物を持った相手にマウントポジションを取られたことを意味する。この体制では格闘技でもそうそう勝ち目は無い。まして上にいる側が凶器を持つているとなれば。

「クソっ！クソクソっ！早く死ねって！」

（待て、止める、死ぬだろ、嘘だ、助けてくれ。）

結果は歴然としている。

流美の腕が振り下ろされる度に章吾は必死に腕を盾にする。それは命を繋ぐために必要な行為であるが、一撃毎に筋肉を破り骨を絶ち神経を斬り腱を抉られていく。出血とともに章吾の脳内を駆けるアドレナリンが増加、体感時間が引き伸ばされ自分の命が失われていくのが痛感させられる。ビクビクと痙攣する2本の腕を介して体に叩き込まれる。それと共にその視界には流美ではなく他の物が見えてきた。母だ。入院している母が章吾には見えた。それは走馬灯であつたが章吾にはそれが何なのかすらわからなかつた。ただただ必死に頭部を腕で抑えながら、なぜかすごく遠いものに思えていくその面影だけが印象的だつた。

「これで、終わりだああっ!!!」

どこかで誰かが叫んでいた。必死な顔だつた。誰が終わりなのか。章吾だ。章吾自身が終わりなのだ。

（――終われねえ。）

だめだ。

（――帰るんだ。）

いいやここで死ね。

（――生きて帰るんだっ！）

いいや違う、金谷章吾。お前はここで死――

「俺は、死ねねえっ!!」

「がっ、あがあああああっ!!!」

問答無用！それは頭突き！自分の顔面を掠める包丁を見向きもせず、佐山流美の鼻っ面に前頭部を叩き込むっ！そしてすぐさま追撃と

して向けられるのは、齒！それが流美の右目を喰いちぎったのだ！！
(逃げないとマズイ！)

流美は手をにやろうとするのを気合で抑えると、猛然とダツシユを始める。激痛の中辛うじて残った理性は、ふっふつと沸いてくる恐怖心と共に撤退を選択する。潰れた視界では自分がどこに行こうとしているのかもわからなくても、急速に戦場から離れることには変わりなかった。

そして残された章吾は、しばしの間茫然としていた。腕の痛みと寒さと口の中の水晶体ら眼球の味だけが意識を覚醒させ続けている。遅れてやってきた生きているという実感も、相手の眼を喰らったという行為も、困惑を深めるだけ。ただそれでも、この場を離れなければという意識だけは残されていた。

【G106／00時38分】

【金谷章吾@絶望鬼(っこ)】

〔役〕：子

〔状態〕：左下腕10ヶ所・右下腕9ヶ所・左上腕6ヶ所・右上腕3ヶ所の包丁による刺し傷、失血（小・継続中）、精神的疲労（中）

〔装備〕：『式札』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：絶対に生きて帰る

1：何がなんでも生きて帰る。

2：自分以外の存在を探索。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

佐山流美を『鬼』と誤認。

【佐山流美@ミスミソウ】

〔役〕：子

〔状態〕：、右目喪失、失血（小・継続中）、顔に傷、血は止まってい

る

〔装備〕：包丁×2、『水晶』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：殺される前に殺してやる

1：逃げる。

2：たえちゃんを殺す。

3：自分がどの役か知りたい

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

参戦時期は第18話開始直後。

金谷章吾を『鬼』と誤認しました。

※流美が現地調達した物資が近くの物陰に隠されています。内容は
後続の書き手さんにおまかせします。

第十九章 黒い探求者（稗田、翠、中沢）

※二話投稿『（稗田礼二郎登場話）鬼踊り』&『黒い探求者』

「ここは……この世か……？」

見上げれば明るくも暗くもない、火花を散らす異様な赤い空。見回せば無人の街。

男は、こうした雰囲気の場合に幾度か出くわしたことがある。常世、異界……人ならざるものが棲む領域。

飛行機やパラシュートといった現代的なものが使われているからといって、人間の、少なくともまともな人間の仕業とも思えない。

壁に貼られたビラや、上空から飛行機が撒いているビラには、同じ文面。

「鬼ごっこに、子を守る親の役を加えたゲーム、ということか……。しかし、これは……」

聡明な彼は、3つの勝利条件を見て困惑する。鬼と子は分かる。だが、親は。親だけが勝利する時、子はどうなる。

しかも、「死ぬ」「生きている」といった文言。殺し合いか。常識的に考えれば、親と子が揃って生き残り、脱出する方法を考えるとということになる。

とはいえ異常な状況だ。鬼はともあれ、親や子も、果たして自分のような常人だけだろうか。そして制限時間は24時間。グズグズしていられない。

「ともかく、このデイパックの中身を確認してみるか……」

【??/00時02分】

【稗田礼二郎@妖怪ハンター】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：

「道具」：デイパック（不明支給品2）

「思考・行動」

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：デイパックの中身を確認する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

漫画『妖怪ハンター』シリーズの主人公。元K大考古学教授。いくつかの大学の客員教授をつとめ、著述活動も行っている。

日本中の奇怪な事件の研究を生業としており、若い学生やマスコミからは「妖怪ハンター」というあだ名がつけられている。

瘦躯長身で黒い長髪、黒いスーツに黒ネクタイという出で立ち。ジュリー（沢田研二）に似ていると言われたこともある。

年齢は不詳。1974年から現代まで容姿上は加齢の描写もないが、一応ただの人間。特に妖怪を捕獲・退治しているわけでもない。

奇怪な事件や災害、怪物に遭遇しても冷静に解釈・解説し、不思議と逃げおおせて生き残る。

沖木島の中部、座標E-04、ホテル跡。と言うか、廃ホテル。

おそらくはバブル期、リゾート誘致のために建設され、バブル崩壊と共に放棄されたと思しい。

日本中にいくらかでもあるような廃墟だ。電気や水は期待できないが……。

「香川県の沖木島、か……」

残っていた標識や看板から、それは読み取れた。知らない島だが、ではここは、地獄や常世ではなく、現世なのか。

いや、現世に存在した島が、異界に移された……もしくは、写された、のだろうか。

長髪の男、『稗田礼二郎』は、ブツブツと呟きながら腕組みをし、顎を撫でる。

無用な考察のようだが、何か脱出のヒントになるかも知れない。そもそも、なぜ自分のような者が、こんなところで異様な『鬼ごっこ』に参加させられているのか。

借金をした覚えも、ヤクザの恨みを買った覚えもない。突然目の前が真っ暗になって、こうなった。

何者かに無作為に選ばれてしまったのか。支給された手裏剣と鉄球は、武器と言えれば武器だが、銃ほどの殺傷力はない。

とすれば少なくとも殺人ゲームではなからうが、殺人ゲームに発展するようになっているか……。

ザク、ザク、と砂利を踏みしめ、廃ホテルに足を踏み入れる。中は暗いが、薄っすらと外の光が漏れ入る。

「ん？ これは……足跡だ。二人ぶん……新しいぞ」

床を覆う埃の上に、足跡がついている。自分が来る以前に、誰かが連れ立ってここへ入って来たようだ。

おそらく、鬼から逃げて来た子や親だろう。ならば合流して、情報を共有するでしょう。

◆ 稗田は足跡を追い、ホテルの奥へ進んでいく。

「ハア、ハア、ハア、ハア………」

どこをどう走って来たか、もう覚えていない。

恐怖の余りパニック状態になった超能力少女『名波翠』は、モブ少年『中沢』の手を引っ張って山道をひた走り、気がついたらここにいた。

廃ホテルの一室、だろう。パニック・ホラー映画だと、怪物とか狂人とかゾンビがドアをぶち破って襲ってきて、『Here's Johnny!』とか言う感じの。

男の子と二人でホテルに来るとは思わなかったが、そんなロマンチックな事態ではまったくない。いちやついたヤツらから死ぬ。そ

れが流儀。

「あの……大丈夫？」

「大丈夫に見える？」

「いえ、その……」

「オーケー、大丈夫、オーライ。ビックリし過ぎて、パニックただけ。ごめんね」

「ああいえ、こっちこそ……無理も無いよ、なんか怖い人っぽかったし」

中沢は割と冷静だが、こっちは猫を被ってる余裕もクソもなかった。感受性が強すぎるのも問題だ。

いや、アレはマジでヤバかった。神にも匹敵する凄まじいオーラ。只者であるはずがない。あのオーラが出てる時点で確定的に只者じゃない。

追っては来ないか。来たら来たで逃げるしかない。中沢を犠牲にする、のはまあ倫理的にアレとして。

こっちだつてお前、超能力少女様やぞ。多少のお前、チンピラとかならお前、スーツ、ハーツ。

スカム映画脳か銀魂じみた支離滅裂な思考をやめ、ゆっくりと呼吸を整える。周囲を確認する。埃があたりに舞い散っている。口と鼻を覆う。

だいぶバタバタしたせいで、このへんの埃に足跡がついてしまった。やつがこれを追ってきたら。いや、『バックトラック』とか仕掛けてみるか。逆に。

「……あの……なんか、足音が」

「ひっ!？」

急に中沢に話しかけられ、心臓が喉から飛び出そうになる。こんなモブ野郎と吊り橋効果でラブデスターしてどないすんねん。

あの鬼が追って来たか。部屋の中へ隠れるか。いや、逃げ場がない。玄関ホールの方から男の声。

「おーい、誰かいるのか？ 私は親の役だ！ 安心してくれ！」

◆ 名波さんに言われて、僕が様子を見に出る。玄関ホール近くにいたのは、長身痩躯で黒尽くめの男性。

さっきの、なんか音を出していた、あの男ではないようだ。黒髪で長髪、年齢はわかりにくいだが、子どもではない。

「あ、あの……、そちらのお名前、は」

「ああ、『稗田礼二郎』だ。稗田でいい。君は？」

「な、『中沢』と言います……。子の役、だと、思いますけど」

距離を保ち、学生鞆で胸元を守りながら、おずおずと名乗る。殺気や悪意は感じない。

「君だけかね？ 足跡は二人ぶんだが、奥に隠れているのか？」

「えと、あの。ほんとに、鬼じゃないんですね」

「そうだ。少なくとも、無害な子どもに危害を加えるような人間じゃないよ。安心してくれ」

稗田、という男は両手を挙げ、敵意がないことをアピールする。狡猾な鬼かも知れないが、かと言って見分ける方法も……。

あ、そうだ。『お守り』を鬼にぶつければ死ぬ、と書いてあった。いざという時はそれがある。

「ええと、じゃあ、その、奥にもうひとりいます。さっき鬼っぽい人に出くわして、パニックになって。」

——その、女の子なんて、僕が様子を見に」

包み隠さず話す。対応者として、ここは素直に話した方がいいと思っただけだ。

男は頷き、頬を緩める。

「そうか。偉いな、中沢くん」

褒められた。言われてみれば、褒められてもいい行動かも、知れない。警戒心が緩む。

「……私は別に喧嘩が強いわけでもなく、超能力者でもないし、大した武器もない。」

だが私は、与えられた役目以前に、教育者であり年長者だ。君たちを守ろう。約束する」

「あ、ありがとうございます！」

【E-04 (ホテル跡) / 00時40分】

【稗田礼二郎@妖怪ハンター】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、やや疲労

〔装備〕：スリケン@ニンジャスレイヤー、ジャイロの鉄球@SBR

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

- 1：廃ホテルで他の人や道具、情報を探す。
- 2：中沢くんを信頼し、もうひとりの子と会って、情報を共有する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【名波翠@テレパシー少女蘭】

〔役〕：子

〔状態〕：疲労(小)、キングへの恐怖

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：こんなアホなことをしでかした奴に一発焼き入れて帰る。

1：外へ出るのが怖い。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を子と推測。

テレパシーなどの超能力が使えるが、普段よりは疲れやすい。

【中沢@魔法少女まどか☆マジカ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：学生鞆（中身は教科書とかノートとか筆記用具とか）

〔思考・行動〕

基本方針：とりあえず人を探す。知り合いがいたら合流したい。

1：名波さんに着いていく。

2：稗田さんをつとりあえず信用し、名波さんに紹介する。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

自分の役を子と推測。

第二十章 美女と野獣先輩（オルガ、田所、プルツ、光彦、大翔、堕姫）
美女と野獣先輩

一般に、陸地は暖まりやすく冷えやすいが、海は暖まりにくく冷えにくい。

そのため日中、陸上の空気は海上の空気より速く暖められ、上昇する。

これによって地表付近の気圧が下がるため、海辺では海から陸へ風が吹く。

一方、日が沈むと、陸上の空気は海上よりも速く冷え、陸から海へ風が吹く。

しかしながら……この異常な超自然の空間は、昼とも夜ともつかない。太陽は出ていないが、空は不気味に赤い。

時計は深夜をさしているが、それほど暑くも寒くもない。裸でいれば少し肌寒くは感じるが。

ならば一体、風の向きはどうなっているのか？ 風は止まり、風いでいるのか？

答えは……『海から陸へ』吹いている。原理はともかく、今はそうなっている。島を取り囲む不気味な霧の作用、なのだろうか。

そして、この海風によって、『大場大翔』は酷く迷惑していた。
（くっ……臭い！ 鼻が曲がる！ 頭がどうにかなりそうだ！）

口と鼻を抑え、臭いの源から必死に遠ざかる大翔を、海風に乗った悪臭が追ってくる。

走る。走る。闇雲に逃げる。その先に――

◆ 悪臭の源は、革靴だ。それを履いている男も、また臭い。しかもブリーフ一丁だ。変態だ。

その変態の傍らで、機関銃を構えて臥せている男がひとり。彼は変態ではない。ちゃんと服も着ている。それほど臭くもない。

では、なぜ彼——『オルガ・イツカ』は、この臭い男の傍らにいるのか。

それは悪臭男——『水泳部の田所』を追跡し、こちらへ向かってくる者たちがいるからだ。

（わけがわからねえが、あのガキどもに話を聞くしかねえな……この変態はまあ、アレとして）

海から陸へ、すなわち、接近してくる二人の子供の方向から、オルガと田所へ向かって風が吹いている。

田所の放つ悪臭は、二人の子供へは届かない。はずだ。しかし、こちらへ向かってくる。

（つまり、この変態の足跡と、それについた臭いを追って来てるわけだが……）

田所は、オルガにねっとりした視線を向けつつも黙っている。下手な動きをすれば、機関銃の銃口がこつちを向くだろう。

一応田所も日本刀を持っているが、フィクションの剣豪でもあるまいし、機関銃相手に勝てるとは思えない。

とにかく、自分を追っている誰かを誘き出すつもりなのだろう。それが何を招くかは、いまのところ分からない。

◆ 「海岸線の物陰を伝いながら、ね。風がこつちへ吹いてるってことは……、あった、足跡。臭いもする」

少し前。哀れな少年『円谷光彦』から服と靴を奪った少女『プルツー』は、靴下とブリーフだけになった光彦を連れて、彼が見たという男を追っていた。

聞くならく、男は色黒で中肉中背、ブリーフ一丁、刀を持っている、臭い。どうもまともな人物像が浮かんでこない。狂人や変態だろうか。

だが、現状唯一の手がかりだ。スマートフォンとかいう通信機器はあるが、まだ通じない。光彦から取り上げた『お守り』とやらは胡散臭い。

手元に武器はないが……石ぐらいは落ちている。刀相手に接近戦を挑む必要もない。自分なら、小石を投げても並の男なら倒せるだろう。

いくつかの小石を拾い、ポケットに入れると、男の追跡を再開する。獲物を狙う野獣に睨まれているような感覚。野獣の臭い。面白い。なんとかいう英雄は石を投げてライオンを倒したという。

生身の人類の最強の武器は、拳でも蹴りでも、爪でも牙でもない。投擲能力だ。遺伝子の奥からふつつつと狩猟者の感覚が呼び起こされる。

その時……プルツーは僅かな殺気を感じた。野獣の、ではない。銃口がこちらを向いている。例の悪臭男か。あるいは別の存在か。

「伏せろ。狙われている」

小声で光彦を制し、地面に伏せさせる。どうする。銃に投石で挑むのは、流石に無謀か。ならば……。

「待て。敵意はない。そちらとの対話を望む」

プルツーは右手を掲げ、殺気と悪臭の方向へ呼びかけた。言葉が通じる相手であれば、言葉こそが最強の武器となり得る。

ややあって、物陰から男が二人、姿を現した。ブリーフ一丁の刀を持った男と、もうひとり。特徴的な髪型をした、機関銃を構えた男。

「ああ……こつちも、子供を撃つのは好きじゃない。いろいろ話も聞きたいしな」

「それはなにより。こちらも突然状況に投げ込まれて、困惑しているんだ」

【A-02 / 00時42分】

【オルガ・イツカ@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：UZI@現実

【道具】：デイパック（不明支給品1）

【思考・行動】

基本方針：とにかく生き残る。

1：子供たちと会話する。少女（プルツ）と臭い男（田所）を警戒。

※その他

自分の役・各役の人数・会場の地図・制限時間は全て未把握。各役の勝利条件は一応把握。

【水泳部の田所@昏睡レイプ！ 野獣と化した先輩】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：日本刀、野原ひろしの革靴@クレヨンしんちゃん、ブリー

フ

【道具】：デイパック、睡眠薬（持参）

【思考・行動】

基本方針：家に帰る。

1：とりあえず誰かの話を聞き、現状を把握したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【プルツ@機動戦士ガンダムZZ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『スマートフォン（子）』、『お守り』、光彦の服と靴

【道具】：

【思考・行動】

基本方針：生き残る。

1：この鬼ごっこの目的と自分の記憶について考える。

2：機関銃の男と会話する。もうひとりの男（田所）にはあまり近づきたくない。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

地獄の雰囲気にもまれてニュータイプの方が若干鈍っていましたが、慣れつつあります。

この鬼ごっこを「記憶を操作された人間に関する実験」だと考察しました。

【円谷光彦@名探偵コナン】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：パンツと靴下のみ

〔道具〕：DBバッジ（現在通信不能）

〔思考・行動〕

基本方針：生還の為に行動。子や親と合流したい。

1：このゲームは誰が、どのように、何故行ったのかを考える。

2：機関銃の男と会話する。もうひとりの男（田所）にはあまり近づきたくない。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

この鬼ごっこを「記憶を操作された人間に関する実験」だと考察しました。

◆ 「ハア、ハア、ハア。ああ、気持ち悪かった……」

やや内陸に逃れ、やっと悪臭から解放された大翔は、大きく深呼吸する。

悪魔が出現する時は悪臭を放つこともあるというが、その前触れだったのだろうか。悪魔というか、この会場では鬼か。

とにかく、あそこへは近づかないでおこう。反対側へ、内陸へ逃げなくては。そして仲間を見つけなくては。

それにしても、人がいない。まずは民家を探してみよう。誰か隠れているかも知れない。

【B—02／00時43分】

【大場大翔@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：とにかく人と会う

1：鬼と異臭を警戒。

2：幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。



銀髪の妖艶な美女がひとり、密かに歩む。露出度の高い服装で、頭に簪。腰から無数の帯を生やし、三本足の下駄を履く。

全身には——ヒビのような紋様。唇からは牙が覗く。然り、彼女は紛れもなく『鬼』だ。名を『堕鬼』。

兄の『妓夫太郎』と一心同体、人から鬼に堕ちて百年、悪行非道は数知れず。

鬼退治されて地獄に堕ちて、やれと言われたのは『鬼ごっこ』。

丸一日の期限内に、島の中にいる生者を捕まえる。子は三十六匹、子を守る親の役は二十四匹。子とろの鬼は十二匹。

子は過半数を捕まえればよく、殺して数を減らせばなおよい。そうすりゃ、現世へ戻れると。

——いやはや、さすがは地獄の鬼。なに、やることは現世と変わりはない。

人間に化けることは出来る。帯を分けて分身を作り、島に潜ませて子や親を襲わせてもいい。ただ……まだるっこしい。

時間は充分あるし、他の鬼も張り切っている。全力で楽しもう。愉

しよう。

醜い人間を捕まえて、何もかもを奪ってやろう。神も仏もあるものか、いれば必ず殺してやろう。

そう思い、早速襲った連中は、意外な反撃をかましてきた。帯が焼け、体が焼けた。殺せなかった。

焼いた奴は反動で死んだらしいが、こちらには幸先の悪い始まりとなった。負傷は再生中だが、気分が悪い。

なに、もう少し楽に殺せそうな連中を探し出し、いたぶり殺して、気晴らしにしてくれよう。ああ、憎い憎い。

「くさあい、くさい。におう、におう。なにやら子どものおいがするねえ」

【B—02／00時43分】

【墮鬼（妓夫太郎）@鬼滅の刃】

〔役〕：鬼

〔状態〕：負傷（再生中）

〔装備〕：無し

〔道具〕：四次元つぼい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、食らい、現世へと復活する。

1：幸せそうな子や親を食い殺し取り立てる。

※その他

スマートフォン（鬼）の所在は不明。落としたのかも、元から入ってなかったのかもしれませんが。

第二二章 華麗なる戦い (4th、織田)

(織田敏憲登場話) 人という字は

(糞っ、何で僕が鬼ごっこなんて『下品』な遊びをやらなくちゃあいけないんだ！)

そういうのは他の体力馬鹿な『下品』な連中が適任だろうに……

まあ、『高貴』な僕をプログラムから脱出させてくれたことだけは感謝してやるかな)

そう心中で悪態をつく少年。表情こそ被っているヘルメットで窺えないが、彼の苛立ちは歩き方や気配で全面に出ていた。

彼の名は織田敏憲、国の指揮する血濡られたプログラムーバートル・ロワイアルから、今回の絶望鬼ごっこに何時の間にもやら参加させられていた”子”の一人である。

(『高貴』な僕はこんな『下品』な場所で燻ってる暇は無いんだ！)

そう意気込むは良いものの、織田少年の未来は暗い。

プログラムからの脱走は重罪であり、まず間違いなく追われる身となる。

幸先よく『下品』な女を殺し、優勝のために動いていた労力がこれで台無しだ。

(いや、落ち着け！ まだ希望はある…… そもそもこんな大掛かりなゲームは、まず政府が関わっているに決まってる。

新しいプログラムに変更とか、兎に角そんな理由でやり直したのかもしれない。

まず一番に考えるべきは生き残ること。親も子も、誰だろうと利用するものは利用してやる)

これは持論だが、人という字は人が人を互いに支え合っているのではない。一方を犠牲に、一方が支えられているのだ。

それが、世の中の心理というものだ。

利用されるか利用するかだけが、プログラムだろうが鬼ごっこだろうが変わらない絶対のルールだと彼は思っている。

銃も弾もある。身を守る防弾チョッキも、ヘルメットもある。既に殺人を経験し、自信も大いにある。

感情なきマードーによる敗北を経験していない織田は、自信満々で地獄を闊歩していた。

【???／00時03分】

【織田敏憲@バトル・ロワイアル（漫画）】

【役】：子

【状態】 健康

【装備】：ヘルメット、防弾チョッキ、ワルサーP38

【道具】：不明

【思考・行動】

基本方針：利用できそうな親か子と合流する。鬼らしき相手がいたら逃げる

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。人物情報

バトル・ロワイアルの登場人物。今回は漫画版からの出展。

城岩中学校3年B組に所属する男子出席番号4番。

クラスで1, 2を争う低身長と、クラスで1, 2を争う大邸宅に住まうお坊ちゃんで、中学生ながら既にバイオリン奏者として一定の名声を得ているが、その顔はガマガエルと称される男。

嫌いなもの：1・顔のいい男 2・背の高い男 3・総じて『下品』な男

普段は割とおとなしく、クラスメイトともとくに交流を持っていないが、心の底ではクラスの自分以外の人間を『下品』と見下し、自身は『高貴』と断じる、しかし『下品』の基準も『高貴』の基準も滅茶苦茶で、ナルシズムとコンプレックスの塊のような男。

ぶつちやけ典型的な小物悪役、小悪党の部類である。

しかし支給された防弾チョッキを最大に生かし、だまし討ちで数人の殺害に成功するなど、その狡猾性は、ことプログラムでは侮れない

物が有り、バトロワの中でもキャラの濃い部類である事から意外にも
人気自体はそれほど低くなかったりする。(おふざけの部類だろうが
『様』づけするファンも居る程)

(豊穰礼佑登場話) Re:ダイヤル

ザザ、という耳障りなノイズが少年——といっても幼稚園児ほどの男児——の持つ一冊のノートから響く。

一度に出るノイズは長くても一秒あるかないかだが、一分の間に数度から数十度起こるそれは、その音を聞いたものに私は空耳ではなく現にここに存在しているのだと言わんばかりだ。

ではそんな怪音を発するノートはどのようなものかというところ、ある一点を除いて特別変わったところのないものだ。

ノートに描かれた絵日記、それがノイズの度に変化していること以外は。

(頻繁に未来が変わりすぎて……それにこの夜の日記、最後の鬼を倒したら親が勝ってDEAD END……)

考え事を落ち着いてするために入ったトイレの窓から外を見る。高いところからバラまかれたのか、やたらにそこら中にある鬼ごっこらしきなにかのルールが書かれたチラシを読んだ。

少年の持つノートは、未来日記と呼ばれるものだ。彼の持つ物は「はいぱーびじょんだいありー」という名称で、朝・昼・晩の三度に渡って彼が書くはずの絵日記が予め表示されるようになっていて。これだけなら便利な日記なのだが、この日記を破壊されると持ち主たる彼も死ぬという代物であった。

少年はチラシから目を離すとガスマスクと包丁に目を移した。片方は彼が殺すために使い、片方は彼を殺すために使われたものだ。死んだと思ったらそれらと共に見知らぬ家にいた。それが彼が自身の身に起こったことについて知る全てであった。

(日記を持ち歩くのはリスキーだ。ノイズもうるさいし。夜まで僕が死ぬことがないんだっただどこかに隠しておいても問題ない。)

しかしそんなことはどうだっていいことだ。未来がわかる日記があるなら死んだり死ななかつたりしてもそんなものだろう。そう考えて彼の頭の中には既にこの新しいゲームについて考え始めている。

手札はガスマスクと包丁、いつの間にかポケットに入っていたスマートフォン。そしてはいぱーびじょんだいありー。これでどう戦っていくか……

「鬼ごっこか……今度は負けないよ。エリート的にね。」

そう言つて未来日記所有者豊穰礼佑はニヤリと口角を上げた。

【H—07／00時11分】

【豊穰礼佑@未来日記】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：はいぱーびじょんだいありー@未来日記

〔道具〕：『スマートフォン（子）』、ガスマスク、包丁

〔思考・行動〕

基本方針：このゲームに勝利してエリートであることを示す。

1：情報を集める。

2：未来日記所有者は優先的に殺す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……未来日記におけるサバイバルゲームの参加者である日記所有者の一人でまたの名を5th。4歳ほどの子供で外面は歳通りだが、内面はエリート意識の塊。完全予知が可能な主人公達を略により出し抜き、あと一步のところまで追い詰めるも、最期は主人公達の捨て身の行動で破れ四人目の脱落者となった。この鬼ごっこには死亡後からの参戦である。

華麗なる戦い

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
ぎんぱつのおねーさんにごぎりできられた。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
きんぱつのおねーさんにはんまーでなぐられちゃった。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
ぴえろにつかまってたべられちゃった。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
ぴえろにつかまったらすーつのおじさんにうたれた。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
ぞんびのおねーさんになたでつぶされちゃった。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
うちゆうじんにからだをばらばらにされた。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
きものをきたおねーさんにかいだんからつきおとされた。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
にんじやおにいさんになわとびでくびをしめられた。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ

いきなりうしろからあたまをなぐられたらのうみそがとびでた。
でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
しよーごおにーさんにないふでさされちゃった。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
たえちゃんといっしよにくるまにはねられた。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
あべさんのしたいにふれたらばくはつした。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
あおいおねーさんのしたいにふれたらばくはつした。でつどえん
どー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
ゆーちゃんのしたいにふれたらばくはつした。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
えるさんのしたいにふれたらばくはつした。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん よる
くさそうなおんなのこにさわったらばくはつした。でつどえん
どー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん よる
へんならじこんにさわったらばくはつした。でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ
むねがくるしい！でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん おひる
むねがくるしい！でつどえんどー。

5 がつ 15 にち てんき くもり じかん よる
むねがくるしい！でつどえんどー。

でつどえんどー。

でつどえんどー。

でつどえんどー。

（この家に籠つても外のどの方向に行つてもDEAD ENDフラグが折れない。しかも僕が行動を変えようとしくなくても日記が変わることがある。僕以外にも未来日記所有者がいるのは間違いないね。）
ふとんを頭から被り懐中電灯で絵日記を眺める幼児というのは、その光景だけであれば日常的一幕でありそうなるものであろう。

しかしその絵日記が微かだがしっかりとノイズを出して何度も何度もひとりで描き変わるとなれば、誰がどう見ても非日常的な光景となる。

未来日記所有者、豊穰礼佑は最初にいた家から一步も出ることができていなかった。

彼の『はいぱーびじょんだいありー』は、日に三度の自分の行動と周囲の状況が書かれた絵日記という形で予知が行われる。その予知の結果はいずれもDEAD END、即ち死。その事実になりうる未来が彼の行動を縛っていた。

頻繁に変わるため日記の内容の全てを把握しているわけではないが、礼佑は日記に対して全集中力を向けていた。前の『ゲーム』では未来日記所有者の裏をかくため日記を見ることは少なかったが、今回はまだ状況が見えない。そこで実際に行動を起こさずとも行動の予

定を立てるだけで結果を見れる未来日記という利点を活かそうとしたのだが、尽く自分の死によって日記は終わってしまった。この家の付近にいれば確実にピエロに殺されるようだし、学校に集まるグループに近づいても灯台に集まるグループに近づいても農協に集まってしまう。山の地下にあるデパートは少なくとも朝まではまだ安全そうだが、どんな予定を立てて途中の死を回避しようとも夜までには爆死するか突然死するようである。いつそ海に逃げようとも考えたが、良くて溺死悪くて化物に食われるだけであるらしい。

(未来日記所有者はおそらく僕のことにも既に勘づいているはず。先に死んだ3rd、6th、12thのうち、6thはこの場で大した予知はできない。残るは一番はじめに死んで正体が不明の3rdと、6thと一緒にゆのおねーちゃん達に殺された12thか……日記の変わる頻度からして、僕と同じように日記でのシミュレーションをしているのかな？それとも所有者全員が参加している？この鬼ごっここの参加者全員が未来日記所有者の可能性もあるかな。)

しかしその程度のことでは礼佑はゲームから降りる気は無い。自分のDEAD ENDフラグはその内容自体は確定していない。つまり読み合い出し抜き合いを制すれば逆転は不可能ではない。それになにより降って湧いたこのボーナスステージ、楽しまないわけがない。

ざざ、という音と共にまた日記が描き変わる。今度は長期戦を想定して食料を集める予定を立てたのだが、どうやら今までとは違う人間と会うようだ。ということは、自分が行動を起こさなければ隠れ潜む確率が高い参加者ということ。おそらくチームなどにはつくりたくない。寝首をかかれることを警戒した小心中か他が潰れるのを高みの見物できると思いいんでいる高慢なタイプだ。だが、それは逆に礼佑にとって好都合。取り入れれば下手な真似をそうそうしない手駒が手に入る。

礼佑は更にシミュレーションを進める。その度に日記は描き変わ

る。どうやらこの男、この場所——沖木島とらしい——の漠然とした土地勘があるらしい。武器は銃で何もしなくとも昼には殺しにくるようだが、それは裏を返せば朝の間は殺されない可能性が高いということ。このままここにいてもピエロに殺される未来が現実となるだけ。さて、どうするか。

「ま、おねーちゃん達よりは弱そうだしいつか!」

礼佑はいぱーびじょんだいありーを見た。描かれているのは、黒服の男。

その男の名前は、織田敏憲。

「この家は缶詰がやけに多いな。ふん、こんなものを食べるような貧乏人でも僕の勝ちに貢献できるんだ、感謝してほしいね。」

そんなことを呟きながら家から盗みとったランドセルに水を満杯にしたペットボトルと缶詰を詰めていく男。学ランにフルフェイスのヘルメットという怪しい彼の名は、織田敏憲。『プログラム』の元参加者で今は『子』の役の鬼ごっこの参加者だ。彼がこの鬼ごっこにあたってまず行ったのは、食料の確保だった。

「デイパックがあればこんなものに頼らなくても良かったのに。身軽にしたのは失敗だったか?」

彼がこの鬼ごっこに知らず足を踏み入れたときその手にデイパックは無かった。彼の言葉通り身軽さを優先したのだが、その間にここに連れて来られてしまったのだ。空の色に気づいて慌てて隠し場所に戻るがどこを探しても結局見つからず、現在は物資を求めて家探しである。

彼は装備の重要性を理解していた。先のプログラムでは丸一日を過ぎてもぶつ通しで続きそうだったことを考え、まずは飲食物の確保である。これは他の人間に補給ができなくするためという意味もある。飲まず食わずではどんな人間だって戦えない。人間は水を一日飲まないだけで倒れるのだ、自分の知らないところで野垂れ死んでくれるならそれで結構と彼は考えていた。

そしてランドセルはデイパックの代わりである。獲得した物資を

運ぶ手段が無ければ宝の持ち腐れだ。その点ランドセルは、容量はともかく身体への疲労がデイパックに比べて溜まりづらい。強度もあることから採用することとなった。

「うーむ、一つじゃ足りないな。キャリアバッグか何かに……かさ張るな。包丁とかも持っていきたいんだが。」

ついでに武器になりそうなものも集めておく。包丁などの刃物はもちろん、洗剤も持っていきたい。彼は高貴なのでまぜるな危険を混ぜると毒ガスが発生することも把握しているのだ。

ややあつて適当なトートバッグを見つけるとそこに武器類をぶち込む。PUBGでありがちな外見となった彼はさて次の家に行こうとしたところで、一人の子供を見つけた。

「——それでね、気づいたらね、ここにいて。」

「ああいい。だいたいわかった。」

ほとんど会話らしい会話もなく二人は家探しをしていた。一人は先程と同じく織田敏憲。そしてもう一人は首尾よく彼に取り入った豊穰礼佑である。

（こんな簡単にいくとか、つまんないなあ。こんな弱そうな奴かよ。）

（迷子のガキ？参加者だろ。あのビラでいう『子』だな。）

礼佑は自分がさしたる問題もなく織田に『保護』されることは予知していた。だから彼を選んだのだ。彼は自分を舐めている。無力な子供だと思っていない。

一方織田も打算で動いていた。こんな場所で子供を『保護』していれば、お優しい一部の人間はコロツと騙せるだろう。元のクラスの間はあっさり殺し合いに乗る下品な愚物ばかりだったが、幼児ならば問題はない。

（まずはステージ1クリアってね。）

（またいい『装備』が手に入った。）

（ここからはコイツを誘導して地下のデパートまで護衛させる。）

（こいつが持ってたガスマスクと包丁は預かると言って取り上げた。）

(クズみたいな人間らしいけど手駒としては丁度いい無能さかな。)
(そしてガキは『子供であること』、これがデカい。お人好しはこれで丸め込める。)

双方がそれぞれに相手の利用価値を測る。この鬼ごっこ、『子』は直接は戦うメリットはない。しかし彼らにそんなことは関係ない。彼らはどうであれ勝利すべき人間なのだ。

(出し抜いてやるよ……エリート的にね!!)

なぜなら彼らはエリートなのだから。

【H—07／00時44分】

【豊穰礼佑@未来日記】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：はいぱーびじょんだいありー@未来日記

〔道具〕：『スマートフォン（子）』

〔思考・行動〕

基本方針：このゲームに勝利してエリートであることを示す。

1：織田敏憲を利用しながら情報を集める。

2：ピエロ（ペニーワイズ）との接触を避けるため、西北西方面に逃走したい。

3：未来日記所有者は優先的に殺す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

未来日記による予知である程度の未来を把握しました。この場に留まると高確率でペニーワイズに殺害されます。

【織田敏憲@バトル・ロワイアル（漫画）】

〔役〕：子

〔状態〕 健康

〔装備〕：ヘルメット、防弾チョッキ、ワルサーP38、ランドセル、トートバッグ

〔道具〕：ランドセルに飲食物、トートバッグにガスマスクや包丁、洗剤といったもの、特別支給品

〔思考・行動〕

基本方針：利用できそうな親か子と合流する。鬼らしき相手がいたら逃げる。

1：豊穰礼佑を利用しながらプログラムに備える。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

自分の役が『子』だと推測。

第二二章 Ladies and gentlemen

en! (かばん、ミカ)

(三日月・オーガス登場話) バルバトス

「普通の土だな……それと海か……」

主催者本部・鬼の牢獄の出口である山腹のトンネルから地表に出て森の中で辺りを見回していた黒髪の少年、三日月・オーガスはそう言うとき、スコップから土を払い肩に担いで歩き出した。

マクギリス・フアリド事件と呼ばれたクーデターにガンダムを用いて参戦し、圧倒的な戦力差の相手に鬼神の如く戦い最期には英雄に討ち取られた、火星の悪魔。それが彼である。

今回鬼役としてある種の蘇りを果たしたそんな彼だが、この鬼ごっこには思うところがあつた。端的に言うとき、鬼を信用していない。かつて自分達を虐げていたCGSと呼ばれる民間警備会社の大人と、その言動がダブって見えたからだ。よってこの鬼ごっこ自体も信用してはいない、が、乗り気でないというわけではない。元より難しいことを考えるのは苦手なのだ、これ以外に道がないとなれば鬼として働きましょう。

「死んだ後の空って赤いんだな。」

草の匂いを鼻に吸い込みながら、空を見上げて歩く。そう、三日月・オーガスことミカは自分の足で歩いている。ガンダムバルバトスに捧げたはずの身体機能は、乗る以前の時のように十全であった。そのくせ阿頼耶識はしっかりとついているあたり、死後の世界というのは何かと融通が聞くのだろうかとうぼんやり思う。その青い目は暫し赤い空を見た後、地上の緑へと移った。

ミカの方針は、人と会うことだ。役には拘らないが、鬼はできれば避けたい。自分の境遇を考えると、鬼同士で敵対はせずとも、今日始めて会った人間と共同作業ができるなどとは思えないのだ。できるのであれば親がいい。役を明かす気はないが、もしバレたとしてもその場で黙らせる羽目になる可能性が少ないからだ。子の場合はその

れとなく先程のショッピングモールに誘導してそこで話を聞ければ一石二鳥だが、さすがにそんなにうまくはいかないだろう。

「コレの使い方も聞かなきゃな。」

そして人と会いたい理由のもう一つが、この支給品された紙袋だ。ミカは一度手を入れて以来直感で開封を避けていた。危険性が未知の物には迂闊に手を出さない、宇宙ねずみの用心である。それに、その中身を見れば警戒もしよう。

ガンダム・バルバトスルプスレクス。人機一体となり宇宙を駆けたミカの半身は、既に彼の手の中にあつた。

ミカは山を下る。なぜか自分の機体がわけのわからない袋に人形として入っている、この現在をなんとかしなくてはならない。海岸線に出るまでに誰かと出あえればいいなと思いつつながら、ミサンガの匂いを嗅いだ。

【E-06 / 00時31分】

【三日月・オーガス@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ】

〔役〕：鬼

〔状態〕：五体満足・阿頼耶識

〔装備〕：スコップ@現地調達

〔道具〕：四次元つばい紙袋（ガンダム・バルバトスルプスレクス@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ・スマートフォン（鬼）@オリジナル・不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：とにかく生き残る。

1：人と会う。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

人物解説……機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズのW主人公の一人。戦闘センスと身体能力・メンタルの天性の高さと、それを磨き続ける努力する心、そして人間と機械とを繋ぐ阿頼耶識を持った少

年。寡黙だが仲間思いでここだけまでなら主人公然とした主人公ではあるが——とにかく敵に容赦がない。必要であれば殺す。必要でなくとも必要だと言われれば色々考えつつ殺す。ベテランの軍人のような精神性を少年兵として育ったため子供の頃から持っている。そのため会う人によつては悪魔と呼ばれる。また未就学であり読み書きが怪しい。ちなみに将来の夢は農家。なお戦死後からの参戦である。

※二話投稿『かばん登場話』ゴールは別々スタートライン』&『Ladies and gentlemen!』

「……ど(っ)こ(っ)? なんで?」

帽子の少女はあたりを見回す。さっきまでバスに乗っていたはず……なのだが、急に全く違う場所だ。

不気味な赤い空。その空を飛んでなにかを撒き散らす、鳥じやなさそうなもの。ヒトが作ったつばい地形。周りには誰もいない。

「さ、サーバルちゃん? ボス?」

なんだろう。なんだかすごく、いやな予感がする。ここにいちやいけない気がする。怖い。

壁になにか、『文字』が書かれた紙が貼つてある。

「おに、(っ)っ(っ)? ……狩り(っ)っ(っ)、みたいなものかな……?」

少女は、それがなんだかよく知らない。知識にない。

彼女はまさしく人間なのだが、正確に言うところ「ただの人間」ではない。

超常の力を持つわけではない、「生まれたばかりの」純真無垢で無力な少女だ。

しかし、彼女には知恵と勇気と経験がある。ヒトとしての能力がある。

ヒトと鬼の悪意渦巻くこの修羅場で、彼女は動くのだろうか?

「だ、誰か、いませんか……?」

【??/00時07分】

【かばん@けものフレンズ】

【役】:子

【状態】:健康

【装備】:かばん、帽子

【道具】:未確認(背負っているかばんの中)

「思考・行動」

基本方針：誰かいないか探す。ここが何なのか調べる。

1：ここは……？

2：おにごっこつこつてなんだろう。逃げればいいの？

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。現状を理解していないが、知ろうとはしている。

『人物解説』

アニメ『けものフレンズ』の主人公。CV：内田彩。一人称は「ぼく」で胸も目立たない（ないではない）が、立ち居振る舞いは少女らしい。

黒髪で瞳は青緑色、羽根のついた帽子（つばにいくつか穴が開いている）をかぶっている。帽子の下には尖った寝癖がある。

半袖短パンのサファリルックで、黒い手袋やタイツを身に着け、大きなかばん（リュック）を背負う。

ジャパリパークのさばんなちほーに現れたところを発見され、サーバルに「かばんちゃん」と名付けられた。自分では「かばん」と名乗る。

純真無垢で無力ではあるが、知恵と勇気と友情で様々な問題を切り抜けてきた。10話終了後あたりから転移。

事故と聞いて多くの人が頭に浮かべるイメージは、交通事故だろう。

クラッシュした自動車、玉突き事故でひしゃげたトラック、横転したバス。

あるいはネギトロめいた死体を生産する電車やピトー管がイカれて墜落する飛行機、氷山にぶつかり真つ二つになって沈没する船舶か。

だが事故というのは、交通事故だけではない。

本当の危険は家の中、安心と油断が同居する家庭内にある。その死者数は日本では交通事故を上回り第一位、つまり事故の王である。

風呂場での溺死や誤飲・誤嚥による窒息死——そして転倒・転落死。

日常でも毎日のように起こっているそれが起こるかは、そこが恐怖と混乱の舞台ならば、言わずもがな、だ。

「うそっ、なん——」

言い終わるより早く落ちていく。踏み出した階段は突然その抵抗を無くし重量を支えることを放棄し自由落下し、彼女はそれに付き合わざるを得ない。前のめりに倒れた顔面に迫るは階段の角。咄嗟に手すりへと手を伸ばすも、無い。階段に手すりをつける法律なんてないのだ、邪魔と思われればつけられることはない。古い家で階段が急だとかそういうのは関係なく、とにかく無い。では手を階段に、しかしつくための場所は崩れてない。顔面に迫る段も同じく崩れる可能性がある上角度が難しい。腕の可動範囲で届くは壁。しかしこれは速度を殺しきれない。それでも彼女は片手を段に片手を壁にやり、強引に臂力でバランスを反転させることに成功する。類まれなる身体能力だ。それにより前のめりに倒れるはずが直立し、後ろのめりになった。

「っ!!」

気づいたときには、彼女の視界に映るは階段ではなく天井。それがバク転するときのように顎下へと流れる。つまり不安定な階段の上でバク宙するハメになったということだ。前に倒れるならば顔の強打が精々だったところが一転して命の危機。しかも今度は、手をつく場所などない。彼女はギュッと目をつむるとやがてくる衝撃とダメージを少しでも和らげるべくかばんから落ちるように背中を丸めて。

「大丈夫？」

「……あれ？」

自分が誰かに抱きかかえられていることに何度か目を開けて閉じてを繰り返したあと気づいた。

「——というわけで、近くにある建物を調べようと思っただら、階段が抜けて……」

「だいたいわかった。」

場所はF—06の北にある民家の、一階にあるリビング。先程階段が壊れた建物。かばんちゃんことかばんは自分を咄嗟に助けてくれたヒト——らしき人に感謝の思いと自分の身の上を話していた。

ろっじを後にサーバル達とバスに乗っていたところ、気がつけばベンチに腰掛けていたこと。そのベンチがある建物を調べるも、誰かいた形跡はあるものはぐれた友達は見つからなかったこと。ならばと近くにある他の建物も調べようとして、さっきのことが起きたことなどなど。

「さっきは本当にありがとうございました。」

「いいよ、別に。それで、あんたが知ってることは全部喋った?」

「はい。すみません、あんまり役に立つようなこと言えなくて。」

「……とりあえず、充分かな。」

かばんは改めて感謝を述べる。それに対して返事はそっけない。なんとも思っていないような口ぶりだ。堂々とした人なんだなあ、とかばんは思った。

そういえば、とかばんは助けてくれた人の手に目をやる。いつの間にか片手に紙袋、片手にスコップを持っている。紙袋の方はよくわからない人形と機械が入っていたと話している間に見せてもらった。初めて見るものでかばんがわからないと述べたときも無表情だった。いつの間にか持っていたスコップの方は地面を掘るものだろう。こちらはわかる。ということはもしかしたらその時にこのヒトもここに迷い込んでしまったのか、などと考えて。

「あの……そういえば、あなたの名前は?」

自分が相手の名前を知らないことによく気づいた。

(めんどくさいな。)

名前を聞かれて、三日月・オーガスことミカは真上に振り上げよう

としていたスコップの動きを止める。これから殺そうとしている相手に名乗る必要など無いが、名乗らないのも不自然だ。では無視して予定通りスコップで撲殺するか？それはさっきの反応を見ればリスクが大きい。そしてこうして迷っているうちに奇襲するタイミングを逸してしまった。どうするか。

「三日月・オーガス。」

どうせ殺すのだ、名前を教えても問題ないだろう。そう判断して名乗る。かばんが改めて挨拶してくるのを聞きながらミカはどう殺すかのプランの再設計を始めた。

そもそも、かばんが踏み抜いた階段はミカがトラップとして壊しておいたものだ。

北の展望台を当座の目印に歩いてきたところで見つけたこの建物を調べているさなかに捉えた人影。周囲を警戒してはいるものの無防備なその姿から子と判断する。しかし銃も無い今、直接接触するのはリスクが大きい。そこで老朽化していた階段を外れ易くするトラップをしかけ、相手の力量を判断することとしたのだ。

明かりを点けてトラップに気づけばまあ一般人、接触することも考える。

点けているのに気づかずコケるようであればどうしようもない無能、殺す。

明かりを点けずに気づけば勘の鋭い人間、接触はしない。

点けずにコケれば、大なり小なりダメージを負っているはず、介抱にかこつけ接触する。

そんな風に考え人影が階段下に来たタイミングを図り、二階から一階へと裏取りしてどう対応するのかを見ていたのだ。

そして結果は点けずにコケてバク宙して怪我を避けるも死にかけていた。

なにがなんだかわからなかった。

(反応と筋力が凄い。気をつけないと。)

咄嗟に助けてしまったが、こいつにはあの時死んでおいてもらったほうが良かったかもしれないとミカは思う。見たところ注意して歩

いていたものの重心は前に傾いていた。そのため当然顔から階段にぶつかると思っていたのだが、良い反応で重心を戻し、しかし後ろに行き過ぎて後方に倒れるという、判断に困るコケ方をしてくれた。温室育ちにも修羅場を潜っているようにも感じる彼女の人となりと合わせて、ミカが見たことのないタイプの人間であった。

スコップを弄びながら考える。聞きたいことは聞いた。この紙袋についても知らないらしいし、そもそもギャラルホルンや鉄華団のことも全く知らない素振りであった。聞くところによると、彼女もストリートチルドレンなのだろう。鬼ごっこについても何も知らないであろうことが察せられる身の上話だったし、彼女の利用価値は低い。殺すか。殺せるのか。連れて行くのか。連れて行けるのか。

「ミカヅキオーガスさん、良かったら、僕と一緒に——」

話し掛けてくるかばんの声。手に握るスコップが返す熱さ。

ミカは一步前に踏み出して——

【F—06／00時45分】

【かばん@けものフレンズ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：かばん、帽子

【道具】：未確認（背負っているかばんの中）

【思考・行動】

基本方針：誰かいないか探す。ここが何なのか調べる。

1：ミカヅキオーガスさんと一緒に行動したい。

2：おにごっこってなんだろう。逃げればいいのか？

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。現状を理解していないが、知ろうとはしている。

【三日月・オーガス@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ】

【役】：鬼

【状態】：五体満足・阿頼耶識

〔装備〕：スコップ@現地調達

〔道具〕：四次元つぼい紙袋（ガンダム・バルバトスルプスレクス@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ・スマートフォン（鬼）@オリジナル・（人形または機械つぼい）不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：とにかく生き残る。

1：かばんに対処する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

第二三章 『銭\$ソング』 & 『夢の島思念公園』（賈ク、翼、マニツシュ・ボーイ、きり丸）
銭\$ソング

きり丸は、少女に声をかけそびれた。

奇妙な町の中にいたはずが、霧に包まれたと思った瞬間、山の中にいたのだ。少女も消えていた。足跡もない。

あやかしに化かされたとしか思えなかった。地獄だからそういうこともあるのだろう。

あたりを見回すと、『焼場』と書かれた看板が見つかった。

焼場。火葬場のことだ。死体がそこらじゅうにあった室町末期、庶民は基本的に土葬である。野晒しにすると疫病が流行る。

火葬されるのは公家や高僧、上級武家など身分の高い人に限られていた。生活必需品たる薪を大量に使い、勿体無いからだ。

ということとは、近くにそこそこ大きな寺があるのだろうか？

「……いや、地獄に焼場つてのも変だな。全体的に亡者焼く場所だし。それに地獄に寺つて、お地藏様はいるだろうけど……」

取り留めも無い考えに耽るきり丸の耳に——金属音が届いた。

◆ 島の南端部、氷川村の『沖木島診療所』。

民家を出た賈クと翼は、周囲に注意を払いつつ、医薬品の宝庫であろうこの場所に潜入していた。

翼の背にはマニツシュ・ボーイ。どうも賈クには懐かず、この赤子を拾った本人が背負うことになった。

「むう……何を持ち出したものか、これは迷う」

「薬品棚の中とか漁るか……鍵はガラス壊せばいいとして……警報装置は……電気来てないか。」

まあいいや、俺が見繕うから、ちよつとここで待っててくれ。見張り頼む」

「うむ」

古代中国から来た賈クにとっては、見たこともないものばかりだ。文明度が全然違う。

しかし、あまり戸惑っていると翼に侮られる。ただでさえ耄碌爺か狂人を見る目だ。泰然としていよう。

戦闘となれば俺も剣を振るわなくもないが、逃げるにしかずだ。周囲に罠を仕掛けておくのもよからう。

窓から外を見張る。透明で巨大な琉璃（ガラス）で窓や扉を作るとは、なんと贅沢な。

いずれ夢の中か幽冥界のような場所、現実とも思えぬが、さりとして死ぬわけにもいかぬ。

「ふー……あの赤子が、鬼でなければよいが……む？」

チャリン、と銭の落ちる音。机の上にあった銭を、無意識のうちに払い落としてしまったようだ。

屈んで拾うと、確かに円銭だが、穴が空いておらぬ。銀色だ。西域の銀銭によく似ているが、国主の顔や鬼神の凶像はない。

円の中に3つの華。その周囲に小さく文字が……ええい、暗くてよう見えぬ。老眼ではないぞ。裏にも何か紋様が……。

シユ バ バ バ バ ババババ

「おおッ!」

！ 獣の如き影が、突如屋内に飛び込んで来た！ 襲って来る！

咄嗟に剣を抜く！

「銭！ 銭！ 銭！ 銭！ 銭の！ 音ー！ーッ！」



「……三国志じじいの次は、忍者少年かよ……勘弁してくれよ……」

翼は顔に縦線を走らせ、額を掌で抑える。ちよつと頭痛がして来た。なんだこのメンバーは。

突然押し入り、剣を抜いた老人を押し倒して百円玉を奪い取った、小学生らしき少年は、なぜか忍者のコスプレをしていた。

自ら名乗るところでは「摂津のきり丸」。本名を聞いたが、怪訝な顔

で「本名です」と返すだけだ。

敵意はないようだ。一応、こちらも自己紹介はした。

「ふむ、忍者のう。間者のたぐいなら、俺も使っておったぞ。よく働くなら使ってやろう」

「げへへ、ぜひ雇って下さい！ 銭は急げ！ 銭ある時は鬼をも使う！ 銭さえ下されば犬馬の労を厭いません！」

「いや、ロールプレイに乗らなくていいからさ……」

翼が弱々しくツッコむが、賈クもきり丸も本気で正気だ。きり丸は百円玉一枚を貰って喜んでいる。

「ぐへへ、銭だ銭だ！ 見たことない銭だけど、銀じゃないな。錫の多い白銅かなあ」

「うむ、鏡などに使われておるな。しかしなかなか精巧なものよ。もうちよつと落ちておらぬかな」

そう言われて、きり丸は机の下をゴキブリめいて這い回る。翼は訝しむ。

「……あんたら、百円玉見たことないのか？」

「……百円？ それ、永楽銭でいうといくらですか？ 百文？」

「なんじゃ、永楽銭とは。五銖銭なら知っておるが、董卓以後は随分粗雑になってのう……」

三人がきよんとした顔で、しばし見つめ合う。

……翼の顔が青ざめる。マジか。こいつら、マジで三国時代の武将と、戦国時代の忍者か。

「あ、翼さん。その赤ん坊、俺が世話しましょうか。よくバイトで子守りやってたんですよ。オシメも換えられますよ」

いや、戦国時代の忍者がバイトとか言うかよ。やっぱロールプレイ過多な現代人だろ。

翼は苦笑いし、赤ん坊を彼に預けた。それから賈クと共に、きり丸と情報共有を行い始める。

◆ きり丸に背負われ、赤ん坊『マニツシュ・ボーイ』はホツと安堵す

る。少し眠くなってきた。

フー、やれやれ……なんだか知らんが、子守り出来るヤツが来たのは良かったぜ。男だが……。

じじいの持ってた情報によれば、鬼ごっこは24時間も続く。ってことは、いずれ仮眠を取るヤツは必ず出て来る。

その時にゆっくりおれの情報を伝えりやいいんだ。なるべく複数人に同時に伝えた方が、信じてもらいやすいだろう。

特にあのじじいは疑り深いから、早めに伝えておいて誤解を解いた方がいいな。ガキどもは後でいい。

【I-07 (診療所) / 00時45分】

【賈ク@蒼天航路】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：作務衣 (民家から拝借)、直剣 (私物)

〔道具〕：デイパック (確認済みの不明支給品2、漢服)

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。他人が死のうと、最終的に自分が生き残ればそれでよい。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。場合によっては鬼や主催者とも交渉する。

2：民家や診療所から使えそうなものを持ち出す。翼やきり丸は有能そうなので活用する。

3：赤子 (マニッシュ・ボーイ) に牙があるのを見たため、鬼ではないかと疑っているが確証は持てない。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

【椎名翼@ホイッスル!】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：サッカーバッグ（水筒や包帯入り）、サッカーボール

〔道具〕：式札、財布（小遣い若干）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。主催者を殴れたら殴る。子や親の犠牲はなるべく出したくない。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。民家や診療所から使えそうなものを持ち出す。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

賈クのこと（日本語も通じるし）ただの変なじじいと思っっている。きり丸についても現代人だと認識している。

【マニッシュボーイ@ジョジョの奇妙な冒険】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、眠気 きり丸に背負われている

〔装備〕：死神13

〔道具〕：式札（オムツの中）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残る。普通の赤ん坊のように振る舞い、自分を保護させる。

1：誰かが仮眠をとったら、自分の正体と能力を夢の中で伝える。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を鬼か子（たぶん子）であると推測。

【撰津のきり丸@落第忍者乱太郎／忍たま乱太郎】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：忍者装束、忍具一式、マニッシュボーイ（おぶっている）

〔道具〕：水晶、百円玉

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。ついでに銭になりそうなものを収集する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

夢の島思念公園

「……お、なんだこれ？」

座標 I—07、沖木島の南端の氷川村にある診療所。

マニツシュ・ボーイのオムツを換えていたきり丸は、支給品である『式札』と説明書を発見した。

正確には、マニツシュ・ボーイが彼の目につくよう落としたのだ。鬼ではなく子であるとアピールするため。

「これは『式札』……翼さんが持ってたやつか」

自分には水晶が与えられたように、彼と翼には式札が与えられたようだ。使用法はさつき聞いている。

まあ当然、こいつは『子』だろう。この赤ん坊にこれを使用する判断力があるとは思えないが……。

「気をつけい。そやつ、鬼やも知れぬぞ」

戸口に老人が立っている。賈クだ。三国志なら多少は知っているが、果たしてその本人か、狂人か。

「鬼ならとつくに襲って来てますよ。子でしょ。ほら、この札を持っていました」

「ほう、ちよつと見せてみい。……ふむ、翼のものと同じだな」
「ええ」

賈クは式札と説明書を受け取り、矯めつ眇めつ眺める。なるほど、鬼にかような支給品が与えられているのはおかしい。

やはり疑心暗鬼に過ぎぬか。苦笑して、賈クは式札と説明書をきり丸に返す。

「俺と翼は、奥で少し休む。誰ぞ来たら起こせ」

「はーい」

あれからしばらく何事もないが、先程から妙に眠い。

翼も眠気を訴えている。まあ、いきなり知らぬ場所に連れて来られて気疲れせぬほうがかしい。

要は丸一日、鬼から逃げ切ればよいのだ。眠れる時に眠っておいたがよからう。押し入れから布団を引っ張り出し、寝転がる。

「……………」 「……………!?!」

気がつくくと、賈クと翼は——見知らぬ遊園地にいた。

「……………」 「爺さん! なんだここは!?!」

「知らぬ! これは、鬼の妖術か!?!」

二人は飛び起き、周囲を警戒する。賈クが剣を抜き、翼もカンフーを構える。空は赤くないが、雲が不気味にうねっている。

少しして、目の前の空中にあの赤子が出現する。傍らには大鎌を持った、ピエロの仮面の死神。赤子は両手を挙げ、にこにここと笑い、おどけながら喋る。

「ラリホー、ようこそお二人さん。おれを助けてくれてありがとうよ。……………ああ、待て待て、敵意はねえ」

「きさま……………やはり、鬼か?」

「違うつて、たぶん……………どっちかおれにもわかんねえんだが、あんたらに敵意はねえつたら。」

自己紹介させてもらうぜ。おれの名は『マニッシュ・ボーイ』。生後イレブンマンズの天才児にして、スタンド使い……………ま、超能力者つてやつさ」

翼が賈クを見、賈クが頷く。

「こやつは悪党だが、嘘についてはおらぬようだ。俺には人生経験でわかる。信じよう」

赤子がキヤツキヤと喜ぶ。やがて、死神が赤子の声で喋り始める。「おれは、生まれつきこーい能力を持つてる。眠ってる他人の精神を『悪夢世界(ナイトメアワールド)』の中に包み込む。」

そう、ここは『夢の中』……………なんでもおれの思い通りさ。あんたらもポップコーンやソフトクリームが食べたきやあ、すぐ出せるぜ」

赤子は空中からタバコライターを取り出し、火をつけ、一服する。「おれの精神が大人びてるのも、ひよつとしたらこの能力の影響かもなあーつ。現実世界じゃあ、多少の催眠術程度にしか使えねえが。」

名付けて『死神13(デス・サーティーン)』……………不吉な名前だが、

気にしねーでくれ」

翼は固唾を飲み込む。わけがわからないが、いきなり地獄へ放り込まれて鬼ごっこをしろとか言われている身だ。信じざるを得ない。

「……敵意がないなら、味方つてことだな」

「そうそう。それを主張したい。なにしろ現実のおれは無力な赤ん坊で、保護者が必要なんだ。お礼がしたいし、当然生きて還りたい。

おれは役に立つぜ。近くで鬼が眠るか気絶してるなら、おれがこの世界に引きずりこんで殺せる。ある程度なら傷を治すことだってなあーっ」

賈クは笑う。こいつはいい。要するに西域の胡（えびす）が使う幻術のようなものだ。赤子と死神に向けて両手を広げる。

「それは素晴らしい。翼よ、大した拾い物をしたではないか！ では、その術について詳しく聞かせてくれい！」

煙とともに、赤子が消える。死神は赤子の顔になり、賈クに顔を近づけ、指を一本立てる。

「ひとつ、いいかな。おれは爺さん、あんたが話してた『ルール』を聞いて把握してる。ピラも拾った。

『親の人数が子より少ない時に、子が勝利条件を満たせば、親の勝ち』……だろ？ つまり、親と子のどっちかしか勝てねえ」

「ああ、そうだ」

「つまり、子がかもともと親より多けりやあ、子を『間引き』しねーと、子は勝てない。だろ？」

「そうなるな」

「爺さん、おれを殺さねえ、生還させると約束しろ。そうすりゃあ味方になる。協力して、どちらも勝てるような方法を見つけ出すんだ！」

赤子の顔は真剣だ。賈クはその目をじいっと見つめる。答えは一つ。

「……よかろう。翼も、よいな」

「当たり前だ。改めて言うまでもねーよ」

【I-07（診療所）／01時15分】

【撰津のきり丸@落第忍者乱太郎／忍たま乱太郎】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：忍者装束、忍具一式、マニッシュ・ボーイ（オムツを換え
ている）

〔道具〕：水晶、百円玉、式札（マニッシュ・ボーイの）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。ついでに銭にな
りそうなものを収集する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

【賈ク@蒼天航路】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、仮眠中

〔装備〕：作務衣（民家から拝借）、直剣（私物）

〔道具〕：デイパック（確認済みの不明支給品2、漢服）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。他人が死のうと、最終的に
自分が生き残ればそれでよい。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。場合によっては
鬼や主催者とも交渉する。

2：民家や診療所から使えそうなものを持ち出す。翼やきり丸は有
能なので活用する。

3：マニッシュ・ボーイの能力を知り、味方として協力する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

【椎名翼@ホイッスル！】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、仮眠中

〔装備〕：サッカーバッグ（水筒や包帯入り）、サッカーボール

〔道具〕：式札、財布（小遣い若干）

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。主催者を殴れたら殴る。子や親の犠牲はなるべく出したくない。

1：多くの親や子と早めに提携し、情報を集める。民家や診療所から使えそうなものを持ち出す。

2：マニッシュ・ボーイの能力に驚愕。味方であると信じる。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

賈クのは（日本語も通じるし）ただの変なじじいと思っっている。きり丸についても現代人だと認識している。

〔マニッシュ・ボーイ@ジョジョの奇妙な冒険〕

〔役〕：子

〔状態〕：健康、睡眠中

〔装備〕：『死神13（デス・サーティーン）』：眠っている動物の精神を悪夢世界に閉じ込めるスタンド能力。

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：生き残る。

1：肉体的には無力なので、他者に自分を保護させる。協力はするが、最終的に自分が生き残ればそれでよい。

2：賈クと翼に自分の能力を詳しく伝える。起きた後も夢の中の記憶は残す。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を鬼か子（たぶん子）であると推測。

肉体的には生後11ヶ月の幼児に過ぎず、食事は離乳食がメイン。ハイハイで結構動けるが、立って歩くのは難しい。

言語は完全に理解出来るが、(都合により)流暢に話すことは出来ない。筆談や、スタンド使い同士の念話は可能。

第二十五章 “Trick or Treat” (早

人、しのぶ、ペニーワイズ)

(ペニーワイズ登場話) IT

なぜ自分が滅ぼされたのか。

それは、彼が餌となる筈だった子供たちに彼の巣で敗北した後、落ちた地獄で延々と考え続け、そして答えがでない問いであった。

自分は常に食う側の筈だ。無垢な魂を弄び、永遠を生きる存在だ。

その筈なのだ。

何百年も地下に潜み続け、その上で繁栄する人間たちはまさに彼にとっての餌であった。

彼は常に恐怖を与える側であり、恐怖させればさせるほど、餌の味は良くなり、彼をより長く生き長らえさせた。

しかし、そんな彼が最後に突きつけられたのも「恐怖」だった。

それまでただの餌でしかなかった者たちが恐怖を克服し、真つ向から立ち向かってきた。

自身を恐れず、恐怖を乗り越えた人間の精神力と団結力は彼にとって完全なる未知であり、長い年月のなかで初めて感じた真性の恐怖であった。

彼は敗北した。

だが、何の因果かーペニーワイズは、再び捕食者としての役割を与えられた。

絶望鬼ごっこ。

その遊戯の鬼として、彼は蘇ったのだ。

不自由ではある。

ルールを課せられ、デリーに居たときよりは自由には振る舞えない。

それでも彼は歓喜していた。

彼にとって重要なのは、この場所にルーザーズ(負け犬)は居ない、

というただ一点だけ。

居るのは、自身と同じ鬼か無力な餌達だけ、それだけで充分である。

再び自身が恐怖を与える側として、捕食者として振る舞えるのなら、どのような枷をきせられようが文句はない。

牢獄から解放されると、特典として妙な紙袋を渡された。

何やら支給品が入っているらしいが、聞けば鬼以外は殆どが特異な力を持たないらしい。

ならば、自身の幻術と爪だけで充分である。

「さあ子供たち……皆で浮かぶ時間だ」

自由の身となった”IT（それ）”は、再び味わえるであろう新鮮な恐怖の味を想像しつつ、会場に消えていったのだった。

【???／深夜】

【IT／イット “それ”が見えたら、終わり。】

【役】：鬼

【状態】：健康、ペニーワイズの姿で行動中

【装備】：ー

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：恐怖させ、喰らう

1：他の鬼にとられる前に喰らいたい

2：手頃な相手は幻術で追い詰める

3：下水道に潜むか……

【???／深夜】

【ペニーワイズ@IT／イット “それ”が見えたら、終わり。】

【役】：鬼

【状態】：健康、ペニーワイズの姿で行動中

【装備】：ー

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：恐怖させ、喰らう

- 1：他の鬼にとられる前に喰らいたい
- 2：手頃な相手は幻術で追い詰める
- 3：下水道に潜むか……

『人物解説』

道化師の出で立ちをした悪魔。対象を威嚇・捕食する際は鋭い牙を剥き出す。

田舎町デリーの下水道に潜み、27年周期で現れ、その都度事故や天災に見せかけては住人を襲っていた。

捕食対象は子供、夢を抱く思春期の少年少女であり、相手が恐怖と感じる物の姿に変化する。

物体を動かす・幻覚を見せる・神出鬼没など超常的な能力を持ち、ほとんどの大人には見えない。

基本的には多感で夢を持つ子供のみに見え、恐怖を与えるほどに美味になることから様々な幻術で対象を追い詰める。

(川尻早人登場話) 無題 (川尻早人登場話)

「なんだコレは……一体どうなっているんだぁーっ!!」

驚愕を露にする少年。

彼の名は川尻早人、数多のスタンド使いが集う杜王町の住民である。

父に成り代わった殺人鬼を殺す決意を持ち、いざ決行しようとした直後、彼は全く見覚えのない森林に居た。

当然のごとく混乱が襲ってくるが、既に杜王町に渦巻く非日常に触れていた経験が幸いしたのか、すぐに冷静さを取り戻せた。

(落ち着け、これは、この状況はあの殺人鬼が起こしたことなのか?)

僕だけを別の場所に転移させる能力……?)

結論は否。

早人は吉良吉影の新たな能力『パイツァ・ダスト』により、彼の正体を知ろうとするものを爆破し時間を戻す起爆剤にさせられている。

まずこの状況がその能力の延長線上の物なのか確認するために、早人は自傷を試みた。

彼の体には吉良のスタンド『キラークイーン』が憑依しており、仮の本体である早人を自動で守ろうとする。

スタンドを視認できない早人には詳細は知り得ないが、起点となっている自分を何かが守る効果は把握していた。

そこらの手頃な枝を広い、恐る恐る右手を傷つける。

結果、特に妨害されることもなく痛々しい傷が出来上がった。

パイツァ・ダストは解除されていた。

ジクジクとした痛みを我慢しつつ、早人は確信する。

(この状況はあの殺人鬼も予期していないイレギュラー……っ!!)

ということとは、同じような力をもつ何者かからの攻撃なのか?)

だとしたら非常に不味い。

この異常な状況が未知のスタンド使いによるものであるのなら、打つ手はない。

「僕にできることは……この世界のルールを把握すること」

手掛かりは、飛行機でばらまかれているこのチラシだ。

『ルール1：子供は、鬼から逃げなければならぬ。』

『ルール2：鬼は、子供を捕まえなければならぬ。』

『ルール3：きめられた範囲をこえて、逃げてはならぬ。』

『ルール4：時間いっぱい鬼から逃げきれれば、子供の勝ちとなる。』

『ルール5：親は、子供を守らなければならない。』

目下、鬼との遭遇は避けるべきなのは火を見るよりも明らか。

単純に考えるなら自分の役は子の可能性が高く、狙われる立場にある。

次に重要なのは、子の勝利条件とやらが時間制限までに逃げ切るのと、親は子を守るという一文である。

このチラシの内容が何処までの強制力を持つのかは定かではないが、一人で行動するよりも協力的な親、もしくは自分と同じ子の人物と早期に合流することが最善だと判断する。

「どちらにせよ、これの使い所も見極めないと危険だな……」

早人の右手には、いつの間にかポケットに入っていた透き通った水晶がある。

『生きている参加者一人を対象に選んで発動する。水晶越しに対象を見ると参加者の役がわかる。この時対象の役が『親』だった場合、対象は死亡する。使用后自壊する』

一緒にポケットに入っていた紙の説明を信じるのなら、鬼が役を偽っている可能性がある場合、もしくは危険人物が親となっている場合に最適なアイテムである。

一度きりの消耗品であるため、おいそれと使用することはできないのが欠点だが。

それとは別に、もうひとつのアイテムに目を向ける。

ランドセルの中に収められているそれは、早人にとっての切り札、空気を弾丸のごとく発射する謎の植物『猫草』である。

元は父の顔をした殺人鬼を殺すために持ち出していた物だが、人体に風穴をあける空気弾は身を守るためには充分すぎる武器と言える。

「……まずは何処かで傷を消毒しよう」

目指すのは早急な帰還。

あの殺人鬼と母を一秒でも一緒に居させるわけには行かない。
決意とともに、小学生は歩みだした。

【F-07 森林地帯／00時15分】

【川尻早人@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、右手に切り傷

〔装備〕：『水晶』、先の尖った杖、ランドセル

〔道具〕：猫草@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない

〔思考・行動〕

基本方針：早急に帰還する

1：鬼に警戒。

2：できれば親、もしくは子と合流したい

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。

自分の役を子であると推測しています

人物解説……

『ジョジョの奇妙な冒険』第4部 ダイヤモンドは砕けないに登場する少年。

本編時では11歳の小学生である。

川尻浩作の息子であり、吉良吉影にとって変わられた父親の奇妙な点をいち早く見抜き、『偽の父親』である吉良と戦う決心を決める。

登場した頃は自分は両親が愛し合った末に生まれた子供なのかを疑問に思い、監視カメラを家に仕込むなど天邪鬼で人間不信気味な少年であった。

しかし吉良と戦う覚悟を決めたあとはスタンド能力を持たないながらもその知恵と勇気だけで大活躍し、東方仗助たちと共に吉良を追い詰めることに成功する。

殺人鬼を脅す度胸や、バイツァ・ダスト発動中の誰ひとり味方のい

ない中、仗助を呼び出す機転、爆弾に変えられた虹村億泰に自ら触れることで解除する覚悟はまさに『黄金の精神』そのもの。

『猫草@ジヨジヨの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない』

スタンド使いの野良猫が植物と融合して誕生した生物。

川尻早人が吉良吉影を殺害するために持ち出したものがそのまま持ち越されていた。

空気を自在に操る能力を持ち、圧縮した空気を弾丸のように撃ち出して攻撃する事が可能。また周辺の空気を真空状態とする事で炎や爆発を起こさせない事もでき、さらには生物の血管に空気を注入すれば空気塞栓を起こさせ死に至らせる事もできる。

スタンド使いでない者にも猫草が操っている空気はかろうじて見えるようで、早人はその特性を突いて危機を切り抜けたり、空気弾の場所を伝えたりした。

もともと猫草自身は気まぐれな性格のため、基本的には自分を攻撃しようとする者がいたり機嫌が悪い時以外には、この能力で他者を攻撃する事は無い。

(川尻しのぶ登場話) 川尻家の奇妙な冒険

「何なのよ……一体どういうことなの……」

川尻しのぶは、見知らぬ街中でひとり、ひどい狼狽と困惑に襲われていた。

当然の反応だと言える。突然拉致され、その現状に冷静に対応しろなど、ただの主婦である彼女にそこまで求めるのは酷だろう。

突然の夫の失踪という異変で、元から精神的に疲労してもいるのだ。

どういう意図で招かれたのか、というのは現時点でも何となく理解はできた。

そこらに落ちているビラを見る限り、信じがたいことに『鬼ごっこ』をしろ、ということらしい。

単純に考えれば、しのぶの役は親である。子持ちの主婦だから親、というのは何とも単純な考えだが、事実そうなのだから仕方ない。

鬼というものが実質何を指すのかわからないことが非常に不気味だった。

まるで子どもの遊びみたい。

そうした他愛ない感想とともに、ある恐ろしい予想が脳裏によぎった。

「あ、ああ……もしかして早人もここに連れ去られているのかも……ッ！」

母親の勘、というもののなのか、息子もこのゲームに巻き込まれている可能性に思い至ったしのぶの背筋は凍りついた。

夫が失踪して同じくらい悲しいだろうに、落ち込む自分をずっと支えてくれた優しい息子。

時には辛く当たることもあったが、それでもしのぶは川尻早人を愛していた。

その息子まで失うような事があれば、耐えられら自信は……無い。「早人、早人ッ!!」

逸る気持ちを押さええられず、母親は地獄へと駆け出していた。

【???／00時02分】

【川尻しのぶ@ジヨジヨの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：ー

【道具】：デイパック（不明支給品3）

【思考・行動】

基本方針：家に帰りた

1：早人を探す

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

ジヨジヨの奇妙な冒険 第4部 ダイヤモンドは砕けないの登場人物。

参戦時期は第四部終了後。一人称は『あたし』。非スタンド使い。

杜王町に暮らしている主婦。川尻早人の母。夫は川尻浩作。

学生時代に浩作と付き合い、早人を身ごもったために「できちゃった結婚」したものの、結婚後の生活と平凡な夫がつまらないとずっと鬱屈した感情を抱き、また息子の存在を枷と考え内心では疎んじていた。

だが、浩作が吉良吉影と入れ替わってからは、打って変わってスリルのある行動を取るようになった夫に対してときめきを感じた。

また吉良との戦いの中で成長していく早人の事を見直す機会が多くなり、徐々に母親らしい愛情を見せるようになっていった。

しかし夫の正体や早人が重大な事件に巻き込まれていることは最後まで気づくことなく、夫が「失踪」した後も夫の帰りを待ち続けるであろうと思われる姿が描かれた。

“Trick or Treat”

川尻早人はとある一軒家で傷を手当てしていた。鍵は掛かっておらず、大体の代物は揃っていたので、救急箱を拝借させてもらった。

(不法侵入に当たるだろうが、この状況では仕方がない)

「ふう……これで良し。ちよつと深く切りすぎたかな」

傷口に絆創膏を貼り、一段落した作業を止め一息つく。

しつかりと消毒はしたが、パイツァ・ダストの効果を確認するためとはいえ、不衛生な森の中で傷をつけるのはやや軽率だったかもしれない。

「それにしても……何か妙だ。この家もそうだけど、まるで『さつきまで人が住んでいた』みたいな感じがする……」

家の中には生活用品やその他のものがそっくりそのまま残されていた。この家の住人や町の人々は何処に行ったのだろうか。

もしもこの鬼ごっこのためだけに全員が退去させられたとしたら、想像よりも遥かに強大な何かの裏で動いているのかもしれない。

(ぼくが『子』と仮定して、不確定要素は『鬼』の存在と『親』の勝利条件……)

でも、僕一人じゃどう足掻いてもこの状況をどうにかできるとは思えない。なら、当面は協力的な『親』か同じ『子』と合流して、情報を集める必要がある)

兎に角、人手も情報も何もかもが足りない。ならば行動あるのみと立ち上がりかけたとき、無人の筈の家屋から足音がした。

(なツ馬鹿な！ 確かに此処には誰も居なかった筈 ……どうする?)

『子』か『親』か？ もし『鬼』なら……)

ちらり、と早人はランドセルを一別する。

もしも危険人物ならば、殺られる前に此方から殺る！その覚悟を決め、リビングの扉が開くのを待つ。

しかし、入ってきた人物を目にしたとき、早人は愕然とした。

「そ……そんな、何で……『ママ』!!」

来訪者は、早人の母親だった。

「早人……早人ッ！ああ、あたしの愛しい息子……会いたかったわあ」
駆け寄ってきたしのぶは、はたと息子を抱き締め、涙する。

その暖かい感触に緊張で凝り固まった早人の心は溶け墮ちる。

「うん、うん……ぼくもだよママ。でも、ママもこの鬼ごっこに参加して
るなんて……」

「ええ、お前はずっとあたしを守っていてくれたわよね。……でも、
ね、遅いのよ」

「……え？」

血だ。早人のものではない。

「痛い、痛いよ痛いよおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!!」

こんな手じゃあなあにんにもできないわあ!!お前が守ってくれな
かったから、悪い鬼に手を取られちゃったのッ

悪い悪い殺人鬼に切り落とされちゃったのッ!!!」

しのぶは早人を突き飛ばす。想像を絶するであろう苦痛で顔を歪
め、”手首から先が無い”両手を振り回し、泣き叫ぶ。

「そ、そんな……まさかあの男に」

早人の脳裏に吉良の姿がよぎる。あの殺人鬼もこの鬼ごっこに参
加していて、等々母を毒牙にかけたのかと。

しかし、それはおかしい。先程まで確かにしのぶは平常であった。

それが一瞬で血塗れになり、加えて両手が無くなるなんてあり得な
い。まるで幻覚ではないか。

聡明な彼なら普通ならそう考え付く。しかし、眼前の母の姿は、早
人の冷静さを意図も簡単に奪っていた。

(このままじゃあママが死んじゃう、止血しなきゃ、でも腕が無いんだ
ぞ！ そのままにしておけば不味い！でもどうすれば、あああ)

母が死ぬ。自分が守れなかったから、あの男の欲望から救えなかつ
たから。

体が震える、息が上がる、考えが纏まらない。

「――『恐怖』したな」

男の声だ。早人の動きが止まる。母を見る。彼女はそのまま見つめ返す。

彼女は笑っていた。

その顔が変貌する。滑らかな髪は茶髪に代わり、肌はペンキのように不自然に白く、鼻が赤く、換わっていく。

無くなっていた筈の両腕が膨れ上がり、早人を掴む。

しのぶの皮を被った鬼は、本性を表した。

そこにいるのは彼の母ではなく、ひとりの醜悪な道化師(ピエロ)であった。

彼はお茶目な仕草で呆然と立ち尽くす早人を見下ろすと、一言。

「やあ、坊や」

「うツ、うわあああああツ!!」

反射的に逃げ出そうとするが、逃がさないツ!とばかりにピエロは強い力で早人を引き寄せ、早人を覗き込む。

その瞳は透き通るような青で、どこまでも引きずり込まれそうなほど澄んでいた。

化粧で表情は読みにくいだが、ピエロが心底喜んでいることが早人には分かった。

「おっ、お前は、誰だ!! ママはどうした!!」

「私はペニーワイズ……歌って踊る道化師さ!君のママはね、今はとっても愉しいところに要るよ。」

そこは皆で浮かぶんだ。ふわふわ風船みたいに……君もそこに連れて行ってあげよう」

浮かぶ、浮かぶとはどういうことだ。もしや母もこの鬼ごっこに参加していて、このピエロに襲われて既に……

「そんな、ママが……嘘だ!お前の言うことなんて信じないぞ!」

早人の態度が気に入らないのか一瞬間をかめるも、にやり、と不気味な笑みを浮かべる。

煽るように顔を近づけると、その口から赤い舌が早人の頬を味わう

ように舐め回す。

強烈な嫌悪感に背筋が凍る。その反応はペニーワイズを喜ばせた。「ふむ、これは嘘つきの味だ。知っているかい？こうして汗を舐めるとそいつが嘘をついているかどうかはすぐ分かるんだそうだ。」

しかし旨い、君は旨いなあ！ 美味しい美味しい恐怖の味!!新鮮な子どもの魂を感じる!!」

堪能したとばかりに舐めるのをやめると、ペニーワイズは大口を開ける。

めぎり、と口が裂ける。鋭い牙がずらりと並ぶ啞内が笑顔の中から飛び出してくる。まるで口というより穴だ。底が見えない獲物を貪るための補食機構だ。

あまりにも非現実的な光景に、“ああ、これで噛みつかれたら痛いだろうなあ”なんて感想が思い浮かんだ。

そして、事実このペニーワイズはその口で早人を喰い殺すつもりなのだろう。

「……ねない」

「はっ」

「ボクは！ボクは!!ママを助けるまで絶対に死ぬわけにはいかないんだッツ!!!」

「……」

ペニーワイズの動きが止まる。

母を守る。その決意と濃厚な死の気配が、逆に早人の聡明さを取り戻させた。

元より、あの殺人鬼を殺すと決意を固めたときから、“自分が殺されるかもしれない”なんて事はとくに分かっていた。

絶望に屈しない早人の意思は、まさに『黄金の精神』というべきものであった。

いや、根底にあるものが殺意とするなら、『漆黒の意思』にも通じているのかもしれない。

そしてその人間の魂の輝きは、恐怖を糧とするペニーワイズにとって水と油に等しい。

出端を挫かれ、今まさに食いつかんとしていた口が引つ込む。
人間に近い表情に戻ったペニーワイズは、その白塗りの顔を怒りで染めた。

「無駄だ。全くの無意味だ。このゲームは憐れで矮小な人間の、それも子どもがどうかでできる場ではない。

私たち鬼が狩りを楽しみ、お前たち人間はその糧として食われるための贄なのだ!! 思い上がるんじゃないぞ!!」

何を愚かなことを、とばかりに早人を嘲笑う。しかしその言葉の節々には僅かな苛立ちが含まれていた。

事実、早人は非力である。

こうして人外に押さえつけられ、スタンドも持たない身では口クな抵抗すらできない。

矮小な人間、それも子供に何ができる? そう事実を突きつけ、早人の心を折ろうとする。

しかし彼は思い違いをしている。それは単純だが大きな間違い、と言ってもいい。

早人は『非力』ではあるが、『無力』では無いのだ。

こうして鬼として参加させられているのは、ひとえに彼が見下していた人間の意思に敗北した為である。

確かに早人は弱いだろう。しかし、彼は絶望に立ち向かい成長できる人間だ。

それは人間のみがもつ可能性なのだ。

人間には、単なる化け物の持ち得ない強さが確かにあるということ、地獄に落ちてもなおIT(それ)は理解していなかった。

だからこそ、次の展開はペニーワイズには予想すら出来ないものだった。

「早人ツツ!!!」

リビングに女の声が響き渡る。悲鳴一歩手前の、切迫した声。

”信じられないものを聞いた”

まさにそんな、あり得ないと言いたげな顔で振りむいた道化は、来訪者と対峙する。

そこに居たのは、先程まで彼が化けていた女が、居た。

詳細は解らずとも、直感で察したらしい。

川尻しのぶは息子を捉えた鬼を、怯えながらも睨み付けた。

何故ここでのしのぶが出てくるのか。

此ればかりは幸運の女神が早人に微笑んだとか、運命が味方したとしか言えない。

直感で息子の影を探し回っていたしのぶは、早人いる家の前を偶然通りかかり、早人の悲鳴を聞き付けた。そして家に入ってきた。過程はただのそれだけだ。

まさか、本物がこのゲームに参加しているとは予想もしていなかった。

予想外の事態に、ペニーワイズは早人を押さえる力が緩まる。

その時点で、彼の命運は決まった。

「ママ伏せて!!!」

早人は拘束から抜け出すと、側に置いてあったランドセルをひっ掴み、開けた。

切羽詰まった叫び。何をやる気かと考える間もなく、ペニーワイズの頭が、風船のように弾けとんだ。

ランドセルの中身は『猫草』。

その奇妙な植物は、突然の光に驚き本能的に空気弾を射出した。

それは狙い通り、ペニーワイズに直撃したという訳である。

場は沈黙する。

原型は残っているが、空気弾の直撃で頭の半分が消し飛んでいた。

傷口からは、脳や血液のようなものは一切流れず、代わりに煙のような黒い何かが溶け出している。その中は空洞だった。

奴を放っておけば他の子を襲うのは火を見るより明らかだ。
何よりも早人が許せなかったのは、奴が母の姿で自分を弄んだこと
だ。

奴は自分と、母を侮辱した！

とあるギャング曰く、侮辱とは死をもつて償わせても神は御許しに
なるという。相手が人間ですらない化け物なら尚更だ。

しのぶを寝かせると、ランドセルをひっ掴み、リビングを飛び出す。

あの傷ならそう遠くには行けない筈、今度は確実に止めを刺す！

視界の端にペニーワイズの姿を捉える。何故か奴は玄関ではなく
家の奥に逃走していた。

行き先は……風呂場！

しめたッ!!と早人は思った。先程まで救急箱を探すために大体の
場所を漁っていたが、彼処から外に通じる窓や出口はない。

その確信は予想外にも裏切られた。

「そんな……ここは密室の筈！あいつはどこに行ったんだッ!？」

風呂場に飛び込むと、そこにはペニーワイズの影も形もない。

あり得ない。一体どういうことなのか理解不能理解不能!!

窓もない狭い風呂場で外に通じている場所は……いや、ひとつだけ
ある！

小学生とは思えない驚異的な理解力により、早人はある仮説を導き
だした。

覗き込むものは風呂場の――湯船！

「ま……まさか……排水溝から逃げたのかッ!?こんな小さな穴に潜つ
て!!」

(あのピエロはママの姿に変身した……体を柔らかくなり小さくなる
なりして逃げることも可能なのかもしれぬ!)

排水溝の蓋は空いている。風呂にはいるつもりなんて毛頭なかつ
たから、さつき見に来たときは確認すらしていなかった。

覗き込むも底は見えない。例えば此処から逃げたとしても、追うこと
は不可能だ。

ならば深追いをしている暇はない。当面は母の手当てと、現状の把握が最善。そう判断し、早人は風呂場を後にした。

【E-07 / 00時50分】

【川尻早人@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：子

【状態】：健康、右手に切り（治療済み）、ペニーワイズへの怒り

【装備】：『水晶』、ランドセル

【道具】：猫草@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない、

救急箱

【思考・行動】

基本方針：母を守り、帰還する

1：ペニーワイズ、鬼に警戒。

2：親か子と合流する

※その他

※各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。

※自分の役を子であると推測しています

※ペニーワイズの『変身する能力』を認識しましたが、詳細は把握

していません

【?? / 00時50分】

【川尻しのぶ@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：親

【状態】：ダメージ（小）、気絶中

【装備】：ー

【道具】：デイパック（不明支給品3）

【思考・行動】

基本方針：家に帰りたい

1：早人……

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握

湯船の底、排水パイプの先のそのまた先、沖木島の下水の底にペ

ニーワイズは居た。

彼は憤っていた。

食事がありつけず、逆に敗走する始末。これでは嘗ての焼き直しではないか。

何故だ、何故喰えなかった？

最初は上手く行っていた。あの獲物の『最も恐怖するもの』に擬態した筈なのに……

ああ、傷が痛む。

スタンドによる攻撃は銃撃よりも遥かに深いダメージをITに与えていた。

外見などはすぐに修復できるが、殻の裏の本質はそう簡単には直せない。

必要なのは、餌だ。恐怖させ、食らえば、力も戻るし傷も直る。

今回は運が悪かったただけだ。あのハヤトとかいう餓鬼がたまたま強かっただけ。まだやりようは幾らでもある。

強い輝きを秘めた早人のあの眼、恐怖に立ち向かう輝きのある眼は、最も忌々しい子供たちと重なる。

微かに生じた恐怖を否定するかのように頭をふると、鬼は新たな“喰いやすそうな”獲物を求めて移動を始めた。

【下水道／深夜】

【ペニーワイズ@IT／イット “それ”が 見えたら、終わり。】

【役】：鬼

【状態】：ダメージ（中）、ペニーワイズの姿で行動中、川尻早人への怒りと恐怖

【装備】：ー

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：恐怖させ、喰らう

1：手頃な相手は幻術で追い詰める

2：もつと喰いやすそうな獲物を狙う

※下水道で繋がっている場所なら何処からでも出現できます

※川尻早人の最も恐怖するもの（川尻しのぶの死）を把握しました

第二十六章 人情紙塚山バブーン・レイプ・パーティー

(ヤン、レナ、まな、夜叉猿Jr.、雲雀)

人情紙塚山バブーン・レイプ・パーティー

島の北西部、鎌石村の西のはずれの道。

赤い空の下、チンピラ吸血鬼『ヤン・バレンタイン』と、トンファーを構えた黒髪の少年『雲雀恭弥』が睨み合う。

雲雀の背後でハラハラしているのは、ヤンに襲われていた少女『犬山まな』。

ヒーロー然として現れ、颯爽とまなを救出した雲雀であるが、彼はまなのことなど眼中にない。

これが「鬼ごっこ」だと聞いた途端、彼は「自分が鬼となつて他の全員を咬み殺す(ブチのめす)」ゲームだと勝手に理解した。

何を言っているか分からないと思うが、これが彼の通常運転だ。なお、彼は鬼ではなく子の役だ。

そして彼は、強い者との戦いを好む。目の前の男は、それなりに強そうだ。楽しませてもらおう。そう思っている。

対するヤンは、目の前の『鬼』の少年が、自分の獲物である少女を横取りしたことに憤慨していた。

せっかく愉しんでやろうと思ひ、後でこいつにも愉しませてやると親切にも告げてやったのに、なんてことをするのか。

見たところ自分より年下の、東洋人のガキだ。ちよつとケンカが強いからつて調子に乗りたいお年頃、つて感じだ。

殺さないまでも、社会の先輩として教育的指導をしてやらねば気が済まない。然る後にその少女をじっくりねつとり味わわせてもらおう。

同じ鬼を殺して数が減れば、なんだかんだで自分が生き返れる確率は減る。チンピラなりに、そこらへんはわきまえてはいるのだ。

まなは……この少年が鬼だろうとなんだだろうと、この場を一緒に逃げようと思っている。

相手の男が持っていた物騒な銃はどこかへ飛んでいったが、なにしろ鬼、吸血鬼だ。奴の口の中に牙が並んでいるのをこの目で見た。

少年はかなり強いようだが、あの男に勝てるかどうかは分からない。血を吸われたら、ひよつとして、吸血鬼にされるのかも。

だが、どうする。自分は無力な少女で、武器もない。この戦いに割り込んで止めることは出来ない。あの銃を拾うか。いや、逆に狙われる。

少年を引っ張るか。いや、足手まといになって、敵の攻撃を浴びさせてしまう。少年の言う通り、自分だけで逃げるか。それもどうか。

「おらおらおらア！」

ヤンが仕掛ける。蹴り、貫手、回し蹴り。雲雀は敵の攻撃をトンファーで防ぎつつ、2つの機関銃が落ちた場所から引き離す。

なかなか素早く、膂力もあるが、特筆するほどのことはない。期待はずれか、何か隠し持っているか。

「ビヤハア！ お嬢ちゃんをかばうってかア、お優しいお坊ちゃんよオ！」

「知らないね」

雲雀が身を躲し、仕掛ける。立ち竦んでいるまなのガードがガラ空きになり、ヤンが面食らう。

このイカれたガキは、このメスガキのことはどうでもいいらしい。めんどくせえから彼女を攫って逃げちまうか。

それもシヤクだ。あるいはこれが罫で、少女を狙ったところをガツン！とやる気か。あり得るが、いや、マジで見捨ててるのかも。

さつきから理解できない言動をするし、強いことは強いが、強さ自体は人間の域を出るものではない。

特殊な術とかも使ってこない。本当に鬼か、こいつは？ ただのイカれたガキなのでは？

「うおッ!？」

油断した隙に、顎の先数ミリの空間をトンファーが掠めた。冷や汗。少なくとも、下っ端吸血鬼の自分が油断できない程度には強い。

老いぼれ執事や新米ドラキュリーナの不意を打つ程度には素早い自分だが、兄ルークほどに戦闘訓練を積んできたわけではない。

ま、トンファアで多少殴られても死にはすまい。ムカつくが一発ガツンと食らわせて、その銃と少女を回収して逃げちまおう。

その後で本部に「鬼を攻撃する鬼っぽいガキがいる」と報告を――

瞬間、ヤンの背後から怪物が飛びかかった。

「ホギョアアアアアツツ!!」

「なあアツ!」

巨大なゴリララジミタ類人猿。そうとしか言いようがないモノ。それは激しい怒りと共に咆哮し、牙を剥く!

丸太のような両腕が振り下ろされ、ヤンは辛うじて回避! バギツと破碎音が響き、樹木が両断される!

「なツ、なんだ、こいつはアアツ!」

鬼。鬼(オウガ)だ、どこからどう見ても。少なくとも子ではなからうし、絶対に人間ではない。

身長2メートル超の怪物が、殺気を剥き出しにして襲い掛かって来る。あのクソガキもいる。この場は……撤退!

恐怖したヤンは即座に状況判断し、草むらから目ざとく自分の銃2挺を回収すると、脇目も振らず逃げ去った。

大猿は追おうとするが……機関銃2挺を持つ鬼には少し躊躇したか、足を止める。ひとまず『子』を二人、あの鬼から救出できた。

背後を振り向く。怯える少女と、平然としている黒髪の少年。その背後から、先程出会った少女が姿を現す。



「ええと……ひよつとして、お友達になりたいの、かな? かな?」

少し前。島の西側、菅原神社の境内。

少女『竜宮レナ』は、突如現れた謎の大型類人猿『夜叉猿Jr.』から花を差し出され、困惑していた。

敵意がないことを示したい、のだろう。では、鬼ではないのか。その大猿はこつくりと頷き、歯を剥き出して笑った。

言葉は話せなくても、人語はある程度通じるようだ。この大猿が仲間になれば、心強いとは言える。

「鬼じゃないなら、親か子、つてことだよ。ええと、そのパラシュートは、あなたが降りる時に使ったの？」

境内の樹木に引っかかっていたパラシュートを指差し、尋ねる。大猿は頷き、近くの草むらからデイパックを取り出した。

了解を得て中を少し調べると、内ポケットに書いてあった『親』のルールを発見する。重要な情報だ。

そして——この大猿はやはり、親で間違いない。

「友好関係が築けたのはいいけど、これからどうしようか……とにかく、他の親や子と合流するしかないよね。」

大猿さんが鬼じゃないってことは、私が証言する。安心して。でも、いきなり人前に現れるのはびっくりするだろうなあ……」

親や子を探し、鬼から守って逃がす。ひとまずの目標はそれだ。

親と子の勝利条件が違うのは気になるが、親と子が両方助かるような方法もあるはずだ。あるようにせねばならない。

人が集まるような場所。自分ならどうする。まずは民家に入る。人がいるとは思えないが、有用な道具を探すことは出来よう。

「よし、それじゃあ近くの集落に行ってみよう。ここからだ——」

◆ 「ハア、ハア……。よかった、人助けが出来たんだね」

突然、大猿に抱えられて森を飛び渡り、レナは元いた鎌石村に到着していた。

菅原神社からすぐ南には平瀬村があったが、大猿は独特の感覚で何事かを——おそらく鬼の鬨気を察知し、全力でこつちへ飛んできたのだ。

レナは鬼との戦闘前に近くの茂みに降ろされ、鬼が逃げ去ったと見るや姿を見せた、というわけだ。

そこにいたのは中学生ぐらいの少女と、やや年上に見える黒髪の少年。少年の手にはトンファーがある。彼が少女をかばっていたのだろう。

「へえ……」

少年は、大猿を見ると——好戦的な表情を浮かべ、トンファーを構えた。鬼の男には逃げられたが、この大猿もそれなりに強そうだ。

大猿も闘気を察知し、牙を剥いて唸る。鬼か、子か。鬼であれば、この場で始末せねばならない。二人の少女を守護らねば。

「ちよ、ちよつと、ストップ!!」

二人の少女が同時に動き、少年と大猿の間に割り込んで両掌を翳す。少年と大猿は闘（や）る気をそがれ、構えを解く。

「わ、私は『竜宮レナ』。たぶん『子』の役だよ。この大猿さんは『親』で、『鬼』じゃない。私が保証する。あなたたちは？」

「……いい、犬山まな、です」

「……雲雀恭弥」



「クソが……! こうなりや、こつちも徒党を組むしかねエな……」

あと23時間もあんだ。あのメスガキはきつちりファックして、クソガキとバカ猿は必ずブチのめしてやるぜ!

村の南、高原池の近く。ヤンは毒つきながら森の中を進む。主催者本部「神塚山」へ向かって。

【D—04／00時50分】

【ヤン・バレンタイン@HELLSING】

【役】：鬼

【状態】：健康、激昂

【装備】：FN P90 短機関銃 2挺 サプレッサー&スコープ
つき（弾丸を多少消費）

「道具」：四次元つぼい紙袋（不明支給品3つ、確認済み）

「思考・行動」

基本方針：殺し、犯し、食らう

1：トンファー使いの少年と大猿を「鬼を襲う狂った鬼」と認識。一旦撤退し、本部や他の鬼へ連絡に行く。

※その他

生きている人間の血を吸って殺すと、知能のないゾンビのような食屍鬼（グール）に変えてしまう。



自己紹介を済ませ、三人と一匹は海沿いの民家に移動し、情報共有してこれからの方針を話し合う。

雲雀は「群れる気はない」と立ち去りかけたが、まなが必死で頼み込み、なんとか引きずってきた。

大猿は話せないし、雲雀はそっぽを向いていて会話するつもりがない。必然的にレナとまなのブリーフィングになる。

互いに女子中学生。少しレナが年上だが、「タメ口でいいよ」と言われたので、まなはそうした。

「あの鬼が復讐に来る確率が高いね。必要なものを回収したら、急いでこの場を離れよう」

「そうだね。固まっていた方がいいとは思っただけど……」

雲雀は自分で『鬼』だと名乗ったが、少なくともこの少女たちを殺そうとするような存在ではない。

少女たちも大猿も、それを察している。警戒はするが、そういう鬼もいるのだろう。

だが、あの鬼は、必ず戻って来る。雲雀や大猿のことを鬼側へ触れ回り、討伐に来るかも知れない。

強者との戦いを求める雲雀には願ったりだが、大猿はともかく少女たちにはたまったものではない。

とは言え、雲雀をここへ置いて逃げるわけにもいくまい。どうするか

「とりあえず、私と大猿さんがいた『菅原神社』周辺には、鬼はいないみたい。あつちの、山の中だね」

「そこから、この村とは逆方向へ移動すれば……」

——下級の鬼にも匹敵する戦力と、信頼できる仲間巡りに巡り遇え、順風満帆に見える一行であるが……。

「ここらで思い起こして頂きたい。竜宮レナが、あの「雛見沢症候群」に感染していることを。」

【チーム・竜犬猿鳥】

【C-02 / 00時50分】

【竜宮レナ@ひぐらしのなく頃に】

【役】：子

【状態】：健康（雛見沢症候群に感染、無自覚）

【装備】：

【道具】：お守り

【思考・行動】

基本方針：帰還する。子や親と合流し、共に脱出を目指す。鬼からは逃げる。

1：民家から必要な物資を回収し、すみやかにこの場を離れる。菅原神社へ向かう。

※その他

制限時間と親のルールを把握。各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

雲雀を鬼だと思っているが、敵対する気がないなら仲間だと信じる。

雛見沢症候群は空気経由や皮膚・粘膜・体液との接触で感染し、疑心暗鬼などを契機に発症する。

【犬山まな@ゲゲゲの鬼太郎（6期）】

【役】：子

【状態】：健康

〔装備〕：

〔道具〕：スマホ（自分の）、支給品（未確認）

〔思考・行動〕

基本方針：生還する。子や親と合流し、協力する。鬼からは逃げる。

1：民家から必要な物資を回収し、すみやかにこの場を離れる。菅原神社へ向かう。

※その他

制限時間と親のルールを把握。各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

雲雀を鬼だと思っっているが、敵対する気がないなら仲間だと信じる。

【夜叉猿J r. @刃牙シリーズ】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：デイパック（支給品2つ）

〔思考・行動〕

基本方針：鬼は殺す。子を守る。

1：この三人を守護る。鬼らしき少年（雲雀）には警戒する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。鬼ではないと自認。

人語は多少解すが話せないし、文字の読み書きも出来ない。ノンバーバル・コミュニケーションは可能。

そう言えば雛見沢村は岐阜と富山の境あたり（飛騨地方）らしいのでレナとは同郷な気がする。

【雲雀恭弥@家庭教師ヒットマンREBORN!】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：雲雀のトンファー@家庭教師ヒットマンREBORN!、

雲のボンゴレリング@家庭教師ヒットマンREBORN!

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：親、子、鬼を咬み殺す。他者とは群れない。

1：強者と戦う。鬼が来るなら好都合。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと誤解している。

そもそも把握したところでルールに従って行動する気がない自由過ぎる男。

第二十七章 死霊の殺し踊り（桐山、アルシア、アリ
ス）

※二話投稿『（アルシア登場話）踊る殺戮人形』&『（桐
山和雄登場話）コインが煌めくことはなく』

「鬼ごっこ）……………？」

森の中で呟く少女。

知識にはあるがやった事は無い。鬼ごっこに興じる同年代の子供達を見て抱いた感慨は、既に消え失せて、少女の心の何処にも無い。

緩慢な動作で周囲を見回す少女。

肉付きの薄い裸体に貫頭衣ゆ纏っただけの姿は、如何にも寒々しい印象を与える。

手にした少女の身体より巨大な鉈が無ければ……………だが。

「この度の”神楽”の趣向でしようか？」

呟く言葉には凡そ抑揚というものが無く、仮面の様な無表情と相まって、少女を作り物めいて見せていた。

「御主人様がいらっしやいませんし……………。取るべき命は何処に……………？」

周囲の確認が終わるが、人っ子一人いやしない。赤い空を見も、少女の声には何の感慨もなく、夕暮れ時かと思った程度。

少女は少し思案した後、これが鬼ごっこだという事を思い出し得心した。

探して殺せという事なのだろうと少女は考え、獲物を探して歩き出した。

【???／00時01分】

【アルシア@白貌の伝道師】？ 「役」：鬼

【状態】 健康

【装備】：嘆きの鉈

「道具」：不明

「思考・行動」

基本方針：出逢った全てを殺す

※その他・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物情報

虚淵玄作　ダークファンタジー白貌の伝道師のヒロイン。？ハーフェルフとして生まれ、人とエルフから蔑まれて育ち、愛される事を望みながら誰にも愛されなかった少女は、裏切られ、拒絶されて、骸人形"バイラリナ"となる事で心の安らぎと救済を得た。？痛みを知らず、感情を持たず、肉体の限界を超えた身体能力を持ち。充填された魔力が尽きぬ限り動き続ける。損傷は即座に回復する。？身の丈ほどもある「嘆きの鉈」を機械じみた精密さで使いこなす。徒手格闘技にも長け、素手で武装した兵士を撲殺出来る。

思考は有るが意思は無く、知識は有るが感情を持たない、主人の命令をこなすだけの殺戮人形。

話しかけられれば受け答えをするが、自分から話しかけるといふ事は無い。

「鬼(ごっこ)、か」

朱い空の下片手のチラシをじっと見つめて、少年が立っていた。

オールバックの髪にモデルのようなスタイルと顔立ちをした麗な少年だったが、その瞳は何処までも虚ろだ。

城岩中学校3年B組にて不良たちの王として君臨していたこの少年の名は、桐山和雄という。

彼は、この場に来る前は最強の殺戮者として動いていたがこの場においては追われる立場にあった。

即ち役職は子。だが、桐山にとって立場などどうでもよかった。

逃げ回るのも抵抗はないし、守る親役でも捕まえる鬼役でも構わな

かった。

「……」

彼は無言で懐からコインを取り出そうとして、手が止まる。
そう言えば、切らしてしまっていた。

「まあ、いい。こういうのも悪くない」

こういう時、彼は決まってそう言い、そして動き始める。

取り敢えず他の参加者と会ってからどうするか決めることとする。

無差別の殺戮者として振る舞うもよし、脱出を目指すもよし、或いは誰かに従うのもよし。

この絶望鬼ごっこでも彼は変わることなく、虚ろの道を進むのだ。

【??】／00時03分

【桐山和雄@バトル・ロワイアル（漫画）】

【役】：子

【状態】 健康

【装備】：イングラムM10サブマシンガン

【道具】：不明

【思考・行動】

基本方針：ほかの参加者との接触。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【人物紹介】

ご存知本家バトロワ最強マードー

城岩中学校 男子出席番号6番

3年B組男子不良グループのリーダー。

襟足が長いオールバックの髪型が特徴。

中国四国地方トップクラスの財閥の御曹司で、容姿端麗、成績優秀かつ運動神経も抜群。

芸術的なセンスも高く、絵画や音楽でも高い才能を持つが、幼少期の事故により彼は感情を失ってしまった。

※二話投稿『(アリス・カータレット登場話) はいいろ
デスゲーム』&『死霊の殺し踊り』

暗い森の中の、うっそうと茂る巨木の真下。

まるで雨宿りでもするようには、金髪の少女が一人しゃがみ込む。

「わたしは親だから、子供を守ればいいんだよね…?」

彼女に与えられた役は『親』。

生き返るためには鬼から逃げ、子供より少なく生き残らなければならぬ。

子供が何人いるか分からない以上、親の勝利を狙うのならば必然的に他の親を排除する必要がある。

「でも、怖いよ…」

そうなれば確実に自分は真つ先に排除対象になるだろう。

それどころか、場合によっては友人たちと争わなければならないかもしれない。

それだけは絶対に嫌だ。彼女はぎゅっと袖口をつかんで縮こまる。

先ほどから続く体の震えは、暫く収まりそうにない。

そして、それ以上に心配なことが一つ。

「そもそもわたしの事、親だと思ってくれるかな…」

——アリス・カータレット、18歳・身長139cm。

子にしか見えない親の逃避行は、まだ始まったばかり。

【???／深夜】

【アリス・カータレット@きんいろモザイク】

【役】：親

【状態】：健康、軽い恐怖

【装備】：

【道具】：デイパック（不明支給品2）

【思考・行動】

基本方針：元の世界に戻って、みんなで修学旅行へ行く

1：親、子供と合流する

2：親だと信じてくれるかな：

※原作での修学旅行エピソード前からの参戦です

『人物紹介』

「きんいろモザイク」のメインキャラクターであるイギリスからの留学生の少女。

真面目で成績優秀だが体育が苦手。また焼きもち焼きな面もある。

小学校のころから3cm程しか伸びてないほど背が低い。ゆえに子供扱いされることもしばしば。

森の中に打撃音が響く。

貫頭衣を纏っただけの少女、アルシアは無表情に腕を振るい、驚掴みにしたアリス・カータレットの頭を木の幹にぶつけ続けていた。

木の下でアしやがみ込んでいたアリスは、物音を聞いて飛び上がった。

聞こえたのは枯れ枝が踏み折られる乾いた音。誰かが付近を移動している。

アリスがしやがみ込んでいた木を挟んだ向こう側を、枯れ枝を踏み折った何者かは歩いているようだった。生い繁った雑草を踏む音が一定のリズムを保って聞こえてくる。

思わず息を殺す。木が遮っていて姿は見えないが、それは向こうも同じ。子か親かそれとも鬼か。

このままじつとしてやり過ごすべきか、それとも接触すべきか。

少しの間逡巡したアリスは、取り敢えず様子を伺う事にして、木の陰からそつと向こう側をおっかなびつくり覗き見た。

「……………」

誰も居ない。

さつきまで歩いている音が確かにしていた。踝の上辺りまで伸びた雑草が、一定の間隔で倒れている。明らかに誰かが歩いていた筈なのだ。

「うそっ!」

思わず木陰から身を乗り出した瞬間。誰かに右手腕を掴まれ一気に捻り上げられた。

「ギ…アアアアッ!」

突如襲ってきた激痛に、愛らしい顔を歪めて、身も蓋も無く絶叫する。

なんとか振り解こうともがいていたアリスの視線と襲撃者の視線が交錯した。

「ひ……………」

引き攣った喉から絞り出されるうめき声。

目が合った瞬間、アリスの動きが、否、思考すらが停止した。

アリスの腕を捻り上げているのは、アリスと同年か少し下の年の少女。左手でアリスの右腕を捻り上げ、右手一本で、自身に匹敵する刃渡りの巨大な鉈を持っている。

だが、それよりもアリスを恐怖させたのは、少女の瞳だった。

澄みすぎるあまりに無辺の奈落を思わせる、どこまでも虚ろで空洞な闇を湛えた黒瞳。

仮面の様な無表情と相まって、アリスを受けた印象は———死人。

恐怖に身も心も呪縛されたアリスを、少女———アルシアは掴んだ右腕を支点に振り回し、木の幹に身体の前面を叩きつけた。

顔がまともにぶつかり、鼻の奥が熱くなり血が香る。

「がっ……………」

短く苦鳴を漏らして崩れるアリスの頭を鷲掴みと一定の間隔を置いてアリスの顔を幹にぶつけ続ける。

「痛いっ! やめっ! いたっ!」

薄い皮に覆われた骨と幹とがぶつかる度にアリスは悲鳴を上げ続

けた。

アルシアは最初からアリスに気付いていた。

元より森の民であるエルフの血を引き、森の中で育ったアルシアにとってみれば、森の中はホームグラウンド、アリスの気配を察することなど容易い事。

アリスに気付かれないように近付き、不意を襲うつもりだったが、アリスが顔を出したので方針を変えたのだった。

アルシアが態々アリスを甚振るのは趣味思考の故ではない。元より感情無き屍であるアルシアにそんなものは存在しない。

只、アルシアはこの場にいない主人の意思に沿っているだけだ。

アルシアの主人が殺戮を行うのは、偏に混沌神グルガイアに地上に蔓延る生命を贄として捧げる為。

捧げる生命は苦痛に満ちている程に贄としての質が良くなる。

数をこなさなければならぬ時には効率的に、逃げようとするもの、足が速いものを優先して手早く殺していくが、今アルシアが殺すべきはアリス一人のみ。ならば時間を掛けて質を高めて殺すのは当然の事。

一撃でアリスの頭を砕いて絶命させる事も出来るアルシアだが、死なない様に加減してアリスの頭を幹にぶつけ続ける。

既にアリスはまともに声も出せずに、僅かに呻くだけになっていった。

このままのペースで続ければ、そう遠くない内に死ぬだろう。

アルシアが十度目の打撃をアリスに加えたその時、アルシアの耳は近づいてくる足音を捉えた。

「……………」

「……………」

アルシアが視線を向けた先に居たのは、男女問わず人目をひく顔立

ちの少年。

その瞳はアルシア同様無限の虚無を湛えている。

アルシアは素早くアリスと少年を見比べると

、アリスに逃げるだけの余力は無いと判断して、嘆きの鉈を構え、真つ直ぐ少年めがけて走り出した。

少年——桐山和雄は向かってくるアルシア目掛けてイングラムの引き金を引いた。

アルシアから受けた暴行により、木の下に崩れ落ちたアリスには見向きもしない。向かってくる相手への対処が終わった後、生きていれば今後の方針を決める為に使う。

何処までも虚ろな桐山の心は思考を全く妨げず、桐山は冷酷に何から対処すべきかを判断する。

パララッ

乾いた銃声が連続し、アルシアの顔から上半身にかけて複数の弾痕を穿つ。

通常ならば致命傷になる傷だが、アルシアは元より充填された魔力で動く骸、血を流すことも無く、傷はたちどころに塞がり、全く意に介さず走り続ける。

「……………」

明らかに人智を超えたアルシアを見ても桐山は動じることは全く無い。

足に狙いを切り替え、動きを止めようとするが、放たれた弾丸は悉く地面に突き立てられた鉈に当たっただけだった。

アルシアは銃を知らないが、桐山が自分の知らない飛道具を用いると認識、地面に鉈を突き立てると、棒高跳びの要領で跳んだのだ。

鉈の柄を支えに宙を舞うアルシアは、前方宙返りをし、回転の勢いと自身の運動エネルギーを用いて鉈を引き抜き、桐山の脳天目掛けて

振り下ろす。

だが、その様な大振りな攻撃が通じる桐山ではない。

上空から落ちてくる鈍の軌道と落下速度を正確に予測して、前方へと駆ける。

ズウン！と鈍い音がして、桐山の左30cm程の所に大鈍が落ち、地面を切り砕くが桐山は意に介した風も無く間合いを詰めて、未だ宙に在るアルシアの身体に拳を見舞った。

体躯で劣るアルシアが桐山の強打に抗する術は無く、鈍い音を残してアルシアの矮軀が後ろに飛ぶ。

だが、動く骸であるアルシアにいくら強打であるとはいえ、只の拳撃は意味を為さない。

空中に居ながら両手で、拳打の為に伸ばした桐山の左腕を絡めとり、関節を極めようとしてくる。

このアルシアの動きに桐山は冷静に対処。身体を左に回転させ、左腕を狙ったアルシアの動きを回避しつつ、回転運動により生じた勢いを乗せた右の上段回し蹴りをアルシアの胴に入れて蹴り飛ばした。

肋の折れる感触を桐山の脚に残し、5mも飛んだアルシアだが、当たり前前の様に着地を決め、桐山目掛けて駆け出す。

「……………」
アルシアの異常なタフネスを見ても意に介さず、桐山は冷静に距離を測る。

今のアルシアは素手。間合いでは桐山が有利。
狙うはアルシアが間合いに入ると同時に放つカウンター。

「……………!?!」

間合いに入ると同時に一撃を見舞う。その動きに入る直前、アルシアの速度が上がった。

桐山の狙いを外すべく、速度を落として駆け出し、桐山の間合いの直前で全速を出したのだ。

この動きにも桐山は反応。対処すべく動こうとするが、その時既に

桐山を己の間合いに捉えていたアルシアが、駆け寄る勢いを乗せたアッパー気味の掌打を桐山の顎へと放つ。

仰け反って掌打を回避し、カウンターの膝蹴りをアルシアの顎に入る。顎の骨が割れる感触が膝に伝わり、アルシアが仰け反るが、桐山も膝が崩れる。アルシアの掌の上で顎を掠めて、軽度の脳震盪を起こしたのだ。

右手のイングラムのマガジンが空になるまで、アルシアの左膝に銃撃を加えると、無言のまま桐山は駆け出す。

アルシアを現状の装備で斃すのは困難を極める。しかも己の支給品は『式札』。現状の打破には役立たない。

脳震盪を起こした身では、アルシアとの戦闘継続は愚行。ならば仕切り直すまで。

瞬時にこれらの思考を纏めた桐山は、銃撃でアルシアの動きを止めると、落ちていたアリスのデイバッグを拾ってこの場を後にした。

【E-07 / 00時42分】

【桐山和雄@バトル・ロワイアル（漫画）】

【役】：子

【状態】 軽微な脳震盪

【装備】：イングラムM10サブマシンガン ・アリスのデイバッグ

（内部未確認）

【道具】：式札

【思考・行動】

基本方針：ほかの参加者との接触。

1：鬼を殺せる武器の調達

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※アルシアと戦闘し、現状の装備で斃す事は出来ないと知りました。

千切れた脚を拾ってくっ付けたアルシアは、無言で嘆きの鉈を担ぎ上げる。

中々手強い人間だった。今度の神楽は今までのものとは違う様だ。

未知の飛び道具を使うとはいえ、これ程までに損傷を受けるとは思わなかった。

損傷自体は直ぐに治るが、充填された魔力の減少は問題だ。

「……………」

アルシアは全身に力が満ちて来るのを感じた。まるで主人に魔力を注がれている様な。

アルシアは知らないが、此処は地獄。アルシアの主人の故郷が形容される場所そのもの。

地獄に満ちる空気は、アルシアの身体を動かす魔力に近い性質を持つようだった。

この分ではそう時間を掛けずに魔力は満ちるだろう。

魔力についての心配がなくなったアルシアは、首を巡らしてアリスが倒れている場所に視線を巡らせる。

「……………」

居ない。あの状態で動けるとは思っていなかったアルシアは、僅かに首を傾げた。

どうやら外見にそぐわぬ体力の持ち主の様だった。気配すら感じられない。硝煙の臭いが邪魔で血臭を嗅ぎとれない。

物音も聞こえない辺り、余程遠くまで逃げたのだろう。

次からは獲物の脚を潰しておこう。そう考えながら周囲を見回すと、地面に落ちてしている紙袋から見覚えのある品が見えた。

「これは……………」

紙袋の中から出て来たものは、彼女の主人が用いる武器の一つである槍と紐のついた刀。

取り敢えず紙袋の中にしまい込む。残りの一つ、得体の知れない材質で出来た小さな板も取り敢えず捨てずに仕舞う。

改めて周囲を見回したアルシアは、行方の知れないアリスを諦め、桐山の去った方角へと駆け出した。

【E-07 / 00時53分】

【アルシア@白貌の伝道師】？ 「役」：鬼

【状態】 健康 魔力消費（中）

【装備】：嘆きの鉞・群鮫@白貌の伝道師・紐付き柳葉刀@BLACK

K LAGOON

【道具】：スマートフォン（鬼）

【思考・行動】

基本方針：出逢った全てを殺す

1：桐山を追う

2：次からは獲物の脚を最初に潰す

※その他・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※桐山の顔を把握しました

※アリス・カータレットの顔を把握しました

※【群鮫（むらさめ） @白貌の伝道師】

白銀龍の角を穂に、大腿骨を柄に使った短槍。

刃に“硬化”の二重掛け。更に切っ先への衝撃で“重剛”の魔力付加が発動し、運動エネルギーを倍化させるため、直撃した際の威力は絶大。

使い手の意思に感応して重心配分が変動し、投擲において絶妙な精度を誇る。

※【紐付き柳葉刀@BLACK LAGOON】

シエンホアが使う武器。通常の刀剣として使う他に、紐を伸ばして振り回したりする使い方がある。

紐の長さは十数mは有る。

アリスは藪の中で気絶していた。

桐山とアルシアの戦闘時の銃声を聞いて、意識が明白となり、二人が戦っている隙に藪の中へと這いずって隠れたのだった。

アリスは恐怖していた。いきなり暴力の嵐を見舞ってきたアルシアもそうだが、遠目に見えた桐山の仮面を思わせる顔立ちが、アルシアとそっくりだったのが恐怖を倍増させた。

鬼同士が殺しあっている様にしか到底見えず、死に物狂いで身を隠して安心した拍子に意識を失ったのだった。

尤もその為に、アルシアはアリスの気配を掴めずに立ち去ったのだが。

顔を血に染めて倒れ伏すアリスが目覚めるのはいつの事か。

【E-07 / 00時55分】

【アリス・カータレット@きんいろモザイク】

〔役〕：親

〔状態〕：顔に打撲傷。鼻血。額から出血。気絶中

〔装備〕：

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：元の世界に戻って、みんなで修学旅行へ行く

1：親、子供と合流する

2：親だと信じてくれるかな…

※その他

※アルシアの顔を把握しました

※桐山の顔を把握しました

※アルシアと桐山を鬼役だと思っています

※原作での修学旅行エピソード前からの参戦です

第二十八章 残酷な天使のテーゼ（狛枝、綾波）

※二話投稿『綾波レイ登場話』Dance Like
You Want to Win!』&『狛枝凪斗
登場話』Bad Luck』

「……………」

少女が目を覚ますと、路上にいた。雲のない赤い空、ビラを撒く飛行機。家々に明かりや気配はない。無人の街。

見回しても、それほど高いビルはない。……見知らぬ街だ。

「……………」

掲示板や壁や電柱には、偏執狂のように無数の同じ貼り紙。拾ったビラも同じ。その文面は、鬼・親・子で『鬼ごっこ』をするというもの。

自分が三つの役のどれか、というなら——多分、『子供（チルドレン）』。一応、14歳の中学二年生ということになっている。

年齢と関係なく、親や鬼にされている可能性もあるが……自分の役も教えないとは、なんと不親切な。

鬼ごっこというゲームを、知識としては知っているが、やったことはない。子は、鬼から逃げる。決められた範囲とか、制限時間は、わからない。

ここはどこか？ 参加者は、自分以外に誰が何人いるのか？ そもそも、誰がこんなことを？ ……現状では、情報が少なすぎる。

困惑する少女は、いつの間にか手に持っていた道具を確認する。携帯端末だ。説明書がついている。

どうやら、これで同じ『子』と、これを持っていれば連絡出来るらしい。情報収集も可能だ。少女は、無表情に呟く。

「……………」

「???／00時06分」

【綾波レイ@新世紀エヴァンゲリオン】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：第3新東京市第壱中学校女子制服

〔道具〕：スマートフォン

〔思考・行動〕

基本方針：帰還する。

1：携帯端末で他の『子』と連絡を取り、情報を収集する。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。自分の役を子であると推測。

様子がおかしいとは思っていますが、殺人ゲームだとは気づいていません。

『人物解説』

『新世紀エヴァンゲリオン』シリーズの登場人物。CV：林原めぐみ。第3新東京市立第壱中学校2年A組。NERVに所属するEVA零号機専属操縦者。

細身で小柄、水色のシャギーヘアと赤い瞳、透き通るような白い肌をした少女。人形のように寡黙で無表情、感情を表に出さず、他者と必要以上の会話はしない。

ただ感情がないわけではなく、表現の仕方を知らないだけである。様々なバリエーションがあるが、TV版、旧劇場版、漫画版、新劇場版のどれなのか、何人目なのかは現在不明。

「はあ、参ったね。」

青年は絶望していた、いきなり謎のウサギに謎の島に連れてこられ、「らーぶらぶ修学旅行」という巫山戯た行事に参加されたかと思えば、また謎のクマが現れて「コロシアイ生活」に変更したかと思えば、急に目の前が真っ暗になり「鬼ごっこ」に参加させられて今に至る訳だ

〔装備〕：パラシュート

〔道具〕：支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：希望の為の踏み台になる

1：どちらかの陣営が希望になり得るか見定める。

2：…誰か来ないかな？

※プロローグ終了時からの参戦。

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

人物紹介

粕枝凧斗

CV緒方恵美

絶望的な状況下でも、仲間と希望の力を信じている、面倒見のある青年。

…なのだが、実は常に自分を卑下し、絶望を毛嫌い、希望の為なら自身や仲間をも踏み台にする危険人物。

粕枝の持つ超高校級の幸運の才能とは、望めばどんな幸運をも手にする事が出来る能力。ただし、その前後にその幸運に比例した不幸がやって来る。

逆に言えば、不幸が来ればそれに比例した幸運が来る、その為粕枝自身はこの才能をゴミと見つつも、絶対的信頼をしている。

残酷な天使のテーゼ

「ねえ…聞こえてる?」

「……………」

「ねえ…大丈夫?だいぶ参っているように見えるけど…?」

「仕方ないよね…いきなりこんな事に巻き込まれるだなんて…多分他の人達も同じだと思うよ…。」

「ねえ…聞いてる?」

「…ごめんなさい、こんな時…どんな顔をすればいいのかわからないの…。」

「…嘘えばいいと思うよ。」

「…多分違うと思うわ。」

……………

「いやー、助けてくれてありがとう。君が最初に出会えた人で本当に良かったよ…あ、まだ自己紹介がまだだったね、僕は狛枝凪斗。」

「…綾波レイ。」

木に絡まっていた狛枝を助けた綾波、二人は互いに自己紹介をする。

そもそもこうなるまで至る経緯とは、スマートフォンをしようとした綾波だが、その時上空の飛行機から次々と降下するパラシュートを目撃。

スマートフォンは後回しにして、まずは降下するパラシュートが何か確かめるべく、その内の一つのパラシュートが降りた場所へ移動すると、何故か一本の木に引っかかって、パラシュートの紐に絡まって身動きが取れなくなっている狛枝凪斗を発見し、今に至る。

二人は軽く自分達の素性、ここに連れて来られた経緯を話すが…。

「…第3新東京市?…ごめん、詳しく話して貰えないかな?」

狛枝自身の話(ついでに鬼ごっこのルールも)が終わり、今度綾波が話すと場の雰囲気ガラリと変わる。

第3新東京市、全く聞き覚えのない単語に説明を求める狛枝、だが話しを聞くにつれ、さらに理解不能となる。

(セカンドインパクト…南極大陸消滅…東京壊滅…第二次遷都計画…さらに使徒にNERV、エヴァンゲリオン?…はは、参ったな…全く訳がわからないな。)

話しを簡単にまとめると、15年前にセカンドインパクトと呼ばれる大災害により人類の半分が死に、さらに使徒と呼ばれる謎の存在が第3新東京市にて、サードインパクトという新たな大災害を引き起こそうとしており、それを阻止する為の組織NERV(ネルフ)の兵器、エヴァンゲリオンが使徒と戦っている…という事らしい。

(これはどういうことだ…?世界が滅亡しかけた話は当然聞いたことないし身に覚えもない、かと言って嘘、にしては今の話は出来過ぎているし、彼女は嘘を言ってる様には見えない。…田中君と同じタイプには見えないしね。)

綾波の話に困惑する狛枝。その際、ここに来る前に知り合った同級生の事を思い出す、目の前にいる少女は嘘を言ってる様には見えない。(一応彼も嘘を言ってる訳でもない)

(どういうこと?第3新東京市に使徒どころかセカンドインパクトですら知らないなんて…。)

同時に綾波もまた何も知らない狛枝に困惑する。

第3新東京市や使徒だけならまだしも、世界規模の大災害であるセカンドインパクトを知らないのは流石に綾波も見過ごせない。

(ふう、あのコロシアイもそうだったけど、今日は本当に訳のわからない事ばかり起きるな…絶望的だね。)

「…とりあえず、他の人も探してみようよ、もしかしたらまた新たな事がわかるかも知れないしね?」

「…ええ、わかったわ。」

狛枝の提案に賛成する綾波、彼女もこの現状について情報収集すべく動いたわけだからそこに異存はない。

「…あ、そういえば。」

「どうしたんだい?」

そこで綾波は思い出す、自身に支給されたスマートフォンを。

見てみると時刻はあと少しで一時になろうとしてた。

【H-7/00:55】

【狛枝凪斗@スーパーダンガンロンパ2】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：

〔道具〕：支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：希望の為の踏み台になる

1：どちらかの陣営が希望になり得るか見定める。

2：他の人を探す。

3：セカンドインパクト：どういうことだ？

※プロローグ終了時からの参戦。

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【綾波レイ@新世紀エヴァンゲリオン】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：第3新東京市第壱中学校女子制服

〔道具〕：スマートフォン

〔思考・行動〕

基本方針：帰還する。

1：狛枝と共に他の人を探す

2：携帯端末で他の『子』と連絡を取り、情報を収集する。

3：セカンドインパクトを知らないなんて：どういうこと？

※自分の役と鬼ごっこのルールを把握、会場の地図は未把握

第二九章 『惹かれ合うMystery』&『Know

Your Enemy』

惹かれ合うMystery

沖木島北部、座標D—06、鎌石小中学校。

森に囲まれ、小高い丘の上に立つ三階建ての校舎。正面に校庭。

建物は真つ直ぐ横に伸び、片側に体育館が隣接している。その間に連絡通路。

児童数は少なからうが、島では有数の大型施設。災害時には避難所ともなるであろう。

そこに侵入する二人の少年あり。彼らは小学生でも中学生でもない。

悲しき男子高校生、『ヒデノリ』と『間田敏和』だ。ここで彼らが出遭うのは――



「あるかなア……アレが……クソツ」

間田は図工室へ入り、クロッキー人形……デッサン人形、モデル人形とも言うが……それを探している。

身長20cmや30cmのフィギュアならよくあるが、「等身大の」となるとなかなかない。値段もそれなりに張る。

全身可動の等身大マネキンが、確か数万円。仗助にブツ壊されたあの人形も、それぐらいしたはずだ。親が押入れにしまったヤツだったが。

都会の画材屋とか、大きめの高校にならありそうなものだが、離島の小中学校には……見当たらない。やはり、自分で作るしかなさそうだ。

「間田さん、廊下から発煙筒と消火器持って来ました。まだ誰もいないっすね」

「おう、ご苦労さん。いずれ誰か来るだろーし、それまでに籠城の準備を調べとくぜー」

ヒデノリが戻ってきた。人形はないが、物品は豊富にある。立地もよく、逃げ隠れる場所も多い。

鬼がどんなヤツか不明だが、少なくとも人間なら、ここに籠ればそれなりに防げよう。

火をかけるなどして炙り出して来るかも知れないが……その時はその時だ。消火器もあるし。

「なんか見つかりました?」

「彫刻刀とか鋸とかロープとか、武器になりそうなものはいろいろあるな。これでトラップ仕掛けようぜ。『ホーム・アローン』見た?」

「ああ、なんかありましたね、そういう映画。やりすぎじゃないの? つてぐらい罨張つてたやつ……」

【D-06 (鎌石小中学校内) / 00時55分】

【ヒデノリ@男子高校生の日常】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：真田北高制服 (ブレザーの冬服、上着なし)、鉈@ひぐらしのなく頃に、うまい棒@支給品、フライパン (民家から拝借)

〔道具〕：デイパック、医薬品少々、発煙筒、消火器などなど

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：使えそうな道具を探し、罨を張る。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【間田敏和@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：不明支給品 (上着のポケットの中にあるが、まだ気づいていない)

〔道具〕：『サーフィス』 (スタンド能力、発動には『等身大クロッキー人形』が必要)

「思考・行動」

基本方針：家に帰りた。

1：使えそうな道具を探し、罫を張る。

2：『サーフィス』に使えそうな人形を探す。なければ作る。スタン
ド能力のことはとりあえず秘密。

※その他

各役の勝利条件・制限時間を把握。自分の役を子だと推測。

実は16歳以上なので、レギュレーション違反に気づいた管理者から追手がかかっている。そのうち殺しに来るかも知れない。

※アーチャー・インフェルノ（巴御前）&君原姫乃が校内にいるかどうかはルート次第。



鎌石小中学校の南東、座標E-07、東崎トンネル付近。の、下水道の底。

恐るべき鬼が、そこに潜んでいた。白塗りの顔、赤い鼻。ピエロの格好をした鬼。これも仮の姿ではあるが。

彼は捕食者だ。だが、つい先程、手痛いダメージを受けて撤退してしまつた。あの忌々しい獲物——『ハヤト』が放つた、何らかの武器によつて。

不死身の悪魔は、頭部を吹っ飛ばされたところで滅びはしない。外見はすぐに修復出来る。然れども、ダメージは大きい。

餌が必要だ。傷を癒やし、自信を取り戻すには。手頃な獲物を見つけ、幻術で恐怖させ、その肉を貪り食わねば。

彼は配布された地図を見やる。二枚あるが、どちらが正しいかはよくわからない。下水道が繋がっていれば、そこへ行ける。

闇の中で、書かれている文字は東洋の呪術的な象形文字らしいが、難なく理解できた。霊的な視力や認識によつて読めるのであろうか。

その文字の一つを見て、彼はニンマリと笑う。学校。すぐ近くだ。子供たちの集まる場所だ。

【E-07 (下水道の底) / 00時55分】

【ペニーワイズ@IT/イト “それ”が 見えたら、終わり。】

【役】：鬼

【状態】：ダメージ(中)、ペニーワイズの姿で行動中、川尻早人への怒りと恐怖

【装備】：

【道具】：四次元っぽい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：恐怖させ、喰らう

1：喰いやすそうな獲物を狙う。手頃な相手は幻術で追い詰める。

2：鎌石小中学校へ向かう。

※その他

下水道で繋がっている場所なら何処からでも出現できます。

川尻早人の最も恐怖するもの(川尻しのぶの死)を把握しました。



「あれは……学校……!?!」

高校生の少女が、幼女を連れて、ふらふらと東へ進む。

そこに見えたのは、明らかに学校だ。小学校。小学校。小学校。あ

あ、ああ。

いや、『るーちゃん』は「ここにいる」。チョコレートあげたら喜んで食べてくれた、可愛い子。

いや、るーちゃんではな……るーちゃんだ。彼女はるーちゃんだ。それ以外の何だ。誰だ。るるるるる。

錯乱している彼女の精神は、この恐るべき悪霊『ジャック・ザ・リッパ』を、自分の妹として認識している。

ジャック・ザ・リッパの方も、今は彼女に敵意はない。チョコレートをくれたからだ。

二人で還る。他はみんな、解体すればいい。彼女はそう思ってい

る。

無邪気なようだが、思考も戦闘力も存在自体も、子であるのにほぼ鬼だ。

「りーねえ、あそこへ行くの？」

「……そうね、るーちゃん。あの学校へ行ってみましょう」

【D-06（鎌石小中学校の西側）／00時50分】

【若狭悠里@がっこうぐらし！】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、精神錯乱気味、

〔装備〕：ゾルダのカードデッキ@仮面ライダー龍騎

〔道具〕：チョコレート×10

〔思考・行動〕

1：るーちゃん（ジャック）を守り抜く。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握しました。
精神が錯乱してジャックをるーちゃん（妹）だと思っています。

【ジャック・ザ・リッパ@Fateシリーズ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：全員解体する。

1：美味しい魂の持ち主がいたら食べる。

2：りーねえ（若狭悠里）についていく。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと思っている。

霊体化、及び神秘を纏っていない攻撃の無効化は制限されていません。

レギュレーション？ 知らない子ですね…。

Know Your Enemy

沖木島北部、座標D-06、鎌石小中学校。

学校の傍らの水路から、ぬうっと顔を出すものあり。白塗りの顔、赤い鼻のピエロ。『ペニーワイズ』だ。

「それ（IT）」は独特の感覚により、この場所に『子』がいることを嗅ぎつけている。しかし……。

「このにおいは……『鬼』もいるな……それも、子どもの鬼……」

気配を遮断していても、微かに感じ取れる。ドブのにおい。死のにおい。屍のにおいだ。よく嗅いだことがある。存在として自分に近い。

ただ、幼い。悪霊として、悪魔として、存在として、幼さを感じる。ややこしいやつだ。

まあいい。同業者がいるなら、獲物を横取りされないよう急いだがよからう。この学校にいる子や親を殺し、喰らうのだ。



その西側。

少女と共にいる幼女が、ふと立ち止まり、臭いを嗅ぐようなしぐさをする。

「……どうしたの？ るーちゃん」

「んー……なんか、わたしたちと似たようなのがいる」

幼女は『それ』に気づく。彼女こそは『ジャック・ザ・リッパー』。

その正体は、ドブに捨てられた数万の墮胎児の霊の集合体。それゆえに、彼女の一人称は「わたしたち」だ。大勢だからだ。

彼女を「るーちゃん」と呼んだ少女は、虚ろな瞳で小首を傾げる。

「へえ。やっぱり、誰かいるんだ。わたしたちと似たような人たちが」

彼女、『若狭悠里』は、一般的な意味でそれを理解した。誤解した。

自分たちと同じような、子や親の役の人があると。それはそれで間違っではない。

なぜ「るーちゃん」がそんなことを察知したのかは、思考の埒外にある。



ギコギコギコギコ……鋸が木材を切断し、おがくずを散らす。コンコンコンコン……彫刻刀が形を整える。

少年『間田敏和』は、自分の切り札となる『クロツキー人形』を自分で造ることにした。

木工などやったことはないが、やるしかない。簡易罫を張り終えたヒデノリにも手伝わせる。

「間田さん。この人形、なんなんスか？」

「ま、黙って手伝ってよ……説明は難しいんだが、おれの切り札になるからさ」

やや小ぶりで、廃材や椅子を組み合わせた程度のものだが、少しずつ形にはなってきた。

スタンド能力は意志の力、できて当然と思いつく精神のパワーだ。市販のクロツキー人形でなくても、発動できると信じよう。

精神力次第ではフィクションの陰陽師みたいに、紙の札とかでもできるかもしれないが、そんな精神力は彼にはない。

また一度に動かせるのは一つだけだと、かつていろいろ試してわかってる。でもスペアがあった方がいいか。

少し汗をかき、制服の上着を脱ぐ。と、ひらりと何か落ちた。

「……ん」

「どうしました？」

「いや……なんか、上着のポケットに入ってた」

間田が取り出したのは、一枚の紙。それに、なにか挟まれている。紙には次のような文章があった。

『「式札」……参加者の死体を一つ対象に選んで発動する。死体に乗せると参加者の役がわかる。』

この時対象の役が『鬼』だった場合、濃い霧が発生しその死体のあるエリアを即座に禁止エリアとする。使用後自壊する。』

「……………」

間田とヒデノリは顔を見合わせた。『子』であろう間田にも支給品があつたとようやく判明したが、どうすればいい。

これを使うには、死体が必要だ。禁止エリアを発生させるトラップに使うとしても、『鬼』の死体でなければ意味がない。

しかも、これをのせた本人は禁止エリアに取り残されるだろう。エリアをどう区切っているのかすら不明だし、禁止されたらどうなるのか。

「……ま、まあ、なんかの役には立つだろ。おれが『子』だってことの証明にはなるしき……たぶん」

「親も持つてるかも知れませんが、まあ……つつうか『鬼』も死ぬんですね」

「そりゃ、鬼の役も人間なんだろうしな。殺し合いになるぜー」

「鬼ごっこなんだし、逃げりゃいいんでしょ。鬼役が何人いるか知りませんけど」



「注意して」

「うん。……うん？」

ただならぬ気配に、悠里は訝しむ。ジャック・ザ・リッパーは、武器を構え、ランタンから硫酸の霧を発生させる。

殺意のにおい。子どもを狙い、騙し、ドブの中へ引きずり込むような、悪意を感じる。ドブに捨てられ続けた彼女にとっては好ましくない感覚。

ここから離れるか。いや、むしろ危険。わたしたちを狙わなくとも、リーねえを襲う危険は充分。目を離れた隙に彼女はドブの底だろう。

ここで始末する。こいつは、「わたしたち」の敵だ！

【D-06 (鎌石小中学校) / 01時10分】

【ペニーワイズ@IT/イツト “それ”が 見えたら、終わり。】

〔役〕：鬼

〔状態〕：ダメージ（中）、ペニーワイズの姿で行動中、川尻早人への怒りと恐怖

〔装備〕：

〔道具〕：四次元っぽい紙袋（不明支給品3つ）

〔思考・行動〕

基本方針：恐怖させ、喰らう

1：喰いやすそうな獲物を狙う。手頃な相手は幻術で追い詰める。

2：鎌石小中学校へ向かう。

※その他

下水道で繋がっている場所なら何処からでも出現できます。

川尻早人の最も恐怖するもの（川尻しのぶの死）を把握しました。

同類（ジャック・ザ・リッパー）の気配を感じました。鬼だと誤認しています。

〔ジャック・ザ・リッパー@Fateシリーズ〕

〔役〕：子

〔状態〕：健康、魔力消費（小）

〔装備〕：ボロボロのコート、ナイフ数本

〔道具〕：ランタン、不明支給品（式札か水晶、ベルトポーチの中）

〔思考・行動〕

基本方針：リーねえ以外は全員解体する。

1：美味しい魂の持ち主がいたら食べる。

2：リーねえ（若狭悠里）についていく。

3：こいつ（ペニーワイズ）は敵だ。ここで始末する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと思っている。

霊体化、及び神秘を纏っていない攻撃の無効化は制限されています。

す。レギュレーション違反っぽいいため、牛頭鬼が始末に来るかもしれない。レギュレーション違反っぽいいため、牛頭鬼が始末に来るかもしれない。

気配遮断、霧夜の殺人（夜間のみ先制攻撃）、情報抹消（目撃者の記憶を消す）、精神汚染（精神干渉魔術を遮断）、外科手術のスキルを持ちます。

弱体化の程度は不明。ここが地獄であるためか魔力はそれほど消費しませんが、大規模な術の行使には魂喰いなどを必要とするでしょう。

同類（ペニーワイズ）の気配を感じ、敵と認識しました。恐怖を感じなさそうですが。

ランタンから宝具『暗黒霧都（ザ・ミスト）』を周囲数メートルに展開しました。幻惑等の効果を持ち、吸い込むと常人なら数分で死にます。

標的を選んだり外したりすることも可能で、リーねえには効果を及ぼしません。風が強ければ吹き流されます。

【若狭悠里@がつこうぐらし！】

【役】：親

【状態】：健康、精神錯乱気味

【装備】：ゾルダのカードデッキ@仮面ライダー龍騎

【道具】：チョコレート×10

【思考・行動】

1：るーちゃん（ジャック）を守り抜く。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

精神が錯乱してジャックをるーちゃん（妹）だと思っています。

【ヒデノリ@男子高校生の日常】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：真田北高制服（ブレザーの冬服、上着なし）、鉈@ひぐらしのなく頃に、うまい棒@支給品、フライパン（民家から拝借）

〔道具〕：デイパック、医薬品少々、発煙筒、消火器などなど

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：使えそうな道具を探し、罨を張る。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。学校内部にいくつか罨を張りました。

【間田敏和@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：

〔道具〕：『サーフィス』（スタンド能力）、即席の木製人形、式札

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りたい。

1：使えそうな道具を探し、罨を張る。

2：スタンド能力のことはとりあえず秘密。

※その他

各役の勝利条件・制限時間を把握。自分の役を子だと推測。

実は16歳以上なので、レギュレーション違反に気づいた管理者から追手がかかっている。そのうち殺しに来るかも知れない。

※アーチャー・インフェルノ（巴御前）&君原姫乃が校内にいるかどうかはルート次第。

◆ 「……フーツ、ビビらせやがって。馬頭鬼、あと何人だ。近くに誰かいるか」

『ちよい待て……データを照合して……あれ、これどうなってんだ』
「早くしてくれよ」

島内某所。バズーカと金棒を装備した主催者側の鬼・牛頭鬼は、ギーグの襲撃を回避し、馬頭鬼と通信していた。

彼は人知れずレギュレーション違反者を始末する仕事を担ってい

る。落選者もたぶん彼によって始末されるのだろう。

あるいは、既に他の次元へ転送されたか。

『……近くに学校がある。鎌石小中学校。そこに二人いるな』
「二人？」

『ああ。「間田敏和」と「ジャック・ザ・リッパー」。間田は子だが、違反は16歳以上でただけだ。』

多少の超能力も持つてるが大したことはない。——問題は後者だな。子なのに並の鬼よりやべえ。なんでこいつ鬼じゃねえんだ』
「……てこたアレか？ ジャック・ザ・リッパーは放置して、間田をそいつが殺すのを待ったがいいか？」

『かもな。でもまあ、排除しとくに越したこたねえ。返り討ちにされねえよう気をつけろ』

ふん、と鼻を鳴らす。鬼を返り討ちに出来るぐらいの奴か。詳しいデータを送信してもらおう。敵を知り己を知れば、なんとかだ。

『あ、それと——源元気は死んだが、マジエント・マジエントは生きてるらしい』

「やつぱさうか」

『今んとこ、残ってるレギュレーション違反者はそいつらだけだ。全部殺さねえと回収しねえぞ』

「今んとこ？ まだ増えたりする？」

『さーな。超能力者はぼつぼついるんだが、なぜかそいつらは違反になってねえし……』

牛頭鬼はため息をつく。まったく、上は何を考えているんだ。いや、考えるな。命じられた仕事をするだけだ。

「……じゃ、行くか。学校へ！」

第三十章 Last Man Standing

(マジエント・マジエント、ギーグ)

Last Man Standing

「そうそう、ここだった。『無学寺』。上から見つけやすいように、でかい建物のある場所へ落つことしたんだぜ……」

主催者側の始末屋『牛頭鬼』が、金棒とバズーカを担いで山門を潜る。狙いは、レギュレーション違反者『マジエント・マジエント』。

そこそこ強力な超能力を持つ男。能力の詳細は、『構えをとってじっとしてれば絶対防御』というものだ。

ならば要は、意識の外から不意をうてばいい。膂力や反応速度や敏捷さは、所詮は人間、鬼に敵うわけではない。

こちらが気づかれぬように見つけ出し、このバズーカ『ハルコンネン』をブチ込んで、始末する。

あるいはビビらせて絶対防御姿勢を取ったところを、ワイヤーロープかなんかで縛り上げちまえばいい。

通信機で馬頭鬼との連絡もできる。他の参加者の位置情報は、これで聞けばいい。仕事が終わったら回収してもらおう。

と……彼は物音に気づく。バキバキ、バリバリ、という……何かが砕けるような音。標的の出した音か？

いや……なんだ、あれは？ 寺の裏山から降りてくる、赤い影は？

◆ 「クソツタレ……！ あの変態ヤロー、どこへ消えやがった!? ……グスツ。

消えるだけならまだしも、オレの金塊とか持って行きやがって！ムカつくぜ……！ 絶対ブツ殺してやる！」

無学寺の中。全裸の変態筋肉男・源元氣（げんげん）を見失ったマジエント・マジエントは、苛立ちを募らせ過ぎてブチ切れていた。

外だ。外に違いない。こうなりや隠れ潜んでも仕方ない。外へ出て、あいつを殺しに行こう。子でも親でも知ったことか。

腹いせに金目のものを適当に漁り、そこらへんにあった肩掛けカバンに投げ込んでいく。

そうこうするうち、寺の裏から、何かが砕けるような音が近づいてきた。大きい。

「ん？　なんか騒がしいな……あいつか？」

いや、裏は確か山だ。……土砂崩れか？　雨も降ってねえのに？

スタンドを纏えば防衛出来るが、ああーっと、土砂に埋もれて出られねーってのは困るぜ。

いかにオレでも、川底にハマっちまったことで学習はしてる。ここは普通に逃げとくか。

マジエントは冷静で的確な判断力を見せ、寺の外へ逃げ出した。そして、音のした方を振り返った。

◆

「おい、馬頭鬼！　なんだありやあ！　あの赤い影は！」

『ザザッ……あー、鬼の中じゃ一番やべえヤツだな。「ギーグ」。話が通じない、攻撃が通じない、無差別殺戮しか能のないやつだ。

撤退しろ。あいつに巻き込まれたら鬼でも死ぬ。自然災害みてえなもんだ。標的もついでに始末してくれるだろうよ』

「そ、そうか！　じゃ、じゃあ逃げるー！」

牛頭鬼は慌てて、今来た道を逃げていく。鬼で始末屋なのに、子のように逃げ回らねばならないとは。

「なんなんだよ……！　クソっ、マジエントはこれで死んでくれるのか!?　馬頭鬼！　他のレギュ違反者はどこだ!?」

◆

「うっ……うっ　うおわアあああああー……うっ!?」

寺の境内で、マジエントは、見た。それ（IT）を。人間の女性の姿の様であり、あるいは、胎児の様なカタチをした、それを。

赤い霧のようなものが、移動し、広がり、近づいてくる。霧、空気、樹木、地面といった概念を破壊しながら。

（なんなんだ……！　『スタンド』かッ!?　い……いや　デカすぎるッ

し、頭を混乱させていたはずだ。

だが……通用しないッ！ マジエントの意志の力が、怒りが、ムカつきが、恐るべき『ギーグ』の攻撃を防いでいるッ！

黄金の精神も、漆黒の意思も持ち合わせぬ、たかが下っ端のクソ野郎が！ 恐怖のラスボスの攻撃を無効化しているッ！

これは人間賛歌なのか!? それとも……!? ギーグの闇雲な攻撃は、なおも続く！ 防ぎきれるのかッ!?



ギーグはそのまま寺を侵蝕し、歪め、壊し、通り過ぎていく。

竜巻が通り過ぎたように、寺はバラバラになり、見る影もなくなつた。ギーグの姿もない。

どこへ消えたのか？ 地下、空中……あるいは海中か。その破壊の痕跡は、寺の外へ続いている……。

……何分が過ぎたのか。

マジエントは……生きている。スタンドをゆっくり解除し、抜け目なく目を周囲に走らせ、安全を確認する。

彼にとって幸運にも、牛頭鬼はどこかへ去っていた。すつ、と立ち上がる。彼の目には——確かな自信。

「良オーッ！」

【マジエント・マジエント……生存】

【ギーグ……生存、行方不明】

【源元気（げんげん）……消滅】

【牛頭鬼……生存、他のレギュレーション違反者のもとへ】

To Be Continued……⇒

【F—08（無学寺跡）／00時55分】

【マジエント・マジエント@ジョジョの奇妙な冒険 SBR】

【役】：親

【状態】：健康（戦闘で左目を失っており、偏頭痛やよだれ・鼻水を

垂れ流す後遺症がある)

〔装備〕：スタンド『20th Century BOY』（動かなければ絶対防御）、レミントン・ダブルデリンジャー@現実

〔道具〕：頭陀袋（無学寺から調達、金目のものが適当に詰め込まれている）

〔思考・行動〕

基本方針：鬼ごっこで優勝する。とりあえず『子』を守れば良いのかあ？任せろ！

1：子や親を探す。

2：あの変態野郎（げんげん）を見つけ出して殺す。

3：災害（ギーグ）を無傷で乗り切ったことで自信がついた。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

レギュレーション違反に気づいた主催者から追手がかかっている。優先順位は比較的高い。

デイパックと支給品二つ（シザースのデツキ@仮面ライダー龍騎、金塊@Gengen Channel）はミラーワールド内に放置されています。

消滅するか、また既になっているかは不明です。

【???/???】

【ギーグ@MOTHER2】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：無し（支給品は全て破壊済み）

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し（ギーグがそう思っているわけではなく結果的にそうなるのである）

第三章 見た目はオルフェンズ（除一名）（グレー
テル、しんのすけ、エスター、リク、今泉）
（野原しんのすけ登場話）嵐を呼ぶ鬼（つこ）

「うーん、完全に迷いましたな。」

赤い空を眺めながら、原っぱの斜面をゴロゴロとしている人影が一つ。野原しんのすけは言葉とは裏腹にのんきな顔でそう呟いた。見上げる空には火花が散るが、それを見続け既に小一時間、それだけの時間彼は周囲を散策して帰り道がわからないということだけは把握していた。

今日はネネちゃんの家でリアルおままごとをすることになっていたのでなるべく遠回りする道で向かっていたのだが、気がついたらこの状況である。とりあえず最初に迷ったと思ったときにいた林から出て人がいそうな方に向かったのだが、どういうわけか人に出くわさず、それどころか海が見えて今に至る。春日部に海が無いことから自分がどこか遠くに来た気もするが、しかし家から地続きで歩いてきたためそのうち知ってる場所に出るだろうと楽観していた。

「お?」

ゴロゴロと転がる中でポケットの異物感に気づいた。手を突っ込む。出てきたのは小さなお守りだった。

「なんで?」

尤もな疑問である。

いつの間にか入っていたそれと、一緒に入っていた紙をとりあえず見てみるが、正直よくわからない。というか、ぶっちゃけ気味が悪い。そう思い暫しの間胡散臭い物を見る目で見ていたが、「ま、いつか」とポケットに戻した。細かいことは気にしないのだ。

「さーていきますか——お?」

小休止を終え立ち上がるしんのすけの目が、一本の木に留まった。そろそろ不安になってきたので早く戻りたいと言う気持ちがそうさせたのか、頭の中で木登りして高い所から見渡すという発想が出てく

る。それが林の木とは違い人里に人工的に植えられた低木ということにはもちろん気づかず、ぬるぬるとした動きでいとも簡単に登ってみせると、割と近い場所に鳥居が見えた。どうやら神社があるようだ。そしてその彼方に、一面の濃い霧に覆われた海が見えた。

「……………これが地球温暖化か。」

絶対違う。

とにもかくにも当座の目的地は決まった。「出発おしんこー！」と高らかに声を上げて歩き出す。自分が既に大冒険に巻き込まれていることを、彼はまだ知らない。

【C—04／00時29分】

【野原しんのすけ@クレヨンしんちゃん】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：なし

〔思考・行動〕

基本方針：ネネちゃん家に行く。

1：とりあえず神社に行く。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……………地上最強の五歳児。スケベでマイペースだが、なんだかんだで友情に熱く、本質的には純粋な子供。

※二話投稿『(グレーテル登場話) 血塗れ鬼ごっこ御伽
噺』& 『(今泉慎太郎登場話) 今泉慎太郎巡査の冒険』

人気の無い家の中に、流れる少女の歌声。その歌声は天使のそれを
思わせるが、地獄にそんなシロモノが居るわけが無い。

「嗚呼、鬼に追い回されるなんて可哀想。捕まったらきつと地獄に連
れて行かれるのね。それはとても悲しい事だわ」

歌い終えた少女は眩き、両手に捧げ持ったブローニングオートマ
チックライフル、通称BARにそつと少女は口づけた。

「鬼に追い回されて、捕まったら地獄行きだなんて哀しいことに誰も
なりたくは無いですよ。嗚呼、そうだわ、天国はとても良いところ
だというし…。天使を呼んであげましょう」

役が何でも構わない。鬼でなくとも、子でも親でも構わない。
只、殺すだけ。

地図に存在しない犯罪都市ロアナプラを震撼せしめた双子の片割
れは、いつもの様に家の外へと歩き出した。

??/00時01分? 『グレーテル@BLACK LAGOON

「役」：子? 「状態」健康? 「装備」：BAR? 「道具」：不明? 「思
考・行動」? 基本方針：皆殺し

? ※その他? 自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・
制限時間は全て未把握。??人物情報? ルーマニア革命により行き場
を失った孤児達、通称チャウシエスクの落とし子の双子。

眉目秀麗であった為に裏ビデオに出演させられ、凄惨な性的虐待を
受け、殺人を行わせられる。

いつしか双子は己の境遇を受け入れ、人として壊れ果ててしまっ
た。

外見不相応な身体能力を持ち、10歳程の外見ながら、10kgを
越えるBARを軽々と扱う。

「なんなんだよ……、鬼ごっこだって……？」

デコの広い男はそう呟いた。

今泉慎太郎。警察官であり、階級は巡査。

無能であることを除けば、ごく普通の人間である。

思えば彼は多難だった。

上司の警部補や後輩の小男は彼を役立たず扱いする。

大学時代の友人に殺人の罪を着せられたこともある。

上司のパワハラにより自律神経失調症に罹患したこともある。

そしてついにこんな非現実的なゲームに参加させられてしまった。

彼は決して強い人間ではない。

彼は決して賢い人間ではない。

彼は決して嘘をつける人間ではない。

むしろ全てにおいて標準以下である。

しかし、目の前で起こっているこのゲームを見過ごせる人間ではなかった。

とは言ってもどうしたものだろうか。

説明によると、親が帰還するためには子が減る必要がある。

また、子が帰還するためには鬼が全滅する必要がある。

そして、生還できる役は一つだけだ。

つまり、彼が思うにこの鬼ごっこではルール上人死にが避けられないのだ。

(あの人はこんなときどうするんだろうか……)

彼は一方通行とはいえ尊敬・敬愛する上司のことを思い出した。

史上最低のワトソンは、とりあえず己の正義を信じることにした。

この状況ではそれしか信じられるものはないのだから……。

【??】／00時02分

【今泉慎太郎@古畑任三郎】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：警察手帳

〔道具〕：デイパック（不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：可能な限り参加者を生還させる。

1：子を守る。

2：親を探す。

3：鬼には出くわしたくない。

その他

自分の役、各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

ドラマ『古畑任三郎』の主要登場人物。演者は西村雅彦。階級は巡查。

主人公の警部補、古畑任三郎の部下であり、彼にこき使われている。

かなり間の抜けた性格をされており、古畑からは「刑事として最低」

「役に立ったことなど一度もない」

後輩の西園寺からは「あんなに役に立たない人がいるとは思わなかった」

などと散々な言われよう。しかし、彼の奇行が事件解決のヒントになったりするなど、まるつきり役立たずというわけではない。

※二話投稿 『(エスター登場話) この「子」、どこかが変だ。』 & 『(桜井リク登場話) ラストサバイバル 三つ巴のバトロワ鬼ごっこ』

9歳の少女、エスターには悪いことばかりがつきまとう。生まれ故郷のロシアでは孤児となり、以前の育て親は火事で亡くなり、エスターだけが助かった。

でもコールマン一家に養子として引き取られ、ようやく彼女に平穩が訪れた、

そう、鬼ごっこに「親」として参加するまでは。

エスターはほくそ笑む。

エスターのことを誰も知らない。

エスターのことを知ろうとした人物はみんな死んだ。

そう、自分は9歳の少女なのだ。

だから、自分の役は「子」だ。

ニコツと愛らしく笑ってみせる。

その顔を剥がすことのできる参加者は……？

??? / 00時01分

【エスター@エスター】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：ハンマー

【道具】 デイパック (不明支給品2、確認済み)

【思考・行動】

基本方針：子のふりをして立ち回る。

1：子として親の庇護を受けつつ、参加者の情報を集める。

2：制限時間が近づいたら、親を減らす。

その他

自分の役、各役の勝利条件、制限時間を把握。

『人物解説』

映画『エスター』の主人公。本名は「リーナ」。見た目は9歳のロシア人の少女であるが、

実はホルモン異常による下垂体機能不全で外見の成長が止まった33歳の女性。

子供のふりをして養子に入り、家族の父親を誘惑して拒絶されると一家皆殺しにする。

この手口で最低でも7人の殺害に成功している。

作中でもクラスメイトを高所から突き落としたり、邪魔な孤児院のシスターを

ハンマーで撲殺したりと残忍かつ狡猾な性質を示しているが、

養子先の父親の前では子供らしくふるまっている。

元いたエストニアの精神病院で着せられていた拘束衣の跡を隠すため、

いつも首と両手首にリボンをつけている。また、歯は入れ歯である。

『ルールー：子供は、鬼から逃げなければならない。』

顔をあげると、一番はじめに目に飛びこんできたのは、その一文だった。

黒板にでかかど、書きなぐつてあるのだ。

チヨークを横にしたのか、太い文字で。

それを見て僕は、この前に参加したある大会を思い出していた。

小学六年生が、願いを叶えるために最後の一人になるまで争う、あの『ラストサバイバル』を。

僕の名前は桜井リク、体育より音楽とか図工とかのほうが好きな小学六年生。

そんな僕は今度、『ラストサバイバル』っていうも大会に出場するはずだった。

ラストサバイバルは、毎年50人の小学六年生を集めて、誰が一番になるのかを競う大会だ。

ラストサバイバルではなにをするかっていうのは毎年変わる。

この間僕が参加したのは、だれが一番長く歩けるかを競う『サバイバルウォーク』。

その前は、満点がとれなかったらその場で失格となる『サバイバルテスト』。

他にも『サバイバルスイム』とか『サバイバル縄とび』とかいろんなものがある。

そのなかで僕は、次回のラストサバイバルに参加しようとしていた。

ラストサバイバルで優勝すれば、なんでも願いごとを叶えてもらえる。

たとえば『お金がほしい』でもいいし、『アイドルになりたい』でもいいし、『世界中を旅したい』でもいい。

だから僕は、絶対にラストサバイバルにでて、優勝しなくちゃいけない。

お母さんを、交通事故で倒れたお母さんを助けるために。だから、こんなところにはいられない。

「鬼ごっここのルールみたいだけど、あやふやだな……」

ラストサバイバルではルール説明はしっかりしている。それにテレビ局のカメラが回っていたりもする。

誰もいない教室に突然一人だけ連れて来られるなんてことは、考えにくかった。

だから、少なくともこれはラストサバイバルではない。

僕は他に手がかりになるようなものはないか探そうと席から立つた。

そのとき、ズボンのポケット似なにか入っていることに気づいた。手を入れて取り出すと、それはスマートフォンだった。

見たこともない機種で、画面を見ると「01:00から使用できません」と書いてある。

僕はスマホを持ってないし、たぶんこの鬼ごっこの主催者が持たせたんだろう。

なにが起きたのかはわからないけど、自分が鬼ごっこをさせられようとしていることはわかった。

だったら、鬼ごっこに負けることはまずいはずだ。

「鬼ごっこなら僕以外にも人がいるはずだ。」

とにかくやるしかない。

覚悟なんて全然決まっていなくても、僕は勝たなくちゃいけないって思った。

【G-07（分校）／00時08分】

【桜井リク@ラストサバイバル】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：なし

【道具】：不明支給品

【思考・行動】

基本方針：絶対に生きて帰る

1：ルールを理解する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……『ラストサバイバル』シリーズの主人公で小学六年生。二巻の『ではいけないサバイバル教室』で母親が倒れた後からラストサバイバルに参加する間までからの参戦。家族思いの気弱な少年。特段得意なことはないが、一度限界を迎えたあとに誰かに立ち上らせてもらおうと精神が肉体を凌駕し勝利するか死ぬまで動き続けるようになる。

見た目はオルフェンズ（除一名）

まるでペットかぬいぐるみでも撫でているかのような優しい手つきで、BARにグレーテルは触れていた。

重さ10キロを超すそれは少女然とした格好の彼女にはまるで不釣り合いな代物であるが、これこそが彼女好みの一品である。壁やテーブルに隠れようと盾ごと撃ち抜けるそれは、この鬼ごっこにおいても彼女の手の中で暴れられる機会を待っているかのように、少女の人形のような手にその巨体をしっくりと収めている。その彼のせいでしまわれている袋の奥底にある鬼からの支給品にグレーテルは未だ気づいていないのだが、そんなことは彼の知ったことではなかった。

「えいー」

そしてそんな彼のケツはグレーテルによって容赦なく窓ガラスにぶつけられることとなった。

ともすれば廃材で作ったのではないかと疑うほどにボロい掘っ立て小屋はそれだけでグレーテルの侵入を許し、内部のガラクタを100%OFFでバーゲンする。工具などの『オモチャ』とそれを運ぶための段ボールやビニール袋を手に入れたグレーテルは、出入り口付近に目当てのものを見つけニンマリと笑った。

数分後、グレーテルは一台の軽トラを運転していた。日本で軽トラといえば誰でも思い浮かべるであろう後部が荷台となつている白いそれは、彼女が先程物色した、民家に併設された神社の社務所近くで見つけたものである（残念なことに家主が持つものらしき乗用車の鍵は見つからなかった）。ろくに道が整備されていないこの島では車で強引にじやり道あぜ道を往くのは間違いとは言い切れないのだが、別に彼女はそんなことを考えで盗んだ車で走り出したわけではない。至極単純に足でこの島を動くよりは落ちたものを拾って使った方が良いという判断である。どうやら自分がある神社は集落とは山を挟んで反対らしいという事実は、とにもかくにも人との接触を目論む

彼女には不都合であった。

鼻歌交じりにグレーテルは砂利道を走らせる。町にいけば鬼ごっこを望む者、望まない者、情報を求める者、様々な人間が集まっているだろう。無論車など使えばこちらの位置を教えるようなものだが、彼女達双子は頭は回るのに狙撃され放題の場所にこのこ出てきたりすることもあるためそのあたりのリスクはほぼ無視している。もつとも、たとえ位置を知られてもその頃には場所を移動しているという計算や立ちはだかる人間がいても撥ねてしまえばいいという発想があるのだが。

「ふふっ。みーつけた。」

そしてその無鉄砲さはこの場ではうまく行ったようだ。ハンドルを握る彼女の目に、少女と男児が映った。グレーテルはアクセルとブレーキ、どちらを踏むか考えて――

「おら野原しんのすけらオ！こっちはエスターちゃん。」

「しんのすけとエスターね、よろしく。」

「……よろしく。それで、貴女の名前は？」

「……グレーテル、かしら。」

「ほうほう、やっぱり外人さんですか。春日部も国際色豊かになりましたな。」

ハツラツとしたアジア系の少年と大人びたスラブ系と思われる少女に、グレーテルは車を停めて声をかけることとした。せっかく見つけた人間だ、殺すのは色々と聞き出してからにしたい。それになにより――一発で轢き殺してしまつてはつまらない。前菜であつても味わつていただくのがマナーであるとグレーテルは心得ていた。

適当に昔主演した作品の役名を名乗りながら、グレーテルは目ざとく二人を改める。半袖短パンの少年の方はともかく、ドレスの少女の方はどこに武器を持っているのかわかつたものではない。名乗ったときの殺気の籠った目と合わせて、彼女からは『こちら側』の臭いがした。目を合わせれば睨んでくる彼女に微笑み返すグレーテルの視界に、いがぐり頭がわりこんでグレーテルは視線を下げた。

「エスターちゃんもグレーテルちゃんも日本語スゴく上手だぞ。ネガティブってやつ？」

「それを言うならネイティブだと思っわ。」

「そうとも言う〜。」

グレーテルはしんのすけに答えながらも疑問に思った。自分は今まで母国語であるルーマニア語で話している。話してみたら通じたためしんのすけもエスターもルーマニア語が話せるもと思っていたのだが……

「しんのすけがルーマニア語が上手いだけよ。それより、私達は人を探してるの。気がついたらここで迷子になって、あの寺院に向かうとしていたんだけれど……」

一方のエスターも同様にしんのすけには疑問を持っていた。デイバックから青酸カリの入った小瓶とパン屋と思われる紙袋を取り出したあと、中に切断された手首が入っていた紙袋は速攻で付近に隠し、小瓶のみを隠し持って島を徘徊すること小一時間、ようやくに見つけたしんのすけとはコミュニケーションがとれるのに会話は成り立っていなかった。そして自分もグレーテルなる少女もルーマニア語を話しているはずなのだが、なぜかしんのすけは日本語を話していると思いきや、こんでいるようだ。とはいえ彼女にとつてそんなことはどうでも良くまずは人のいる場所に向かうことが大事なのであるが。

その後も簡単に情報交換を続けるものの、嘘とはぐらかしと適当な言葉の応酬では三人の相互認識が深まることもなく、全員が全員とも少し前から見たこともない島に来ていることぐらいしか情報の共有がなかった。

少しして、三人を乗せた車は未舗装の道路を南下していた。会話のオチとしては全員で人のいそうな島の南東の集落を目指すことになったのだ。この提案をしたのはしんのすけであったが、少女達は特段の反対も表明せずに車に乗っている。グレーテルからしてもエスターからしても、しんのすけという便利な弾除けを相手の手にむぎむぎ渡したくないというのが本音である。特にしんのすけを自分の

装備品として認識しているエスターは尚更である。自分の勝利条件を考えても幼子を守る良い子ちゃんを演じることを考えても彼という資産を手放す道はなかった。

「ふーん、しんのすけは妹がいるのね。」

「うん。妹のひまわりと、あとシロも。」

車が舗装道路に差し掛かり南下をやめ東進を始めるのにさほど時間はかからない。もとより狭い島だ。神社までの道はそれなりに人通りが多いこともあって、それほど乗り心地に気を配られているわけでもない軽トラでも不快感は無い。それもあってかしんのすけはエスターの膝の上でいつも通りに話す。

「グレーテルちゃんは？」

「私？ 兄様がいるわ。」

「兄様？ お兄さんがいるの？」

「そう。もしかしたらこの島にいるかも。」

「兄妹揃って迷子とは大変ですな。」

「しんのすけだって迷子でしょ。」

「んもおく、エスターちゃんそれは言わないお・や・く・そ・く。」

「なにそれ……」

「アハハっ！ あなたたち面白いわ。」

「いやあくそれほどでもく。」

「褒められてないから。」

気に入った、この男の子は殺すのは最後にしよう。デザートととしてなかなかの素材だ。だがこのままでは足りない。もう一手間が、ほしい。

（この子が死んだら、しんのすけはどんな顔をするのかしら。）

グレーテルはその時のことを考えて楽しそうにエスターを見て。

「僕は……あ、えっと、古畑、です……」

その三人の耳に放送が聞こえてきた。

「もしかして、学校で鬼ごっこをするんじゃないのか……？」

その頃学校では、桜井リクが小一時間ほど搜索するもなんの手掛か

りもなかったために二階の理科室で頭を悩ませていた。てつきり学校を舞台に命懸けの戦いがあるんじゃないかなどと警戒したのだが、どうやら違ったようだ。けっこう、いやかなり恥ずかしい。常識的に考えれば小学校を舞台に命懸けの鬼ごっこをしたり最後の一人になるまで願いを叶えるために戦ったりしないことに今更ながらに気がついた。

さて、となると今リクの手の中にあるもの——拡声器——の持つ意味が変わってくる。学校を探す中でいくつか見つけたもののうち職員室にあるものを書き置きを残して拝借してきたのだが、これで人を呼ぶことは可能ではないだろうか。

もちろんリスクがあることはわかっている。何か良くないものを呼び寄せてしまう可能性もあるが、それ以上に一人であることへのプレッシャーが大きい。そして自分と同じように感じている子がいるかもしれない。そのことは彼に拡声器を使わせることを考えさせるには十分なものであった。

「よし、やろう……！」

自分にとってこれは武器だ。リクは一つ大きく息を吸うと第一声を——

「あ、あー。マイクのテスト中……」

「だめかぁ繋がらない……」

一方その頃、今泉慎太郎は交番で本日何十度目かわからないがまた一回頭を抱えていた。

おっかなびつくり周囲を見渡し一つの道路を渡るのに何分もかけてようやく辿り着いたこの交番。彼にとって救いへのゴール地点に思えたそこは、当然ながら無人であった。もちろん電話も繋がらず、目立つ建物であるため迂闊に出ていくこともできない。そんなこんなで交番で足止めを食らっていたのである。

「いったい僕が何したっていうんだよ……しかもこれって……」

ため息をつきながらデイパックを引っ張る。口の空いたそこから、彼の唯一の支給品である拡声器が顔を覗かせていた。この鬼ごっ

こ、親は二つの支給品を支給されるはずが、彼はこれ一つである。実は彼が警察手帳を不携帯であったために鬼がランダム支給品としてデイパックに詰めたらそれがたまたま本人に当たったというどうでもいいラツキーがあつたのだが、それを計算に入れてもマイナスな引き運だ。もちろん彼としてはそれを使う気はない。こんなものを使えば鬼を呼び寄せるのは目に見えているからだ。しかし――

「あ、あー。マイクのテスト中……」

「わー子供の声？」

項垂れる彼の元に一つの声が聞こえてきた。それはまるで彼が今目になっている拡声器を使ったかのような、ノイズ交じりの声である。喋っているのは小学生から中学生ほどの男子または女子だろう。

状況を考えれば、声の主が何を考えているかは一発でわかった。人を呼ぼうとしている。リスクも省みずに助けを求めようとしているのだ。

今泉の視線が拡声器と学校を往復する。学校までの距離はそれほどでもない。全速力で走れば一分……は無理にしてもけっこうすぐ着くだろう。それに今自分は交番において自分の手元には相手と同じように拡声器がある。これは何かの縁なのではないか？

「僕は……あ、えっと、古畑、です……」

迷いながらも気づけば今泉は拡声器を使っていた。しかし自分の名前を言うのは怖かったので上司の名前を名乗っておいた。最高であると同時に最低である。

こうして島の中央部で拡声器による会話が始まろうとしていた。

当事者の小学生と刑事、そしてそれを聞きつけた少女のような何か二つに嵐を呼ぶ五歳児。

このことを知るのはもっと増えるかもしれないし増えないかもしれない。

しかしとにかく午前1時、エリアを跨いで一つの鬼ごっこがスタートした。

【チーム見た目は子供】

【G-06南西端／01時00分】

【グレーテル@BLACK LAGOON】

【役】：子

【状態】 軽トラを運転中

【装備】：BAR

【道具】：不明（社務所で狭軌として使えそうなものを中心に回収）

【思考・行動】

基本方針：皆殺し

1：みんなで町に行く。

※その他？自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握

【野原しんのすけ@クレヨンしんちゃん】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：ネネちゃん家に行く。

1：みんなで町に行く。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【エステル@エステル】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：ハンマー、青酸カリ@バトルロワイアル

【道具】

【思考・行動】

基本方針：子のふりをして立ち回る。

- 1：子として親の庇護を受けつつ、参加者の情報を集める。
 - 2：制限時間が近づいたら、親を減らす。
- その他

自分の役、各役の勝利条件、制限時間を把握。

支給品の【サンジェルマンの紙袋@ジヨジヨの奇妙な冒険】は捨てました。

【サンジェルマンの紙袋@ジヨジヨの奇妙な冒険】

吉良吉影の持ち物。中には切り取った女の手首が入っている。

【G—07（分校）／01時00分】

【桜井リク@ラストサバイバル】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：拡声器

〔道具〕：不明支給品

〔思考・行動〕

基本方針：絶対に生きて帰る

1：拡声器の声に応える

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【G—08（交番）／01時00分】

【今泉慎太郎@古畑任三郎】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：警察手帳、拡声器@バトルロワイアル

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：可能な限り参加者を生還させる。

1：子を守る。まずは拡声器で会話を試みる。

2 : 親を探す。

3 : 鬼には出くわしたくない。

その他

自分の役、各役の勝利条件・制限時間を把握。

第三二章 【最初からハードモード】（蕨、檸檬、ジェイソン）

※二話投稿 『ジェイソン・ボーヒーズ登場話』【13
日の金曜日】 & 『花酒蕨登場話』 見た目は子供』

K i : k i : k i : m u : m u : m :

k i : k i : k i : m u : m u : m u :

k i : k i : k i : m u : m u : m u :

—— “Kill m u m”

深夜、霧の立ち込める森の中を怪人が、のしのしと歩いていった。

大柄な体格と、何よりも素顔を覆い隠すアイスホツケーマスクが目立つ。

「……」

彼は鬼だ。現世で復讐のために人をひたすら殺し続けた怪物。

不死身の肉体と、人間の肉体を容易く破壊する怪力を備えた、伝説の殺人鬼。

名をジェイソン・ボーヒーズ、クリスタルレイクに潜む殺人鬼である。

今回、地獄から鬼役として復活したジェイソンの行動方針は至ってシンプルそのもの。

—— 殺す。

親も子も、同じ鬼ですらも区別がついているのかも怪しい純粋な殺意こそが、彼を突き動かしているパワーであった。

悩むことなど何もない。

彼は幾度も死から蘇り、惨劇をもたらしてきた。

ここでも同じことをするだけだ。

殺戮の舞台がクリスタルレイクから沖木島の、正確にはその島を再

現した地獄に代わろうと、何一つ変わらない。

解き放たれた殺人鬼は獲物を求めて歩き続ける。

子か、親か、もしくは鬼か。

誰の血が(もしくは命が)彼によって流されることになるのかは、まだ、わからない。

【??】(深い森の何処か)／深夜】

【ジェイソン・ボーヒーズ@13日の金曜日シリーズ】

【役】：鬼

【状態】：健康

【装備】：アイスホッケーマスク、マチェット

【道具】：四次元つぼい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：殺す。見敵必殺。

『人物解説』

ホラー映画『13日の金曜日』シリーズに登場する架空の殺人鬼。

11歳の時から先天的な障害による顔の奇形と脳の小ささが原因による虐めを受けていたが、その虐めが原因で溺死したと思われていたが実は生存していた。

息子を失って狂ってしまった母親が次々に凶行を重ねるも殺害される原場を目撃し、以降殺人鬼として400人近くの人間を殺害する。

初期は異常に頑丈なだけの人間であったが、途中から不死身化。

何度死亡しても、落雷や超能力、サイボーグ化などによって毎度のように復活を繰り返し、死亡する度に人間離れた怪物へと変貌している。

弱点は、母親と同じ恰好や話し方をする女性や、幼い頃の自分と重なる相手と相対すると戦意を喪失する事がある事と、溺死したため水が苦手とされるが、彼自身は大嫌いなだけで致命的な弱点ではない。

海岸をてくてくと歩く少女が一人。周囲を見回しながら海沿いに歩いている。

「むう……。訳がわからん。気がついたらこんな処に居るし、それに……………」

見上げた空は血を溶かし込んだ様に赤く、所々で火花が散っていた。

「何とも面妖な空よ……………。超帰りたいでよ」

とは言え帰り道がわからないのでどうしようもないのだが。

思わず腰に帯びた太刀と、隠し持った某手裏剣を確かめ、その感触と重さに安心感を覚えた。

「まあ何か起きても対処は出来そうじゃが……………ひよ？」

気が付けば、空からひらひらと舞い落ちる無数の紙。

何処からか降ってくる得体の知れない紙に、益々面妖なものを覚え、少女は眉を顰めた。

「一体何ぞよ？」

舞い落ちる神を一枚掴み取ると、訳の分からない事が書いてあった。

『ルール1：子供は、鬼から逃げなければならない。』

『ルール2：鬼は、子供を捕まえなければならない。』

『ルール3：きめられた範囲をこえて、逃げてはならない。』

『ルール4：時間いっぱい鬼から逃げきれれば、子供の勝ちとなる。』

『ルール5：親は、子供を守らなければならない。』

「鬼ごっこか……………。これも因果というやつかのう……………」

過去に己の武力と権限を用いて、男共に行って来た熾烈な虐待を思い出し、少女の口元に自嘲の笑みが浮かぶ。

「妾の役は何じゃ？鬼などになつた覚えは無いし…。親が子のいずれか。この何も教えずに、只右往左往して逃げ回れと言わんばかりの状況は……………。子か」

似た様な事を実行して来た少女は、自分に振られた役割をそう推測した。

子などを振られる年齢でもないが、外見が小学生と変わらない身では仕方ない。

短く苦笑した少女は、左右を見回して誰も居ない事を確認する。

未だに釈然としないが、自分の置かれた状況と、腰の太刀ゆ考えれば、この鬼ごっこはかなり物騒なものだと推測できる。

武装した自分の抵抗を振り伏せられる強さか装備の鬼が徘徊しているのは確かな事実だろう。

親なり子なりと合流して、情報を交換したいところだが、鬼とも遭遇しておきたかった。

何しろ対策を立て様にも、どんな相手か知らなければ、立て様が無いのだから。

【??】／00時01分

【花酒蔵@武装少女マキャヴェリズム】？ 「役」：子

【状態】 健康

【装備】：太刀・棒手裏剣

【道具】：不明

【思考・行動】

基本方針：親か子と合流する。鬼がどんなものか確認しておきたい。

※その他・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

人物情報

CV 日高里菜

元々女子高だった学園が共学になった際に男子生徒を恐れた女子生徒のための風紀組織、愛知共生学園 “天下五剣” の最年長生。要するに高校三年生。

ただし外見は小学生並み。

気分屋かつ奇矯な振る舞いをする少女。ドーマー（CV 藤田咲）というクマを飼っている。

学園の治安維持を理由に矯正対象の関係者も平気で巻き込む”ワラビンピック”なる催しを行い。

他の五剣担当領域にも干渉してくるため、生徒達からも話の通じる相手ではないと認識されている。そうした行動は熊を飼うことを通すために誰よりも恐れられようと露悪的に振る舞っているため、根は理知的で最上級生としての責任感を持つ。が、一番風呂を巡って他の五剣と喧嘩したりする。

精神的な揺さぶりを掛けたり、強敵相手には数を用いたり知恵を用いた（本人は老獪と称する）戦い方をする。

タイ捨流を修得していて、戦闘では身軽さを活かして戦う。

モチーフは天下五剣の一つ”童子切安綱”。

※二話投稿 『(擬宝珠檸檬登場話) 鬼ごっこラプソデー』 & 『最初からハードモード』』

「勘吉……」

心細げに、自分が強く信頼する人物の名前を呼ぶ。

しかしその声に反応する者はだれもない。

ここは一体どこなのだろうか。少なくとも東京でないことは確かだ。

自分は何か悪いことをしたのだろうか。そんなことも思っとう。

座り込み、思わず泣きたくなっただが必死でこらえる。

こんなところで泣いてはいけけない。自分はお姉さんなのだから。

そう、自分に言い聞かせる。

先ほど手に取った紙切れにはこんなことが書かれている。

『ルール1：子供は、鬼から逃げなければならない。』

『ルール2：鬼は、子供を捕まえなければならない。』

『ルール3：きめられた範囲をこえて、逃げてはならない。』

『ルール4：時間いっぱい鬼から逃げ切れれば、子供の勝ちとなる。』

『ルール5：親は、子供を守らなければならない。』

この場に勘吉や纏がいるのかどうかはわからない。

しかし、自分がそうである以上、巻き込まれている可能性も否定できない。

もしかしたら蜜柑も……そんなことも考えてしまう。

おそらく自分の役は「子供」だろう。

だとしたら、彼らのような頼れる「親」と合流したい。

もし鬼と出会ってしまったら……恐怖を心から振り払う。

自分は家族や周りの人のため、そして生まれたばかりの妹のためにも生きて帰らねばならない。

そう、心に決めて檸檬は立ち上がった。

【??】／00時02分

【擬宝珠 檸檬@こちら葛飾区亀有公園前派出所】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『お守り』

【道具】： 不明

【思考・行動】

基本方針：生きて帰る。

1：親と合流したい。

『人物解説』

漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の登場人物。4歳の幼稚園児だが

年齢の割にはかなり落ち着いて大人びており、大人顔負けの特殊技能も多々持っている。

特に味覚に関しては並ぶものがないほど。

両津によく懐いており、大切な家族であると思っっている。しっかりした考えを持つ反面、嘘はつけない性格である。

「灯台か……」

海沿いに歩き続けた花酒蔵は、岬に立つ灯台を視界に入れていた。

厚底のロングブーツなどという、凡そ運動に適さぬ代物を履いて、太刀を振るっての立ち

回りや跳躍や蹴り技を苦も無く行うだが、流石に厚底ブーツ何ぞで砂浜を歩くのは流石に

苦行ではあった。

周囲を窺う…人影無し。

灯台で休もうかとも思うが場所が悪い。岬に立つ出入り口が一つしか無い建物。要するに

鬼が襲ってきた場合逃げる事が難しい。最悪の場合、火でも着けられればお終いだ。

視界が広い為鬼の接近に気付きやすく、狭い階段の上に陣取れる為、籠城に向いていると

言えなくも無いが、やはり拠点にすべき場所では無いだろう。

だからこそ：あの灯台に子がいた場合保護して移動させなければならぬ。

未だに鬼が如何なるものか蕨は知らないが、危険な場所に留まっているのを見過ごす訳にはいかないだろう。

「力有る者の辛いところよ」

鬼が待ち伏せしている可能性も有るが、最悪のパターンは灯台に侵入した後から鬼が来た

場合だ、戦闘は避けられない。だからといって素通りは出来ない。

短い、呻き声の様なり声を出した蕨は、着込んだ防弾ベストの感触を確かめるように

胸をさすると、灯台に向かって歩き出した。

「月夜姫が居ればのう。ここからでも探れるのじゃが」

羽織った白いマントと、兎の耳の様にピンと伸びたりボンを歩く度に揺らしながら、

蕨は灯台へと向かう。

果たして灯台に待ち受けるモノは――？

擬宝珠檸檬は灯台の上から周囲を眺めていた。

その物言いと振舞いから忘れられてしまいがちだが、まだ幼稚園児

でしかない。

知らない内に訳の分からない場所に連れてこられた挙句、身に覚えの無いものを持たされ

て放り出されたとあっては、只恐怖に流されるままに行動して、取り敢えず目に着いた身

を隠せそうな場所に逃げ込むのも無理はなかった。

こうしていても始まらない。何かしなければならないと頭では解つていても最善の方法な

ど取れないし、そもそも思いつきもしない。

こういう時に必要なものは、精神力や知力よりも、場慣れ…言ってしまうえば経験だ。

幼稚園児の檸檬には全く無く、今後の展開になる次第では、永遠に獲得出来ないものだ。

尤も檸檬の知る尤も頼れる男は、閻魔大王様が鬼威惨に遭遇したゆつくりの如き態度を示

す両津勘吉である為に、檸檬だけいつの間にか元の世界に帰還しているかもしれない。

此処が地獄なら閻魔様が檸檬救出の為にカチコミかけてくるかも知れない。

ともあれそんな事はつゆ知らぬ檸檬は、只々高い所から周囲を見回して他の参加者を探し

続けていた。

「あ、あれは――」

最初に見つけたのは、海沿いに歩いて来る白いマントを羽織った長い金髪の少女。

しかしその頭には、二本の角とも見えるシロモノがピンと伸びていた。

「お、鬼!？」

慌てて視線を巡らすと、大柄な男が、道沿いに灯台へ向かっていた。

ジェイソン・ホーピースは森を抜けると、真っ直ぐ灯台を目指していた。

灯台を目指し事に特に理由などない。只々目に着いたから向かうだけ。

誰かが居れば鬼であれ子であれ親であれ殺すだけ。
人の形をした殺意は真っ直ぐ灯台を目指して進む。

【I-10 (灯台付近の海岸) / 01時00分】

【花酒蔵@武装少女マキャヴェリズム】? 「役」: 親

「状態」 健康

「装備」: 太刀・棒手裏剣

「道具」: 防弾ベスト・閃光弾

「思考・行動」

基本方針: 親か子と合流する。鬼がどんなものか確認しておきたい。

1: 灯台へ向かう。

その他

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。
ルールの本質に気付きました。

【I-10 (灯台) / 01時00分】? 【擬宝珠 檸檬@こちら葛飾区

亀有公園前派出所】? 「役」: 子? 「状態」: 健康? 「装備」: 『お守り』

? 「道具」: 不明? 「思考・行動」? 基本方針: 生きて帰る。? 1: 親と合流したい。

2: お、鬼?

その他

※その他・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

※遠目に見た花酒蔵を鬼と誤認しました

【I-10 (灯台付近の道) / 01時00分】

【ジェイソン・ボーヒーズ@13日の金曜日シリーズ】

【役】：鬼

【状態】：健康

【装備】：アイスホッケーマスク、マチェット

【道具】：四次元つぼい紙袋、不明支給品3つ

【思考・行動】

基本方針：殺す。見敵必殺。

1：灯台へ向かう

第三三章 Beyond The Century

(レナ、まな、夜叉猿Jr.、雲雀、墮姫、大翔)

Beyond The Century

「とりあえず、私と大猿さんがいた『菅原神社』周辺には、鬼はいないみたい。あつちの、山の中だね」

「そこから、この村とは逆方向へ移動すれば……」

島の北西、座標C-02、海沿いの民家。竜宮レナと犬山まなは、情報を交換しつつ、必要な物資を集める。

水と食糧、医薬品、武器になりそうなものを、民家で調達したりユツクサツクに詰めていく。荷物持ちはいるが、あまり多くは必要ではない。

基本的には、鬼から制限時間いっぱいまで逃げ切れれば勝ちだ。ただ……大猿のデイパツクの内ポケットには、こう書いてあった。

『貴方の役は『親』です。』

子の勝利条件：制限時間まで一人でも逃げ切る、もしくは、『鬼』が全員死ぬ。

親の勝利条件：『子』が勝利条件を満たしなおかつ『子』の生きている人数が『親』の生きている人数より多い(このとき『親』のみ勝利する)。

鬼の勝利条件：制限時間までに生きている『子』の過半数を主催者本部(F-05神塚山山頂地下)に捕まえる、もしくは、生きている参加者の内過半数が『鬼』になる。

制限時間は24時間です。』

雲雀はあまり興味なさそうだったが、レナとまなは顔を曇らせた。

各役の総数は不明だが、今ここに子が二人、親が一人(二頭)、鬼(自称)が一人いる。

仮にこのまま制限時間が来た場合、親が子よりもとまなければ、子が勝利することは出来ない。すなわち、生還出来ない。

と、言うことは……考えたくないが、子が勝利するには、子の数がある程度「減る」……殺されるか、捕まるかは別として……必要がある。

そうならないような、親と子が両方助かるような方法もあるはずだ。あるようにせねばならない。

また、本部がF-05ということは、会場をアルファベットと数字で格子状に区分しているのだろう。どっちがAで01かは不明だが。

ただ、鬼に捕まって本部へ送られた子は、殺されるのか？ 子が勝利した場合、死んだり捕まったりした子はどうなる？

現状、わからないことばかりだ。神塚山には近づかないようにし、情報収集につとめるしかない。鬼の情報も聞きたいが、雲雀とはどうも会話が噛み合わないし……。

回想と物思いをやめたレナがまなの方を振り返ると、なにやら仏の顔がついた板をいじっている。

「うーん……やっぱり、スマホアプリ開けないや……まだネット繋がってない……」

「スマホアプリ？ ネット？ まなちゃん、なにそれ？」

「へ？ スマホはスマートフォン、アプリはアプリケーション、ネットは……インターネットだけど」

「？ ？ ？」

平成30年（2018年）の中学1年生と、昭和58年（1983年）の中学2年生。30年以上もの、文字通りのジエネレーションギャップがある。

レナは多分まなの両親よりも年上だ。1983年といえば、アメリカや北欧でようやく携帯電話が多少普及し始めた時代。

当時の日本ではコードレスフォンがせいぜいで、ネットといえばパソコン通信が一部で利用されていた程度だ。

レナにはまったく馴染みのない謎めいた電子機器を、ひとつ下のまながやすやすと使いこなしている。レナは眉根に指をあて、もう一方

の掌を向ける。

「えー……ちよつと待って、今年って昭和何年かな？かな？」

「昭和？ 今年は平成30年だよ。西暦だと2018年」

「へ？ へいせい？ にせんじゅうはちねん？」

「昭和って、えーと、64年で終わりだっけ。その年が平成元年で」

「……よーし、わかったわかった。タイム・リープ（時間跳躍）ね。筒井康隆の『時をかける少女』。今年（1983年）の7月に映画化するやつ」

「？」

レナは持ち前の推理力で一人合点した。なにしろここは地獄めいた異常な空間で、大猿とか吸血鬼とかがうろちよろしているのだ。

30年以上も未来から来た少女と出逢ったって不思議はなからう。実際その理解は正しかった。

なお映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』は1985年なので、レナはまだ知らない。

「何の話？」

「あー……私ね、あなたから見てだいぶ過去から、ここへ来たみたいだから、そのスマホっていうのも、知らない」

「そう……なんだ」

まなにとっても、不思議なことは比較的慣れっこだ。地獄だし、吸血鬼や大猿とも遭遇しているし、そういうものか、と呑み込んだ。

◆ 少女たちが物資を集め、情報を交換している頃、雲雀恭弥と夜叉猿Jr. は周囲を警戒していた。

というか、夜叉猿Jr. にとつては雲雀こそ警戒対象だ。鬼と自称しているこの人間は、どう見ても危険人物だ。

まなという少女を鬼から庇っていたかと思えば、自分に襲いかかるうとしてくる。好戦的な男らしい。

今は幸いにおとなしくしているが、いつ何時暴れですか。しかし、味方につけておけば十分な戦力とも言える。

雲雀は……座って頬杖を突き、あくびをひとつ。やや退屈を感じ始めている。ヒバードもないし、携帯も通じない。

あの鬼はやや期待はずれだった。この大猿と戦ってもいいが、あっさり倒せそうでもあるし。あるいは、ここに鬼を呼び寄せるか。

だいたい不本意にも、貧弱な草食動物たちと群れて行動してしまっている。なぜこの自分が鬼から逃げ回らねばならないのか。

犬山まなは「私と一緒になら鬼の方から寄って来ます！」とか言っていたが、思い返せば信じがたい。

F-05……神塚山山頂地下にあるとかいう鬼の本部とやらへ、直接殴り込んだが手っ取り早いのではないか……と、思った矢先。

「……………！」

大猿と少年は顔を同時に、同じ方向へ向ける。殺気。鬼の気配。子供の叫び声。菅原神社とは真逆の方向。

大猿はその場にとどまり、低い唸り声をあげ、少女たちに異変を知らせる。少年は、すでに飛び降り、飛び出している。いい笑顔で。

「雲雀さん！」

まなが叫ぶ。自由すぎる人間だが、ほっておくのもどうか。レナは引き留めようとしたが、まなは結構な勢いで駆けていく。

◆ レナは後を追ひ、夜叉猿 Jr. もやむなく追う。一行は――

「くさあい、くさい。におう、におう。なにやら子どもものにおいがするねえ」

鬼の鋭敏な嗅覚が、周囲の様々な臭いを情報として伝える。墮鬼は既に――近くににいる少年、大場大翔を嗅ぎつけている。

樹木の上へ登り、目でも確認する。しゅるしゅると帯が伸び、彼が潜んでいるあたりへ近づいていく。

「う……うわっ!? な、なんだこれ!? 布!? 鬼か!？」

大翔が帯に囲まれた。帯は、まだ大翔を捕獲しない。逃さぬように取り囲み、大声で騒がせる。これは罠で、釣りの餌だ。

遠目に大翔の姿を確認した墮鬼は、鼻で嗤った。

「不細工」

ここには一匹だけだが、少し北と少し南に、固まって複数いる。臭いでわかる。子以外にも何匹かいるようだ。

そいつらをここへ誘き寄せ、一網打尽といこう。いや、さっきのように反撃を喰らう可能性もある。疑心暗鬼を煽り、殺し合わせた方がいいか。

汚い年寄りと不細工は、そのまま死ねばいい。美しいのがいれば、帯で捕らえて喰ってしまおう。

近づいてくるのは……南の方。この北は崖で、行き止まりだ。北の方もいずれ来る。逃げ場がない方へ、追い詰める。

【C-02 / 01時00分】

【竜宮レナ@ひぐらしのなく頃に】

【役】：子

【状態】：健康（雛見沢症候群に感染、無自覚）

【装備】：ナイフ・ナイフ（夜叉猿Jr. より譲り受ける 中身は支給品2つ、医薬品や水、食糧など）

【道具】：お守り

【思考・行動】

基本方針：帰還する。子や親と合流し、共に脱出を目指す。鬼からは逃げる。

1：まなと雲雀を追う。

※その他

制限時間と親のルールを把握。各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

雲雀を鬼だと思っているが、敵対する気がないなら仲間だと信じる。

雛見沢症候群は空気経由や皮膚・粘膜・体液との接触で感染し、疑心暗鬼などを契機に発症する。

【犬山まな@ゲゲゲの鬼太郎（6期）】

【役】：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：リュックサック（現地調達、医薬品や水、食糧など）

〔道具〕：スマホ（自分の）、支給品（未確認）

〔思考・行動〕

基本方針：生還する。子や親と合流し、協力する。鬼からは逃げる。

1：雲雀を追う。

※その他

制限時間と親のルールを把握。各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

雲雀を鬼だと思っているが、敵対する気がないなら仲間だと信じる。

【夜叉猿J r. @刃牙シリーズ】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：鬼は殺す。子を守る。

1：レナとまなを守護る。鬼らしき少年（雲雀）には警戒する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。鬼ではないと自認。

人語は多少解すが話せないし、文字の読み書きも出来ない。ノンバーバル・コミュニケーションは可能。

【雲雀恭弥@家庭教師ヒットマンREBORN!】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、高揚

〔装備〕：雲雀のトンファー@家庭教師ヒットマンREBORN!、雲のボンゴレリング@家庭教師ヒットマンREBORN!、

〔道具〕：携帯電話（ガラケー）

〔思考・行動〕

基本方針：親、子、鬼を咬み殺す。他者とは群れない。

1：強者と戦う。鬼が来るなら好都合。

2：鬼のもとへ走る。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと誤解している。

そもそも把握したところでルールに従って行動する気がない自由過ぎる男。式札はポイ捨てした。

〔B-02 / 01時00分〕

〔墮鬼（妓夫太郎）@鬼滅の刃〕

〔役〕：鬼

〔状態〕：負傷（再生中）

〔装備〕：

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、食らい、現世へと復活する。

1：幸せそうな子や親を食い殺し、取り立てる。

2：帯で大翔を取り囲み、この場に周囲の親や子を誘き寄せ、一網打尽にするか殺し合わせる。

3：今度は反撃を受けないよう慎重に観察する。

※その他

スマートフォン（鬼）の所在は不明。落としたのかも、元から入ってなかったのかもしれませんが。

〔大場大翔@絶望鬼ごっこ〕

〔役〕：子

〔状態〕：健康、混乱

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

「思考・行動」

基本方針：とにかく人と会う。幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

1：鬼と異臭を警戒。

2：なんだこの帯は!?

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

第三四章 「アイド・エクスペクト・ア・ロット・モア」

(亜季、クローンヤクザ)

(クローンヤクザY―12型登場話) 「ア・ゲーム・オブ・デイスペア、オニ・アンド・ヤクザ」

(これまでのあらすじ・ネオサイタマにいたクローンヤクザの一体が、突如何者かに拉致された。

彼は目隠しをされたまま、謎めいた鬼ごつこのルールを聞かされる。彼は「親」の役だという。

そしてパラシュートをつけられ、飛行機から何処かへ投下されたのだ……)

「……スッゾ？」彼は訝しんだ。埋込式サイバーサンングラスの調子が良くない。

これは液晶モニタとUNIX端末を内蔵しており、IRCネットに接続しての情報収集も可能だが、現在ネットに繋がらない。

殺し合いの場で外界と連絡が取れては困るのだろう。一応その他の主な機能は使える。ならばよし。

彼は、これを抜き打ち機能テストの一種だろうと状況判断した。時々こうしたことはある。

メキシコライオンやヤクザ、スモトリを殺すのとそう変わらない。伝えられた命令は全て記憶し、理解した。

今回の命令は「鬼ごっこにおいて、親として子を守れ」というもの。カチグミ子弟の護衛任務に近いか。

持ち込めた武装はドス・ダガーとチャカ・ガン。デイパックの中の支給品も確認した。

まずは、護衛対象である「子」を探しださねばなるまい。「鬼」と遭遇したら排除するか、「子」を連れて逃走する。

自分と同じ「親」の役も何人かいるらしい。彼らとは協力出来るだろう。

【??/00時02分】

【クローンヤクザY-12型@ニンジャスレイヤー】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：埋込式サイバーサングラス、ドス・ダガー、チャカ・ガン、ヤクザスーツ

【道具】：デイパック（不明支給品2）

【思考・行動】

基本方針：子を守る。

1：子を探し、守る。

2：鬼と遭遇したら排除するか、子連れて逃走する。

3：親とは協力する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

小説『ニンジャスレイヤー』に登場する、ヨロシサン製薬のバイオクローン技術で量産されているヤクザ。CV：玄田哲章。

外見はダークスーツを着込んだ身長184cmの屈強な男性で、黒髪を角刈りにし、無表情で強面な顔にサイバーサングラスを装着している。

体内には緑色のバイオ血液（空気に触れると次第に赤に変色する）が流れており、製造から3年で免疫力を喪失して死ぬ。

製造直後に様々な洗脳教育プログラムを施され、各種技能や戦闘技術を会得しており、自己判断力が低いかわりに恐怖心を抱かず、命令を絶対遵守する。

「スツゾコラー」「ザツケンナコラー」などの威圧的なヤクザスラングを発するが、人間らしい会話やコミュニケーションも難なく可能。

多人数でも統率の取れた行動が出来、命を惜しまず命令に従うのが強みで、戦闘力自体はある程度鍛錬した人間並み。定期的に痰を吐く。

3年ごとにニューモデルが出せるためもありバリエーションに富

むが、この個体は第一部でロールアウトした「Y-12型」である。

※二話投稿 『(大和亜季登場話) 何が始まるんです?』
& 『【アイド・エクスペクト・ア・ロット・モア】』

「うーむ……」

機関銃を手にした、迷彩服の女性(その胸は豊満だ)が唸る。状況がまるで掴めない。

いきなり目隠しされて「鬼ごっこで親の役をしろ」と説明され、そのまま飛行機から落下傘投下とは。

こういうのは幸子殿の役ではなからうか。まあ、要はサバゲーのよ
うなものではあるうが……。

「むむむ……一体何があったのか教えてちょうだい、というやつです
な……」

赤い空。漂う霧。無人の街。遠くに見える海。どこかの島のように
だ。

しかも、デイパックに入っていた支給品は……。

「これ、実銃と実弾、ですよね……? 島がドンパチ賑やかになってし
まうのでは……?」

ごくり、と唾を飲む。現代日本で許可もなく実銃を所持するのは、
流石に犯罪だ。

つまり、これはまさか、本物の銃を使った、殺し合いなのでは?
プロデューサー殿はヤクザ組織に沈められたのか?

映画の見過ぎで変な夢を見ているのだろうか? 鬼が出て、この
銃を撃つていいものか? ゾンビや怪物が出て来たら?

……彼女は思考を整理し、目標をシンプルにする。サバイブ(生
存)。脱出して帰還することだ。それが一番。

まずは親や子の役の人を探し、協力し、情報を集めねばなるまい。

【???／00時06分】

【大和亜季@アイドルマスター シンデレラガールズ】

【役】:親

〔状態〕：健康

〔装備〕：M60機関銃@現実

〔道具〕：デイパック（不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：帰還する。

1：親や子と合流し、情報を集め協力する。

2：鬼と遭遇したら…撃つていいものか？

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

『人物解説』

ゲーム『アイドルマスター シンデレラガールズ』シリーズのCO

01アイドルの一人。CV：村中知。年齢は21歳。福岡県出身。

身長165cm・体重51kg、スリーサイズは92―60―85。

左利き。サバゲーとプラモ収集が趣味の軍オタで、口調も軍人風。

性格は明るく脳筋。体力には自信があり、モデルガンの扱いや格闘術はなかなかのもの。ちよくちよくセリフに戦争映画ネタが入る。

死体を発見した。…蛙のだ。踏み潰され、干からびている。

壁を背にし、周囲に注意を払いつつ、無人の街を進む。地獄と言われても信じられそうな、この異常な状況。

標識などによれば、ここは『平瀬村』というらしい。聞いたことはないが、日本のどこか、なのか。それを模して再現したか。

廃村でもなさそうだが、人の気配は…感じられない。疫病とかなら死人がいるはずだが、それもなし。

「ドローモ」

通りの向こう、店の中から低い声。敵意はないが、ドスのきいた男性の声だ。

挨拶をしてきたということは、鬼ではないのか。あるいは余裕か、こちらを油断させるためか。

店から出て来たのは……ダークスーツ、サングラス、角刈りのごつい男。どう見てもヤクザだ。顔色は悪く無表情、某州知事を思わせる顔つき。

武器は持っていないが、武装していておかしくない。自分にこんな機関銃を持たせるような連中だ。

子ではなからうが、鬼や、危険な親である可能性もある。慎重に距離を取り、こちらも挨拶を返す。

「……どうも。……すみませんが、先にあなたの役と、お名前を、お願いします」



街中を探索し、ようやく人に出会えた。胸部の豊満な成人女性、であらう。子か、親か。あるいは鬼か。

サイバーサングラスで観察する。比較的鍛えられた筋肉。機関銃で武装重点。眉根を寄せ、緊張ゆえか汗をかいているが、呼吸は激しくはない。

多少は荒事に慣れたアトモスファイアから、ニュービー・バトルオイランの類か。こちらは一人で武装は貧弱、刺激してはまずい。

「ドローモ」

距離を取り、アイサツする。油断なく、チャカ・ガンはいつでも抜けるように。

相手はやや困惑したようだったが、こちらに殺気がないと分かる。と、距離を保ったままアイサツを返した。

「……どうも。……すみませんが、先にあなたの役と、お名前を、お願いします」

役と、名前。こちらを攻撃する気がないということは、ほぼ確実に鬼ではない。

親か。子なら保護重点だが、親であつてもうら若き女性、保護対象とすべきか。あるいは武装を交換するか。

ネオサイタマの治安が悪いストリートであんな女性が歩いていれば、多少武装していても確実にファック&サヨナラだ。

護衛任務のテストなら、自分や彼女に発信機が仕掛けられていて、

モニタリングしているかも知れない。

とすれば、こうした女性は保護すべきだ。特に殺害命令も出ていない。

「ドーモ。私の役は『親』です。名前は……」

と、気づく。自分には『名前』がまだ設定されていない。まさか『自分はクローンヤクザY-12型です』と名乗るわけにもいかない。

我々の存在は闇社会ですら広まり始めたばかりで、一般市民には知られていないし、知られてはならない。

不注意な機密漏洩はヨロシサンの株価に影響する、と研修された。それは絶対に避けねばならない。

個体識別番号自体は、首筋にバーコード化して刻印されている。自分の番号はY-12の〇〇〇〇〇〇だ。当然、これも明かせない。

闇社会とはいえ社会に出て活動する以上、一般市民から名前を聞かれたら名乗らねば、シツレイだし不自然だ。ゆえに雇い主が適当に名前を割り振る事もある。

例えばモリタ・イチロー、ジロ、サブロ……ジユウニロ、といったように。ダース単位やグロス単位で取引されるため、名字があればいい。

だが生憎、今の雇い主からは何も名前が与えられていない。名刺も持っていない。

自分で自分に名前をつけるほどの自主性や機転は、クローンヤクザにはない。仮であっても、『名付け』は自我を与えるほどの重大事。どうすべきか。

「……名前は、ありません。……仮に『Y-12』と呼んで下さい」
これでいい。嘘はついていない。こう名乗るしかない。

この場に他のクローンヤクザがいれば、互いの型番や識別番号で名乗りあえばいい。しかし相手は一般市民だ。

クローンヤクザであること、ヨロシサンの製品であること、今の雇い主のことは隠した。クローンヤクザにしてはなんたる機転である。

「わ……ワイジューニ、殿？」

鬼ではない、子でもない。敵ではない。油断はならないが。しかし『Y-12』とは。名前がないとは、コードネームか。

明らかにカタギの存在ではないから、暗殺者とかそういう人なのかも知れない。仲間になってくれれば頼もしそうではある。

「……ええと……じ、自分は『親』の役で、名前は『大和亜季』であります。よろしく！」

ひとまず、自分の役と名前を小声で答える。互いに敵意はないが、いつ何時誰と殺し合いになるかわからない。味方が多くて悪いことはなからう。

機関銃を掲げ、右手を挙げてゆっくり近づく。あちらも同じように近づく。道の真ん中で互いの掌をあわせ、敵意がないことを改めて確認する。

「ドーモ、ヤマト・アキサン」

Y-12殿が改めてお辞儀した。礼儀正しい人物のようだ。こちらもお辞儀を返す。

「ど、どうも。Y-12殿」



無人の民家に身を潜め、休息を取り、互いに情報を交換する。互いの支給品、デイパツクの中身も確認した。

電気は来ていないが、飲食物や医療品等はある。つい先程まで人間が生活していたかのように。少し回収し、持っておく。

「た……助かりました。突然何者かに拉致されて、こんな妙な場所に落下傘で投下され、銃火器を配布されるなど……」

これは、犯罪ではないでありますか？ わ、Y-12殿は、どうお考えですか？」

クローンヤクザ以外の人間をも親としてバラ撒くとは、ヨロシサンはいつもどおりだ。

とは言え、彼女にヨロシサンの名をバラすわけには当然いかない。「ワカリマセン。……何者かが、我々を試している可能性があります。」

ヤマトIIサン」

法に照らせば犯罪だろうが、ヨロシサンを犯罪者呼ばわりは出来ない。仮にヨロシサンでなければ、何らかの非合法組織の仕業だろう。あるいは両方か。

殺すつもりなら、こんなゲームを仕掛ける前にいくらでも殺せたはず。ならば、殺し合いを愉しむ連中による、よくあるデスゲームということになる。

クローンヤクザから死への恐怖は除去されているが、こういう場合、なるべく生き残るためにあがいたほうがいい。連中はそれを見ているのだから。

「生き残りましょう。今はそうとしか言えません」

「は……はい！」

彼女に悪意はない。演技をしている様子もない。純粹に巻き込まれただけだろう。

鍛えているようではあるが、彼女に機関銃は重そうだ。自分が装備した方が良いのではないか。そう言おうとした時。

◆ BLAM!

「……！」

窓の外から銃声が一発。殺し合いが始まったのか。警告か、陽動か、おびき寄せる罠か。一発だけなら誤射か。

思わず、傍らのY-12殿を見やる。ここを出ては危険だが、とどまるのもどうか。助けを求める子や親がいるかも知れない。

どちらがリーダーというわけでもないが、荒事に慣れているのは多分、彼の方だ。自分よりは年上であろうし。

「どうするで、ありますか……？」

【チーム・コマンドー】

【F-02 / 01時01分】

【大和亜季@アイドルマスター シンデレラガールズ】

【役】：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：M60機関銃@現実

〔道具〕：デイパック（不明支給品1、確認済み）、飲食物・医療品少し

〔思考・行動〕

基本方針：帰還する。親や子と合流し、情報を集め協力する。

1：Y-12殿をひとまずは信用する。

2：鬼と遭遇したら…この機関銃を撃っていいものか？

3：窓の外の銃声に、どう対応するか？ Y-12殿の判断を仰ぐ。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

〔クローンヤクザY-12型@ニンジャスレイヤー〕

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：埋込式サイバーサングラス、ドス・ダガー、チャカ・ガン、ヤクザスーツ

〔道具〕：デイパック（不明支給品2、確認済み）、飲食物・医療品少し

〔思考・行動〕

基本方針：子を探し、守る。親とは協力する。鬼と遭遇したら排除するか、子を連れて逃走する。

1：自分の身を守れそうにない親も一応守る。今はヤマトIIサンをとりあえず護衛する。

2：ヤマトIIサンの機関銃を自分が装備した方がいいのではないか、と言いつつ出そうとした。

3：窓の外の銃声に、どう対応するか？ 判断を仰がれている。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。個人名がないため、仮に「Y-12」と名乗る。

このゲームを「ヨロシサンによる自分の機能テストか、非合法組織

による殺人ゲーム、あるいはその両方」と認識。

生き残るつもりだが、ヨロシサンの株価が下がりそうな行い（自分の正体をバラすなど）は基本的にしない。

第三五章 人情紙狂人アム・アイ・ヴオアウルフ

(翠、稗田、中沢、ヤン)

人情紙狂人アム・アイ・ヴオアウルフ

気疲れという言葉があるが超能力者の場合はそれは疲労と同義である。テレパシーというものは高い感受性であり悪臭や騒音や振動を一般人が不快に思うのと同様に、場の空気、特に怨念のようなものはストレスとなる。

(全然戻ってこないなあ。やっぱりこの場所自体がイヤな感じがする。)
名波翠は荒れた息を整えながら床伝いに伸ばすイメージで伝わせていたテレパシーを中断した。

中沢と共に鬼から逃亡して小一時間、彼が逃げ込んだ先のホテルに侵入してきた男と会話している様子を翠はテレパシーで伺っていた。壁などを無視すれば直線距離で50mもない。この程度であれば普段なら会話を盗み聞くぐらいはできるはずであったのだが、体調と環境のせいで成果は得られなかった。得られたのは余計な疲労だけ。骨折り損のくたびれ儲けとは正にこのことである。

(ま、さつきみたいなんやないだけでもええか。話し込んでるってことは少なくとも人間やろ。)

しかしそれで引き下がるような玉ではない。戦闘にはなっていないさそうだと判断すると立ち上がり服の埃を落とし始める。相手が一般人ならば今の自分でもまず確実に畳める。爆弾やらマシンガンやらを持たれていれば厳しいが、拳銃ぐらいなら念力で引き金を固めてしまえばつけ込む隙もできるだろう。そう計算をつけると、手近な窓ガラスを鏡代わりにし髪を整えようとして、翠は気づいた。

(なんでや……『見られ』てる……?)

窓ガラスの前に立った途端感じた、悪寒と視線。超能力者としての感覚が告げる、襲われる側が晒される目。ハンターに狙われた野生動物や実験室のネズミにでもなったイメージ。

ピシッ、という音を立てて、翠はガラスにヒビを入れていた。

「何やっとするんや……私は。」

本能的に、無制御に力を使った結果を見ながら、翠はハアとため息を自分に向けてついた。どうやら自覚している以上に参っているようだ。意識せず力を使ってしまおうとは。もう少し冷静にならないといけない。

手早く手櫛で髪を整えると翠は扉に手をかける。割れたガラスが一欠片落ちたことには気づかなかつた。

「——それで、中沢くんと一緒にここまで逃げてきたんです。」

「なるほど……なら『早く』ここを離れたほうが良さそうだ。」

「ええ、ここじゃ誰がどこから入ってくるかもわかりませんし……」

（大学のセンチセイとか言うのとつたけど、物分りよくて助かるわ。ここに残るとか言つてたら見捨てるとこやで。）

稗田の手をわざとらしく握りながら翠は内心で何度目かのため息をつく。しかしそれは今までの違って安堵の色が濃い。ゆえに稗田の目が笑っていないことに気づきつつも、翠の心には一つ安心感が広がっていた。

（にしても心の読めんオッチャンやな。固く心を閉ざしてる。これやったら本当に『親』かもわからんやん。）

稗田がそうしているのには彼女が力を使って探りを入れてきているのを感じ取ったからなのだが、まさか自分が超能力者だと勘付かれていますとは思わない彼女はごちる。超常現象に遭遇した数なら十を越す彼女だが、いかんせん相手が悪い。彼女が立ち向かうことになったものに類するものと超能力もなしに出会い生還しているのだ、稗田はある種彼女にとって天敵と言えるだろう。

既に稗田の中では半ば翠は『鬼』という判定の元で考えねばならないものとして固まりつつある。少なくとも、ただの一般人ではないとほぼ確信していた。

「だが、どこに逃げるのかが問題だ。」

しかしそのことを稗田はお首にも出さない。現状彼だけならどうにかなるだろうが、中沢はそうはいかないだろう。翠が『鬼』である

うとなかろうと、刺激してプラスにはならない。中沢が翠の態度で手の平を返すような人間ならば話も別だが、彼の言動を考えると無意味な仮定だろう。よって稗田は子供たちを保護する大人として振る舞う。

「この絵図を見てほしい。縮尺もわからないが、瀬戸内海の島なら徒歩でも充分移動が可能な面積のはずだ。道は二つ。」

そうやって稗田は壁に落書きされた文字——の下に薄く貼られていた島の絵を指し示す。近代的な測量とは無縁のそれはしかしこの島において数少ない島の全景を現したものだ。

「二つは神塚山を登る。森山だが山頂を目指せば高低差の関係で遭難する危険性は低いだろう。そこから北の学校か南の神社、または東の灯台を目指す。」

「もう一つは、ここから真っ直ぐ北上して鎌石村を目指す。道標は無いが池まで出られればあとは辺りを伝っていけばいい。」

「北上って、あの鬼の方に行くってことですか。」

「確かにそうだが方角「最初のルートにしましょう。ね、中沢くん。」——君はどうしたい？」

「その……どっちでもいいんじゃないかと……」

「そうか、なら決まりだな。」

結論は出た。

稗田は二人の目を見てから言うのと立ち上がった。

百万、二百万、三百万と、札束が宙を舞う。片手で現金をお手玉しながら、ヤン・バレンタインはもう片方の手でスマホをいじっていた。画面を見るに使えるようになるまであと一、二分。時間を持って余しているようにも見える。が、そうではない。柄にもなく、と本人は前置きした上で困惑していた。

キュベレイ Mk-II、プルツー機の上で。

——— といえばこの紙袋の中身見てなかったな、と山頂が近づいてきて冷静になったのがきっかけである。

単なる憤慨が幾分落ち着いたことで冷静な苛立ちになり、なにかやつあたりできるものでもと無造作に紙袋に手をつ突っ込んだ。それがいけなかった。

最初に出てきたのは妙な機械だった。通信機器らしいことはわかったがまだ何分か待たなくてはいけないらしい。アタリっぽい判断は保留。しかし少し機嫌は良くなった。

次に出てきたのは札束の入ったカバンだった。正直ハズレだが、地獄の沙汰も金次第という言葉もあるし現金を貰って悪い気はしない。なかなかいい流れである。そしてこうなると次への期待が高まる。

そして三つめ。正体のわからない手触りに中身を確認すればいいものの、そんなことに使う秒を惜しんで手を引き抜いた。するとどうなるか？プラモぐらいのものが出した途端に巨大化してヤンには見えた。そして。

ドツシイイイイイン!!!

「ええ……」

困惑の声を上げるヤンの前で、赤い機体は木々を押し潰し横たわった。

「限度があんだろよ。こいつは四次元ポケットか？」

悪態をつきながらヤンは札束を四つに増やしお手玉を続ける。まさかこんなもんが出てくるとは思わなかった。どう考えても鬼ごっこには過ぎたるSFチックなロボットが出てきた。つーかこれガンダムだろ。ガンダムで鬼ごっこしろってか？あれって走るスピード百キロぐらいか、俺が走った方が速えじゃねえか。てかこんなデケえもんで追いかけたらソツコー見つかるっての。動かし方も分かんねーし。コックピットに入れもしねえ。

「ん、来たか。」

そんなことを考えながらも、ヤンの耳はこちらに向かい来る足音を捉えた。吸血鬼の聴力は数十m先の森を歩く一般人程度難なく見つける。ましてこの地獄、生きているものは参加者だけ、音源Ⅱ人であ

る。

キュベレイが倒れて大きな音を立てた時はどうしようかと思ったが、彼はそれを誘蛾灯として利用することにしたのだ。あの音を聞きつければバカな人間が向かってくることが望める。ちようと連絡手段も手に入ったことだし『鬼』の牢獄に戻ることは休憩がてら先送りにして待ち伏せることを選んだ。そして待つこと数分、そろそろ移動を考え始めたところで足音が聞こえてきたのだが。

「チツ、離れ始めたな。」

足音は距離を取り始めた。こつちから行くつきやねえな、と呟くと、ヤンはキュベレイから飛び降りた。

(近づいてくるな……『鬼』かはわからんけど、たぶん、イヤな感じ……)

「静かに……止まってくれ。」

ホテルを後に歩き始めて20分弱、進行方向とは少々違うが、山頂の方角からなにかが倒壊する音がして5分ほど。怪音に驚き小休止を兼ねて息を潜めていたがそれきり何もないので山登りを再開していた中沢達は、稗田の一声でまた息を潜めた。「誰か近づいてくる。たぶん一人だ」とほとんど声を発さずに話す稗田の言うとおりに、三人の視界に人影が一つ写る。全身黒づくめで、重そうに荷物を抱きかかえている、おそらくは男。そして外人。その荷物がカバンと銃だとかかる頃になって、人影ことピアスの男は「おい誰かいるのか!」と声を荒げた。

「俺は『親』だ!そこにいるんだろ『鬼』さんよお!出てこねえとぶっ放すぞ!!」

「私が話してくる。もしもの時はすぐに逃げるんだぞ。」

「ちよつと、稗田さん!」

「名波さん、危ないから。」

(グダグダしてねえで全員出てこいよ。)

さてピアスの男ことヤンはもちろん『親』ではないし中沢達のひそやかな話し声も全て聞こえている。今回彼は『親』と騙って接触する

ことを選んだ。理由は前回とは違う手を使ってみようと思ったから、以上である。

しかしその演技は程々にうまかった。特にぶつ放すぞというのとはとても脅しとは思えない（実際脅す気は無くぶつ放す気マンマン）ほどで、それが稗田に接触することを選ばせた。

そしてここに四人の人間が集まることになり、この島で幾度となく行なわれた『役の確認』・『自己紹介』・『自分が情報を持っていないことをとりあえず言うておく』の情報交換三点セットをヤンが銃をチラつかせながら一分で済ませ。

「——つーわけで、森の中彷徨ってたら突然木が倒れだしてなんだと思ったらコイツが寝てたんだよ。」

「「ええ……」」

中沢たち三人はクツソ適当なヤンの説明と共にキュベレイを見つけた。

これぞヤンの作戦、『都合の悪いことはよくわかんないけどそうだからで済ませる』である。

どうせこの地獄、わけのわからない存在に溢れているのだ。吸血鬼の自分が言うのもなんだが、ビッグフットが参加者ならロボットが落ちてたってそう問題になりはしないだろうという極めてシンプルな考えである。そもそもここが鬼ごっここの舞台ということすらろくに知らない奴が多いのだ、バレねえバレねえ。

あとさつき会ったビッグフット達については完璧に説明は放棄した。吸血鬼なら姿とか変えられるし、そういうタイプの参加者もどうせいるだろう。なので今まで誰とも会ってこなかったという後先考えていない嘘を平然とついた。てかビッグフットに会ったなんて云ったらシャブキメてんのかって思われてそっちの方がヤベー。

（いやー俺頭良いわ、この調子でこれ動かせるヤツ見つければOK、ハズレでもぶつ殺せばOK、完璧だわ。）

自分の支給品のロボットを置いてくのがイヤということ、主催者本部に行くことは更に後回しになるような選択をしているのだが本人はまるで頓着しない。どだい計画性とは無縁の男だ、軌道の変更も

修正もその時次第である。

(いやいやいやどないなつとんねん。)

そしてそんな男に巻きこまれる側は溜まったものではない。言動がチンプラつぽい謎外人に謎ロボットを見せられた翠は、もう何度目かわからない困惑を覚えながらとりあえずテレパシーを試してみた。

それまでホラーだったのが突然のSFなんてんなわけあらへんやろという気持ちで過去を読み取る。物へのサイコメトリーはよほどのもので無ければつい数分前の強い感情のものぐらいしか読み取れないが、音がした時間を考えれば対象の範囲内、直ぐにその時の様子が頭に見えてくる。その光景は、ヤンが紙袋からプラモを取り出したと思ったらそれが巨大化するビジョン。

(はいアイツ嘘ついてた。自分がやったんやん。ほんであの紙袋なんやねんもつとわけわからんもんやん。)

結果、翠、速効でヤンの嘘を看破。しかし同時に新たな困惑に襲われる。見えたビジョンからすると、謎の四次元ポケット的な紙袋があった。なんとなくだが、物を大ききとか無視して入れられる感じのものだろう。そういう不思議な物自体があることは別にいい。ホントはあんまりよくないが、いい。問題は、あんまりにも色々出てくることだ。

(人の形した神にロボットに四次元ポケット、なんでもありか。あーもう！つながりがなさすぎる！これ一つの超能力者とかが起こせるレベル超えとるわ。)

通常、超常的なアイテムにはある程度の法則性がある。ようするに、『ノリ』が一つなのだ。たとえば江戸時代にタイムスリップするよくな時には当然ロボットは出てこない。だからそういうわけのわからないことに巻き込まれたときは、そのわけのわからないことと関連のありそうなものから探っていくのだ。

が、今回のおそらく鬼ごっこにはそれがない、もしくは見つけれられていない。それが隠された関連性なのか巨視的な視点が必要な関連性なのかはわからないが、ともかく見えてこない。手がかりを探つて

よけい謎が出てくるとなると翠としてもいよいよ今回のことが大事に思えてきた。

(アカン、これはウチの手に負えんわ。悔しいけど、蘭がいたとこで生きて戻れるとも思えんぐらいや。まして一人やったらいつ死んでも……つて！ガラにもないわこんなん。蘭やつたら諦めん。それに！もう一度凜さんの顔を一目見んかったら死んでも死にきれん！待っててください凜さん！)

ちなみに彼女、いかんせん男の趣味がイマイチで、いわゆる恵体な男性がタイプである。思い人も柔道をやっているガタイがいい男だ。(誰の男の趣味がイマイチやって！つて一人でやってても寂しいだけやな……ギャグやってる場合ちゃうわ、次はあのヤンとか言うヤンキーや。ちよつとだけ心見させてもらおうからなあ……)

ピシヤリと見えないように顔を叩いて気合を入れる。くぐつてきた修羅場は一つや二つではないのだ、この程度で折れるメンタルはしていない。どんなわけのもわからないものでも時間をかけて調べていけば手がかりの一つぐらいは見つかるのだ、たった一時間ほどで諦めるわけにはいかない。

ちようど中沢も稗田もロボットに注意が向いている。二人がもし超能力者でも直接ヤンに触る形でのテレパシーなら勘づかれ難いだろうという計算をすると、翠は足を向けた。向かう先は、当然ヤンのもと。

「あん？なんだ嬢ちゃん？」

「ヤンさん、さつき私たち『鬼』に会って……ここもすぐに離れた方が……」

(よし、手に触った。ほな見させてもら——)

そしていかにもこの状況に怯える可憐で儂い少女を装いながらおぞおぞという擬態語が似合う動きでヤンの手を取りテレパシーを使

——『何見てんだよ』——

(アカン！こいつウチと同——)

「なあ？何見てんだよ、翠だっけ？翠、ミドリ、グリーンか。ハイ！リトルグリーンモンスター！」

ヤンは音もなく飛ぶと近くの木の上へと翠を攫った。中沢達は、気づかない。元々ヤンがいた位置は死角。中沢達がそういう位置関係になるタイミングを見計らったのは、他ならぬ翠。

（しまったッ！ウチは何を焦つとつたんやッ！誘い込まれた？超能力者とバレてた？今バレた？ちやう！そんなことよりもつと考えるべきは……）

「なーんか心がスースーする感覚がしてよオ。いやあ経験だねえ、何でもやってみるもんだ。で、オタク何者？」

（……ほとんど、見えへんかったけど、一つだけわかる……コイツは間違いない！鬼やっ!!）

実のところ、ヤンがテレパシーに気づいたのは偶然だ。彼を吸血鬼にした組織にそういうことを得意とするタイプや人の心の中にも現れるタイプがいたからだ。それが翠にとって不幸な点であったが、もう一つ。吸血鬼の反射神経が迅速なヤンの対応を招き翠の窮地も招いた。

（ま、まだやっ！まだ死ねん！死ねるかいな！ウチは——）

「あらあらあら？俺の言葉通じてる？通じてるよなあなんか知んねえけど。で、なんで黙ってるわけ？」

（クソッ、なんでこんな、ちやう、考えろ、何を、なんか、なんでもいから——）

「ああ……なんかわかんねえけど話せないか、話せない。んじやしきたねーなあしかたねー。死ね。」

（殺されんためにウチは——）

ヤンの手がそれまでの甘い首の締め方から持ち直される。それは次の瞬間にはくびり殺すための準備動作であり、翠はそこに賭けた。

「ウチは、『鬼』や。」

「……ああ？」

「ウチは、『鬼』なんや。アンタと一緒に。」

ヤン・バレンタインは改めてスマホを見る。

画面には十二人の顔写真がアイコンとして並びその名前が記され

ている。

もちろんそこに翠の名は無い。

名波翠は自分のテレパシーが通じないのを自覚しながらも打開策を考える。

相手は他の『鬼』を把握しているかもしれないしそもそもこれが鬼ごつことも限らない。

そうであっても自分の嘘が嘘とバレないように、騙し切る必要がある、だから。

「私は、『子』の役だけど、『鬼』なんです。」

口から出たのは正しく出任せ。

これ一つで命がけで騙しきらなくてはならない。

【E—05／01時02分】

【名波翠@テレパシー少女蘭】

〔役〕：子

〔状態〕：疲労（小）、キングとヤンへの恐怖

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：こんなアホなことをしでかした奴に一発焼き入れて帰る。

1：アカン口からデマカセ言うたけどこれどないして信じさせたらええねん。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を子と推測。

テレパシーなどの超能力が使えるが、普段よりは疲れやすい。

【稗田礼二郎@妖怪ハンター】

〔役〕：親

〔状態〕：やや疲労

〔装備〕：スリケン@ニンジャスレイヤー、ジャイロの鉄球@SBR

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：ロボットに興味。一度四人でしつかり情報共有をしたい。

2：中沢くんは信頼するが、名波くんは警戒。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【中沢@魔法少女まどか☆マギカ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：学生鞆（中身は教科書とかノートとか筆記用具とか）

〔思考・行動〕

基本方針：とりあえず人を探す。知り合いがいたら合流したい。

1：稗田さんに着いていく。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

自分の役を子と推測。

【ヤン・バレンタイン@HELLSING】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康、苛立ち

〔装備〕：FN P90 短機関銃 2挺 サプレッサー&スコープ

つき（弾丸を多少消費）、スマホ（鬼）、五千万円@ランナウェイ、キュ

ベレイMk-2@機動戦士ガンダムZZ

〔道具〕：四次元つぽい紙袋

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、犯し、食らう

1：鬼だあ？なにいつてんだこいつ。

2：トンプファー使いの少年と大猿を「鬼を襲う狂った鬼」と認識。一旦撤退し、本部や他の鬼へ連絡に行く。

3：プラモ入ってんなとは思ったけどロボットかよ。わかるかこんなん！

※その他

生きている人間の血を吸って殺すと、知能のないゾンビのような食屍鬼（グール）に変えてしまう。

※E-05にて1時数分前にキュベレイMk-2が出現し木々を押し倒しました。周囲に音が響きました。

【キュベレイMk-2（プルツ-搭乗機）@機動戦士ガンダムZZ】
プルツ-が駆るニュータイプ用MS。宇宙空間ではファンネルを用いた強力なオールレンジ攻撃が可能。地上でも使えなくもない。

【五千万円@ランナウエイ】
ランナウエイにて主人公達が手に入れた二億を山分けした札束。カバンに一杯に詰まっている。

第三十六章 一発の銃声・二発の弾丸・第三十六章 三人
会って・目撃者は四人（川田、ヘンゼル、月夜、亜季）
（川田章吾登場話）二度あることは

「——っ！クソ、なんだ……」

チクリチクリと顔を突くのは、ろくに手入れされていなさそうな木の枝。鼻に飛び込んでくるのは擦れる葉が醸し出す青い臭い。それが男、川田章吾の意識を覚醒させた。

いつの間にか受けた衝撃は彼に熱と痛みと疲れと刺激をもたらし、自分の置かれた状況を身体に教えこむ。前頭部の不快感から手をやりそつと撫でれば、指先に感じるのは明らかにタンコブの感触。どうやら頭を強かに打ちつけたようだと思つた彼は頭をふろうとして、止めた。みすみす脳にこれ以上ダメージを与えたくない。

「頭にはタンコブ、身体は宙吊り、か。俺が何したってんだ。」

自嘲する笑みを浮かべながら目線だけを下に向ける。薄々気づいていたが、やはり足元には何もなかった。プラプラと二本の足が所在なげに垂れ下がっている。では翻つて上を見てみれば、木を覆うように拡がる布地。パラシユートだろう。

（オーケイ、わかつた。俺はパラシユートで落つことされて頭を打つた……で、ここはどこだ？）

段々と冴えてきた頭が我が身の不覚を理解する。自分の記憶が繋がらない、混濁している。川田は渋い顔をした。

周囲に見えるのは、非常識に赤い空と随分とおざなりな手入れしかされていない木々、そして少し行つたところに見える民家。あとはそれらの後ろに一枚のしよぼい風景画のように広がる、しみつたれた田舎だ。つまりは、彼の生まれ育つた神戸ではない。同じ兵庫でも淡路みたいな田舎だろう。

「っ！……待てよ、なにか、おかしい。」

頭に痛みが走る。自分はこの光景を、この風景を知っている気がする。

(……そうだ、俺は神戸にいた。昔の話だ。)

「記憶が混濁してるな……これがプログラムなら、かなり不味い……」
川田は考える。自分は記憶が混濁している。それは理解できた。今なぜこのような状況なのか全くわからない。これがプログラムなのかそうでないのかも、自分がどのくらいこうしていたのかも。とにかく、まずは記憶を辿ろう、そう彼は考えた。「ここはどこ？私はだあれ？」を自分がやることになるとは夢にも思わなかったが、ひとまずやるしかない。

(オーケイ、こういう時こそクールにだ……まずは一服、つてないのか。そういえば煙草は全部さつき吸ったんだっただ……さつき？ああそうだ、さつきまでやってたプログラムでだ、城岩中……城岩中？おいおい俺は転校した覚え……あつたな。しかも半年ベッドで寝たきりで留年だ、クソツ。)

悪戦苦闘しながら自問自答する。そうすると段々と思い出してきた。二回目のプログラムに参加して、首輪を外して、そして……

「死んだ？」

(いや、ありえない。俺の身体は五体満足、手も足も動くしどこも痛くない、はずだ……)

政府により治療された、という可能性も考える。答えは否、名目上優勝者とはいえ監督役を殺した自分にそんなことをするだろうか？では誰かに救助された？誰かとは誰だ、そんな人間がいたらプログラムに介入しろと言いたい。

川田は肌を手をやる。腹には傷跡一つ無い。そしてその手を見る。普通だ。変わりない。何年も植物人間だった、というのはなさそう
だ。

(とにかく尋常じゃない。まずは生き残ること、それだ。デイパツクの類は、イスの下か？音の響きに空洞があるな。収納スペースにしてそこに支給品入れて俺ごと落としたところか。いやそれより首輪だ、ガダルカナルなら——ない？首輪が？嘘だろ？プログラムじゃないのか？ああつ、クソツ！頭が回らねえ。まずは手当てだ、このままだと何もしなくても死にかねない。そうだ、だからまずは――

↓

「どうやって降りるかな……」

とりあえずの行動目標を定めて、川田はため息をついた。

【不明／不明】

【川田章吾@バトルロワイアル】

【役】：親

【状態】：頭に打撲

【装備】：不明

【道具】：不明

【思考・行動】

基本方針：状況を把握する。

1：降りたい。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・地図・制限時間は全て未把握。

人物解説……バトルロワイアルの主要人物で作中で行われたプログラムの前回優勝者。中学三年生だが一年留年したため十六歳である。なんでもそつなくこなし精神面も強靱、優勝者という肩書に全く恥じないタフな男。作中ではその能力を遺憾なく発揮し数々の危機をくぐり抜けた。なおデスゲームものにおけるリピーターの元祖でもある。

一発の銃声・二発の弾丸・三人会って・目撃者は四人

最大限控えめに見ても3 m、たとえ椅子に手をかけぶら下がりが距離を縮めたとしてもまだ2 mはありそうだ。

「普段ならなんともないんだがな、つたく……」

今もなお続く頭痛を気にしながら、木の枝に宙吊りになったパラシュートにぶら下がっている川田章吾は頭を搔くと、無いとわかっていてもタバコの一本でも転がっていないかとポケットを弄る。もちろんないが、一定の速度で触り布地の感触に集中すると、深く息を吸い、深く息を吐き、落ち着く。口ごみしいが一度頭をクールダウンだ。いつまでもこうしてはいられないが。

川田が意識を取り戻してから体感時間で数分、彼は安全に降りる状況を考えていた。自分の意識が飛んでいたということは既にプログラムが始まって何分経つかわからないということだ。数分かもしれないし十分ほどかもしれないし、もしかしたら数時間単位かもしれない。となると基本的にゲームに乗る人間は時間と共に増えるため戦闘が起きる危険性も増しているということである。加えて放送を聞き逃している可能性もある。首輪は無いようだが禁止エリアがある可能性がないというわけではない。空中から毒ガスなどを散布すれば、あぶり出すということ自体はできる。他にも情報面でのディスプレイアドバンテージもあるかもしれない。なによりこの『かもしれない』が続くこと自体が大きなりスク。一刻も早くこの宙吊り状態から脱することが重要だ。

だが同時に、彼は安易に脱け出すことの危険性もわかっていた。自分が頭部に負った外傷ほどの程度のものか痛みと触診だけが頼りでほとんどわからない。その容態の自分が果たして飛び降りて耐えられるのかという彼には自身が無かった。幸い下は土のようだが、だとしても自分が意識をまた失う可能性はある。そうなれば小学生だって自分を殺せるだろう。それに意識だけならまだいい方で、ちよつとした力みで血管に負荷が掛かりそのままオダブツなんてこともあり得る。マヌケな死に方だが、流血していないとはいえ骨や膜

の内でも内出血している恐れもあるのだ、十二分にありえる事態だ。
(どのみちここじゃ手当てもできないんだ。何迷ってる。)

「やるしかないだろ。」

だが川田は弱くも確かにピシヤリと頬を叩くと迷いを捨てた。時間には待つてくれない、多少の危ない橋を渡る事になってもやるべきことはやらなくてはならない。

川田はまず取り出していたデイパックを投げ落とした。中身は確認したが、プログラムでなら入っているはずの筆記具や飲食物といったいつもの支給品は無く、あったのは拳銃とハリセンの二つのみ。そのうち拳銃だけを学ランに隠した。これであるデイパックを失くしてもさほど痛くはない。

次に川田自身が、椅子からぶら下がる。懸垂の要領で地面までの距離を稼ぐが、やはりまだ距離はある。しかも目算より離れている。3mはあるだろう。が、やるしかない。覚悟を川田は決めた。

ズドツ！

「っ……い！」

なんとか受け身を取り地面を無様に転がる。肺の中の空気が口から吹っ飛び声ならぬ声を上げるが、しかし、無傷。体に走った衝撃は痛みとダメージに変換されるが、この程度なら想定内。死にはしない。

問題は頭だが……こちらはわかりようがないので大丈夫ということにしておく。立とうとしてみる。少しふらついた。でも立てる。歩ける。ならやれると自分を叱咤した。

「大丈夫、お兄さん？」

(人かっ！)

この距離まで気づかなかったか！我が身の不覚を恨みつつ咄嗟に銃を取り、相手へと突きつけ――

(――死んだ。)

川田は、己の死を確信した。

意を決して飛び降りたところに声をかけてきた、銀髪の男。誰なのかは知らないし先の声との目の前との違いもわからないしそもそも

まだ状況を飲み込めていないが、とにかく、男は川田に銃口を向けていた。いや、それは正確ではない。向けつつあった。それはコンマ数秒後に訪れる未来の光景であり、これから死ぬ川田の脳が先走って見せた走馬灯だ。川田も男に向けて銃口を向けつつある。だが遅い。回避運動を取りつつある男に銃口を合わせるには、十分の一秒足りない。同時に引き金を引けば、死ぬのは川田であり生き残るのは男だ。

（俺は――）

最期に言葉を遺そうとして、頭の痛みを襲われて。

唐突な手首への痛みと共に走馬灯が一足早く終わった。

銃声が一つ木霊した。

「ぐあつ……」

「イったいなああ……いい加減離してよ?」

「ダメです。」

同時に火を吹いた二つの銃口は揃って地面に向けられ不満たらたらと言わんばかりに硝煙を上げている。そんな銃をそれぞれ持つ男達の手は、一人の少女の手でガツツリと抑えられていた。

川田と銀髪の男、ヘンゼルが「急に銃を向けてきた」ために思いがけず起こした早打ちを止めたのは、ヘンゼルと同行していた因幡月夜だった。

元々、川田を先に『発見』したのは彼女であり、声をかけることを提案したのも彼女であった。E-02で起こったジャック・ザ・リツパーと若狭悠里との戦闘でジャック・ザ・リツパーが発生させた霧から逃れるように、北上した彼女達とは反対に南下した二人は、視覚で平瀬村を、聴覚で川田の引つかかった木の音をそれぞれ捉えた。そしてどういいうわけか「面白そう」と言い残してそそくさと先行してしまつたヘンゼルを追い、案の定剣呑な展開となつていたので両者の手首を抑えつけたという次第である。出会って5秒も経たずにバトルするような人間達など両方死んでもらっても構わないと言えば構わないが、状況が状況であるためここは穏便に場を収めることとした。

――ちなみにE-02では夜叉猿j.r.と竜宮レナが同じように

霧に巻かれつつあったが、南側に霧が流れたために霧を挟んで車で移動するグレーテル達や徒歩で南下するヘンゼル達よりも、北のヤンと雲雀の戦闘を強く感じたという事情がある。そしてこの霧によりヘンゼルとグレーテルはニアミスしたのだが、それは本人達の知るところではなかった。

(どういう、ことだ……！)

そして、そんな事情に振り回された男である川田とヘンゼルの手首からミシリ嫌な音が上がる。苦痛に顔を歪ませながら、掴まれている川田は混乱の極みにあった。瞬間移動と言われても信じてしまいそうな意識の外からの踏み込みと、外見からは想像がつかない恐るべき握力、そしてあの場に躊躇なく突っ込んでこれる自信。全てが川田の生きてきた人生で未経験のものだ。これが桐山がやったというのならまだわかる。わかりたくないが、アレならできるだろうとわからされてしまう。だが目の前の少女は小学生とも見えるような容姿で、そんな人間がプログラムにいるのはおかしくて、そもそも銀髪の男のような外人が大東亜共和国にいることもおかしくて――

「そういうプレイ?」

「次は顎にし――あ。」

「あ。死んだ?」

「人間きの悪いことを言わないでください。脈はあります。」

僅か30秒ほどの間に起こった状況の変化はデータとして脳を蹂躪する。

膨大な何かに頭を内側から破裂させられるような感覚を感じながら、川田はこの地獄で二度目となる失神を経験した。

(これは――大変なことになりました！)

そしてそれを目撃していた女が一人。

大和亜季はもう一つの支給品であるACOGを望遠鏡代わりにして倒れた男の前で子供たちが武器を持って何やら話しているのを見つけた。

あのあとY―12との短い話し合いで自分の機関銃と相手の銃とドスのセットを交換し、ダンボール片手に屋根によじ登った亜季。彼女はダンボールの下で屋根に伏せ、銃声のあった方向を警戒していた。身軽で体が小さい亜季が屋根に上がりその下でY―12が機関銃を手に襲撃に備えるというフォーメーションであったが、この考えが功を奏したのか、木に引つかかっているパラシュートを発見するとその近くの人影にも気づいたのだ。

——もつとも、彼女が見たのは地面に川田が倒れた後からだ。

（あんな子供たちが人を……い、いや！まだ死んだと決まったわけでは……）

銀髪のゴシツクな感じの子供が男を撃ち殺した、そうとしか思えない状況に亜季は戦慄した。スコープ越しに見えるのは彼女達が守るべき『子』の役に類するような子供にしか見えないが、しかし目の前の光景がその認知を否定する。困惑と恐怖の中で、銃を持つのは違う銀髪の和風な感じの子供と視線が合った。スコープ越しなのに確かに。

（え？なんで——）

そして、目があった少女の姿が、消えた。

「Y―12殿オ！位置を変えますっ！」

弾かれたように立ち上がると片手でぶら下がりとくるとベランダへと降りる。あれは、あれは何かとてもマズイものだ。亜季の本能が告げている。今すぐ逃げなければ死ぬと！

（……また面倒なことが起こった気が……）

「で、この人どうする？」

一方自分が一方的に脅威と認定されたことをなんとなく厄介事として認識した月夜だが、盲目の彼女はもちろん亜季と目を合わせてなどいなかった。ただ単に超聴力で音源を割り出しそこに意識を向けただけである。が、そんなことは亜季にとっては知ったこっちゃない。既に彼女は月夜達二人を恐るべき子どもたちだと認識した。そして月夜はそのことを知らない。そのことがどんな影響を及ぼすかをこの時知っている人間はいなかった。

【F | 02 / 01時03分】

【川田章吾@バトルロワイアル】

〔役〕：親

〔状態〕：頭に打撲、失神

〔装備〕：S&W M19@現実

〔道具〕：デイパック（ハリセン@バトルロワイアル入り）

〔思考・行動〕

基本方針：状況を把握する。

1：???

【ヘンゼル@BLACK LAGOON】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：拳銃、鉈、金槌

〔道具〕：釘

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し

1：因幡月夜と同行する事にしました。機会が来れば、或いはグレートルと合流したら因幡月夜を殺すつもりです。

※その他：自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

特別支給品の有無は不明。

【因幡月夜@武装少女マキャヴェリズム】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：摸造刀：亜鉛合金製で重量は日本刀と変わらないが強度は脆い。

〔道具〕：不明

〔思考・行動〕

基本方針：人を探す。

- 1：倒れた人物（川田）と謎の音源（亜季）に対処する。
- 2：ヘンゼルを警戒しつつも同行する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※ビラに書かれていた事はヘンゼルに尋ねて把握しました。

※霧はジャック・ザ・リツパーの発生させたものでした。E-02 東南部を中心にまだ残っている可能性があります。

【大和亜季@アイドルマスター シンデレラガールズ】

〔役〕：親

〔状態〕：戦慄

〔装備〕：ACOG@現実

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：帰還する。親や子と合流し、情報を集め協力する。

1：銀髪の子供達（ヘンゼルと月夜）から逃げる。

2：Y-12 殿をひとまずは信用する。

3：鬼と遭遇したら…この機関銃を撃つていいものか？

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

M60 機関銃@現実、デイパック、飲食物・医療品少しをY-12 に渡しました。

【ACOG@現実】

いわゆるスコープ。電源がなくても使えるなど幅広い状況に対応できることから米軍を始め各国の軍隊などに導入が進んでいる。一応M60にも着ける。

第三十七章 D I Oの世界（5 t h、織田様、D I O）
（D I O登場話）侵略者D I O！

時はしばし遡る。

ディオ・ブランドーという男がいた。

イギリスの貧民街で育った彼は実の父を殺し、父が恩を売った『ジョースター』の一族を乗っ取ろうと画策した。

しかし、その目論見は彼の仇敵であり、友であったジョナサン・ジョースターの手によって挫かれ、彼は二度の死闘を経て百年の眠りについた。

時を超え、最早ディオ・ブランドー青年を記憶する人間が姿を消した頃、彼は時を統べる『帝王』D I Oとして復活した。

しかし血の因縁は途切れず、復活したD I Oの野望を粉碎するべくジョナサンの血統であるジョセフ・ジョースター、空条承太郎一行らが立ち上がったのだ。

帝王とその配下、そして星屑の十字軍は壮絶な死闘を繰り広げ…その結果、帝王『D I O』は倒された。

ジョナサン・ジョースターのボディと共に灰となったのだ。

そして、現在。彼の呪われた魂は、当然の、予定調和の如く地獄へと流れ着いた。

「フッフ、鬼ごっこ、か……面白いじゃあないか」

その美貌を醜く歪めて、邪悪な本性を隠そうともせず、D I Oは笑った。

空条承太郎に敗北したのは認めよう、失態だった。

だがそれが何だというのだ。我が終生の友であり、宿敵であったジョナサンは二度自分を破って見せたではないか。

そして、敗北してなお自分という存在は此処にある。

「まだ、時間停止の秒数はジョセフの血を吸った時ほどではないが：

太陽の光を気にしなくとも良い空というのは気に入った」

そう、彼のスタンド『世界』が操る時間停止は、鬼ごっこというゲームにおいて圧倒的なアドバンテージを有している。

誰も、止まった時の中を逃げることも出来ないのだから。

加えて、空は明るいにも関わらず自分は消滅していない。それどころか『地獄』の太陽は実に肌に馴染むツ！

宿敵であるジョースターは忌々しくも此処にはおらず、

DIOは陽光とジョースター、二つの数少ない弱点を克服しているのだ。

後は、必ず現世へと復活し雪辱を晴らす。

さあ子は捕え、親は戯れに血を吸い、蹂躪し、進軍せよ、デイオ・ブランドー。

ただ一度逃してしまった勝利を、今度こそ刻むために。

「フフ…全員『捕まえて』やるぞ子供たちよ。そして、親の人間共は恐怖するがいい。

『勝利し』『支配する』それこそがこのDIOのたった一つ、シンプルなルールよッ！」

【不明／不明】

【DIO／ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース】

【役】：鬼

【状態】：健康

【装備】：不明支給品二つ

【道具】：無し

【思考・行動】

基本方針：子全員捕まえ、親は血を吸うか下僕とする

人物紹介……英国の貴族の家系であるジョースター家の宿敵。

貧しい平民に生まれ、父ダリオ・ブランドーの死を機にジョースター家の養子となる。

ジョースター家乗っ取りを画策するが、ジョナサン・ジョースターの活躍により計画が露呈。窮地に立たされる。

危機を脱するため決意したディオは人間をやめる事を宣言し自ら石仮面を被り、不死身の吸血鬼と化した。

ゾンビを生成し世界征服を目論むディオとジョナサンの戦いは熾烈を極めるが、太陽の力・波紋法を身に付けたジョナサンによって全身を溶かされ敗れ去る。

だが、辛うじて首だけが助かり密かに生き延びたディオは再びジョナサンの前に立ち塞がる。

失った体の代わりにジョナサンの肉体を手に入れ再起を図るも、最後の力を振り絞ったジョナサンと相打ちとなり、彼と共に客船の爆発に巻き込まれて海底へと沈んだ。

その100年後、エジプト・カイロにて復活したDIOは新たななる力、『スタンド』に覚醒。再び世界を手にするべくその勢力を拡大する。

ジョースターの血統、空条承太郎たちが自分の存在を察知、知覚、倒しにくることを予想したDIOは配下のスタンド使い数十名を刺客として差し向ける。

空条承太郎たちはいくつかの犠牲を出しながらも刺客たちを突破。しかしエジプトでの決戦ではDIOのスタンド能力『世界』の前に全滅寸前まで追い込まれる。

圧倒的有利に立ったはずのDIOであるが、激昂した承太郎との戦いにより形勢は逆転。最後はスタンドごと本体であるDIO自身も破壊され敗北。

バラバラに碎かれたDIOの肉体は、日の出の光を浴び灰となって消滅、紅海へ散っていった。

た。しかしその絶大な影響力は、彼の死後も依然消えることはなかった。

DI Oの世界

先程の邂逅から約二十分。

夕焼けに似た不気味な空の元、二人の少年、織田敏憲と豊穰礼佑は連れ立って歩いていった。

「ねえお兄ちゃん。どこへ行くの？」

「なるべく鬼の来なさそうな所へさ。僕一人だけならともかくお前も連れてるからね」

「ふーん、でもそれだと他の参加してる人にも会えなんじゃない？」

「心配いらない。まず鬼のいなさそうところへ行こうっていうのはみんな考えることだ。」

だから学校みたいな如何にも人が集まりそうな所よりも少し外れた所の方が人には会いやすいはずだ」

バイクにも乗っていないのにフルフェイスヘルメットで表情を隠しつつ、織田はわずかにその不細工な眉をひそめた。

今同行しているこのクソガキ奴僕、時々発言が妙に聡いところがある。

最初出会った時は迷子のように語っていたにも関わらず、今は鬼ごつこの参加者の視点に立って自分に話しかけてきている。

それも、至極冷静に。

勿論そこまで違和感を感じる訳ではないし、今の所脅威は感じない。

ただ、少し引つかるだけだ。

(まあ、いい。このまま人と出会わず昼を過ぎるか、おかしな動きをしたら撃ち殺してやるだけさ)

懐のワルサーの感触を確かめつつ、「イヒツ」と下品な笑みを漏らす。

彼はあまり人と出会わない様ならば足手まといを抱えて歩くつもりは毛頭無く、この見た目幼児を容赦なく切り捨てる心づもりだった。

第六十八回戦闘実験プログラムでも彼はゲームに乗っていた人間

であり、例え幼児であろうと、利用し、切り捨てられる人間だった。
(なーんて、不細工面に似合った事考えてるんだろぅなあ)

そんな織田の下卑た考えは、四歳児をはるかに超越した頭脳を持つ
礼佑にはお見通しなのだ。

とは言え、このままでは不味いのは事実である。

四歳児離れたした頭脳を持っているとはいえ、礼佑は肉体的には幼児
でしかないし、武器になりそうな物も取り上げられてしまっている。

彼はそれを丁度いいハンディだと思っているがそろそろ状況を変
える新たなカードが欲しい。

そう思った時だった。

——ザザツ

はいびーびじょんだいありーからノイズのような音が走る。

未来がまた、変化した音だった。

子供らしい無邪気な表情を崩さず、礼佑は織田に感づかれていない
か様子を伺う。

あくまで冷静に。あまり未来日記を信用しすぎず、慌てて予知を確
認しないのが『エリート』というものだろう。

しかし、彼の懸念に反して織田は別の音に気を取られているよう
だった。

次いで、礼佑もまた近づいてくる音を聞き取る。

足音ではない——これは、エンジン音だ。それも、大型車両の。



「WRYYYYYY！タンクローリイだツツツ！」

邪悪の化身D I Oは、紙袋に入っていた支給品であるタンクローリーを『世界』に運転させつつ、そのパワー・スピードにそれなりにハイになっていた。

初めて運転するため、時折ハリウツドのカーチエイスマかくやという勢いで電柱や看板にぶつかっていたが、気にせず走り抜ける。

帝王に後退はないのだ。

「ムッ！」

機嫌よく走り初めて十分ほど後、吸血鬼として異常発達した視力が、二つの人影を捉える。

背丈から類推するに、あれは子だろう。つまり捕まえるべき獲物だ。

世界にハンドルを切らせ、D I Oは邪悪な笑みを浮かべた。

そして、世界を支配する力を放つ。

「世界——時は止まる」



「……な、何ッ!？」

「えっ……?」

織田と礼佑。二人の少年は揃って驚愕の声を上げた。

無理もないだろう。先程までこちらに向かってきていたタンクローリーのトレーラーが忽然と消えてしまったのだから。

どこかにぶつかつた、というわけではない。それならば二人も無事では済まないはずだ。

あのトレーラーは一体何処に…奇しくも二人の心境が重なったその時だった。

「——君たちは、ドードーという鳥を知っているかな？」

背後で、良く通る男の声が響いた。

「モーリシャス諸島に生息していた鳥なのだが…その鈍重さと鳥であるにも関わらず、

『飛べない』という弱点を持っていた彼らは人間の進出により僅か80年余りで絶滅した」

2人がゆつくりと振り返る。

「飛べもせず、ノロマ、外敵のいない平和な島で育ち、警戒心もない彼らが滅びるのは必然だったと言えるだろう」

傍らには紙袋を抱えた。ギリシャの彫刻のように筋肉を漲らせた美しい男。

紡ぐ言葉には思わず聞き入ってしまう、魔的な力がある。

「だが…私は彼らが絶滅した原因は『勇氣』が無かったからだ…思っている

墮落した日々に甘んじ、彼らは『進化』しようとはしなかった

現在の『限界』を超えようとしな生物は種を問わず脆い…君たちはどうかかな？」

男はD I Oと名乗った。



——織田敏憲には嫌いな人種が三種類いる。

その一、顔の良い男。その二、背の高い男。その三、下品な男だ。

D I Oという急に話しかけて下品に自分を驚かせ、同行を提案してきたパツキン奴僕はこのうち三つをコンプリートしている。

「驚かせて悪かったね、これでも『親』なものだから。『子』らしき者を見ると捨て置けなかった」

「い、いいですよ、気にしてませんから！」

(クソがあ〜！何故高貴な俺がこんなパツキン奴僕に…いや、クールになれ織田敏憲。)

(こうなるのは計算通りのはずだろ)

このままクソガキ奴僕共々肉壁として使い倒してやる。

織田少年はそう強く誓い、下手に出続ける。

(…ちよつと手強そうなのが出てきたね。面白くなってきた)

豊穰礼佑は対照的に無邪気に新たな同行者の分析楽しむ。

彼は先ほどのタンクローリーを突然消したのはこの男だろうとあたりを付けていた。

それもチャチなトリックではない。未来日記の予知能力のような、本物の異能だ。

更に、予知した内容ではこの男は自分にDEAD ENDフラグを立てなかった。

少なくとも昼までは。

D I Oがこれからどう動くかはわからないが、これで織田も自分に手を出しにくくなっただろう。

(次は、このD I Oってヤローがどんな奴かを見極めないとな…)

礼佑の口から笑みが零れる。

そして、先行しているため二人からは表情が伺えないD I Oも、同じ笑みを浮かべていた。

(…最初は即刻捕まえて牢屋に連れていこうと思ったが、考えてみれば一人二人チマチマ捕まえていくよりも纏めて『一網打尽』にした方が良い)

それが、D I Oが自分の役職を親だと偽った理由だった。

無論、自分が鬼と発覚したときは世界で捕まえるか、殺す必要があるだろうが、スタンドに目覚めていない子供など、それこそ赤子の手をひねるが如く、だ。

(もつとも、豊穰礼佑とか言った子供は何か隠しているようだがね…)

織田敏憲という少年は何の力も無いようだが……良い悪の素質がありそうだ)

悪の才能とはすなわち、弱者を自分のために踏みにじることが出来る者だ。

悪の帝王であるDIOは、2人がそんな人種である事を直感していた。

そのため生かして泳がせる事を選んだのだ。

(フフ、せいぜい利用させて貰うぞ二人とも——)

((勝つのは私／俺なのだから))

それぞれの思惑を抱えながら、絶望鬼ごっこは進んでいく。

【H—08／01時15分】

【豊穰礼佑@未来日記】

「役」：子

「状態」：健康

「装備」：はいぱーびじょんだいありー@未来日記

「道具」：『スマートフォン（子）』

「思考・行動」

基本方針：このゲームに勝利してエリートであることを示す。

1：DIO、織田敏憲を利用しながら情報を集める。

2：ピエロ（ペニーワイズ）との接触を避けるため、西北西方面に

逃走したい。

3：未来日記所有者は優先的に殺す。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

未来日記による予知である程度の未来を把握しました。この場に留まると高確率でペニーワイズに殺害されます。

【織田敏憲@バトル・ロワイアル（漫画）】

〔役〕：子

〔状態〕 健康

〔装備〕：ヘルメット、防弾チョッキ、ワルサーP38、ランドセル、トートバッグ

〔道具〕：ランドセルに飲食物、トートバッグにガスマスクや包丁、洗剤といったもの

〔思考・行動〕

基本方針：利用できそうな親か子と合流する。鬼らしき相手がいたら逃げる。

1：豊穰礼佑、DIOを利用しながらプログラムに備える。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

自分の役が『子』だと推測。

【DIO／ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：タンクローリー、不明支給品（確認済み）

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：子全員捕まえ、親は血を吸うか下僕とする。

1：織田敏憲、豊穰礼佑を利用して子を集める。

※自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

※時間停止は五秒ほどです。

第三十八章 学校へGO！（グレーテル、しんのすけ、エスター）

学校へGO！

「居ないね」

「居ないわね」

交番の周囲を探索するしんのすけと、交番の内部を探索するエスターが声を交わす。

拡声器を通じた桜井リクと『古畑』の遣り取りを聞いた三人はこの交番までやって来たのだが、既に『古畑』こと今泉は学校に向かって移動していた為に、当然のように行き違いになっていた。

今はしんのすけが交番の周囲を探索し、エスターは交番の内部で武器になるものを物色していた。

（うーん。この地図交番がどこにも載って無いんだけど）

そしてグレーテルは、エスターを横目で監視しながら地図を見ていた。

自分の同類のエスターが凶器を漁っているのは、グレーテルとしては気になるのは当然だった。

（まあ此方に向かって来れば殺すだけ）

物騒な事を極自然に思考しながら地図を見る。

この地図には交番が記載されていないが、『

古畑』が話していた相手は学校に居る。

つまりは此処は学校にほど近い場所なのだろう。

だがそうすると、北に移動した事になるのだが、グレーテルの感覚からすれば、北に移動した覚えは無い。

グレーテルの感覚が正しければ、『地図に載っていない学校が存在する事になる』。

（まあ、地図を見て走った訳ではないものね）

グレーテルはそう結論を出すと、二人に向かって提案する。

『古畑』さんは、学校に向かうって言ってたから私達も行ってみま

しよう」

グレーテルとしては、なるべく多くの人と会いたいことから、当然の提案である。

「けど、学校の場所が分からないぞ」

しんのすけも他の人、出来れば大人と接触したいので否定しない。

「私達は『古畑』さんを見ていないし、私達の来た方向とは逆の方向に有るんじゃないかしら」

エスターとしては『親』という肉盾が欲しい。

三者三様ではあるが、彼等は他者との接触を望んでいた。

「なるほど、では、向かいますか」

しんのすけが言うと、三人は学校が有ると思われる方向に向かって移動を開始した。

【チーム見た目は子供】

? 【G-08 (交番) 01時15分】

?? 【グレーテル@BLACK LAGOON】

? 「役」：子

? 「状態」：軽トラを運転中

? 「装備」：BAR

? 「道具」：不明 (社務所で凶器として使えそうなものを中心に回収)

地図 (Bルート)

? 「思考・行動」

? 基本方針：皆殺し

? 1：取り敢えず学校に行く。

? ※その他 自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・制限時間は全て未把握

地図 (Bルート) を交番で把握しました。

?? 【野原しんのすけ@クレヨンしんちゃん】

? 「役」：子

? 「状態」：健康

- ? 「装備」：『お守り』
- ? 「道具」：なし
- ? 「思考・行動」
- ? 基本方針：ネネちゃん家に行く。
- ? 1：みんなで学校に行く。
- ? ※その他
- ? 自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【エスター@エスター】

- ? 「役」：親
- ? 「状態」：健康
- ? 「装備」：ハンマー、青酸カリ@バトルロワイアル
- ? 「道具」
- ? 「思考・行動」
- ? 基本方針：子のふりをして立ち回る。
- ? 1：子として親の庇護を受けつつ、参加者の情報を集める。
- ? 2：制限時間が近づいたら、親を減らす。
- ? *その他
- ? 自分の役、各役の勝利条件、制限時間を把握。
- ? ※交番内で武器になりそうなものを入手したかも知れません。

第三十九章 「ビー・ステイル・マイ・ビーティング・ハート」

【ビー・ステイル・マイ・ビーティング・ハート】

「Y—12 殿オ！位置を変えますっ！」

屋根の上から、押し殺し、動揺した声。彼女がすぐベランダへ飛び込んで来た。

「なにかありましたか」

「こ、子供が！ 少年が拳銃で、男性を撃ちました！」

「人数は」

「二人！ 共に銀髪！ 拳銃を撃つたのとは別の子供が、少女が、『こつちを見ました』！」

それを聞くと、銃や荷物を担ぎ、二人で急いで家を出る。彼女が見ていたのとは逆方向へ。

子供が、人を拳銃で撃つ。ネオサイタマならチャメシ・インシデントだ。だが……『こつちを見た』とは。

自分もサイバーサングラスで動く人影を確認していたが、彼女の軍用スコープほどに遠くがはっきり見えるわけではない。

相手がこつちを見たのは、偶然か。彼女の声や物音が届く距離ではないはず。ならば、その子供は、子供たちは何者か。

……もしや、『ニンジャ』では。

ニンジャ。自分は彼らの実在を知っている。超常的なカラテやジツを振るい、常人をたやすく殺害する恐るべき戦士だ。

身体能力も極めて優れている。数百メートル離れた我々を見つめることもできよう。それが、最悪二人。

もしも彼らが鬼で、こちらが標的となったとしたら、我々では……。

「鬼の可能性がありません」

「ええ。子だとしても、危険人物です！」

最悪ニンジャであった場合、そうでなくても、対処法は。いわゆる「武田信玄のサンダンウチ・タクテイクス」。

狭い場所に誘い込み、ニンジャでも回避出来ない状態で、ありつた
けの銃弾を叩き込むこと。そう研修されている。

我々クロンヤクザの強みは、単純な物量と一糸乱れぬ一斉行動、
感情に乏しく死を恐れぬことだ。

しかし今、クロンヤクザである自分はひとりだけ。相手も銃で武
装している。

ヤマトⅡサンは銃器の扱いこそそれなりだが、殺人の経験はなさそ
うだ。

ならば、今は逃げるしかない。幸いに機関銃はある。迎撃に適した
場所を探そう。

フーリンカザン（訳注：地の利、環境、状況など）を味方につける
のだ。

「追って来ますか」

「……いまのところ、来ませんね。しばらくは警戒しましょう」



「……どうかした？」

「気の所為。それより……向こうの方で、声がした。ノイズ混じりの、
『拡声器』を使ったみたいな声」

「ふーん。この状況で拡声器使うようなバカがいるの？ 戦いはやめ
ましょう、とか言ってる？」

「そこまでは。だいぶ遠いけど……そっちの方へ、車が走るような音
もする。あと、別方向で何か大きな音……」

月夜がそれぞれ指差す。ヘンゼルは、鼻を鳴らす。それはまあ、い
ろいろ面白そうだ。

どうやら彼女は、平瀬村に誰かが潜んでいるのを察知し——そこ
から自分の意識を逸らせようとしている。

その拡声器を使ったバカや、車に乗った連中を、代わりの犠牲にし
ても構わないというのか。

「いいよ、じゃあ拡声器の方へ行こう。この男はどうする？」

「武器を取り上げて、放っておく。死ねばそれまで」

「そう。薄情だね」

月夜は——「ビラに書かれていた」とヘンゼルから聞いたことを、
全て信じたわけではない。

見ず知らずの男に躊躇いなく銃を発砲するような人間だ。まず間
違いなく悪人。鬼かどうかはともかく、危険な奴だ。

こちらを攻撃しようとしても、少なくとも剣の間合いにいれば、斬
り捨てるか無力化することは出来る。

……とにかくも、信頼できる人間から詳しく話を聞かねばならな
い。彼を斬るか否かはそれまで保留しよう。

「親を探す。もつと詳しい情報が必要」

「こいつは『親』じゃないかな？ ……とりあえず、こいつの銃とデイ
バックは貰つていこう」

目が見えないというのは嘘じゃなさそうだが、鋭敏な聴覚がそれを
補っている。便利な奴だ。

じゃあ、聴覚を封じたら？ 嘘を教えて、取り返しのつかないこと
をさせたら？ その時、彼女はどんな顔をするか。

ヘンゼルはサディステイックな笑みを浮かべ、気絶した川田を蹴り
転がし、銃を奪い、デイバックを背負う。

その時、月夜の顔色が変わった。この……『音』は！

重低音が、近づいてくる。大型トラックがエンジンを鳴らすような
轟音が。

荒い息遣い。足音。そして凄まじい威圧感。ヘンゼルにも感じ取
れた。戦慄し、冷汗が滴り落ちる。

ドツドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツドツド

「車じゃ……ない……？ これは……？」

【F-02 北西端 / 01時14分】

【大和亜季@アイドルマスター シンデレラガールズ】

【役】：親

【状態】：戦慄

【装備】：ACOG（銃器用照準器）@現実、ドス・ダガー、チャカガン

【道具】：デイパック

【思考・行動】

基本方針：帰還する。親や子と合流し、情報を集め協力する。

1：Y-12 殿をひとまずは信用する。

2：銀髪の子供達（ヘンゼルと月夜）から逃げる。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【クローンヤクザY-12型@ニンジャスレイヤー】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：埋込式サイバースングラス、ヤクザスーツ、M60機関銃

@現実

【道具】：デイパック（不明支給品2、確認済み）、飲食物・医療品少し

【思考・行動】

基本方針：子を探し、守る。親とは協力する。鬼と遭遇したら排除するか、子連れれて逃走する。

1：ヤマトIIサンをとりあえず護衛する。

2：銀髪の子供達（ヘンゼルと月夜）から逃げる。襲ってくれば迎撃。鬼かニンジャ、あるいは両方ではと疑う。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。個人名がないため、仮に「Y-12」と名乗る。

このゲームを「ヨロシサンによる自分の機能テストか、非合法組織による殺人ゲーム、あるいはその両方」と認識。

生き残るつもりだが、ヨロシサンの株価が下がりそうな行い（自分の正体をバラすなど）は基本的にしない。

【F—02／01時15分】

【ヘンゼル@BLACK LAGOON】

〔役〕：子

〔状態〕 健康、戦慄

〔装備〕 拳銃、鉈、金槌、S&W M19@現実（川田から奪取）

〔道具〕：釘、川田のデイパック（ハリセン@バトル・ロワイアルが入っている）

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し。

1：因幡月夜と同行する。機会が来れば、或いはグレーテルと合流したら月夜を殺すつもり。

2：重低音と共に近づく謎の人物に警戒。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。特別支給品の有無は不明。

【因幡月夜@武装少女マキャヴェリズム】

〔役〕：子

〔状態〕 健康（盲目）、戦慄

〔装備〕：摸造刀（亜鉛合金製）

〔道具〕：不明

〔思考・行動〕

基本方針：信頼できる人間を探し、確かな情報入手する。

1：ヘンゼルを警戒しつつも同行する。人殺しは阻む。襲ってくれば斬る。

2：重低音と共に近づく謎の人物に警戒。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

盲目のため、文字の読解や顔の判別等は不可能だが、優れた聴力で広範囲の探知が可能。

ビラに書かれていた事はヘンゼルに尋ねて把握したものの、ヘンゼル自身が怪しいため内容についても疑っている。

【川田章吾@バトルロワイアル】

〔役〕：親

〔状態〕：頭に打撲、失神

〔装備〕：なし

〔道具〕：なし

〔思考・行動〕

基本方針：状況を把握する。

1：???

【キング@ワンパンマン（リメイク）】

〔役〕：親

〔状態〕：ゴメオによる催淫、キングエンジン

〔装備〕：

〔道具〕：デイパック（タブレット@絶望鬼ごっこ、醤油、ゴメオ@現実）

〔思考・行動〕

基本方針：帰りたい……

1：子どもたち（翠と中沢）の誤解をときたい。

2：一応、自分のできる範囲で子と親を保護する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

第四十章 銀河レベル級に超LUCKYSTAR
(檸檬、蕨、ジェイソン、DIO、5th、織田様)
銀河レベル級に超LUCKYSTAR

島の南東隅、座標I—10、『琴ヶ崎灯台』の中。

「どうする……!? お、鬼が、二人も!？」

幼女、『擬宝珠檸檬』は、その頭脳をフル回転させて脱出法を探っている。歯の根が合わない。手が、膝が震える。

フラフラと入り込んだここは、確かに……比較的にしろ、安全ではあった。

ゲーム開始から1時間、他の親や子と合流は出来なかったが、彼女が鬼に襲撃されることはなかったのだから。

だが今や、安全ではなくなつた。鬼が近づいている。それも、二人。二匹と言うべきか。

遠目に見下ろした、海岸を歩くあの少女の頭には——二本の角らしきものがあつた。ならば、鬼だ。

驚いて視線を巡らした先、灯台へ通じる道をこちらへ歩いてくる大柄な男は——なにか、鈍のような武器を持っていた。

しかも見るもの全てを皆殺しにしようという、恐るべき殺気を放っている。震え上がった檸檬は涙目になり、即座に身を隠した。

どうする。灯台から降りれば、鬼たちの前に身を晒すことになる。捕まるか、殺されるか。

灯台の中にとどまれば、どうだ。入つてこられたら、逃げ場がない。飛び降りれば多分死ぬであろう高さ。死にたくない。

万が一運良く死ななくても、腕や足の骨を折るかも知れない。そうなれば致命的だ。逃げられない。

武器は……ある。支給品の『お守り』だ。使用は一回きりだが、鬼にぶつければその鬼を殺せる。

だが、今近づいてきている鬼は二匹。となれば……運良く二匹の鬼が殺し合いになり、相打ちになるか、手負いの一匹になるかすれればい

い。

それを祈るしか無い。こちらから姿を見せたり働きかけたりするのは愚策だ。鬼たちを一致団結させてはいけない。

いざとなれば、お守りをどちらかに使って殺し、怪我を承知で飛び降り、走って逃げるか。どこへ。ここは島の片隅、海岸沿いに……。

いや。自分が極めて幸運なら、どちらかが、あるいは両方ともが親か子で、自分を守ってくれるかも知れない。

鬼を追い払い、ここから自分を助け出してくれるかも知れない。檸様は様々な可能性と希望を考慮しながら、お守りを強く握りしめる。

★

K i : k i : k i m u : m u : m …

k i : k i : k i m u : m u : m u …

k i : k i : k i m u : m u : m u …

——— “Kill m u m”

「ホッケーマスクを被り、マチェットを握りしめた巨漢『ジェイソン・ボーヒーズ』は、真っ直ぐに灯台を目指す。

そこに誰がいるのか、いないのか、行つてどうするのか。そんなこととはどうでもいい。

誰かいれば殺す。それだけだ。鬼だろうと誰だろうと見敵必殺だ。いなければ他へ行くだけだ。

と、同じく灯台に近づいていく者がいる。つまり、獲物だ。ジェイソンは類稀な膂力でマチェットを強く握りしめる。

距離はやや遠いが、次第にはつきり見えてきた。白いマントを羽織り、頭にリボンをつけた、金髪の少女のようだ。

大股で歩み寄る。殺す。殺す。殺す。

★

剥き出しの殺気を感じ、立ち止まる。そちらへ目を向け、刀に手をかける。

もとはすぐ知れた。筋骨隆々の巨漢。顔をマスクで覆い、手に鉞を
持つ。見るからに物騒な殺人鬼。

「なるほど。鬼とはこういうものか」

冷笑を浮かべ、刀を抜き、構える。毛むくじやらで頭に角でも生え
ているかと思えば、ホラー映画に出て来るような奴とは。

ズカズカと無造作に歩み寄ってくる。言葉は……通じそうにない。
灯台に誰かいるのを嗅ぎつけたか、たまたまか。

どちらにせよ、運が良い。この鬼はここで退治してくれよう。天下五
剣が一「童子切安綱」、「花酒蔵」の名にかけて。

「名乗らずともよい。斬り捨て——」

その時！

「WRRRRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!!」

★ 猛烈な勢いで！ 横から『タンクローリー』が突っ込んで来たッ！

『この場にとどまると、高確率でピエロに殺される』

……僕の『未来日記』はそう予知した。それを逃れるには、西北西
へ行くべきだとも。

地図もコンパスも土地勘もなく、太陽も月も星々も見えないこの空
で、方角を知るのには難しいが……標識はある。

『この先、琴ヶ崎灯台』と。そちらが西北西なのか、そうでないのか？
後で知ったことだが……この時、僕たちをタンクローリーに乗せて

灯台へ向かった男『DIO』は……『東南東』へ向かっていたッ！

【I-110 (灯台) / 01時20分】

【擬宝珠 檸檬@こちら葛飾区亀有公園前派出所】

【役】：子

【状態】：健康、恐怖

【装備】：『お守り』

【道具】：

【思考・行動】

基本方針：生きて帰る。

1：親と合流したい。

2：鬼が登って来たらお守りを使う。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は未把握。自分の役を子と推測。

遠目に見た花酒蔵を鬼と誤認。同じくジェイソン・ボーヒーズを鬼と認識しました。

【I-10（灯台付近）／01時20分】

【花酒蔵@武装少女マキャヴェリズム】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：太刀・棒手裏剣

〔道具〕：防弾ベスト・閃光弾

〔思考・行動〕

基本方針：親か子と合流する。

1：この鬼を斬る。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。ルールの本質に気が付きました。

【ジェイソン・ボーヒーズ@13日の金曜日シリーズ】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：アイスホッケーマスク、マチェット

〔道具〕：四次元つぼい紙袋、不明支給品3つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺す。見敵必殺。鬼も親も子も関係なし。

1：この少女を殺す。

【DIO@ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：タンクローリー、不明支給品（確認済み）、『ザ・ワールド』（スタンド能力）

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：子を全員捕まえ、親は血を吸うか下僕とする。

1：親として振る舞い、織田敏憲、豊穰礼佑を利用して子を集める。

2：灯台へ向かう。

※その他

時間停止は五秒ほどです。

【豊穰礼佑@未来日記】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：はいぱーびじょんだいありー@未来日記

〔道具〕：『スマートフォン（子）』

〔思考・行動〕

基本方針：このゲームに勝利してエリートであることを示す。

1：D I O、織田敏憲を利用しながら情報を集める。

2：ピエロ（ペニーワイズ）との接触を避けるため、西北西方面に逃走したい。

3：未来日記所有者は優先的に殺す。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は未把握。自分の役を子と推測。

未来日記による予知で、ある程度の未来を把握しました。D I Oを親の役と思っています。

【織田敏憲@バトル・ロワイアル（漫画）】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：ヘルメット、防弾チョッキ、ワルサーP38、ランドセル、トートバッグ

〔道具〕：ランドセルに飲食物、トートバッグにガスマスクや包丁、洗剤といったもの

〔思考・行動〕

基本方針：利用できそうな親か子と合流する。鬼らしき相手がいたら逃げる。

1：豊穰礼佑、DIOを利用しながらプログラムに備える。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は未把握。自分の役を子と推測。

DIOを親の役と思っています。

第四章 少女と王蛇 (アリス、浅倉)

少女と王蛇

「チッ！」

蛇柄のジャケットに袖を通した金髪の男、大量殺人犯浅倉威は幾度目になるか分からぬ舌打ちをして、近くの木を蹴りつけた。

理由は決まっている。イライラしているからだ。

この島に来て一時間が経ったが子も親も鬼も出てこない。

元より気の長い方ではない浅倉が苛立つのは当然と言えた。

更に、今しがた通りかかったこの道が怒りに拍車をかけている。

「俺を置いて勝手に祭りを始めやがって……」

全国指名手配され、警官に発砲された事も片手の指では足りない浅倉だからこそ分かる。

この場所では先程戦いがあった。

木々や道に刻まれた銃の弾痕こそその証だ。

浅倉風に言えば、『祭りに乗り遅れた』という事だろう。

しかしまだ近くにこの戦いを繰り広げた者がいるかもしれない。

そう思い、足跡でもないか痕跡を探そうとした時だった。

「うーん……」

遠くない場所で子供の声が聞こえた。

浅倉は藪の方へと歩き、乱暴に木々を蹴り折る。

すると、顔を血で赤く染めた金髪の少女が姿を現して。

親か子が確認はできなかったが、その容姿と自分にも与えられた親の証であるデイパックがないことから浅倉は少女が『子』であると判断した。

それと同時に耳鳴りに似た音が響き、浅倉は支給品として与えられ

た手鏡を確認する。

案の定、契約している三体のミラーモンスターが腹を空かせ、飯をよこせと騒いでいたのだ。

「こいつは駄目だ、もう少し待つてろ…」

冷徹にそう命じ、モンスター達を黙らせる。

浅倉がこの鬼ごっこで勝利するためには、子を二人キープしておかなければならない。

その点今見つけたこの少女は浅倉のお眼鏡に叶う存在と言えた。

以前浅倉はフェリーで発生したミラーモンスター事件に関わり、唯一の生存者である目の前の寝転がっている子供と、同じくらいの年の少女を囷として利用したことがある。

加えて少女は命に別状はないとはいえ小さくないケガを負っており、歩くぐらいはできそうだが大きな身動きは取れない。

つまり自分から逃げられない。キープとしてはうってつけである。

そんな都合のいい存在を、みすみす餌としてくれてやるつもりはなかった。

「まずは一人か…」

出遅れたとはいえ大局的には幸先のいいスタートとなり、イライラも多少収まる。

薄く頬を歪ませて、浅倉は少女を米俵の様に肩へ担いだ。



「う、ううん…」

可愛らしい声を上げて、アリス・カータレットは目を覚ました。

何だか悪い夢を見ていた気がする、後知らない天井だがここは何処何だろう——そう思い目を擦ろうとしたら、

こめかみに鋭い痛みが走った。

「うえ」

恐る恐る手で触って確認すると、手が赤く染まった。

丁度、夢の中で白い鬼に痛めつけられた場所がだ。

「痛ッ！な、なにこれ……！」

状況が正しく認識できない。ここは何処なのか、何故自分が怪我をしているのか。

まさか、さっきの夢が……と考えて軽くパニック状態に陥る。

取り敢えず、今まで寝ていたベッドの枕元にあった救急箱を空けて消毒し、包帯を巻く。

酷く傷んだし、ミイラ男の様に不格好だったが、取り敢えず止血はできた。

「此処、どこなの？夢の中の場所でもないし、誰かの家みたいだけど……」

ベッドから降りて恐々と辺りを伺う。

すると、ずぞぞッ！と麺を嚼るような音が聞こえてきた。

どうやら、誰かいるらしい。

知り合いならよい。でも、あの夢の中の白い少女や学ランの少年の様に怖い人だったら……

まだふらつく足で廊下を通って、寝室からキッチンの方へと歩く。

そして、通路の陰から中の様子を見ようとして……金髪の男と目が合った。

「……起きたか」

「ひえっ……あ、あの、貴方、は？」

「お前と同じ参加者だ、鬼ごっこのな」

アリスから見た金髪の男はどう見ても友好的な存在とは思えず。

目を合わせないように傍らを見れば、『浅倉』と銘打たれたデイパツクがあった。

それを見た時、アリスは二度ほど自分に流れる血液の温度が下がったのを感じる。

何故なら、そのデイパツクは自分も持っていたからだ、さっき見た悪夢の中で。

でも、そのデイパツクは今日の前にあって。

「あ、あ……」

夢ではなかった。

その事実に出る声は声にならず、膝はかつてないほどに震えだした。

目じりに涙が浮かび、噛み合わない歯は気持ちの悪い演奏会を奏でる。

しかしそんな少女の恐怖を浅倉は忖度しない。ずんずんと詰め寄って詰問する

「一応聞いておくが……お前、『子』だろうな」

「えっ!? えと、えっと……わ、私は……」

言葉に詰まる。だって全てが夢の通りなら彼女は子ではなく『親』なのだから。

正直に伝えるべきか否か、迷いと緊張が駆け抜け彼女の本能がけたましい程にエマーゼンシーコールをかき鳴らす。

正解は二つに一つ。外したら待ち受けるのは先程受けた暴力の嵐。ぎゅつと目をつむって、夢中で答えた。

「は、はい……！そうです。目が覚めたらこんな場所にいて、信じてください！」

少女は嘘をついた。生き残るための嘘を。ふるふると震えながら、浅倉の反応を待つ。

その間二十秒ほどだったが、彼女が人生で感じた最も長い二十秒の記録は間違いなく更新しただろう。

やがて、浅倉が「チツ」と舌打ちをして、アリスはびくりと体を震わせる。

嘘をついたのがばれてしまったのか。じゃあ、これから自分は――

緊張がキャパシティを超えて、叫び声を上げそうになる。

そうなれば間違いなく浅倉の逆鱗を撫でることになったと考えれば、彼女は幸運だったと言えるだろう。

その前に、ぷうんとソースのいい匂いが彼女の鼻腔をくすぐって、叫び声が喉の奥に引っ込んだのだから。

瞼をゆつくりと開くと、この民家の物と思わしきカップ焼きそばが男の手から突き出されていた。

「……食うか？」

震える手でスチロールの容器を受け取る。さっきの答えは、正解だったのだろうか。

本当は夜に焼きそばなど女の子として言語道断だが、浅倉の手前拒否することもできず。

仕方なく啜った麺の味は、意外と美味しかった。

(でも、やっぱり怖いよ…シノ、助けて)

今回は幸運にも親が与えてくれた生来の容姿で切り抜ける事ができた。

でも、もしばれてしまったら、この怖い浅倉という人は自分をどうするのだろうか。

焼きそばもくれたし…誠心誠意謝れば許してくれるだろうか――

…そんな決して訪れることのない幸運を夢に見つつ、少女はまた焼きそばを口へと運んだ。

【E―07／01時25分】

【アリス・カータレット@きんいろモザイク】

〔役〕：親

〔状態〕：顔に打撲傷。額から出血（止血済み）

〔装備〕：

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：元の世界に戻って、みんなで修学旅行へ行く

1：とりあえず浅倉さんと話す。でも、嘘がばれちゃったら…

2：親だと信じてくれるかな…

※その他

※アルシアの顔を把握しました

※桐山の顔を把握しました

※アルシアと桐山を鬼役だと思っています

※原作での修学旅行エピソード前からの参戦です。

【浅倉威@仮面ライダー龍騎】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、イライラ（極大）

〔装備〕：王蛇のカードデッキ@仮面ライダー龍騎

〔道具〕：手鏡

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し。

1：アリスの他にもう一匹子を見つけてキープする。

2：北岡が居たら殺す。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

アリスを『子』だと思っています。

第四二章 Peace of Mind (蕨、ジエイソ、DIO)

Peace of Mind

「WRRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!!」

猛烈な勢いで！ 横から『タンクローリー』が突っ込んで来たッ！

「!!」

灯台の下、殺し合いを始めるべく対峙していた花酒蕨とジエイソンは、咄嗟に左右に跳び離れる！

この程度の襲撃に反応出来ない二人ではない！

「鬼か、狂人か？ それとも両方かの！ ひよひよひよひよ！」

タンクローリーは急ブレーキ！ 荷台が大きく折れ曲がるジャツクナイフ現象を起こす！

鰐の尻尾めいた薙ぎ払いを、蕨は高く跳び上がって難なく回避！

空中でひらりと縦回転し、荷台の上に跳び乗り、運転席の上へ！

「どちらでも構わん！ 敵は確実に殺しておくに限るぞよ！」

運転席の天井に、上から刀を突き刺す！ しかし……手応えなし！

さつきまで確かにいたはずの運転手がいないッ！

さらに、急にガツシりと、自分の身体が何者かに押さえつけられる

！ 動けない！

「!？」

罨か！ このまま灯台にぶつけ……爆発させて殺す気か！

そう思った瞬間、タンクローリーは灯台に激突する直前で急停止！

そして……背後に気配！

「気に入った……殺そうとする一瞬……汗もかいていないし呼吸もみだれていないな 冷静だ……」

ブワアツ、と蕨の全身に冷や汗が噴き出る。こいつは……ヤバイ！

圧迫が消えた。刀で背後を薙ぎ払うが、すでにそこにはいない。振

り返った眼の前、灯台の壁に……真横に立っている。

その傍らの空中に……幼い子供と、ヘルメットを被った学生らしき少年が、浮かんでいる。

少しして、彼らは地面にゆっくりと落下した。生きているが、動かない。気絶しているようだ。

「私の連れだ……少し眠ってもらった。さて……レディ」

ふわり、と彼は、金髪で体格のいい男は、停止したタンクローリーの荷台の上に降り立った。悠然と、平然と。

「君も私の仲間にならないか？ 君は美しく、優れた戦闘力の持ち主……殺すのは惜しい」

身体が……動かない。震え、畏怖し、魅了され、威圧されている。なんだこれは。カリスマというやつなのか。

「安心して……そんなに怖がらなくていいんだよ。私の名は『DIO』……『親』の役さ。友だちになろう。名前はなんというのかね？」

ヤツが話しかけてくる言葉は、なんと心が……安らぐんだ……危険な甘さがあるんだ……だからこそ、恐ろしい!!

「……花酒……蕨……」

声を絞り出すようにして、名乗る。名乗ってしまう。瞳から光が失われていく。

「ふむ、いい名だ、蕨。君の、この鬼ごっこにおける『役』は？」

「……親……の、役……です」

『親』と称しているが、こいつは確実に『鬼』だ。今見えた。唇の中に牙が。

それに、彼の傍らに何らかの気配がある。さつき彼らを抱え上げ、地面に下ろしたのは、そいつだ。

自分を押さえつけ、タンクローリーを無理やり急停止させたのも、そいつだ。姿が見えないが、いる。

「蕨。このDIOの仲間になってくれるかな？」

「はい」

片膝をつき、刀を置き、頭を垂れる。こう答えるしかない。断れば殺される、いや……見捨てられる。この方に。それだけはいやだ。

……いや、何を考えている。こいつは鬼だ。逃げろ。離れる。逃げろ！動け！

◆ D I Oは蕨をひざまずかせたまま車を降り、もうひとり……ジエイソンの方へ向かっていく。

彼は既に何度も死に、黄泉還り、不死身の存在と化している。紫外線で塵と化す程度の吸血鬼などものの数ではない。

ジエイソンは躊躇せず、唸り声をあげ、この男を殺そうと向かってくる。D I Oは余裕の表情を崩さない。

「話が通じそうにもないか……ならばしょうがない」

肩を竦めたD I Oは、振り下ろされるマチエットを左手で払い除け、右手の人差し指をジエイソンの眉間に突き刺した。

「私の下僕になってもらう」

ズキュウウン！ D I Oの指先が蜘蛛のように変形し、鋭い針が伸びてジエイソンの脳みそに食い込むッ！

これは『肉の芽』！ 吸血鬼D I Oの細胞から成る脳のコントローラー！

D I Oに対して、ヒトラーに従う兵隊のような、邪教の教祖に憧れる信者のような気持ちを呼び起こすッ！

「GUUUUUUU……」

ズシン。ジエイソンの巨体がその場に崩れ落ち、膝をつく。そのまま平伏し、D I Oに忠誠を誓う。

「よしよし。これで手駒は二つ増えたというわけだ……。こいつの名前はわからんが、どーでもいいことだな……運転手にでもするか」

D I Oはついでに、ジエイソンが腰にぶら下げていた支給品入りの紙袋を奪う。これを持っているということは、当然こいつは鬼だ。

くるり。後ろを振り返ると、蕨がない。逃げたか。いや……心配は、上。灯台の上だ。行き止まり、どん詰まり、逃げ場なし。無駄。

そこへ逃げるわけもない。あるいは——何か、誰か見つけたか。そいつを助けて、隙を見て飛び降り、逃げるか逃がすか。無駄。

否。ホージョーとかいう、あの子供がいらない。蕨が拐って逃げたか。D I Oは笑う。活きが良い獲物は面白い。

「いいだろう。降りてこい蕨。私はここで待っているぞ。灯台の上にはこいつを向かわせよう」

ぱちり。指を鳴らすと、ジェイソンが立ち上がり、灯台の扉を蹴り破る。

恐れをなして戻ってくればよし。こいつを切り伏せ、堂々と脱出してもよし。殺される程度ならそれまで。

刃向かって来ても、我が『ザ・ワールド』に勝てる能力の持ち主ではない。無駄だ。肉の芽を埋め込み、改めて下僕にしてやろう。血を吸ってもいい。

「安心しろ。殺しはしない。手駒は多いほうがいいからな・・・フッフフハハハ」

【I—10（灯台）／01時25分】

【花酒蔵@武装少女マキャヴェリズム】

【役】：親

【状態】 健康、D I Oへの畏怖

【装備】：太刀・棒手裏剣

【道具】：防弾ベスト・閃光弾、豊穰礼佑（気絶中）

【思考・行動】

基本方針：親か子と合流する。

I：D I Oから逃げる。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。ルールの本質に気が付きました。

豊穰は「はいぱーびじょんだいありー@未来日記」と「スマートフォーン（子）」を持っています。

【ジェイソン・ボーヒーズ@13日の金曜日シリーズ】

【役】：鬼

【状態】：健康（肉の芽）

〔装備〕：アイスホッケーマスク、マチエツト

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：D I Oの命令に服従する。

1：灯台の中に潜む者を見つけ、皆殺しにする。

〔D I O@ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース〕

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：タンクローリー、スマートフォン（鬼）、『ザ・ワールド』（スタンド能力、時間停止は五秒ほど）

〔道具〕：四次元つぼい紙袋（不明支給品3つ、ジェイソンから奪取）

〔思考・行動〕

基本方針：親として振る舞い、子を集めて全員捕まえる。親や他の鬼は血を吸うか下僕とする。

1：仮面の大男（ジェイソン）を蔑にけしかけて様子を見る。

※その他

足元に織田敏信が気絶させられて転がっています。

第四三章 ランナウエイ（早人、しのぶ、アルシア） ランナウエイ

町の近くまで来たアルシアは無言で周囲を見回す。取り逃がした少年と少女の姿は何処にも見えない。

脚の再生、アリスの搜索、武器の確保と、時間を食った事が災いして、アルシアは真つ直ぐ西に向かった桐山を完全に見失っていた。

獲物を二人とも逃したのは失態だ、主人が知れば落胆するだろう。

「……………」

失態を挽回する為にアルシアは暫しの間考える。

「……………」

只々主人の考えた通りに動くだけだったアルシアにまともな考えが浮かぶ筈も無い。

嘆きの鉦が無ければ、無力な参加者を装つての不意打ちも可能だが、主人から授かった祭器を捨てるなど有り得ない。

考える事をやめて、獲物を求めて何処かへ行こうか決めあぐねていたアルシアの耳に、破碎音が聞こえた。

ペニーワイズに一撃を受けたしのぶは気絶したままだ。応急処置はしたが、起こさない方が良さだろう。

何か行動するにしてもしのぶが目を覚ましてから。そう決めた早人は、家の中に籠城する事にしたのだった。

玄関は鍵を掛け、動かせる物を扉の前に積み重ねてある。

窓は…雨戸を閉めようとしたが、他の家が雨戸を閉めていないのに、この家だけ雨戸を閉めていては、目立ってしまう為にそのままだ。

それに、玄関を塞いだ今となつては、雨戸を閉めて仕舞えば家から

脱出する事が困難にぬる。やはり窓は鍵を掛けるだけにしておくべきだろう。

一通り準備を終えた早人は窓から外に出てデイバッグの中身検める。

隼人は履き替えた靴に目を落とす。母が持っていたデイバッグに入っていた三つの品物の内、巨大な手甲は使えそうに無いので放置、早人にはやや大きい盾と、ツマミのついたかなり小さい靴を何とか履いた。

歯車や砂が内蔵されている盾はギミックの解明に時間がかかりそうなので、靴から先に調べる事にする。通常の靴には無い、このツマミに仕掛があるのだろう。

ツマミを回してみるが何も起きない。少し考えて、手近な石を蹴り飛ばすと、ライフル弾もかくやという勢いで石が飛んでいき、

隣家のガラスを粉碎したのみならず、家屋を貫通して屋根から飛び出して行った。

「ゲエー！ー！！」

あまりと言えばあまりの威力に驚愕した早人だが、即座に身を翻した。あれだけの音を立ててしまったのだ。鬼が近くに居れば必ずやって来るだろう。

慌てて家の中に入り、窓を閉めて鍵を掛け、カーテンを閉ざす。

そしてカーテンの隙間から外を窺っていると、果たしてソイツはやって来た。

ぱつと見は貫頭衣を纏っただけの少女。しかしてその矮躯では到底保持出来ない筈の巨大な鉈を持っている。

「お、鬼か？」

少女は早人が放置した手甲を拾うと左右を見回す。付近に誰か居ないか探しているのだ。

一瞬の間、息を殺して様子を窺う早人と、少女の視線が交差する。

少女の顔を真正面から見る事になった早人は総毛立った。

早人の知る二人の鬼。吉良吉影とペニーワイズ。この両者と比べると明らかに少女は

『異質』だった。

あの二人には歓喜が有った。憤怒が有った。ドス黒くはあったが、確かに『意志』と『感情』が有ったのだ。

だが、今現在早人の視界に映る少女には『何も無かった』。

『黄金の精神』も『漆黒の意志』も、喜怒哀楽のいずれも見出せぬ『虚無』が顕れた顔に早人は心底怯えた。

何とか悲鳴を押し殺し、少女がこのまま気付かずに立ち去ってくれ事を祈る早人だが、現実是非情で有る。

少女の左手が霞むと飛来した刃が窓ガラスを破碎する。

「う、うああああああああ!!!」

絶叫しながらも早人がドアの方へと転がった直後、早人の居た辺りの壁が撃砕された。壁だった構造材が室内に散乱し、破壊エネルギーの余波で家全体が激しく震える。

「ひいいいいいっ!」

家屋が倒壊してもおかしくない程の震動に、早人は頭を抱えて蹲った。震える手が扉へと伸びる。

散乱させた瓦礫やガラス片を踏みしめる音がした。鬼が近づいて来ているのだ。

「うああっ!うあああああっ!」

鬼が見せた凄まじい破壊力と、未知の異質さに怯えきった早人は逃げ出そうとして――。

「ハッ!?ママッ!」

心が折れそうになったが、扉の向こうに居る母の事を思い出して顔を上げた。

此処を通せば、此奴は必ずママを殺すツ!だったら此処で此奴は必ず殺すツ!

鬼に向けられた早人の顔には苛烈な強い意志が宿っていた。

扉に背を預けると、背負ったランドセルを胸に抱え、猫草を鬼へと向ける。これで一撃を加えた後、このシューズで蹴り飛ばすツ!

「キシヤアアア!!」

光による刺激に猫草が空気弾を放つが、少女は右腕に装着した手甲で払いのけてしまった。風船の割れるような音が室内に響く。

無言のまま少女は左手のみで保持していた巨大な鉈を両手で握り、早人の恐怖を誘うように、緩慢な動きで振り上げる。

盾で受ける？不可能だ。受けて持つとは到底思えないし、盾が持つたとしても身体が砕ける。

早人の進退窮まったその時――。

「早人っ!？」

轟音と震動に目を覚ましたしのぶが、早人のいる部屋へと駆けつけ、ドアを蹴破らんばかりの勢いで蹴り開けた。

少女の視線がしのぶに向けられた瞬間!!

再度放たれた空気弾!猫草の野生の本能が、敵と認識した少女の隙を見逃さず、攻撃したのだ!!

至近距離からの不意打ちで放たれた空気弾が、少女の顔面に向けを弾けさせる。

「う、おおおお!!」

千載一遇の好機を逃さず、早人の蹴りが少女の腹部を捉え、射出された砲弾の様に宙を飛んだ少女の身体は、向かいの家に激突。その勢いで家屋を倒壊させた。

「は、早人!？」

「逃げるよ!!ママッ!」

しのぶの手を取り、早人は破砕孔から外に出る。これだけの騒ぎだ、他の鬼がやってくるとも限らない。

【E―07／01時27分】

【川尻早人@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：子

【状態】：健康、右手に切り（治療済み）、ペニーワイズへの怒り、少女（アルシア）への恐怖

〔装備〕：『水晶』、ランドセル、キック力増強シューズ@名探偵コナン、ほむらの盾@魔法少女まどか??マギカ

〔道具〕：猫草@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない、救急箱

〔思考・行動〕

基本方針：母を守り、帰還する

1：ペニーワイズ、鬼に警戒。

2：親か子と合流する

3：ここから離れる

※その他

※各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。

※自分の役を子であると推測しています

※ペニーワイズの『変身する能力』を認識しましたが、詳細は把握していません

※少女（アルシア）を認識しました。鬼だと思っています

※しのぶの支給品からキック力増強シューズとほむらの盾を装備しています。

ほむらの盾に関しては能力を知りません

【川尻しのぶ@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

〔役〕：親

〔状態〕：ダメージ（小）

〔装備〕：ー

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りたい

1：早人……

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握

アルシアは瓦礫の下で遠去かる二人の足音を聞いていた。瓦礫の下から這い出るには時間がかかるが、あの二人はそれほど足が速くない。逃げた方向も足音から判別出来る。追いつくのは難しい事では無い。

アルシアは二人を追うべく、身体を圧迫する瓦礫を退かし始めた。

※粉碎王

手甲の臣具。文字通り装着者に対象を一撃で粉碎する怪力をもたらすが、使い方を誤ると自身もダメージをうける。

尤もアルシアはデメリットを無視して粉碎王を使用できるが。

相手を直接叩く以外にも巨大な瓦礫を投げ飛ばす、拳圧で相手を吹き飛ばすといった使い方も可能。

【E-07 / 01時27分】

【アルシア@白貌の伝道師】？ 「役」：鬼

【状態】 健康 魔力消費（中）

【装備】：嘆きの鉈・群鮫@白貌の伝道師、紐付き柳葉刀@BLACK LAGOON、粉碎王@

アカメが斬る！零

【道具】：スマートフォン（鬼）

【思考・行動】

基本方針：出逢った全てを殺す

1：桐山を追う。殺したら死体を回収する

2：次からは獲物の脚を最初に潰す

3：この付近に居る獲物を追う

※その他・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※桐山の顔を把握しました

※アリス・カータレットの顔を把握しました

※川尻早人を認識しました

※川尻しのぶを認識しました

第四四章 地図にない学校（今泉、リク、狛枝、しんのすけ、エスター、グレーテル、金谷、綾波）
地図にない学校

「ハア……着いたあ。」

膝に手をやりながらため息を吐く、よれよれのスーツに広いデコの男、今泉慎太郎。彼が警察官だと一見してはわからないほど——というか警察官だと言われて警察手帳を見せられたとしても疑わしく思われるほどにオーラが無いが、これでも一応刑事。彼はこんな奇怪な場所であっても子供を保護するために、学校へと急ぎ走ってきたのだ……直線距離で100m程なのに安全そうな道を往くためぐるりと北から回り込んだりもしたが。

さてほとんどの学校がそうであるように、今泉が辿り着いたこの学校も北が校舎で南が校庭という配置になっている。車両が入れるように大きな門が設置された南に対し、北は相対的に小さな、こじんまりとした門があった。今泉は声の主を探してチラチラと見るが、いない。そのまま視線を上げる。校舎の2階3階と目をやったところで、屋上で動くものを見つけた。「おーい」と言っても実際にはカラカラに掠れた小さな叫び声だったが——で呼びかければ、人影は周囲を見渡すような動きをする。その人影と目が合うのに時間はかからなかった。

「古畑さん、ですか？」

少しして今泉の前に現れたのは、没個性的な少年だった。小学校の高学年ほどの年齢という印象はこの場所から来る先入観があったとしても妥当であろう、平均的でクラスでも嫌われてるわけでもさりとて好かれてるわけでもないような、物語の背景に写り混むエキストラのような、そんな少年だ。そんな少年は、駆け下りて来たのか息を乱して校舎の扉を開けた。ここにきて今泉は自分が古畑と名乗ったことを思い出して「そう、です」と告げる。目の前の子供より緊張していた。

「……『鬼』、ですか？」

「いや、その、『親』、らしいんだ。」

「親……？」

「その、桜井リクくんだよ、入ってもいいかな！」

門を隔てて、二人の荒い息遣いが重なる。今泉としては目の前のゴールに一刻も早く駆け込みたかった。

ハッキリ言うが、普段の今泉であればここまで来れない。こんな異常事態に巻き込まれたとなればどこか安全そうな場所に隠れて警察が来るのを待つような、ホラーものでいう序盤で死ぬ人間の精神性を持つのが彼だ。そんな彼がここまで来れたのは、『子供が学校にいる』という事実があったからだ。子供ならば襲われないし、襲われたとしても逃げられる。誰かと一緒にいるというならば安心できる選択肢だ。しかも学校という、頑丈で様々な設備がある建物が、籠城に適した『城塞』があるとなれば、そこまで逃げればなんとかなると思える。そこに警官としての申し訳程度の自負心で『子供を安全な場所に保護する』という自己暗示をかけようやくここまで来たのだ。

そしてそんな今泉を見た少年、桜井リクの感じた感覚は――

(この人は、『鬼』だ！)

――目の前の人物が危険な存在であるという直感であった！

脳ではなく、心で。論理ではなく、肌で。リクは目の前のハゲかけた中年男性が危険極まりない存在であるという確信を覚えた。それは言葉にできない、形容し難い感覚。まるで百万匹のゴキブリを見たときのような、現実にはありえないであろう光景すら想起させるような、総毛立ち。今までの十余年の人生で体感したことのない、名状し難き感情。

そして真に驚くべきは――この直感、単なる勘違い！当然だが、今泉は『鬼』ではない！挙動不審！それが招いた、致命的な第一印象の悪さが原因！

しかし、その誤解が解かれる手段は無い！自分が疑われているとはつゆほども知らぬ今泉と、『鬼』に『鬼』だと言うはずもないリク。そしてこの鬼ごっこという環境。そのどれもが相互理解を阻害する。

(このスマホのことは黙っておこう……この人には『知られてはダメ』……そんな気がする。)

疑心とも言えぬ確信的な不信任は、リクの口を閉ざさせる。彼がそのポケットに入れた手に持つのは、彼の支給品であるスマートフォン。時刻が1時を回り使えるようになったそれには、チャットが投稿されていた。

「こんにちは、今学校にいます」と。

「…あ、そういえば。」

「どうしたんだい？」

「これ、もうすぐ使えるようになるみたい……」

「……それって、君のじゃないの？」

「気がついたら持ってたの。」

「支給品ってことかな……良いなあ、僕なんて変なおもちやの入ったアタッシュケースとボールだったよ。」

H-7からもうすぐG-7に移ろうかというあたりで、綾波レイはスマホを取り出し狛枝風斗へと見せた。

特に行くあてもなくとりあえず歩きながら情報交換をしていた二人、時刻が1時に迫りその存在が使用可能になるのを綾波は思い出し。そして見せれば、「電話は、使えないか」「待つしかないみたいだね」となる。そして二人が歩く先に大きな建物が見えたところで、その時を迎えた。

桜井リク「こんにちは、今学校にいます」

「学校か。あれかな？」

拡声器か何かで話す声が聞こえてくるのとほぼ同時、1時になって一分と経たないうちに投稿があった。どうやらこのスマホ、ラインのようなグループトーク機能だけが使えるようだ。他は時刻と電池残量だけが表示されるというわびしいもの。画面をいじると、グループに入っているメンバーの一覧に切り替わる。顔写真のアイコンと名

前、それが九つ並んだ。

綾波レイ

関織子

豊穰礼佑

プルツー

たえちゃん

源元気（げんげん）

グレーテル

桜井リク

ヘンゼル

「一番上だね。あいうえお順ってわけじゃなさそうだけど。知り合いはいる?」

「いいえ。」

「うーん……ま、これで他の『子』の子たちと連絡ができそうだね。何か書いてみたら?」

「……」

「なんでもいいんじゃないかな。」

「……」

綾波レイ「こんにちは」

「……うん、いいんじゃない。」

「さてと」と言って狛枝はデイパックから彼の支給品を取り出す。ロゴのついた蓋を開けると、中に入っていたのは金属製のベルトのようなものと、細々とした機械。その機械のうちの一つを手にとると狛枝は二三弄り、ややあって円筒形の形をしたそれは底の部分から赤い光を発した。

「これなら、レーザーポインターとして使えそうだ。」

「どうするの?」

「ちよつと距離があるけど、あそこの学校からでもここは見えると思うんだ。その桜井リクっていう子がいるなら、ライトで合図を送れば気づくはずだよね。」

そんなものか、と綾波は思った。学校からの呼びかけが続くなか、狛枝がアタッシユケースから取り出した懐中電灯みたいなものをペンライトのように振るのを眺めながら綾波はスマホを見る。少しして、変化が訪れた。それは車のエンジン音だった。

「よつ、オラ野原しんのすけ。」

「こんにちは、しんのすけくん。僕は狛枝風斗。こっちは綾波レイ。いつても、さっき初めて会ったんだけどね。」

十数分後、二人はG-8の交番近くで三人の子供たちと出会っていた。呼びかけの後、自分たちの近くを通り過ぎて行つた一台の軽トラ。チラリと見えた人影は子供と思われるもので、声だけしてライトの合図に気づかなかつた人間のいる学校よりもそちらを追いかけるのを優先することを二人は少々迷うも選んだ。さすがに移動速度の差はいかんともしがたくすぐに見えなくなつてしまったが、幸いなことに先方は道に迷つていたようで、チラチラと視界に入り音と排ガスを出すそれに辿り着くことに成功した。しかも聞けば、行き先はどちらも学校。

「学校なら反対つかわだよ。案内するさ。その代わり僕達も車に載せてほしいんだけど……」

こうして5人の学校を目指す人間が集まった。

（――！・気絶してたのか、今……!?!）

ハッ、と顔面と両腕に走つた痛みで意識が覚醒する。地面の臭いと血の臭い、そして腕から脳へと走る熱さと寒さと激痛が活を入れ金谷章吾を立ち上がらせた。

彼が佐山流美との戦いを終え移動を始めてからはや十数分、その身に刻まれた傷は深刻なダメージを彼にもたらしていた。両腕をそれぞれ反対側の両脇に挟むことで動脈を圧迫し止血してはいるが、その

程度では失血はどうにもならなかった。血液は一秒毎に一滴、身体から流れに流れてコップ二杯分に達しようかとしている。早急に適切な止血と輸血が求められるだろう。

(ク……目のかすみが悪くなってる……平衡感覚も……これは……)

荒い息をすれば傷を刺激するため努めて呼吸を安定させるように注意を図れば、気になるのは自分の状況。章吾は自覚症状が危険な領域へと向かっていくのを感じながら足を急ぐ。視界は端から視野が黒くなり、中央は白くモヤがかかり、色彩が消えていく。聴覚はプールの中にも潜っているかのように遠くくぐもる。そして徐々に腕からは痛みが引いていく。

(引く？なんで……痛みを感じてない……?)

血の気が引くのを感じた。失血で文字通り血が引けて、痛みも感じなくなつて、それすらも気づかないところであつた。意識が朦朧としている。非常にマズい。だがどうすることもできない。ただとにかく誰か手当てができそうな人と出会えるよう望み歩くだけ。出会わなければ、死。それは、それだけは避けなくてはならない。そんな執念が彼にチャンスを引き寄せた。

「やく……らい……？」

どこからか声が聞こえた気がした。声色も言っている内容も分かったものではないが、一つだけ聞き取れた。自らを桜井と名乗る声だ。

章吾にとつて桜井と言えば、隣のクラスの桜井悠だ。彼もまたこの間の鬼ごっこに巻き込まれた一人だ。その桜井がこの島にいるというのも不思議ではなかった。なぜならこれは鬼ごっこなのだから。

それは奇妙な勘違いであつた。桜井悠と桜井リク、命懸けの舞台を潜り抜けた男子小学生という二人。その二人が同じゲームに参加すれば、勘違いする人間も出るというものであつた。

(行かないと……)

足を前へと向ける。行き先は決まつた。辿り着くべき場所はハッキリした。ならそこに向かうだけだ。

もはやなにも判然としない意識で、章吾の足は学校へと向かった。

そして歩き始めて小一時間、ほとんど見えなくなった視界が遂に建物とそれを取り囲むコンクリートを捉える。手で触る、ざらついた感触、これだ。

(ここだ……ここにいるぞ、俺は！助けてくれ！)

だがそれまでだった。声が出ない。足が動かない。立ち続けることができない。もはや平衡感覚は消失し、天地がひっくり返った覚えもなく、いつの間にか章吾は地面に転がっていた。

時間切れだった。死に場所が知り合いの近くになっただけだった。声も出ないし身体も動かないし、できる行動は何一つ無かった。ただただなんの刺激も無かった。手も足も目も口も耳も鼻も肌もなにもかも。全て、全て「ダメ」だった。そんな章吾の中で唯一生きていたのは、心だった。

(死ねねえ……)

(……こんなところじゃ……)

(……終われない！)

章吾は絶叫していた。そのことに本人は気づかなかった。喉も声は発していなかった。ただ単に横隔膜と肺と気管と声帯と口腔が、獣のような咆哮を発していた。

そしてその咆哮を最後に、金谷章吾は闇に落ちた。

「そういえば粕枝くん、君の支給品はなんだったかな？武器とか、銃とかそういうのは……」

「ボールとおもちゃの入ったアタッシュケースでしたよ。どうぞ。」

「え、いいの!？」

「重いしかさ張るんで。これがさつき使った使ったレーザーポインターで、こつちがカメラで……」

「あ、さつきの赤い光はこれか。」

「古畑さんは？」

「僕？僕は……これ。」

「拡声器？」

「酷いよなあ、そこら辺に落ちてるとおんなじようなもんが配られるなんて……」

「僕ももう一つはサッカーボールで、ほんと、こういうのツイてなくて……」

「それを言うなら僕のほうが……」

「いや僕のほうがゴミクズで……」

「いやいや僕のほうがゴミクズが大きくて……」

「あの二人って、もしかしてスゴいネガティブなのかな……」

「わからないわ……」

（マトモな『親』は私だけか。）

「どったのエスターちゃん。なんか難しい顔してるゾ。」

「なんでもない、しんのすけ。」

「フフ、楽しい集まりね。」

幸運にも学校に集まった七人の参加者。

『親』である今泉、狛枝、エスターと『子』であるリク、綾波、しんのすけ、グレーテル。

彼ら七人は2階の理科室に集まり情報交換をしていた。と言っても、ほとんどの人間が何が起こったのかを理解していないため、『親』として今泉と狛枝がルールを説明しただけで、それすらも二人のどちらもデイパックに書かれたルールに不幸にも気づかなかつたためあやふやなものであった（そしてもちろんエスターは黙っていた）。そんな七人は今度は支給品の開示をしていた時のこと、前触れなく野獣のような吠え声が聞こえた。

（良い声で鳴くのね。）

「な、何だい今の声!? 狛枝くん!」

「僕に言われても……とりあえず、みんな、見に行かない?」

「ええ。」

グレーテルは一人その声に込められた感情を理解し薄く笑うと狛枝に同意した。彼女にとって章吾の咆哮は聞きなれたもの、それに多分に含まれる負の感情は容易に読み取れるものだ。間違いなく手負

いの、死にかけの子供がいる。それを理解した彼女は銃の入る袋を氣持ち強く握った。

謎の声の搜索体制は、古畑こと今泉は学校の東側から、狛枝は西側から、それぞれ『子』の役を伴い行うこととなった。『子』を理科室に残すということも考えられたが、今泉が子供たちだけでは危険だと極めて強く主張したため、どちらかと行動を共にすることとなった。

「グレーテルさんもこっちに？」

「あら？嫌だった？寂しいわ、貴方とは仲良くできそうだと思ったのだけれど。」

「ああ、ゴメンゴメン！僕みたいな人間と好き好んで一緒に何かしようとしてくれるとは思わなくて。こんなところで不謹慎かもしれないけれど、両手に花だなんて。」

ちなみに内訳は今泉側がリクとしんのすけ、そしてエスター。狛枝側が綾波とグレーテルである。もちろんグレーテルが狛枝側を選んだのは、そちらが声の主と接触する方だと踏んだからだ。本能的に今泉が声から遠い方を選んだのかそれとも不幸にも狛枝が死体を見つけることになるために何らかの力が働いたかはともかく、グレーテルとしてはより面白い方である狛枝と行動を共にするのも良い。

そして二組は30分になったら一度理科室に戻ることを確認し、それぞれ校舎で唯一鍵が開いている玄関から逆方向に進み出した。外は薄暗いが見えないわけではない。狛枝はアタッシュケースを渡す代わりに今泉から受け取った拡声器をイジリながら歩き、綾波とグレーテルの二人もそれに続く。彼らの鼻に異臭が感じられたのは、校舎から少し離れてすぐのことであった。

そして彼らは発見した。両腕から血をしとどに流し、服を真っ赤に染めた、リクと同じぐらいの少年を。「古畑さん」と狛枝が拡声器で校舎の逆方向に呼びかける。以外か否か、その場の全員は冷静だった。血塗れの人間を見ても落ち着いて生死を確かめ息があることを確かめる。

そして、最後に、狛枝がこちらに向かってきた今泉達に保健室から担架を持つてくるように言うため、ほんの少しこの場を離れて校舎へ

と近づいた時――

綾波レイの喉に深々と刃物が突き刺さった。

それは一瞬だった。グレーテルが神社で集めた後にスカートの中に隠し持っていた古紙を綾波の喉に押しつけ、その体が困惑で強張ったところに同じく持ち出していた刃物を古紙の上から突き立てる。ただそれだけ。

(なに、が……)

綾波の目の前で笑顔で口の前に指を立てながら、グレーテルが刃物を引き抜く。吹き出る血と声にならぬ音は古紙が止める。そしてグレーテルが近くの木の高枝に刃物を投擲し、それが葉に隠れるように、またも突き立てられたのを目で追った綾波は叫び声を聞いた。口を喜色に歪めながら、絹を割くような声でグレーテルが叫んでみせていた。

「こ、これは……!」

「わからないの……突然レイが倒れたと思ったら、こんなことに……!」

グレーテルの叫び声で振り向き異変に気づいた狛枝に、グレーテルはオロオロと言つてのける。綾波は見たことがあまりないが、他の人間ならドラマの子役のようなだとその演技を表現するかのような、見事な芝居。そして同様に駆け寄って来る古畑達と合わせて六組十二の目が綾波へと注がれた。

「死、死んでる!?!」

「まだ息はあるわ!何か言おうとしてる!」

(貴女が刺したのに。)

「手当てが必要だ!傷口を抑えて!」

「わかったわ!」

(喉が締められて……息が……)

「レイちゃん!レイちゃん!」

「しんのすけ離れて!」

(……)

綾波の状態に恐慌するもの、応急処置をしようとするもの、その体

にとりつき揺さぶる者、その誰もが気づかない。何者かに襲われたらしき綾波に注がれて気づかない。綾波の傷口を抑えるフリをして頸動脈を締めるグレーテルの、その涙目の下で三日月形に歪む口元には気づかない。

だが綾波は最期の力を振り絞りグレーテルを跳ね除けた。強引に立ち上がる。言わなければならない、行動しなくてはならない。ここに一人の鬼がいることを伝えなくてはならない。そして言動で示した。

「……、……………！」

(声が、でない。)

声が出なかった。声帯を震わす酸素が無かった。話す言葉が思いつかなかった。脳を動かす酸素が無かった。動きで伝えられなかった。筋肉を動かす酸素が無かった。最後の酸素は、グレーテルを跳ね除けるのに使ってしまった。

(それでも……)

それでも、綾波は手を伸ばす。犯人を指し示す。

そしてその手がグレーテルに取られたところで、綾波はただの肉塊と化した。

「レイちゃん！返事してよ！」

「しんのすけくん、綾波さんは、もう……」

(まず一人ね。)

綾波が最期に伸ばした手を天使のように両手で包み込み、涙流れる頬に当てて俯くグレーテルは全力で笑いを堪えながら震えていた。

彼女が綾波を殺したのはなんてことはない、殺したかったからだ。動機はない。その殺しにはトリックもない。

ただ単に誰でもいいから殺したくて、思いの外大集団になってしまい殺しにくくなって、そこに死にかけの人間が現れたからまた殺そうと思って、二組に別れたから殺すチャンスだと思って、一瞬でも二人きりになったから殺した。それだけだ。

別に狛枝でも良かったし、この殺人がバレても良かったと思っ
てい。抜け目なく返り血を避け最後の悪あがきができないような殺し
方をし凶器も隠蔽したが、今この場で犯人として糾弾されることすら
望んでいた。そうなれば、一網打尽に蜂の巣にできる。狛枝達からは
役がどうか言われていたがそんなことは関係無いしどのみちルー
ル的にも皆殺しでさほど問題はない。つまり、『いつもどおり』で構わ
ない。結局彼女はそう解釈していた。

(刑事さん、貴方はどうするのかしら?)

グレーテルの前髪に隠れた目が古畑へと向けられる。彼女がこの
タイミングで殺したのには理由と言うほどではないが刑事の存在も
影響している。果たしてトリックも動機もない殺人をどう搜索する
のか、興味が湧いたのだ。

(さあ、鬼ごっこよ。)

グレーテルは静かに笑う。彼女は知らない。その刑事は古畑任三
郎なる男ではなく名警部ではないことを。彼が史上最底のワトソン
と呼ばれる無能であることを。

【G-07 (分校) / 01時29分】

【今泉慎太郎@古畑任三郎】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：警察手帳、拡声器@バトルロワイアル

〔道具〕：デイパック (555ギア@仮面ライダー555、サッカー
ボール@ホイッスル!!)

〔思考・行動〕

基本方針：可能な限り参加者を生還させる。

1：!?

2：親を探す。

3：鬼には出くわしたくない。

※その他

古畑任三郎と名乗っています。

「ルールの把握度」

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。
各役の人数・会場の地図は未把握。

【桜井リク@ラストサバイバル】

「役」：子

「状態」：健康

「装備」：スマートフォン（子）

「道具」：

「思考・行動」

基本方針：絶対に生きて帰る

1：!?

2：古畑さん（今泉）は信用できない。

※その他

今泉慎太郎の名前を古畑任三郎として認識しています。

「ルールの把握度」

制限時間を把握。

自分の役・各役の勝利条件を推測。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【粕枝風斗@スパーダングロンパ2】

「役」：親

「状態」：健康

「装備」：拡声器

「道具」：

「思考・行動」

基本方針：希望の為の踏み台になる。

1：!?

2：どちらかの陣営が希望になり得るか見定める。

3：セカンドインパクト……どうということだ？

※その他

プロローグ終了時からの参戦。

「ルールの把握度」

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。
各役の人数・会場の地図は未把握。

【野原しんのすけ@クレヨンしんちゃん】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：なし

〔思考・行動〕

基本方針：ネネちゃん家に行く。

1：!?

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

【エスター@エスター】

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：ハンマー、青酸カリ@バトルロワイアル

〔道具〕

〔思考・行動〕

基本方針：子のふりをして立ち回る。

1：!?

2：子として親の庇護を受けつつ、参加者の情報を集める。

3：制限時間が近づいたら、親を減らす。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【グレーテル@BLACK LAGOON】

〔役〕：子

〔状態〕：愉悦Σ（・ω・ノ）ノ

〔装備〕：BAR

「道具」：スマートフォン（子）＋不明（社務所で狭軌として使えそうなものを中心に回収）

「思考・行動」

基本方針：皆殺し

1：一応犯人じゃないように振る舞っておく。飽きたら銃を乱射したり？

※その他

「ルールの把握度」

制限時間を把握。

自分の役・各役の勝利条件を推測。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【金谷章吾@絶望鬼(っ)っ】

「役」：子

「状態」：気絶、左下腕10ヶ所・右下腕9ヶ所・左上腕6ヶ所・右上腕3ヶ所の包丁による刺し傷、失血（中・継続中）、精神的疲労（中）

「装備」：『式札』

「道具」：若干のお小遣いなど

「思考・行動」

基本方針：絶対に生きて帰る

1：何がなんでも生きて帰る。

2：自分以外の存在を搜索。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

佐山流美を『鬼』と誤認。

【綾波レイ@新世紀エヴァンゲリオン 脱落】

第四五章 擬宝珠檸檬は動かない (檸檬、蕨、5 t

h、ジエイソン)

擬宝珠檸檬は動かない

擬宝珠檸檬はこの世の終わりのような顔をしていた。

つい先ほど、迫り来る『鬼』を確認した。それは良い。いや良くはないのだがまだ良い。問題はその後だ。

突如現れたタンクローリーが突っ込んできて、『鬼』がそれに襲いかかって、何か良くわからないことになったあと別の『鬼』が来た。ただでさえ絶望的な状況だったのに『鬼』より強そうな謎の人物が出てきたりともう檸檬にはどうすることもできない展開である。正直失神しそうだった。でも耐えた。だがしかし当の『鬼』がついにこの灯台に踏み入ってきたとなればポツクリ気絶する運びとなった。

(！『子』か！)

一方その『鬼』こと、『親』の花酒蔵は、外見に似合わぬ身体能力で豊穰礼佑を抱えて灯台の中に入ると階段を駆け上がりドアを押し開けたところで自分を見て気を失った檸檬を発見した。

彼女がわざわざ灯台に入ったのには檸檬を助けるため、というわけではもちろん無い。というか彼女は別に灯台に誰かいると知って入ったわけではない。それは単純にD I Oの迎撃のためである。

車を持ち超スピードで動く人外相手に、開けた場所を走って逃げられるわけがない。となると逃げ場は一択、灯台である。狭い場所であれば足の早い動物がその脚力を活かせぬようにあの超スピードをいくらかは封じられる可能性がある。そうすればどうにか太刀打ちはできる……かもしれない。それに保護(拉致ともいう)した『子』が何かイイ感じのアイテムとか持つてる……かもしれない、というか持つてないと詰む。正直なところ他人の持ち物ガチャに賭けざるをえないところまで追い詰められているのだ。

まず何も無いだろうとは思いますがそれでも一縷の望みをかけて豊穰の身体を弄る。何か指に触れた、引き当てた、引き出す、出てきたの

は、スマホ。

(ハズレか。)

一応見てみるとチャットアプリのようなものが見えた。役に立つかはいまいちピンとこない。となると時間がもったいないので次だ。

再び弄る何か指に触れた、今度はデカイ、たぶんノート、出てきたのは、やっぱりノート、内容は。

『5 がつ 15 にち てんき くもり じかん あさ

でつどえんどー。』

(不吉！)

見なきやよかった。なんだこの糞日記。

余計な時間を食っている間に階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。おそらくはさつきDIOになにかされたいかにも殺人鬼然とした方の『鬼』であろう。DIOとひとまず戦わなくていいことで安堵半分、いつ何をしてくるかわからないことで恐怖半分、といったところだ。とにかくもう時間がない。こうなったらあつちの倒れてる女児の方だと豊穣にそうしたように身体を検める。三度何か指に触れた、今度は、これはたぶんお守りだろうなと確信しながら引き抜く、そしてやっぱりお守りで蕨は腹をくくった。三連続で役に立つものは手に入らなかった。期待はしていなかったが、やはり辛い。しかしこうなった以上なんとか殺人鬼をぶちのめすことをまずは考えなくてはならない。なぜなら既に彼奴は階段を登りきり自分の背後に迫っているのだから。

奥歯に力を入れ向き直る。怪人と目があった。倒れる子供たちを背にする形で蕨はジェイソンと対峙する。絵面は無力な子供を守る少年漫画のヒロイン、といった風にも見える。実際はぶっちゃけあつち狙つてくれないかな、とか思ってたりもするがそんな彼女の考えは全く無視してジェイソンはマチェットを振り下ろした。もちろん蕨は躲すが、ジェイソンももちろん追撃する。狭い室内で一対一が始まった。

(あの二人は眼中に無いか、空気読むな。)

役的にも人道的にも『鬼』が『子』に手出ししないように囿になるというのは良いのだが、それで死にそうになる本人はたまったものではない。だがこうなってしまう以上やるしかないのが兵の辛いところ。床を蹴り壁を蹴り家具を蹴り、なんとか凌ぐがそれだけでは埒があかないため刀を振るう。だが手応えはあれど効いている感じがしない。フェイントも交えて揺さぶるが相手がダメージに頓着しないこともあり捗捗しい成果は得られない。徒労感と疲労感がかさむばかりだ。

(狙うは額の――)

ならば狙いを変える。さきほどD I Oに何かされたのか、額の一部分に謎の物体がある。もしかやこれが弱点ではと当たりをつけすわ切りかかる。膂力は凄いが剣技ならば一日の長が蔵にある、雑に振られたマチエツトを見切ると容赦なく頭に振り下ろした。

予想は的中した。今まで切っても叩いても効いていなかったのが途端に頭を抑えて悶え苦しみだした。頭の形もいびつに変形している。そして数秒が経ち、頭が爆発した。

「……なぜ？」

まさか爆発するとは、これには蔵、キョトンである。だがとにかくなんだかよくわからないが一応倒せたらしい。彼女からすればD I Oの前哨戦のため警戒を切ることなく気を配り襲撃に備える。今のところD I Oが攻めてくる気配は無い。打ち倒した『鬼』もビクビクと痙攣を続けている。他には……あった、紙切れだ。一枚の紙切れが女兒の近くに落ちている。拾って見てみた。

『生きている参加者一人を対象に選んで発動する。対象が『鬼』だった場合、お守りを対象にぶつけると対象は死亡する。使用后自壊する。』

こんな便利なものだったとは、と一瞬思ったが真に受けるのは馬鹿らしいので蔵はなんとも微妙な顔になった。心なしかリボンもよげている。たぶんさきほど女兒から頂いたお守りの説明書なのだろうが、鵜呑みにできるような内容ではない。これがあればD I Oもなんとかできるかもしれないが……

(！)

殺気を感じとつさに伏せる。腰の辺りを薙ぐようにマチェットが頭上を通り過ぎた。見なくてもわかる、誰が奇襲をしたかなど。

「本当に不死身か！」

「……！」

頭もすつかり再生しマチェットを振りかぶるジェイソンがそこにいた。確かに頭が爆発したのを見たのに、少し目を話した隙に何事もなかったかのように再生している。催眠術か超再生か、ともかくとんでもなくヤバイ相手ということはわかった。ひよつとしたらDIOより危険かもしれない。突っ込んでくるところにカウンターを合わせながら、蕨の顔が歪んだ。何かおかしい、そう直感が告げ棒手裏剣を投擲したのとほぼ同時に、ジェイソンは走り抜け蕨の後ろで倒れる女兒の頭にマチェットをぶち込んだ。

パターンが変わった。それを理解しもはや100%の殺す気で投げた手裏剣を受けて何事もなかったかのように行動する怪物を前に、躊躇なく背後から太刀で金的を見舞う。かすかに鈍った隙に脇を抜け、新たな標的とされていた男児、豊穣を確保しに向かう。その彼女の試みは自分の頭と首に走った痛みで妨げられた。掴まれている！

(こんなものに頼ることになるとはな！)

自分の身体が片手で持ち上げられる。体型でいえば小学生と変わらないのだ、軽々と担がれるともう片方の手のマチェットが首筋へと狙いをつけられる。刃が突きつけられ引き切られようとする正にその直前、蕨はお守りを喉元に殴り当てていた。

「……！」

「ほう——！」

首筋に熱が走る。不十分な加速しか得られなかったマチェットは赤い線を蕨に残すだけに終わり、それを持つ手が、腕が、身体が瞬時に変化していった。

ジェイソンの喉元から身体全体へと瞬時に白いものが走っていく。それは、塩。身体があつという間もなく塩へと変じていく。全くもつてオカルトな光景。それを蕨は見ていた。自分の身体が支えを失い

地面へと投げ出されるまでの、数分にも感じるような一秒ほどの間。人一人が無機物に変わっていくファンタジー。それを目の当たりにして忘我。

花酒蔵はこうしてこの鬼ごっこを「理解」したのであった。

【I-10 (灯台) / 01時28分】

【花酒蔵@武装少女マキャヴェリズム】

【役】：親

【状態】：疲労(小)、DIOへの畏怖

【装備】：太刀・棒手裏剣(どちらも損傷・小)

【道具】：防弾ベスト・閃光弾、はいぱーびじょんだいありー@未来

日記、スマートフォン(子・豊穰礼佑)

【思考・行動】

基本方針：『親』か『子』と合流する。

1：DIOから逃げる。

※その他

【ルールの把握度】

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握、各役の人数、会場の地図を未把握。ルールの本質に気付きました。

豊穰はを持っています。

【豊穰礼佑@未来日記】

【役】：子

【状態】：気絶

【装備】：なし

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：このゲームに勝利してエリートであることを示す。

1：DIO、織田敏憲を利用しながら情報を集める。

2：ピエロ(ペニーワイズ)との接触を避けるため、西北西方面に逃走したい。

3：未来日記所有者は優先的に殺す。

※その他

「ルールの把握度」

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

未来日記による予知で、ある程度の未来を把握しました。DIOを『親』の役と思っています。

【擬宝珠 檸檬@こちら葛飾区亀有公園前派出所 脱落】

【ジェイソン・ボーヒーズ@13日の金曜日シリーズ 脱落】

【残り 67名(鬼11名 親23名 子33名)】

第四六章 Braver×ΔMurder×Kal
eidLiner (イリヤ、ニケ、桐山)
Braver×ΔMurder×Kal
eidLiner

??? E06 東部???

……撒いたか。

桐山は先程の少女が追ってこないことを確認し、初めて走る速度を緩めた。

次に二つあるデイパックの片方を開け、大量にあるイングラムのマガジンの中から新しいものを選んで空のものと交換する。

その動きは先程軽度とはいえ脳震盪を起こしたとは思えないほど滑らかで淀みのないものだった。

「……」
作業が終わると桐山は無言でもう一つのデイパックに視線を向ける。

先程見捨ててきた少女の物だが、感情を失って久しい彼に良心の呵責はない。

そのため、迷うことなくデイパックのジッパーを開いて中を確認する。

「……？」

確認してみても最初気づいたのはこのデイパック、重さもほとんど感じず底がない。

手を入れれば入れた分だけ入っていく。中を覗いて見れば、中は黒一色だ。

試しに自分がここへ来る前、戦闘実験プログラムにて使用していたデイパックに入っていた銃のマガジンを出し入れしてみる。

その結果、驚くべきことに全てのマガジンが入った、重さも感じない。

空になったただのデイパックは破棄することに決める。

「……」

物理法則を明らかに無視している奇妙なデイパックだが、現状の打開には繋がらない。

もう一度あの白い少女に襲われれば命はないだろう。

生に執着のない桐山にとってそれでも別に構わないが、ともあれもう一度デイパックに手を突っ込む。

すると、指先が銃のマガジンとは違う感触のものに触れた。数は二つ。

ゆつくりとそれを掴み、取り出す。

「??これは」



「あーあー、結局ほかのとこ漁ってみても収穫はこのペラい紙一枚とメダル一つか」

勇者というより盗っ人かストリートチルドレンの口ぶりで、ニケは手の中のメダルを弾く。

ここへ来てから一時間ほど周囲の民家を散策していたが、「ゆうしやは ○○を てにいった!」のテロップが出たのは結局紙切れと、小さなメダルが一枚。

食料などはあったが、ふくろがないため断念せざるを得ず。

その上美少女どころか誰とも出会わないし、空は変に赤く気持ち悪い。

ケチ臭い島だとくさしてメダルをもう一度弾く。

弾かれたメダルはピンと小気味いい音を立てて弧を描き、受け止めようとしたところで……他の人間の視線を感じ取った。

そちらに意識を取られ、メダルが手の甲から零れ落ちる。

ちやり、と金属音を立てて転がっていくメダル。

「あの一、これ、貴方のですか?」

それを拾ったのは、白髪の赤い瞳をした少女だった。

「へーイリヤも気がついてたらここにいたんか」
「うん、お互い大変だね」

少年勇者と魔法少女の初邂逅は恙なく進んだ。

まずお互いの自己紹介から始まり、その後鬼ごっこのルールをよく知らないイリヤにニケは拾ったチラシを見せて把握させる。

双方役職は子であり、気性も激しくないため穏やかな雰囲気の間情
報交換は進んだ。

「二行で済ませるとかどんだけ情報交換書きたくねーんだろな」
（……ニケ君と話しているとルビーと話してるみたい）

イリヤは高頻度で放たれるニケの意味不明な言動に大切な友である愉快型魔術礼装に似た匂いを感じ取り、わずかに警戒心を緩める。

「ふむふむ、とりあえずイリヤと俺の方針は一緒だし、どうせなら一緒
に行かねーか？」

「え？」

「ほら、一人だと休憩するときとかに不便だろ」

鬼ごっこのルール上、固まって動くのは得策とは言えない。

人数が増えればそれだけ動きも悪くなるし、鬼に見つかる可能性も
高まる。

けれど一人きりだと心細いし、得体の知れない島でうかつに休憩も
できないのは確かだ。

「……うーん。じゃあ、よろしくお願いします。ニケ君」

「ああ、よろしく頼むよ。俺もさっさと帰らないと大人気勇者の俺が
いないんじゃないか打ち切り不可避だしな」

（勇者とか打ち切りとか何言ってるんだろう…ひよつとしてかなり気
の触れた子なのかしら）

ちよつぱり失礼な事を考えたイリヤだったが、ニケに悪意や害意は無い事は薄々感じ取っていた。

ただ、発言が高頻度で意味不明でちよつと抜けてそうだけで、悪い人ではないと思う。

そう結論付けて、これからどうするか切り出そうとした、その時だった。

『……ムムツ、その声、その魔力はやっぱりイリヤさん！』

聞き覚えのある、軽い調子の機械音声に息を呑む。

まさか、と思い瞬時にイリヤは声のしたほうへ振り向いた。釣られてニケも同じ方向を向く。

その視線の先に映るは、学生服をモデルの如く着こなした長身の少年と――？、

「ルビー!？」



「そうなんだ、じゃあルビーも気がついたら此処に……」

『そうなんですよ。今まで真つ暗な所にずっと閉じ込められて、やっとなれたと思っただら』

モヒカンの代わりに鬼がひしめくイカれた時代によろこそとは参りましたね〜』

愉快型魔術礼装、カレイドルビーはいつもと全く同じテンションでイリヤと言葉を交わす。

神秘の秘匿を是とする一般の魔術師が見たら思わず額に手をあてる光景だが、

『そういうもの』を見慣れているニケも、桐山もそれぞれ驚く様子はない。

「でも良かったじゃん。こうしてすぐに会えて」

『ええ、ルビーちゃんも助かりましたよ桐山さんと一緒だと言が持たなくてー』

それで、ニケさんはイリヤさんとどんなラブコメを——』

「ほう、聞いてくれるか」

「会ったばかりでしょ!!」

会ってはなかった二人があつてしまった気がする。

イリヤはその気配をひしひしと感じながら傍らの、この場で最年長であろう少年を見る。

瞬間、何か肌寒いものを感じた。

底なしの穴を見てしまった。本能的恐怖に近い怖気。

慌ててそれを誤魔化すように口を開く。

「……えっと、桐山さんはこれからどうするおつもりですか」

「特に考えてはいない」

「え?」と怪訝そうな声を上げるイリヤに、桐山は鬼ごっこに興味はなく、どう動くかはどちらでも良いと語った。

もとより、他人にあつてから適当に決めるつもりだったのだ。

コイントスの結果で、多くのクラスメイトを殺すと決めたあの時のように。

「それじゃあさ、俺たちに協力してくれよ。桐山」

言い出したのは、ニケだった。

「ちよ、ちよつとニケくん」

「何だよイリヤ、別にいいだろ?見たトコ桐山は鬼じゃ無いみたいだし、何より——?」

「何より?」

「強そうだからいてくれたら俺が楽できる」

勇者を自称するには余りにも他力本願なその思考に思わずイリヤは桐山の反応を伺う。

だが彼は特に気にしている様子もなく、少し考えて、

「それはお前たち二人を勝たせる、ということか」
「あ？ああ、うん。そういうことになるのか」

深く考える様子もなく、ニケは返事を返す。
桐山の声はひどく硬質で、感情が伺えない。
しかし、返答だけは即決だった。

「……そうだな、それも悪くない」
返ってきたのは肯定。

「やったぜ」とニケは笑み、ルビーと一緒にガッツポーズを取る。

「よし、パーティー結成だ。流石俺！これが光の勇者のカリスマ！」

『ニケさんが勇者ならイリヤさんは魔術師（メイガス）って所でしょ
うかネー、RPG的に』

はしやぐ一人と一本を尻目に、「これで良いのかなあ」と思い、イリヤは桐山の方をもう一度見る。

すらりと立つその姿はとても落ち着いていて、先ほど感じた悪寒は感じなかった。

少なくとも、ただのアホにしか見えないニケとは別のベクトルで悪意だとか、害意だとかをこの少年が持っているとは思えなかった。

「気のせいだったのかな……うん、きっとそうだよね」

先ほど感じた寒気は「気のせい」だった。そう結論付けてイリヤは素直に仲間が増えた事を喜ぶ。

未だに良く分からない状況だけれど、ニケ君は能天気だし、桐山さんは落ち着いている。

ルビーとも再会できたし、何とかなる気がしてきた。きっと、何とかなる。

『で、ですねイリヤさん妹のクロエさんに対抗意識を燃やして最近は

黒い下着にも挑戦しようとしてるんですよー』

「うーん、イリヤに黒いパンツが似合うかどうかは微妙だろうな、ここは競わずに持ち味を活かす方向で———?」

そう心の中で強く思っ、彼女は履いている下着の色で盛り上がっているステツキと少年勇者に怒りの突撃をしかけた。

【E—6／01時30分】

【イリヤスフィール・フォン・アインツベルン@Fate/kareid liner プリズマ☆イリヤ】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：カレイドルビー

【道具】：水晶

【思考・行動】

基本方針：この島から脱出する。

1：ニケ君たちに協力する。

※ニケが見つけた紙により、自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・制限時間を把握しました

【ニケ@魔法陣グルグル】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：なし

【道具】：お守り、鬼ごっこのルールが書かれた紙

【思考・行動】

基本方針：ククリ達と合流してギリを倒しに行く

1：イリヤ達と協力してこの島から脱出する。

少年と空飛ぶペンダントを締め上げる少女を見つつ、桐山は黙考する。

——それはお前たち二人を勝たせる、ということか。

—— あ？ああ、うん。そういうことになるのか。

この会話で彼のこのゲームにおける行動方針は決定した。

それは目の前の二人、つまりニケとイリヤをこの鬼ごっこの勝利者とすること。

その為にはあの鬼と思われる少女のような者から二人を守るだけでは駄目だ。

ニケが見せた紙のルールによると、親の人数が子よりも少ない場合、親が勝利してしまう。

よって、桐山はニケとイリヤを除く「子」に一定の間引きを行うことに決めた。

2人が気づけば同行は困難なものになると予想されるため、できる限り水面下で事を運ぶ必要があるが。

巧妙に、何もかもを欺く位に。

何人いるかは分からないが、親を積極的に減らそうとする親や2人に悪意や害意を持つ親も排除する。

そして、一時間ほど前に戦った少女のような超常の存在である鬼への対処も急務だ。

もつとも、これは既に解決策を桐山自身が有していた。

アリスから奪った現在のデイパックと、そこに眠るアタッシュケース。

少年勇者と魔法少女の2人に存在を秘匿された『デルタギア』は、静かに解き放たれる時を待ち続ける。

……武器とは使うものの性根によって如何様にもその存在意義を変えるものだ。

当然、性根の歪んだものが振えばその力は醜悪なものにかなりえない。

しかし、もし、性根そのものが存在しないものが使えば……どうなるかはまだ分からない。

もし、桐山の真意を知った勇者と魔法少女がどうすのかも、今はまだ。

ただ一つ、ハッキリしていることは、

二人は知らず、ブレーキの効かないモンスタートラックのハンドルを握ってしまったということだけだろう。

【E-07 / 00時42分】

【桐山和雄@バトル・ロワイアル（漫画）】

【役】：子

【状態】 健康

【装備】：イングラムM10サブマシンガン、デルタドライバー

【道具】：銃のマガジン（複数）、式札

【思考・行動】

基本方針：ニケとイリヤを勝利者とする。

1：「子（一定人数）」「二人に害意や悪意を持つ親」「親を減らそうとする親」「鬼」を水面下で排除する

※ニケの拾った紙により各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握しました。

※アルシアと戦闘し、超常の存在がいることを知りました

※デルタギアは誰でも変身できるよう調整されていますが、オルフェノクや適合者以外が変身すると凶暴になります

第四七章 戦わなければ生き残れない (アリス、浅倉、セリユール、颯ちゃん)
戦わなければ生き残れない

「あ、あの…浅倉?さん」

「…何だ」

どうやらデイパックにあった記載の通り、目の前の男は浅倉という名前らしい。

そう思いながらアリス・カータレットはか細い声を上げた。

「何をしてるんですか?」

「鏡だ」

一瞥もせず答え、浅倉はゴムひもを握って作業を続けた。

掌に収まるサイズのコンパクトな鏡を利き手とは逆のほうに括り付け、固定しようとする。

しかし、片手ではうまくいかない。結果、イライラが募る。

アリスは浅倉が何をしたいか分からなかったが、とりあえず鏡をすぐに見れるようにしたいらしいというのは察することができた。

「…ちよつと待っててください」

焼きそばを食べるために座っていた椅子から降り、寝室に向かう。

イラついてる浅倉が何か言わないか不安だったが、意外にも彼は何も言わなかった。

枕元にそのまま置いてある救急箱を持ってまたキッチンへ。

その時に頭部の怪我の影響か、足がふらつき危うく転びそうになった。

「…何だこれは」

「怪我した所を固定するためのネット型包帯です。」

こうして腕を通して、リストバンドみたいに」

鏡とヘビ柄のジャケットの袖を掴んで、ネットに通す。

一つだけだとすっぽ抜けるかもしれないので、重ねて巻いて固定する。

試しに二、三度腕を激しく降つても落ちる気配は無かった。

「どうですか？」

嘘をついた後ろめたさからの行動だったが、軽率だっただろうか
今更に思う。

しかしそんなに鏡が見たいとは、もしかしたら目の前の男は存外お洒落さんなのかもしれない。

そんなアリスの考えを知る由もなく、浅倉はネットに鏡が被らないように無言で調節する。

鏡がちようどいい位置に来ると、心なしか満足げな顔を浮かべた。

その後、デイパックからカードケースを取り出し、据え付けられた鏡の前に掲げる。

鏡写しの世界よりベルトが現れ彼の腰へと収まったのは、その直後の事だった。

「えっ!？」

突然現れたベルトに背後でアリスが驚愕の声を張るが、気に留めず叫ぶ。

「変身!」

部屋に短く、しかし力強い声が響いた。

素早くデッキが現れたベルトに差し込まれ、男の姿が変わっていき。

——そして、人の姿をした怪物（モンスター）、仮面ライダー王蛇が現れた。

「あ、ああ……」

それを見たアリスは、まさに蛇に睨まれた蛙だった。

嘘がバレ、怒った浅倉が何かアニメの様に変身して自分を殺そうとしているのではないか、

王蛇を見てそんな妄想が駆け巡り、再び精神が恐慌状態に陥りそうになる。

しかし浅倉はそんなアリスを見ても何も感情を抱かず、仮面の下から冷厳に命じた。

「戻ってくるまでここにいろ」

「えっ、えと、ど、何処へ……いやっ、はい！分かりました……」

ガタガタと震えて慌てて返事をするアリス。

あえて少女を置いていくのはこの様子とケガならば、命令は守るだろうと浅倉は判断したからだ。

もし破って外に出たならば、その時はその時で両足をへし折ってやるつもりである。

今やってもいいがまだ祭りは始まったばかり、歩けないお荷物を連れていたらフットワークが悪くなってしまう。

転がしておくにしてもあの城戸真司のようなイライラするお人よしがいれば、

此方が戦っている間に勝手に捕まえたキープを持って行ってしまいかもしれない。

それを想像するだけでさらにイライラした。

「……お前はあいつの見張りをやれ。こっちが呼んだら来い。あと勝手に食うなよ」

念のため鏡の中のエビルダイバーにアリスの見張りと護衛を命じる。

自分は取り敢えず、このあたりにいる獲物を襲って回る腹積もりだ。

そう決めて窓を開けると浅倉は今は装甲に覆われた鏡のある左腕を一瞬見て、気まぐれに振り返った。

「これは、中々悪くない」

それだけ言うと、彼はアリスの反応も聞かずに飛び出していく。

台風のように外へ消えていった浅倉の後ろ姿をアリスは呆然と見送る事しかできなかった。

逃げようか、と考えるが信じられないスピードで遠ざかっていく浅倉を見て、ケガをしている自分では確実に逃げ切れない事を悟る。

それに、出ていくとき彼が言ったのはお礼だったとアリスは思っている。

自分をここへ運んでくれたみたいだし、もしかしたら怖い人ではあるけれど、悪い人ではないのかもしれない。

出て行ったのも、外の人々を守るためかもしれない。

善良な人々に囲まれて成長してきた彼女は、そう思ってしまったのだ。

その結果、彼を待とうという結論を出してしまった。

……周囲の人間から必要とされ、また自分も周囲を必要として生きてきた善良なアリスには想像もつかない。

浅倉威という男は誰もからも必要とされず、また彼も誰も必要としていないことを。

アリスに向けた行動の全てが、情の通わない気まぐれと打算でしかないことを。

【E—07／01時25分】

【アリス・カータレット@きんいろモザイク】

〔役〕：親

〔状態〕：顔に打撲傷。額から出血（止血済み）。恐怖。

〔装備〕：

〔道具〕：無し

〔思考・行動〕

基本方針：元の世界に戻って、みんなで修学旅行へ行く

1：浅倉さんを待つ。

2：浅倉さんについたウソがバレないようにする。

※その他

※アルシアの顔を把握しました

※桐山の顔を把握しました

※アルシアと桐山を鬼役だと思っています

※エビルダイバーが彼女を見張っています。

※原作での修学旅行エピソード前からの参戦です。

黒光りするライフルを抱えて沖木島を爆走する影が一つ。

「何処へ隠れようと絶対に悪は殲滅してやる……！」

影の主——セリユー・ユビキタスは歪み切った醜悪な笑みを浮かべて、疾走を続けていた。

相棒である帝具のコロがないのは痛手ではあったが、正義に燃える精神力だけは彼女にとっていつも傍にある無限の武器である。

悪はサーチ・アンド・デストロイ。

常人から見れば、彼女もまた鬼と変わらない、停止不能の怪物のよう映っただろう。

そして、そんな彼女だからこそ、運命はもう一人の怪物を引き寄せ

たのかもしれない。

——SWORD VENT——

民を見つけ守るために、悪を見つけ滅すために周囲を警戒していた彼女の聴覚を奇妙な音を捉える。

その音に不吉なものを感じ、一旦停止して辺りを睥睨。

その直後の事だった。

「ハハハハアアッ！」

蛇のような紫と銀の装甲を身にまとい、黄金のサーベルを備えた何者か……声から推察すると男か、が襲い掛かって来たのだ。

セリューは笑いながら襲いかかってきたという事実を元に、蛇男を悪と断定する。

振り下ろされるサーベルを身をひねって躲し、安全装置を外したライフルのトリガーを一片の容赦なく引いた。

しかし——、

「フツ、いいぜ……いい反応してるな。お前」

(チツ、この鎧、帝具クラスの装備か！)

ライフルの弾丸も、超常の存在である仮面ライダーにとって脅威ではあるが、決定打にはなりえない。

撃った弾はベノサーベルに防がれ一発として王蛇を貫けず、金属音を立てて地面へと落ちた。

コロがいれば、そう考えながらセリューは参加者間の格差に齒がみして後退する。

そんな彼女の焦りに付け込む様に、浅倉は嘲りの声を投げた。

「どうした、戦えよ」

「黙れ悪め…お前は、『鬼』だな」

「いや…俺は親だぜ。ダイパックを持つてるってことは、お前も親だろ。」

弱い親は食われる。それがルールだ！」

一度交錯しただけで分かる、セリユーから向けられる心地よい殺意は、浅倉の精神を昂らせ、飢餓感を満たす。

それが、更なる闘争心をもたらす呼び水となるのだ。

セリユーが放つ銃弾の雨を避けつつ、素早くデッキからカードを抜いて装填する。

——ADVENT——

再び響く電子音、それに伴い現れたモノにセリユーは戦慄した。

(鎧型の帝具かと思つたら…コロみみたいな生物型まで!?)

現れたのは白銀の装甲を備えたサイ型のミラーモンスター、メタルグラス。

食つていいぞと浅倉に命じられ、空腹を満たそうとセリユーに猛スピードで襲い掛かる。

しかし、セリユーも帝都が誇る達人・オーガの元で修業した身だ、簡単に遅れは取らない。

メタルグラスのパワーに任せたパンチをスウエーで躲して、僅かにできた半秒の隙に食い込む。

「オラアアアアッ!!!」

裂帛の気合で放った正拳に確かな手ごたえを感じ、メタルグラスがたたたらを踏む。

そのまま攻め手を緩めず再びメタルグラスの懐へと前進。

そしてもう一撃、速度に体重を乗せ、腕を振るう。
その拳は届いていただろう——脇からやってきた王蛇の妨害さ
えなければ。

「ぐっ……い！」

顔に苦みを浮かべて後退しようとするが、王蛇に掴まれた腕はビク
ともしない。

そして腕を掴まれているため、目の前でベノサーベルが構えられて
も動きようがない。

次の瞬間、鋭く大きい衝撃がセリユウの鳩尾を叩き、思考が痛みで
スパークする。

ゴロゴロと吹き飛ばされ、数メートル転がってようやく止まった。

此処にいたり、目の前の『悪』は強敵であることを悟る。

ましてや今はそのコロさえいない、撤退の二文字が脳裏をよぎっ
た。

(悪に背を向けるわけにはいかない)

屈辱に顔を歪ませて、それでも頭は冷静に接近してくる蛇男を迎え
撃つ。

「クハハハアッ！」

狂笑の声を上げて此方へ駆ける蛇男とサイの怪物。

セリユウは負けじと鬼女の表情でそれを見つめ、口腔の銃へ弾丸を
装填し放とうとする。

今まさに血を血で洗う激突がなされようとした時——新たな闘
入者が現れた。

「待てええええええ!!」

声と共にメタルグラスが音を立てて吹っ飛んでいく。

浅倉はそれを見送ってから、乱入してきた者へと向きなおった。

現れたのは、竜のミラーモンスターと痴女を足して二で割ったような格好の女。

女は今しがた戦っていた女を庇うように前へ出て、名乗りを上げた。

「我が名はラピュセル！蛇の戦士よ、それ以上女性に狼藉を働くなら、私が相手になろう！」

「ああ〜…?」

漫画やゲームの様な名乗りを受け、怪訝そうな顔を仮面の下で浮かべる浅倉。

デイパックも持つておらず、今しがた襲っていた女程の年齢にも見えない。

こいつは『子』だろうか？と一瞬考える。

まあいい、子であつても邪魔をするならこいつも獲物だ、次の瞬間にそう結論付けていたが。

「あなたは…?」

「心配しないで、貴方の味方です」

騎士のロールプレイにこれまでになく没入しながら魔法少女ラ・

ピュセル——岸边颯太は答えた。

目の前には見るからに悪そうな、鎧を着た何者か、背後には守るべき女性。

まさに自分が魔法少女アニメであこがれ続けてきたシチュエーションだ。

「そうですね！貴方も正義のために戦うんですね！なら私と一緒に悪を殲滅しましょう！」

……帰ってきた答えは感謝ではなく、かなり物騒なものだった。

喉まで出かかった「思ってたのと違う！」という叫びをこらえて、剣を引き抜きぬく。

対する蛇男はもう自分に対して獲物が増えたくらいにしか思っていないように。

「フツ、二人纏めてか、いいぜ……」

そう呟くとまたベルトから新たなカードを取り出す。

—— ADVENT ——

電子音が響き、六メートルはある巨大な蛇、ベノスネーカーがミラーワールドより現れ二人の前に立ちはだかる。

後方を見れば、メタルグラスも怒りに満ちた表情で復帰しているのが見えた。

ラ・ピュセルもセリユーも二体の怪物を従える蛇男に息をのんだが、退く事はしない。

戦端が再び開かれたのは、その二秒後の事だった。

【E-08 / 01 : 30】

【浅倉威@仮面ライダー龍騎】

【役】：親

【状態】：健康、イライラ（大）

【装備】：王蛇のカードデッキ@仮面ライダー龍騎

【道具】：手鏡

【思考・行動】

基本方針：皆殺し。今は目の前の奴らを殺す。

1：アリスの他にもう一匹子を見つけてキープする。

2：北岡が居たら殺す。

※その他

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

※アリスを『子』だと思っています。

【セリユー・ユビキタス@アカメが斬る！】

〔役〕：親

〔状態〕：ダメージ（小）

〔装備〕：口と腕に仕込んだ内蔵銃

〔道具〕：八十九式小銃、予備弾倉。

〔思考・行動〕

基本方針：鬼ごっこを止める。悪は殺す

1：正義の女騎士さんと協力して悪（蛇男）を殺す。

※その他

※自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

※コロは異能と判断されたのか没収されました。

※十王の裁きは五道転輪炉（自爆用爆弾）以外没収されています。

※他の武装を使用するにはコロ（ヘカトンケイル）@アカメが斬る！との連携が必要です。

【ラ・ピュセル（岸边颯太）@魔法少女育成計画】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：マジカルフォン（私物）

〔思考・行動〕

基本方針：スノーホワイトの騎士として人々を助け、N市に帰る。

1：目の前の怪人に対処

2：出会った女性を守る？

※その他
自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握

本章

11人いる！

「あ！ た、助けて！ 助けてくれーッ！」

「帯……!?!」

時刻1:05、座標B-02。C-02から北上した雲雀たちは、森の中で『帯』に翻弄される少年……大場大翔を発見した。

黒髪で、年齢は小学校高学年か、中学生か。雲雀よりは年下そうだが、『帯』は彼を縛り付けるでなく、ふわふわと纏い付き、この場から動けなくしている。鬼の仕業に違いない。

そして、明らかな罠。触れるのは危険。全員がそう判断する。

「つてうわあ!?! 鬼!?!」

「あ、違うよ！ この大猿さんは、親！ ……ええと、あなたは？」

「お、大場大翔、です！ 小学六年！ 子です！」

「わかった。私たちは……ちよつと待って。鬼がいるのよね」

帯越しに大翔と会話するレナ。その後ろにまな。雲雀は……レナとまなを運んで来た夜叉猿Jr.と共に、あたりを警戒している。

鬼の気配。強い。あの吸血鬼よりも、遥かに。しかも、二体の鬼が一緒にいる！

「ふうん、楽しめそうだね。出て来なよ」

雲雀がトンファーを構え、笑って挑発する。夜叉猿Jr.は歯を剥き出し、感覚を研ぎ澄ます。……なにか、におう。



堕鬼は——動かない。南から現れた新手の少年と大猿は、自分には及ばぬまでも、多少は強そうだ。油断は禁物。

そいつらが連れてきた二人の少女は、なかなか上物だ。特に、黒髪。鬼や妖怪を誑し込む魔性を感じる。もう一方もただならぬ何かがある。

面白い。こいつらは殺さずに確保しよう。さて、北の方はどうか。

◆ 銃を構えるオルガ。日本刀を構える田所。その後ろから、プルツールと光彦。四人は警戒を怠らず、慎重に進む。

鬼がいる、とプルツールが察知した。田所や光彦にはよくわからないが、戦場を渡り歩いたオルガもなんとなく感じる。

悪意、敵意、殺意。子供の叫び声。相手は、こちらの様子を虎視眈々とうかがっているだろう。来れば迎え撃つ。もしくは逃げる。

しかし背後は崖と海だ。そこまで逃げ帰っても仕方ない。やはり、迎撃しかないか。

「あ」

前に行く田所とオルガがなにかに気づいた。色鮮やかな布が何枚も、ふわふわと浮いている。浮き続け、水中の魚のように巡っている。異常だ。

「ありゃあ、なんだ？　なんかの手品か？」

「中に子供がいる。鬼の罫……だろうな」

物陰に隠れ、観察する。布の中に少年がひとり。その周囲に、少年ひとり、少女ふたり。それと、奇怪な大猿。

「猿……か？　お、鬼なのか？」

「どうだかな。鬼ならあのガキどもを襲ってるはずだ。だが、一緒に周りを警戒してるっぽいな……」

考えにくい、アレも『親』なのだろうか。とにかく、子に敵対的ではない。善良な鬼かも知れない。合流すべきか？

◆ 大翔の周りに、レナ、まな、雲雀、夜叉猿 Jr.、オルガ、田所、プルツール、光彦。八名が揃った。大翔と墮鬼を加えて十。いや、妓夫太郎もいる。

墮鬼は観察する。こっちは、くさくて汚いのがふたりとガキがふたりか。女のガキは上物だが……くさいのは早めに殺そう。

九匹のうち、上物は三。まあまあだ。帯を動かし、散らす。大翔を囲む帯が飛び去り、より大きな囲いを形成する。

「……臭い！」

まなが顔をしかめ、鼻を抑える。白粉臭い帯の囲いが散り、風向きの関係で、田所の革靴の臭いがここまで漂ってきたのだ。

「あつちに、なにかいる！」

まなが指差す方に、レナ、雲雀、夜叉猿Jr.、解放された大翔の注意が向く。鬼か？

オルガとプルツ、光彦は、田所を睨む。臭いに慣れて忘れていた。こいつは臭いのだった。

「しゃあねえな。合流しよう。俺が話をつける」

プルツに機関銃を手渡し、オルガは両手をあげて物陰から進み出る。周囲の布の動きは緩やかだが、まだ鬼が襲ってくる様子はない。合流させて、一網打尽にしようというハラだろう。それならこいつらと協力して脱出するしかない。

「悪い悪い。俺はオルガ・イツカ。親の役だ。そこに仲間もいる。この布は鬼のしわざだろ？」

「……そうだね。私は竜宮レナ。この大翔って子を囿にして、私たちを誘き寄せたんだと思うけど……姿を見せない」

年上に見えるが、レナは警戒を解かない。まなど大翔は年下、雲雀は戦闘狂、大猿は人語が話せない。自分がチームの代表として交渉するしかない。

振り向いたオルガの背後から、ぞろぞろと三人。少女、大柄な男性（臭い）、それと……パンツ一丁の少年。身ぐるみ剥がれたのだろうか。

そう言えば少女の衣服はいまいち似合わず、男性風だ。何があったのだろうか。いや、今はそれどころじゃない。

「協力する！ この鬼から逃げるぞ！」

「了解！」

次の瞬間、多数の帯が一斉に、一同へ襲いかかった！

【B—02／01時10分】

【チーム・竜犬猿鳥】

【竜宮レナ@ひぐらしのなく頃に】

【役】：子

【状態】：健康（雛見沢症候群に感染、無自覚）、警戒

【装備】：デイパック（夜叉猿Jr. より譲り受ける 中身は支給品
2つ、医薬品や水、食糧など）

【道具】：お守り

【思考・行動】

基本方針：帰還する。子や親と合流し、共に脱出を目指す。鬼からは逃げる。

1：鬼を警戒。オルガたちと協力し、この場を脱出する。

※その他

制限時間と親のルールを把握。各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

雲雀を鬼だと思っているが、敵対する気がないなら仲間だと信じる。

雛見沢症候群は空気経由や皮膚・粘膜・体液との接触で感染し、疑心暗鬼などを契機に発症する。

【犬山まな@ゲゲゲの鬼太郎（6期）】

【役】：子

【状態】：健康、警戒

【装備】：リュックサック（現地調達、医薬品や水、食糧など）

【道具】：スマホ（自分の）、支給品（未確認）

【思考・行動】

基本方針：生還する。子や親と合流し、協力する。鬼からは逃げる。

1：鬼を警戒。オルガたちと協力し、この場を脱出する。

※その他

制限時間と親のルールを把握。各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子であると推測。

雲雀を鬼だと思っているが、敵対する気がないなら仲間だと信じる。

特異的な幸運（偶然力）の持ち主。妖怪を目視可能。人懐こく、容易に妖怪を魅了する「妖怪たらし」。

【夜叉猿Jr. @刃牙シリーズ】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、警戒

〔装備〕：

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：鬼は殺す。子を守る。

1：レナとまなを守護り、鬼と戦う。新たに現れた子らも守護る。親も無力なら守護る。

2：鬼らしき少年（雲雀）を警戒するが、共闘できるならする。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。鬼ではないと自認。

人語は多少解するが話せないし、文字の読み書きも出来ない。ノンバーバル・コミュニケーションは可能。

【雲雀恭弥@家庭教師ヒットマンREBORN!】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、高揚、警戒

〔装備〕：雲雀のトンファー@家庭教師ヒットマンREBORN!、

雲のボンゴレリング@家庭教師ヒットマンREBORN!、

〔道具〕：携帯電話（ガラケー）

〔思考・行動〕

基本方針：親、子、鬼を咬み殺す。他者とは群れない。

1：鬼と戦う。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと誤解している。

そもそも把握したところでルールに従って行動する気がない自由

過ぎる男。式札はポイ捨てした。

【チーム・即席鉄華団】

【オルガ・イツカ@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ】

【役】：親

【状態】：健康、警戒

【装備】：

【道具】：デイパック（不明支給品1）

【思考・行動】

基本方針：とにかく生き残る。

1：鬼を警戒。レナたちと協力し、この場を脱出する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

【水泳部の田所@昏睡レイプ！ 野獣と化した先輩】

【役】：親

【状態】：健康、警戒

【装備】：日本刀、野原ひろしの革靴@クレヨンしんちゃん、ブリー

フ

【道具】：デイパック、睡眠薬（持参）

【思考・行動】

基本方針：家に帰る。

1：鬼を警戒。レナたちと協力し、この場を脱出する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

【プルツ@機動戦士ガンダムZZ】

【役】：子

【状態】：健康、警戒、困惑

【装備】：光彦の服と靴、小石少々、UZI@現実

【道具】：『スマートフォン（子）』、『お守り』

【思考・行動】

基本方針：生き残る。

1：鬼を警戒。レナたちと協力し、この場を脱出する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子と推測。

地獄の雰囲気にもまれてニュータイプの方が若干鈍っていました
が、慣れつつあります。

この鬼ごっこを「記憶を操作された人間に関する実験」だと考察し
ました。他の可能性も考慮しています。

遠くにモバイルスーツらしき反応を感知しました。

【円谷光彦@名探偵コナン】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、警戒

〔装備〕：パンツと靴下のみ

〔道具〕：DBバッジ（現在通信不能）

〔思考・行動〕

基本方針：生還の為に行動。子や親と合流したい。

1：鬼を警戒。レナたちと協力し、この場を脱出する。

2：その後は民家へ行き、衣服や靴を調達する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子と推測。

この鬼ごっこを「記憶を操作された人間に関する実験」だと考察し
ました。他の可能性も考慮しています。

【他（レナたちと合流）】

【大場大翔@絶望鬼ごっこ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康、混乱

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：とにかく人と会う。幼なじみが巻き込まれていたら合流

したい。

1：鬼を警戒。レナたちと協力し、この場を脱出する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を子と推測。

【鬼（物陰）】

【墮鬼（妓夫太郎）@鬼滅の刃】

〔役〕：鬼

〔状態〕：負傷（再生中）

〔装備〕：

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、食らい、現世へと復活する。

1：幸せそうな子や親を食い殺し、取り立てる。

2：反撃を受けないよう慎重に観察。まずは帯を向かわせ、実力を探る。

3：レナ、まな、プルツの三少女を上物と判断。殺さずに確保する。

※その他

スマートフォン（鬼）の所在は不明。落としたのかも、元から入ってなかったのかもしれませんが。

灰は灰に、塵は塵に

「……時間じゃな。確認するぞ」

Dr. ヘルはスマートフォンを起動し、グループトーク・アプリを開く。既に使い方は習得済みだ。天才ゆえに。

ターニヤと、ウエカピポの妹の夫（以下、義弟と略称）も頷く。後者はよくわかっていない。

グループトークのメンバーの名が、顔写真付きで表示される。こいつら12人が、このゲームにおける『鬼』だ。

ペニーワイズ

ヤン・バレンタイン

Dr. ヘル

ジェイソン・ボーヒーズ

吉良吉影

夜神月

チャツキー

ギーグ

三日月・オーガス

堕姫（妓夫太郎）

アルシア

D I O

アルファベット順でも五十音順でもない。何人か日本人らしき名前もある。ターニヤは眉を顰めた。

「ペニーワイズ？ ジェイソン・ボーヒーズ？ チャツキー？ なんだこれは。ホラー映画やスプラッタ映画の登場人物か」

現代日本のエリートサラリーマンから異世界の幼女に転生させられた彼女には、聞き覚えのある名だ。

当該映画を見たことはたぶんないが、名前と容姿程度は知っている。特にジェイソンなど、ホツケーマスクの殺人鬼としてあまりにも有名だ。

白塗りピエロのペニーワイズ、人形に憑依したチャツキーも、それ

なりに知られている。こいつらが鬼なら、親や子は随分死ぬだろう。訝しむヘルと義弟に、ターニヤは彼らについて軽く説明する。また『ギング』のアイコンは、顔なのかどうか判別がつかない。そして……「こいつです。『墮姫（妓夫太郎）』が、私とリュウを襲った二人一組の鬼。女の方が墮鬼で、背中から出て来た男の鬼が妓夫太郎というらしい」

「ほう。……そやつも含めて、まあ当然、本部に逆らってやろうという鬼はそうおるまい。子や親を集めるといふことになるか」

「ですね。鬼がゲームを放棄するメリツトは皆無。単なる殺したがりの鬼も多いようですし……」

さて、どうするか。鬼限定のコミュニケーションツールとはいえ、我々がここにいます、と告げ知らせるのはよくあるまい。鬼が来ても困る。

仮に「善良な」……親や子を殺したくないという鬼がいたとしても、そいつとの対話は他の鬼全員に筒抜けだ。密談は出来ない。

誰もまだメッセージを発信していないようだし、だんまりを決め込んでもよい。対話している連中の動向を知ることが出来るだけだ。

「ともあれ、これで鬼全員の名と姿はわかった。次じゃな」

「はい。私が襲撃された場所へ行きましょう」

◆
同じくC-05、ターニヤが一度目の気絶から目覚めた地点。リュウと出会い、墮鬼に出遭った場所から、そう離れてはいない。

犯人は犯行現場に戻る、と言うが……幸い、墮鬼は襲撃現場から既に離れていた。ターニヤとヘルは移動しながら対話を重ね、推理する。

無防備に気絶していたターニヤにトドメを刺さなかったのは、なぜか。可能性としてはリュウに殺されたか、重傷を負わされ、逃走したのだ。

では、リュウはどこへ。あのヤクザ者が、ターニヤを上回るほどの戦闘能力を持つ墮鬼を、なんの武器もなしに倒せるとは考えにくい。

ターニヤが持っていた『お守り』のような、強力な支給品を使ったと考えられよう。それはどこか？　今も彼が持っているのか？

「……なんじゃ、この灰は」

ヘルが、道路上に残った灰を発見する。衣服も灰化したのか失われていた。わずかに人の形を残している。リュウか、墮鬼か。

「……リュウでしょう。彼が持っていたドスを見つけました。それと、これを」

義弟を連れたターニヤは、ドスを手に、無感情に言う。義弟は頑丈なアタツシケースを抱えている。

「おい、ターニヤ……それじゃあこのケース、持っただけで灰になるとかじゃあねーよな……」

「大丈夫でしょう。中身を確認して下さい」

言われるままに義弟がケースを開くと、ゴテゴテとした謎の金属製のベルトと、携帯電話などのアイテムが入っている。

「なんじゃ、これは……通信機器か？」

「ケースの裏面に着用法が書いてありますね。……これは……『仮面ライダー』の変身ベルトってやつ、でしょうか」

「はア？」

義弟が聞き返す。ターニヤは彼にもわかるよう言葉を選び、淡々と話す。

「フィクションの変身ヒーローですよ。本物かおもちやか知りませんが、もし本物なら……リュウはこれを使って変身し、そして……」

「死んだ、と。鬼に殺されたのなら、ターニヤは生きておらん。鬼を倒すか撃退した後、なんらかの理由で灰になったと？」

「たぶん……このベルトのデメリットなのでしよう。装着すれば鬼を圧倒する戦闘力を手に入れ、戦闘終了後に死ぬ。灰になって」

ターニヤは無意識に、ドスを握りしめる。義弟が鼻を鳴らす。

「……なんじゃあそりゃあ。結局、鬼に殺されるのと大して違いがねえじゃあねーか」

「鬼を倒し、仲間を守ることは可能です。でなければ、私はここに生き

ていない」

正義など、義憤など、戦場での感傷など、柄にもない。

死んだのは今まで面識もなかったヤクザ者で、共にいたのも10分にもなるまい。涙は一滴も出ない。それでも。

彼は自分を救い、死んだ。それが事実。それで充分だ。

【チーム・ヘルインザ地獄】

【C-05/01時15分】

【Dr. ヘル@真マジンガーZERO】

【役】：鬼

【状態】：超健康

【装備】：バードスの杖（ただし現在は機能が停止しているため実質は頑丈な棍棒程度、本人はまだ気がついていない）

【道具】：四次元っぽい紙袋、『スマートフォン（鬼）』、不明支給品2つ（確認済み）、島の地図2枚、

『お守り』（ターニャから説明書ごと奪取）、モンドラゴンM1908（小銃）。ターニャから奪取）

【思考・行動】

基本方針：戦いに勝利し、この企画の主催にいるであろう兜十蔵をぶち殺す。その後改めて世界征服に乗り出す。

1：従来のルール以外にゲームをクリアする方法があれば、兜十蔵の鼻を明かす為にもそちらを優先したい。

2：自分の対主催計画に他の参加者を巻き込み、情報と手駒を集める。敵対者は打倒する。

3：アタッシュケースの中身（カイザギア）を解析する。

※その他

ウエカピポの妹の夫及びターニャと情報を共有。

【ターニャ・デグレチャフ@幼女戦記】

【役】：子

【状態】：健康、顔面負傷、静かな怒り

【装備】：コルトSAAピースメーカー、M84スタングレネード、ド

ス

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：このゲームから早期の脱出を目指す。

1：ヘルの対主催作戦に乗る。そのために準備を整える。

※その他

Dr. ヘル、ウエカピポの妹の夫と情報を共有し、鬼と親の持つ情報がある程度獲得。

〔ウエカピポの妹の夫@ジョジョの奇妙な冒険 第7部 SBR〕

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：鉄球、剣、コルトSAAピースメーカー

〔道具〕：デイパック、カイザギア@仮面ライダー555

〔思考・行動〕

基本方針：決闘を汚した主催者に責任をとらせる（女なら殴りながら犯す）。

1：逆らえば殺されそうなので、Dr. ヘルとターニヤについて行く。

※その他

Dr. ヘル及びターニヤと情報を共有。

名が長過ぎるので、地の文では義弟と略称することにする。本名は不明。

ヘルやターニヤには名乗ったと思うが、誰にも名前と呼ばれない。これからも呼ばれないだろう。

Z・刻をこえて

島の北西端、座標A―02。海に突き出した岬。

オルガ、田所、プルツィ、光彦の4名は、互いに訝しみながらも合流し、自己紹介と情報交換を行う。

子は親の、親は子の情報を得た。ビラやデイパックの裏の文章で、三つの役の勝利条件も知った。そして……。

「宇宙コロニーと地球の戦争、か……。どっかで聞いたような話だな」
オルガが眉根を寄せ、呟く。田所と光彦は、面識はないが同じ地球の日本出身。対して、オルガとプルツィは。

惑星間規模の大戦「厄祭戦」から300年後、火星で生まれ地球と戦ったオルガ・イツカ。

宇宙世紀0089、火星と木星の間、小惑星基地アクシズで生まれたクローン人間プルツィ。

同じ宇宙なのか異なる世界なのかは不明だが、もし同じだとすれば――プルツィはオルガより遥かに昔の人間だろう。

宇宙世紀以前、「キリスト紀元」の地球に生きている田所と光彦は、もっと昔の人間ということになる。

「何百年かの未来にも、人類は存続し……飽きもせず戦争を繰り返しているというわけか。まったく、愚かな種族だ」

プルツィが鼻を鳴らす。この火星生まれの男は、モビルスーツを知っているという。

そんな男と、この地球人どもと、この私。全く接点のない我々が、なぜこんな場所で一堂に会しているのか。

『記憶操作された人間を集めている』『自分への演習』という推測は、あたっているのか外れているのか。

まさか本当に、時間や距離を超えて――なにかオカルティックな力によって、洗脳されているわけでもない様々な人間を集めているのか。

あるいは、これは現実ではなく仮想現実で、こいつらは単なる電子情報、アバターに過ぎないのか。どれも有り得そうに思えてくる。

光彦も交え、三人で対話と考察を行う。熱が入る。

「……これももうわかんねえな」

ブリーフ一丁で日本刀を持った男、田所が、何度目かの同じ言葉を呟く。そうとしか言いようがない。完全に理解を越えた出来事だ。

機関銃を持った変な髪型の男と謎の少女は、いわゆる『オタク』らしく、自分には理解できない用語で会話している。

もうひとりの少年は、自分と同じくブリーフ一丁だ。いや、自分はゲイだがシヨタコンではない。盛っている場合ではない。今すべきことはなんだ。

「あのさあ……まず、ここに親と子がいるんだろ」

苛ついた田所が呼びかけ、三人が振り返る。

「鬼ごっこしろっていうんなら、どこか別んどこいこうや。ここ、どん詰まりじゃん」

光彦が頷く。確かに、こんなところで鬼に襲われたら、逃げ場がない。答えの出ない話をしている場合ではない。

「そうですね。その、衣服も調達したいですし……民家を探しましょう」



光彦も、オルガも、プルツーも。口には出さないが、わかっている。

親は子を守る。しかし、子が親より多く生き残ってゲームが終わった時——生還出来るのは、親だけだ。

はつきり書いてはいないが、ルール上はそういうことになる。鬼と子だけなら話は単純だが、親が絡むとややこしくなる。

親と子が同じ数なら？ ルール上は子が勝利し、親は生還出来ない。利害は一致しているようで、食い違う。どちらもが勝つ方法はないのか？

プルツーは……自分だけ生き残ればよい、とする。明快だ。オルガと光彦は……判断を保留している。

田所は……よくわかっていない。彼は平凡な一学生で、人殺しの経験も覚悟もない。要は鬼から逃げればいいのだろう、としか考えていない。

とにかく、他の参加者とも合流せねば。シンプルな彼の思考が一同を動かした。

「……！」

道を進むうち、プルツーが血相を変え、頭を抱えてうずくまる。これは。なんだ。目の前に閃光が走ったような感覚。

「どうかしましたか？」

「……なにか、いる。この先だ。危険を感じる。気をつけろ……！」
並外れた直感力、認識力、精神応能力。ニュータイプであるプルツーには、まざまざと危険が感じられた。

同じニュータイプか。いや、違う。強烈な思念波、邪悪な気配。悪魔か、鬼か。しかも——それだけではない。子供の叫び声。襲われている。

そして、これは。それらの気配よりもっと遠く、轟音と共に突如出現した、この存在の感覚は。

『モビルスーツ』。そう伝わってくる。なぜ、なぜそれが、ここに。



「南から来る……北のも、動いたね」

座標B—02の物陰で、堕鬼が呟く。風に乗って臭いや音声が伝わってくる。

帯で取り囲んだ籠の鳥、少年は、動転して叫び、わめいている。こちらは帯を動かし、煽り立てる。

殺しはしない。生き餌、友釣り、一網打尽。そううまくいくかどうか。慎重に見張る。こちらは手負い。二度も不覚を取るのはゴメンだ。

十分にひきつけたところで、帯を散らし、崖へ向かって追い立てるとしよう。

【A—02／01時02分】

【オルガ・イツカ@機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ】

【役】：親

【状態】：健康

〔装備〕：UZI@現実

〔道具〕：デイパック（不明支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：とにかく生き残る。

1：とりあえず民家へ行き、衣服や靴を調達する。

2：プルツールの話に興味はあるが、判断は留保。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

〔水泳部の田所@昏睡レイプ！ 野獣と化した先輩〕

〔役〕：親

〔状態〕：健康

〔装備〕：日本刀、野原ひろしの革靴@クレヨンしんちゃん、ブリー

フ

〔道具〕：デイパック、睡眠薬（持参）

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰る。

1：とりあえず民家へ行き、衣服や靴を調達する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。

〔プルツール@機動戦士ガンダムZZ〕

〔役〕：子

〔状態〕：健康、警戒、困惑

〔装備〕：光彦の服と靴、小石少々

〔道具〕：『スマートフォン（子）』、『お守り』

〔思考・行動〕

基本方針：生き残る。

1：この鬼ごっこの目的と自分の記憶について考える。

2：とりあえず民家へ行き、衣服や靴を調達する。

3：鬼（墮鬼）の気配と子供（大翔）の叫び声に警戒。遠くにモビ

ルスーツらしき反応も感知。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子と推測。地獄の雰囲気にもまれてニュータイプのが若干鈍っていました。慣れつつあります。

この鬼ごっこを「記憶を操作された人間に関する実験」だと考察しました。他の可能性も考慮しています。

【円谷光彦@名探偵コナン】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：パンツと靴下のみ

〔道具〕：DBバッジ（現在通信不能）

〔思考・行動〕

基本方針：生還の為に行動。子や親と合流したい。

1：このゲームは誰が、どのように、何故行ったのかを考える。

2：とりあえず民家へ行き、衣服や靴を調達する。

※その他

各役の人数・会場の地図は未把握。自分の役を子と推測。

この鬼ごっこを「記憶を操作された人間に関する実験」だと考察しました。他の可能性も考慮しています。

【B-02/01時03分】

【墮鬼（妓夫太郎）@鬼滅の刃】

〔役〕：鬼

〔状態〕：負傷（再生中）

〔装備〕：

〔道具〕：四次元っぽい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、食らい、現世へと復活する。

1：幸せそうな子や親を食い殺し、取り立てる。

2：帯で大翔を取り囲み、この場に周囲の親や子を誘き寄せ、一網打尽にするか殺し合わせる。

3：今度は反撃を受けないよう慎重に観察する。

※その他

スマートフォン（鬼）の所在は不明。落としたのかも、元から入ってなかったのかもしれませんが。

【大場大翔@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：健康、混乱

【装備】：『お守り』

【道具】：若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：とにかく人と会う。幼なじみが巻き込まれていたら合流したい。

1：鬼と異臭を警戒。

2：なんだこの帯は!?

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を子と推測。

人情紙袋メカニカル・アニマルズ

「私は、『子』の役だけど、『鬼』なんです。」

時刻01:02、座標E―05。森の中の木の上。名波翠は生き残るため、口から出まかせの嘘をついた。

そう言われた男……吸血鬼ヤン・バレンタインは、「何いってんのこいつ」って表情だ。翠も「何いってんのウチ」って表情だ。

状況を整理しよう。

ヤンは雲雀&夜叉猿J.r. から逃走した後、なんだかんだで稗田・中沢・翠と合流。親を装って近づき、情報がある程度交換した。

彼らは地図情報を西の廃ホテルで少し把握しており、神塚山の山頂から島の反対側のどこかを目指そうとしていた。

その山頂にこそ鬼の本部があり、ヤンも当初そこを目指していたのだが、合流前に支給品として巨大ロボが出て来たことで状況が変わった。

これを置いていくのはもったいない。こいつを操れるやつがいないかと、ヤンは思ったのだ。これを動かせたら無敵ではないか。その程度の理由だ。

だが、翠にテレパシーで心を読まれかけたため、ヤンは吸血鬼の身体能力で彼女を攫い、音もなく近くの木の上に跳び上がった。

木の下、見えない位置に中沢と稗田がいる。稗田はヤンと、心を読もうとした翠を訝しんでいる。翠はヤンに縊り殺されそうになったが、生き残るため「自分は鬼だ」と嘘をついた。

ヤンは翠の首を掴んだまま、鬼用のスマホを開いてグループトーク・アプリを確認し、十二人の鬼の中に名波翠の名も顔写真もないことを知った。

雲雀や夜叉猿J.r. もいなかったが、それはどうでもよくなった。翠は、ヤンが他の鬼の名や姿を把握しているだろうと推測し（それは実際正しいが）——冒頭の台詞を吐いた。

そういう状況だ。

「……………」

ヤンは考える。子の役で、鬼。つまり、鬼のような能力を持った子だ。子に違いはない。十二人の鬼ではないのだから。

確か子や親には超常能力を持った奴らはいないってルールだった気もするが、主催者側の気まぐれとか「面白そうだから」とかそんな理由で、そういう奴も参加してるんだろう。

ああそうか、あのトンファアーのガキや大猿が鬼のリストにいないってことは、そういうことか。ああいう子や親もいる、ってだけだ。

ヤンは足りない頭なりの理解力で理解し、翠を「利用価値のある『子』」だと考えた。首を絞める手を、緩める。

「……じゃあ、まあ、生かしておいてやるぜ。有り難く思えや。俺の言うことなんでも聞かなきゃあ、すぐブツ殺すがよ」

「あ、ありがとうございます。ゲホッ」

翠は安堵し、涙目で息をつく。何故か不明だが、殺されずに済んだ。とりあえずは。

だが。言うことをなんでも聞かなければ、殺すと言われた。どうする。たとえば、このいたいけな乙女の肉体を要求されたら。

舌嚙んで死ぬか。いや、『お守り』というのがあった。鬼に当たると鬼が死ぬとかいうやつ。この状況では、どれだけ近づいていても命中はすまい。

怪しい動きをしたら今度こそ殺される。相手は鬼だ。中沢も稗田もただの人間、瞬く間に殺されるだろう。

「じゃあ、要求だ。あのロボットを動かしてみろ。出来なきゃ、動かせるやつを探せ。なるべく急いでだ」

「え」

「あのおっさんとガキは……まあ、どうでもいい。おめーに超能力があるなら、なんとかできるだろ。どうにかしろ。しねーと殺す」

「え」



物音に稗田が振り向くと、ヤンと翠がいた。翠はやや青褪めた顔をし、首の周りを爪で搔いている。

「どうした」

「……ちよつと、虫に刺されて」

別にヤンにキスされたわけでも、血を吸われたわけでもない。首を絞められた跡を見咎められてはまずいと双方が思ったからだ。

ヤンはヘラヘラしながら、稗田に話しかける。

「えーと、ヒエダさん、だっけ。この子がさア、この巨大ロボに乗ってみたーいんだってさ」

「……ほう」

稗田は眉根を寄せる。彼は自分の心を読もうとした翠を、半ば『鬼』ではないかと疑っている。中沢は自分の意見がないのでまごまごしている。

「どう思う、中沢くん」

「え。……乗るって、上に？ それとも、コックピットに？ まさか、動かせるわけじゃないです……よね」

「どうだろうな。アニメに出て来るような代物だが、本物の物質だ。操縦席に入れば何かわかるかもしれん。本当に動かせたら、鬼にも対抗できるかもな」

翠は……脂汗を垂らし、目をぐるぐるさせている。動かせるのか？ 動かせなくても、動かせるやつが都合よくこの島にいるのだろうか？

こんなもんを支給品にするぐらいだから、吸血鬼やなんやらがいるぐらいだから、一人ぐらいいるかもしれない。もし、それが自分だったら？

これを動かして、うまいことやれば、ヤンが外にいればぺちゃんこに踏み潰せるだろう。外にいれば。当然こいつはコックピットに入る気だ。心を読まなくてもわかる。

「よおし、善は急げ！ お嬢ちゃん、やってみな！」

ヤンが手を叩き、翠を急かす。翠は呆然と、赤いロボットに触れる。まず、コックピットはどこか。

物へのサイコメトリーは、よほどのもので無ければ、つい数分前の強い感情のものぐらいしか読み取れないが……。

【AMX-004-3 キュベレイMk-2。プルツ専用機。カラーリングは赤。ヘッドセット型サイコミュ・コントローラーを通じて、外部からの遠隔無人機体制御が可能な改良型。】

すらすらと頭の中にメッセージが流れ込んできた。あり得ない。まさか、説明書が読み取れるとは。

サイコミュとは。サイコ・コミュニケーター。精神感応による伝達。そんなものはないはずだ。自分にもそれほどの力は。

同時刻。島の北西部で——少女、プルツが顔をしかめ、頭をおさえた。何かが起きようとしている。

【E-05/01時12分】

【名波翠@テレパシー少女蘭】

〔役〕：子

〔状態〕：疲労（小）、キングとヤンへの恐怖

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：こんなアホなことをしでかした奴に一発焼き入れて帰る。

1：アカン口からデマカセ言うたけどこれどないして信じさせたらええねん。

2：巨大ロボを操縦なんてできるかアホ！ …あれ、なんやこれ。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を子と推測。テレパシーなどの超能力が使えるが、普段よりは疲れやすい。

【ヤン・バレンタイン@HELLSING】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：FN P90 短機関銃 2挺 サプレッサー&スコープ

つき(弾丸を多少消費)、スマホ(鬼)、五千万円@ランナウェイ、キュベレイMk-2@機動戦士ガンダムZZ

〔道具〕：四次元っぽい紙袋

〔思考・行動〕

基本方針：殺し、犯し、食らう

1：トンファー使いの少年と大猿を「鬼を襲う狂った鬼」と認識。一旦撤退し、本部や他の鬼へ連絡に行く。のはまあ、後回し。

2：翠は生かしておいて利用してみる。

3：巨大ロボを翠が動かせるか興味津々。できなきやできるやつを探させ、無理だっつうんなら皆殺し。

※その他

生きている人間の血を吸って殺すと、知能のないゾンビのような食屍鬼(グール)に変えてしまう。

※E-05にて1時数分前にキュベレイMk-2が出現し木々を押し倒しました。周囲に音が響きました。

※ヤンはトンファー使いの少年と大猿を「鬼っぽいが子や親だろう」と推測しました。

〔稗田礼二郎@妖怪ハンター〕

〔役〕：親

〔状態〕：やや疲労

〔装備〕：スリケン@ニンジャスレイヤー、ジャイロの鉄球@SBR

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：ロボットに興味。一度四人でしっかり情報共有をしたい。

2：中沢くんは信頼するが、名波くんとヤンは警戒。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

〔中沢@魔法少女まどか☆マギカ〕

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：『お守り』

〔道具〕：学生鞆（中身は教科書とかノートとか筆記用具とか）

〔思考・行動〕

基本方針：とりあえず人を探す。知り合いがいたら合流したい。

1：稗田さんに着いていく。名波さんを守れたら守れたらいいかも知れない。

2：ヤンさんがちよつと怖い。銃持ってるし。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。
自分の役を子と推測。

学校を出よう！

座標D―06、鎌石小中学校。

ここに子が二人、親が二人、鬼が一人いる。ただし、子はふたりとも「レギュレーション違反者」だ。

『間田敏和』は、年齢が16歳以上であるため。『ジャック・ザ・リツパー』は……強すぎるため。

主催者側が何を考えてこの二人を会場に呼び寄せたのか。それは不明だ。当の主催者側の鬼たちさえも。

とにかく、そうであるからには始末せねばならない。『牛頭鬼』はそのために派遣された。通信機に馬頭鬼からの情報が入る。

『鬼があ为学校にひとりいる。ペニーワイズだ』

「つつてもな……あからさまに鬼の手助けするのも、どうよ。つか、俺が行っても大丈夫か？」

『同じ鬼で、知性と理性はある。さっきのギーグみてえにこつちを襲ったりはしないはずだ。たぶん』

「たぶん、か。……しばらく外で様子見たがよさそうだな」

そう言って牛頭鬼が観察していると、校庭から奇妙な霧が立ち込め始めた……。



「……なんか、やな気配がしますね」

「ああ……ヤバイやつが……たぶん、鬼が来てる、な……」

ヒデノリと間田は、冷気を、鳥肌が立つのを感じた。常人より少しは勘が鋭い二人だ。危険の接近を感じるのも早い。

「どうします。逃げますか」

「そうだな。罨がどれだけ通じるか……足止めぐれーにやあなるかもな……」

脱出経路は当然準備してある。窓からロープを垂らせば、すぐにも脱出できる。

拠点をいきなり捨てることになるが、これは鬼ごっこだ。危険な鬼が相手なら、固執せずに逃げるが勝ちだ。

他の親や子と合流した方がいい。木製人形をコンパクトにまとめ、最低限の必要物資をデイパック等に詰め込む。

「……ん」

間田の手が震え、持ったものがポトリと落ちる。なにかおかしい。ヒデノリも気づく。

「なんか……空気が淀んでる、感じが……換気を……？」

「いや、窓は開いてる……室内の空気が悪いとかじゃあない……これ……は！」

外からだ。外から有毒のガスが漂ってきている！二人は即座に口と鼻を抑え、カーテン布でマスクをし、荷物を背負って窓の外へ！

◆ 「子より少し大きいな。親か……？ あの子鬼のせいで勘違いしたのか……？」

ペニーワイズは少し失望しながら、獲物を狙い、学校の水道管を縦横無尽に駆け巡る。

気配を感知する。別の鬼が一、親が……三。校舎の外、別の鬼の近くに親が一。校舎内に、二。狙うならこちらだ。

だが……見当をつけて飛び出した先に、標的は既にいなかった。窓にロープ。別の鬼の接近に気づいて逃げたか。

ふと、気づく。妙なにおいが漂っている。霧だ。窓の外……校舎の外からじわじわと広がってくる。

別の鬼のしわざか。いちいち余計なことを。鬼同士で殺し合ってもしょうがないが、一言文句でもつけてやるか。

そう思い、霧の出処、その鬼のいる方へ目を向ける。そいつといた別の親は、もう殺されただろうか。

「……なんだ、あれは？」

◆ 「るーちゃん」が周囲を警戒している。ならば、私はこの子を守らねばならない。

若狭悠里はそう判断し、先程のようにカードケースを水たまりに掲

げ、『変身』と叫ぶ。

瞬時に彼女の体を緑色の戦闘服が包む。戦車をイメージさせる装甲、肩のランプ。右腰には銃。

彼女に与えられた支給品は、「仮面ライダーゾルダ」のカードデッキだ。

常人に恐るべき戦闘力を与え、鏡面から契約したミラーモンスター『マグナギガ』を召喚することもできる。

ここで呼んでもいいし、学校にはいくつか鏡もあるだろう。るーちちゃんと協力して鬼を倒す。可能だ。私たちなら！



「ゲホツ、ゲホツ……フーツ、危なかった……」

「まさか、毒ガス使うとは思わなかったツスね……」

座標C-06、観音堂付近。二人は深呼吸し、新鮮な空気を肺に満たす。火をかける程度は予想していたが、ある意味それよりヤバい。

やはり、籠城は危険だ。鬼ごっこというからには、身軽になって逃げ回らねばならないようだ。

鬼を迎撃して殺せるようなやつがいれば話は別だが、現状ではどうしようもない。

「どうします、これから」

「他の親や子と合流する、つてのが一番だろーな。仲間を探そう。いざとなりゃあ、そいつらを囷にして逃げる」

「いや倫理的にどうかとは思いますが、生き残るなら……個人的には子を守りたいんですがね」

「じゃあ普通にオレを守ってくれよ。確か、親が勝つには子の方が……あつ」

「？」

「い、いや、なんでもない。とにかく頼むぜ、ヒデノリくん」

間田はようやく気がついた。親が勝つ、イコール、子が負ける。自分がマジで子なら、親が勝てば自分は帰れない。

子が親より多ければ、子は勝つために何人か間引かねばならない。

逆に親は、子をより多く生かさねばならない。

敵は鬼だけじゃあない、『お互い』もだ。これはただの鬼ごっこじゃあないのだ。背筋が寒くなる。気づかれないようにせねば。

ヒデノリと間田は、道と民家と標識を辿り、学校から北西……鎌石村へ向かう。幸い牛頭鬼は学校の方へ注目していた。

【D-06 (鎌石小中学校) / 01時16分】

【鬼 (校舎内)】

【ペニーワイズ@IT/イット “それ” が 見えたら、終わり。】

【役】：鬼

【状態】：ダメージ(中)、ペニーワイズの姿で行動中、川尻早人への怒りと恐怖

【装備】：

【道具】：四次元っぽい紙袋 (不明支給品3つ)

【思考・行動】

基本方針：恐怖させ、喰らう

1：喰いやすそうな獲物を狙う。手頃な相手は幻術で追い詰める。

2：なんだ、あいつらは？

※その他

下水道で繋がっている場所なら何処からでも出現できます。

川尻早人の最も恐怖するもの (川尻しのぶの死) を把握しました。

同類 (ジャック・ザ・リッパー) の気配を感じました。鬼だと誤認しています。

【チーム・リーねえ&るーちゃん】

【ジャック・ザ・リッパー@Fateシリーズ】

【役】：子

【状態】：健康、魔力消費 (小)

【装備】：ボロボロのコート、ナイフ数本

【道具】：ランタン、不明支給品 (式札か水晶、ベルトポーチの中)

【思考・行動】

基本方針：リーねえ以外は全員解体する。

1：美味しい魂の持ち主がいたら食べる。

2：リーねえ（若狭悠里）についていく。

3：こいつ（ペニーワイズ）は敵だ。ここで始末する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。自分の役を鬼だと思っている。

霊体化、及び神秘を纏っていない攻撃は無効化は制限されていません。レギュレーション違反つばいため、牛頭鬼が始末に来るかもしれません。

気配遮断、霧夜の殺人（夜間のみ先制攻撃）、情報抹消（目撃者の記憶を消す）、精神汚染（精神干渉魔術を遮断）、外科手術のスキルを持ちます。

弱体化の程度は不明。ここが地獄であるためか魔力はそれほど消費しませんが、大規模な術の行使には魂喰いなどを必要とするでしょう。

同類（ペニーワイズ）の気配を感じ、敵と認識しました。恐怖を感じなさそうですが。

ランタンから宝具『暗黒霧都（ザ・ミスト）』を周囲数メートルに展開しました。幻惑等の効果を持ち、吸い込むと常人なら数分で死にます。

標的を選んだり外したりすることも可能で、リーねえには効果を及ぼしません。風が強ければ吹き流されます。

【若狭悠里@がつこうぐらしー】

〔役〕：親

〔状態〕：健康、精神錯乱気味、ゾルダに変身中

〔装備〕：ゾルダのカードデッキ@仮面ライダー龍騎

〔道具〕：チョコレート×10

〔思考・行動〕

1：るーちゃん（ジャック）を守り抜く。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。
精神が錯乱してジャックをるーちゃん（妹）だと思っています。

【チーム・根暗&メガネ】

【C-06（観音堂付近）／01時16分】

【ヒデノリ@男子高校生の日常】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：真田北高制服（ブレザーの冬服、上着なし）、鉈@ひぐらしのなく頃に、フライパン（民家から拝借）

【道具】：デイパック（中身は医薬品少々、うまい棒@支給品、発煙筒など）

【思考・行動】

基本方針：生き残り、現世へ帰還する。

1：学校から離れ、鎌石村へ向かう。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。親が帰還するために「子を減らす」必要がある可能性には気づいていない。

学校内部にいくつか罫を張りました。

【間田敏和@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：即席の木製人形（背負っている）

【道具】：『サーフィス』（スタンド能力）、式札、学校から持ち出したいくつかの道具

【思考・行動】

基本方針：家に帰りたい。

1：学校から離れ、鎌石村へ向かう。

2：スタンド能力のことはとりあえず秘密。

※その他

各役の勝利条件・制限時間を把握。自分の役を子だと推測。「間引

き」の必要性に気づきました。

実は16歳以上なので、レギュレーション違反に気づいた管理者から追手がかかっている。そのうち殺しに来るかも知れない。

投下終了です。ヤンほかで予約します。

気持ち、両方がどんどん強くなつていく中で、壁にかけられた時計に遅れて手もとのスマートフォンでも1時をむかえた。

「あ、なんだろう。」

約束の時間を過ぎてもなにをすべきかは定まらずましてや深夜らしい時刻といえどもまんじりともせず、ただスマホをチラチラと見ること一分ほど、変化は外部から訪れた。外部といってもスマホの画面にだ。おっこにもたえちゃんにもよくわからないが、トークアプリのようなものがなにか動いていた。見たところ、桜井リク、そして綾波レイというユーザー(?)がコメントしているようだ。つまりはこれは通信機能があるということであり――

「あの、たえちゃんさんってメールできませんか？」

「さ、触つたの今日が初めて……」

この二人には能動的に行える手段は無かった。豚に真珠猫に小判、いっそ機械オンチ二人に支給されたスマホくんが可愛そうである。

はあ、と揃つてため息をついた。何かしないといけないとは思っている。しかしどちらの道を選べばいいのかわからない。章吾を探しに行くのが正解か。しかしどこを探す?もしかしたら鬼に襲われて怪我をしているかもしれない。だったら自分も襲われたりそれで章吾の足を引つ張つたりするのでは?じゃあここで待つのが正解か。それは時間を無駄にすることになるんじゃない?それなら使えそうなものでも漁ろうか。でもそれはこの農協で働く人に迷惑をかけるのでは?は?

ぐるぐると巡り廻る思考の中で、おっこの手は半ば無意識に帯に仕舞われた飴玉へと伸びた。たえちゃんにお裾分けして二人とコロコロと口の中で転がす。考え事をする時は五分間隔で甘い物を摘むおっこの脳は、これがないとまともに妙案を出してくれないのだ。

口の中に広がる甘みと香りが脳をスツキリとさせるのを感じながら何度目かの黙考を継続する。そして飴がすっかり欠片になる頃になつておっこはすつくと立ち上がるとたえちゃんに向かって言った。

「たえちゃんさん、手伝ってもらえませんか?」

「——それで、親戚のおじさんの家に引き取られることになって。」

「じゃあ荷物とかも失くしちゃったてことですか？」

「あ、それは先に送ってたから……これはこつちだよね？」

数十分後、二人は農協の屋上にいた。おつこのだした結論は「ここで警察とか消防の人が来るのを待つ」というものだった。一度行き違いを経験したことと章吾の警告、二つのことから学習しこの建物で人を待つことにしたのだ。スマホが使えないことも影響し、とりあえず自分たちに行き止まることは何かと考えた結果、現在はそれぞれ親戚に引き取られた繋がりでもエピソードトークをしながら、屋上にあつたものを中心に使って『SOS』の文字を書いている。よく災害のときにあるアレ、それをなんとなく作っておけばヘリとかで探してくれてる人に見つかるかもしれない。

「おつこちゃんのお母さんは？」

「あ……あたしの両親はさつき言った交通事故で……あ！死んではないですよ！こないだも三人で温泉プリンっていうのを食べて——」

話しながらだがおつこはテキパキと、たえちゃんもそんなおつこの見様見真似で、広くはないといえそこそこのスペースがある屋上に文字を作っていく。上から見たときのことを考えて文字を太くしていけば、次第に横からでも字として見えるようになっていった。この分ならあと少しだ。

「おつこちゃん、これが終わったらどうしよつか？」

「そうですね……食べ物とか探しましょうか。もしかしたら助けが来るまで二日三日かかるかもしれないですし。」

「それはやだなあ。お風呂とかどうしよう。」

「あ、水道使えるのかな。電話と電気は使えなかったけど。あと甘い物もあるといいですよね。」

まるでキャンプかなにかのような穏やかな空気すら流れる。鬼ごっこ開始から約百分、二人は未だなんら直接の危機に遭遇していない。それが幸か不幸かはわからないが、しかし、ただ一人そんな二人を憎々しく見る人物がいた。

(二十四時間しか時間がないのになに言ってるんだ……)

農協に潜む草加雅人は苦い顔をしていた。てつきりどちらかはこの農協から外に出て人を探しに行くなりするかと思っただらまさかの籠城。こういうときはホラー映画でよくあるように無駄に危険な行動をするのではと予想していたのだが、想像以上に堅実な行動をとっていた。想定外である。おかげで出ていくタイミングを完全に失った。二人はときどき屋上から降りてきたりもするため気づかれずに出ていくことも難しい。そして何よりあの二人と関わることは「なにかマズイ」。あの二人からは名状し難い、知っているようで未知の違和感がある。

(まあ……目に入るところに『子』を二人置けたと考えればいいか。)

フン、と音なく鼻を鳴らして草加雅人は一人強引に溜飲を下げた。この鬼ごっこ、ルールを考えれば『親』である自分が『子』を二人確保したと見ればそう悪い状況ではない。あの二人がまるでルールを理解していないようであるのは気にはなるが、しかし草加の勝利にとってはむしろ好都合。各役の人数は不明だが、自分が知る範囲で『子』>『親』≧『鬼』という構図にしておくのは勝利への基本であろう。タイムアップまでこの構図を維持し逃げ切る、それが重要だ——
そういうルールである以上、何かしらの妨害は入るだろうが。

(『子』にとっては『親』も敵、襲われないとも限らないし。)

部屋の奥で耳をそばだてながら草加は自分が動くタイミングについて考え始める。残り時間約1350分。この長丁場のどこで仕掛けるべきなのか。今からでも動き出し未知のリスクを覚悟で動くべきか。真理が巻き込まれている可能性を考えれば妥当な判断だ。しかしまるで土地勘もなければ地図もないことは考えなくてはならない。では出遅れるのは覚悟で今は休み後の先をとるか。鬼ごっこであることを考えれば、昼になる頃には参加者は軒並み疲れ果てているだろう。自分が『鬼』で他の『鬼』と連携がとれるのならば、三交代ないし四交代のローテーションで休み無く追い立てる。であれば休める内に休んでおくのも悪くはないが、その場合鬼ごっこの流れから

取り残される恐れや真理に危害が加えられる可能性もある。判断は慎重にしなければならぬ。

参加者の空白地帯と化したH-06、周囲にいた者は皆遠ざかっていき、三名を残して農協は陸の孤島となった。仮におつことたえちゃんが外に出たとしてもおそらく小一時間は誰とも会わなかっただろうが、動かないことを選んだことで更に長い間人と会わないかもしれない。惨劇の舞台に生じた奇妙な風がいつまで続くのか、それを知ることがあるのかもわからずともかくにも時間は過ぎていく。

【H-06（農協）／01時31分】

【たえちゃん@コロちゃん】

〔役〕：子

〔状態〕：疲労（小）

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：『コロちゃん』

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りたい

1：おつこちゃんと一緒に農協で泊まる準備をしながら章吾くんの帰りを待つ。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

参戦時期は引き取られる直前

【関織子@若おかみは小学生！】

〔役〕：子

〔状態〕：疲労（小）

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：紅水晶

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰る。

1：たえちゃんさんと一緒に農協で泊まる準備をしながら章吾くんの帰りを待つ。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

参戦時期は劇場版の夏前（原作の六巻開始前）です。以後原作で明示されなかった事柄は劇場版に準拠するものとします（例：おっこの生年。原作ではおそらく1991年、映画ではおそらく2006年）。

〔草加雅人@仮面ライダー555〕

〔役〕：親

〔状態〕：健康、たえちゃんへの嫌悪感（小）、おっこへの嫌悪感（微）

〔装備〕：日本刀@現実

〔道具〕：デイパック（確認済支給品1）

〔思考・行動〕

基本方針：真理が巻き込まれているかを確認し、いるならば保護する。

1：子供達の様子を見ながら周囲を警戒する。

2：このまま潜む？真理を探しに行く？それとも接触する？いつそ寝る？

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

心に剣

「やれ。」

短く発せられた仮面ライダー王蛇・浅倉威の言葉と、それに合わせてベノスネーカーが発した毒液を合図に第二ラウンドは始まった。

二人の女戦士は左右にそれぞれに己の身を弾き、三者はベノスネーカーを中心に正三角形になるように対峙する。それを崩すように真っ先に動いたのはベノスネーカーに合わせた王蛇だったが、一番に攻撃を加えたのはセリユー・ユビキタスであった。

(まずは数を減らす！)

タタタタン、と軽快なリズムを上げて手に持った八十九式からライフル弾が発せられる。それが殺到するのは王蛇——ではなくベノスネーカー。銃では有効打にならないと見てまずはそのペットから潰しにかかる。そのセリユーの目論見は、銃弾を全く意に介さず振るわれた蛇の尻尾で見間違いであると知らされることになった。容赦なく襲い来る尻尾の薙ぎ払いを間一髪でスウエーバックすることで直撃を避け浅い裂傷一つで済ませる。

(どちらも硬い！)

「お前達はそいつで遊んでろ。」

「ツ！逃げてっ！」

無力感を感じた。セリユーの顔は歪んだ。

僅か数秒、一つの攻撃だけでこの場では自分が足手まといであると理解させられた。目の前の悪鬼は標的を助太刀に現れた正義の女騎士へとあっさり替え、顔すら向けずに手下をけしかけてくる。

二度三度と振るわれる尻尾を銃を盾になんとか凌ぎながら打開策を考えるも、妙案はそんなに都合良く出てこない。視界の端では女騎士が裏拳を悪漢に入れている。悪漢も頭突きから横蹴りで打ち返す。あちらは一進一退だ。視線を反対側に向ける。先程ぶっ飛ばされたメタリックなサイのような化け物が猛然とダッシュしている。まず間違いなく二人に割って入る気だろう。目の前を見る。振るわれた

尻尾で視界が縦に回る。殴り飛ばされながらわかったことは、この装備では勝ち目は無くものの一分で自分は敗北するだろうということだ。

数秒の考察の末に土の味とともに覚えたのは、自分たちが絶体絶命という事実、ただそれだけ。だが。

(なら、私がすべきことは一つ！)

だがそれがわかったことで彼女の方針は固まった。

「——たとえ刺し違えたとしても、悪を倒す！正義は——」

「なっ!？」

「ああ……?？」

「——負けない!」

メタルガラスが戦場に復帰するより一步早く、ベノスネーカーの尻尾が心臓を抉るより半歩速く、セリユーは駆ける。飛びつく。王蛇へと。裸絞!

この突然の行動に王蛇もピュセルも一瞬動きは止まるがどちらも直ぐに行動を起こした。二人が出した結論はその性格や境遇とは裏腹に同じ、「この女は時間を稼いでいる」、それが二人の共通理解。そしてそんな手段を取った理由についても同じ結論を出している。すなわち、「この隙を突ければ私(ピュセル)の勝ちで、防ぎきれば俺(王蛇)の勝ち」ということ。

(ダメだ!間に合わない!)

(まず一人だ。)

そして二人は再三、同じ理解に達していた。現在の状況は、二対一。ピュセル一人でセリユーを追ってきたベノスネーカーと戻ってきたメタルガラスの妨害をやり過^ぎこして、セリユーの拘束ができているうちに王蛇を倒す。それは「無理」である。

ピュセルの魔法によりその手に持つ剣が神速で伸びそれはさながら銃弾のように王蛇の元へと伸びるが、先程セリユーの背を抉ったベノスネーカーの尻尾が手元へと伸びることで危なげなくその軌道をずらし、王蛇の仮面を掠めるものへと変えた。これで終わり。次なる攻撃をしようにも、メタルガラスは既に王蛇の前に割り込もうとし、

返す尻尾がベノスネーカーによってピュセルの首へと振るわれる。防御、回避、逃走、それらの行動をとらされることを強制させられる。

岸辺颯太は剣と身を引きながら歯噛みした。判断ミスだ。あれでは一手足りなかった。自分か彼女かがもう少し考えを巡らせるなり手札があるなりすれば、あるいは連携が取れば良かったが、これでは彼女が無駄死にする。しかも、自分はたぶんそれをとめられない。さっきのタイミングで逃げてくれればまだマシだった——一瞬のことで言葉にはならない思いを文字にすれば彼が感じたことはそんなところだ。憤怒、悲哀、諦観、ないまぜに。だがそれでも彼がピュセル（乙女）である以上戦いをやめる気はない。最後まで全力を尽くす。それが使命である——

そんな彼の幼稚な自負心は、一つの勘違いは、彼が守ろうとする女の言葉でひっくり返った。

「自爆します！離れて！」

「ハア？」

「はあっ!？」

唐突な爆発宣言。まさかの展開である。そんな怪人がBパートの中間ぐらいでやりそうな展開がくるとは思いもしなかった。だが直ぐに、それこそ王蛇より早く理解した。

（特攻——！）

なるほど彼女の身体能力は少し見ただけでも常人離れたものである。そして彼女は言動が正義の味方である。この二つの組み合わせがさつたとき思いつくのはなんだろうか？

特撮ヒーローである。

筆者はそうである。皆さんもそうであろう。誰だってそうなのだ。

超人的な力と悪を憎む心、この二つを目の当たりにすればとりあえずヒーローを思いつく。このあたり特撮好きと魔法少女好きの共通項である。もちろん魔法少女と言っても戦わないタイプの魔法少女もいるのだが、岸辺颯太が好きなのはバリバリに変身ポーズをキメて

バリバリに戦い2クール目から3クール目ぐらいにかけて強化フォームが出て漫画版の戦闘描写がやけに気合入ってるタイプの魔法少女ものである。

なのでこの展開は彼にとっては見覚えのあるものだ。強敵相手に一矢報い、しかしトドメを刺すことができずに途中退場する、アレ。もしくは最序盤に主人公に先達が道を指し示して死ぬ、アレ。まさにそれが今彼の目の前で起こっている。

颯太は我が身を恥じた。先程は大変彼女に失礼なことを思ってしまった。魔法少女度は彼女の方が圧倒的に上である。守るつもりが命がけで助けられようとしているなど想像もつかなかった。彼女の言葉を聞いてからから僅かな間に颯太は大いに恥じ入り、そして彼は行動を決めた。ここで背を向けてはならない!と。

「うおおおおおおおっ!」

邪魔だと言わんばかりに剣を投げ捨てる。よもや投げるとは思っていなかったであろうメタルゲラスは脳天に直撃を受けもんどり打つ。それを踏み越え彼は王蛇へと走る。振るわれようとするベノスネーカーの尻尾を鞘を顔面にぶん投げることで狙いを狂わせ、怪人へと取り付く。既に女性の足の肉が握力で千切られていき拘束がとけかかっているがまだ時間はある。そして仕掛けるのはタックル!

一方の浅倉は彼の行動に呆れ鼻を鳴らしていた。ピュセルの剣を二三受けたが一発では致命傷になりえないことを把握している。まして武器を捨てたのならどうということはない。背中を盾にしてもいいしソードベントで迎撃も不可能ではない。身体能力は高いようだが喧嘩慣れしていない。それが颯太への評価である。それゆえ彼はバックステップと共に硬鞭を放つという、回避とカウンターを一度に行うような、スマートな行動をとった。そしてそれが失敗であつた。

「——獲った!」

「何だと……!」

「真剣、白刃取り……!」

回避に専念するでもカウンターに専念するでもない、下がりながら

の一撃。当然それは攻撃行動としても防衛行動としても不完全なものである。普通はその不完全さで相手の反応を遅らせたり更なる対応を取らせたりするので問題は無い、むしろどちらかに専念するよりも良手であるのだが、しかしここに例外がある。それは喰らう側が行動を決め打ち——つまり何があっても絶対にやるという『覚悟』がある場合。王蛇の事情など知ったことではなく確実に一つの行動をすると決めていたために、王蛇の攻防一体の動作は結果的に悪手へと変わる。その結果が。

(こいつ、胸で。)

「胸の脂肪で剣を耐えたッ!!」

ラ・ピュセルの胸の谷間に確かに確保されるベノサーベル!強かに打たれるも、死を覚悟した人間に敬意を表するために、彼は魔法少女になって以来五本指に入るほどに傷を負うことを覚悟した。もちろん痛いのは嫌だ。憧れの存在になったとはいえそこまでは本音ではやりたくない。が、そうは言っていられないのが今だ。意地があるのだ、魔法少女には。ここで貫き通さなくてはならない、ここで退いてはならない、そんな意地が。

(肋が折れてる、たぶん。)

(息ができない。痛い。苦しい。)

(でも、生きてる。)

(私も!生きているぞ!)

もっと早く、本気で戦うことを決意していれば。もっと鋭く、血生臭く泥臭く戦うことと向き合っていれば。自分は彼女にあんな命を投げ捨てるような行動を取らせはしなかっただろう。正直、自分には真似出来ない。特攻すれば誰かが助かるとわかってても、いざ実行に移そうとすれば、たぶん無理だ。自分の中にある岸辺颯太としての部分が拒絶してしまう。だから、名も知れぬ正義の女戦士を尊いと思う。閃光のように眩しく思う。そして尊敬に値する決死の行動には必死の行動で報いねばならぬと、自分の中にあるラ・ピュセルの部分が訴える。

その内なる声に応えるよう裂帛の気合いの大声と共に、颯太は、

ピュセルは魔法を使った。彼の、彼女の魔法は、『剣の大きさを自由に
変えられるよ』。そして剣は今まさにこの胸にある！

「離れてください！そして……飛んでけええええええええええ!!」
「ハハッ！やればできるじゃないかっ！ああっ!!」

———— STRIKE VENT ————

セリユートの拘束から解放された王蛇がメタルホーンを召喚し振る
うも、遅い。ラ・ピュセルの手により王蛇が手放したベノサーベル、そ
の柄の部分が超スピードで延ばされ王蛇を文字通り視界から消える
まで遠くへ運ぶ。装甲の薄い腹部に突き立てられた柄は王蛇の身体
をくの字に変える。王蛇の哄笑は秒で遠く消え、視界に映らぬほど遠
くでポトリと落ちた。

「逃げます」と一言だけ言ってピュセルはきびすを返した。使い魔
が浮き足立っているうちに離れよう、主との距離が離れば追って来
ないはずだ、そう読んでセリユートの答えは待たずにお姫様抱っこで抱
え上げ走り出す。後ろから毒液が飛んできたりもしたがダツシュの
最高速の方が早い。何よりその足取りが軽い。あるべき魔法少女像
の一端を見出し出した彼からすれば、もう何も恐くなかった。

【E—08／01時32分】

【浅倉威@仮面ライダー龍騎】

【役】：親

【状態】：イライラ（中）、腹部へのダメージ（大）

【装備】：王蛇のカードデッキ@仮面ライダー龍騎

【道具】：手鏡

【思考・行動】

基本方針：皆殺し。今は目の前の奴らを殺す。

- 1：???
- 2：アリスの他にもう一匹子を見つけてキープする。
- 3：北岡が居たら殺す。

※その他

【ルールの把握度】

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握、各役の人数、会場の地図を未把握。

※アリスを『子』だと思っています。

※現地上空を吹っ飛んでいます。どちらの方向にどのような飛んでいるかは皇族の書き手さんにお任せします。

【セリユー・ユビキタス@アカメが斬る！】

〔役〕：親

〔状態〕：ダメージ(小)、左足首付近と背中の一部の肉が抉れている。

〔装備〕：口と腕に仕込んだ内蔵銃

〔道具〕：八十九式小銃、予備弾倉。

〔思考・行動〕

基本方針：鬼ごっこを止める。悪は殺す

1：正義の女騎士さんと協力して悪(蛇男)を殺す。なので追撃したい。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握、各役の人数、会場の地図を未把握。

※コロは異能と判断されたのか没収されました。

※十王の裁きは五道転輪炉(自爆用爆弾)以外没収されています。

※他の武装を使用するにはコロ(ヘカトンケイル)@アカメが斬る！との連携が必要です。

【ラ・ピュセル(岸边颯太)@魔法少女育成計画】

〔役〕：子

〔状態〕：ダメージ(小)、肋にヒビ、高揚、セリユーへの敬意。

〔装備〕：『スマートフォン(子)』

〔道具〕：マジカルフォン(私物)

〔思考・行動〕

基本方針：スノーホワイトの騎士として人々を助け、N市に帰る。

1：とつとと逃げる。

※その他

「ルールの把握度」

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

とどまりたければ走り続けろ

「はあ……痛ッ……」

座標E-07、とある民家。痛々しく顔を腫れ上がらせ、包帯を額に巻いた金髪の少女が、呆然とベッドに座っている。

一体何が起きたのか、理解が出来ない。拉致、投下、鬼、打撲、出血、気絶。記憶が断片化しそうになるのを必死につなぎ合わせる。

これは、悪夢か。現実か。意味がわからないが、ここで鬼ごっこをしろ、親の役だ、と言われている。親は鬼から子を守るのだと。

しかし、自分に戦う力などない。皆無だ。鬼はと言えば、完全にバケモノで、自分をいきなり殺しに来た。

その鬼は、幸運にも別の鬼と殺し合いを始め、私を放置して去っていったようだ。気絶した私を助けてくれたのが、浅倉という男。

彼は——鬼ではないが、怖い人ようだった。私を助け、食糧まで与えてくれたのだから、根は悪い人ではないと思うのだが。

しかも彼は、何か……特撮ヒーローに変身することが出来るらしい。そして私に「ここにいろ」と告げ、外へ出ていった。

好意的に解釈するなら、彼はその力で他の参加者を助けに行った、のかも知れない。きつとそうだ。そう信じよう。

善良で無力な彼女、アリス・カータレットには、他に選択肢はなかった。気紛れかも知れないが、強力な親に守られている。

彼女は幸運だと言える。ただ問題は、浅倉にひとつ、ウソをついたこと。自分は『子』だと告げたこと。

なぜ、そう告げたか。彼女は「鬼ごっこ」のルールを読み、既に気づいているからだ。

『親』が生還するには、『子』が親より多く生き残らなくてはならない。すなわち、子が何人いるか不明な現状、生還を望む親は……子を守

り、他の親を「間引く」可能性がある。アリスは、こう見えても18歳だ。奪われたデイパックにも「あなたは親です」と明記してあった。

だが、浅倉にバカ正直に告げれば——彼は、自分を、殺しただろ

う。確信出来る。

体の震えがひどくなってきた。傷のせいではない、恐怖のせいだ。このウソをつきとおさねば、自分は死ぬ。

あるいは、一縷の望みとして……自分が死んでも、親が勝利すれば、生き返れるかも知れない。でも、死にたくはない。決して。

どうする。どうすることも出来ない。何も。ここで震えて、浅倉の帰りを待つことしか。だが武器もない自分が、無防備なまま、誰かに襲撃されたら？

膝を抱えて震えるアリスの潜む家に、何者が近づいていた。

◆
「フー……とにかく、他の参加者と合流しねえとな……ひとりじゃあ心もとねーしよ。グスッ」

森の中。山道を辿って進んでいくのは、左目を失ったシルクハットの男。マジエント・マジエントだ。

座標F―08、無学寺を襲った謎の災害から生き延びた彼は、その災厄が転げ落ちてきた方向へ進んでいた。

次から次へアレが来る様子はない。ならば、むしろそっちへ遡った方が安全だろう、という程度の思いつきだ。

実際、アレによって地面がえぐり取られ、木々がなぎ倒されて道がついている。

ふと目を脇へ向けると、民家が立っている。慎重に観察すると、新しい足跡が見えた。中に誰がいるか、いないか。

誰もいなくても、物資を回収したり休息をとったりは出来よう。マジエントはそう判断し、その家へ近づいていく。

◆
その東、座標E―08、東崎トンネル付近。

ここでは本来のゲームである「鬼ごっこ」をよそに、怪物二体を従えた怪人と、二人の正義の味方が対峙している。

怪人が従えるのはミラーモンスター。サイ型のメタルグラスと、大

蛇型のベノスネーカー。いずれ劣らぬ魔物ども。

しからば、この怪人は『鬼』なのか？ 残念ながら『親』だ。その身に纏う装束も怪物たちも、「支給品」とその産物に過ぎない。

彼とこの支給品は、ある意味この鬼ごっこの舞台の根幹をなす秘密に最も近いと言えるのだが、当人にその自覚はない。

生憎、彼——浅倉威は、極めて自己中心的な悪人だ。そんな男が、超常の力を振るう。危険極まりない。

対する正義の味方のうち、セリユー・ユビキタスは、浅倉に勝るとも劣らない危険人物だ。

彼女の正義は偏狭で、独善的で、自己中心的だ。相手を悪と認定すれば殺害も辞さない、否、殺害を最優先する狂った女だ。

そんな女が、銃で武装している。危険極まりない。

もうひとり、ラ・ピュセルこと岸辺颯太は、さほど危険ではない。純粹な戦闘力だけなら、モンスターたちに充分対抗できよう。

ただ、彼女……彼……ラ・ピュセルは、殺し合いには向いていない。所詮は、魔法少女に憧れていた夢見がちな少年に過ぎない。

未来には無惨に殺される運命が待っている。それはここになるのか、あるいは。

——やがて、ラ・ピュセルの活躍で浅倉は突き飛ばされ、セリユーとラ・ピュセルは逃走に成功した。互いの先には何があるか。



ところで……その南。座標F—08、無学寺。

時刻は午前1時30分過ぎ。その数十分前、この場所では大規模な破壊が行われ、寺は原型を留めないほど粉碎されてしまった。

それをしでかしたのは、ギーグという『鬼』。全てを破壊するために動き回る現象めいた災厄。

神塚山の東斜面に沿って、転げ落ちるように寺を破壊し尽くしたギーグは……では、どこへ行ったのか？

破壊の痕跡は、そのまま東へ。道路を横切って海へ続いている。海へ落ちたのだ。

バー」が彼女を見張っています。

【マジエント・マジエント@ジヨジヨの奇妙な冒険 SBR】

【役】：親

【状態】：健康（戦闘で左目を失っており、偏頭痛やよだれ・鼻水を垂れ流す後遺症がある）

【装備】：スタンド『20th Century BOY』（動かなければ絶対防御）、レミントン・ダブルデリンジャー@現実

【道具】：頭陀袋（無学寺から調達、金目のものが適当に詰め込まれている）

【思考・行動】

基本方針：鬼ごっこで優勝する。とりあえず『子』を守れば良いのかあ？任せろ！

1：子や親を探す。

2：あの変態野郎（げんげん）を見つけ出して殺す。

3：災害（ギグ）を無傷で乗り切ったことで自信がついた。

※その他

【ルールの把握度】

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

※レギュレーション違反に気づいた主催者から追手がかかっている。優先順位は比較的高い。

※デイパックと支給品二つ（シザースのデッキ@仮面ライダー龍騎、金塊@Gengen Channel）はミラーワールド内に放置されています。

消滅するか、また既になっているかは不明です。

【E-08 / 01時32分】

【浅倉威@仮面ライダー龍騎】

【役】：親

【状態】：イライラ（中）、腹部へのダメージ（大）

【装備】：王蛇のカードデッキ@仮面ライダー龍騎

〔道具〕：手鏡

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し。今は目の前の奴らを殺す。

1：???

2：アリスの他にもう一匹子を見つけてキープする。

3：北岡が居たら殺す。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。各役の人数、会場の地図を未把握。

※アリスを『子』だと思っています。

※現地上空を吹っ飛んでいます。どちらの方向にどのように飛んでいるかは後続の書き手さんにお任せします。

〔セリユー・ユビキタス@アカメが斬る！〕

〔役〕：親

〔状態〕：ダメージ（小）、左足首付近と背中の一部の肉が抉れている

〔装備〕：口と腕に仕込んだ内蔵銃

〔道具〕：八十九式小銃、予備弾倉

〔思考・行動〕

基本方針：鬼ごっこを止める。悪は殺す

1：正義の女騎士さんと協力して悪（蛇男）を殺す。なので追撃したい。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。各役の人数、会場の地図を未把握。

※コロは異能と判断されたのか没収されました。

※十王の裁きは五道転輪炉（自爆用爆弾）以外没収されています。

※他の武装を使用するにはコロ（ヘカトンケイル）@アカメが斬る！との連携が必要です。

【ラ・ピュセル（岸边颯太）@魔法少女育成計画】

〔役〕：子

〔状態〕：ダメージ（小）、肋にヒビ、高揚、セリユールへの敬意

〔装備〕：『スマートフォン（子）』

〔道具〕：マジカルフォン（私物）

〔思考・行動〕

基本方針：スノーホワイトの騎士として人々を助け、N市に帰る。

1：とつとつと逃げる。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

【ギーグ@MOTHER2】

〔役〕：鬼

〔状態〕：健康

〔装備〕：無し

〔道具〕：無し（支給品は全て破壊済み）

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し（ギーグがそう思っているわけではなく結果的に
そうなるのである）

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。そんな知性も理性もない。

※会場からは出られない。参加者がある程度かたまっているのを
察知し、周囲を破壊しながらじわじわと向かってくるようだ。

※ほぼ無敵。たぶん「お守り」がないと倒せないが、そも命中する
のかどうか。お守りも効かなければ、もうどうしようもない。

勝敗を分けるのは執念さ

「は、早人!？」

「逃げるよ!!ママッ!」

しのぶの手を取り、早人は破碎孔から外に出る。

しのぶは……さつきから恐怖と困惑の連続だ。いつの間にか拉致され、わけのわからない鬼ごっこに投げ込まれ、息子までいて。

腹のキズは深くはない。アドレナリンのせいかそれほど激痛ではないが、痛みを感じるつてことは、夢じゃあない。

鬼。あのピエロや、さつきの女の子がそうだというのか。ごっこじゃあなく、本物の鬼だと!

しかも、さつきから早人は八面六臂の大活躍だ。ピエロを撃退し、すごいキックで女の子の鬼を蹴り飛ばしたッ!

「は……早人ッ! わけが、わけがわからないけど……どうするの!？」

「逃げるんだ! そして、どこかへ隠れなくてはッ! 殺したわけじゃあない! 必ず追ってくるッ!」

ボゴオッ! 背後で瓦礫の吹き飛ぶ音! 少女の姿をした、あの恐ろしい鬼が、瓦礫を弾き飛ばして立ち上がった!

次にやつはどうするか? 早人は逃げながら考える! 距離がある! 近づくのは危険かもしれない! ぼくがやつなら!

「ママ、伏せてエーッ!」

「ヒイツ!？」

咄嗟に身を伏せるしのぶ! その頭上に、やや大きな瓦礫が! やつが投げたのだ!

抛物線を描き落下してきたそれは、身を伏せようとうしようとうしのぶと早人を押しつぶす! だがッ!

「今だッ!」

瞬間! 早人は精神力を爆発させ、『オーバーヘッドキック』を繰り出したッ! 彼の履く『キック力増強シューズ』が足の筋力を向上させたのだ!

ドグシャアツ！ ギュオンツ！

「!!」

瓦礫を猛烈な勢いで蹴り飛ばす！ 少女の姿の鬼『アルシア』は難なく回避するが……すでに早人らの姿はない！

シューズは走る速度やジャンプ力も強化する！ 彼は着地すると、しのぶを抱え、ランドセルを背負ったまま猛烈な速度で跳び上がる！

「おおおおおおー……ッ!?!」

「きやああああー……ッ!?!」



「う、痛……!ー! ハッ!」

「ぶ、無事よ……!ー! ハア、ハア、ハア……!」

早人は母の無事を確認する。跳躍を繰り返し、デタラメに走り回り、早人たちはアルシアから逃走することに成功した。

そして、目の前に……二人の少年と一人の少女に、立ち向かう。

少年の一人、中学生ぐらいの学ランの男は、機関銃を突きつけている。ゆっくりと、早人は両手をあげる。

「安心……して下さい、というのも、なんですけど……。ぼくは川尻早人。『鬼』じゃあなく『子』です。」

この女の人は『親』の役で……川尻しのぶ。ぼくの実の母親です!」

「……………」

少年たちは……少女をかばってるってことは、たぶん鬼じゃあない。鬼の可能性もあるが、低い。

話を通じるなら、仲間にするべきだ。ここまで鬼に襲われっぱなしで、ママ以外とは合流出来ていない。

「お騒がせして、巻き込んでしまったのは謝ります! 必死に逃げて来たんです!」

もうすぐ……少女の姿をした、ヤバい鬼が追ってくる。その前に、ここから逃げないとツ!」

「お……お願いしますッ! 私からも……! このままでは、殺され

てしまうッ！ 助けてッ！」

◆ 桐山は……『少女の姿の鬼』と聞いて、眉根を寄せた。おそらく、あいつだ。

他にも似た鬼がいる可能性はあるが、この母子が来た方角からして、他に考えにくい。

どうするか。人数は多いが、戦えそうな奴は少ない。対抗手段を持つ自分が戦うとしても、あれを相手にして、こいつらを守り切るのは困難だ。

「逃げよう」

桐山が呟き、イリヤとカレイドルビー、ニケも無言で同意する。

「で、どっちへ逃げるの？」

「そりゃ、その鬼の逆方向だろ。つまり、こいつらが来た方の逆」

ニケが親指でそちらを示す。

「ああつと、俺はニケ。こいつはイリヤと、桐山。あと、カレイドルビー。よろしくな」

簡潔に自己紹介を済ますと、一行は走り出した。

【E—06／01時33分】

【川尻早人@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

【役】：子

【状態】：疲労（小）、右手に切り傷（治療済）、ペニーワイズへの怒り、少女（アルシア）への恐怖

【装備】：ランドセル、キック力増強シューズ@名探偵コナン、ほむらの盾@魔法少女まどか☆マギカ

【道具】：（ランドセルの中に）猫草@ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない、水晶、救急箱

【思考・行動】

基本方針：母を守り、帰還する。

1：ニケたちと同行し、鬼から逃げる。

※その他

各役の人数・会場の地図・制限時間の詳細は未把握。 自分の役を子であると推測。

ペニーワイズを鬼と認識。彼の『変身する能力』を認識しましたが、詳細は把握していません。

少女（アルシア）を鬼と認識。「ほむらの盾」の能力は知りません。

【川尻しのぶ@ジヨジヨの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない】

〔役〕：親

〔状態〕：腹部に傷（小、応急処置済）、恐怖

〔装備〕：なし

〔道具〕：なし（テイパックの中身は早人とアルシアが装備中）

〔思考・行動〕

基本方針：家に帰りた。

1：早人に従い、鬼から逃げる。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【イリヤスフィール・フォン・アインツベルン@Fate/kareid liner プリズマ☆イリヤ】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：カレイドルビー

〔道具〕：水晶

〔思考・行動〕

基本方針：この島から脱出する。

1：ニケ君たちに協力する。

2：早人らとともに鬼から逃げる。

※その他

ニケが見つけた紙により、自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・制限時間を把握しました。

【ニケ@魔法陣グルグル】

〔役〕：子

〔状態〕：健康

〔装備〕：なし

〔道具〕：お守り、鬼ごっこのルールが書かれた紙

〔思考・行動〕

基本方針：ククリ達と合流してギリを倒しに行く。

1：イリヤ達と協力してこの島から脱出する。

2：早人らとともに鬼から逃げる。

※その他

見つけた紙により、自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・制限時間を把握しました。

【桐山和雄@バトル・ロワイアル（漫画）】

〔役〕：子

〔状態〕 健康

〔装備〕：イングラムM10サブマシンガン、デルタドライバー

〔道具〕：銃のマガジン（複数）、式札

〔思考・行動〕

基本方針：ニケとイリヤを勝利者とする。

1：「子（一定人数）」「二人に害意や悪意を持つ親」「親を減らそうとする親」「鬼」を水面下で排除する。

2：早人らとともに鬼から逃げる。その鬼をアリシアと推測。

※その他

ニケが見つけた紙により、各役の人数・各役の勝利条件・制限時間を把握しました。

アルシアと戦闘し、超常の存在がいた我知道了。

デルタギアは誰でも変身できるよう調整されていますが、オルフェノクや適合者以外が変身すると凶暴になります。

◆
アルシアは……川尻早人の『足跡』を追う。追いながら思考する。

足跡は深くめり込み、歩幅は相当に離れている。かなり人間離れし

た脚力だ。だが制御しきれしていない。おそらく彼の靴に仕掛けがある。

やはり、今度こそ、脚を最初に潰す。それと……彼が庇っていた女には、戦闘力はない。文字通りの足手まとい。彼女を先に狙うか。

そして……やつらが逃げていく先。この気配は感じたことがある。先程仕留めそこねた、黒服の少年。

偶然か必然か、標的は合流する。単体で手こずった両者に手を組まれては、少々厄介かもしれない。

こちらの魔力と装備は充分だが、近接戦闘用が多い。投擲以外に、遠距離攻撃用の武器があれば、足止めにはなるか。

【E-07 / 01時33分】

【アルシア@白貌の伝道師】

〔役〕：鬼

〔状態〕 健康、魔力消費（中）

〔装備〕：嘆きの鉈・群鯨@白貌の伝道師、紐付き柳葉刀@BLACK LAGOON、粉碎王（手甲）@アカメが斬る！零

〔道具〕：スマートフォン（鬼）

〔思考・行動〕

基本方針：出逢った全てを殺す。

- 1：桐山を追う。殺したら死体を回収する。
- 2：次からは、今度こそ、獲物の脚を最初に潰す。
- 3：この付近に居る獲物（早人・しのぶ）を追う。
- 4：遠距離攻撃用の武器が欲しいところ。

※その他

各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

桐山、アリス・カータレット、川尻早人、川尻しのぶの顔を認識しました。

容疑者：桜井リク

容疑者：桜井リク

僕の名前は桜井リク。ついこの間までどこにでもいるような小学生だった。ラストサバイバルという大会で優勝して少し成長したと思うけれど、それでも自分はそんなに変化してないと思う。特撮のスーパーヒーローみたいに強くなつたわけでもないし、映画の主人公みたいに何かの陰謀を止められるわけでもない、ほんの少しだけふうじやできない経験をしただけの子供だった。それは、この鬼ごっこに参加されられていたとわかったときもそうで。だから。

だから僕は目の前で人が死ぬところを見て、自分が想像もできないことに巻き込まれているんだって自覚した。

「喉を刃物で一突きにされてる……明らかにこれが致命傷かな……」

その場でいち早く行動を起こしたのは狛枝風斗だった。元から白い顔を更に白くしながらも死体と化した綾波レイに近づくと、なおもその遺体を揺さぶる野原しんのすけを押しとどめて、震える手で傷を検める。

「こ、これって連続殺人なんじゃ。この刺し傷はこっちの男の子と、その……」

「警察の人がそういうなら……ただ、古畑さん、男の子の方はまだ死んでないですよ……」

古畑任三郎の偽名を名乗る今泉慎太郎もそれを見てショックから立ち直ると、綾波と血塗れで気絶している名も知らぬ少年——金谷章吾の間で視線を往復させる。この場にいる唯一の大人で警察官である彼には自然一同の目が集まるが、彼にしてもこのような、目の前の人死んでいき死体ができる光景などほとんど経験は無かった。

ここで状況を整理しよう。

綾波レイ殺人事件が起こったのは、今この瞬間から一分ほど前だ。

被害者が息絶える瞬間を一人を除いたこの場の全員が目撃したため、このことに間違いはない。

次に、犯行現場はG-07にある『地図にない分校』の敷地のすぐ西側である。大方の学校がそうであるようにこの学校もフェンスで囲われているが、まさにそのフェンス沿いだ。この殺害現場は、フェンスの東側は学校、西側は藪ときれいに分かれている。走って数秒の北側には裏門があり、一方南側はフェンスが続いている。なお、ここでの方角は必ずしも正しいという保証はなく、学校の間取りから類推されるものであり、便宜的なものである。

そしてこの場には、綾波を含め合計八人の人間がいる。その事件直前の行動は大きく分けて東と西の二つに分類できる。綾波レイが襲われた際にどちらの方向にいたかだ。

一人はプレティーンの男子、桜井リク。彼はこの学校がスタート地点だった。学校を一通り調べたあと拡声器で呼びかけ古畑と連絡、その後学校で古畑を筆頭に他の人間と合流し、そこで謎の叫び声を聞いた。叫び声の探索では東を担当し、そして西のグループの呼び声でここに来た。

一人は中年の男性刑事、古畑任三郎。彼は拡声器で呼びかけてきたリクに東の交番から拡声器で応えて学校に来た。そして後はリクと行動を共にしていた。

一人は男児、野原しんのすけ。彼はグレーテルとおそらく西で出会い、それから彼女の運転する車で東進。途中でエスターも加わり、以後学校の南を通り東の交番へと移動。そこで狛枝と綾波と合流して学校に向かい、古畑達と合流した。探索では東を担当している。

一人は女児、エスター。彼女はグレーテル達と出会ったあととはしんのすけと行動を共にし、それは探索から今このときまで続いている。以上の四名が東のグループだ。彼らは西のグループと別れたあと、ほぼひとかたまりになって校舎の南側を歩き、狛枝の呼びかけでとって返して校庭に面した保健室に立ち寄りそこで担架を手に入れ、ここに駆けてきた。アリバイと言ってはなんだが、探索時の行動は全員が全員に対して保証できる。それでは次は西のグループの四名だ。

一人はローティーンの少女、グレーテル。彼女はおそらく西の神社で車を手に入れ、途中でしんのすけと出会ったあとは学校に向かうまで行動を共にする。探索では西を担当し狛枝や綾波と共に謎の少年を発見。裏門を通って生死を確認するとその場で綾波と共にいたが、綾波が突然倒れたのを見て叫び声を上げた。

一人はハイティーンの少年、狛枝風斗。彼は南で綾波と合流し、その後見かけたグレーテル達の車を追って東に移動、合流すると彼女達の車に便乗して学校に行き、探索では西を担当した。綾波とグレーテルと共に謎の少年を発見すると、古畑から交換してもらった拡声器で東のグループに呼びかけ、他のメンバーと謎の少年の生死を確認。その後改めて担架を持ってくるよう呼びかけるためその場を離れ裏門を通り敷地に戻ったが、グレーテルの叫び声で駆け戻った。

一人はミステリアスな少女、綾波レイ。彼女は狛枝と合流後彼と常に行動を共にしていた。探索でも狛枝について西を担当すると、狛枝が敷地に戻る時まで離れることはなく、その数秒後には何者かに襲撃され殺害された。

そして残るは最後の一人、謎の少年だ。おそらく年齢はグレーテルと同年代で、両腕には刃物で滅多刺しにされたかのような傷口が無数にある。出血も酷く血塗れで、西から来たのか藪の中には血痕が点々としている。意識も無く、すぐにでも救急車を呼び病院に搬送しなくては命に関わるだろう。わかっているのはそれだけだ。

これが西のグループの内訳だ。彼らは東のグループと別れたあと同じように校舎の南側を歩き少年を発見、安否を確認する時に四人が集まった。その後、狛枝が僅かにその場を離れたタイミングで何者かが綾波を殺害したと思われる。

ではその綾波の殺害方法はどのようなものかというところ、おそらく刃物のようなもので喉を一突きにされたことだ。死因は失血、並びに脳や脊椎の損傷も考えられる。そして特筆すべきは、目撃者がいないということだ。西のグループは一緒にいたが、もちろん常に互いを目視していたとは限らない。狛枝はその場に背を向けていただろうし、謎の少年は気絶していただろうし、綾波は見ていたとしてもすでに喋れ

ない。狛枝がその場を離れ綾波が倒れたことでグレーテルが彼女を見るまでのおよそ数秒間、綾波に何が起こったのかは誰もわからないのだ。

そしてこの殺人事件で一番の問題点それは――

(まずは通報して、ダメだ電話は通じない……それより救急を、つてそれもダメか。なら鑑識を呼んで……警察じゃないか!?)

この場合は命がけの鬼ごっこの舞台であり、警察がいらないどころか超科学的な技術すらあり得るということだ。

息を吸って、息を吐く。

血の臭いがして、口で息を吸って、吐く。

肺の中まで血がこびりつくような気がするけど、それでも大きく深呼吸する。

周りを見渡す。

古畑さんと狛枝さんは綾波さんを見ている。グレーテルさんとしんのすけくんはそれを僕みたいに呆然と見ている。エスターちゃんは、僕と目があった。

よし、僕は冷静だ。冷静になった。あとエスターちゃんも。僕は今すぐ動揺している。でも動揺していると自覚するぐらいには落ち着いてきた。だからまだ動ける。

最初から考えよう。

今は鬼ごっこをしている。古畑さんと狛枝さんが言っていた。まずそれが正しいかだけれど、僕には今はわからない。情報が無い。どうしよう。どうしようもないか。じゃあ……とりあえず、後回しだ。次だ。次のことを考えよう。

僕達は叫び声を聞いて、その正体がなにかを調べていた。動物みたいな、人間が出せるとは思えない声だった。そしてその声が何か調べようってなって、二手に別れて探した。うん……ここはおかしくない。声は怖かったけれど、怖いものを放っておくのももっと怖いし。二手に別れたのはちよつと失敗だったかもしれないけれど。

その後だ。その後、狛枝さん達は僕達を呼んだ。拡声器でだ。男の

子が倒れているって。それで僕達はUターンして戻ってきて、少ししてまた拡声器で担架を持ってきてほしいって言われたから保健室に寄ろうってなった。そのすぐ後に、グレーテルさんの叫び声が聞こえた。それで、担架を出して急いで向かったら、こうなってた。

同い年か一つ年上ぐらいの男の子が倒れている。腕が、たぶん包丁か何かで切ったり刺されたりしたみたいになってる。

正直、気持ち悪い。

見ていたくない。

それでも見ないといけない。

何十ヶ所もザクザク刺されてるけど、まだ生きている。救急車を呼べば助かるかもしれない。

それで、それで……綾波さんも、喉を刺されたみたいだ。たった一つの傷なのに、死んでいる。たぶん殺されたんだ。

なんだろう……なにか、おかしくないか？

もう一回深呼吸した。

なにか、なにか見落としている気がする。

探偵じゃないからわからないけれど、それでもなにかおかしい気がする。

でも、そのなにかがわからない。

(———こういう時、ゲンキ君ならどう考えるかな。)

自分じゃわからなくても、ラストサバイバルで出会った子ならどう考えるか、それを考える。

一人一人の顔を思い浮かべて、もしこの場にいたらって。

そうして考えて、考えて、考えて……一人の女の子のところまで止まった。

(ラストサバイバルは、人は死ななかつた。もし、これが殺人トリックを競う、サバイバルミステリーとかなら、人を殺さなくても殺し合うようなルールだったら、きつとカレンさんは……)

『叫び声？ それって罠なんじゃありませんの？ その気絶している人が、バカみたいに近づいてきた人を殺すための。返り血もあんなに血塗れならわかりませんし。』

『ああ、その人を囮にしたかもしれませんね。死なない程度に刺して、助けに来た人を刺す。何度も繰り返し返せばお人好しの死体がいくつも転がったりして。』

『グレーテルさんと狛枝さんが共犯の可能性？　なくはないでしょうね。二人がかりなら素人でも一人殺すことも可能でしょう。返り血をどうしたのかのトリックが問題ですけど。貴方は古畑さんを『鬼』と疑っているようですが、彼だけが『鬼』であるとする根拠なんてないんじゃないですか。動機？　そんなもの必要で？』

『というか、今この話をしている瞬間にも襲撃される危険性がありますね。ああ怖い、部屋に戻らせていただきます。ふふっ、こういうことというのは次の被害者か真犯人って決まっていますけど、わたくしはどちらでもないですよ。』
(うん、言いそうだ。だけどカレンさんならもつとろくでもないことしそうだ。)

頭の中で一人の女の子がニヤニヤ悪い笑顔をしながら言うのを想像して、納得がいった。本人には悪いけれどたぶんこのどれかが正しいと思う。

よし、もつと冷静になってきた。今のここは、冷静になったらすごく怖い状況なんだ。

もし見えない殺人鬼がいるならもちろん怖いし、狛枝さんやグレーテルさんや男の子が犯人なのもすごく怖い。そして、こういうふうに人を信じられなくなるのが一番怖い。男の子が犯人かもしれないと思うと、助けようとは思えなくなる。今も血が流れて、死んじゃうかもしれないのに、見捨てようと思うようになる。

だから……この考えは誰にも言えない。カレンさんならたぶんさつきみたいに親切に教えてくれて、疑心暗鬼にさせたはずだ。そうして戸惑わせて、自分は一人で罨でも張ってどこかに立てこもったりする。なんならここに爆弾の一つでも置いて立ち去ったりしたたりもするかも。ルールが許すならもつとひどいこともするはずだ。

「古畑さん、狛枝さん。この男の子を保健室に運びませんか？」

だから今は、そうさせないようにする。

新しい事件が起きないように気をつけながら、まずは男の子を助ける。

古畑さんに粕枝さんにグレーテルさんに男の子、怪しい人は多いけれど、みんなが事件が起こそうと思わないような状況を作ることができれば、これ以上の殺人は止められるはずだ。

一人じゃ難しいかもしれないけれど、僕と同じことを考えてるかもしれない、カレンさんと同じ目をした女の子もいる。

僕はみんなを見て——ほんの少しだけエスターちゃんを長く見たあと——担架を持った。

（エスターとナギト。刑事さんは引っかからなかったけれど、二人は私を疑ってる。）

綾波レイを殺害した犯人であるグレーテルは、ここまでの状況を見てそう判断した。

人食い虎としての経験と嗅覚、それにより刑事である古畑が自分を疑うことはないだろうと当たりをつけてはいた。これはマフィアにも共通するが、なまじ殺人に精通しているために、無意識に子供を容疑者から外しがちなのだ。特にその殺人がシンプルなものや荒っぽいものほどその傾向があるとグレーテルは学習している。普通に考えれば、子供の容姿をした人間がプロの暗殺者のような技術や筋力を持っているとは考えない。例えば推理小説で、プロの軍人でなければ不可能な手口の殺人があったとして、その犯人が幼い少女が特殊な経験と才能で動機もなしに成したものとして、その真相に納得する読者がどれだけいるだろうか？

特に動機が無いというのは刑事にとって厄介だ。捜査の第一段階はその殺人の動機、ワイダニットを考える。これは通常の殺人では効果的だが、通り魔的な殺人では仇になる。初動捜査が丸々空振りになるからだ。これが今までグレーテル達双子が厄種として成長した要因として大きい。彼女達を捕まえることはプロであるほど困難なのだ。

トリックが無いというトリック、動機がなくとも殺人するという動

機。ミステリーにおいて存在そのものがタブー、それがグレーテル。故に、その足跡を追うには別の視点——たとえば、同じように子供の容姿で殺人をする人間や、あるいは同世代の若者同士で殺し合うような人間でなければ、彼女を怪しむという第一段階が超えられない。「古畑さん、狛枝さん。この男の子を保健室に運びませんか？」（それとこの子も。）

リクがエスターに目配せしたのを目ざとく見つける。彼女にとつてはノーマークだったが、この鬼ごっこ、『子』にも何人か勘の鋭いがいるようで、彼女としてはおもしろい。ブラッドパーティーを開く前の余興としてちよつとしたミステリーを演出したが、思いの外楽しめそうだ、そう考えて彼女は。

「待つて、レイは？　レイはどうするの？」

いの一番にリクの声に答える。謎の少年と死体の間で目を行き来させて声を詰まらせる彼を見て、グレーテルはその内心で笑みを深くした。ダメ押しとばかりに「まだ犯人が近くにいるんじゃない？」と古畑——を名乗る今泉が言ったことで、場には更に緊張が走る。当たり前のことを言っただけだが、それによりこの場は『殺人事件が起こった現場』から『殺人鬼が潜んでいるかもしれない場所』へと、その本質が明らかになるとともにそのように意味も変化する。

「殺人鬼がいるかもしれないところにいられないわ、早く行きましよう。」

「そ、そうだね。とにかく、死体はそのままにしておこう。現場を保存しておかないと。まずはこの男の子を運ぼう、その……」

「保健室に？」

「保健室！　そうだね、保健室だ。じゃあ担架を持って——」

古畑と狛枝が動き出し、他の人間も続く。年長者二人が少年を運び他の人間はその周りに固まって道を戻ると、さっきの解散地点から校舎に入った。その間誰も喋ることはない。つい数分までの弛緩した空気と賑やかさはもうなかった。

廊下を団子になって進み保健室へと行くと手分けして手当てに使えそうなものを探す。しかし、少年の傷に対して足るものはない。そ

もその傷が多すぎる。一応包帯などで止血を試みたものの、まるで出血が治まらない。「やっぱりどこにも通じなかったよ」と、通報を試みるべく職員室に行った粕枝が暗い顔をして戻ってくると、少年を囲む六人にはいよいよ恐慌と沈黙が広がるうとしていた。具体的な目的のあるうちはパニックにならずに済んだが、さて事態を好転させられる手が無いとなると、もはや綾波の死と向き合わざるをえない。そして部屋の隅では、名前も知らない少年が血を垂れ流し一秒毎に死に近づいていく。

グレーテルは更にその笑みを深くした。少し前までのぬるい空気は消し飛び、今は彼女が生きてきた世界の瘴気が空間に満ちつつある。これだ、これこそが。そしてグレーテルはゆっくりと、しかし確実に銃に手を伸ばしそれを乱射しようとして――

「車で病院を探すっていうのは、どうかな？」

(あら、まだね。)

粕枝の唐突な提案でその手を止めた。

「学校や神社に交番があるなら、病院があってもおかしくはないんじゃないかな？　ここに来るまでに町を通ったんだけど、学校と反対側の方は少し栄えてたみたいなんだ。古畑さん、免許は？」

「免許？　ああ、軽トラか。大丈夫だよ。」

「担架ごと荷台に積み込んで……よし、なんとかみんな乗れるかな。」

「……わかったわ、これキー――」

グレーテルとしてはあまり大人数で動きたくは無いが、もとよりノープラン、そのあたりは人任せである。彼女としては適当に遊ぶことが重要なのだ。だから特に考えもなく賛同してキーを渡そうとしたところだ。

「待って、その子が死んだふりをしてレイを殺したかもしれないわ。」

エスターが反対の声を上げた。

その内容とは裏腹に、彼女がその発言をした理由は、グレーテルの賛同であった。エスターの中では十中八九、グレーテルが綾波を殺したものとみなしている。境遇は違えど同じ屈辱に満ちた人生を歩んできたエスターにとって、グレーテルの薄っぺらな擬態など通るはず

もなかった。しかしながら同時に、グレーテルがどこまで破綻した人間かも彼女は見誤っていた。さしもの彼女も、グレーテルが動機なく殺人するような人間までとは思わない——なぜなら、それは彼女とは真反対の殺人に対するスタンスなのだから。彼女はグレーテルを『鬼』だと推理していた。でなければ『子』と思われる綾波を殺すメリットが無い。少なくとも今このタイミングで殺しに動くのは『鬼』のみだ。だからグレーテルが言ったことと反対をやるうとする、それがエスターの発言の真意だ。

「それに学校の外には『鬼』がいるのよ？ 病院がどこにあるかもわからないし、そんな危ないところに行けないわ。私はここを動きたくない。」

「……それもそうね。私もここに残りたいわ。」

「……」

そしてその言葉はグレーテルの便乗によって途切れた。彼女と離れたいから水を差ようなことをエスターは言ったのであって、これでは本末転倒である。

ちなみにグレーテルがそんなことを言ったのは、どうせなら放置された綾波の死体で遊ぼうという考えもあったのだが、それを知る者はいない。

「さっきの僕達の拡声器の声で、学校に行こうと思った人もいるかもしれないですよ？」

「うーん、確かにね……でも別行動をするとさっきみたいになるかもしれないし……」

「迷ってられないゾ！ 早くお兄さんをお助けしないと！」

「それはそうだけどね、しんのすけ君……」

先の重い空気とは一転して今度は荒れた空気になる。グレーテルを除く全員が正体のわからない殺人鬼の危険性を理解しているため、かえって話が纏まり難いものとなっていた。学校に残るのが安全か危険か、少年と外に行くのが安全か危険か、そしてこの場にいる人間のうち特定の人物が安全か危険か、その判断の組み合わせは全員が全員ともバラバラなのだ。

そして重要なことは、決断を先送りにはできないということだ。少年を発見してから約十分、その間出血は常が続いていた。このままでは確実に手遅れになる。それを良しとするものはこの場には表立ってはいないし本心がそうである者も多い。

少年の処遇をどうするのか。病院を探すのか、探すなら全員で行くのか二つにグループをわけるとか、わけるとかのような内訳にするのか。数分以内の合意が必要だ。

【G107（分校）／01時39分】

【桜井リク@ラストサバイバル】

【役】：子

【状態】：健康

【装備】：『スマートフォン（子）』

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：絶対に生きて帰る

1：綾波さんを殺した『鬼』を警戒。

2：古畑さん（今泉）は信用できない。粕枝さんとグレーテルさんも注意。

※その他

今泉慎太郎の名前を古畑任三郎として認識しています。

【ルールの把握度】

制限時間を把握。

自分の役・各役の勝利条件を推測。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【粕枝風斗@スーパーダンガンロンパ2】

【役】：親

【状態】：健康

【装備】：拡声器

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：希望の為の踏み台になる。

- 1：まずは男の子（金谷章吾）の手当てを優先する。
- 2：どちらかの陣営が希望になり得るか見定める。
- 3：綾波さんの話をもっと聞きたかったけれど……

※その他

プロローグ終了時からの参戦。

今泉慎太郎の名前を古畑任三郎として認識しています。

「ルールの把握度」

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【野原しんのすけ@クレヨンしんちゃん】

「役」：子

「状態」：健康

「装備」：『お守り』

「道具」：なし

「思考・行動」

基本方針：ネネちゃん家に行く。

1：レイちゃん……

2：男の子（金谷章吾）をお助けする。

※その他

今泉慎太郎の名前を古畑任三郎として認識しています。

「ルールの把握度」

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

【今泉慎太郎@古畑任三郎】

「役」：親

「状態」：健康

「装備」：警察手帳、拡声器@バトルロワイアル

「道具」：デイパック（555ギア@仮面ライダー555、サッカー

ボール@ホイッスル!!）

「思考・行動」

基本方針：可能な限り参加者を生還させる。

- 1：少年（金谷章吾）を手当てできる人を見つけない。
- 2：『親』とできたら警察を探す。
- 3：『鬼』には出くわしたくない。

※その他

古畑任三郎と名乗っています。

「ルール」の把握度

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【金谷章吾@絶望鬼(ごっこ)】

「役」：子

「状態」：気絶、左下腕10ヶ所・右下腕9ヶ所・左上腕6ヶ所・右上腕3ヶ所の包丁による刺し傷、失血（中・継続中）、精神的疲労（中）

「装備」：『式札』

「道具」：若干のお小遣いなど

「思考・行動」

基本方針：絶対に生きて帰る

1：何がなんでも生きて帰る。

2：自分以外の存在を探索。

※その他

佐山流美を『鬼』と誤認。

「ルール」の把握度

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

【エスター@エスター】

「役」：親

「状態」：健康

「装備」：ハンマー、青酸カリ@バトルロワイアル

「道具」なし

「思考・行動」

基本方針：『子』のふりをして立ち回る。

1：グレーテルを綾波レイ殺しの犯人と直感で判断、距離を置きた
い。

2：『子』として親の庇護を受けつつ、参加者の情報を集める。

3：制限時間が近づいたら、『親』を減らす。

※その他

今泉慎太郎の名前を古畑任三郎として認識しています。

「ルールの把握度」

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

各役の人数・会場の地図は未把握。

【グレーテル@BLACK LAGOON】

「役」：子

「状態」：愉悦Σ（・ω・ノ）ノ

「装備」：BAR

「道具」：スマートフォン（子）『』、血のついた新聞紙、不明（社務

所で狭軌として使えそうなものを中心に回収）

「思考・行動」

基本方針：皆殺し

1：一応犯人じゃないように振る舞っておく。飽きたら銃を乱射し
たり？

※その他

今泉慎太郎の名前を古畑任三郎として認識しています。

「ルールの把握度」

制限時間を把握。

自分の役・各役の勝利条件を推測。

各役の人数・会場の地図は未把握。

衆人環視の中で

ミスト

【1】

帰りは行きよりも早かった。

三日月・オーガスは『鬼』から逃走するために、もと来た道に戻ることを選んだ。それが一番シンプルな答えだからだ。ミカは基本的に単純な解決策を好む。それは自分の判断力が高くはないという自己分析と、信頼できるやり方を重視するという考え方からくるものだ。そしてもう一つ、理由がある。自分が出てきた鬼の牢獄に『子』を連れて行くのはこの鬼ごっこにおける正解だからだ。

かばんはともかく怪我人の佐山流美の足取りは決して早いものではなかったが、襲われた恐怖かミカへの恐怖か、足を止めることはなかった。三人が知ることはなかったが時間にすれば一時半ほどには神塚山の山腹に到着する。無言で歩き続けるミカに引つ張られた少女達は、少しして洞窟を見つけた。

「あ、あのー！」

「……なに？」

かばんちゃんの声に、ようやくミカは足を止めた。戻ってきたはいものの自分からあのショッピングモールに案内するのは怪しいと思いき直し、そのまま通り過ぎてしまおうと思ったのだが、幸か不幸か入り口が見つかったようだ。

「ミカツキさん、洞窟がそこに……少し休んでいきませんか？」

「わかった。」

既に流美の方は疲労困憊という有様だった。ここに来て拒否するのも不自然と思いき泊置いて賛意を示す。

こうして三人はこのゲームの肝となる場所に足を踏み入れた。

【2】

「なあU、アイツは一体何してるんだ？」

「あれは漢字ドリルですよ。」

「漢字ドリル？それってあの？」

「はい。落ち着きたいときはああやってドリルとかやるんです。」

「お前たちは映画見に来たんじゃなかったのか？」

「こういう時のためにいつも持ち歩いてる、とか言っていました。」

「……たまげたなあ。」

精神統一のために一心不乱にドリルをやっている宮原葵とそれを眺める桜井悠、阿部高和の二人。彼らは打ち合わせ通り五階で合流し一階に移動したところであった。

夜神月と吉良吉影、二人のキラの口車により阿部さんが子供達を迎えに行くことになり、警戒はしたものの特になんの異常もなく行つて帰つてこれにて今に至る。軽く情報交換をしたところ、特に二人の知るシヨップینگモールと変わりがないようだ。阿部さんからすればやけに慎重に動いたがなんてことはない、今のところ単に無人のシヨップینگモールにいるだけ、とでも言えてしまいそうなほどなんにもなかった。

館内の時計を見る。既に一時を軽く回っていた。本当に鬼ごっこなどあるのだろうか？

「だんだん手のこんだドツキりに思えてきたな。前回もこんなふうだったのか、U?」

「ぜんぜん。最初は一体だった鬼がどんどん増えていって、最後の方は鬼のほうが多いぐらいでした。」

「となるとこいつはまだ始まったばかりってことなのか。何日もかかるのは考えもんだ、急ぎの仕事はないがな。」

「整備工、でしたっけ?」

振り向くと、月と吉良がいた。彼らは合流後このシヨップینگモールは安全性が高いと判断し、二人だけで地下を搜索していた。主に気分が優れない吉良のために医薬品などを見に行ったというが。

「ああ。そういうアンタは、サラリーマンだっけ。その戦利品もスパー勤めの知恵かい?」

「私が万引きをするような男に見られていたとは……心外ですね。」

「冗談だよ、そんな顔してると男前が台無しだぜ？ てことは——」
「ええ、僕です。」

ドン、とテーブルに置かれた食料品を満載した買い物カゴ。それを
持ってきたLこと月は「気になることがあります」と続けた。

「O、U、二人に聞きたいんだけど、このお惣菜に見覚えはあるかい
？」

「そのシールはこの地下で売られてるお惣菜に貼られてるものと一
緒です。」

「こつちの値引きシールもそうですね。」

「うん、なるほど。そこまではいい。では……このお惣菜、その値札の
部分を見てほしい。何か気づいたことはないかな。」

「うーん……特に変わったところはないですよ。」

「……すみません、もう少し時間をください。」

「いや、大丈夫だ。多分君たちにとってこれはなんら異常の無いもの
だからね。」

紙袋に開けられた小さな穴の奥で、月の目が瞬いた。

「おそらく僕達は、別々の時間から連れてこられている。」

「まさか二人も二十一世紀の人間だとはな……」

「僕がゼロ年代後半で、二人が10年代中盤か。」

「平成ってなんだよ、昭和は俺だけか……」

月により食料と共にもたらされた仮設はすぐさま検証が行われ、秒
でそれぞれの時代がてんでバラバラであることが確認された。当た
り前すぎてわざわざ今が何年の何月かなどと聞きもしなかったが、聞
けば一発であった。明らかにそれぞれの話に齟齬がある。なんなら
時代どころか歴史が違うレベルで話が噛み合わない。

「桜ヶ島知らないんですか？」

「桜島ではないんだろう？ 聞いたことないな。さくらテレビは？」

「それはどこのローカル局ですか？ しかし誰も岸边露伴を知らない
とは。いや、私も詳しいわけではないんですが、週刊少年ジャンプで
連載を持っている売れっ子漫画家らしい。」

「からつきしだな。俺はこの中じゃ一番時代が古いし、全部さっぱりだ。そういえばジャンプ作ってる集英社はあるのか？」

「集英社はありません。」

「集英社がありますよ。」

「集英社はあるでしょう。」

「集英社はあるんじゃないんですか。」

「集英社はあるのか……」

ひとしきりの会話でおそらくそれぞれが並行世界の人間であり時間も空間も違ふところから集められたという仮設が強まっていくな。問題は、それが真実であるかわからないということと、なぜそんな人間を集めて鬼ごっこをやるうというのかということだ。タイムスリップなどができるなら洗脳ぐらいできそうなので現状自分たちが何をされたかわからないということしかわからない。いくつかそれらしい理由を考えつくも妄想の域を出ず、手詰まり。そんな時だった。

「あの！ た、助けて下さい！」

新たな世界からの参加者のエントリーだ。

【3】

「目が完全に抉れてる、とてもじゃないがここにある医薬品じゃ処置できない」「ど、どうなってるんですか？ 目、目が、とても、どうなってる」「ヒトですか？」「ジャパリパーク？ フレンズ？ また別の世界か？」「見えなくて、あの痛くはなくて」「公衆電話は使えなかった。期待はしてなかったが、クソっ！」「やっぱりこれってあの鬼ごっこだったんだ……」「どんな鬼に襲われたか、それが——」（うるさいなあ。）

合計八人、新たな人間が加わることで人口密度が増えたシヨツピングモールの一階は、にわかに騒がしくなっていた。

明白に顔面を負傷し『鬼』に襲われたと言う少女。それを連れてきた指先の黒い少女と頸部に突起を持つ少年。この場に現れた三つの『異物』を五人には衝撃をもって受け入れる。

ここまでの彼らは、異常事態に直面しつつもパニックにはそうそう陥らなかつた。それは互いに出会った人間が自分たちの周りにいてもおかしくない人間であつたからだ。

どこにでもいそうな男女の小学生。なんの変哲もない。

ブルーカラーの男。素肌の上からつなぎを着ていることは奇異だが、話す限りは愛想の良い快男児。

ホワイトカラーの男。悪趣味なスーツを着ているが、立ち振る舞いは腰の低い紳士。

紙袋の男。最も奇怪であり他の人間の不審さを忘れさせるほどだが、ここまで初対面で属性もバラバラな集まりの会話を引っ張つてきた警察官。

いずれも、それぞれの奇妙な人生において出会うかもしれないタイプの人間であつた。最も怪しいLですら現実味のないものではなかつた。

だが、ここに来て新たに出会つた三人は、その奇怪さの度が超えていた。

もつとも、この状況にほくそ笑む人間もいたのだが。

(三日月・オーガス、彼も『鬼』の一人だ。)

紙袋の下で月はこのチャンスを活かす策を練り実行に移す機会を探つていた。

他の人間にそうしたのと同様に実名を明かさないうように求めたため名前を知らないが、流美に応急手当をしながら彼はデスノートを試す絶好の人柱をどう動かそうかと考えていた。かねてからの問題であつたデスノートの真贋の確認、それを行う適当な人材が見つかつたからだ。彼がこの場で名前を知るのは、桜井悠と吉良吉影の二人。この二人で試すことも可能ではあるが、閉鎖的な人間関係の場所での殺人にデスノートは極めて向いていない。言い変えるのならば、クロードサークルでのトリックに使い難い。しかるにできれば外部の人間、すなわち他の『鬼』を対象にしたところだが、そこで一つの問題がある。果たして『鬼』にデスノートが効くのか、そしてそれをどう確認するのか、ということだ。デスノートは人間でなければ使えな

いが、『鬼』というのは名前だけならば人外だろう。他の『鬼』たちは外見からしてそうだ。それに効果を確認する手段もない。これらの問題からデスノートを試用するのを先送りにはしていたのだ。

しかし、それも終わりだ。この場に来た三日月・オーガス、彼は一見して人間に見え、名乗ってもいない。かばんを背負った少女、すなわちかばんちゃん達には名乗っている可能性もあるが、それはむしろ好都合。自分がデスノートを持っているという疑いを減らしてくれる——自分が無意識のうちにデスノートを軸に物事を考えていることに月は無自覚だった。

「これじゃどうにも……病院に運ぶ必要があります。それと最低限の手当てだけでもしないと。下のドラッグストアに医薬品がありました、どなたか医薬品の知識がある方はいませんか？」

いるはずないだろうが、とは言わず月は一同に聞く。案の定いないため「僕が探してきます。どなたか一緒についてきて下さい」と言い残して駆け出す。名前を書くためには一度人目を避ける必要があるが、リーダーのポジションにいる自分はそう簡単には抜けられない、なら自分にしかできない要件を見つければいい。

「私が行きます。一度行ってますから。」

(『鬼』が二人地下に……余計なことを。)

(この男に一人で動かれるのは何かマズイ。監視しておくか。)

吉良がついてくることは望ましくないが、妥協する。この場で単独行動することは怪しまれかねないので人を誘った以上、これも覚悟の上だ。

足早にドラッグストアへと男二人で走り、テキパキと吉良に棚に並ぶ医薬品を手に取りらせていく。その間に月は従業員用の扉を開け身を滑り込ませた。既に頭の中で書き込む文面は考えていた、十五秒あれば書き終わる。

「Lさん、どうしました？」

「在庫の棚を調べます。まだ持てますか？」

『三日月・オーガス、しゃっくりが止まらなくなり23:55に死ぬ』

「ええ——おおっと！」

「——生理食塩水の箱がありました。戻りましょう。」

(なんとか間に合ったな。)

吉良が扉を開けて後に続いた頃には、月は柵から段ボール箱を取り出し今まきに出ようというところであつた。正面衝突するような形になつた二人は回れ右してもと来た道に戻る。その道すがら、月は満足げに微笑んでいた。

このデスノートの使用により、その効力の確認と同時に、『鬼』を一人制限時間の終了直前まで生存させることができた。これは擬似的なデスノートによる延命策である。別世界のL——本物の、竜崎の方——が、月に対して行つた必死の策、それを他人に向けて施したのだ。これによつて三日月・オーガスはその時間まで決して死ぬことはなく、それは間接的に『鬼』全体の勝利への大きな布石となる。一石二鳥にも三鳥にもなる一手であつた。

「大変です！ 容態が急に！」

「わかつた、すぐに手当——は？」

「な、これは!？」

そして戻つてきた彼が見たのは。

「ミカヅキさんが急に倒れたんです！」

心臓を抑えてこと切れていた三日月・オーガスの姿であつた。

【4】

「たぶん、二キロぐらい、で、格好は……」

「なるほど、しつかし子供の外見の『鬼』か。油断できないな——かばんだっけ？ そこ抑えてくれ。」

「はい。」

意識を保つために流美へと話しかけながら看着いる阿部さんの声を聞きながら、ミカは油断なく周囲に気を配っていた。彼は追跡してくる『鬼』に備えるということ一人で入り口の前で警戒に当たっている。ときおりその体が微かに揺れる。どうも先からしやつくりが出始めた。

(次は何をすればいい。)

一度戻ってきたが、彼はこれからの方針を決めあぐねていた。別段殺さなくてもいいらしいが、『子』をここまで誘導するのはなかなか骨だ。それにせっかく集めた『子』をどう留めておくかも考えなくてはならない。はつきり言えば殺してしまった方が楽なのだが……

「？」

普段使わない頭を回していると胸に痛みを感じた。ギリギリと、思わず手で抑えるほどの。しかも止まらない。立っていられない。バルバトスに乗ったときのものより数倍の痛み、その痛みは心臓を早鐘のように動かして——いなかった。

「止まっ……てる……」

心臓が動いていない。そう理解したときには、デスノートに名前を書かれて40秒が経っていた。

デスノートには、実現不可能なことを書かれた場合それを無視するというルールがある。今回無視されたのは『23:55に死ぬ』という部分だ。たとえば、航空機の不調で一時間後に確実に死ぬ人間がいたとして、その人物の名前を二時間後に死ぬという言葉と共に書いたらどうなるか？ 答えは単純、時間指定が無視される——つまり書かれてから40秒で死ぬ。

今回も同じだ。確実にその時間までに死ぬ、DEAD ENDフラグの立っている人間に対して、その寿命を超える時間を指定してデスノートを使用したのなら……

(まさか……この鬼ごっこは、『絶対に制限時間より早く終わる』のか?! いやそれよりまずは——)

「全員動かないで下さいっ!」

にわかに混乱した場に月の言葉が響いた。

【F—05／01時49分】

【かばん@けものフレンズ】

【役】：子

【状態】：怯え

〔装備〕：かばん、帽子

〔道具〕：未確認（背負っているかばんの中）

〔思考・行動〕

基本方針：誰かいないか探す。ここが何なのか調べる。

1：!?

2：鬼から逃げる。そしてサヤマルミさんを助ける。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

現状を理解していないが、知ろうとはしている。

『おにごっこ』についてざっくり把握しました。

自分たちがバラバラの世界から集められた可能性に気づきました。

【佐山流美@ミスミソウ】

〔役〕：子

〔状態〕：右目と前歯喪失、失血（小）、顔に傷、恐怖、半狂乱

〔装備〕：『水晶』、包丁（服の下に隠している）

〔道具〕：

〔思考・行動〕

基本方針：殺される前に殺してやる。（目につく全員を殺すってわけではない）

1：!?

2：鬼から逃げる。こいつらに自分を守らせる。

3：「たえちゃん」を殺す。鬼は殺す。殺せそうな場合に限るが。

4：自分がどの役か知りたい。たぶん『子』だと推測。

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

参戦時期は第18話開始直後。金谷章吾を『鬼』と誤認しました。
彼が呼びかけた「たえちゃん」を「小黒妙子」のことだ、そして『鬼』

だと思いい込んでいます。

【阿部高和@くそみそテクニック】

〔役〕：親

〔状態〕：動揺

〔装備〕：青いツナギ、ベレッタM92F@魔法少女まどか☆マギカ、
ベレッタM92F@バトル・ロワイアル

〔道具〕：デイパック

〔思考・行動〕

基本方針：親と子を探す

1：!?

2：思ったより面倒なことになったじゃないの、やれやれだぜ……

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握、各役の人数・会場の
地図を未把握。

原作終了後からの参戦です。

自分たちがバラバラの世界から集められた可能性に気づきました。

【桜井悠@絶望鬼ごっこ】

〔役〕：子

〔状態〕：動揺

〔装備〕：『水晶』

〔道具〕：若干のお小遣いなど

〔思考・行動〕

基本方針：死にたくない。

1：!?

2：大翔が巻き込まれていたら合流したい。

※その他

〔ルールの把握度〕

各役の勝利条件・制限時間を把握、自分の役・各役の人数・会場の
地図は未把握。

自分たちがバラバラの世界から集められた可能性に気づきました。

【宮原葵@絶望鬼ごっこ】

【役】：子

【状態】：動揺

【装備】：『水晶』

【道具】：ドリルや若干のお小遣いなど

【思考・行動】

基本方針：死にたくない。

1：!?

2：大翔が巻き込まれていたら合流したい。

※その他

【ルールの把握度】

各役の勝利条件・制限時間を把握、自分の役・各役の人数・会場の地図は未把握。

自分たちがバラバラの世界から集められた可能性に気づきました。

【夜神月@DEATH NOTE】

【役】：鬼

【状態】：紙袋を頭に被っている

【装備】：ソード・カトラス@BLACK LAGOON、スマート

フォン（鬼）@オリジナル

【道具】：デスノート@DEATH NOTE・ノートとペン@現地

調達の入った四次元っぽい紙袋

【思考・行動】

基本方針：まずデスノートの真贋を確かめる、はずだったが……？

1：Lとして振る舞い、皆と鬼ごっこについて調べる。特に葵と悠に注視。

2：なんとかこの場を丸く収める。

※その他

【ルールの把握度】

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

四次元っぽい紙袋は効果を失いました。

桜井悠・宮原葵・阿部高和の顔を把握しました。

スマホによって全ての『鬼』の顔と名前を把握しました。

自分たちがバラバラの世界から集められた可能性に気づきました。

【吉良吉影@ジヨジヨの奇妙な冒険】

〔役〕：鬼

〔状態〕：ストレス、姿は川尻浩作

〔装備〕：スマートフォン（鬼）@オリジナル

〔道具〕：四次元つぽい紙袋、不明支給品2つ

〔思考・行動〕

基本方針：『親』の振りをしながら『鬼』以外を始末する

1：!?

※その他

〔ルールの把握度〕

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間を把握。

バイツァ・ダストは杜王町でないことと本人が能力を把握しきっていないことで使用不可。

夜神月をキラークイーンで爆弾化しました。

自分たちがバラバラの世界から集められた可能性に気づきました。

倒れたのは2人。立ち去ったのも2人

鳴り響く轟音。

周囲を覆い尽くす威圧感。

盲目の月夜にも理解出来る。これは鬼だと。

全身が強張る。轟音で距離も動きも掴めない。

肌突き刺さる威圧感。外部情報を耳に頼る月夜にとっては致命的な轟音。

周囲の状況が全く分からない中、月夜は只恐怖した。

襲い掛かれても、間合いが掴めず、相手の動きが判らないのでは対処の仕様が無い。状況が掴めないまま、強まる威圧感に全身が強張るのを覚えた。

クスリの回った頭でキングは眼前の少年少女について考察した。

二人共剣呑な空気を漂わせているが、これは何時もの事なので気にしない。

刀の柄に手をかけた少女の方はまあ善良な人間だと思う。

しかし、銃を持った少年の方は何やら強烈に嫌な予感がする。戦闘能力それ自体は大した事はないが、感じる嫌な気配は、怪人の中でもとびきり凶悪な者に匹敵する。

一人一人ならまだしも、2人並んでいると、実に妙な組み合わせで有る。そもそも接点というか、共通項が見出せない。

自分の様に、この地に放り出されて、仕方無く一緒にいるのだろうか。

考えていても仕方ない。無言で考えていたキングは、意を決して一歩を踏み出した。

キングの不幸は二つ。

キマった薬の為に、キングエンジンの轟音がどうにも止まらなかった事。

そしてもう一つは、出会った二人の片方が、狂犬という比喩ですら足りぬ狂人であった事。

キングエンジンの轟音で月夜の耳が塞がらなければ、キングが只の一般人だと即座に聴き取ったろう。

一度死んだという経験が無ければ、ヘンゼルはキングが放つ圧に押されて固まったままだったろう。

結果としてヘンゼルよりも先に月夜が行動して、キングと交渉しただろうが、そんな結果は訪れなかった。

「ネヴァー・ダイ……。ネヴァー・ダイなんだ。僕は殺されない。僕達は決して死なない。殺すのは……僕達だ!!」

子も親も関係無い。鬼ですら、例え真実地獄の底からやって来た怪物だろうと、決して己は殺されない。

ネヴァー・ダイ。糞溜の中でヘンゼルの精神を支えた信仰は、死と蘇生という奇跡を経て、狂信へと至る。

キングの放つ威圧感に怯んだヘンゼルは、狂信に精神の平穏を求め、内に漲る殺意を解き放つ。

何であろうと殺すだけ、己は決して死なないのだから、常に自分が殺す側。

狂い切った精神に相応しい、狂った信仰に基づいて、ヘンゼルの身体が動く。

キングエンジンの轟音の中でも、右手に握られたM19が火を噴いた音は、月夜の耳にハッキリと届いた。

静まり返った場に、ヘンゼルの哄笑が響く。

訳の分からない事を喚きながら笑い続けるヘンゼルに構わず、月夜は無言でキングに近付いた。

倒れた男が生きているのは、耳朶に聞こえる鼓動と呼吸音で理解している。

取り敢えず、ヘンゼルを誤魔化すべく無言で脈を取る。

「……………」

「どうしたの？死んでないならトドメを刺すけど」

顔を歪めた月夜を見て、至近で起きた殺人にショックを受けたのだろうと当たりをつけた、ヘンゼルが声を掛ける。

嗜虐の意図がたつぷりと込められた声が、この可憐な容姿の少年の本質を、何よりも如実に表していた。

月夜は無言。剥き出しの白い肩が震えているのは、目の前で起きた殺人を止められなかった事に対する憤りか。

「……………」

「……こ、この人。全くの素人です!？」

握った手首から理解（わか）る情報。皮膚の堅さ、肉のつき方、骨の太さ、骨肉の靱さ。それら全てが物語るのは、この男が全くの素人だという事実。

念の為に首筋や胸に指を這わせてみたが、結果は同じ。

「大胆なんだね〜」「僕にもやってよ〜」などというヘンゼルの煽りに、額に青筋が浮かぶのを覚えた。

「……こんな相手に怯えたのですか私は!!」

それは恥辱。在ってはならない、許されざる事態。

それは失態。犯してはならない、決して知られてはならない事態。

いくら轟音で耳を塞がれたとは言え、こんな只の素人に怯えた自分が許せない。怯えた事実が許せない。

即座にヘンゼルをこの男共々ブッコロして、全てを糊塗したい衝動に月夜は駆られていた。

因幡月夜はお子ちゃまである。

その剣腕と容姿と伶俐さから誤解され易いが、因幡月夜のメンタルは外見相応のところが多分にある。

「はあああああ……………」

取り敢えず大きく息を吐いて気を鎮める。まだヘンゼルをブッコロする訳にはいかない。

全く以って気を許せないが、こんなんでも目の代わりにするしかない。

他の人——出来れば親と合流したいが、この男を起こせばヘンゼルが殺しにかかるので論外だ。

「ねえねえ、ソイツ何か持ってた」

「タブレットに小瓶が二つ」

後ろも見ずに、キングの所持品をヘンゼルに渡す。

ヘンゼルが小瓶の中身を確認するのを聴き取りながら、キングの体を調べる。

身体を探った時に、肋骨が折れているのに気がついていた。おそらくは高速で飛来した弾丸が、絶妙な角度で肋骨に当たり、向きを変えたのだろう。

軽量高速で飛来し、円錐状をしている為に重心が後方にある銃弾では、稀に有る現象だが、銃は専門外の月夜には、その辺は分からなかった。

タブレット等に興味の無いヘンゼルは、小瓶の中身を調べていた。

二つ目の小瓶の蓋を開けて、匂いを嗅いだヘンゼルは、口元を笑みの形に歪めた。

一つ目は何だか判らなかったが、これは判る。

使った事も使われた事もあるシロモノだ。

思わず笑い出しそうになるのを堪えて、ヘンゼルは小瓶を二つ共ポケットに収めた。

「それでさ、これからの事なんだけど」

「こっちの方で合ってる？」

鼻唄混じりにハンドルを握るヘンゼルに、無表情に頷き、毛布だの缶詰だのが乱雑に積まれた、後部座席に座る月夜は開けた窓から外の音に耳を傾けている。

バックミラーで月夜の様子を窺って、ヘンゼルはポケットの中に想いを馳せる。

ポケットの内の釘と『小瓶』がその役割を果たす時を考えると、自然と唇が釣り上がった。

「ロアナプラで”遊んだ”イワンの様に、スマートボールの打ち台にする対象は、今のところ月夜である。

全部打ち込むまで生きて欲しくない。などと思いながらヘンゼルはアクセルを踏み込んだ。

静まり返ったこの島で、車での移な動は兎に角目立つが、鬼が襲つて来ても車の速度に追いつく事は出来ないだろうし、前に立ちほだかれば、質量と速度を以って排除——要するに轢けば良い。

銃撃が厄介だが、移動する目標に当てるのは難しい。そんな考えの全てを明かした訳では無いが、車での移動を主張したヘンゼルに、持久力の無い月夜も賛同。

ヘンゼルが適当な民家を物色して鍵を見つけた車に乗り込み、同じく民家で調達した物資を積んで、拡声器を使った者が居ると思しき場所へと向かっていた。

【H—03／01時40分】

【ヘンゼル@BLACK LAGOON】

【役】：子

【状態】 健康、上機嫌、車を運転中

【装備】 拳銃、鉈、金槌、S&W M19@現実（川田から奪取）

【思考・行動】

【道具】：釘、川田のデイパック（ハリセン@バトル・ロワイアルが

入っている)

デイパック (タブレット@絶望鬼ごっこ、醤油、ゴメオ@現実)

〔思考・行動〕

基本方針：皆殺し。

1：因幡月夜と同行する。機会が来れば、或いはグレーテルと合流したら月夜を殺すつもり。

2：面白いオモチャが手に入った!!

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。特別支給品の有無は不明。

〔因幡月夜@武装少女マキャヴェリズム〕

〔役〕：子

〔状態〕 健康 (盲目)、不機嫌、車で移動中

〔装備〕：摸造刀 (亜鉛合金製)

〔道具〕：不明

〔思考・行動〕

基本方針：信頼できる人間を探し、確かな情報入手する。

1：ヘンゼルを警戒しつつも同行する。人殺しは阻む。襲ってくれば斬る。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は全て未把握。

盲目のため、文字の読解や顔の判別等は不可能だが、優れた聴力で広範囲の探知が可能。

ビラに書かれていた事はヘンゼルに尋ねて把握したものの、ヘンゼル自身が怪しいため内容についても疑っている。

【F102 / 01時40分】

【川田章吾@バトルロワイアル】

〔役〕：親

〔状態〕：頭に打撲、失神

〔装備〕：なし

〔道具〕：なし

〔思考・行動〕

基本方針：状況を把握する。

1：???

【キング@ワンパンマン（リメイク）】

〔役〕：親

〔状態〕：ゴメオによる催淫、気絶中、左第六肋骨骨折

〔装備〕：

〔道具〕：無し

基本方針：帰りたい……

1：子どもたち（翠と中沢）の誤解をときたい。

2：一応、自分のできる範囲で子と親を保護する。

3：ヘンゼルを警戒

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【ユア・ラブ・イズ・キング】

「……ハア、ハア、ハア……うう……うぐお……」

ゴメオ。正式には5-メトキシ-N,N-ジイソプロピルトリプタミン(5-methoxy-N,N-diisopropyltryptamine)。

頭字語で5-MeO-DIPT(ごめお・でいぷてい)と略される幻覚剤。日本国内では麻薬に指定され、違法である。

摂取から30分ほどで効果が現れ始め、3-6時間効果が持続する。摂取後1時間ほどは吐き気を催すこともある。

五感に幻覚を感じ、場合により高揚感や多幸感を覚え、聴覚や触覚、性感が鋭敏になり、肛門括約筋が緩む。

1時間ほど前、小瓶の中の液状のそれを、誤って鼻と口から摂取してしまった憐れな男——『キング』は、その効果に苦悶していた。体温が上がり、腹がシクシク痛む。尻の穴がヒクヒクする。吐き気を催し、目の前がぐるぐると回る。頭痛と耳鳴りがする。

なんらかの毒物。危険だ。このまま死ぬかも知れない。しかも、確実にあの少女と少年に誤解された。鬼だと思われた。誤解を解かねば。

だが、動けない。水を飲まねば。なんでこんな目に。厄日だ。

そんな状態のまま、少女と少年を追いかけすることも出来ず、物陰にうずくまり、数十分は身動きもできなかった。草むらで吐き下しもした。

……そして、ようやく少し動けるようになった彼は、フラフラと山道をさまよい歩き……別の少女と少年たちの近くに現れたのだ。

だが……不幸にも、少年は銃を持った狂犬だった。彼はキングを撃ち……荷物を奪い、車を民家から調達し、少女と共に立ち去った。

キングは……悪運の強いことに、生きていた。偶然にも銃弾は絶妙な角度で肋骨に当たり、左第六肋骨を骨折させただけで済んだ。

それでも、ただでさえ朦朧としていたキングの意識は一瞬で刈り取られ、激痛と共に失神、倒れ伏したのだった。

「う……痛ッ……」

頭痛と共に、意識が覚醒する。生きている。痛みがある。殺されていない。眼の前が少しずつ明るくなり、自分の手足が見えてくる。

何が……あつたか。いや、今思い起こすのはヤバい。脳みそがショートしかけてる。どこかへ隠れ、休息せねば。

ドツドツドツドツドツドツド

心音がやけに大きく聴こえる。ああ、そうだ、生きねば。生き残らねば。

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

違う。これは、自分の心音じゃない。誰か、他のやつ……！

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

「あの……」

男に呼びかけられた。その顔を見た時、川田は何度目かの失神を……するところだった。

金髪をオールバックにした白人。青褪めた、怒り狂ったような凄まじい顔。左目のあたりに三本の傷。凄まじい威圧感。

そうか、俺はここで死ぬのか。川田はそう覚悟し、かえって冷静になった。深呼吸をする。頭が冴えてくる。

◆ 激痛と共に覚醒した時、既に少年少女はいなかった。どうやら殺されずには済んだらしい。偶然か、温情か。

銃で撃たれた割りに、大した傷ではない。内臓は無事なようだ。だが、焼け付くように痛い。左の肋骨が折れている。

手当てが必要だ。歯を食いしばる。謎の薬物の効果も全然消えていない。呼吸が荒く、脂汗と涙が溢れてくる。なんでこんな目に。

いや、もうひとりいる。その少年……なのか、学生服の男は、手で

頭を押さえて朦朧としていた。

「あの……」

呼びかけに応え、こちらを見て、大きく目を見開いた。まあこつちの恰好を見ればびびりするだろう。

武器は持っていないようだ。こちらは右手を挙げ、弱々しく微笑み、敵意がないことをアピールする。相手も弱々しく微笑み、片手を挙げた。

「ええと……こんにちは。俺は『キング』。『親』の役だ。敵意はない。安心してくれ」

「ああ……俺は『川田章吾』。……なんかフラフラしてるが、大丈夫かよ?」

「……ちよつと今、調子が悪くて……さっき撃たれたし。そつちも、フラフラだけど」

「運が悪くてね。パラシュートで投下された時、樹木に引っかかって……。落ちたら頭を打撲して、妙なガキどもに殺されそうになって……。うう……」

「お互い、大変だな……ここにいても危ない。どこか、民家へ隠れて手当てしよう。肩を貸す。立てるか?」

左脇腹を押さえ、右肩を貸す。

「ああ……すまん。なんとか……」



拳銃とデイパックは、当然持ち去られていた。自分が殺されなかったのは……この男が近づいてきたからだ。

川田はそう思い、涙を流した。止まらなかった。彼は、俺の命を救ったヒーローだ。そう思った。

肩を貸してくれたキングの心音は、早鐘のように鳴り続ける。恐怖はもはや感じない。これが、俺を守ってくれる。

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

ドツドツドツドツドツドツド

◆
「……どうやら、あの子供たちは立ち去ったようです。でも……二人、歩いてくる……」

平瀬村の民家。注意深くヘンゼルたちを軍用スコープで監視していた大和亜季は、機関銃を構えているY―12に告げる。

「危険ですか」

「いえ……手負いです。あの子供たちに撃たれた、学生服の男性と……威圧感のある金髪の男性。互いに肩を貸しています」

「どうしますか、ヤマト＝サン」

「……助けましょう。こちらから迎えに行きましょう！」

彼らの動きは覚束ない。亜季は決意し、Y―12に同行を促した。Y―12は同意し、周囲を警戒しつつ彼らに近づく。

近づくにつれ、妙な音と威圧感が増して来る。あの金髪の男性から発されているようだが、敵意や悪意は感じない。

「止まりなさい！ 役と名前を――」

遮蔽物の陰から亜季が呼びかける。キングはビクリとしたが、川田が手を挙げて進み出る。尋ねて来るなら、鬼ではなからう。

「……親の役だ。どっちもな。俺は川田章吾、こっちはキングさん。武器はねえし、ご覧の通り怪我してる。助けてくれないか」

ややあつて、亜季とY―12が姿を現す。

「勿論です。私は大和亜季、こちらはY―12さん。我々も親の役です。協力しましょう！」

【F―02／01時50分】

【キング@ワンパンマン（リメイク）】

【役】：親

【状態】：ゴメオによる催眠（あと数時間持続）、キングエンジン（心音）、左第六肋骨骨折

【装備】：なし

【道具】：なし

【思考・行動】

基本方針：帰りたい……

- 1：子どもたち（翠と中沢）の誤解をときたい。
- 2：一応、自分のできる範囲で子と親を保護する。
- 3：川田と共に民家へ身を隠し、回復を待つ。
- 4：銀髪の子供（ヘンゼル）を警戒。
- 5：大和亜季とY―12を信用する。

※その他

自分の役・各役の勝利条件・制限時間を把握。

【川田章吾@バトルロワイアル】

〔役〕：親

〔状態〕：頭に打撲

〔装備〕：なし

〔道具〕：なし

〔思考・行動〕

基本方針：状況を把握する。

1：キングについていく。

2：大和亜季とY―12を信用する。

※その他

自分の役・各役の人数・各役の勝利条件・会場の地図・制限時間は
全て未把握。

介入——神崎士郎の場合

介入——神崎士郎の場合

泥のような空気の質感。

一人の男が小さな手鏡を掌で弄んでいた。

部屋の中には他に人もなく、動くものはただ一つ、鏡の中の、蟹だけだった。

金色の蟹だ。珍しい。しかも金属質だ。それが人間ののように二足歩行している。

男は無言でそれを見ていたが、唐突とも思えるほど不自然に胸に手をやり、懐から懐中時計を取り出した。その動作は、動くはずのない彫像が突然動き出したかのような違和感のあるもので、一言で言うのなら『不気味』である。なにかが違う。致命的に普通の人間ではない。異様だ。どこが、というわけではないがともかく、おかしい。

その男——神崎士郎が次に動いたのは、時計が二時を示した時のことだった。

02:01

「こつちにもペットボトルあったよ。」

「お茶請けが出てきました。」

(やつぱりこのまま立て籠る気か。)

依然として部屋に潜む草加雅人は、小さく聞こえてくるたえちちゃんと関織子の会話に聞き耳を立てていた。

草加が選択したのは籠城であった。確かに今このときにも真理の身に危険が降り掛かっているのではないかという不安とそれから来る焦燥感があるのだが、しかしどこにいてもわからないのに闇雲に走り出すことの愚は理解していた。この農協に入った際に地元の子供が描いたらしい絵をいくつか見たが、どうやらここは島らしい。そして学校名が二つあったことを考えると、それなりに人口の多い、あ

るいは面積の広い孤島なのだろう。そんな場所で宛もなく人探しなどではしない。拡声器かなにかで呼びかけるのなら話は別だが、鬼ごっこでそんなことをすれば格好の標的になる。ここは我慢の場面だろう。

(? なんだ。)

背を柵に預け何とはなしに窓から見える赤い空を見てみると、ふと、視界の隅で何か動いた気がした。もちろんこの場所には草加以外いない。服が風で靡いたというのも締め切ったここでは考えにくい。

草加は手に握る日本刀の鯉口をいつでも切れるように指を這わせた。今の草加の装備はこれ一つ、あとはデイパックとそれに入っていた謎のカードケースのみ。相手がオルフェノクのような超常の存在なら心許ないが、そういう存在だからこそ神出鬼没に襲いかかってくるかもしれないのだ、覚悟を決める。フェンシングの心得があるからといって太刀打ちできるとは思えないが、一発入れられるかどうかで対応も変わってくる。そうやってじいと警戒していると、空気の流れの変化と共に強烈な殺気を感じた。

「折れた!？」

それは、蟹だった。とっさに抜き放った日本刀が直撃したもののまるで効いた様子はなく、半ばで折れて天井に突き刺さった。そしてその蟹の異常な点は、柵のガラス戸からハサミを伸ばしてきたところだ。柵に潜んでいたというわけではない、ガラスに写る部屋から身を乗り出すように襲い掛かってきたということだ。

「オルフェノクじゃないのか……鬼か！」

驚きながらも即座に体制を立て直し追撃に備える。相手の強さはまるでわからないが、オルフェノク並と仮定するのならばとてもではないが生身で勝てはしない。拳銃のような武器があっても苦しいだろう。そしてこちらの手札は実質的に謎のカードケース一つのみとなる。ここは逃げる以外に道はない。そう考え脱出経路を探る草加の目の前で、蟹は『引っ込んだ』。

「ぐっつ!？」

と思いきや後ろから突き飛ばされた。後方には、先と同じようにガラスから伸ばされたカニ爪。ガラスを行き来する、と直感的に勘づいた草加の行動は速かった。手首のスナップでポケットから抜いたカードケースを投げる。ガラスを叩き割ったそれは柵にぶつかり砕けたが、苦悶の声を挙げ蟹が引つ込んだことに比べれば些細なことだ。ガラスから伸ばしていた分の蟹の腕は綺麗にもげ、しかしその断面からは血が流れることもない。どうやらガラスというのが何か重要なだろう。しかしいつたいあれは何なのか。いや、もっと他に考えるべきことは――

奇襲ととりあえずの撃退。草加は冷静に対処しながらも、決して混乱していないわけではなかった。なんだかよくわからないものをなんだかよくわからないもの方法でひとまず撃退したが、それがどの程度のものなのか、どのような意味を持つのかははかりかねていた。

「ね、ねえ。今の音って……」
「しまったな、気づかれたか。」

扉の外から聞こえてきた少女たちの声に草加は渋い顔をした。剣を抜いてから僅か五秒ほどで一旦ケリがついた戦闘であったが、その戦いの音は同じ建物にいる人物に異変を知らせるには充分にすぎるものだったようだ。さすがにそんなことにまで気を払う余裕は無かったが、これで予定が崩れてしまった。

(まずはそれらしい説明を考えないとな。)

草加は依然ガラスに気を張りながらも頭の片隅で少女たちへの対応策を練り始める。こうなってしまうては接触は避けられない。なんとか丸め込めるようにしなければ。

そう考える草加を蟹は窓ガラスの隅で見っていたが、いつの間にか消えていた。

神崎士郎が砕けたライアのデッキに向ける目は見るものが見れば厳しいとわかるものであった。この二時間で既にシザーズとライア、二つのデッキが戦わずに失われている。更にミラーモンスターであるボルキヤンサーも片腕を持って行かれた。

とはいえ、これで一つ状況は動いた。この鬼ごっこ、ライダーバトルと違い戦うことは必須ではなくなっている。もとより鬼ごっこはそういうものだが、しかしこの男にそれを受け入れる気はなかった。だからこそ、野良のミラーモンスターと化したボルキャンサーに草加を襲撃させたのだ。まさかライダーに変身しないどころがデッキを失うとは思わなかったようだが、凧いだ場所に波紋を拡げられたので最低限の目的は果たせたようである。

ではなぜそんなことをしたのか、彼は何をしたいのか、神崎士郎という人物がこの鬼ごっこに協力している理由とは。それを誰かに明かしたことはない。自分から話すことはなかったし鬼達に聞かれても答えはしなかった。

彼はある鬼からこの鬼ごっこの説明を受け、ただこの鬼ごっこの参加者にデッキを支給することだけを求めた。ミラーワールドの構築による会場の設営などに手を貸しもしたが、それは彼にとってはどうでもいいことのようにであった。ただデッキとミラーワールドがあれば良い、鬼たちは神崎についてそう考えていた。

十三のライダーのデッキのうち元から浅倉威が持っていた王蛇のデッキを本人に、それ以外は適当に配られるようにし、鬼側は特に強力と思われるオーディンのデッキ以外の支給を認めたと。そして今現在、会場には十のデッキが現存していて、失われたものを除けばゾルダ・王蛇のデッキが既に使用されている。『鬼』への対抗手段としてはちょうどいいおもちゃだと鬼側も考えており、今までデッキは単なる強力な支給品の一つとして扱われてきた。

「これで前に進む。」

だが話が変わった。当たり前だが、神崎のこの行動は越権行為である。いくら主催の一人といっても、彼に独断専行で参加者に干渉する権限は無い。たしかに鬼ごっこでは主催側がルールを守る気は一切ないが、だからといって他の主催に通達もなしに勝手な行動をとってもいいわけではない。そこを許せば主催同士でのバトルロワイアルになってしまう。ツノウサギなどの幹部の鬼はそのあたりは最低限心得ていた。

つまり今回の神崎の行動は、鬼としても見過ごせないものである。鬼ごっこに毛ほども興味の無いにも関わらず意味不明な干渉をした、発覚すればそう思われるだろう。そしてそうなるつも構わないと思うほどの何かがある。

「そうだ……戦え。」

神崎は一人呟く。

彼が何を目的としているのか、それを知る者は会場にはいない。四体の幹部の鬼も同じだ。その行動の意図は不明である。

デッキ所有者が最後の一人になるよう仕向けるために戦いを加速させようとしているという神崎の行動は、この時点ではゲームの盤上にいる誰もが知ることのないものであった。